

西新町遺跡Ⅳ

—福岡県福岡市早良区西新所在西新町遺跡第13次調査報告1—

福岡県文化財調査報告書第168集

—上 巻—

2002

福岡県教育委員会

西新町遺跡Ⅳ

—福岡県福岡市早良区西新所在西新町遺跡第13次調査報告1—

福岡県文化財調査報告書第168集

—上 巻—

2002

福岡県教育委員会



西新町遺跡上空より

序

福岡県は三方を海に囲まれ、古くから海上交通の要地として我が国の発展に大いに寄与してまいりました。中でも玄界灘に面した福岡市は、我が国の海の玄関口として古来より大いに栄え、先人達の広範な交流を示す貴重な文化財も数多く残されています。

福岡県教育委員会では、福岡県立修猷館高等学校の校舎改築事業に係る埋蔵文化財の発掘調査を平成10年度より進めております。この高校が位置する福岡市早良区西新には西新町遺跡と呼ばれる著名な遺跡があり、弥生時代から古墳時代に玄界灘を往来した人々の足跡、特に朝鮮半島との盛んな交流を物語る国際色豊かな遺跡として、国内のみならず海外からも注目を浴びています。

本書は平成12年度に実施した西新町遺跡第13次発掘調査の成果のうち、古墳時代の竪穴住居跡と、その出土品について報告したものです。今回の調査でも当時の国際交流を示す遺構、遺物が多く発見され、貴重な成果をさらに加えることができました。

本書が県内外、また国際的な交流史研究、あるいは学校教育、生涯学習の資料として活用され、文化財啓蒙普及の一助となれば幸いに存じます。

最後に発掘調査および整理作業、報告書の作成に当たりまして御協力いただきました多くの方々に対し、深甚の謝意を表します。

平成14年3月29日

福岡県教育委員会

教育長 光安 常喜

例 言

1. 本報告書は平成12年度に福岡県教育委員会が実施した、福岡県立修猷館高等学校改築事業に係る埋蔵文化財の発掘調査報告書であり、同高等学校敷地内での埋蔵文化財発掘調査報告の4冊目にあたる。
2. 本書に掲載した遺跡は福岡市早良区西新6-1-10に所在する西新町遺跡で、福岡市教育委員会実施分も含めて第13次の調査にあたる。福岡市教育委員会の調査番号は0066である。
3. 本報告書では、第13次調査の成果のうち竪穴住居跡とその出土遺物の報告を行っている。なお、それ以外の成果については次年度に報告する予定である。
4. 本書に掲載した遺構写真の撮影は調査担当者^が、遺物写真の撮影は北岡伸一^が行った。空中写真は（有）空中写真企画に委託し、気球による撮影を行った。
5. 本書に掲載した遺構図の作成は、調査担当者の他、大谷周平、木村友宏、河野牧子、坂元雄紀、銀鏡佳、中山圭、榑崎直子、藤原史彦、船越陽、古澤義久、横溝舞、吉田浩之、和久田憲吾らの協力を得た。
6. 出土遺物の整理・復元作業は九州歴史資料館で行った。
7. 出土土器の実測は調査担当者の他、辻田淳一郎、小沢佳憲、坂元雄紀、平田春美、棚町陽子、田中典子、久富美智子、坂田順子、若松三枝子、堀江圭子、中村洋子、栗林明美、寺岡和子、中川真理子、橋之口雅子^が行った。土器以外の出土遺物の実測は宮地^が行った。
8. 遺構、遺物の製図は担当者の他、豊福弥生、原カヨ子、江上佳子^が行った。
9. 58号竪穴住居跡から出土した不明物質の自然科学的分析については、福岡市埋蔵文化財センター 比佐陽一郎氏に御協力を頂いた。また第3次・第12次調査出土土器の胎土分析については、大谷女子大学理学博士 三辻利一氏に依頼し、併せて報告文を頂いた。記して感謝の意を表す次第である。
10. 本書の執筆は、第4章を三辻利一氏、第2章及び第3章-2・3・4を宮地^が行い、他を吉田^が行った。
11. 本書の編集は宮地の協力を得て吉田^が行った。

本文目次

<上巻>

巻頭図版

序

例言

目次

第1章 はじめに

- 第1節 調査に至る経緯……………1
- 第2節 調査の経過……………2
- 第3節 調査・整理の関係者……………4

第2章 位置と環境

- 第1節 遺跡の地理的環境……………6
- 第2節 周辺の歴史的環境……………6

第3章 調査の内容

- 第1節 調査の概要……………10
- 第2節 基本層序……………11
- 第3節 古墳時代の遺構と遺物
 - 1. 古墳時代の竪穴住居跡と出土土器……………13
 - 2. 竪穴住居跡出土石器……………254
 - 3. 竪穴住居跡出土鉄器……………261
 - 4. 竪穴住居跡出土土製品……………263
 - 5. 竪穴住居跡出土骨角器……………263

<下巻>

例言

目次

第5章 自然科学系の分析

- 西新町遺跡第12次調査出土土器の蛍光X線分析……………265

写真図版

報告書抄録

図 版 目 次

巻頭図版	西新町遺跡上空より
図版 1	1 修猷館高校全景（東から） 2 調査区遠景（南西から）
図版 2	1 調査区全景（南から） 2 I区遺構空中写真（南から）
図版 3	1 I区遺構全景（西から） 2 I区東部遺構空中写真（北から）
図版 4	1 I区西部遺構空中写真（南から） 2 I区北西部遺構空中写真（南から）
図版 5	1 II区遺構空中写真（南から） 2 II区遺構空中写真（東から）
図版 6	1 II区西部遺構空中写真（南から） 2 II区北部遺構空中写真（南から）
図版 7	1 1号竪穴住居跡（西から） 2 2号竪穴住居跡（南から） 3 2号竪穴住居跡遺物出土状態（北から）
図版 8	1 4号竪穴住居跡（東から） 2 5号竪穴住居跡（北から） 3 6号竪穴住居跡（北西から）
図版 9	1 7号竪穴住居跡（西から） 2 8号竪穴住居跡（北から） 3 9・10号竪穴住居跡（南から）
図版10	1 10号竪穴住居跡カマド（東から） 2 11号竪穴住居跡（南から） 3 12号竪穴住居跡（南東から）
図版11	1 13号竪穴住居跡（北西から） 2 14号竪穴住居跡（北西から） 3 15号竪穴住居跡（南西から）
図版12	1 16号竪穴住居跡（北から） 2 17号竪穴住居跡北半（南から） 3 18号竪穴住居跡（南から）
図版13	1 19号竪穴住居跡（南から） 2 20号竪穴住居跡（南東から） 3 20号竪穴住居跡カマド（南東から）
図版14	1 22号竪穴住居跡（北から）

- 2 23号竪穴住居跡 (西から)
- 3 23号竪穴住居跡カマド (南西から)
- 図版15 1 24号竪穴住居跡 (北東から)
- 2 25号竪穴住居跡 (南東から)
- 3 25号竪穴住居跡カマド (西から)
- 図版16 1 26号竪穴住居跡 (北東から)
- 2 27号竪穴住居跡 (南西から)
- 3 28号竪穴住居跡 (西から)
- 図版17 1 29号竪穴住居跡 (北西から)
- 2 30号竪穴住居跡 (南東から)
- 3 30号竪穴住居跡カマド (西から)
- 図版18 1 31号竪穴住居跡 (東から)
- 2 32号竪穴住居跡 (北東から)
- 3 33号竪穴住居跡 (北東から)
- 図版19 1 35号竪穴住居跡 (南から)
- 2 37号竪穴住居跡 (南東から)
- 3 38号竪穴住居跡 (西から)
- 図版20 1 39・40号竪穴住居跡 (北から)
- 2 41号竪穴住居跡 (北東から)
- 3 42号竪穴住居跡カマド (南から)
- 図版21 1 43号竪穴住居跡 (東から)
- 2 43号竪穴住居跡カマド (東から)
- 3 44号竪穴住居跡 (南から)
- 図版22 1 45号竪穴住居跡 (北から)
- 2 46号竪穴住居跡 (北から)
- 3 47号竪穴住居跡 (西から)
- 図版23 1 48号竪穴住居跡 (南から)
- 2 48号竪穴住居跡カマド (南から)
- 3 49号竪穴住居跡 (北から)
- 図版24 1 50号竪穴住居跡北側 (南から)
- 2 50号竪穴住居跡南側 (北から)
- 3 51号竪穴住居跡 (北から)
- 図版25 1 52号竪穴住居跡 (南から)
- 2 52号竪穴住居跡カマド (南から)
- 3 53号竪穴住居跡 (西から)
- 図版26 1 57号竪穴住居跡 (北から)
- 2 58号竪穴住居跡 (南から)
- 3 58号竪穴住居跡カマド (南から)

- 図版27 1 59号竪穴住居跡（北から）
2 60号竪穴住居跡（東から）
3 61・62号竪穴住居跡（西から）
- 図版28 1 63号竪穴住居跡（西から）
2 64号竪穴住居跡（西から）
3 65号竪穴住居跡（北東から）
- 図版29 1 67号竪穴住居跡（南から）
2 67号竪穴住居跡カマド（南から）
3 68号竪穴住居跡（北から）
- 図版30 1 69号竪穴住居跡（東から）
2 71号竪穴住居跡（南から）
3 71号竪穴住居跡カマド（南から）
- 図版31 1 72号竪穴住居跡（北西から）
2 73号竪穴住居跡（南西から）
3 73号竪穴住居跡カマド（南西から）
- 図版32 1 74号竪穴住居跡（北から）
2 75号竪穴住居跡（西から）
3 76号竪穴住居跡（西から）
- 図版33 1 77号竪穴住居跡（北から）
2 78号竪穴住居跡（南から）
3 79号竪穴住居跡（南から）
- 図版34 1 80号竪穴住居跡（南から）
2 81号竪穴住居跡（北から）
3 82号竪穴住居跡（南東から）
- 図版35 1 83・84号竪穴住居跡（北から）
2 85号竪穴住居跡（西から）
3 86号竪穴住居跡（東から）
- 図版36 1・2号竪穴住居跡出土土器
- 図版37 2・4号竪穴住居跡出土土器
- 図版38 4・6・7号竪穴住居跡出土土器
- 図版39 6・7・9・10号竪穴住居跡出土土器
- 図版40 10・11号竪穴住居跡出土土器
- 図版41 11・12・15号竪穴住居跡出土土器
- 図版42 15号竪穴住居跡出土土器
- 図版43 15・16・17号竪穴住居跡出土土器
- 図版44 17・18号竪穴住居跡出土土器
- 図版45 18・19・20号竪穴住居跡出土土器
- 図版46 20・21・22号竪穴住居跡出土土器

図版47	22・23・25号竪穴住居跡出土土器
図版48	25・26・27号竪穴住居跡出土土器
図版49	27号竪穴住居跡出土土器
図版50	27・28号竪穴住居跡出土土器
図版51	28・29号竪穴住居跡出土土器
図版52	29・30・31号竪穴住居跡出土土器
図版53	33・35・36・37号竪穴住居跡出土土器
図版54	37・38・39・40・41号竪穴住居跡出土土器
図版55	42・43号竪穴住居跡出土土器
図版56	43・44号竪穴住居跡出土土器
図版57	44・45号竪穴住居跡出土土器
図版58	46・47・48号竪穴住居跡出土土器
図版59	48号竪穴住居跡出土土器
図版60	48・49・50・51号竪穴住居跡出土土器
図版61	52・53・54・55・57号竪穴住居跡出土土器
図版62	57・58号竪穴住居跡出土土器
図版63	58号竪穴住居跡出土土器
図版64	58・59・60・61号竪穴住居跡出土土器
図版65	61・63・64号竪穴住居跡出土土器
図版66	64号竪穴住居跡出土土器
図版67	64号竪穴住居跡出土土器
図版68	64・65号竪穴住居跡出土土器
図版69	65号竪穴住居跡出土土器
図版70	65・66・67号竪穴住居跡出土土器
図版71	67・68号竪穴住居跡出土土器
図版72	68・69・70・71号竪穴住居跡出土土器
図版73	71・72号竪穴住居跡出土土器
図版74	72・73号竪穴住居跡出土土器
図版75	73・74号竪穴住居跡出土土器
図版76	74・75・76号竪穴住居跡出土土器
図版77	76・77号竪穴住居跡出土土器
図版78	77・78号竪穴住居跡出土土器
図版79	78号竪穴住居跡出土土器
図版80	78号竪穴住居跡出土土器
図版81	78号竪穴住居跡出土土器
図版82	78・80号竪穴住居跡出土土器
図版83	80・81・82・84・85・86号竪穴住居跡出土土器
図版84	1 半島系土器①

- 2 半島系土器②
- 3 半島系土器③
- 図版85 1 半島系土器④
- 2 半島系土器⑤
- 3 半島系土器⑥
- 図版86 1 半島系土器⑦
- 2 半島系土器⑧
- 3 半島系土器⑨
- 図版87 1 58号竪穴住居出土土器 不明物質付着状態
- 2 58号竪穴住居跡出土土器付着不明物質
- 図版88 1 黒色物塗布土器①
- 2 黒色物塗布土器②
- 3 黒色物塗布土器③
- 図版89 1 石錘
- 2 軽石
- 図版90 1 砥石①
- 2 砥石②
- 図版91 1 砥石③
- 2 台石①
- 3 台石②
- 図版92 1 凹み石・磨石・支脚
- 2 玉原石・黒曜石剥片
- 図版93 1 鉄器①
- 2 鉄器②
- 3 鉄器③
- 図版94 1 土製品
- 2 骨角器
- 3 68号竪穴住居跡出土貝殻

挿 図 目 次

第 1 図	西新町遺跡の位置	1
第 2 図	博多湾沿岸主要遺跡分布図 (1/100,000)	7
第 3 図	発掘調査区の位置と周辺調査地 (1/4,000)	9
第 4 図	調査区周辺地形図 (1/1,500)	10
第 5 図	西新町13次近世以降遺構配置図(1/250)	折り込み
第 6 図	西新町13次古墳時代遺構配置図(1/250)	折り込み
第 7 図	調査区区割図 (1/500)	11
第 8 図	西新町遺跡第13次調査基本層序 (1/60)	12
第 9 図	1・2号竪穴住居跡実測図 (1/60)	14
第10図	1号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	15
第11図	2号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/3)	17
第12図	2号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/3)	18
第13図	2号竪穴住居跡出土土器実測図③(1/3)	20
第14図	3・4号竪穴住居跡実測図 (1/60)	21
第15図	4号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/3)	23
第16図	4号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/3)	24
第17図	4号竪穴住居跡出土土器実測図③(1/3)	25
第18図	5・6号竪穴住居跡実測図 (1/60)	26
第19図	6号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	27
第20図	6・7号 竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	28
第21図	7号竪穴住居跡実測図 (1/60)	29
第22図	8・9号竪穴住居跡実測図 (1/60)	31
第23図	8・9号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	32
第24図	10号竪穴住居跡実測図 (1/60)	33
第25図	10号竪穴住居跡カマド・粘土塊実測図 (1/30)	34
第26図	10号竪穴住居跡北側焼土塊実測図 (1/30)	35
第27図	10号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/3)	36
第28図	10号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/3)	38
第29図	11・12・14号竪穴住居跡実測図 (1/60)	40
第30図	11号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	41
第31図	12号竪穴住居跡出土土器実測図(5:1/6,他は1/3)	42
第32図	13・15号竪穴住居跡実測図 (1/60)	44
第33図	13号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	45
第34図	15号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/3)	47
第35図	15号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/3)	48

第36図	15号竪穴住居跡出土土器実測図③(1/3).....	50
第37図	16・17号竪穴住居跡実測図 (1/60)	51
第38図	16号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3).....	52
第39図	17号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/3).....	53
第40図	17号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/3).....	54
第41図	17号竪穴住居跡出土土器実測図③(1/3).....	55
第42図	18・19号竪穴住居跡実測図 (1/60)	57
第43図	18号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/3).....	58
第44図	18号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/3).....	59
第45図	18号竪穴住居跡出土土器実測図③(1/3).....	60
第46図	18号竪穴住居跡出土土器実測図④(1/3).....	61
第47図	19号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3).....	63
第48図	20号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	65
第49図	20号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/3).....	66
第50図	20号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/3).....	67
第51図	21号竪穴住居跡実測図 (1/60)	67
第52図	21号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/3).....	68
第53図	21号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/3).....	69
第54図	22号竪穴住居跡実測図 (1/60)	70
第55図	22号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/3).....	72
第56図	22号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/3).....	73
第57図	23号竪穴住居跡実測図 (1/60)	73
第58図	23号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	74
第59図	23・24号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3).....	75
第60図	24号竪穴住居跡・焼土坑実測図 (1/60・1/30)	77
第61図	25号竪穴住居跡実測図 (1/60)	78
第62図	25号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	79
第63図	25号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/3).....	80
第64図	25号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/3).....	82
第65図	25号竪穴住居跡出土土器実測図③(1/3).....	83
第66図	26・27号竪穴住居跡実測図 (1/60)	84
第67図	26号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3).....	85
第68図	27号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/3).....	87
第69図	27号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/3).....	88
第70図	27号竪穴住居跡出土土器実測図③(1/3).....	90
第71図	27号竪穴住居跡出土土器実測図④(1/3).....	92
第72図	27号竪穴住居跡出土土器実測図⑤(1/3).....	94
第73図	28・29号竪穴住居跡実測図 (1/60)	95

第74図	28号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)……………	96
第75図	29号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/3)……………	98
第76図	29号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/3)……………	100
第77図	29号竪穴住居跡出土土器実測図③(1/3)……………	102
第78図	30号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……………	103
第79図	30号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30) ……………	104
第80図	30号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)……………	105
第81図	31～33号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……………	107
第82図	31・32号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)……………	108
第83図	33・35号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)……………	109
第84図	35～37号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……………	111
第85図	36号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)……………	112
第86図	37号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30) ……………	113
第87図	37号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)……………	114
第88図	38～40・56号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……………	116
第89図	38号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)……………	117
第90図	39号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30) ……………	118
第91図	39号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)……………	119
第92図	40号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)……………	120
第93図	41号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……………	122
第94図	41号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)……………	122
第95図	42号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30) ……………	123
第96図	42号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)……………	124
第97図	43号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30) ……………	126
第98図	43号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)……………	128
第99図	44・45号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……………	129
第100図	44号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/3)……………	130
第101図	44号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/3)……………	132
第102図	44号竪穴住居跡出土土器実測図③(1/3)……………	133
第103図	45号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) ……………	135
第104図	46・47号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……………	136
第105図	46・47号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)……………	137
第106図	48号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30) ……………	138
第107図	48号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/3)……………	140
第108図	48号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/3)……………	142
第109図	48号竪穴住居跡出土土器実測図③(1/3)……………	143
第110図	48号竪穴住居跡出土土器実測図④(1/3)……………	144
第111図	49号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……………	145

第112図	49号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)……………	146
第113図	50号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……………	147
第114図	50号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/3)……………	148
第115図	50号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/3)……………	149
第116図	51号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……………	151
第117図	51号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)……………	151
第118図	52号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30) ……………	153
第119図	52号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)……………	154
第120図	53・54号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……………	156
第121図	53～55号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)……………	157
第122図	55・57号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……………	159
第123図	57号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/3)……………	160
第124図	57号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/3)……………	162
第125図	58号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30) ……………	164
第126図	58号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/3)……………	165
第127図	58号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/3)……………	166
第128図	58号竪穴住居跡出土土器実測図③(1/3)……………	168
第129図	59～62号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……………	169
第130図	59・60号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)……………	170
第131図	61号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)……………	172
第132図	63号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……………	173
第133図	63号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)……………	174
第134図	64～66号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……………	176
第135図	64号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/3)……………	177
第136図	64号竪穴住居跡出土土器実測図②(19:1/4,他は1/3)……………	179
第137図	64号竪穴住居跡出土土器実測図③(1/3)……………	180
第138図	64号竪穴住居跡出土土器実測図④(1/3)……………	182
第139図	64号竪穴住居跡出土土器実測図⑤(1/3)……………	183
第140図	65号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/3)……………	184
第141図	65号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/3)……………	186
第142図	66号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)……………	187
第143図	67号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30) ……………	189
第144図	67号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/3)……………	191
第145図	67号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/3)……………	192
第146図	68・69号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……………	194
第147図	68号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)……………	195
第148図	69号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30) ……………	197
第149図	69・70号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)……………	198

第150図	70・71号竪穴住居跡実測図 (1/60)	199
第151図	71号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	200
第152図	71号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/3).....	202
第153図	71号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/3).....	203
第154図	72号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3).....	204
第155図	72・73号竪穴住居跡実測図 (1/60)	205
第156図	73号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	206
第157図	73号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/4).....	207
第158図	73号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/3).....	208
第159図	73号竪穴住居跡出土土器実測図③(1/3).....	210
第160図	74・75号竪穴住居跡実測図 (1/60)	212
第161図	74号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/3).....	213
第162図	74号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/3).....	214
第163図	74号竪穴住居跡出土土器実測図③(1/3).....	216
第164図	75号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/3).....	218
第165図	75号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/3).....	219
第166図	76号竪穴住居跡実測図 (1/60)	220
第167図	76号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3).....	221
第168図	77号竪穴住居跡実測図 (1/60)	223
第169図	77号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/3).....	224
第170図	77号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/3).....	225
第171図	77号竪穴住居跡出土土器実測図③(1/3).....	227
第172図	77号竪穴住居跡出土土器実測図④(1/3).....	228
第173図	78号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	230
第174図	78号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/3).....	232
第175図	78号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/3).....	234
第176図	78号竪穴住居跡出土土器実測図③(1/3).....	236
第177図	78号竪穴住居跡出土土器実測図④(1/3).....	238
第178図	78号竪穴住居跡出土土器実測図⑤(1/3).....	239
第179図	79・80号竪穴住居跡実測図 (1/60)	241
第180図	79号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3).....	242
第181図	80号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3).....	243
第182図	81～84号竪穴住居跡実測図 (1/60)	245
第183図	81～83号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	246
第184図	84・85号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	249
第185図	85・86号竪穴住居跡実測図 (1/60)	250
第186図	86号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	251
第187図	86号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3).....	252

第188図	堅穴住居跡出土石器実測図① (1/2)	255
第189図	堅穴住居跡出土石器実測図② (1/2)	256
第190図	堅穴住居跡出土石器実測図③ (1/2)	257
第191図	堅穴住居跡出土石器実測図④ (1/3)	258
第192図	堅穴住居跡出土石器実測図⑤ (36~39は1/2,40~44は1/3)	260
第193図	堅穴住居跡出土鉄器実測図 (1/2)	262
第194図	堅穴住居跡出土土製品実測図 (1/2)	263
第195図	布留系土器のK-Ca分布図.....	265
第196図	布留系土器のRb-Sr分布図.....	265
第197図	半島系土器のK-Ca分布図.....	265
第198図	半島系土器のRb-Sr分布図.....	265
第199図	Na因子の比較.....	266
第200図	在地系土器のK-Ca分布図.....	266
第201図	在地系土器のRb-Sr分布図.....	201
第202図	庄内系土器のK-Ca分布図.....	266
第203図	庄内系土器のRb-Sr分布図.....	266
第204図	西新町遺跡第12次調査出土 胎土分析対象土器① (1/8・1/6)	269
第205図	西新町遺跡第12次調査出土 胎土分析対象土器② (1/6)	270

表 目 次

第1表	西新町遺跡調査次数一覧.....	9
第2表	西新町遺跡第12次調査出土土器の分析データ.....	267・268

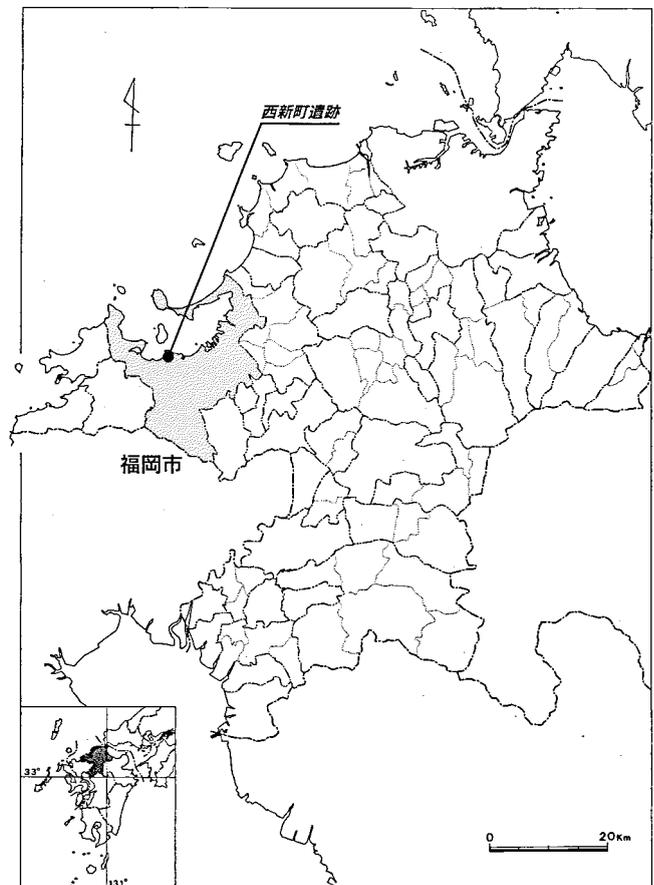
第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

筑前黒田の時代、修猷館は黒田藩の東学問稽古所として天明4年（1784）に開館した。儒学を旨とし、同じ頃に西学問稽古所として開館した甘棠館と双璧をなし、後世に優れた人物を輩出した。明治初期に一時廃止されるが、明治18年（1885）には英語専修修猷館として再興、明治23年（1889）には福岡県立尋常中学修猷館と改称し、明治33年（1900）には現在の西新町に移転、翌年福岡県立中学修猷館と改称した。大正4年（1915）の創立30周年祝賀会には、卒業生によって菁莪堂が瀛堂された。昭和11年（1936）から昭和14年（1939）にかけて体育館、本館が相次いで建設された。昭和23年に福岡県立高等学校修猷館、翌年には福岡県立修猷館高等学校と改称され、現在にまで至っている。昭和初期に建設された本館は、高校のみならず西新の象徴として永らくその威風を誇っていたが、近年は老朽化が進んだため、平成10年度より8ヶ年の計画で全面的に改築工事が行われることとなった。

この改築工事に先立ち、施工者の福岡県教育庁教育企画部施設課から福岡県教育庁総務部文化財保護課に対して埋蔵文化財の取り扱いについての照会があり、文化財保護課は修猷館高等学校を中心とする付近一帯は西新町遺跡と呼ばれる周知の埋蔵文化財包蔵地であり遺跡の存在が予想されること、そして改築工事を行う際には事前に発掘調査が必要である旨を回答した。平成9年の協議では、平成10～11年の第1期改築工事に伴う発掘調査を平成10年度に実施し、平成12年度以降継続して行われる改築工事についても随時協議のうえで事前に発掘調査を実施することを申し合わせた。

第1期改築工事に伴う発掘調査は西新町遺跡第12次調査と呼称され、平成10年4月22日～12月28日に実施、平成11・12年度に既に報告書を刊行している（西新町遺跡Ⅱ・Ⅲ）。第2期改築工事は、平成12～13年に旧管理棟の解体および新管理棟の建設工事が計画されていた。そのため解体工事完了後に旧管理棟部分と旧中庭部分の発掘調査を実施することとなった。まず年度当初に行った教育庁施設課との協議で、解体工事が平成12年6月末に完了予定である事、7月初旬から発掘調査を開始する予定であることを確認し、解体にあたっては地下の遺構に影響を及ぼさないよう留意する旨申し合わせた。また現地にて関係各担当及



第1図 西新町遺跡の位置

び解体業者と立会し、詳細について協議を行った。6月末には解体工事の完了報告を受け、再度現地にて立会、学校側も含めて現況の確認、今後の予定等の協議を行った。

第2節 調査の経過

発掘調査には当初の予定通り7月初旬から行った。以下、調査日誌をもとに調査の経過を簡単に纏めてみることにする。

平成12年

6月26日 現地にて学校関係者と協議。
進入路、ユニットハウスの配置、
調査工程について確認。

6月30日 営繕課、福岡土木事務所、表
土掘削業者と現地協議、水道・
ガス管の配置等を確認。

7月3日 生徒の登校時間を配慮し、午前
9時過ぎに重機搬入。廃土置場を考慮してI区南側から表土掘削を開始し、順次
北側に向かって進行することとなった。併せて防護柵の設置を行う。

7月4日 7月7日～9日に福岡市博物館で行われるサミットに備え、周辺に警察官が多数配備
される。数回にわたり職務質問を受ける。

7月10日 器財搬入。作業員初顔合わせ。自己紹介、安全講習等の実施。

7月12日 作業員による掘削作業開始。攪乱・近世以降の遺構掘削から実施する。I区南東か
ら西に向かって進行することにする。しまりのない砂地で非常に崩れやすいので掘
削した遺構の周辺を歩かないよう注意する。また地面が乾くと風が吹くだけで遺構
が崩れていくため、乾かないよう水を散布し、また掘削後直ちに写真撮影を行うよ
う心がける。

7月17日 電気架設工事完了。ベルトコンベアー設置。

8月11日 I区の攪乱・近世以降の遺構掘削終了。I区全景写真撮影。

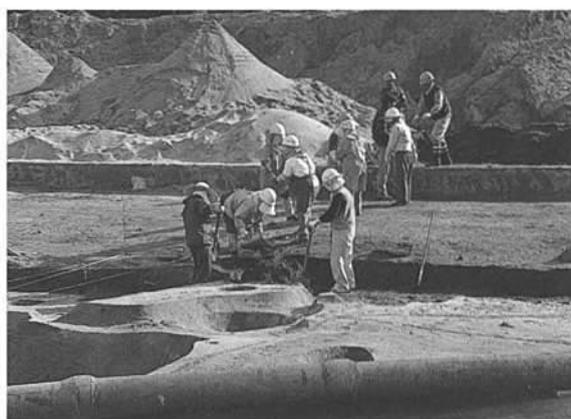
8月17日 I区南東隅から古墳時代の遺構確認作業開始。1号竪穴住居跡を確認、掘削。

8月21日 I区南9～11の遺構確認作業。遺
構の存在は予想できるものの、
識別が困難な砂層である上に攪
乱の多さも相俟ってプランの識
別に非常に苦勞する。

8月29日 I区東で広範囲に広がる遺物
包含層を確認。竪穴住居跡の重
複かとも考えたがプランの把握
が全く出来ないため、層序を確
認しつつ一層ずつ除去していく



掘削前の調査区



調査風景

- こととする。
- 9月4日 10号竪穴住居跡において初めてカマド確認。初めて見る形状の異様さに掘り間違えたのではないかと不安を憶える。
- 9月11日 I区東の不明遺構は巨大な土坑状になることが判明。第12次調査で検出していた41号土坑に類似するものと考える。
- 9月26日 福岡市教育委員会埋蔵文化財課職員20数名来訪。調査方法や遺構・遺物について多々御教示頂く。感謝。
- 10月6日 I区中1~4は攪乱が多く、遺構のプラン把握に苦心する。
- 10月10日 I区中5の遺構確認作業。第12次調査でも予想されていた通り、この一帯が最も遺構密度が高いようで地山が見えない。プランも皆目見当がつかない。
- 10月16日 I区西一帯の遺構確認。校舎基礎が多く残るものの、遺構面の深さまで達していないため遺構の残りも良くプランの把握も比較的容易である。高密度の重複となる。
- 10月24日 昼休みに修猷館高校2年生に遺跡の説明を行う。
- 11月1日 大雨。掘削途中の遺構が完全に埋没し、悲しい思いをする。
- 11月7日 午前中、I区の空中写真撮影。午後から再び重機搬入、II区の廃土移動作業から始める。
- 11月15日 作業員によるII区の掘削作業開始。II区北東側から西に向かって作業を進める。調査期間に余裕がないのでなるべく急ぐよう努める。
- 12月4日 II区北5~8の遺構掘削。基礎の間に位置するため攪乱が比較的少なく、また遺構の重複も少ないので遺存状況が良好。特に67・71号竪穴住居跡の残りが良い。
- 12月5日 高校生体験発掘実施。包含層を掘削してもらったが、予想以上の遺物の出土に遺構



調査風景



高校2年生の現地見学



高校2年生の現地見学

を掘削したのではのではないかと戸惑う。高校生は非常に満足して帰っていった。

12月8日 II区南2・3の攪乱掘削作業。以前は校舎の中庭だったためか、ゴミ穴が非常に多く遺構の遺存状況は極めて悪い。

12月20日 I区との境界を遺構検出。遺構がうまく繋がるか不安だったが、I区で検出した遺構と矛盾なく合致したため安心する。

平成13年

1月9日 平成13年の現場開始。II区南は遺構密度は高いものの攪乱が多すぎてプランが不明確なものが多い。

1月29日 今回調査区の全ての遺構確認を終了する。

2月2日 全ての遺構掘削作業を終了。空中写真撮影にむけて清掃作業。

2月13日 午前中空中写真撮影。

2月16日 器財撤収。重機による埋め戻し作業完了。発掘現場での全ての作業完了。



調査風景



空中写真撮影用の気球

第3節 調査・整理の関係者

西新町遺跡第13次調査は、福岡県教育庁総務部文化財保護課が福岡県教育庁教育企画部施設課から執行委任を受け、平成12年7月1日～平成13年2月16日に実施した。工事との調整は、施設課、修猷館高等学校および福岡県建築都市部営繕課、福岡県土木事務所と随時協議を行いながら進めていった。また当調査に係る報告書は、出土遺物が多量であるため、平成13、14年度の2ヶ年に作成することになった。

発掘調査および整理・報告書作成の関係者は次のとおりである。

西新町遺跡第13次発掘調査関係者

		平成12年度	平成13年度
総括			
福岡県教育委員会	教育長	光安 常喜	光安 常喜
	教育次長	榊原 英夫	森山 良一
教育企画部	部長	寺島 寛治	黒見 義正

施設課	課長	安野 義勝	今村 芳晴
	参事兼課長補佐	清田 嘉治	
	課長補佐		藤 裕志
	課長技術補佐	井本 喜三郎	井本 喜三郎
	施設係長	平 信二	平 信二
	主任技師	山本 哲也	
総務部	部長	岩本 誠	三瓶 寧夫
文化財保護課	課長	柳田 康雄	井上 裕弘
	参事	井上 裕弘	
	参事兼課長技術補佐	橋口 達也	橋口 達也
		川述 昭人	川述 昭人
庶務	課長補佐兼管理係長	平野 義峰	
	管理係長		三笠 ひとみ
	主任主事	鎮守 俊明	秦 俊二
調査・整理	参事補佐兼調査第一係長	佐々木 隆彦	佐々木 隆彦
	主任技師	吉田 東明 (調査担当)	
			岸本 圭 (整理担当)
			進村 真之 (整理担当)
	技師	宮地 聡一郎 (調査担当)	宮地 聡一郎 (報告書作成)
	技師	平尾 和久 (調査担当)	
甘木歴史資料館	副館長		吉田 東明 (報告書作成)

調査期間中に下記の方々のご来訪があり、調査方法や出土資料について現地で有益なご教示を頂いた。(敬称略)

高倉 洋彰 (西南学院大学) 武末 純一 (福岡大学) 西谷 正 (九州大学) 佐々木 彰 (足立区立郷土博物館) 森下 靖士 (古賀市教委) 李恵京 金必淑 (国立慶州文化財研究所) 林宝鎮 (国立文化財研究所)

発掘調査と解体・改築工事との調整にあたっては、福岡県建築都市部営繕課 深見泰孝氏、福岡県福岡土木事務所建築指導課 中村義和氏にご配慮を頂いた。作業員の募集ならびに発掘調査の進行にあたっては、福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課の方々にも多くの御協力・御助言を頂いた。

発掘調査にあたっては、前川昭治館長、柏木茂弘事務長をはじめ、修猷館高等学校の多くの方々にも多大なご迷惑をおかけしたにもかかわらず、種々の面でご協力を頂いた。また現場作業員の方々には、調査中担当者の不手際が多々あったものの、文句の一つも言わず熱心に作業にあたっていた。無事に調査を終了することができたのはこうした多くの皆様の誠意と努力、そして暖かな心遣いのお陰である。調査担当者一同、皆様に心から感謝申し上げます。

第2章 位置と環境

第1節 遺跡の地理的環境

西新町遺跡は早良平野東北端の室見川右岸の砂丘上に位置する。この砂丘は東区箱崎から早良区百道にかけて海岸づたいに細長く分布する箱崎砂層と呼ばれるもので、小海退に伴い約3,000年前から、那珂川や室見川からの砂の供給などにより堆積し形成されたものである。砂丘の背後には後背湿地が形成され、長らく干潟や湿地が保存されたようである。細かく見るならば、海岸線に平行する方向に数列の微高地からなる砂丘列が形成されており、内陸側から海岸側へ順次陸化が進行したと考えられる。西新周辺ではこの砂丘列が3列確認されており、西新町遺跡は中央の砂丘列と、その北側との砂丘間低地に広がっている。中央の砂丘列は中央区今川の鳥飼神社付近で最も発達し、幅約170m、高さ8mに達する。なお一番北側の砂丘列は西公園から百道にかけての元寇防塁線に沿って形成されている。

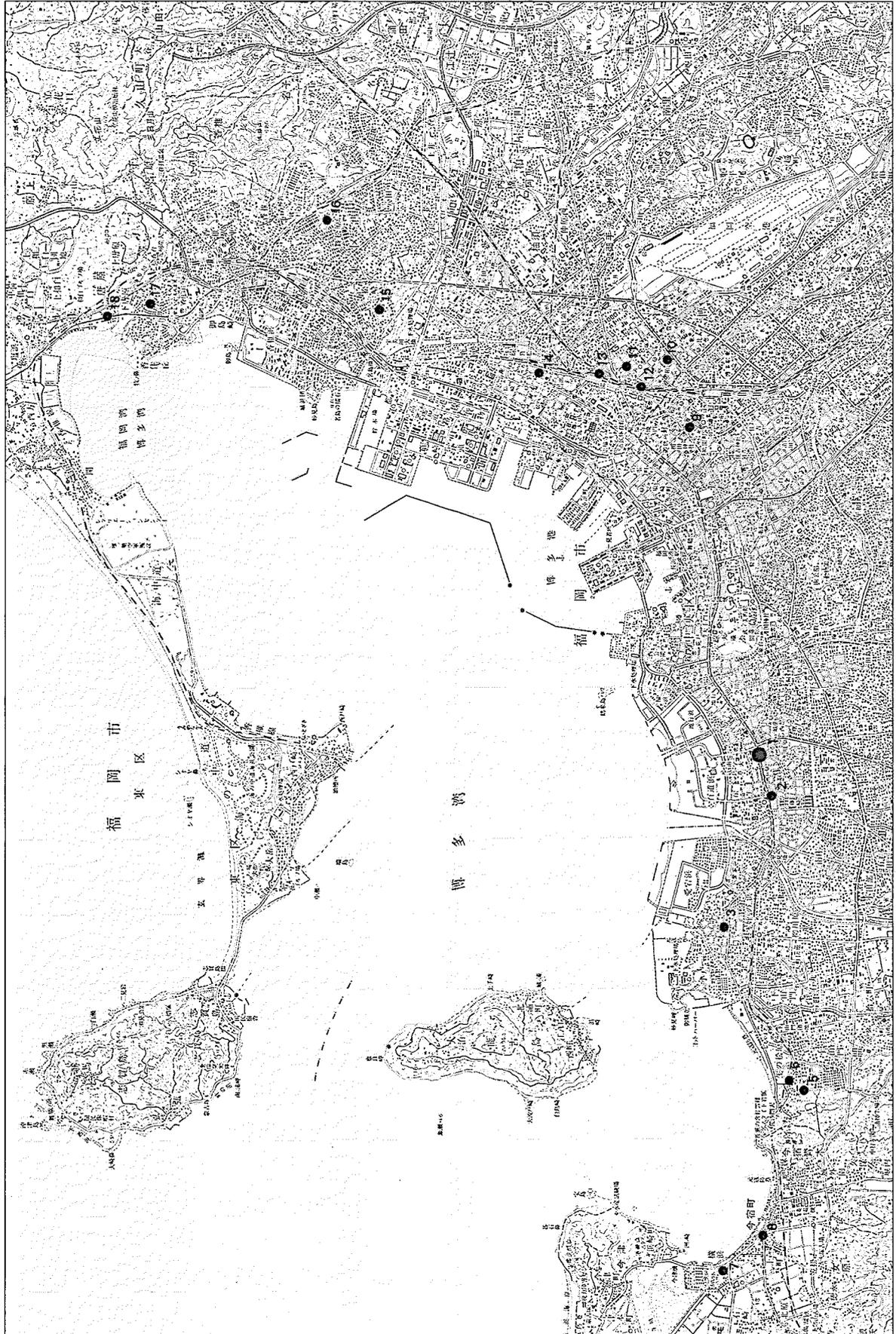
第2節 周辺の歴史的環境

西新町遺跡の周辺の古墳時代までの歴史的環境については、早良平野を中心に第12次調査報告書〔福岡県文化財調査報告書第154集〕に詳しく記述されている。今回は重複を避けるため、古墳時代までの博多湾沿岸の海岸づたいの遺跡の動向を、福岡市教育委員会等による発掘調査の成果を中心に記述することにしたい。なお、()内番号は第2図に一致し、[]内番号は福岡市教育委員会埋蔵文化財報告書番号である。それ以外の報告書の場合は[]内に発行機関と集番号もしくは発行年を記述している。

博多湾沿岸の海岸づたいで明確に遺跡が確認されるようになるのは弥生時代に入ってからで、今宿砂丘上の今宿遺跡(8)では、前期中頃から甕棺墓が営まれ一大墓地を形成する〔389・654集〕。今山遺跡(7)では前期後半から石斧生産が始まる〔75集〕。

室見川流域では、姪浜遺跡(3)で、海岸から2番目の砂丘列で弥生時代中期から集落および甕棺墓群が形成され、漢式三角鏃や南海産オオツタノハ製貝輪未製品が出土し注目される〔478集〕。藤崎遺跡(2)は西新町遺跡(1)と同一砂丘に位置し、弥生早期の壺棺の埋設を皮切りに〔80集〕、前期から甕棺墓群が形成される〔62・137・138・232集〕。西新町遺跡でも第2・7・10次調査〔79集・483集・683集〕で弥生時代中期から後期にかけての甕棺墓群を確認しており、それに伴う祭祀遺構や竪穴住居跡も検出している。第2次調査第10号甕棺墓からはゴホウラ貝製腕輪を装着した人骨が、第19号甕棺墓からは細形銅剣の切先が出土している。また、第8・9次調査〔484・505集〕では弥生時代中期後半の集落跡が調査され、第8次調査では鉄塊系遺物やガラス容器片が、第9次調査では住居跡床面より板状鉄斧が出土している。

御笠川流域周辺では博多遺跡群(9)で、3列ある砂丘列のうち、真中と一番南側の砂丘列との谷頭を囲む格好で弥生中期の甕棺墓と集落が分布する〔105・119・149・228・282集〕。後期後半には、一番南側の砂丘列南側斜面で、住居跡より碧玉の剥片がまとまって出土し、玉造りの痕跡がうかがえる〔118集〕。また吉塚遺跡群(10)では一番南側の砂丘列に弥生中期から遺構が見られ、貨泉が出土し注目される〔202集〕。吉塚遺跡群の北側の吉塚祝町遺跡(11)では、弥生中期の甕棺墓



第2圖 博多灣沿岸主要遺跡分布圖 (1/100,000)

が見られる [624集]。

博多湾最奥部では、和臼より南に延びる砂丘上で、弥生時代後期から唐原遺跡 (18) の集落が形成される。住居跡とともに多くの炉跡が確認され、遺物では石錘などの漁具が出土し、漁民的性格を有する集落と思われる [207集]。

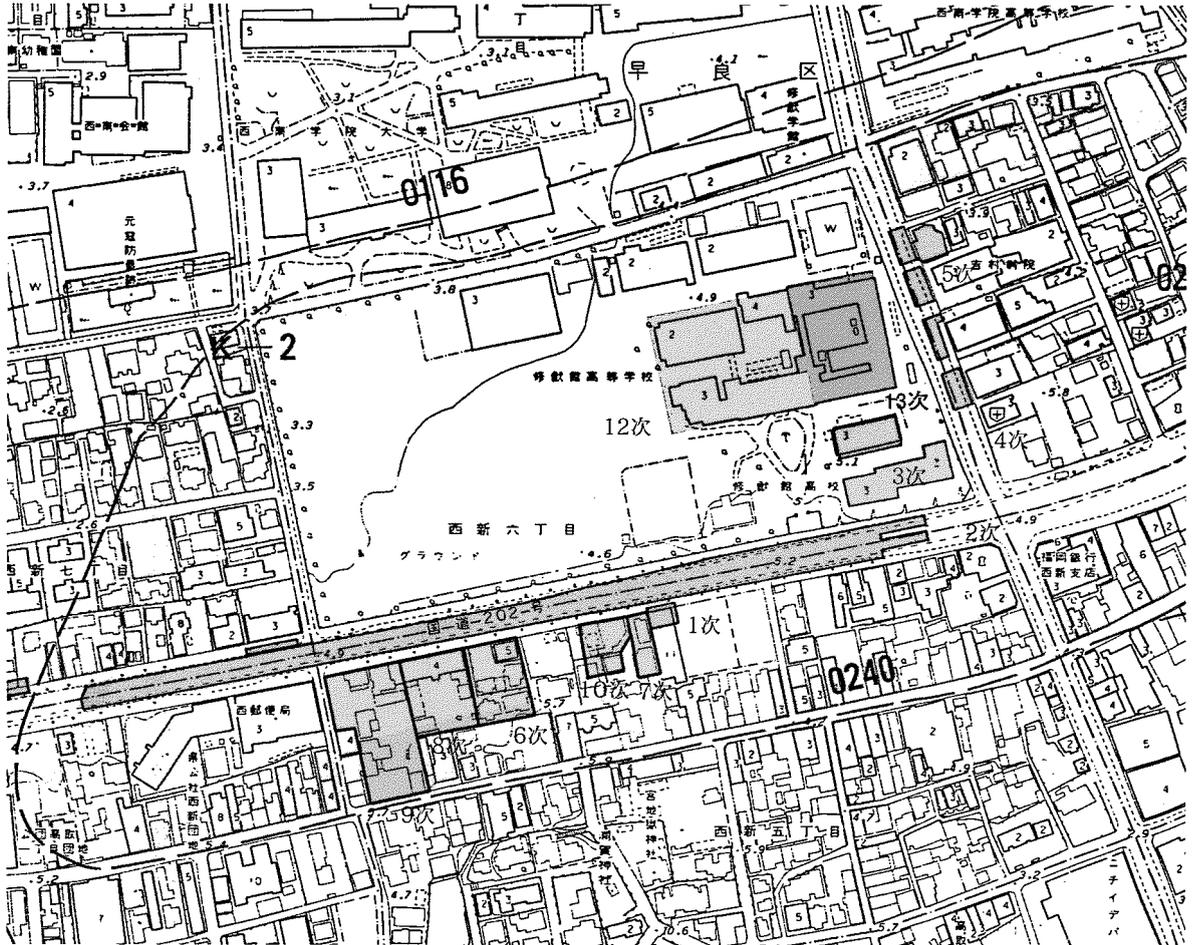
古墳時代に入ると博多湾沿岸の海岸づたい全域で遺跡が増加、展開する。特に古墳時代前期の集落には半島系土器をはじめ、外来系土器を多数出土する例が多く、この地域の特色となる。今山遺跡や今宿遺跡では古墳時代前期の管状土錘や蛸壺、製塩土器が多数出土しており、漁民集団の存在が暗示される [75・389・654集]。生の松原遺跡 (6) では古墳時代前期以降に集落が見られ、半島系土器も出土している [654集]。

室見川流域では、姪浜遺跡で弥生時代にひきつづき集落が営まれ、砂丘北側の緩斜面に集落域が広がる。カマド廃棄に伴い蛸壺を埋納しており、特異な祭祀形態が注目される [478集]。藤崎遺跡では古墳時代前期に方形周溝墓群が見られ、第3次調査の第6号方形周溝墓では、組合せ木棺から三角縁二神二車馬鏡と素環頭大刀、第7号方形周溝墓では周溝から珠文鏡、第10号方形周溝墓主体部から変形文鏡が出土している [80集]。西新町遺跡と同一時期でなおかつ同一砂丘列に位置することから、集落域である西新町遺跡の墓域として注目される。西新町遺跡では砂丘の陸化に伴って集落域が東北方向へ移動し、第3次 [福岡県文化財調査報告書第72集]、4次 [203集]、5次 [375集]、12次 [福岡県文化財調査報告書第154・157集] 調査では古墳時代前期の集落跡が調査されている。カマドを有する住居跡が多数確認され、半島系土器も多く出土している。石錘や蛸壺などの漁労活動を示す遺物の他に、第5次調査では板状鉄斧、第12次調査では玉類未製品やガラス製小玉の鑄型が出土しており、手工業生産も行っていたことが明らかになっている。姪浜遺跡より南側の独立丘陵上には、古墳時代前期初頭の五島山古墳 (4) があり、箱式石棺より二神二獣鏡が2面、鉄剣、銅鏃が出土している [有田遺跡調査団1968]。その他、早良平野東北端の海岸沿いの丘陵では、古墳時代後期から終末期にかけての群集墳、草場古墳群 (5) が存在する [301集]。

御笠川流域周辺では、博多遺跡群で集落域が拡大し、一番南側の砂丘列から真中の砂丘列の南半にかけて住居跡、方形周溝墓、土壇墓などが確認されている [118・228・249・286・328・329・397・558集]。博多遺跡群でも多数の外来系土器が出土し、庄内系甕は他の遺跡に比べ目立つ。また第28次調査では古墳時代中期の前方後円墳、博多1号墳が確認され、全長56mに及ぶことが判明した。周囲には周溝埋没後に数基の小型小石室が構築される [147集]。吉塚遺跡群は一番南側の砂丘列に位置し、弥生時代にひきつづき遺構が展開する [202・464集]。また堅粕遺跡群 (12) [福岡県文化財調査報告書第130集]、吉塚本町遺跡 (13) [319集]、箱崎遺跡群 (14) [591集] でも、古墳時代前期に遺構が多く見られるようになり、蛸壺や管状土錘が出土している。特に堅粕遺跡群第8次調査では古墳時代前期の祭祀遺構が見られ、土器とともに滑石製の管玉、勾玉、白玉と剣形石製品が出土し注目される [590集]。

多多良川流域では、多多良川河口を見下ろす低丘陵上に古墳時代前期初頭の名島古墳 (15) が築かれる。全長約30mの前方後円墳で、三角縁神獣鏡や鉄剣が出土している [福岡市歴史資料館研究報告14集]。また名島古墳より北東約1.8kmの低丘陵には、古墳時代前期末の舞松原古墳 (16) が築造される。全長37mの帆立貝式古墳で、主体部から鉄斧、鉄鎌、鍬先、刀子が出土している [533集]。

博多湾最奥部では、唐原遺跡で弥生時代にひきつづき古墳時代前期に多くの住居跡と炉跡が見られるが、炉跡は砂丘尾根上に分布し、砂丘の北端より漸次南方側へ移っていくようである [207集]。墓域も確認されており、砂丘南端付近で箱式石棺墓、円形周溝墓、方形周溝墓を確認している。また時期的には遅れるが、6世紀の円墳も2基確認されている [161集]。その他唐原遺跡の南、唐原川左岸の海岸に延びる丘陵上には、古墳時代前期に香住ヶ丘古墳 (17) が築かれる。径30m程の円墳で、粘土槨の内部主体から三角縁二神二獣鏡が出土している。



第3図 発掘調査区の位置と周辺調査地 (1/4,000)

第1表 西新町遺跡調査次数一覧

調査 次数	住 所	調査原因	調査主体	調査 面積(m ²)	調査年月日	報告書名	報告書発行年月日
1		民間開発					
2	早良区西新6丁目6-10	高校改築	県教委	700	1984.8.6.-8.27	福岡県文化財調査報告書第72集	1985.3.31
3	早良区西新6丁目	地下鉄建設工事	市教委	6230	1976.8.-1978.4	福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集	1982.3.31
4	早良区西新3丁目	道路拡幅工事	市教委	800	1986.6.29.-10.3	福岡市埋蔵文化財調査報告書第204集	1989.3.31
5	早良区西新3丁目606-4	病院増築	市教委	303	1992.11.2.-11.14	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集	1994.3.31
6	早良区西新5丁目643-4他	民間開発	市教委	1041	1994.3.31-6.15	福岡市埋蔵文化財調査報告書第483集	1996.3.31
7	早良区西新5丁目638-9	民間開発	市教委	368.96	1994.4.16-5.22	福岡市埋蔵文化財調査報告書第483集	1996.3.31
8	早良区西新5丁目644-1・644-2	民間開発	市教委	610	1994.9.6-11.18	福岡市埋蔵文化財調査報告書第484集	1996.3.31
9	早良区西新5丁目594他6筆	民間開発	市教委	920	1995.1.9-4.24	福岡市埋蔵文化財調査報告書第505集	1997.3.31
10	早良区西新5丁目641-3他	共同住宅建設	市教委	462	1995.10.28-1996.2	福岡市埋蔵文化財調査報告書第683集	2001.3.30
11	早良区西新5丁目632-6	店舗建設	市教委	52	1997.10.13-10.15	福岡市埋蔵文化財年報V o l . 12	1999.3.31
12	早良区西新6丁目6-10	高校改築	県教委	5214	1998.4.22-1998.12	福岡県文化財調査報告書第154集 福岡県文化財調査報告書第157集	2000.3.31 2001.3.30
13	早良区西新6丁目6-10	高校改築	県教委	2800	2000.7.3-2001.2	福岡県文化財調査報告書第168集	2002.3.29
14	早良区西新6丁目6-10	高校改築	県教委	1500	2001.10.1-		

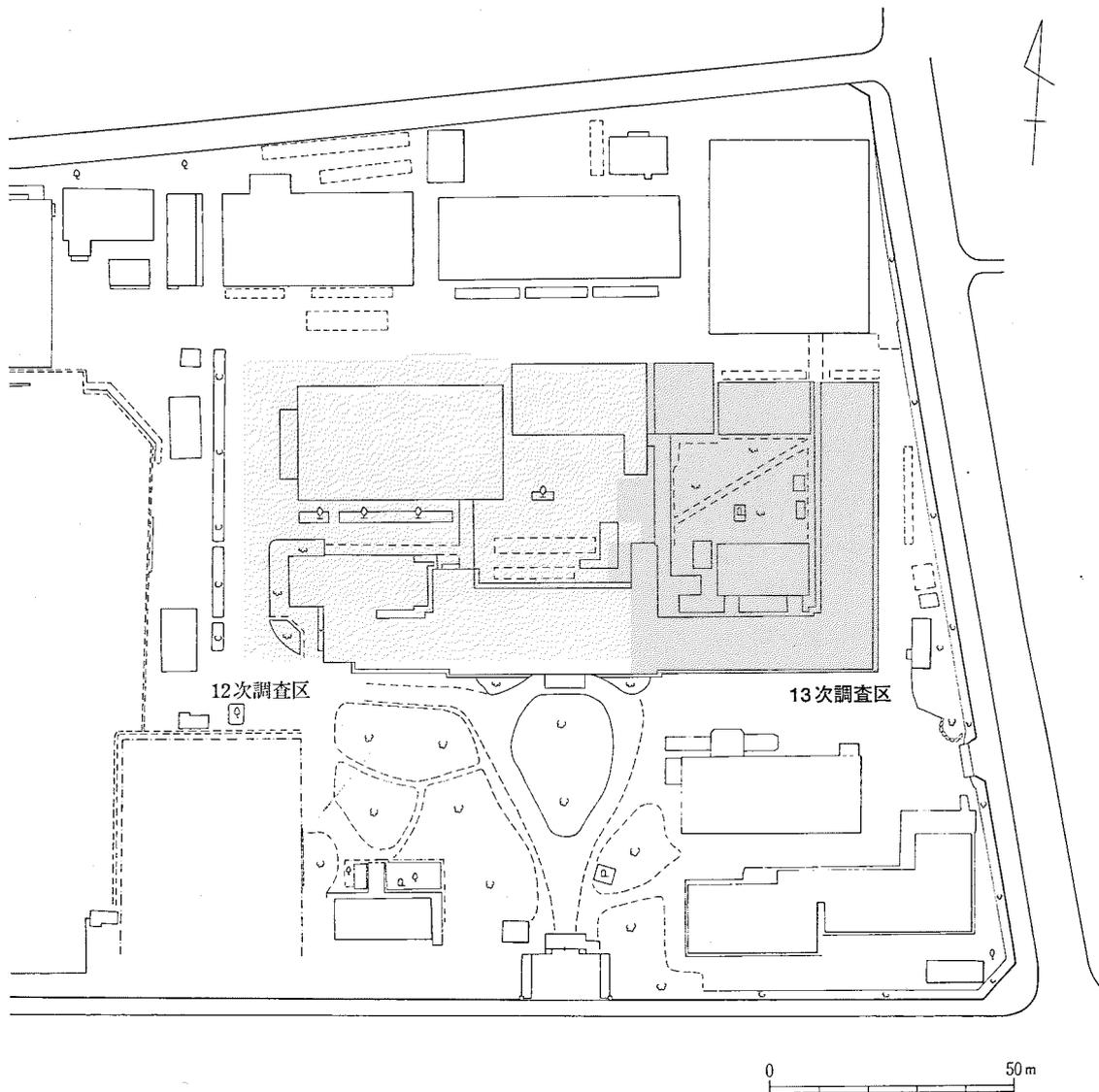
第3章 調査の内容

第1節 調査の概要

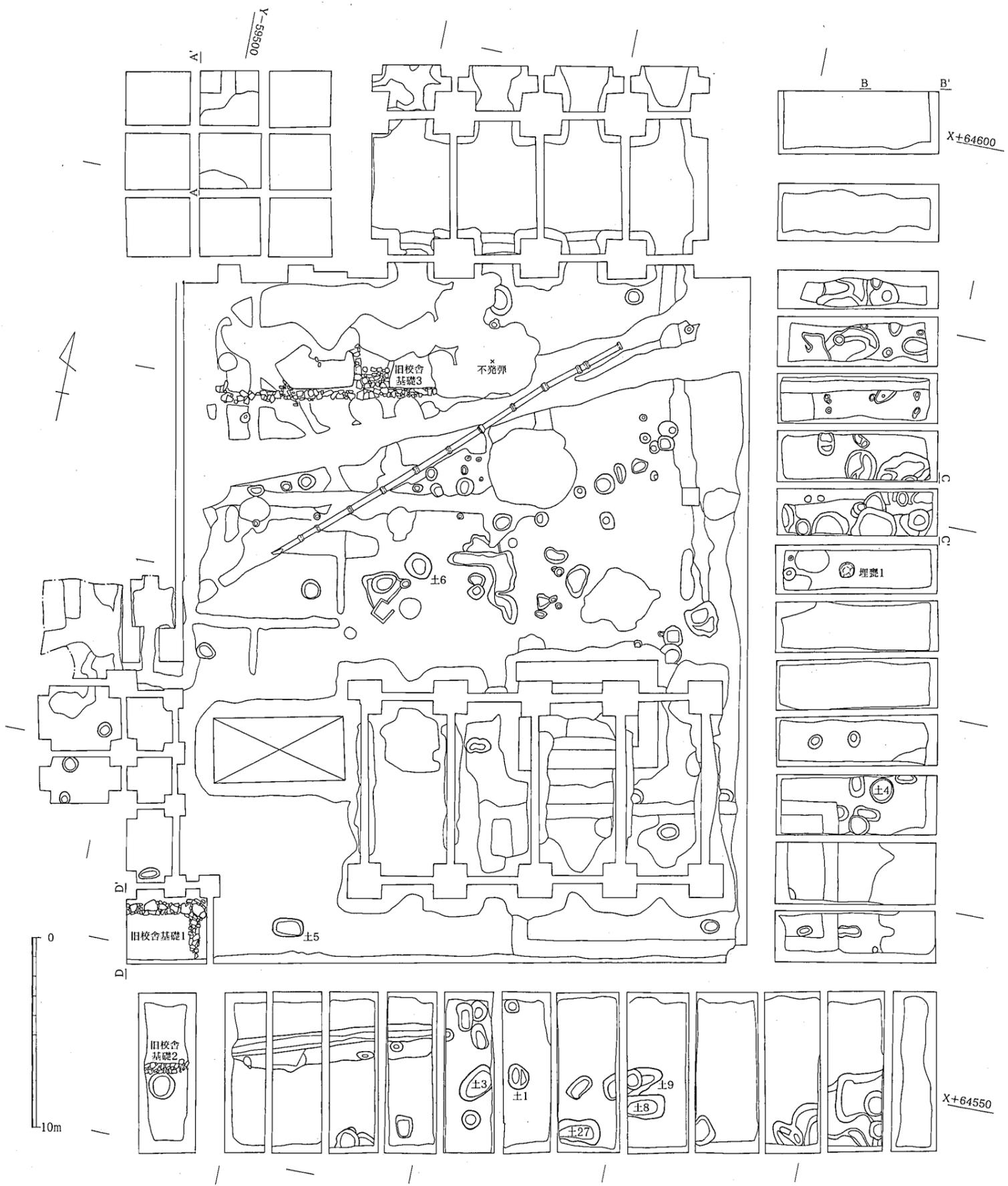
今回実施した第13次調査で検出した遺構は、主として古墳時代前期の竪穴住居跡を中心とする遺構、江戸時代後期の高取焼に関連する廃棄土坑、及び明治～昭和期にかけての修猷館中学・高校に関連した遺構に分かれる。本書はこのうち古墳時代前期の竪穴住居跡と、それから出土した遺物の報告をおこなう。

発掘調査対象面積は約2,800m²。しかしほぼ全面において旧高校校舎の基礎が確認され、この基礎の下及びその周辺は既に攪乱を受け破壊されていたため、実際に表土の掘削を実施し遺構を確認し得た面積は2,043.9m²に過ぎない。その上特に調査区中央は調査以前は校庭の中庭となっていた所であり、数多くの攪乱坑が検出された所である。従って純粋に遺構面を検出し得た面積はこれよりさらに少なくなる。

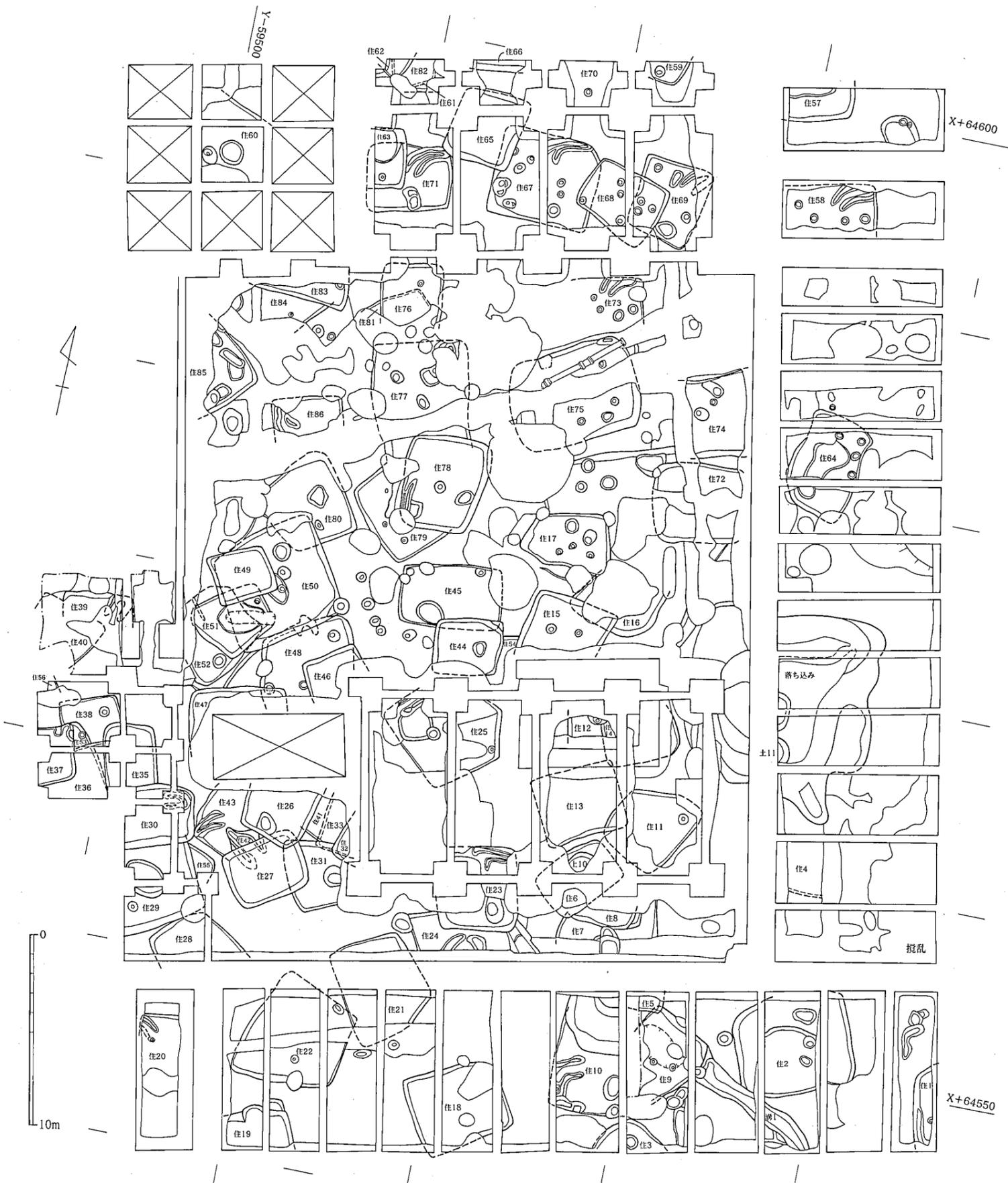
にもかかわらず、古墳時代前期の竪穴住居跡は総数86棟を数える。前回の第12次調査の成果も含



第4図 調査区周辺地形図 (1/1,500)



第5図 西新町13次近世以降遺構配置図 (1/250)



第6図 西新町13次古墳時代遺構配置図 (1/250)

め、付近一帯がいかにか遺構密度が高いかが推し量られる。

調査を開始するにあたり、まず調査区を中央から南北に二分し、南側をⅠ区、北側をⅡ区と呼称した。これは調査区内での廃土処理を考えてのことである。さらに縦横に張り巡らされた校舎基礎を利用し、第7図のように細分調査区割を行った。これは包含層出土遺物を取り上げる際のグリッド代わりに利用した。またこれ以外の場合においても文章中必要に応じて適宜使用している。

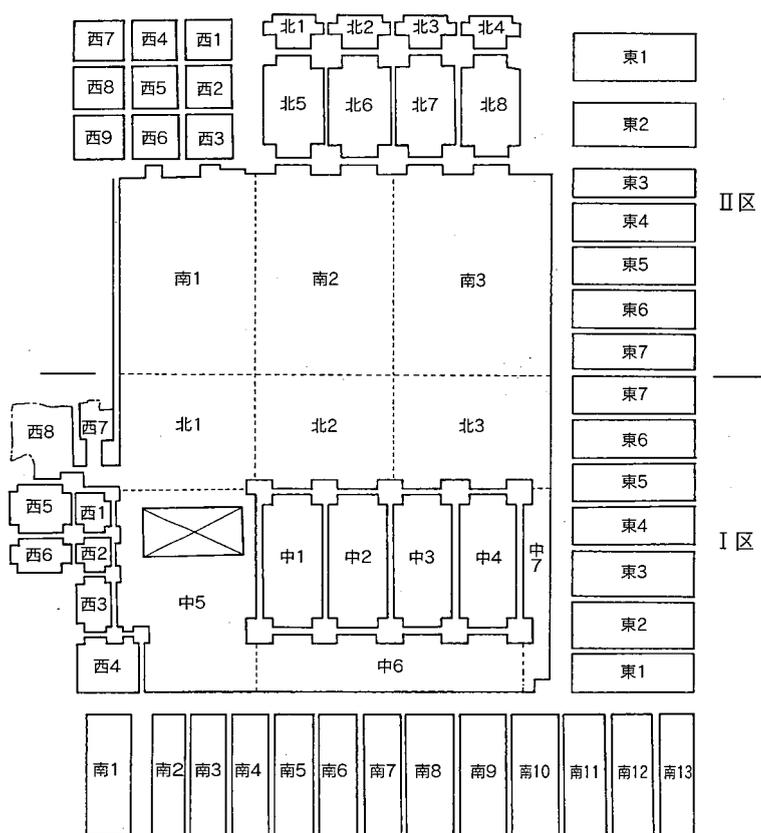
今回の調査区は第12次調査区と位置的に連続しており、当然のことだが古墳時代前期の遺構・遺物についてもほぼ共通した内容である。既往の調査成果も含め、本遺跡の該期集落のほぼ中央にあたるものと思われる

が、その中でも特に第12次調査区の東半部から第13次調査区の西半部にかけてはかなり高密度で竪穴住居跡が分布しており、集落の中心域をなすと思われる。竪穴住居跡の特徴の一つとして、古墳時代前期のものとしては全国的にも稀少なカマド付き住居跡の存在がまず第一に挙げられる。比較的早い段階にカマドが採用されるこの福岡県においても一般に普及するのは5世紀に入ってからであり、本遺跡の特異性を最も顕著に示すものである。ただし、すべての住居跡にカマドが付設されている訳ではなく、依然として伝統的な地床炉を配した同期の住居跡も、少なからず遺跡内に存在するという事もまた興味深い事実である。

これら古墳時代の竪穴住居跡からは、比較的多くの遺物が出土している。出土土器は土師器が9割以上を占めるものの、朝鮮半島に由来する陶質土器、瓦質土器、軟質土器等もまた少なからず出土しており、当遺跡の一つの大きな特徴と言える。これら以外にも玉生産に関する遺物、漁労具なども前回同様出土しており、前述のカマドも含めて朝鮮半島との活発な交流、玉生産、漁労といった当時の生活の一側面をこれらの遺構・遺物から窺い知ることができる。

第2節 基本層序

第8図は第13次調査区の基本土層図である。A—A'は調査区の北西端にあたる。付近は校舎の基礎によって大きく攪乱を受け、遺構面が残っていたのはわずか一部分に過ぎない。土層図を見ると、



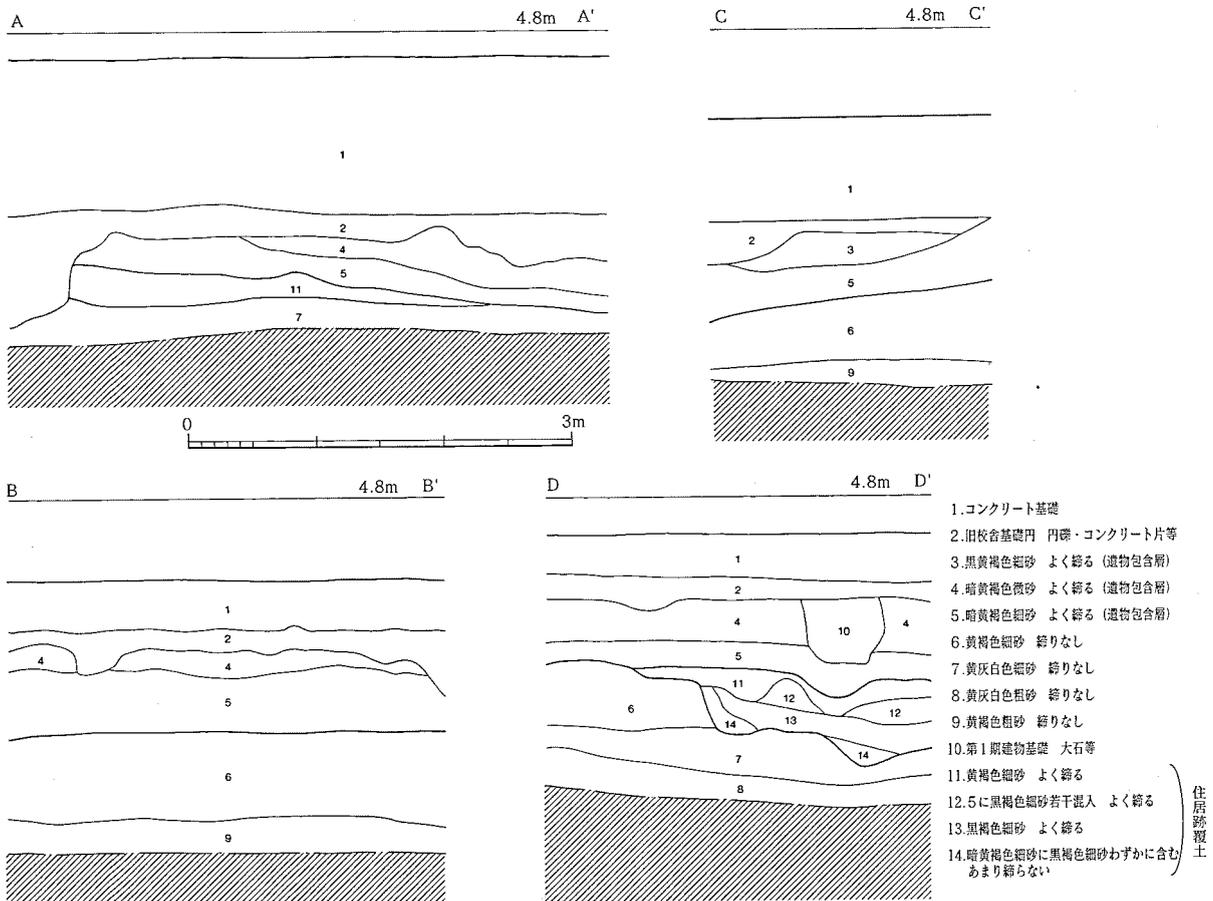
第7図 調査区区割図 (1/500)

最上層は4.6mから3.4mのレベルにわたり、約120cmの厚さの基礎コンクリートが占める。その下層は10cm～50cmの厚さで基礎底部の捨て石が見られる。その下層、第4層の暗黄褐色微砂層・第5層の暗黄褐色細砂層はともに古墳時代の遺物包含層である。第11層黄褐色細砂は遺構覆土だが、攪乱が著しく遺存状況はあまり良くない。第7層は黄灰白色細砂層で遺物を全く含まない。従って11層上面を遺構検出面とした。遺構面のレベルは2.6m前後である。

B—B'は調査区北東端にあたる。最上層の基礎コンクリートはそれほど厚くはなく、25cm程度である。その下層の捨て石は約20cmの厚さを測るが、部分的に深くなる。第4層暗黄褐色微砂層・第5層暗黄褐色細砂層はともに遺物包含層である。第6層黄褐色細砂層は無遺物層で、この上面が遺構検出面となる。遺構面のレベルは2.9m前後。さらにこの第6層の下層には黄褐色粗砂層が堆積する。

C—C'は調査区東端の中央付近にあたる。最上面にはやはり基礎のコンクリートが認められ、約60cmの厚さを測る。その下層は基礎の捨て石で、厚さは10cm～30cm。第3層は黒黄褐色細砂層で、この付近にのみ認められる層である。これもまた遺物包含層となる。その下層は第5層暗黄褐色細砂層となり、第4層は認められない。第6層は無遺物層の黄褐色細砂層で、この上面を遺構検出面とした。遺構面のレベルは2.6m～2.8m。さらにその下層には第9層黄褐色粗砂層が堆積する。

D—D'は調査区南西端にあたる。最上面は基礎コンクリート、第2層は基礎の捨て石である。第4層・第5層は古墳時代の遺物包含層。これらを切り込む第10層は高校校舎以前の建物の基礎で、比較的大きな砂岩割石が充填される。第6層の上面を遺構検出面とした。遺構面のレベルは3.5m前後。その下層は第7層黄灰色細砂・第8層黄灰白色粗砂が堆積する。これらも遺物は全く含まれていない。



第8図 西新町遺跡第13次調査基本層序 (1/60)

第6層に切り込む第11層～第14層は29号竪穴住居跡の覆土である。

遺構面のレベルは調査区の西側が最も高く3.5m前後を測り、東側に向かうにしたがって徐々に低くなる。北端のレベルは2.8m、東端のレベルは2.6m、南端のレベルは2.6mを測る。最も高い位置にある調査区の西側に遺構が集中する。

第3節 古墳時代の遺構と遺物

1. 古墳時代の竪穴住居跡と出土土器

1号竪穴住居跡（図版7、第9図）

I区南13で検出した竪穴住居跡である。大半は調査区外へと続いており、北壁の一部と西壁が検出できたに過ぎない。西壁の長さは3.6mを測り、壁は緩やかに立ち上がる。南西側には幅20cm程度の狭いテラスを有す。床面は中央がやや深くなり、深さは北側で50cm、中央で60cm、南側で50cmを測る。床面の中央からやや南側の位置で、径30cm、深さ20cm程度の小さなピットを1個検出した。

図示した土器のうち、8は遺構上面から出土、他は覆土から出土したものである。出土遺物はそれほど多くない。

出土土器（図版36、第10図）

1は大型の二重口縁壺である。肩部が強く張り頸部は短く外反する。二次口縁部は接合面で剥離している。頸部内面は横ヘラミガキ、肩部内面は器表の剥離が著しいが、細かい縦ハケ目がかすかに観察できる。外面はタタキ、ハケ目の後に粗いヘラミガキを行う。2は小型丸底壺。鉢に近い形状である。ハケ目の後にヘラミガキを行わず、胎土も砂粒をやや含んだ粗製のものである。

3・4は布留系の甕である。どちらも口縁部が弱く内湾し立ち気味に開き、また端部を内側にわずかにつまみ出す。

5は小型器台の受部。立ち上がりは短くわずかに外反し、先端は尖る。内外面ともにヘラミガキを行い、胎土に精良な粘土を使用する精製品である。色調は橙肌色を呈す。

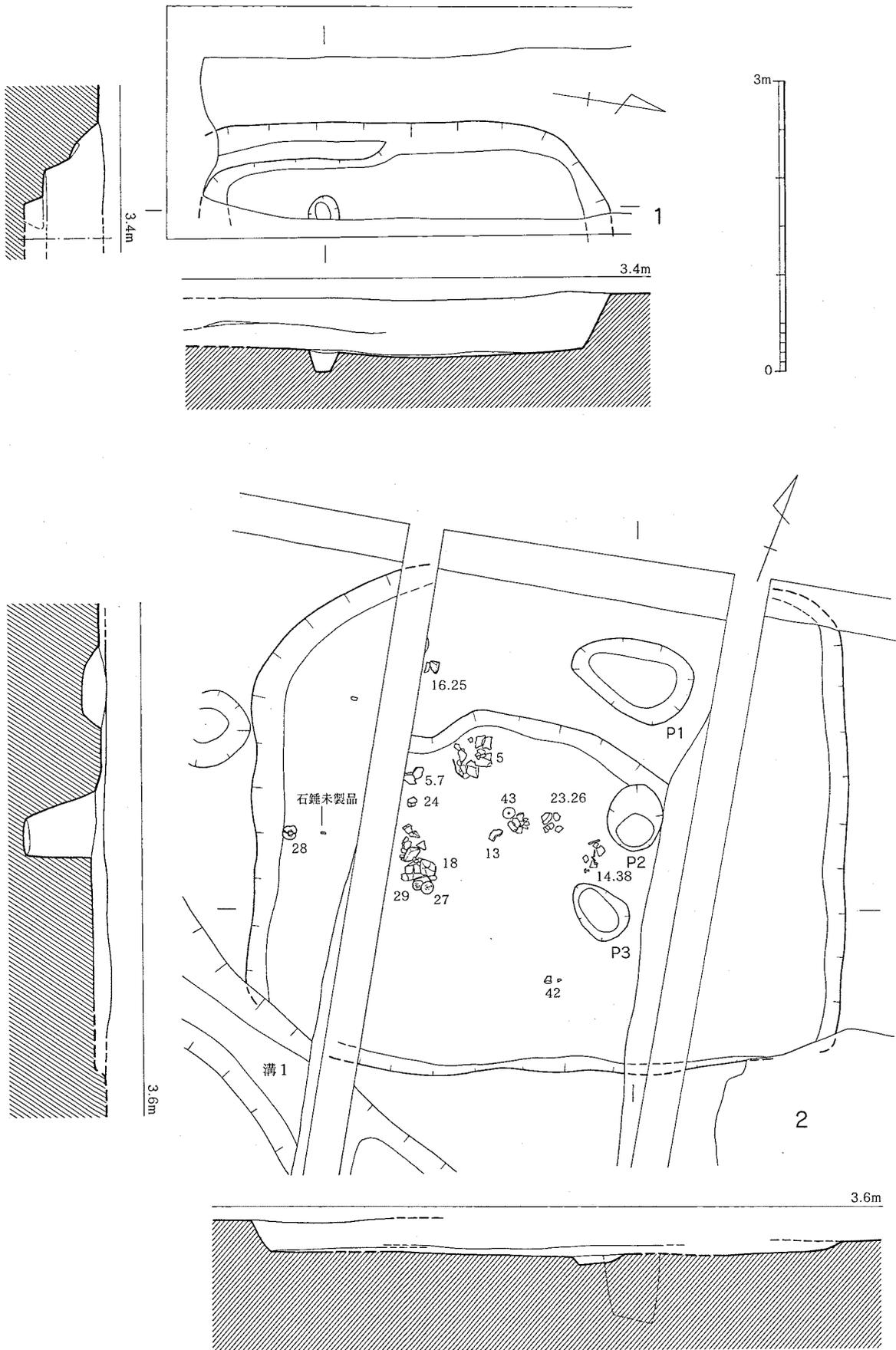
6は蛸壺だが通例よりも器高が低く口縁部が開き、異質である。全面指ナデ調整を行うが、内面には板状工具による縦ナデの擦痕が残る。色調は灰黄褐色を呈す。

7は蓋であろうが類例を知らない。全面ハケ目仕上げで、ツマミ部には整形時の指圧痕が明瞭に観察され、粗雑な感を受ける。胎土に砂粒を若干含み、色調は淡黄灰色を呈す。

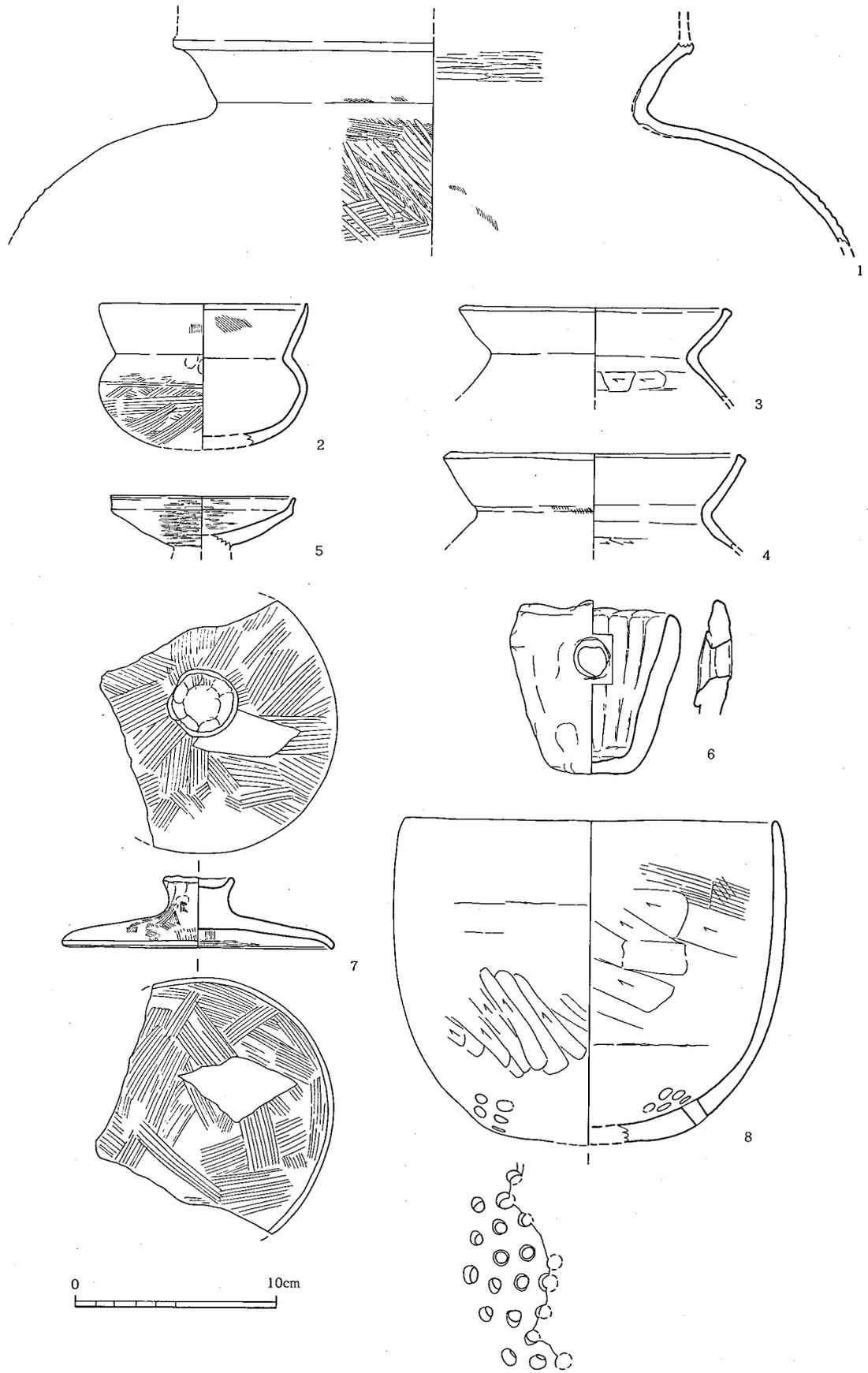
8は半島系の軟質多孔式甕である。把手の有無は不明。底部は平底に近い丸底で、胴部から口縁部にかけて直立し、口縁部はわずかに内傾する。器高は通例よりも低く、鉢形を呈す。口縁端部は丸くおさめる。口縁部は内外面とも横ナデ、胴部内面の中位は斜、横方向のヘラケズリを行うが、口縁部下にはヘラケズリに先行するハケ目が観察される。内底部は不鮮明だがナデであろう。外面は前面ナデの後、下半に幅の狭いヘラナデを行う。内外面に粘土紐の接合痕が残る。底部の蒸気孔は径6～8mmで、底部から胴下端部にかけて同心円状に配置したと思われる。胎土には1mm程度の石英、長石、雲母を若干含み、淡黄褐色を呈す。胎土・色調は土師器に近い。

2号竪穴住居跡（図版7、第9図）

I区南10～12で検出し、1号竪穴住居跡から約3m西側に位置する竪穴住居跡である。南西隅が1



第9図 1・2号竖穴住居跡実測図 (1/60)



第10图 1号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

号溝と重複しており、当住居跡の方が切られている。また北壁及び南東コーナーが校舎の基礎によって攪乱を受ける。しかし全体的には残りが良く、平面形は把握できる。東西にやや長い隅丸長方形で、長さは南壁が6.0m、西壁が4.6mを測る。総床面積は29.7m²を測り、当遺跡の住居跡の中では大型の部類に含まれる。深さは東側で10cm、中央で10cm、西側で25cmを測る。床面の中央北側には約10cm程の不明瞭な段差を形成する。

床面上でP1～P3のピットを検出した。このうちP2については支柱穴として認めて良いと思われるが、これに対応する支柱穴は検出できていない。P1はやや内側にずれるものの、壁際土坑の可能性も考えられる。P1は長軸125cm、短軸80cm深さ25cm。P2は径70cm、深さ70cm、P3は長軸65cm、短軸45cm、深さ10cm。床面硬化等は確認できなかった。

出土土器のうち5・7・13・14・16・18・23・24・25・26・27・28・29・38・42・43は床面直上からの出土。22・37は中央北側の段差を掘削時に出土。他は覆土からの出土である。また有溝石錘、石錘未製品、砥石、鉄鏃が出土している。

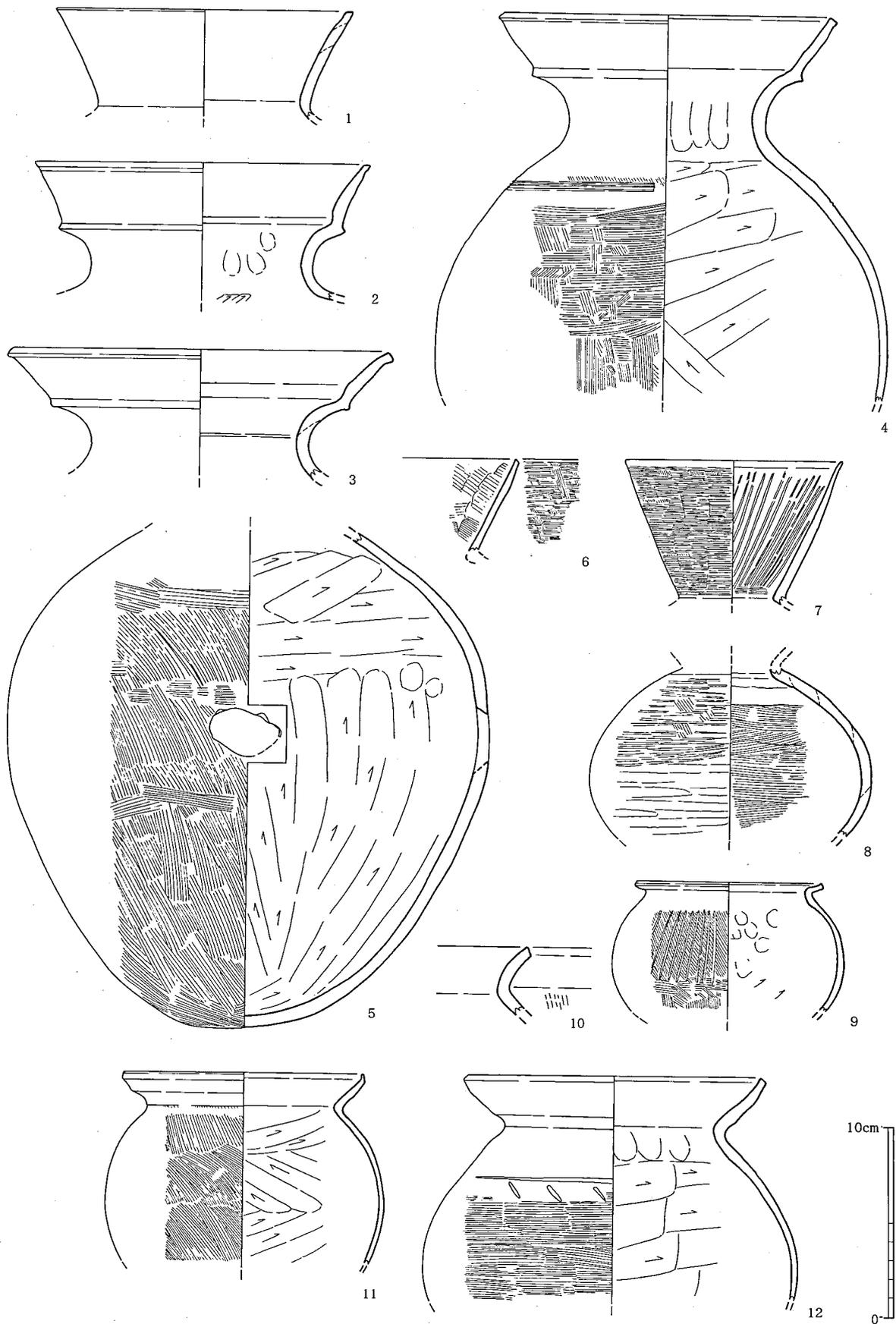
出土土器 (図版36・84、第11～13図)

1～9は壺である。1は布留系の直口壺。口縁部上面がシャープな水平面をなす。2～5は山陰系二重口縁壺。2は口縁端部が水平面をなす。3は口縁外端が肥厚する。4は肩が張らず重心が中位に位置する。胴部上半は横ハケ目の後、縦ハケ目をまばらに行う。下半は縦ハケ目。肩部には2条の沈線を一周させるが端部が接していない。胴部外面に煤が付着し、煮炊きに使用した可能性が高い。5は底部が小さな丸底で胴部最大径が中位よりやや上に位置し、倒卵形となる。最大径の位置に焼成後の穿孔を1ヶ所行う。内面の上半は横ヘラケズリ、下半は縦ヘラケズリを行う。外面は短い縦ハケ目の後に広い間隔をおいて横ハケ目を行う。

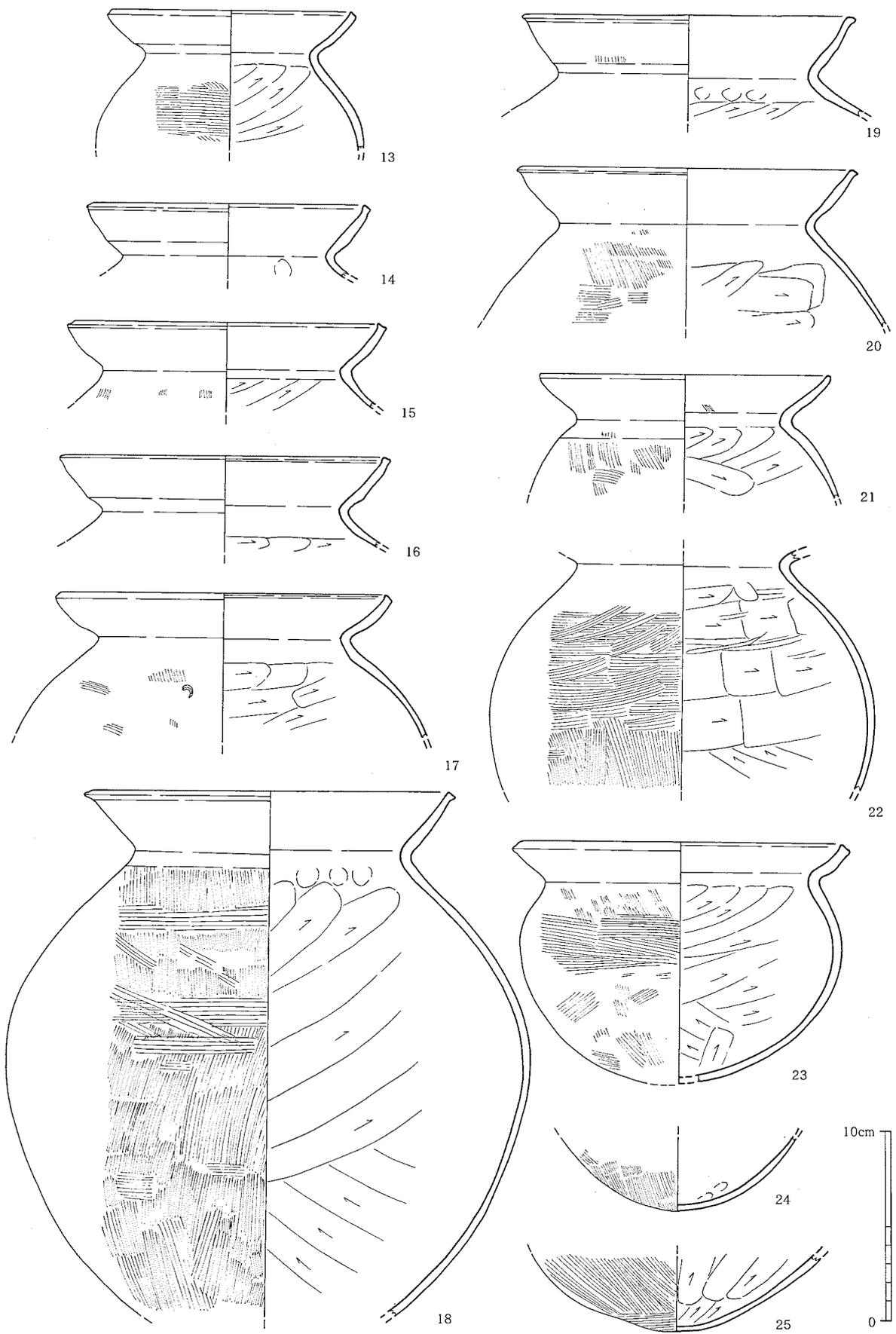
6～8は畿内系の精製直口壺である。6・7の外面は縦ハケ目後に丁寧な横ヘラミガキを行う。7の内面は横ナデ後に暗文状の縦ヘラミガキ。どちらも胎土は精良な粘土を使用し、色調は橙茶色を呈す。8はやや扁平な球形胴で最大径が中位に位置する。内面は横ハケ目調整を行い肩部には接合痕が明瞭に残る。外面の上半は細かい横ヘラミガキで、一部に先行するハケ目が観察される。下半はヘラナデに近い幅広の横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は茶色を呈す。

9は四国東部、讃岐か阿波の土器であろう。壺に含めたが、鉢と称した方が適当だったかもしれない。頸部で強く反転し、口縁部は若干内湾しながら短く開き、端部を上方へシャープにつまみ上げる。胴部内面はヘラケズリの後にナデ消しを行い、肩部付近には指圧痕が認められる。外面はハケ目の後に暗文状の縦ヘラミガキを上半に加える。胎土に含まれる砂粒はそれほど多くなく良質で、色調は茶色を呈す。

10～25は甕である。10は口縁部が外反し、端部がシャープな面をなす。胎土に砂粒を若干含み、色調は暗黄灰色を呈す。11は口縁端部を薄く上方につまみ出すもので、肩部の横ハケ目が見られない。内面のヘラケズリは屈曲部にまで及び、屈曲部内面が明瞭な稜をなす。外面には煤が密に付着する。色調は暗黄灰褐色を呈す。12は布留系甕。口縁部はわずかに内湾して立ち気味に開き、口縁端部は面をなす。肩部に沈線を一条巡らせ、その下にヘラ状工具の小口刺突による列点文を施す。外面の口縁部付近まで煤が付着する。13は肩が張らない器形となる。胴部の径に対して口縁部の径が大きく、口縁端部は上方へとつまみ出している。外面下部は二次被熱のため器表の剥落が著しい。14～17はいずれも口縁部が若干内湾し、端部を上方へとわずかにつまみ出している。色調は黄灰褐



第11图 2号竖穴住居迹出土土器实测图① (1/3)



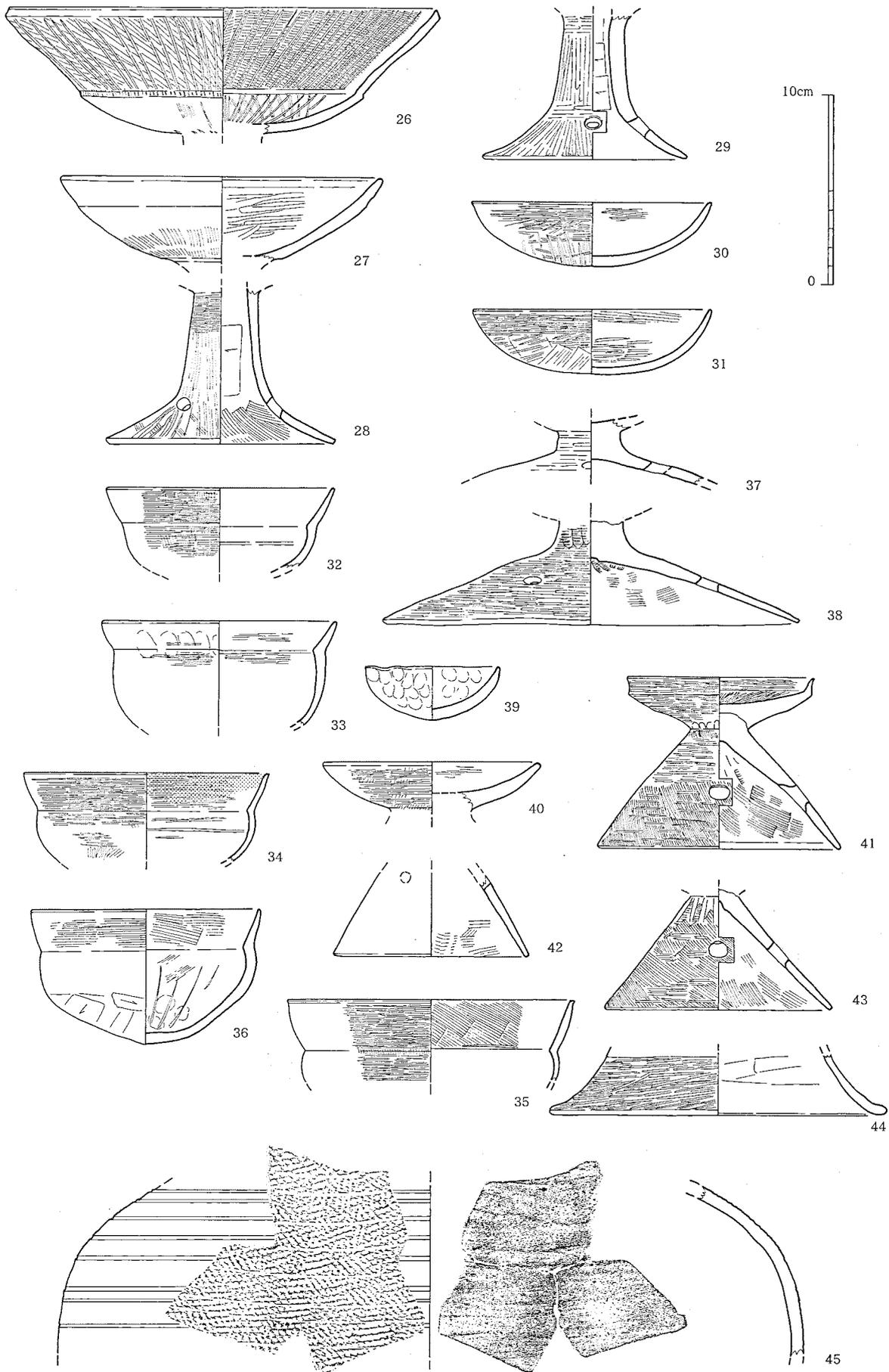
第12图 2号竖穴住居跡出土土器实测图② (1/3)

色を呈し、いずれも外面に煤が付着する。15は内面のヘラケズリを頸部近くまで行う。17は肩部に半截竹管文を一つだけ施す。18～20は口縁端部を外側につまみ出す。18の胴部外面は細い縦ハケ目を全面に行った後、粗い横ハケ目を部分的に施す。胎土は黄灰褐色を呈し、胴下半は二次被熱のため黒変する。19は端部にシャープさを欠き、上面は水平面をなす。21は口縁端部を丸くおさめる。肩に丸味を有し器壁が厚く、ハケ目も雑である。22は胴部最大径が中位に位置し、内面にはヘラケズリの後に行う横方向のヘラ状工具端の擦痕が見られる。色調は暗黄灰褐色を呈す。23は器高が低く鉢に近い形状となるが、二次被熱が顕著で煮炊きに使用したことが明らかである。底部は尖底気味の丸底となるであろう。胴部最大径は中位よりやや上方に位置し、口縁部は短く強く内湾して開く。内端部をわずかにつまみ出す。色調は淡黄褐色を呈す。24・25は甕の底部で、尖底気味の丸底となる。外面には煤が付着する。

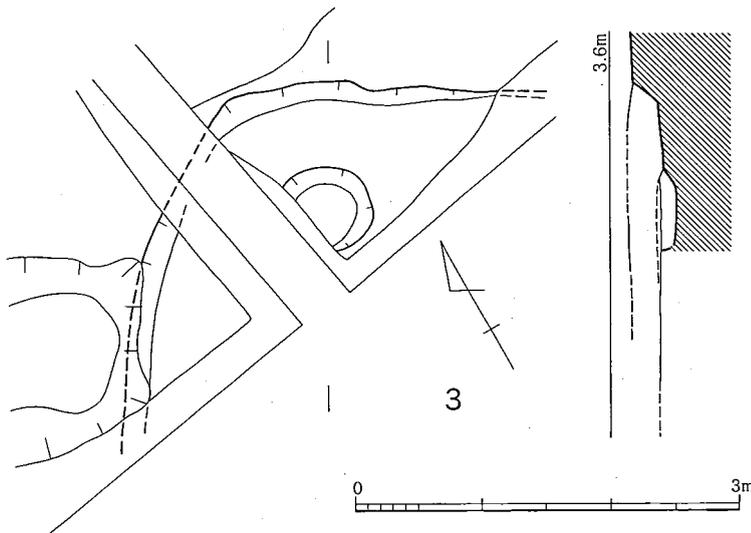
26～29は高坏である。26は在来系の高坏。屈曲部の稜が明瞭である。屈曲部より上は外反し、さらに口縁部付近は内湾する。端部は強い横ナデにより凹面をなす。内外面ともハケ目調整の後に暗文状のヘラミガキを加える。外面のハケ目は特に粗い。内面の反転部以下は斜格子状にヘラミガキを行っており装飾効果を高めている。胎土は高坏にしては少し粗めであり、色調は明茶色を呈す。27・28は接合しないが同一個体である。27は屈曲部をもたないが、口縁部下に強い横ナデを加え凹線状にしている。外面は縦ハケ目の後に上半を横ナデ、内面は幅広の静止横ヘラミガキ。28は柱部上半と下半とでヘラミガキの方向が異なり、上半は横方向、下半は縦方向となる。柱部内面は横ヘラケズリ、裾部内面はハケ目、外面はハケ目後ヘラミガキ。屈曲部に二ヶ所の穿孔が行われる。色調は黄灰色を呈す。29は坏との接合部付近と屈曲部付近に横方向のヘラミガキ調整を行う。それ以外は縦ヘラミガキ。柱部内面は横ヘラケズリ、裾部内面は横ナデ。胎土に砂粒を比較的多く含み色調は肌色を呈す。

30～39は鉢である。30・31は浅い直口縁の精製鉢。内外面ともヘラミガキを最終調整とする。胎土は精良で、色調は30が橙色、31が茶色を呈す。32～36は外反口縁の鉢。32～35は精製品でヘラミガキ調整を行い胎土は精良。34は口縁部内面に油煙に似た煤状物が付着する。36は粗製品である。底部は尖底気味で下半に丸味を帯びず、口縁部は短く直線的に伸び、端部は尖る。器壁が厚く胎土に砂粒を若干含み、精良ではない。口縁部は内外面横ハケ目、体部は内外面ともナデ、外底部はヘラケズリ調整を行う。内面にはナデに先行する指圧痕、ハケ目、その後の縦ヘラナデによる工具痕が残る。37・38は低脚の脚付鉢。37は裾部に穿孔を行うが、孔数は不明。内面は丁寧なナデ、外面は横ヘラミガキ。38は内面ハケ目後ナデ、外面は密な横ヘラミガキを行う。穿孔は三ヶ所。胎土は精良で色調は黄橙色。39は手捏ねの小型鉢で、胎土に砂粒を多く含み黄茶色を呈す。

40～43は精製の小型器台である。40は受け部に立ち上がりがなく、端部を丸くおさめて終えている。調整にはハケ目後横ヘラミガキを行い、胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。41は立ち上がりが短く外反し、端部はシャープに尖る。穿孔は三ヶ所で半乾燥時に外側から穿孔している。受部内面のうち、内底面には放射状のヘラミガキによる暗文を施し、立ち上がりの内面は横ヘラミガキを行う。外面はハケ目後横ヘラミガキ。裾部内面はハケ目後ナデ、外面はハケ目後に上半は緻密な横ヘラミガキ、下半は疎らな横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。42・43は裾部。42はやや粗雑な作りのもので、内外面ともハケ目後にナデを行い、ヘラミガキは施されない。胎土は比較的精良で、色調は黄肌色を呈す。43は内頂部に軸受孔がある。穿孔は二ヶ所に行われる。内

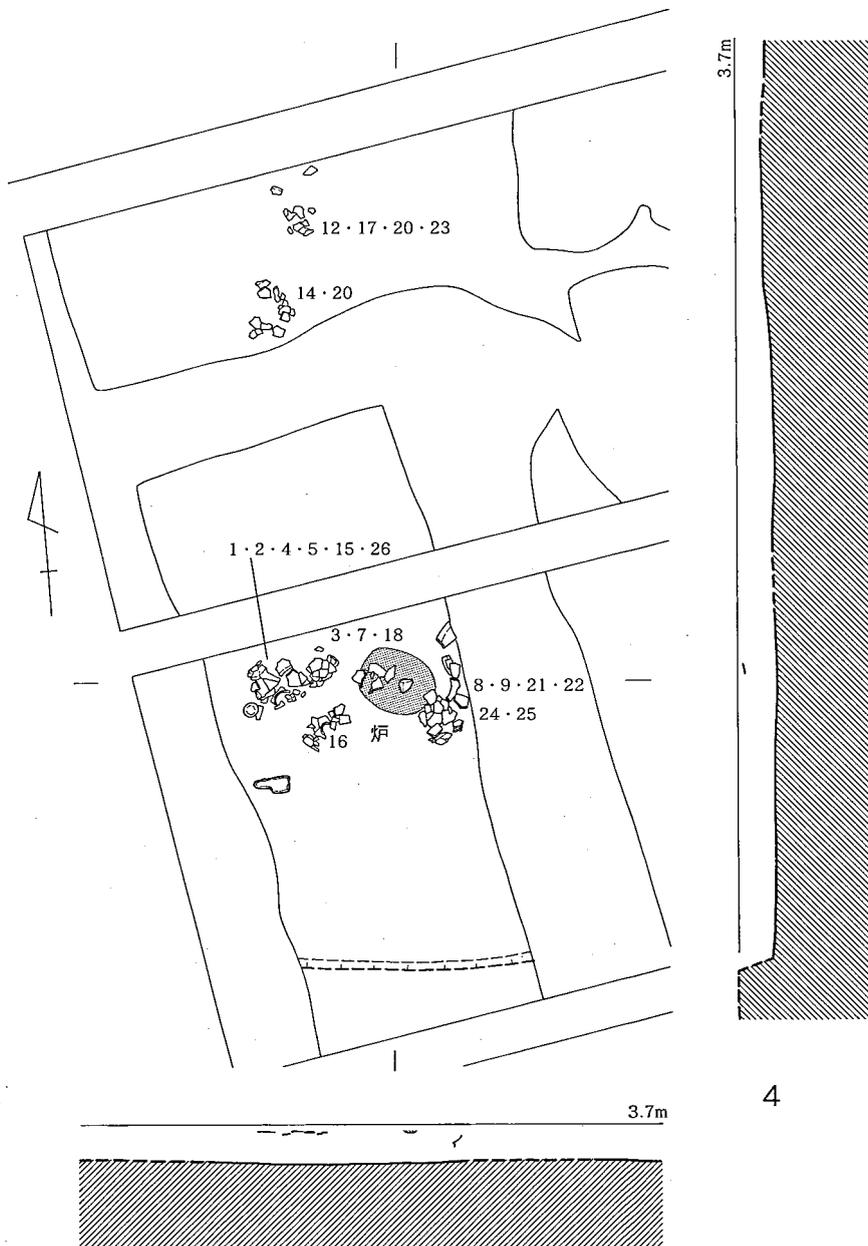


第13图 2号竖穴住居跡出土土器实测图③ (1/3)



面はハケ目後ナデ、外面はハケ目の後に疎らな横ヘラミガキを行う。また上端部には縦ヘラナデが観察される。

44は山陰系器台の脚部。外面は横方向のヘラミガキを行っており珍しい。内面はヘラケズリを行い、端部付近は横ナデを行う。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。



45は半島系陶質土器の壺肩部。内面は横ナデ、外面は小さな斜格子タタキの後平行沈線を巡らす。胎土は砂粒を含まず精良で、色調はやや黄色くくすんだ灰色を呈す。焼成は陶質だが硬質ではなく、どちらかといえば瓦質に近い焼き上がりである。後述する4号竪穴住居跡出土の28と極めて似ており、おそらく同一個体と思われる。

3号竪穴住居跡 (第14図)

I区南8・9で検出した竪穴住居跡である。2号竪穴住居跡から約5m南西側に位置する。大半が調査区外へと続き、また一部を近世の土坑である7号土坑に切られる。検出した部分は北側のコーナー部のみにとどまる。コーナー部の形状から推察すると、平面形は隅丸方形になると思われ

第14図 3・4号竪穴住居跡実測図 (1/60)

る。床面までの深さは25cmを測る。床面上で1つのピットを検出したが、深さは10cm程度に過ぎず、支柱穴の可能性は少ない。基礎で大きく攪乱されるため形状は不明だが、径70cm程度の円形プランになると思われる。遺物は少量出土したものの、図示できるものはない。

4号竪穴住居跡 (図版8、第14図)

I 区東2・3で検出した竪穴住居跡である。2号竪穴住居跡の約5m北側に位置する。上部を大きく削平され、また基礎によってかなりの部分攪乱を受けるため残りが非常に悪く、壁の立ち上がりは全く検出できていない。ただ、炉と思われる径50cm前後の焼面を検出し、その周囲に遺物がまとまって出土したこと、そして床面と思われる範囲が周囲よりやや褐色がかっていたこと等から竪穴住居跡と判断した次第である。従って住居跡の形状・規模等は全く不明である。

出土遺物は比較的豊富である。図示した土器のうち、12・14・17・20・23は北側から一括出土、1・2・3・4・5・7・8・9・15・16・18・21・22・24・25・26は南側から一括出土した。

出土土器 (図版37・38・84、第15～17図)

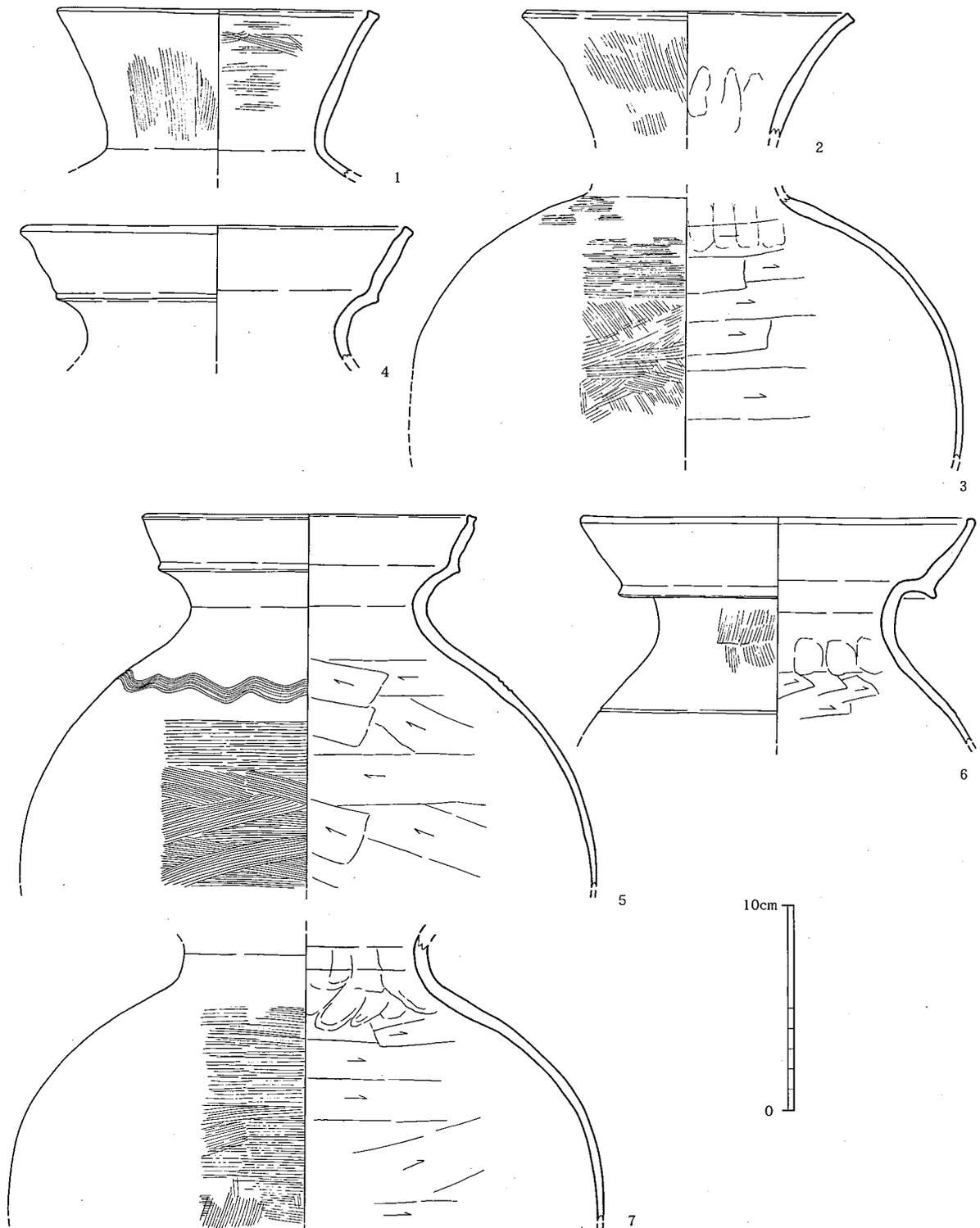
1～7は壺である。1・2は直口壺。1は口縁端部を内側に明瞭につまみ出している。内外面横ナデを行うが、これに先行するハケ目が観察される。肩部には赤色顔料を塗布するが口縁部には行われていない。色調は黄灰褐色を呈す。2は接合しないが3と同一個体である。頸部付け根が締まり、口縁部は外反して大きく開き、端部はシャープな面をなす。3の胴部は丸く肩が張る。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。

4～7は山陰系二重口縁壺である。4は一次口縁部の外反度が弱く、また屈曲部外側の突帯は低い。口縁部は直線的に開き、端部は内端をわずかにつまみ出す。5は胴部の径に比べて口縁部の径が小さい。二次口縁部はあまり開かず立ち上がり、端部付近のみ内湾している。口縁端部は内側を丸くつまみ出し、上端部は凹線状に窪む。肩部には4条を一単位とする櫛描波状文を巡らす。胴部の細かいハケ目と、これに先行する回転ハケ目とは工具が異なる。色調は黄灰褐色を呈す。6は一次口縁部の外反度が強く、ほぼ水平にまで開く。外面の突帯は垂下する。二次口縁部は直線的に開き、内端部を肥厚させる。肩部には一条の沈線を巡らせている。色調は灰褐色を呈し胎土は他と異ならない。7は肩が丸く張った器形となる。頸部内面には縦方向の指ナデが顕著に残る。内面は茶灰色、外面は黄灰褐色を呈す。

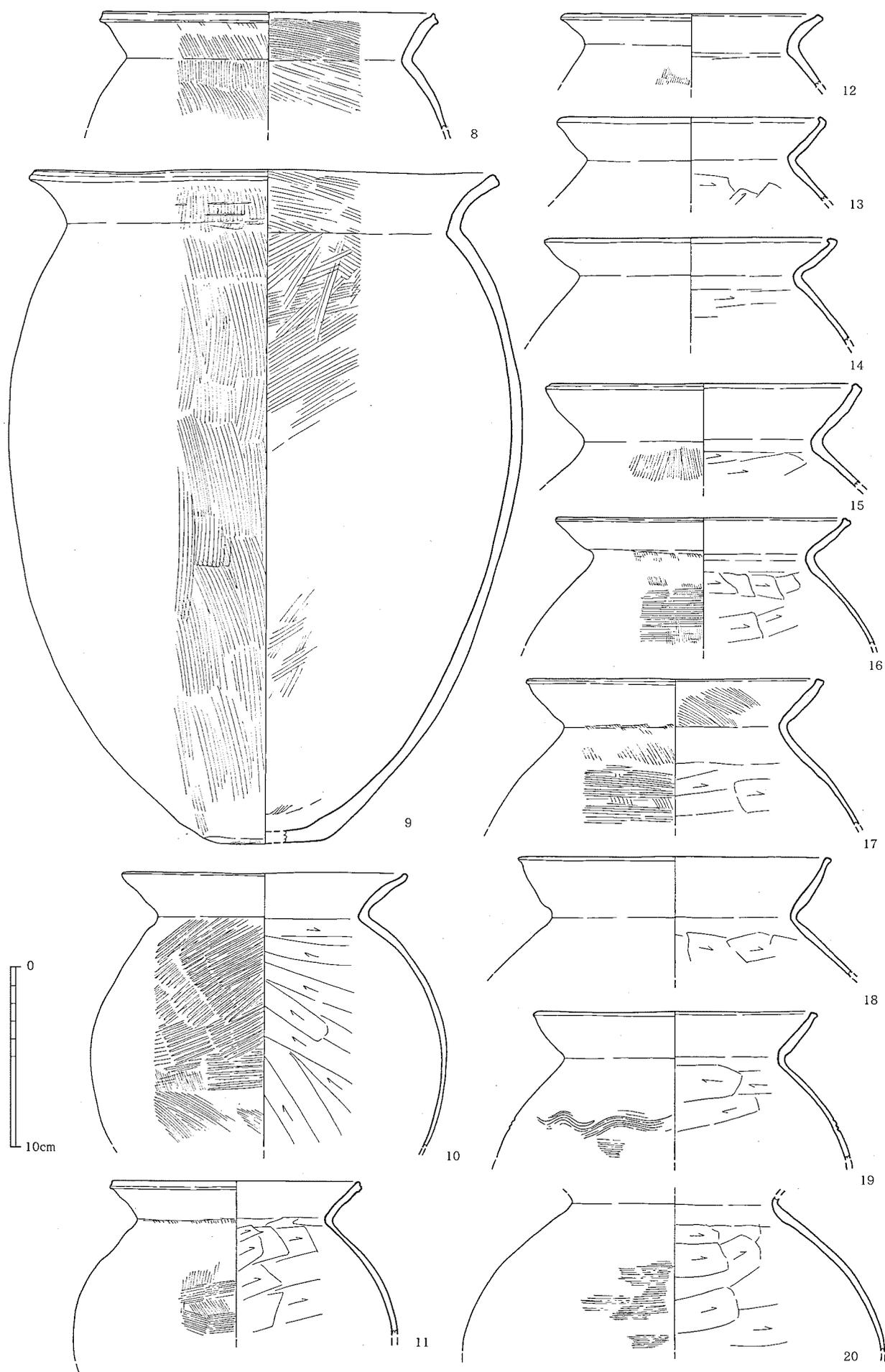
8～20は甕である。8・9は在来系の甕。8は口縁部が外反しながら開き、端部は強い横ナデを加えて凹面をなし、また上端部をつまみ上げ気味にする。屈曲部内面は明瞭な稜をなす。内外面ともハケ目調整を行う。胎土には砂粒をやや多く含み、やや黄色味を帯びた茶灰色を呈す。9は長胴でレンズ状の底部となる。口縁部は8同様やはり緩やかに外反し、屈曲部内面の稜は鋭い。内外面ハケ目調整を行うが、内面下半はハケ目の後にナデている。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。外面のほぼ全体に煤が付着するが、特に底部から10～25cmの所は強い二次的加熱を受けている。このような煤の付着のしかたは底部を地中に埋めた、炉での使用を想定させる。

10は右上がりのタタキ目をもつ庄内系の甕。タタキは下から上へ反時計回りに行う。下半はタタキ後にハケ目調整。口縁部は緩く外反し、端部を丸くおさめる。内面のヘラケズリは屈曲部にまで及んでおり、屈曲部内面の稜は鋭い。胎土に細砂粒をやや多く含むが、肉眼での観察では砂質に他の布留系甕と異なる点は認められない。色調は黄灰褐色を呈し、胴部に黒斑を有す。下半は二次加

熱を受け赤変し、また一部器表が剥離する。11は口縁部が外反気味に開く甕。口縁上端は尖り気味に仕上げ、下端はかすかに丸く肥厚する。外面は不明瞭ながらハケ目が観察され、内面は屈曲部近くまでヘラケズリを行う。屈曲部内面の稜は鋭くない。器壁は総じて薄く、胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。12は口縁部が外反し、端部は面をなすがシャープさに欠ける。胴部内面のヘラケズリは屈曲部下まで行われるが、屈曲部の稜は弱い。胴部外面にはかすかにハケ目が観察される。胎土に砂粒を若干含み、色調は肌色を呈す。器壁は厚い。



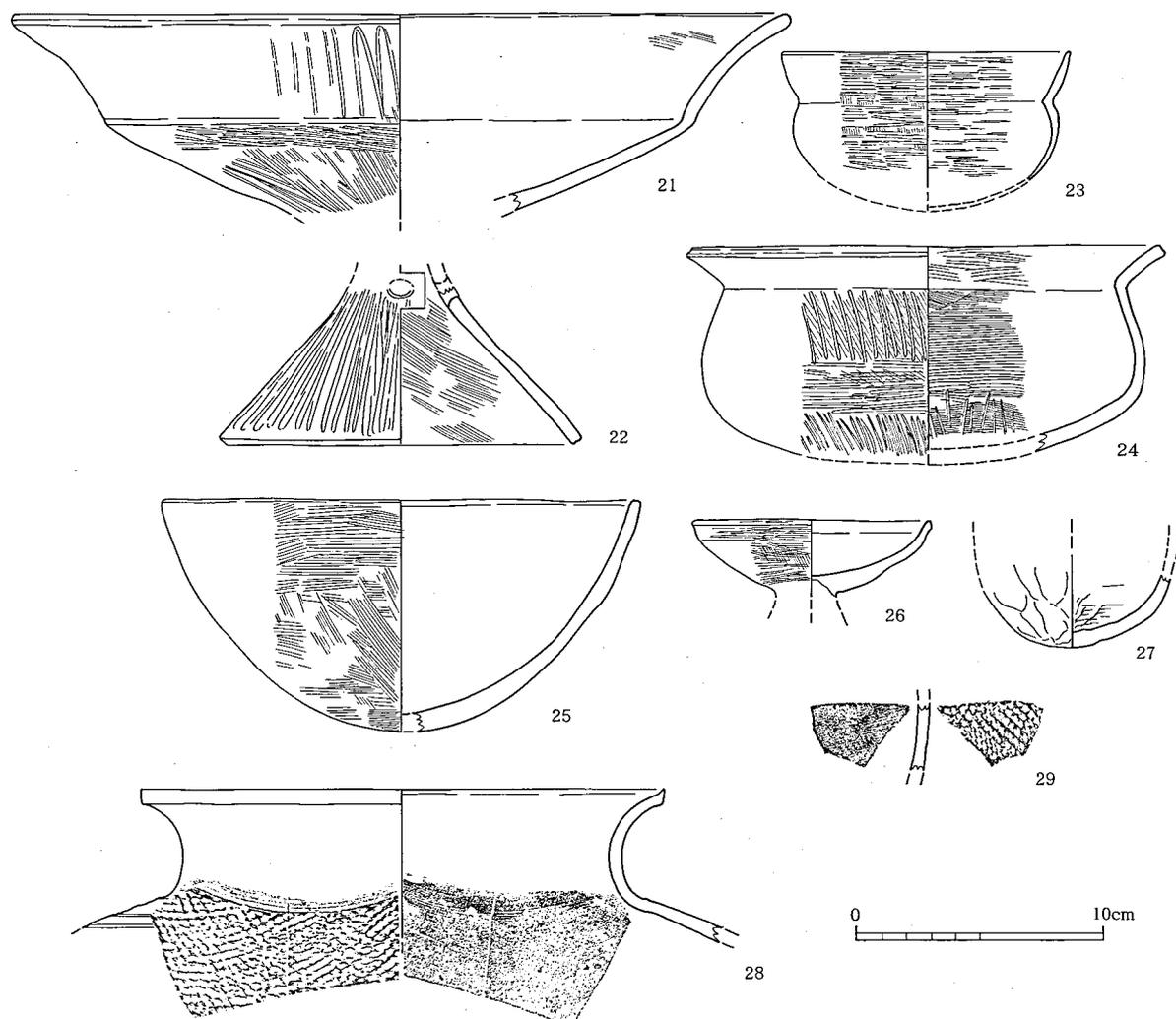
第15図 4号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/3)



第16图 4号竖穴住居跡出土土器実測図② (1/3)

13~20は布留系甕。13は口縁部内端の丸いつまみ出しが特徴的である。肩部は直線的となる。色調は黄灰褐色を呈し外面には煤が付着する。14も13と同様口縁部内端が丸くつまみ出される。上面は水平に近い。内面のヘラケズリは屈曲部に近い。15は口縁部内端が丸く肥厚気味につまみ出される。内面のヘラケズリは屈曲部近くまで行われる。色調は黄灰褐色を呈し、外面に煤が付着する。16も15同様口縁部内端を丸く肥厚気味につまみ出す。内面のヘラケズリも屈曲部に近い。色調は黄灰褐色を呈す。17は端部が水平に近い面をなす。口縁部内面には横ナデに先行するハケ目が明瞭に残る。色調は黄灰褐色を呈し、口縁部の外面のみ煤が付着する。18は口縁部が立ち気味に開き、端部は丸味を帯び、わずかに外端を肥厚させる。肩部は直線的で丸味がない。色調は肌色を呈す。19も口縁部端部に丸味を有し、肩部には櫛描波状文を巡らせる。内面のヘラケズリは屈曲部近くまで行われる。二次被熱が著しく色調は黒灰色を呈す。20は肩部に丸味が少なく、頸部は比較的良好に締まる。色調は黄色の強い黄灰褐色を呈す。外面は風化が著しいが、かすかに横ハケ目が観察される。

21・22は在来系の高坏である。21は屈曲部外面に明瞭な稜を有し、上半は大きく外反する。端部は丸くおさめられる。外面はヘラミガキで、特に上半は暗文状の縦ヘラミガキを施す。内面は器表の剥離が著しく調整不明。一部にハケ目がかすかに認められる。胎土は比較的良好、色調は茶灰色を呈す。22は柱部が細く、裾部は直線的に伸び、あまり開かない高い裾部となる。端部は面をなす。内面ハケ目、外面縦ヘラミガキを行う。胎土は比較的良好、色調は肌茶色。21と22は恐らく同一個体。

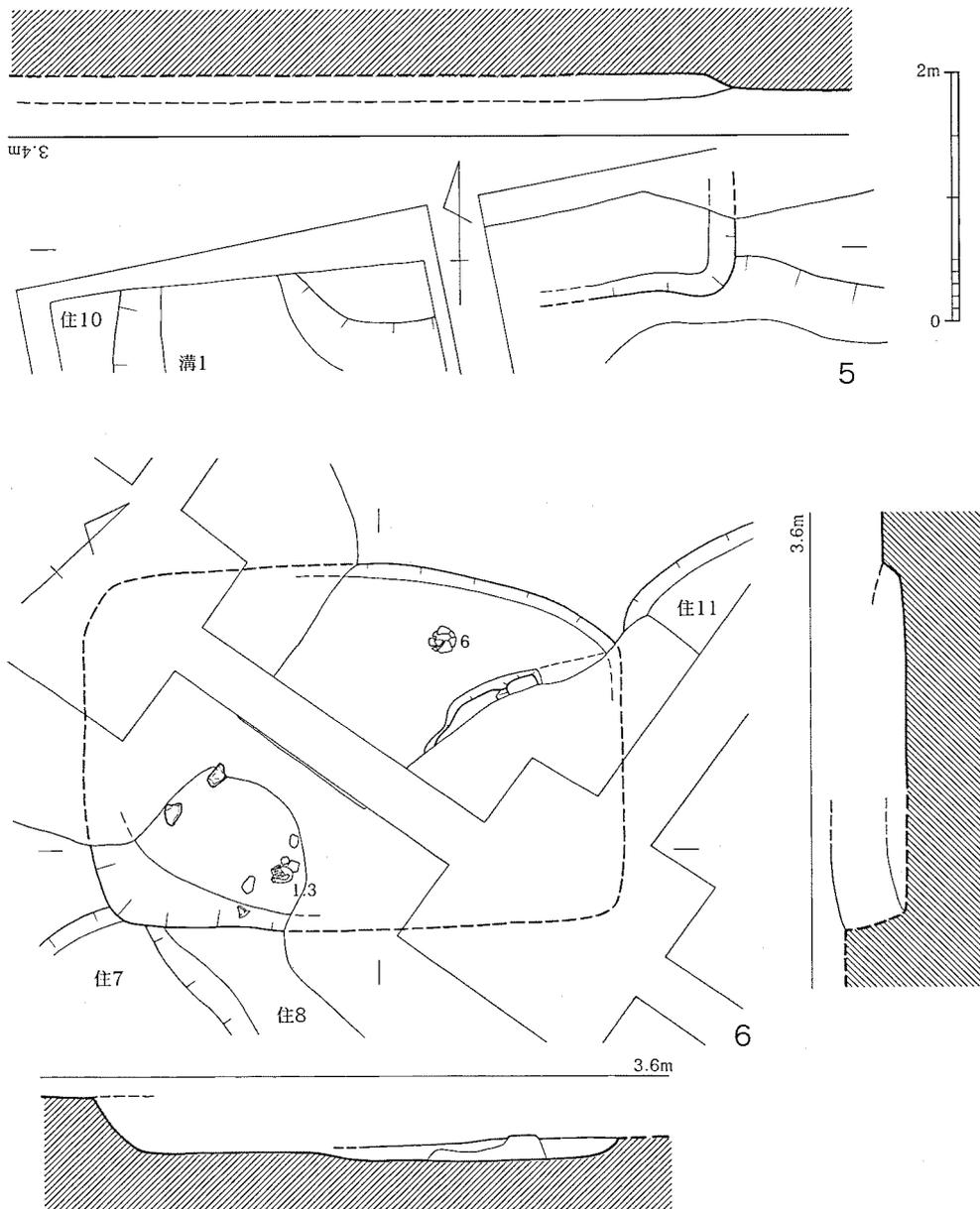


第17図 4号竪穴住居跡出土土器実測図③ (1/3)

23~25は鉢である。23は精製の小型鉢。口縁部は若干内湾しながら開き、屈曲部内面の稜は鋭い。内外面に丁寧な横へらミガキを行い、胎土も精良である。色調は橙茶色。24は外反口縁の中型鉢。体部は最大径が下方にあり、下膨れの器形となる。体部上半は内傾する。口縁端部は強い横ナデによる凹面をなす。内外面ともハケ目の後にへらミガキ調整を行い、胎土も比較的精良な粘土を使用した精製品である。色調は橙茶色を呈す。25は尖底気味の直口縁の鉢。口縁端部は平坦面をなす。内面ナデ、外面ハケ目調整を行い、胎土に砂粒を多く含む。二次加熱を受けており外面が黒変し、また煤が付着する。

26は小型器台の受部である。わずかに外反する立ち上がりが認められるが、屈曲部は明瞭ではなくほとんど一体化している。外面はハケ目後に細かい横へらミガキを行う。内面は風化が著しく調整不明。胎土は精良で色調は橙肌色を呈す。27は蛸壺の底部である。底面は尖底気味の丸底となる。外面は指ナデ、内面も指ナデだが一部工具痕が観察される。

28・29は半島系土器である。28は陶質の壺である。口縁部が強く外反し、端部は上方に尖る。口



第18図 5・6号竖穴住居跡実測図 (1/60)

縁部の作りは非常にシャープである。口縁部は内外面横ナデ、胴部は内面横ナデ、外面は小さな斜格子タタキの後沈線を巡らす。胎土に砂粒を含まず精良な粘土を使用しており、色調は黄色くくすんだ灰色を呈し、焼成はそれほど良くなく瓦質に近い。先述した2号竪穴住居跡出土の45は接合しないが恐らく同一個体であろう。7号竪穴住居跡から出土した破片とは接合した。他にも同一個体と思われる破片が1号溝上層や落ち込み、攪乱等から多く出土している。

29は瓦質土器の体部片である。内面ナデ、外面斜格子タタキ。胎土は比較的精良で、色調は内面黄灰色、外面黒色を呈す。

5号竪穴住居跡 (図版8、第18図)

I区南9で検出し、3号竪穴住居跡から6m程北側に位置する竪穴住居跡である。10号竪穴住居跡、1号溝と重複しており、これらから切られている。大半が攪乱を受けており検出したのは南東隅の一部に過ぎない。コーナーがほぼ直角に曲がることから竪穴住居跡としたが不明な点も多く、竪穴住居跡ではなく土坑状のものであった可能性も残る。床面までの深さは20cm。出土遺物はほとんど無く、図示できるものはない。

6号竪穴住居跡 (図版8、第18図)

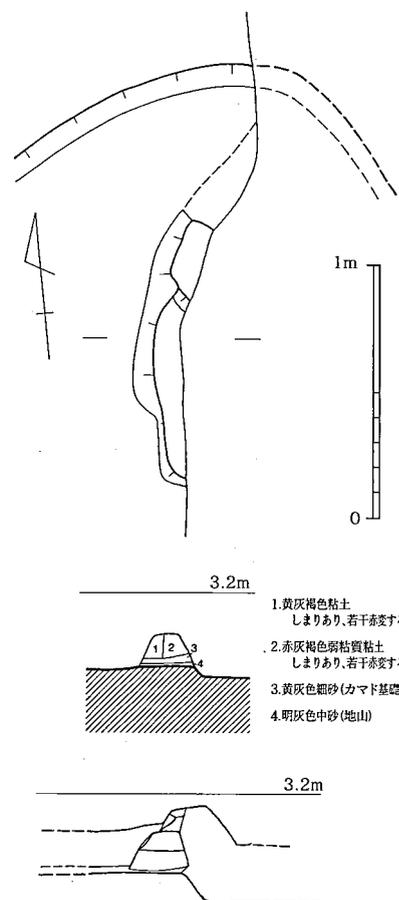
I区中3、I区中6で検出した竪穴住居跡である。5号竪穴住居跡から約5m北西に位置する。7・8号竪穴住居跡と重複しており、新旧関係では当住居跡が最も新しい。校舎の基礎によって大きく攪乱を受けるが南側のコーナー及び北壁の一部が遺存しており、おおよその形状は推定できる。長軸4.2m、短軸2.9mの隅丸長方形に復元でき、中型の部類に含まれる。南側のコーナー付近は比較的残りが良く、床面までの深さは45cmを測る。しかし北側は深さ15cm程度に過ぎない。北側のコーナー部ではカマドを検出している。

6号竪穴住居跡カマド (第19図) 校舎の基礎によって大きく攪乱を受け、左袖の一部のみがかろうじて残存しているに過ぎない。北側コーナーに位置し、対角線上にまっすぐ伸びるタイプとなるだろう。残存する長さは110cm、最大幅は30cm、最も残りの良い部分で高さ25cmを測る。カマドの構築土には黄灰褐色粘土を使用し非常に硬く締り、また強く熱を受けて赤変する。

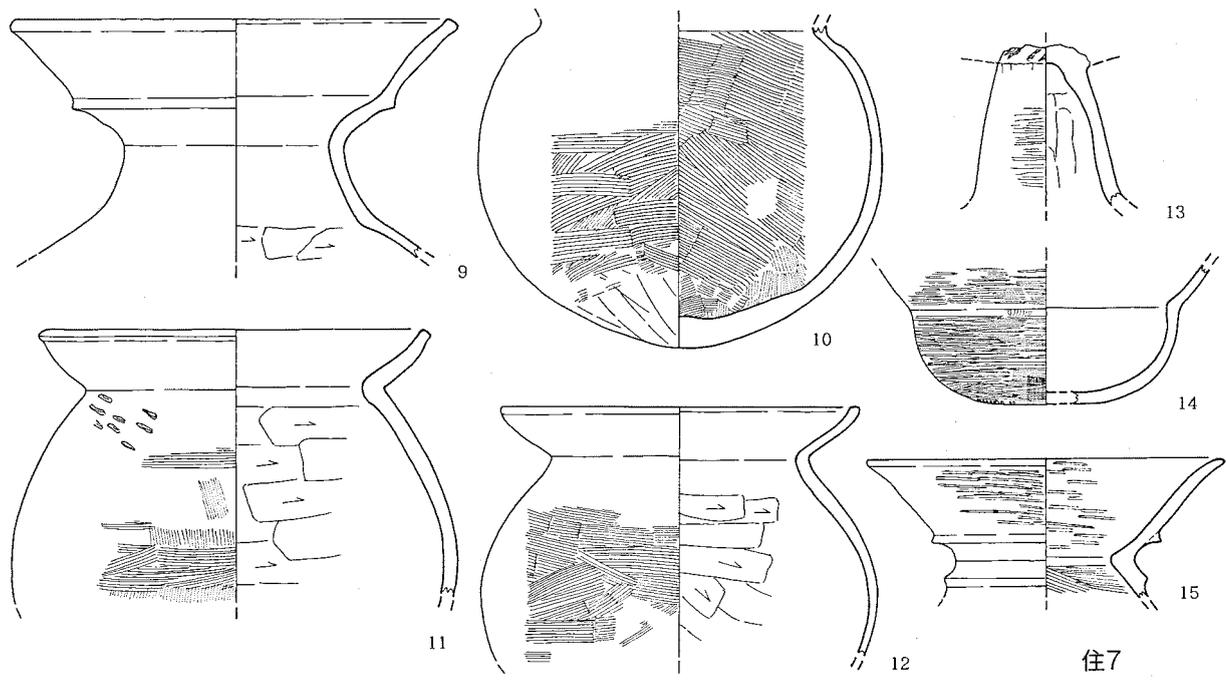
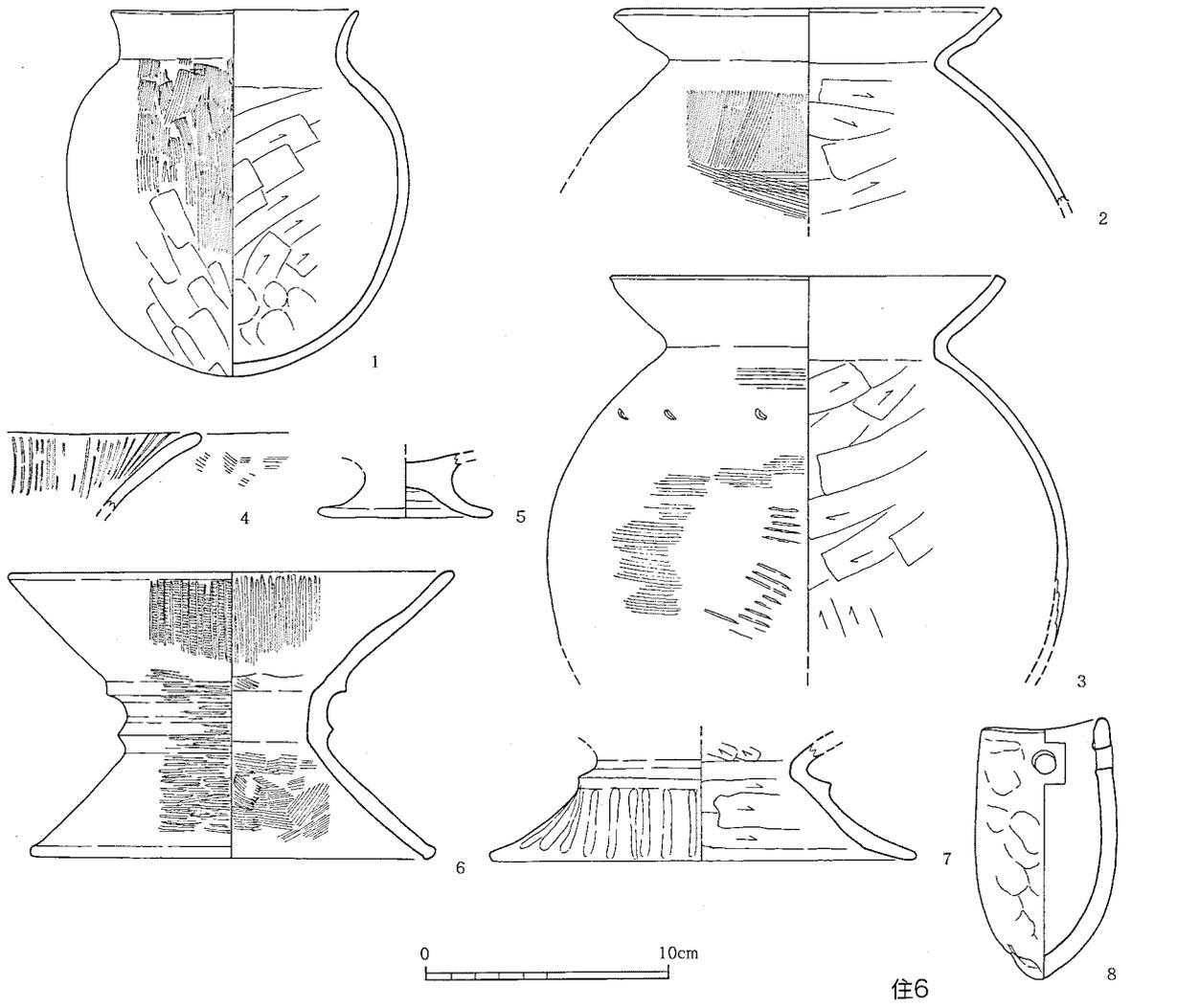
出土遺物のうち、6は北側の床面直上から出土、4・5・8は北側の覆土から出土、1・3は南側の床面直上から出土、それ以外は南側の覆土から出土した。

出土土器 (図版38・39、第20図)

1~3は甕である。1は底部が丸底で胴部はやや縦に長く、最大径が中位よりやや上に位置する。口縁は若干外反し、端部を丸くおさめる。内面へラケズリ、外面は上半縦ハケ目、下半へラケズリ。全体的に器壁が厚く調整も雑である。二次被熱は認められな



第19図 6号竪穴住居跡カマド
実測図 (1/30)



第20图 6·7号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

い。胎土・色調は一般的な布留系甕と大差ない。2・3は布留系甕。どちらも内面のヘラケズリは屈曲部近くまで行う。3の胴部はハケ目に先行するタタキが認められ、肩部には列点文を巡らせる。色調は黄灰褐色を呈し外面には煤が付着する。

4は高坏の坏部片。内面は縦方向の暗文、外面はハケ目の後横ヘラミガキを行う。胎土に砂粒を若干含み、色調は肌茶色を呈す。5は脚付鉢の脚部。裾が短く外反し、端部は丸くおさめる。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。

6・7は山陰系鼓形器台。6はハケ目と細いヘラミガキで調整を行っており、特異である。色調は肌灰色を呈し、器表の全面に橙色の化粧土を塗布する。7は脚部。内面はヘラケズリ、外面は横ナデの後に幅の広い暗文を縦方向に行う。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。8は底部が尖底の蛸壺である。体部は通例よりも細い。内面は丁寧なナデ、外面は指圧痕が明瞭に残る。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。

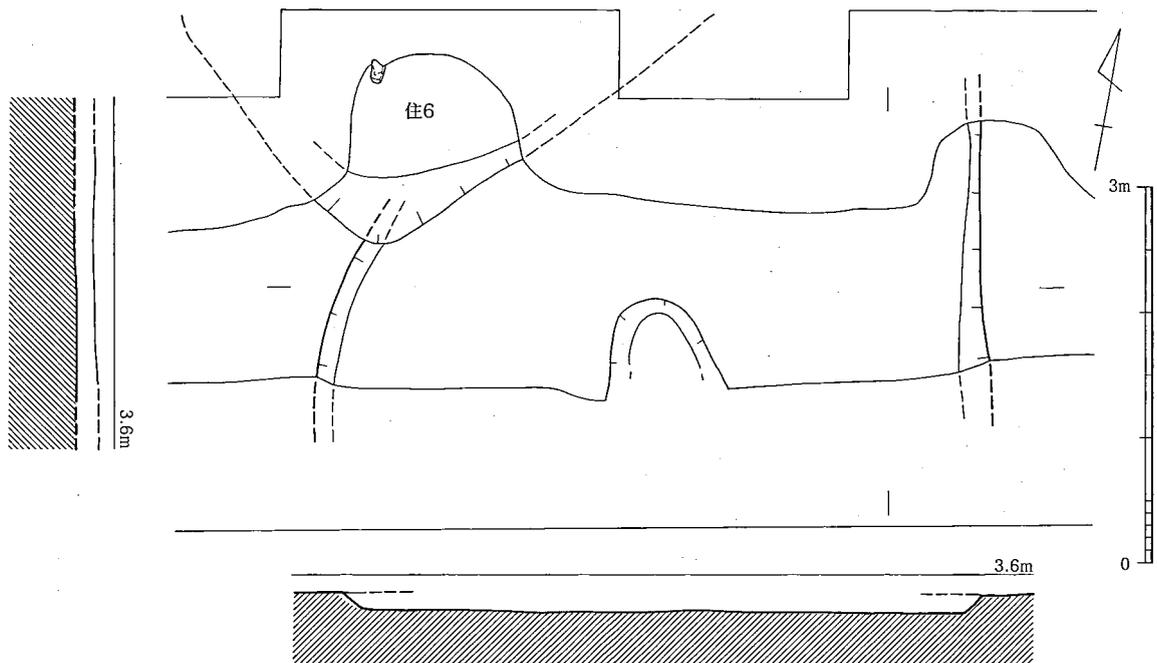
7号竪穴住居跡 (図版9、第21図)

I区中6で検出した竪穴住居跡である。6号竪穴住居跡の南側に位置する。6・8号竪穴住居跡と重複し、6号竪穴住居跡よりも古く8号竪穴住居跡よりも新しい。攪乱や後世のピットによってかなりの部分が失われており正確なプランの把握は出来ないが、恐らく他の例と同様方形に近いプランとなるだろう。ただし遺存する東壁と西壁とが併行しておらず、かなり歪んだ方形プランとなる。東壁から西壁までの距離は5.3mを測り、比較的大型の部類に含まれる。床面までの深さは15cm前後で、床面はほぼ水平となる。床面上では当住居跡に伴うピット等は検出していない。

残りが悪かったため出土遺物は多くない。図示した出土土器は覆土からの出土である。

出土土器 (図版38・39、第20図)

9は山陰系二重口縁壺である。頸部下半は直線的に内傾し、上半のみが外反する。二次口縁部は直



第21図 7号竪穴住居跡実測図 (1/60)

線的に開き、端部は丸味を帯びる。色調は黄灰褐色を呈す。

10～12は甕である。10は球形胴を呈し壺に近い形状だが、強い二次加熱を受け器表が剥離しているため甕とした。内外面ハケ目調整を行い、外底部は雑なヘラナデを行う。胎土に砂粒を若干含み、色調は暗赤褐色を呈す。11・12は布留系甕。11は器壁が厚い。口縁部は内湾して開き、外端部を丸くつまみ出す。肩部の一部にのみ列点文を施文する。色調は暗黄灰色を呈す。12は口縁部が直線的に開き、端部付近のみ内湾する。口縁端部は水平面をなし、内端をわずかにつまみ出す。屈曲部内面の稜は比較的明瞭である。内面はヘラケズリ、外面は短い横ハケ目を行う。色調は黄灰褐色。

13は高坏の脚柱部である。杯部との接合部にはハケ状工具による刻目が認められる。胎土は精良で、色調は黄灰色を呈す。14は精製の小型外反口縁鉢。内面はヘラミガキを行わず、横ナデで仕上げ。胎土に精選された粘土を使用し、色調は黄橙色を呈す。15は山陰系の鼓形器台である。受部は内外面横ヘラミガキ、脚部は内面ハケ目、外面横ナデを行う。胎土はあまり砂粒を含まず比較的精良で、色調は茶色を呈す。調整、色調とも異質である。

8号竪穴住居跡 (図版9、第22図)

I 区中6で検出した竪穴住居跡である。遺構検出面では確認できず、7号竪穴住居跡の床面精査時に新たに確認したものである。したがって6号～8号竪穴住居跡の中では最も古いものである。

大半が他の遺構及び攪乱によって失われており、遺存するのは南側の一部に過ぎない。平面形は他例と同様隅丸方形もしくは隅丸長方形になると思われる。床面は南壁際に比べて北側がやや浅くなっており、床面までの深さは20cmを測る。床面上では径30cm、深さ25cmのピットを一つ検出したが、果たしてこれが支柱穴となるかどうか判断できなかった。東側には幅30cm程度の浅い段が見られるが、これは埋没中に壁が崩落したものと思われる。

住居跡の残りが悪かったため、出土遺物は少ない。図示した遺物は覆土中からの出土である。

出土土器 (図版84、第23図)

1は山陰系の二重口縁壺である。一次口縁部は大きく水平近くにまで開き、二次口縁部は直線的に開く。端部は面をなし、下端を肥厚させる。頸部にハケ状工具を使用した綾杉文を巡らせる。色調は肌色に近い。

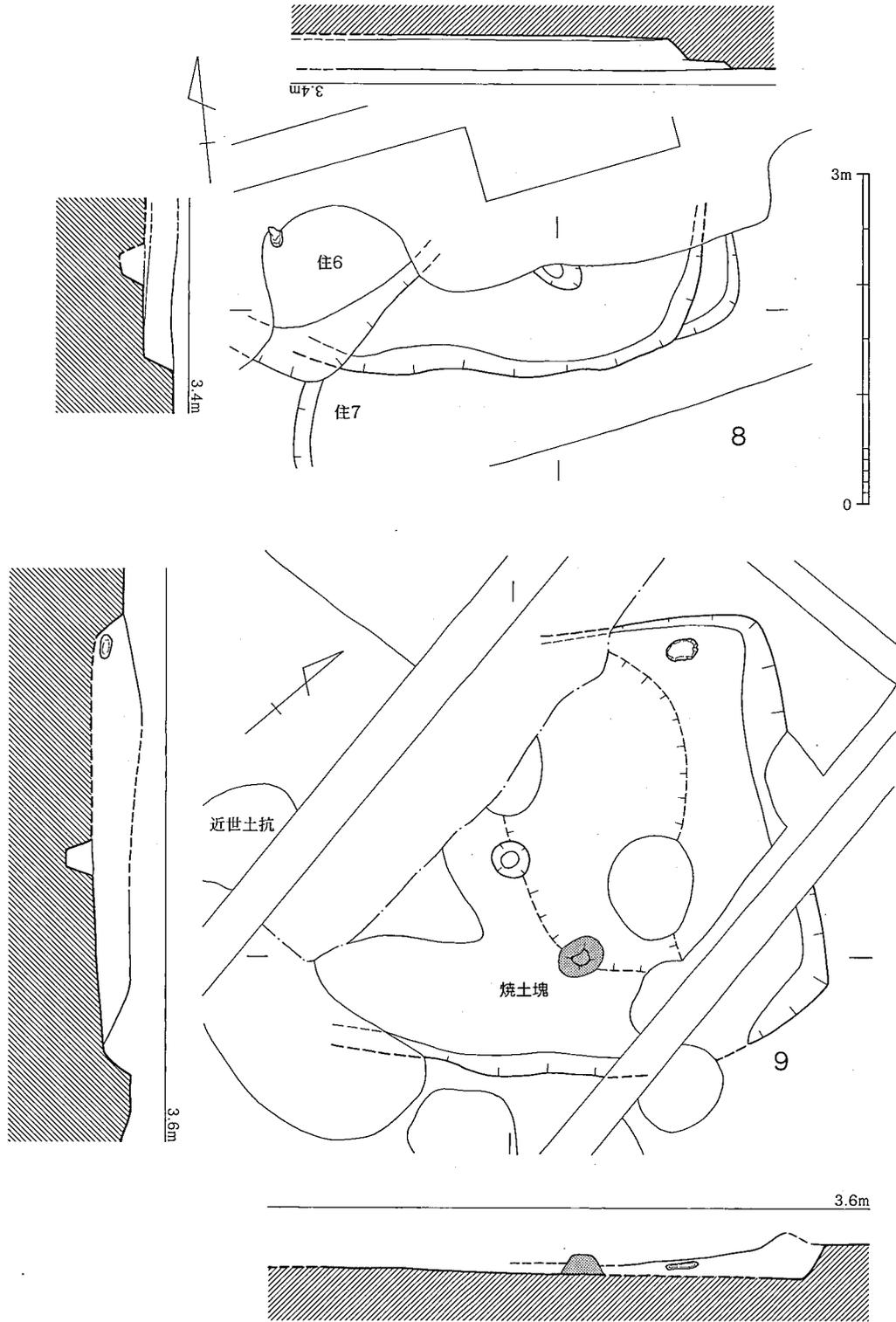
2は在来系の甕。口縁部は短く緩く外反し、端部を丸くおさめる。口縁部内面はナデ、それ以外は内外面ハケ目調整で、口縁部外面には横ナデに先行するタタキが観察される。色調は黄灰色。

3は蛸壺である。底部は欠失するため形状が判らない。体部は直立し、端部は面をなす。内面は丁寧なナデ、外面は指圧痕が明瞭に残る。色調は黄灰褐色を呈す。

4・5は半島系甕の把手部分である。どちらも指ナデで整形され、水平に伸びた円柱状をなす。4は淡黄褐色の軟質で、土師器に近い焼成である。5は胴部内面にハケ目を施す。色調は断面が暗灰色、表面は黒色を呈す。焼成は軟質というよりやはり土師器に近い。胎土も同。器表の剥離が著しいのは二次被熱のためか。

9号竪穴住居跡 (図版9、第22図)

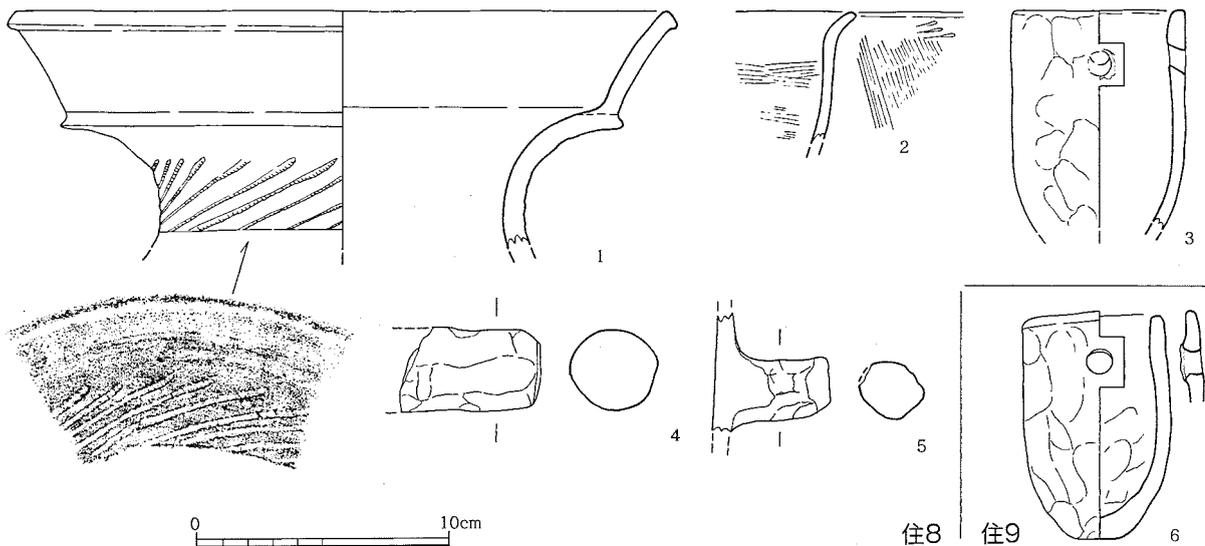
I 区南9・10で検出した竪穴住居跡である。8号竪穴住居跡から5m程南側に位置する。1号溝、5・10号竪穴住居跡と重複しており、これらの中では最も古い。校舎基礎や近世～近代の攪乱、他



第22図 8・9号竪穴住居跡実測図 (1/60)

の竪穴住居跡によって西側を大きく失っており正確な平面形は不明だが、長方形プランになると思われる。唯一計測できる東壁の長さは3.9mを測り、これから判断すれば中型の部類に含まれる。

床面は南西側がやや高くなるが、他はほぼ水平をなす。床面までの深さは最も残りの良い場所で45cmを測る。床面のほぼ中央で、径35cm、深さ30cmのピットを一つ検出した。配置からすれば支柱穴として良いものと思われる。またこのピットの東約1mの位置で焼土塊を検出したが、これは恐



第23図 8・9号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

らく炉に由来するものであろう。更に北隅付近の床面上で、台石と思われる扁平な円礫を1個検出した。

大半が他の遺構に切られていたため出土遺物は非常に少ない。

出土土器 (図版39、第23図)

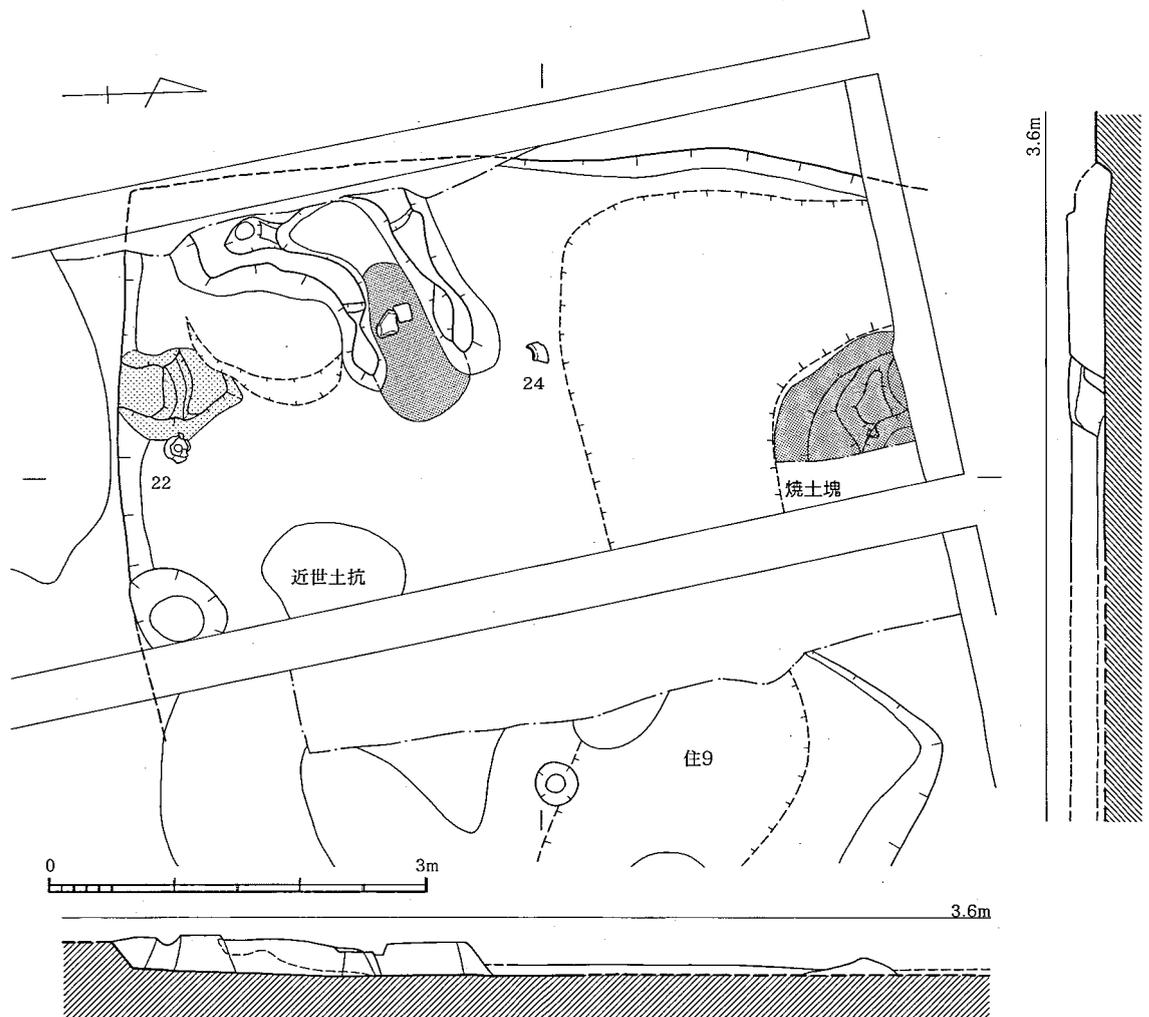
6は蛸壺である。底部は小さな平底となり、体部は垂直に伸びる。小型でスリムな形状である。調整は内外面指ナデ。穿孔は焼成前に外側から行っている。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。

10号竪穴住居跡 (図版9、第24図)

I区南8で検出した竪穴住居跡である。9号竪穴住居跡に東接する。1号溝と重複しており、当住居跡の方が古い。他の遺構や校舎基礎によって大きく攪乱を受け全体の平面形に不明な点が多いが、遺存する西壁やカマドの位置から推察すると、比較的大型に含まれるのではないと思われる。床面は南西側しか残っておらず、この南西側の床面までの深さは30cmを測る。西壁の中央からやや南寄りにあたる位置でカマドを検出した。他に南壁際では粘土塊、北側では焼土塊を検出した。

10号竪穴住居跡カマド (図版10、第25図) 10号竪穴住居跡の南壁際に位置し、遺存する壁との位置関係から推察すると、西壁の中央からかなり南側に寄った場所に位置する。主軸は竪穴住居跡の主軸に対して27°ほど南に振れている。カマド本体は住居跡西壁に接して造り付けられ、さらに壁に沿って南方向に伸びる煙道が付設される。いわゆるL字状カマドと言われるタイプに属する。カマドの本体部分は長さ180cm、内法45cm、外法125cmを測り、非常に大型である。支脚は壁から約100cmの位置に設置されたと思われる、この付近が最も赤変が著しい。またこの上層からは、支脚に使用したと思われる赤変した角礫を検出したが、火床面からはかなり浮いた状態であり、現位置を留めるものではない。支脚の位置から奥に40cm、手前に90cmの範囲は強い熱を受け床面が赤変する。袖は比較的遺存状態が良く、両袖とも高さ25cmを測る。右袖の北側にはカマド内の焼土を廃棄したと思われる焼土の堆積がみられた。

カマド内部はほぼ水平につくられるが、西壁に接して火床面より約10cm程高くなるテラス状の段



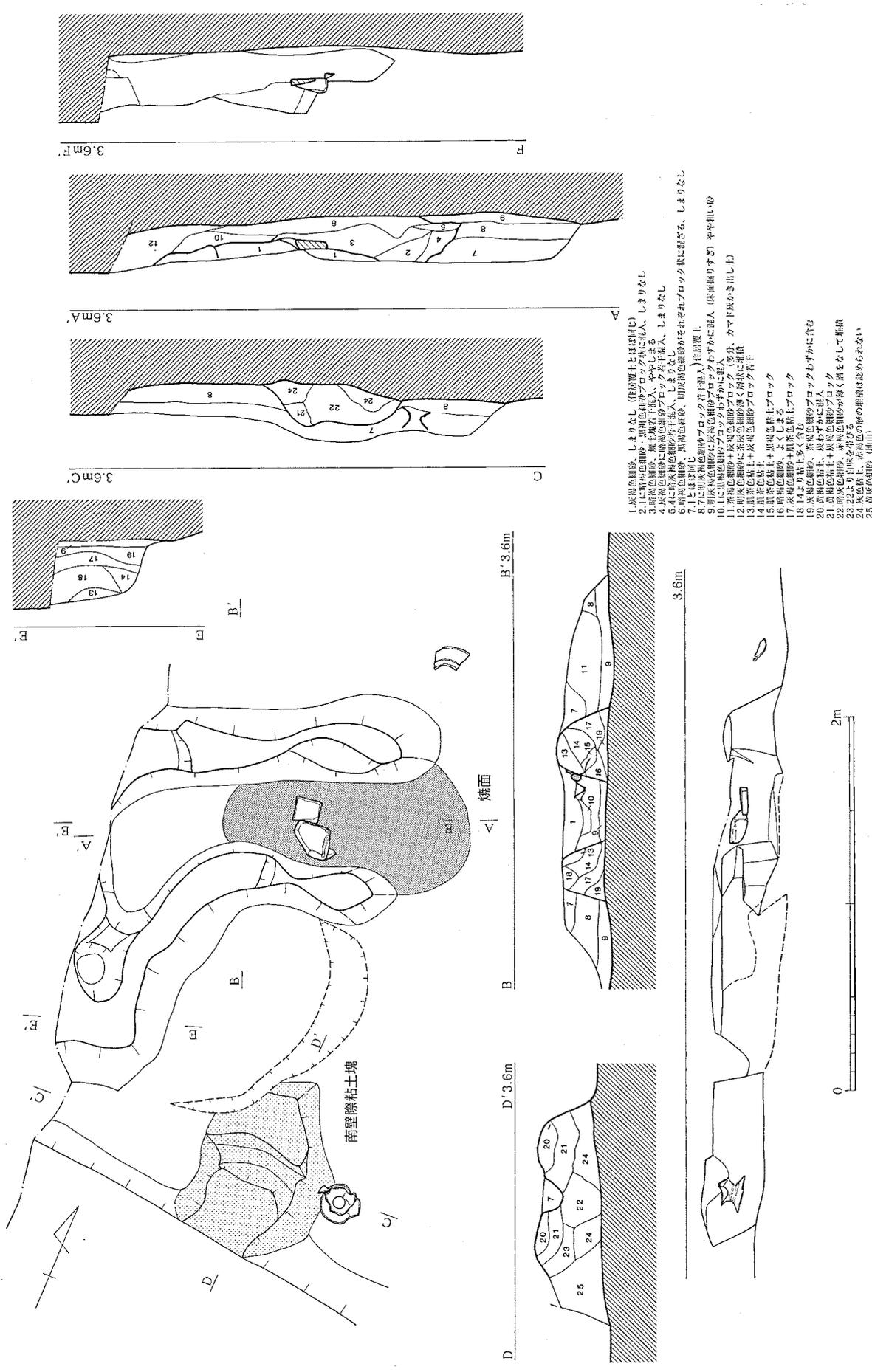
第24図 10号竪穴住居跡実測図 (1/60)

が設けられる。ここから約10cm程南側に伸びて、ピット状の煙道先端に達する。煙道の内法は50cm、外法は右袖までを含めると210cmに達する。煙道の先端は径20cm~30cm、深さ5cm程度の浅いピット状になっており、ここから屋外に煙を排出する。この煙道付近は壁面が黒変する。

カマド本体・煙道とも構築には粘土を使用し厚く堅牢に造られる。袖は5~10cmの厚さで内側から外側に向かって肌茶色粘土を積み上げており、両袖とも火床側に傾斜する層序をなす。袖内には土器片が若干含まれるが、これは壁体の強度を増すための工夫であろう。煙道付近の構築にもやはり同質の粘土を積み上げて造られる。

南壁際粘土塊 (第25図) 南壁際で検出した粘土塊で、長軸100cm、短軸70cm、高さ35cmを測る。確認当時、カマドの一部分である可能性も考え付近を綿密に精査した。その結果、当粘土塊とカマドの間には粘土が検出されなかった事、双方の粘土の色が若干異なる事、構造上つながりが考え難い事などから、両者の関連はないものと判断した。

粘土塊の下層は暗灰色細砂の中に赤褐色細砂が薄く層をなして堆積する。上層は灰色粘土の単一層で非常に強く締まっている。上面には溝状の窪みが見られる。



- 1.灰褐色細砂、しまりなし (住居層上とはほぼ同じ)
- 2.1に黄褐色細砂・黒褐色細砂アロク状に混入、しまりなし
- 3.暗褐色細砂、壁上塊若し混入、ややしまる
- 4.灰褐色細砂、壁上塊若し混入、ややしまる
- 5.灰褐色細砂、壁上塊若し混入、ややしまる
- 6.暗褐色細砂、黒褐色細砂がそれぞれアロク状に混ざる、しまりなし
- 7.1とはほぼ同じ
- 8.7.1とはほぼ同じ
- 9.明灰褐色細砂アロク若し混入 (住居層上)
- 10.明灰褐色細砂に灰褐色細砂アロク若し混入 (住居層上)
- 11.茶褐色細砂に灰褐色細砂アロク若し混入 (多分、カマド灰かき出し)
- 12.暗褐色細砂に茶褐色細砂アロク若し混入
- 13.暗褐色粘上+灰褐色細砂アロク若し
- 14.暗褐色粘上
- 15.暗褐色粘上+灰褐色粘上アロク
- 16.暗褐色粘上、まじり
- 17.暗褐色粘上、まじり
- 18.14より粘上多くなる
- 19.灰褐色粘上、灰褐色細砂アロク若し混入
- 20.灰褐色粘上、灰褐色細砂アロク若し混入
- 21.暗褐色粘上+灰褐色細砂アロク
- 22.暗褐色粘上、赤褐色細砂が薄く混ざり
- 23.灰褐色粘上、赤褐色細砂が薄く混ざり
- 24.灰褐色粘上、赤褐色細砂が薄く混ざり
- 25.灰褐色粘上 (埋土)

第25図 10号竪穴住居跡カマド・粘土塊実測図 (1/30)

北側焼土塊 (第26図) 住居跡の北側、恐らく北壁に接すると思われる位置で、現存で長軸110cm、短軸90cm、高さ35cmの焼土塊を検出した。ただし大半が校舎基礎等によって攪乱を受けているので旧状は不明である。この焼土塊は茶褐色細砂と黄褐色細砂ブロックからなり、特に意識的に積み上げた様子も見受けられない。また土器片・小礫等がわずかにふくまれる。従って、当住居跡のカマドから掻き出された灰や焼土をここに溜めておいたものか、又は当住居跡廃絶後に他所から廃棄されたかのどちらかであろう。

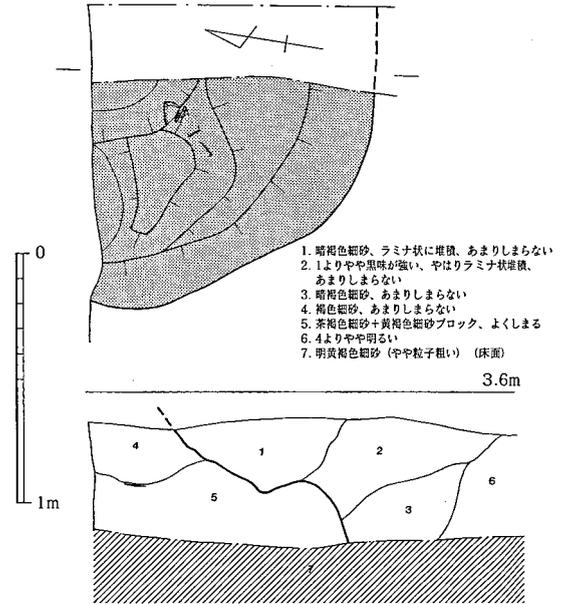
他の遺構に大きく切られていたものの、出土遺物は比較的豊富である。図示した土器のうち、22は粘土塊の東側、24はカマド右袖の北側から出土した。その他、2・11・12・16は煙道先端から出土、7はカマド袖内から出土、6・9・20・23はカマド北側に堆積していた焼土内から出土、17・18・19はカマド内から出土した。また1・3・4・8・25・26は1号溝との接合資料である。掘削の際に混入してしまった可能性がある。他に凹石が出土している。

出土土器 (図版39・40・84、第27・28図)

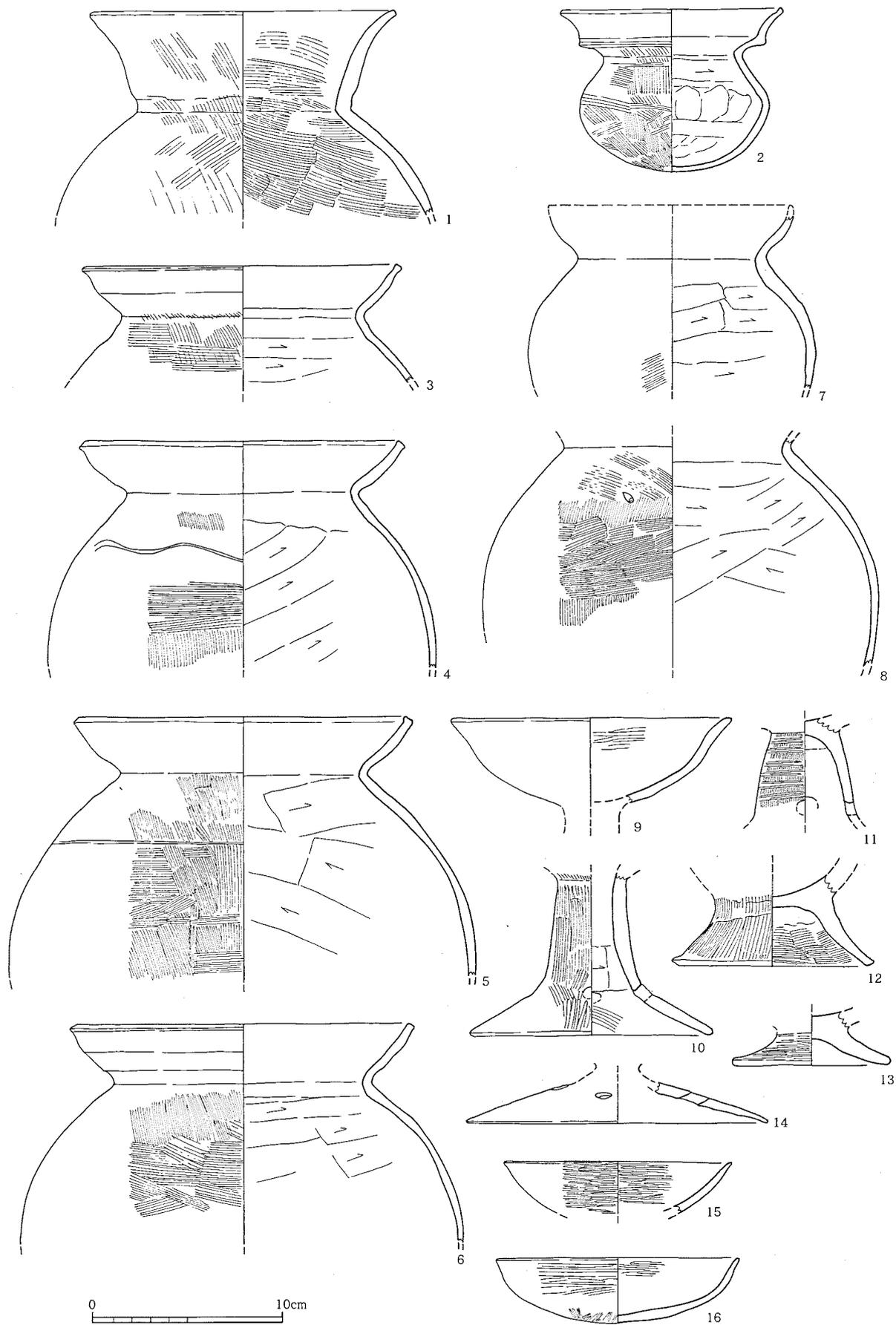
1は在来系の広口壺である。肩部は丸味を帯び、頸部の屈曲部内面は鋭い稜をなす。口縁部は外反して開き、先端はさらに外反する。口縁部の下方に比べて先端付近の器壁は薄くなり、端部は丸くおさめる。口縁部は内外面ともハケ目の後に横ナデ、胴部は内面ハケ目、外面はタタキをナデ消している。胎土に砂粒を多く含み、色調は黄灰褐色を呈す。2は山陰系の小型二重口縁壺。胴部の下半は丸味を帯び、肩部は直線的に傾斜している。一次口縁部は強く外反し、水平近くにまで開く。二次口縁部もまた外反し、端部は丸くおさめる。口縁部は内外面横ナデ、胴部内面は指整形の後に底部と肩部のみ板状工具によるナデを行う。外面はハケ目。胎土に砂粒を若干含み黄灰色を呈す。

3~8は布留系甕である。3の口縁端部はシャープな面をなす。色調は黄灰褐色を呈す。4は口縁部が内湾して開き、内端部を丸くつまみ出す。肩部外面には一条の波状文を巡らす。色調は肌色を呈す。5は口縁部が内湾しながら立ち気味に開き、内端部を丸く明瞭につまみ出す。胴部のヘラケズリは一部屈曲部の近くまで及んでいる。肩部外面には一条の沈線を巡らす。6は肩が丸く張った器形となる。口縁部は内湾して立ち気味に開き、外端部をわずかにつまみ出す。内面のヘラケズリは屈曲部近くまで行き、外面にはハケ目に先行するタタキが観察される。7は口縁が内湾し、かなり立ち上がる。器壁がかなり厚い。二次被熱が著しく外面は器表が剥離し、色調は暗茶灰色を呈すものの部分的に茶褐色を呈す。8は肩部の四ヶ所に列点文が認められる。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。

9~11は高坏である。9は小型品である。口縁部が外反するが屈曲部は稜をなさず、緩やかに反転している。風化が著しく観察しづらいが、内面にはわずかに横ヘラミガキが観察される。胎土は砂粒を若干含み高坏にしては粗い。色調は黄灰褐色を呈す。10は在来系高坏の脚部。柱部内面の整形



第26図 10号竪穴住居跡北側焼土塊実測図 (1/30)



第27图 10号竖穴住居跡出土土器实测图① (1/3)

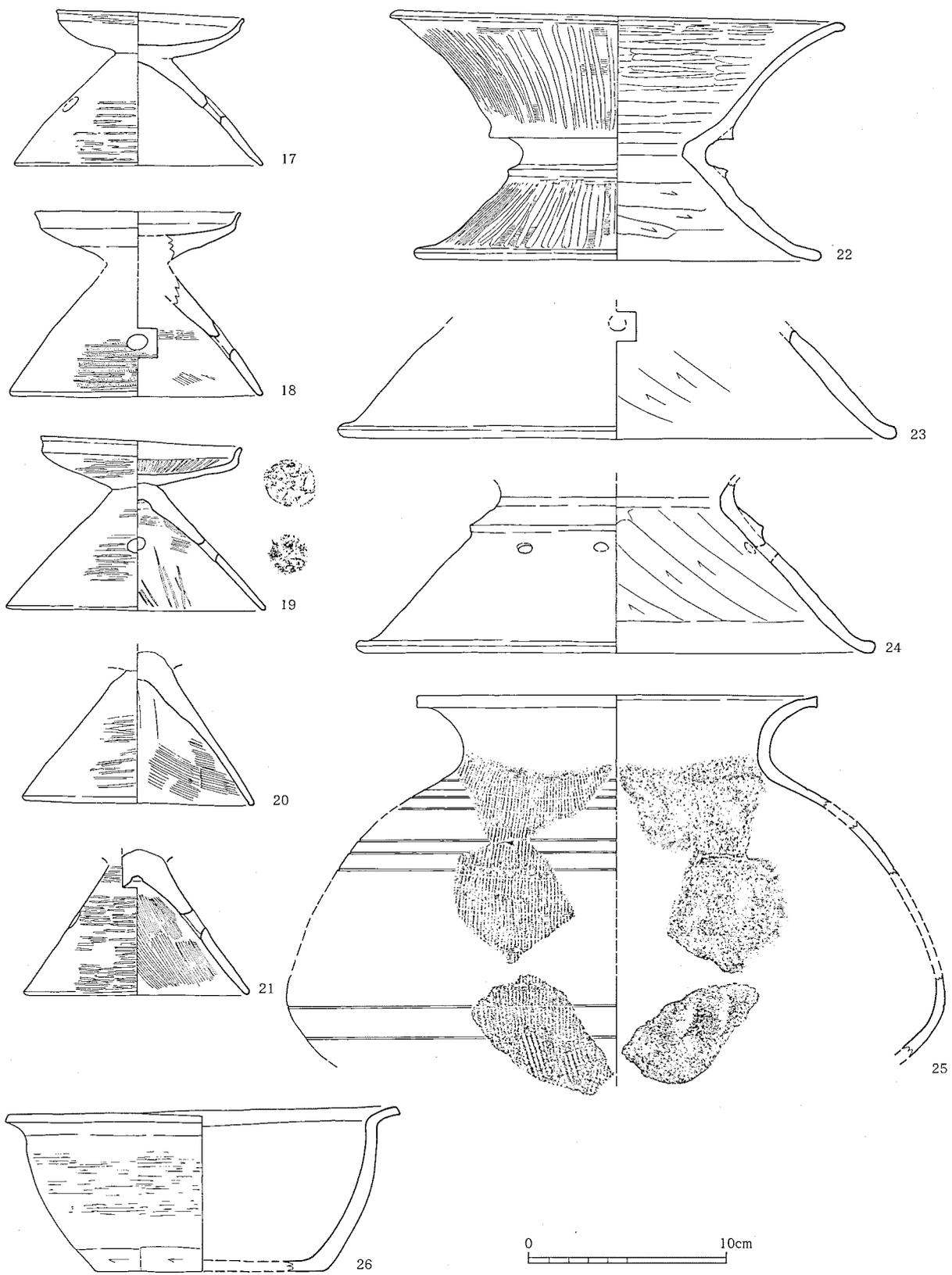
には横ヘラケズリを用い、外面は縦ハケ目を行う。裾部は内面ハケ目、外面縦ヘラミガキ。穿孔は屈曲部に二ヶ所行う。胎土に砂粒を若干含み高坏にしてはやや粗い。色調は黄灰色を呈す。11は畿内系高坏の脚柱部。内面はナデ、外面は細かい縦ハケ目の後に疎らなヘラミガキを施す。穿孔は屈曲部のやや上に二ヶ所行う。胎土は比較的精良で、色調は茶色を呈す。

12~16は鉢である。12は在来系の中型脚付鉢または甕。内外面ハケ目調整を行う。胎土に砂粒を多く含み、粗さが目立つ。色調は黄灰褐色を呈す。13は精製の脚付鉢脚部。内面は横ナデ、外面は丁寧な横ヘラミガキを行い、胎土も精良である。色調は橙茶色を呈す。14は低脚の脚付鉢である。裾部の穿孔は八ヶ所におよぶ。調整は全面ナデ仕上げで、胎土に砂粒を若干含み、やや雑な感じを受ける。色調は白黄灰色。15・16は精製の浅い小型鉢。どちらも内外面横ヘラミガキ調整で、胎土は精良である。15は体部が直線的に開き丸味が少なく、口縁部付近がわずかに外反する。色調は肌茶色を呈す。16は15よりも丸味を帯びる。口縁部付近はやはりわずかに外反する。色調は橙肌色を呈す。

17~21は精製小型器台である。17は立ち上がりの屈曲が弱く明瞭な稜をなさない。外面には横ヘラミガキが観察されるが内面は風化が著しく調整不明。裾部は直線的に大きく開き、端部は尖る。穿孔は二ヶ所に行われる。内面はナデ、外面は横ヘラミガキ。色調は黄肌色を呈す。18は受部と脚部が接合しないが同一個体である。受部は立ち上がりが外反しながら開き、端部はシャープに尖る。器表の風化が著しく調整は不明。裾部の外面はハケ目の後に疎らな横ヘラミガキを行い、内面はハケ目の後にナデを行う。色調は橙茶色を呈す。穿孔は一ヶ所のみである。19は立ち上がり下半が直立気味で、上半のみ外反させる。内底面には放射状の暗文を施し、外面は横ヘラミガキを行う。立ち上がりの部分は内外面横ナデ。裾部は外面横ヘラミガキ、内面はハケ目後にナデを行い、一部ナデの後にヘラ状工具によると思われる工具痕が残る。穿孔は二ヶ所。受部と裾部の接合面は刻目を施す。また裾部内面には軸受孔が認められる。色調は黄肌色を呈す。20は裾部である。内面はハケ目の後に上半のみナデを行う。外面は横ヘラミガキを行う。胎土は砂粒を若干含むものの比較的精良で、色調は茶灰色を呈す。21は内面ハケ目、外面横ヘラミガキで穿孔は二ヶ所。内頂部には軸受孔が認められる。色調は肌茶色。

22~24は山陰系鼓形器台である。24は通常よりやや大型である。受部内面はヘラナデに近い幅広のヘラミガキ、裾部は内面横ヘラケズリ、外面はハケ目後に暗文状の縦ヘラミガキを行う。胎土に砂粒を若干含み、黄灰褐色を呈す。23は裾部に穿孔を行う大型品。内面にはヘラケズリがかすかに見られ、外面はヨコナデを行う。穿孔の個数は不明。24もまた大型品で、二個一対の穿孔を三方向に行う。内面ヘラケズリ、外面ナデ。色調は黄灰色を呈す。

25・26は半島系土器である。25は陶質の壺である。胴部は最大径がかなり下位にあり、その部分で強く湾曲する。この湾曲部から上は直線的に内傾し、肩部でもう一度緩く内傾している。口縁部は強く反転して大きく開き、端部は強い横ナデによりシャープな面を形成する。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデを行い頸部下には指圧痕が、胴下半には無文の当て具痕と思われる窪みが残る。胴部外面の上半は平行タタキの後に平行沈線を巡らせる。下半は方向が一定しない斜格子タタキの後平行沈線を巡らすが、底部付近にまで沈線を巡らせるかどうかは判らない。胎土には砂粒を若干含み、あまり良いとはいえない。色調は灰褐色を呈す。焼成は良好で硬質に焼き上がる。接合しないが同一個体と思われる破片資料が1号溝上層や付近の包含層から数点出土している。26は韓半島南



第28图 10号竖穴住居跡出土土器実測図② (1/3)

西側に分布域をもつ瓦質の鉢である。底部は平底で、体部との境はシャープな稜をなす。体部は内湾しながら立ち上がり、上半は直立する。口縁部は強く短く外反し、端部は強い横ナデを加えてシャープな面を形成する。体部・口縁部とも回転ナデを行っており、特に体部外面にはナデによる横方向の細かい条線が無数に残る。体部の下端は静止ヘラケズリを一周させる。外底面は端部しか遺存しておらず、また器表の剥離が進んでいるので判断し難いが、ヘラナデで仕上げているのではないと思われる。糸切り痕等は見えない。胎土には石英、長石、黒色粒の細砂粒を少量含み比較的精良ではあるものの、極めて精良とまでは言えない。色調は、器表の遺存する箇所は黒灰色、器表がはげ落ちた箇所は灰色を呈す。

11号竪穴住居跡（図版10、第29図）

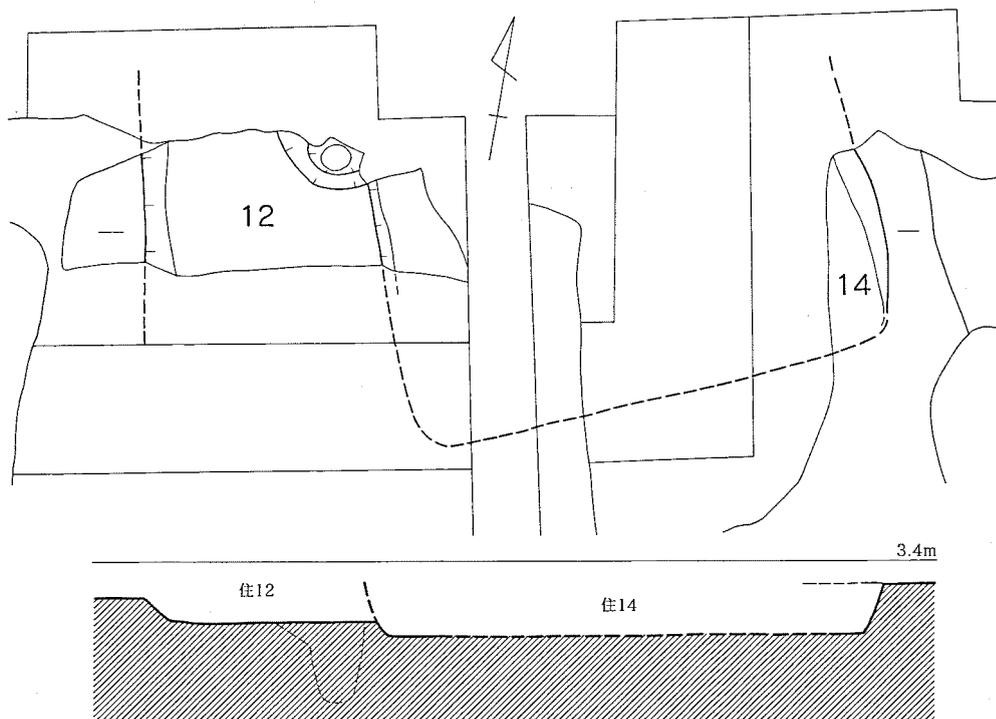
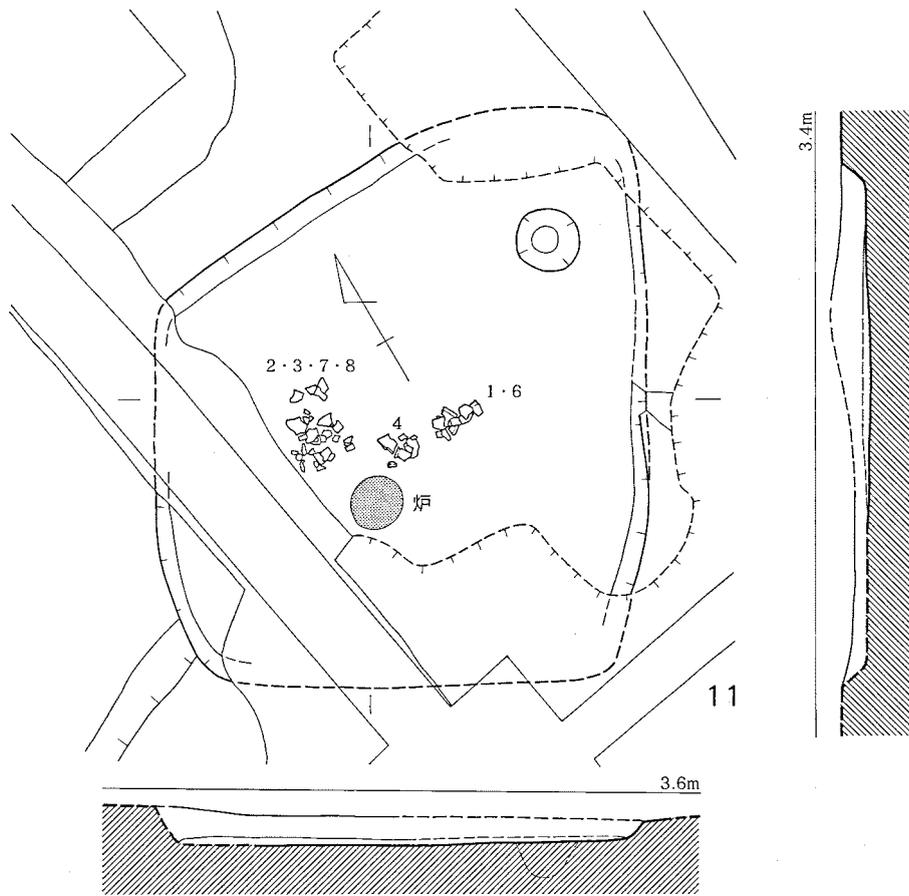
I区中4で検出した竪穴住居跡である。10号竪穴住居跡から8m北側に位置する。校舎基礎によって広く攪乱を受けており、平面形にも不明な点が多い。特に北側がかなりいびつとなるが、これは埋没過程で大きく崩れたためであろうか。本来は長方形プランであったと思われる。床面は北側がやや高く、遺構面から床面までの深さはこの北側で20cm、中央付近で30cmを測る。床面の東側で、径50cm、深さ30cmのピットを一つ検出した。他に床面中央からやや南西寄りの位置で、径40cmの範囲で焼土の広がりか認められた。炉跡であろう。遺物は中央付近から比較的まとまって出土したが、床面からはやや浮いた状態である。図示した土器のうち、5以外は同一レベルでの一括出土である。他に砥石が出土している。

出土土器（図版40・41、第30図）

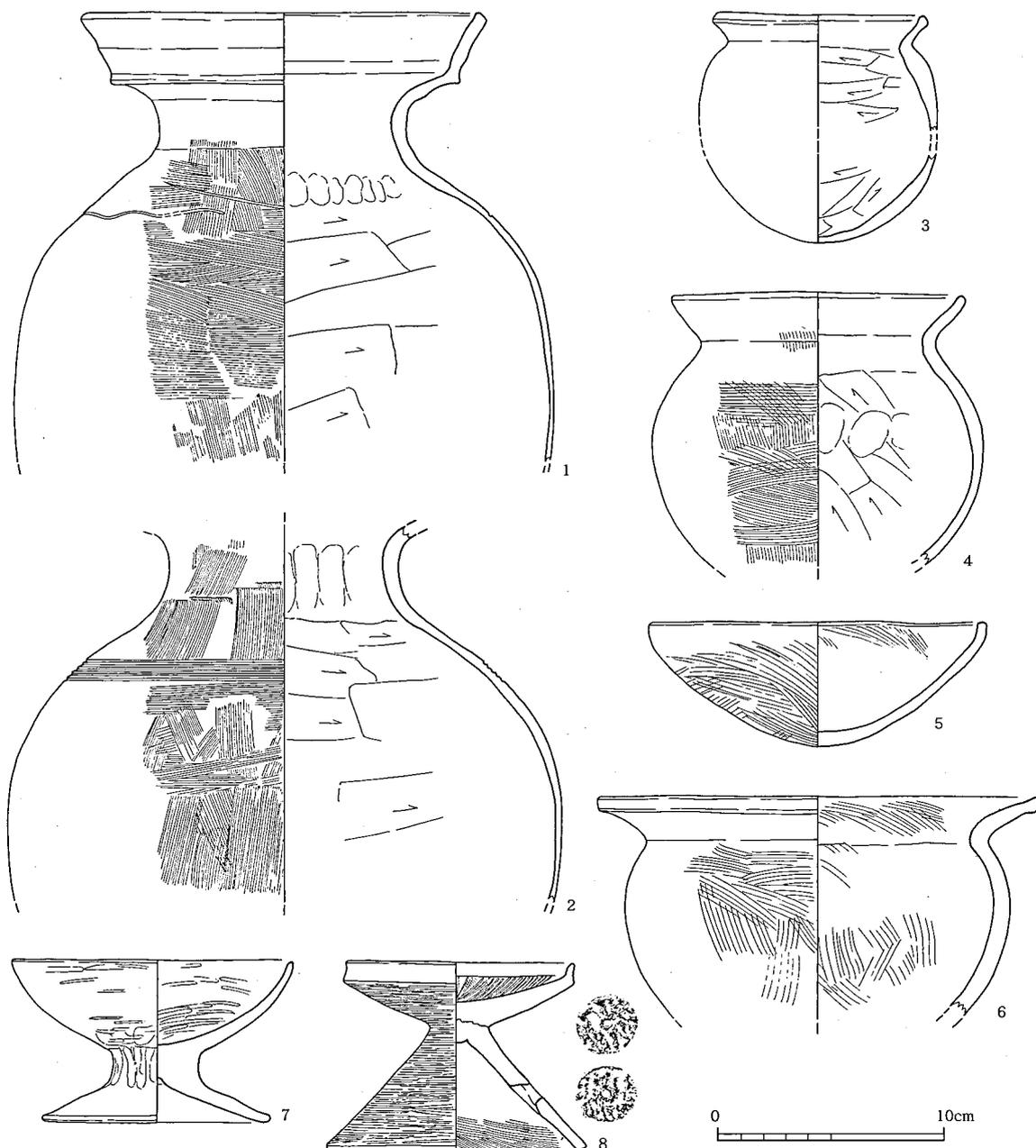
1・2は山陰系二重口縁壺である。1は倒卵形の胴部になると思われる。口縁部は直線的に開き、端部は面をなす。肩部に一条の波状沈線を巡らすか端部が接していない。頸部内面には指圧痕が明瞭に残る。色調は黄灰褐色を呈す。2は胴部の形状が1とよく似ているが、頸部はより締まるようである。頸部内面には縦指ナデが明瞭に観察され、また肩部には櫛描直線文を巡らす。色調は黄灰褐色を呈す。

3は小型の甕である。胴部の上半と下半とが接合しない。口縁部は直線的に開き、端部はわずかに肥厚させる。器壁は全体的に厚く、特に肩部が厚くなる。内面はヘラケズリ、外面は粗いナデ。胎土に砂粒を多く含み、色調は黄茶灰色を呈す。粗製品である。4は小型の布留系甕。胴部は球形で口縁部は直線的に開く。端部は丸く、わずかに内側につまみ出している。色調は黄肌色を呈し、外面には広く煤が付着する。

5～7は鉢である。5は尖底気味の在来系鉢。体部はほとんど湾曲せずに関き、口縁部のみ短く直立する。端部は丸くおさめられる。内面はハケ目をナデ消し、口縁部付近のみハケ目が残っている。外面は雑なハケ目。6は口縁部が強く外反する在来系の中型鉢である。体部の最大径はかなり上位に位置する。胴部の外面はハケ目を行い、下半はハケ目をナデ消している。内面はハケ目の後に上半のみナデ消す。口縁部内面はハケ目、外面は横ナデ。外面に広く煤が付着することから煮炊きに使用した事が判る。胎土は粗く、色調は橙褐色を呈す。7は精製の脚付鉢である。鉢部は浅めの球形で、内外面ヘラミガキを行う。脚部は短い柱部を有し、裾部は直線的に関き、端部を丸くおさめる。柱部外面は粗いヘラミガキを行い、裾部は内外面横ナデを行う。胎土は精良な粘土を使用し、色調は黄肌色を呈す。



第29图 11·12·14号竖穴住居跡实测图 (1/60)

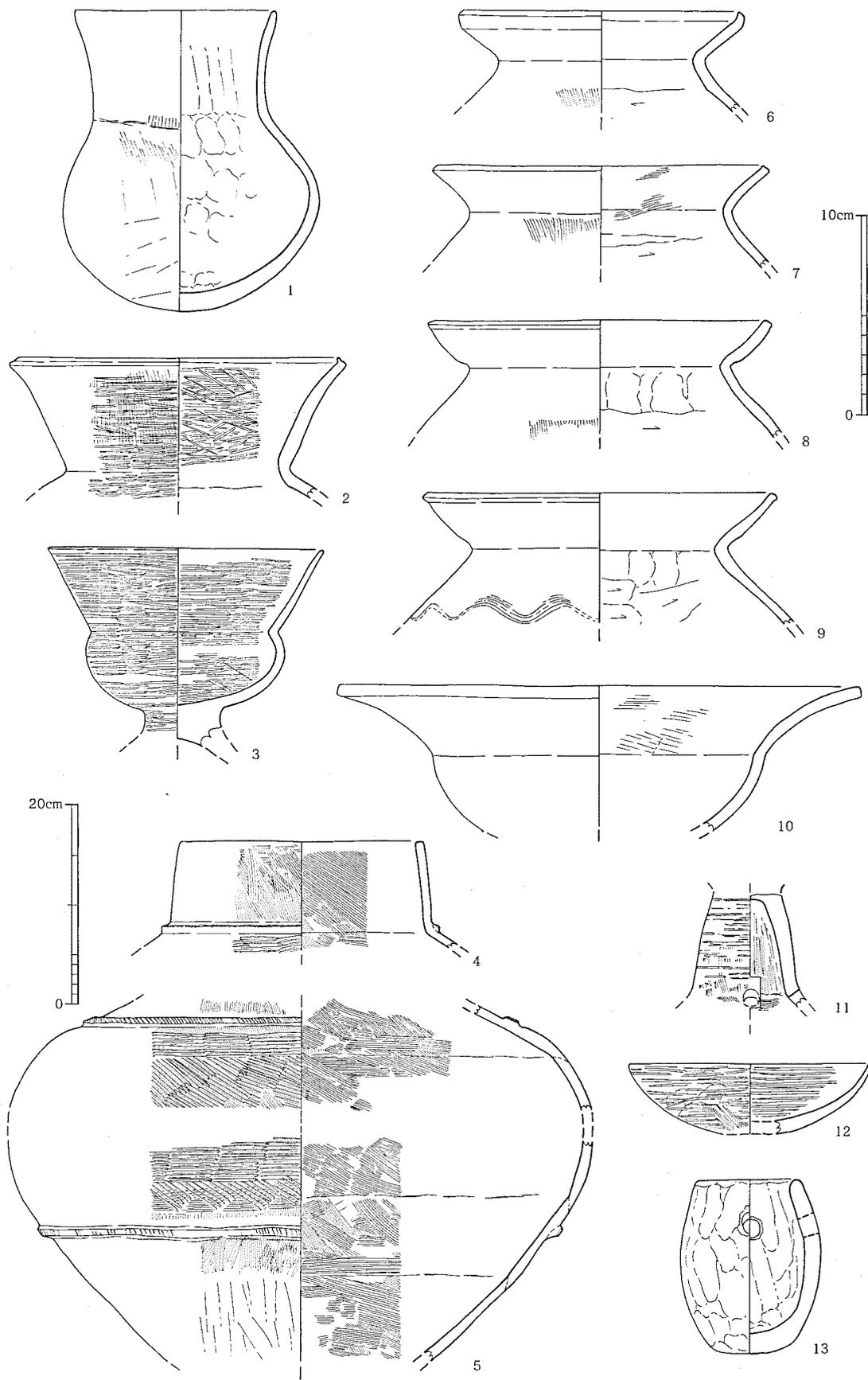


第30図 11号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

8は精製の小型器台である。受部の立ち上がりは直立し、端部は外側に向かって尖る。裾部は直線的に開き、端部はやや面をもつ。受部の立ち上がりは内外面横ナデ、内底面は放射状のヘラミガキによる暗文、外面は緻密な横ヘラミガキ。内面には暗文に先行するハケ目がかすかに残る。裾部の内面はナデの後端部付近のみ横ハケ目を行い、外面にはやはり緻密な横ヘラミガキを行う。受部と脚部の接合部はヘラ状工具による刻目を入れている。胎土は精良で橙色を呈す。

12号竪穴住居跡 (図版10、第29図)

I区中3で検出した竪穴住居跡で、11号竪穴住居跡から4m北東に位置する。大半が校舎の基礎によって攪乱を受けており、残存するのは一部分に過ぎない。したがって平面形や規模等は不明である。また遺構確認時、当住居跡と重複する14号竪穴住居跡の存在を想定していなかったため、先後



第31图 12号竖穴住居跡出土土器実測図 (5:1/6, 他は1/3)

関係を確認することができなかった。遺構面から床面までの深さは30cmを測る。床面の北側で、径30～70cm、深さ60cmのピットを1つ検出した。

出土土器 (図版41、第31図)

1～5は壺である。1は粗製の直口壺である。胴部は扁球形で頸部はあまり締まらず、口縁部は直立気味に立ち上がる。胴部と頸部の境には稜をもたない。胴部外面はハケ目の後板ナデを行う。胴部内面は指ナデ。口縁部外面は横ナデ、内面は縦指ナデ。外底部は二次被熱のため煤が付着しており、煮炊きに使用したらしい。2は畿内系の直口壺である。口縁部はあまり外反せずに開き、口縁端部は上方につまみ上げる。内面は細かい横ヘラミガキ、外面はヘラミガキ前の縦ハケ目が観察される。肩部外面は細かい横ヘラミガキ、内面は不明瞭だが横ヘラケズリか。胎土は砂粒を若干含み、色調は黄肌色を呈す。3は小型の精製脚付壺。体部は丸味を有し、屈曲部の稜は鋭い。口縁部は直線的に長く伸びる。調整は内外面とも細かいヘラミガキを行う。胎土は比較的精良で、色調は橙茶色を呈す。4・5は接合しないが同一個体となる在来系の大型直口壺である。最大径はかなり上位にあって肩が強く張り、下半部は直線的に底部へとすぼまる。口縁部は直線的に内傾し、屈曲部は不明瞭な稜をなす。口縁端部は水平面をなす。口縁部は内外面ハケ目、胴部は内面ハケ目。外面の上半はタタキ、下半はハケ目を板ナデでナデ消している。頸部、肩部、胴部下にそれぞれ一条の刻目突帯を巡らせる。胎土に砂粒を若干含み、特に角閃石が目立つ。色調は黄茶灰色を呈す。

6～9は布留系甕である。6は口縁部が直線的に開き、端部のみ上方に湾曲する。色調は黄灰色を呈す。7は口縁部が外反気味に開き、端部は面をなす。口縁部内面には横ナデに先行するハケ目が観察される。色調は黄灰色を呈す。8は口縁部が内湾し、端部が面をなす。色調は黄灰褐色を呈し、外面に煤が付着する。9は口縁部がわずかに内湾して開き、外端部をやや丸くつまみ出す。肩部には櫛描波状文を巡らす。焼成がやや悪く断面黒色を呈す。表面は黄灰褐色。

10は高坏の坏部と考えたが外面に煤が付着しており、煮炊きに使用した可能性もある。全面ナデ調整を行うが、内面には先行するハケ目が観察される。色調は黄灰色を呈す。11は畿内系高坏の脚柱部。内面には板状工具による縦方向ナデを行う。外面はハケ目後間隔をおいた横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は赤橙色を呈す。

12は浅い小型精製鉢。内外面細かい横ヘラミガキを行う。外底面には整形時のヘラケズリの稜線が残る。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。

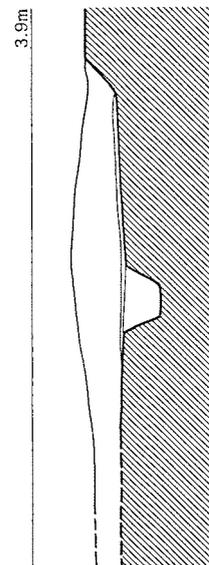
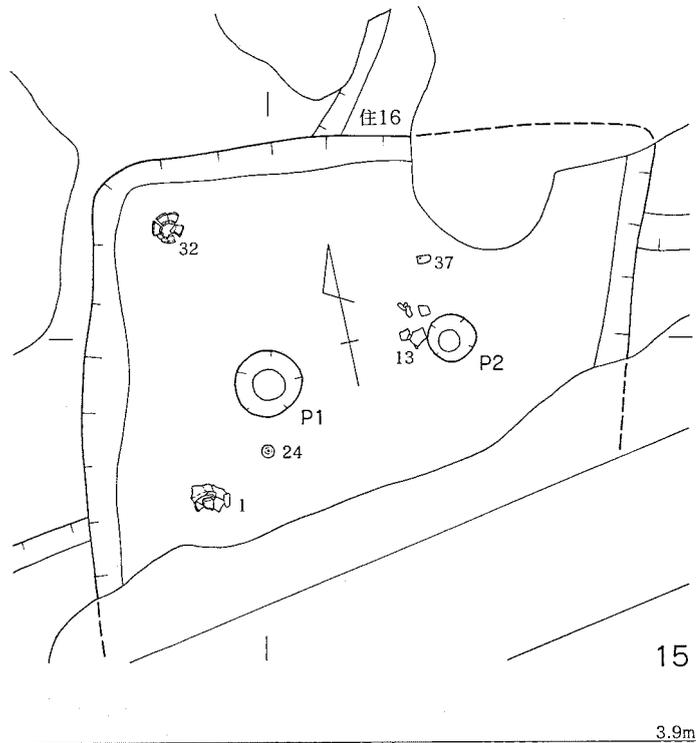
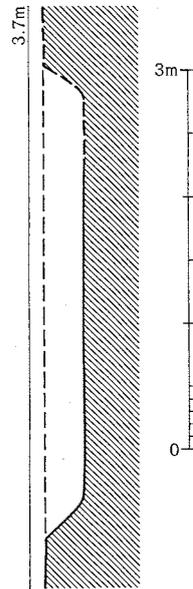
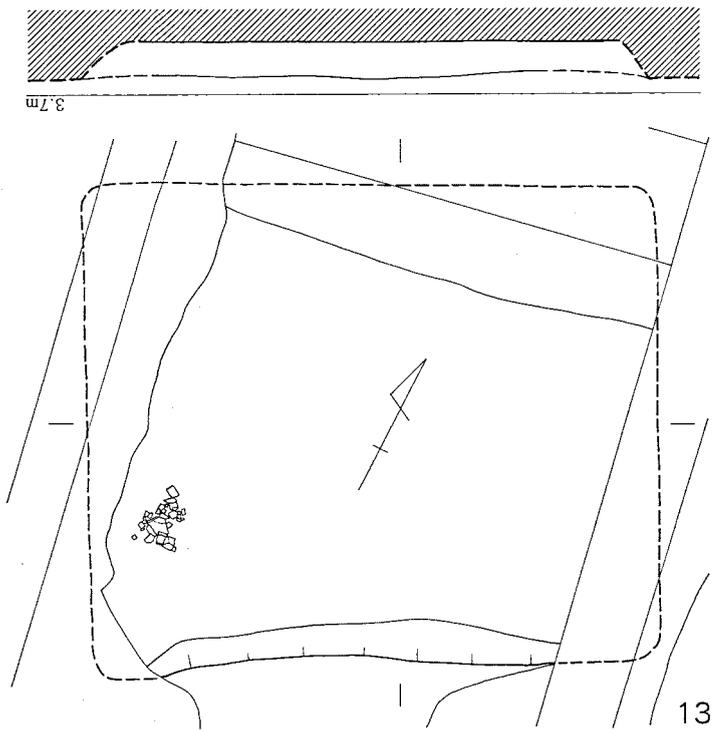
13は蛸壺。他のものより器高が低く、底部は平底気味となる。胎土に砂粒を若干含み、色調は橙茶色を呈す。

13号竪穴住居跡 (図版11、第32図)

I区中3で検出した竪穴住居跡である。校舎の基礎によって大きく攪乱を受け、残存する壁は南側のみに過ぎない。従って平面形、規模等は不明である。覆土は暗褐色細砂の単一層である。床面は北側がやや高くなっており、この北側の深さは30cm、南側は深さ40cmを測る。ピット等は確認できなかった。

出土土器 (第33図)

1・2は山陰系の二重口縁壺。1は頸部が直立し、一次口縁部が緩く外反する。屈曲部外面の突帯は丸味を帯びる。二次口縁部は直線的に開き、口縁端部を外側に丸くつまみ出す。頸部外面には縦



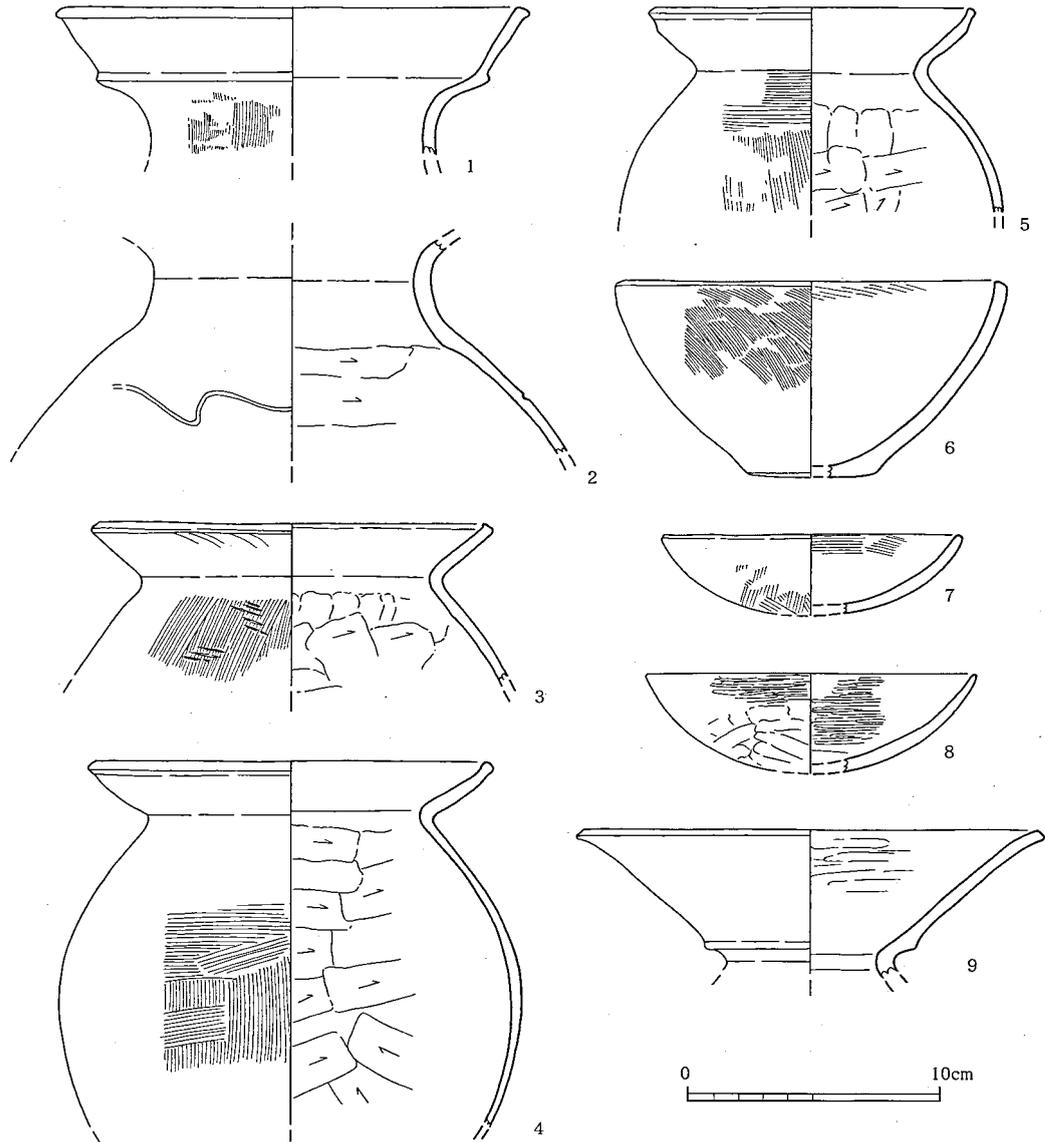
ハケ目を行う。色調は黄灰褐色を呈す。2は肩部に一条の波状文を巡らす。色調は肌灰色を呈す。

3~5は甕である。3は口縁部が直線的に開き、端部を内側につまみ出す。胴部外面にはハケ目に先行する左上がりのタタキが観察できる。黄灰褐色を呈す。

4・5は長胴化気味の甕。どちらも外面に煤が付着する。4の色調は肌灰色、5は暗黄灰褐色を呈す。

6~8は鉢である。6はわずかにレンズ状となる平底の鉢。内面はハケ後ナデを行い口縁部付近のみハケ目が残る。外面はナデの後、口縁部下のみハケ目調整を行う。胎土に砂粒を多く含み黄灰褐色を呈す。7はナデ、ハケ目調整の浅い小型鉢。胎土に砂粒を若干含み、黄灰褐色を呈す。8は小型精製鉢である。内外面横へラミガキ調整を行うが、外面の下半は風化が著しくへラナデの稜線しか見えな

第32図 13・15号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第33図 13号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

い。胎土は精良で肌色を呈す。

9は山陰系の鼓形器台受部。内面には幅広の横へラミガキが確認されるが、外面は調整不明。胎土に砂粒を若干含み、白肌色を呈す。

14号竪穴住居跡 (図版11、第29図)

I区中3・4で検出した竪穴住居跡で、13号竪穴住居跡のすぐ北東側に位置する。校舎の基礎によって大半が攪乱を受け、残っているのはわずかに過ぎない。また12号竪穴住居跡との先後関係は、先述した理由で確認できなかった。床面までの深さは35cmを測る。出土遺物は非常に少なく、図示できるものはない。

15号竪穴住居跡 (図版11、第32図)

I区北3で検出した竪穴住居跡で、14号竪穴住居跡から4m北側に位置する。16・54号竪穴住居

跡と重複しており、これらの中では最も新しい。南側および北側の一部が攪乱を受けている。北壁は長さ4.3mを測り、平面形は隅丸方形または東西に長い隅丸長方形となると思われる。住居跡覆土は黒褐色細砂で、他の住居跡が茶褐色細砂であるのとは比べてやや異質である。床面は北側がやや高くなっており、深さはこの北側で20cm、南側は30cmを測る。床面上で、P1・P2の二つのピットを検出した。P1は径50cm、深さ30cm、P2は径40cm、深さ40cmを測る。規模、位置関係から主柱穴として良いものであり、当住居跡は二本主柱の構造を採っていた事が判る。炉やカマド等は確認出来なかった。

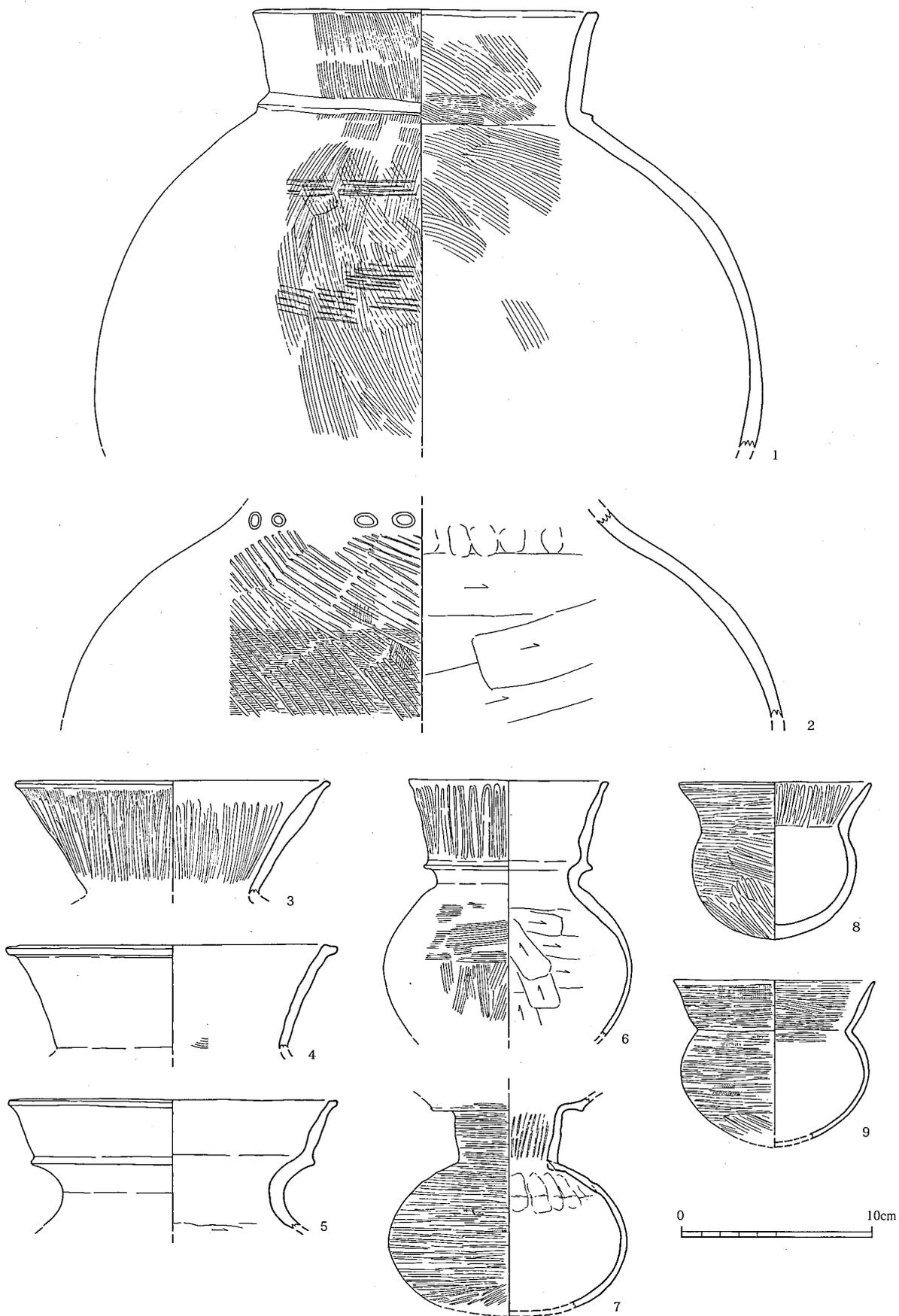
出土遺物は比較的多い。1・13・24・32・37は床面直上から出土、それ以外は覆土中から出土している。

出土土器 (図版41~43・84、第34~36図)

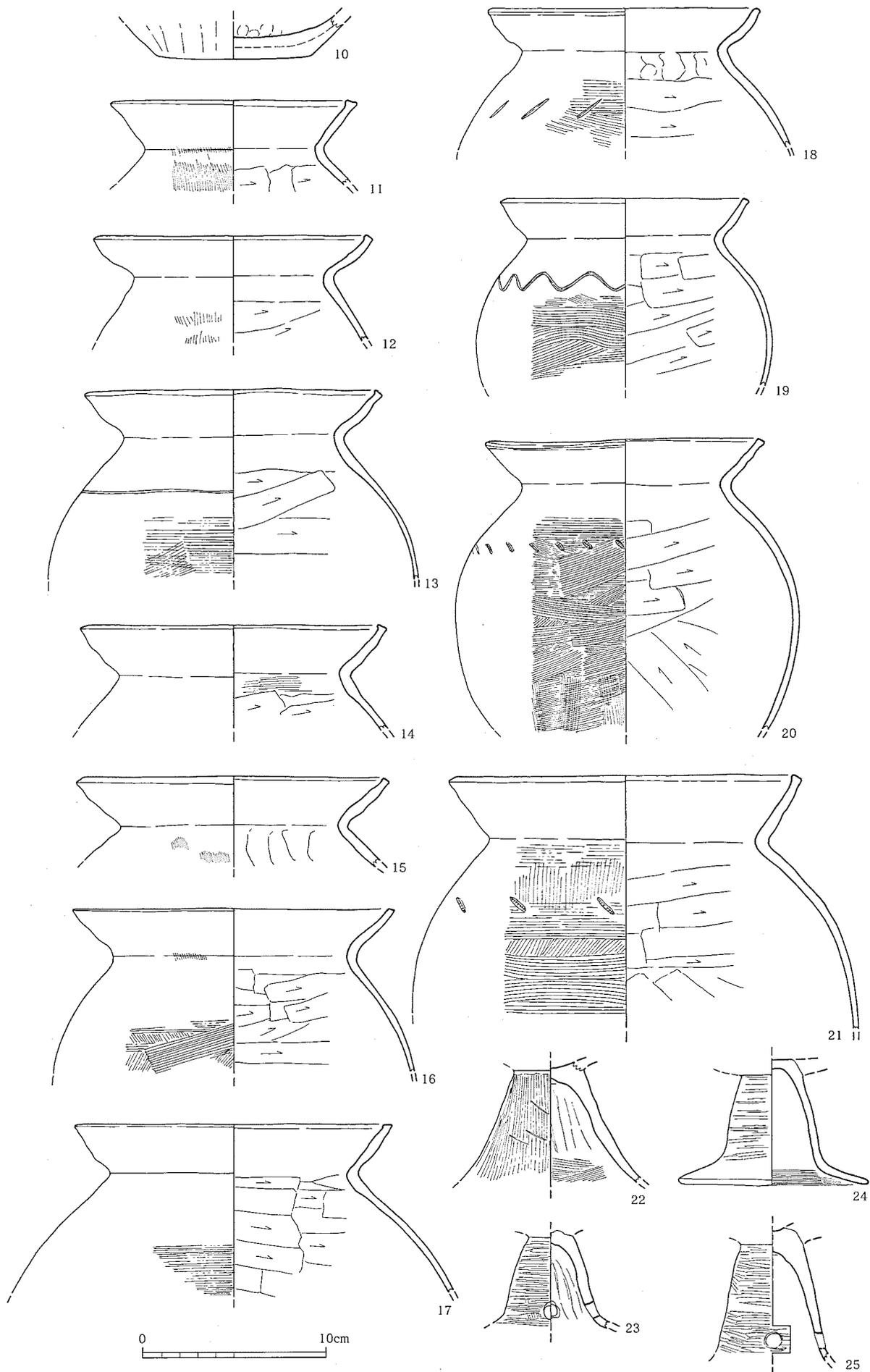
1~9は壺である。1は在来系の直口壺。胴部は球状を呈し、口縁部はわずかに外反する。端部は水平面をなす。内外面ハケ目調整を行い、外面には先行するタタキが確認できる。頸部には横ナデでつまみ出したと思われる低い突帯を巡らす。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。2もやはり在来系の壺肩部。内面はヘラケズリ、外面は横ハケ目後に左上がりタタキを行っている。肩部には二個一対の竹管文を巡らせる。胎土に砂粒を若干含み黄灰褐色を呈す。3・4は直口壺である。3は口縁部が直線的に開き、端部は器壁が薄くなる。調整は内外面に縦ヘラミガキを行う。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰白色を呈す。4は口縁端部を外側に大きくつまみ出し、上端が水平面をなす。内外面横ナデ調整を行い、胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。5は山陰系の二重口縁壺である。口縁部の開きは弱く、上端は水平面をなす。色調は黄灰褐色を呈す。

6は山陰系の小型二重口縁壺。体部は球形で一次口縁部は短く外反し、二次口縁部はあまり開かずに長く伸びる。端部は不明瞭な水平面をなす。体部内面はヘラケズリ、外面はハケ目、口縁部内面は横ナデ、外面は縦ヘラミガキを行う。胎土に砂粒を若干含むが概ね精良な粘土を使用し、色調は黄白色を呈す。7は畿内系の小型精製二重口縁壺である。胴部は扁球形で、最大径がほぼ中位にある。頸部はわずかに中膨らみとなり、一次口縁部は強く外反する。外端はわずかに垂下する。外面は横ヘラミガキで、一部に先行するハケ目が観察される。内面の胴部は横ナデ、頸部は縦ヘラミガキによる暗文を施す。肩部内面には指ナデ痕が明瞭に観察され、また粘土接合痕が明瞭に残る。胎土は砂粒をほとんど含まず精良な粘土を使用し、色調は肌茶色を呈す。8・9は口縁部が外反する小型壺。8は体部が球形で、口縁部が外反しながら開き、端部は尖る。口縁部内面と外面の全面に、やや幅広の静止ヘラミガキを施す。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。器壁がやや厚い。9は小型精製壺で、口縁部の内外面と体部の外面に細かいヘラミガキを行う。口縁部は内外面ともにヘラミガキに先行するハケ目が観察される。体部内面はナデ。胎土に砂粒をほとんど含まず精良な粘土を使用し、色調は橙茶色を呈す。

10~21は甕である。10はわずかにレンズ状となる在来系甕の底部。外面は縦方向の板ナデを行う。胎土に粗砂を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。11~21は布留系甕。16・19~21以外は黄灰褐色を呈す。11は口縁部が直線的に伸び、端部を内側につまみ出す。12は口縁部が内湾して開き、内端部を丸くつまみ出す。13は口縁端部がシャープな面をなし、また内端部をわずかにつまみ出す。肩部に一条の沈線を巡らす。口縁部外面には煤が付着する。14もやはり口縁部がシャープな面をなし、内端部をわずかにつまみ出す。内面の屈曲部下に横ナデ前の横ハケ目が残る。甕にしては砂粒が少



第34图 15号竖穴住居迹出土土器实测图① (1/3)



第35图 15号竖穴住居跡出土土器実測図② (1/3)

なく比較的精良である。15は口縁部の内湾が弱く、直線的に開く。端部はわずかに窪む。肩部内面には指圧痕が残る。16は胴部に対して口縁部の径が大きい。口縁部は内湾が弱く、端部は水平面をなす。色調は灰色を呈しやや生焼けである。17も16同様口縁部の内湾が弱く、上端部が水平面をなす。18は内湾して立ち気味に開き、端部を丸くおさめる。肩部にはヘラ状工具による刺突文を巡らす。19も口縁部が立ち気味に開き、端部は面をなす。肩部には一条の波状沈線を巡らす。色調は橙茶色を呈し、胴部下半は二次被熱により器表が剥落する。20は肩部の約1/4周にハケ状工具による列点文を巡らす。色調は明茶灰色を呈す。胴部外面には煤が付着する。21は口縁部が直線的に開き、端部の内側をつまみ出す。肩部にはハケ状工具による刺突文を巡らす。色調は黄灰褐色を基本とするが外面が部分的に橙茶色を呈し、化粧土を塗布した可能性もある。煤の付着はない。

22～25は高坏の脚部である。22は柱状部をもたず、付け根から緩やかに開いて裾部へと移行する。外面は縦ハケ目。内面は上方が工具による縦ナデ、下方が横ハケ目。胎土に砂粒を若干含み、暗黄灰褐色を呈す。23・24は中膨らみの柱部に細かいヘラミガキを間隔をあけて行うもの。どちらも胎土は精良である。23は屈曲部のやや上に2ヶ所穿孔を行い、色調は肌茶色を呈す。24は端部が丸い。色調は黄肌色を呈す。25は他のものよりもヘラミガキの幅が広く、また全面に密に行う。穿孔は屈曲部よりやや上に行い、孔数は不明。胎土は精良で茶色を呈す。

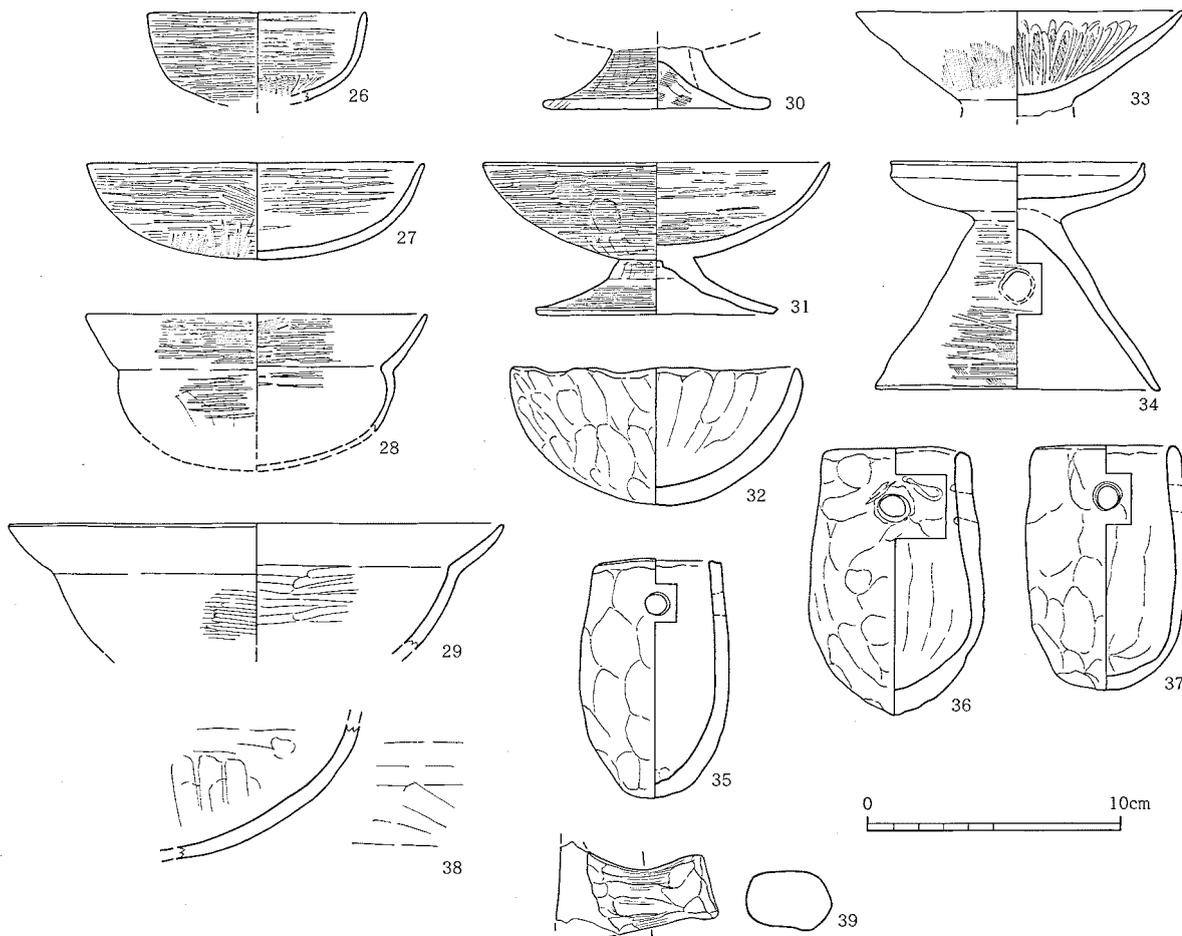
26～32は鉢である。26は口縁部が直立するやや深めの小型精製鉢。内外面ともヘラミガキを行い内底面には放射状の暗文を施す。胎土は精良で色調は暗黄灰色を呈す。27は浅い体部の小型精製鉢。胎土に砂粒をやや含むものの比較的精良。色調は黄肌色で全面に橙色の化粧土を塗布する。28・29は口縁部が外反する鉢である。28の口縁部内面は細かい横ハケ目後に疎な横ヘラミガキを加える。外面は全面横ハケ目。胎土は精良で、色調は肌茶色を呈す。29はやや大型である。内面に幅広の横ヘラミガキ、外面に横ハケ目を行う。胎土に全く砂粒を含まず精良な粘土を使用し、色調は黄肌色を呈す。30・31は精製の脚付鉢である。30は内面ハケ目後ナデ、外面横ヘラミガキ、黄肌色を呈す。31は丁寧な横ヘラミガキを行い、色調は橙茶色を呈す。脚内頂部には軸受孔を有す。32は手捏ねの鉢である。胎土に砂粒を若干含み、色調は暗黄灰色を呈す。

33は器台の受部であろうか。内面はハケ目の後に暗文状のヘラミガキ、外面は細かい縦ハケ目を行う。胎土は比較的精良で色調は黄灰色を呈す。34は小型の精製器台。受部の立ち上がりは短く外反し、端部は尖る。裾部は直線的に開き、端部は小さな面をなす。裾部には穿孔を行うが、数は不明。受部は風化が著しく、調整は不明。裾部は内面ナデ、外面ハケ目後横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。

35～37は蛸壺である。いずれも色調は黄灰褐色を呈す。35は胴部の径が他のものよりも小さく、スリムな器形となる。体部は直立し、端部は面をなす。36は下半が膨らみ、上半は直線的に内傾している。底面は尖っている。37も上半と下半の径がほとんど変わらず直立する。端部は丸い。

38・39は半島系の土器である。38は陶質の壺底部片である。外面の上半は回転ナデ、下半は静止ナデ、内面は上半が回転ナデ、下半がナデ上げを行う。内面には無文の当て具痕と思われる稜線がかすかに観察され、指圧痕も残る。胎土は砂粒を全く含まず極めて精良である。色調は暗灰色を呈す。焼成は非常に良好で硬質に焼き上がる。

39は土師器に近い軟質の甌把手部である。全面指整形で、形状は端部がやや上を向いた円柱状をなす。胴部内面はハケ目調整を行い、接合は胴部差し込み式となる。色調は内面黄灰褐色だが外面



第36図 15号竪穴住居跡出土土器実測図③ (1/3)

は黒色を呈す。二次被熱のためだろうか。胎土に砂粒を若干含む。

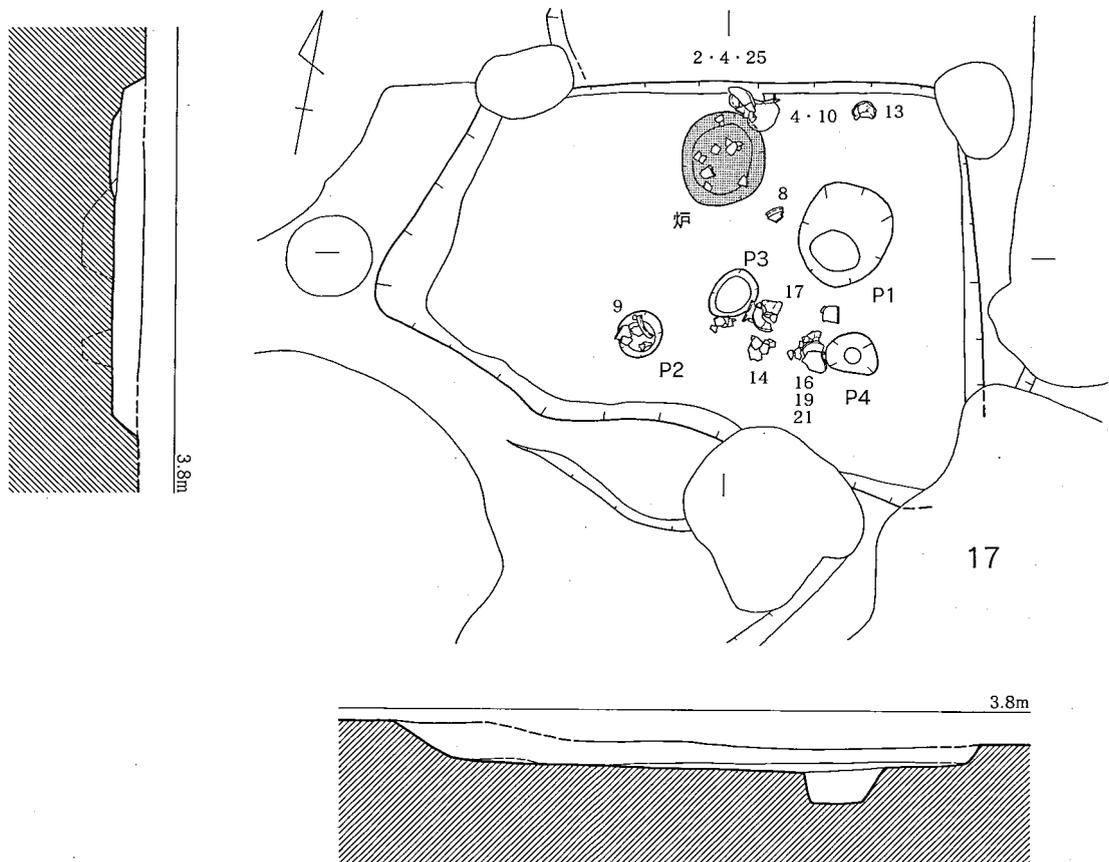
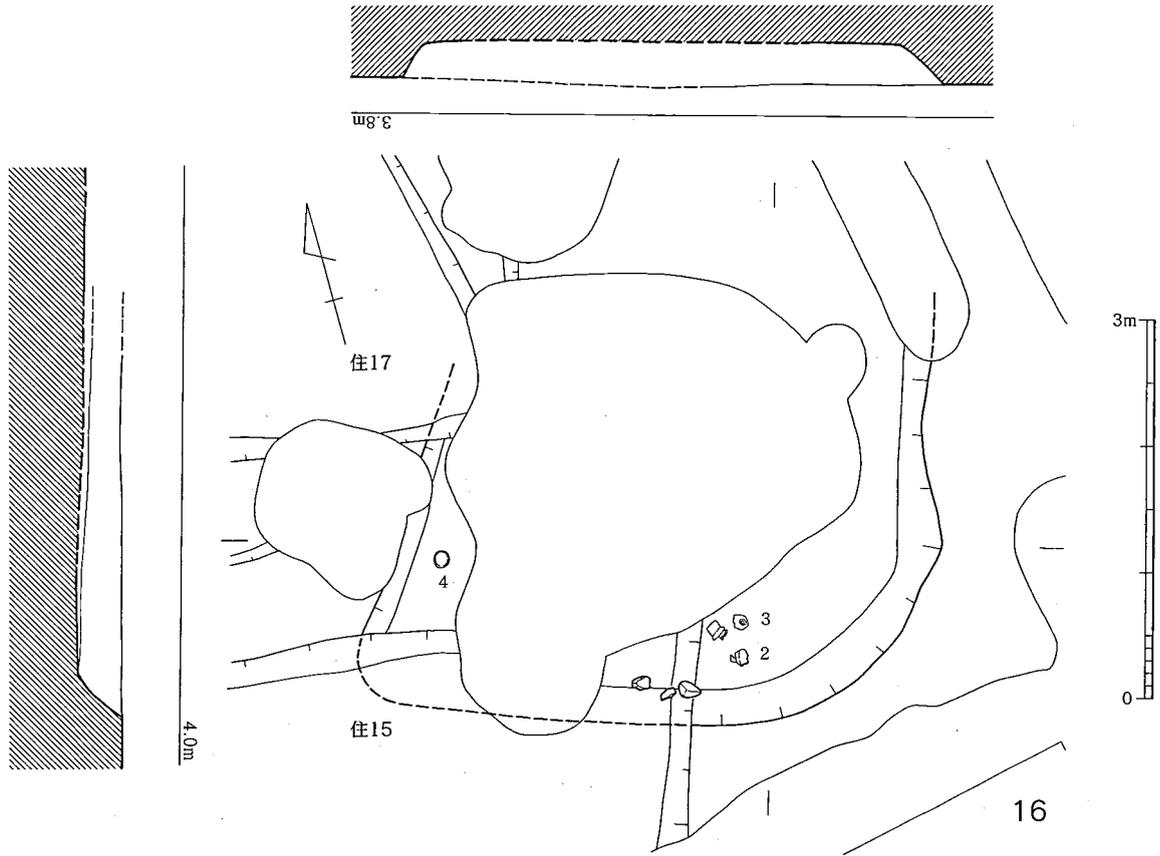
16号竪穴住居跡 (図版12、第37図)

I区北3で検出した竪穴住居跡である。15号竪穴住居跡の北東に位置し、これと重複する。15号竪穴住居跡よりも古く、また17号竪穴住居跡とも重複する位置にあるが攪乱のため先後関係は確認できなかった。当住居跡もまた大半が攪乱を受ける。南壁は長さ3.7m程度に復元される。北壁は全く遺存しておらず、従って南北長は不明である。正方形或いは東西に長い長方形プランになるだろう。遺構面から床面までの深さは35~40cmを測る。

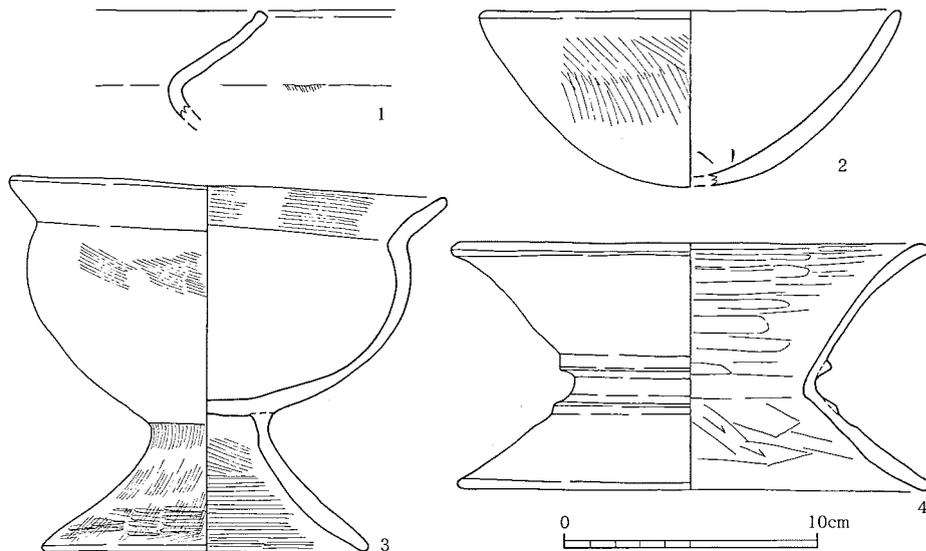
図示した土器は全て床面直上から出土したものである。

出土土器 (図版43、第38図)

1は布留系甕の口縁部片である。わずかに内湾して開き、端部は弱くくぼむ。胎土に砂粒を若干含む、色調は内面黄灰褐色、外面茶灰色を呈す。2は在来系の鉢である。内面ナデ、外面は粗いハケ目の後に口縁部と底部付近のみナデ調整を行う。胎土に砂粒を若干含む黄灰色を呈す。3も在来系の脚付鉢。鉢部は外反口縁を有すもので、口縁部は外反して短く開き、端部を丸くおさめる。口縁部は内外面とも横ナデを行い、口縁部には先行する横ハケ目が観察される。鉢部内面はナデ、外面は上半がハケ目、下半がナデ。脚部は外反しながら付け根から開いていくもので、端部は丸くおさめ



第37図 16・17号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第38図 16号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

る。内外面ハケ目調整を行い、外面の裾部にはハケ目前のタタキが観察される。胎土は砂粒を若干含む茶灰色を呈す。

4は山陰系鼓形器台である。外面は全面ナデ、内面は受部側がヘラナデに近い横ヘラミガキ、裾部側がヘラケズリ。胎土に砂粒を若干含む。色調は肌茶色を呈し、外面のみ赤茶色の化粧土を塗布する。

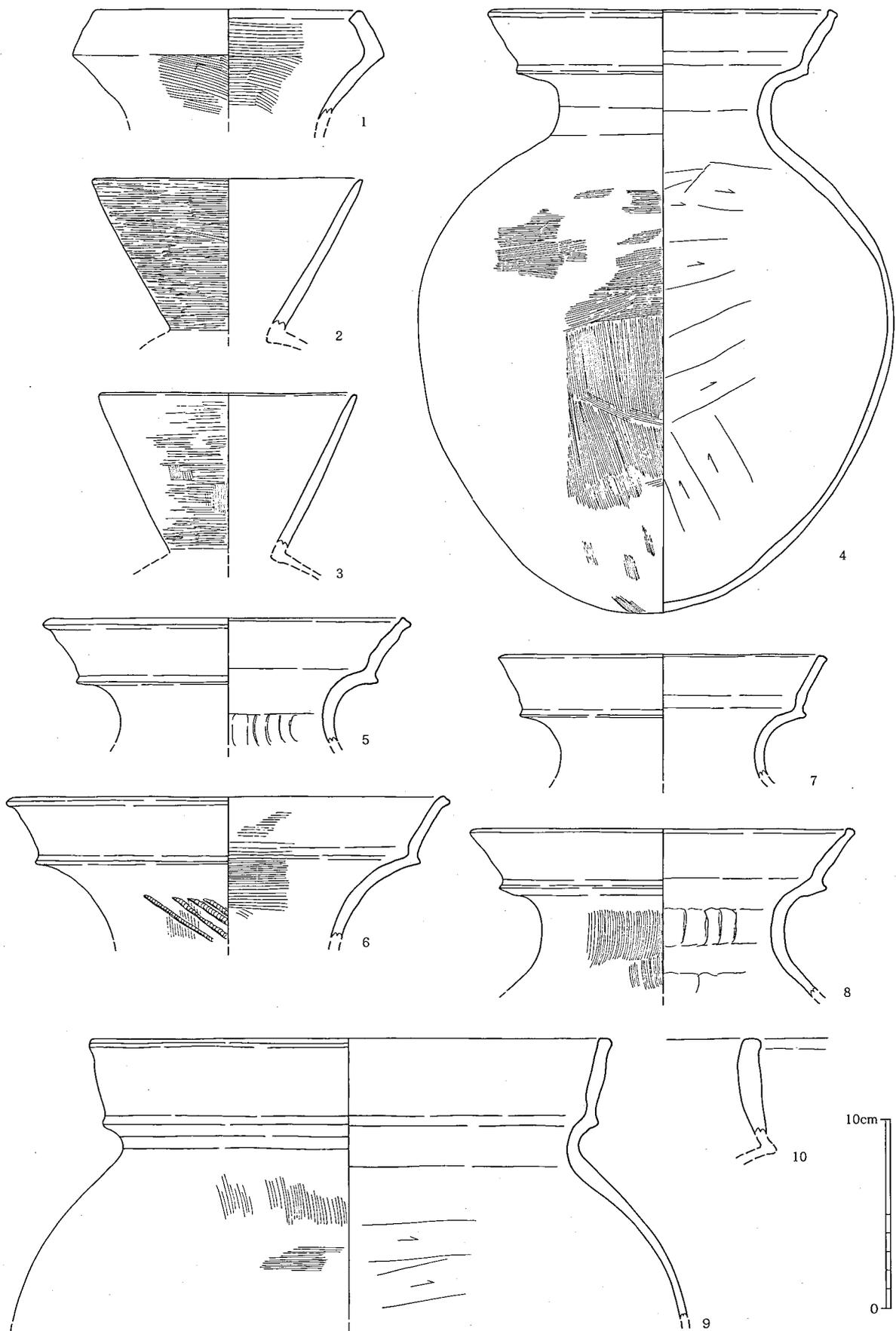
17号竪穴住居跡 (図版12、第37図)

I区北3で検出した竪穴住居跡で、16号竪穴住居跡のすぐ北西に位置する。比較的攪乱は少ないものの、南壁・西壁が崩壊したようで平面形はかなりいびつになる。現状から推察すると長軸4.0m、短軸3.5mに復元され、東西に長い長方形プランの竪穴住居跡となる。床面はほぼ水平で、遺構面からの深さは30cmを測る。床面の中央からやや北よりの位置で径80cm、深さ5cmの炉跡を検出した。また、P1～P4の4つのピットを検出した。このうちP3は深さ15cmと浅く、支柱穴となりうるものではない。これ以外はいずれも支柱穴の可能性のあるものの、配置に規則性が窺えず断定するまでには至っていない。

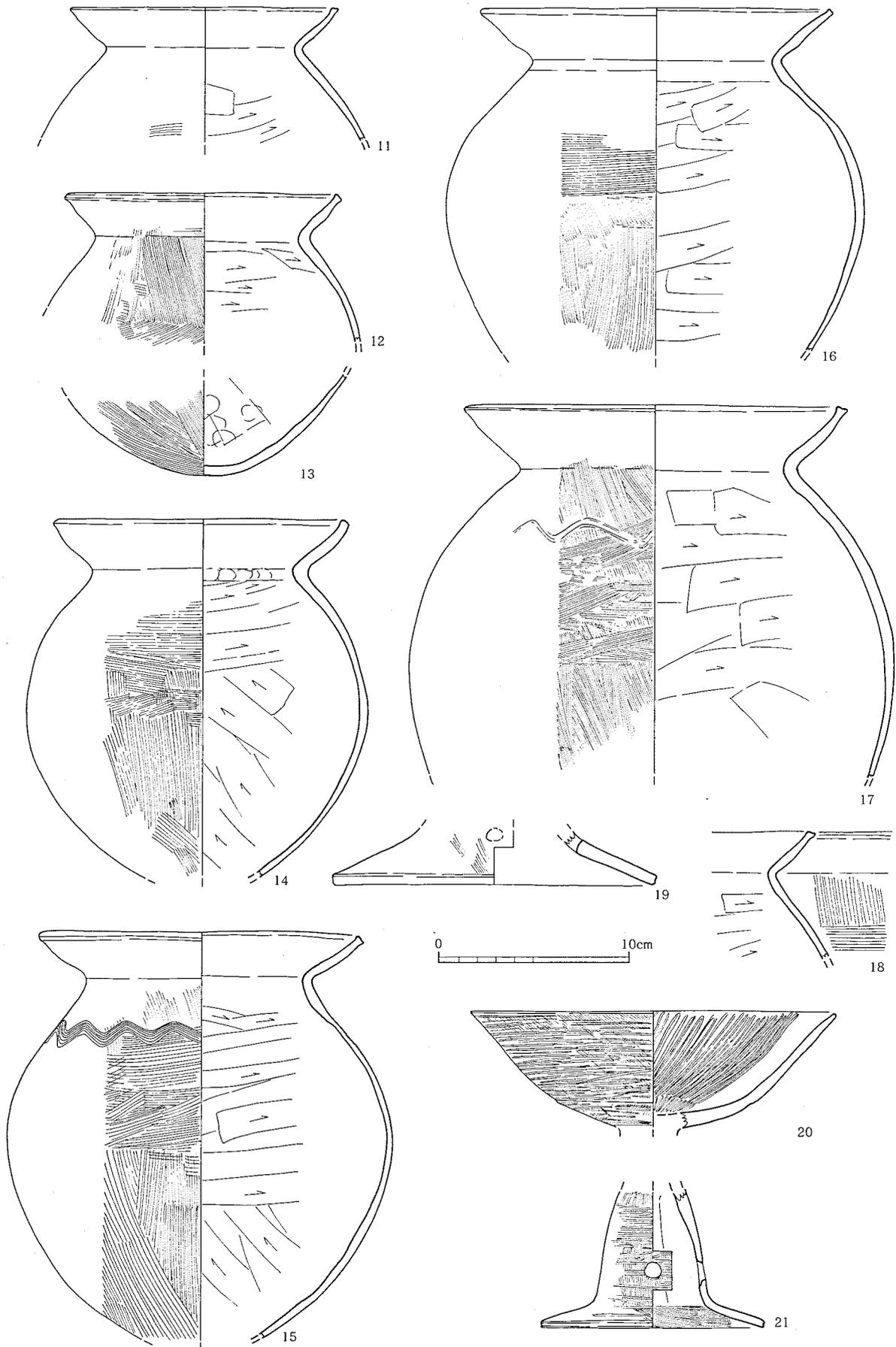
遺物は中央から東側にかけて比較的まとまって出土している。図示した土器のうち、2・4・8・9・12～17・19・25・29は床面直上からの出土である。これら以外は覆土から出土したものである。他に土錘も出土している。

出土土器 (図版43・44、第39～41図)

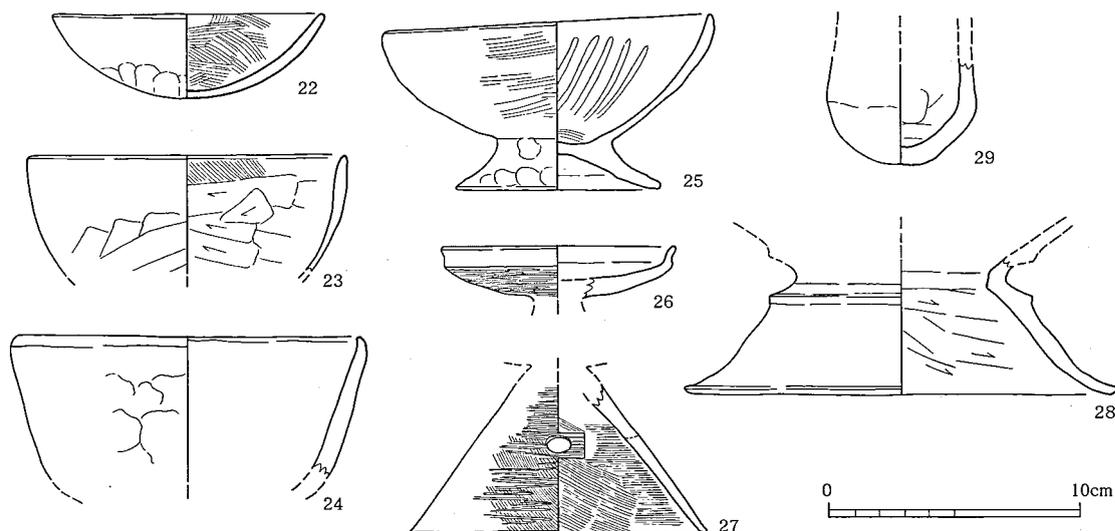
1～10は壺である。1は在来系の二重口縁壺。頸部が細く、二次口縁部は内湾している。内外面ハケ目で弥生時代後期後半に中心をおくもの。2・3は畿内系の精製直口壺である。どちらも精良な粘土を使用し、内面はナデ、外面は緻密な横ヘラミガキを行う。3にはヘラミガキに先行する縦ハケ目が観察される。4～10は山陰系二重口縁壺。いずれも色調は黄灰褐色に近い。4は完形に復元される。胴部は最大径が中位よりやや上にあり、あまり肩が張らない。一次口縁の湾曲はあまり強くない、二次口縁部は直線的に開き端部を内側につまみ出す。胎土に砂粒を若干含む。外面には部分的に黒斑が認められる。5は一次口縁部が大きく開き、口縁端部は面をなし外側がややつまみ出される。頸



第39图 17号竖穴住居跡出土土器実測图① (1/3)



第40图 17号竖穴住居跡出土土器実測図② (1/3)



第41図 17号竪穴住居跡出土土器実測図③ (1/3)

部内面には縦指ナデが残る。6は二次口縁部が外反気味に開き、端部はやはり面をなし、外側につまみ出す。頸部にハケ状工具による平行斜線文が見られる。内面には横ナデ前の横ハケ目が残る。7は端部のつまみ出しが全くなく、丸味をもって終わっている。8は端部内側に肥厚が見られる。頸部外面は縦ハケ目の後に横ナデを行っていない。また内面の指ナデが明瞭に残る。外面に化粧土を塗布するようにも見えるがはっきりしない。9・10は大型品で口縁部が直立するもの。9は肩部が丸味を帯び頸部は短く外反する。口縁部はわずかに開き、端部は水平面をなす。10は口縁部下半に比べて上半の器壁が厚くなる。やや内傾気味に直立するものである。上端は丸味を帯びた水平面をなす。

11～18は布留系甕である。11は口縁端部が水平面をなす。12・13は接合しないが同一個体。12は口縁部が直線的に開く。端部を上方につまみ出し、肩部には横ナデに先行する縦ハケ目が明瞭に残る。胴部内面のへラケズリは屈曲部近くまで行われる。内底部には指圧痕が明瞭に残る。外面は強く二次加熱を受け、一部煤が付着する。14は口縁部が胴部に対して大きく、胴部は長胴気味となる。最大径は中位に位置する。内面のへラケズリは屈曲部に近い。外面二次加熱のため部分的に赤変する。15は口縁部が内湾して大きく開き、端部は外側にわずかにつまみ出される。胴部最大径は中位よりやや上にある。肩部に櫛描波状文を巡らす。16は口縁部がほとんど内湾せず直線的に開く。外面には黒斑が部分的に認められる。17は肩部に粗い櫛描波状文を巡らす。口縁端部内側のつまみ出しは明瞭で、上端はわずかに窪み、水平に近い。18は口縁部が内湾して開き、外端部を長めにつまみ出している。上端は水平に近い面をなす。強い二次被熱のため灰褐色を呈し、また外面に煤が付着する。これ以外の11～17は黄灰褐色に近い。

19～21は高坏である。19は穿孔のある高坏裾部。直線的に開き、端部は面をなす。胎土に砂粒を若干含み、肌白色を呈す。20は畿内系の坏部。外面の屈曲部には形骸化した凹線がわずかに認められる。内面は暗文状の縦ヘラミガキ、外面は縦ハケ目後に横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。21は柱部下方に穿孔を一つ行う。柱部内面はナデ、裾部内面はハケ目、外面はハケ目の後に疎らな横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。

22～25は鉢である。22～24は粗製の鉢。22は内面ハケ目、外面は底部にヘラナデを行った後に全面ナデを行う。胎土に砂粒を若干含み、肌灰色を呈す。23は口縁が直立し、深みのある鉢。口縁

端部は丸くおさめる。内面にヘラケズリやハケ目を使用するなど粗さが目立つ。胎土に砂粒を若干含み、暗黄灰色を呈す。24は体部が直線的に開き、口縁端部のみ短く内側を向く。外面には指圧痕が残る。胎土は精良で、色調は黄灰色を呈す。25は脚付鉢。鉢部内面には幅広のヘラミガキによる暗文を施し、外面はハケ目の後にナデを行う。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰色を呈す。

26・27は精製の小型器台である。26は屈曲部が明瞭で立ち上がり短く外反する。外面には細かい横ヘラミガキを行い、それ以外は横ナデ。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。27は直線的に開く裾部。内面はハケ目、外面はハケ目後に疎らな横ヘラミガキを行う。胎土は精良で橙茶色を呈す。28は山陰系鼓形器台の裾部。内面は横ヘラケズリ、外面と端部内側は横ナデ。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰色を呈す。29は上部を欠失する蛸壺。底面は小さな平底となり、やや下膨れの器形となるようである。色調は黄灰褐色。

18号竪穴住居跡（図版12、第42図）

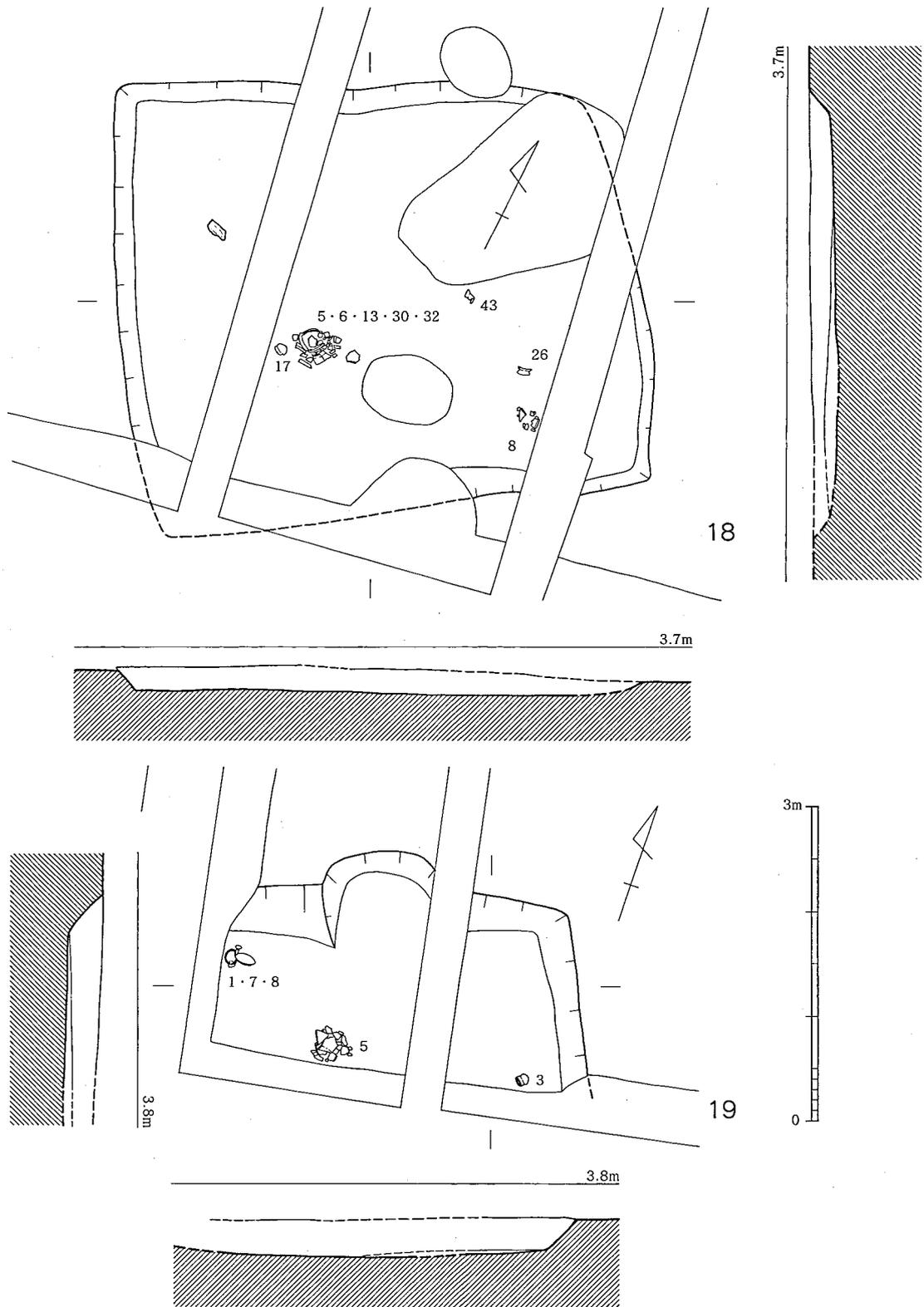
I区南5～7で検出した竪穴住居跡で、10号竪穴住居跡から2m西側に位置する。校舎の基礎や近世以降の攪乱を受けるものの、他の住居跡とも重複せず、比較的遺存状態が良い。平面形は東西に長い長方形プランで、北壁長4.4m、東壁長3.7mを測る。床面は中央付近がやや深くなっており、遺構面からの深さは25cmを測る。炉跡、ピット等は検出できなかった。遺物は床面直上から比較的まとまって出土しているが、いずれも破碎しており廃棄されたものであろう。5・6・8・13・17・26・30・32は床面直上から出土した。1・4・9～11・14・16・19・21～25・27～29・33・39・45は覆土上層の暗褐色細砂層から出土した。

出土土器（図版44・45、第43～46図）

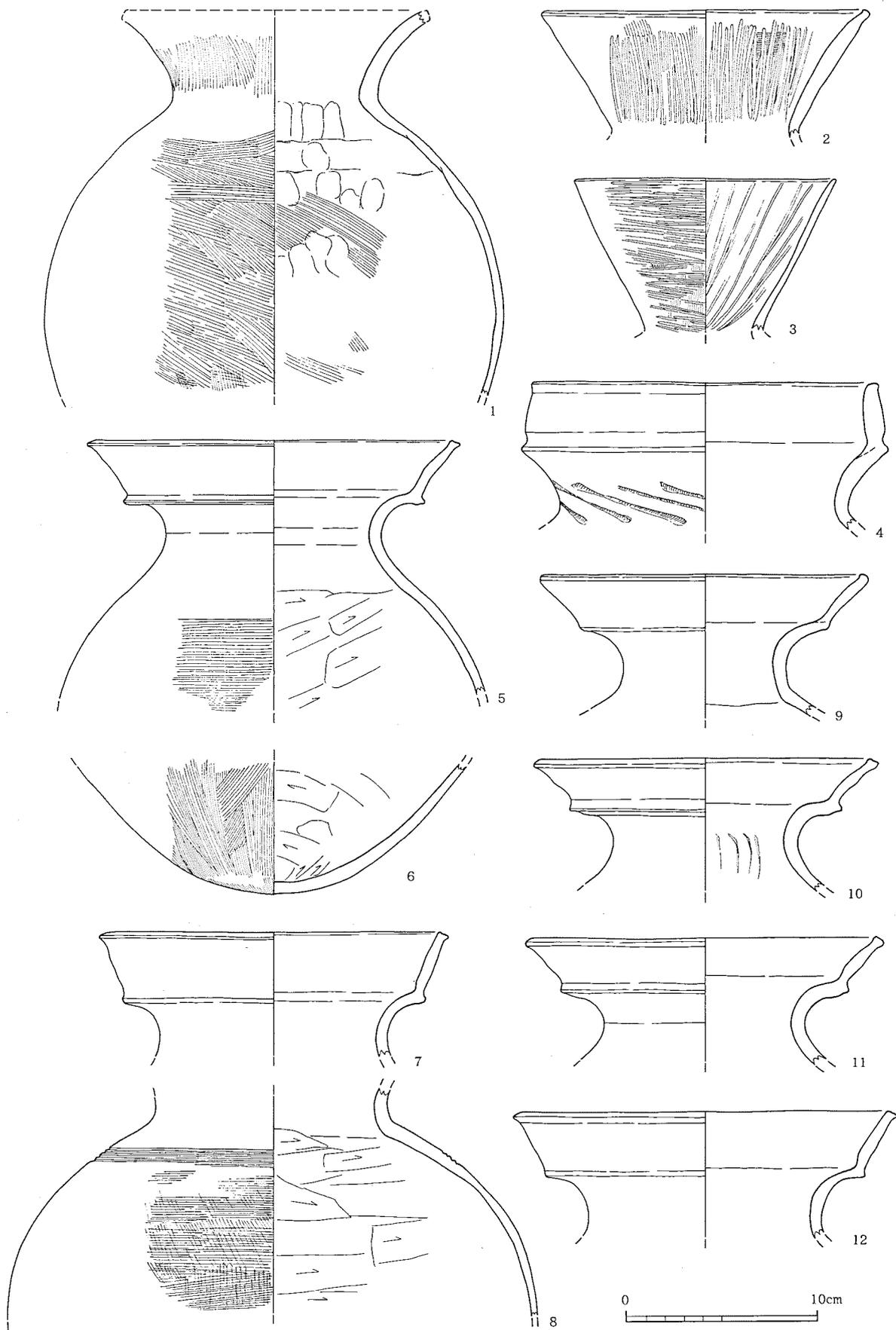
1～20は壺である。1は在来系の直口壺。胴部内面はハケ目後ナデ調整で、肩部には指圧痕が多く残る。外面は粗い横ハケ目。口縁部は外反しながら大きく開く。胎土に砂粒を若干含み、特に大粒の砂粒が特徴的である。色調は暗肌灰色を呈す。2は内外面とも縦ヘラミガキを行い、先行するハケ目が一部に残る。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。3は畿内系の中型精製直口壺。内面は縦ヘラミガキによる暗文、外面は横方向の緻密なヘラミガキ。胎土は精良で色調は橙茶色。

4～15は山陰系二重口縁壺である。色調は11以外は黄灰褐色を呈す。4は頸部が短く外反し、口縁部が直立する。上端部は水平面をなす。器壁が厚く大型品であろう。頸部外面にはハケ状工具の刺突による平行斜線文を巡らす。5は6と同一個体。一次口縁部は大きく外反し、外面の突帯が大きく、二次口縁部は外反気味に開いて端部は外側へつまみ出される。7と8は接合しないが同一個体。やはり口縁端部の外側をつまみ出す。口縁部は立ち気味に開いている。8の肩部には櫛描直線文を巡らす。9・10は端部内側をわずかにつまみ出す。9は口縁端部、屈曲部外面の稜ともに丸味を有す。10は屈曲部の形状が特徴的である。11・12はつまみ出しが明瞭ではなく、肥厚したような感じである。11は一次口縁部の器壁が厚く、二次口縁部は短い。生焼けらしく暗黄灰色～暗灰色を呈す。13は一次口縁部が水平近くまで強く外反する。内面横ヘラケズリ、外面はハケ目で下半はナデ消しを行う。14は大型の壺肩部片。櫛描直線文およびヘラ状工具による綾杉文を施文する。15はやや尖底気味となる。内面ナデ、外面ヘラナデを行う。二次被熱は認められない。

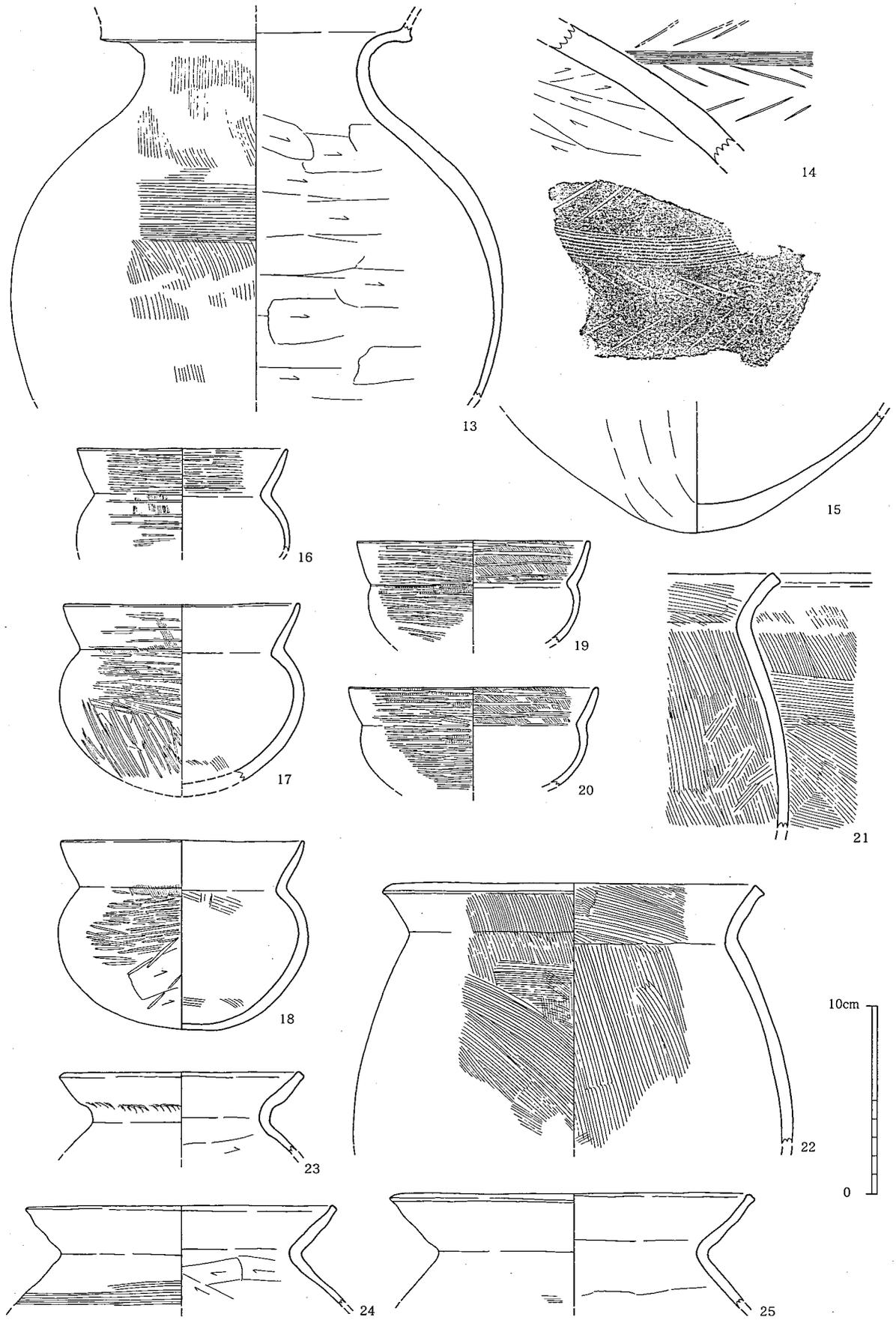
16～20は精製の小型丸底壺。16は口縁部の内外面及び胴部外面に細かい横ヘラミガキを行い、胴部には先行する縦ハケ目が確認される。胴部内面はナデ。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。17は



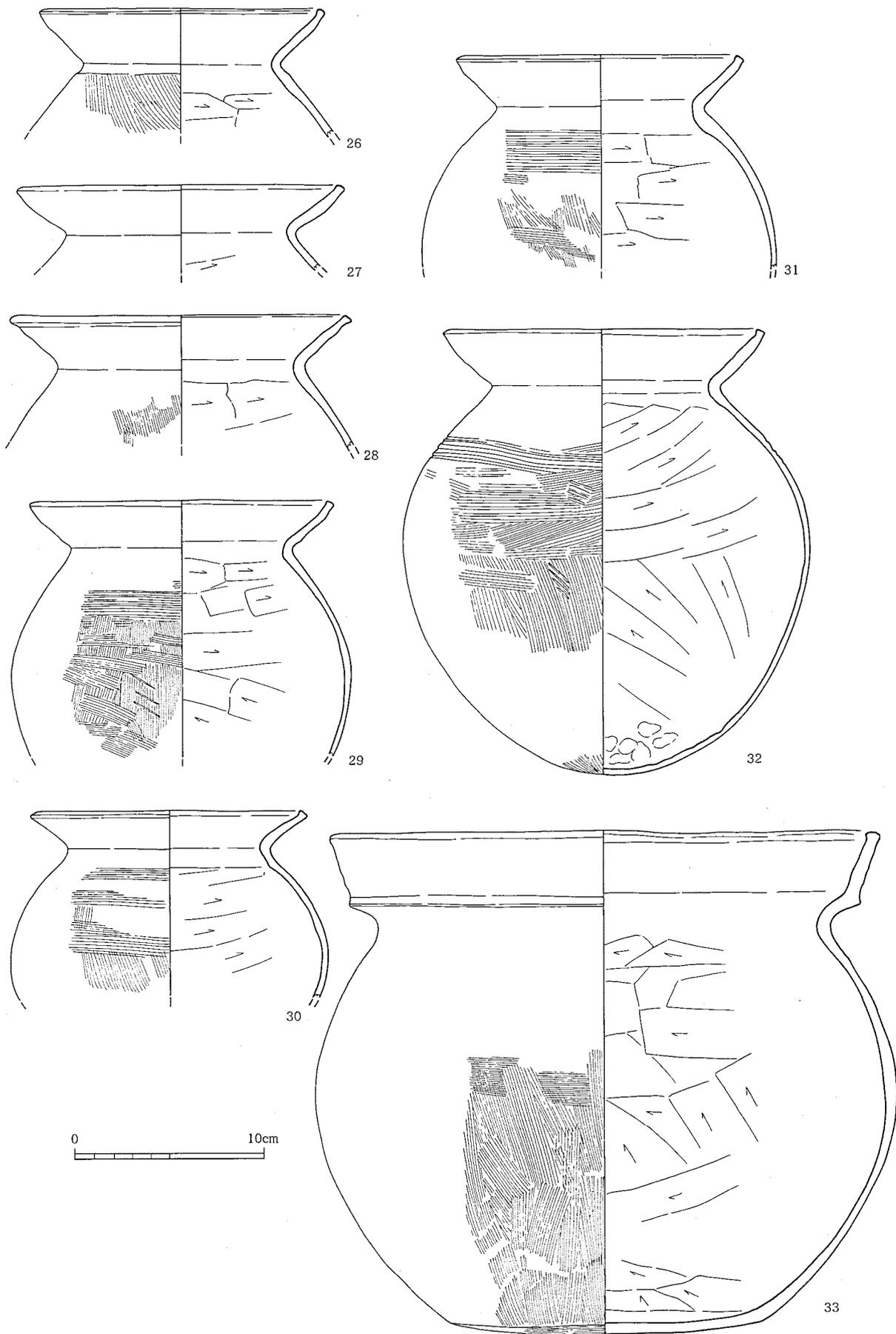
第42图 18·19号竖穴住居迹实测图 (1/60)



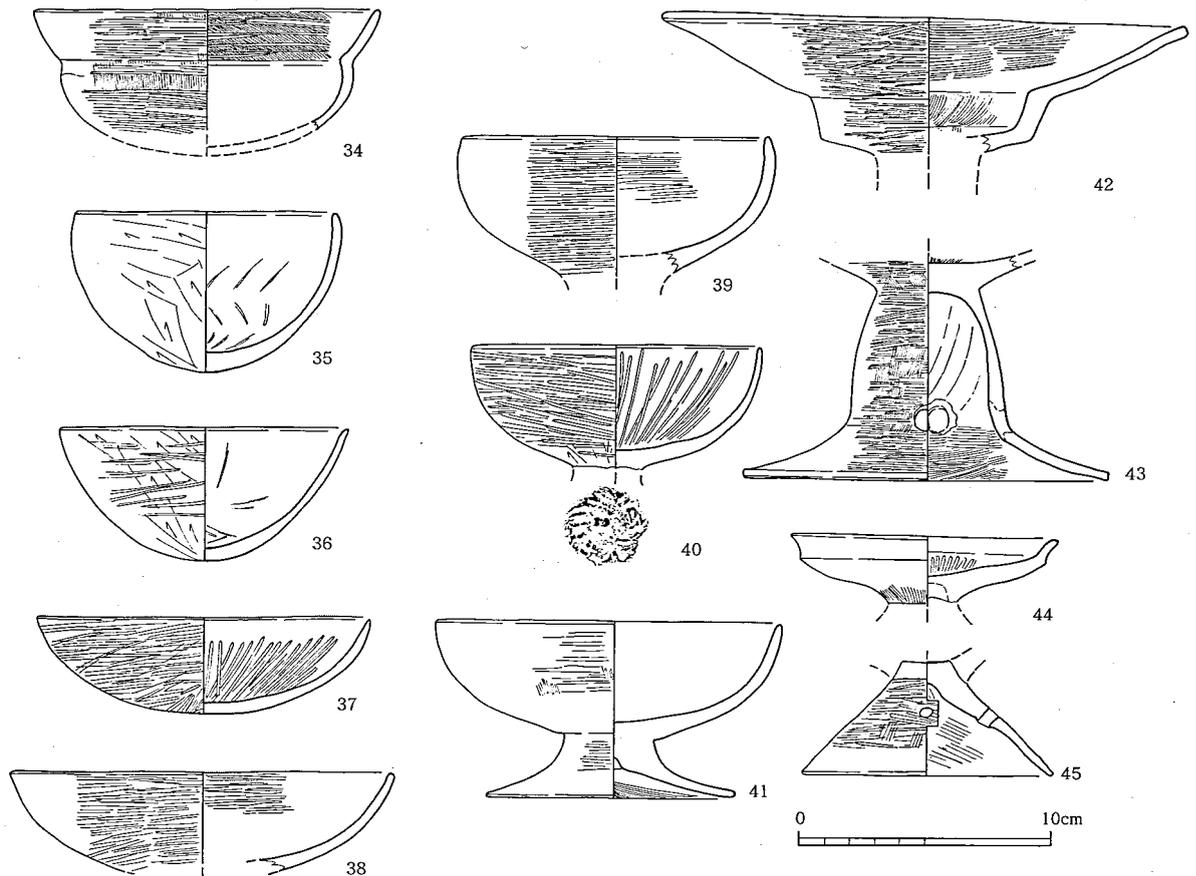
第43图 18号竖穴住居跡出土土器实测图① (1/3)



第44图 18号竖穴住居迹出土土器实测图② (1/3)



第45图 18号竖穴住居跡出土土器実測図③ (1/3)



第46図 18号竪穴住居跡出土土器実測図④ (1/3)

胴部最大径が中位よりやや上にある。内面は横ナデ、外面は疎らな横ヘラミガキ、底部付近はヘラケズリの後に一定方向のヘラミガキを行う。胎土は極めて精良で色調は橙肌色を呈す。18の口縁部付近は風化が著しく調整不明。胴部外面にはヘラミガキが観察され、これに先行するハケ目、ヘラケズリも確認できる。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。19・20は体部が浅く、壺というより鉢に近い形状である。どちらも外面は横ヘラミガキ、内面の口縁部はハケ目の後に数条の横ヘラミガキを行う。体部内面はナデ。胎土は精良。19は肌茶色、20は橙茶色を呈す。

21～32は甕である。21・22は在来系の甕。肩部は張らず、口縁部はわずかに外反しながら弱く開く。端部はシャープな面をなす。内外面ハケ目調整を行い、胎土に砂粒をやや多く含む。どちらも外面に煤が付着する。21は暗茶灰色、22は暗肌灰色を呈す。23～32は布留系の甕。23はやや小型のもの。屈曲部外面にハケ目工具端部の痕跡が残る。布留系ではないかもしれない。24は肩部に櫛描直線文を巡らす。口縁部は直線的に開き、端部は面をなす。25は口縁部がわずかに内湾し、端部は面をなす。26は口縁部が直線的に開き、内端部を肥厚させる。肩部は直線的で、ハケ目の後の横ナデを省略する。27は口縁部の開きが大きい。内端部はわずかにつまみだされる。28は口縁部が直線的に開き、端部は面をなす。29は胴部に対して口縁部の径が大きい。口縁部は直線的に開き、端部付近のみ内湾する。30はやや小型で球形に近い胴部となる。口縁部は外反気味に開き、内端部をつまみ出す。31は口縁部が直線的に開き、端部付近のみわずかに内湾する。内端部をつまみ出すすが、ごくわずかでシャープさに欠ける。32は完形に復元できたものである。胴部は倒卵形で、最大径が中位よりやや上に位置する。口縁部はあまり内湾せず開く。端部は内側へとつまみ出す。

外端部はシャープに尖る。胴部内面は下半が縦ヘラケズリ、上半が横ヘラケズリで底部付近には指圧痕が残る。外面は上半が横ハケ目、下半が縦ハケ目で一部に先行する右上がりタタキが観察される。肩部には直線に近い雑な櫛描波状文を巡らす。胎土に砂粒を若干含み、色調は暗黄灰色を呈す。外面は二次加熱を強く受け黒変し、また煤が付着する。

33～41は鉢である。33は山陰系の大型二重口縁鉢。口縁部は直線的であり開かず、端部は内側をわずかにつまみ出す。上面は丸味を有す。底部はほとんど平底に近いレンズ状となる。体部は内面ヘラケズリ、外面下半はハケ目、上半は横ナデ。底面にもハケ目を行う。色調は黄灰褐色を呈す。34は外反口縁の小型精製鉢。体部は浅く、口縁部は内湾する。口縁部内面はハケ目の後に横ヘラミガキを数条行う。外面は内面に比べると緻密である。胎土は精良で色調は黄灰色を呈し、全面に橙肌色の化粧土を塗布する。35・36は尖底気味で体部が深い鉢。35は口縁部が直立し丸味を帯びた体部となる。外面はヘラナデ、内面はナデを行うが先行するヘラナデが痕跡的に残る。胎土は畿内系の小型精製器種と大差なく精良な粘土を使用し、色調は橙茶色を呈す。36は口縁部が開き体部の丸味が少ない。外面には疎らな横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。37・38は直口縁の浅い精製鉢。37は内面に暗文状の縦ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は黄肌色を呈す。38は内面に密な横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。39～41は精製の脚付鉢。39は口縁部付近がやや内傾する。内外面横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。40は内面に縦ヘラミガキによる暗文を施文する。外面は緻密な横ヘラミガキ。脚との接合部にはヘラ状工具による刻目を入れる。胎土に砂粒をわずかに含むが比較的精良な粘土を使用し、色調は茶色を呈す。41は他の2点に比べると浅い鉢部となる。脚部は短い柱部をもち、裾部は大きく開き端部は丸く仕上げる。風化が著しく内面の調整は不明。外面にはハケ目の後に横ヘラミガキを行う。内頂部には軸受孔を有す。胎土は精良で色調は橙肌色を呈す。

42は有段の高坏。内底面は水平に近く、そこから鋭く屈曲してほとんど開かずに立ち上がり、そこからまた鋭く外折して大きく直線的に開く口縁部へと至る。端部は面をなす。内面はハケ目後に弱い横ナデ、外面は細かい横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は茶褐色を呈す。43は高坏の脚部。柱部は中膨らみのエンタシス状を呈す。柱部内面はナデ、裾部は内面ハケ目、外面は縦ハケ目の後横ヘラミガキ。穿孔は屈曲部のやや上に2ヶ所行い、半乾燥時に外側から行っているため内面の孔周辺は器表が剥離している。色調は茶褐色を呈し、胎土は精良。

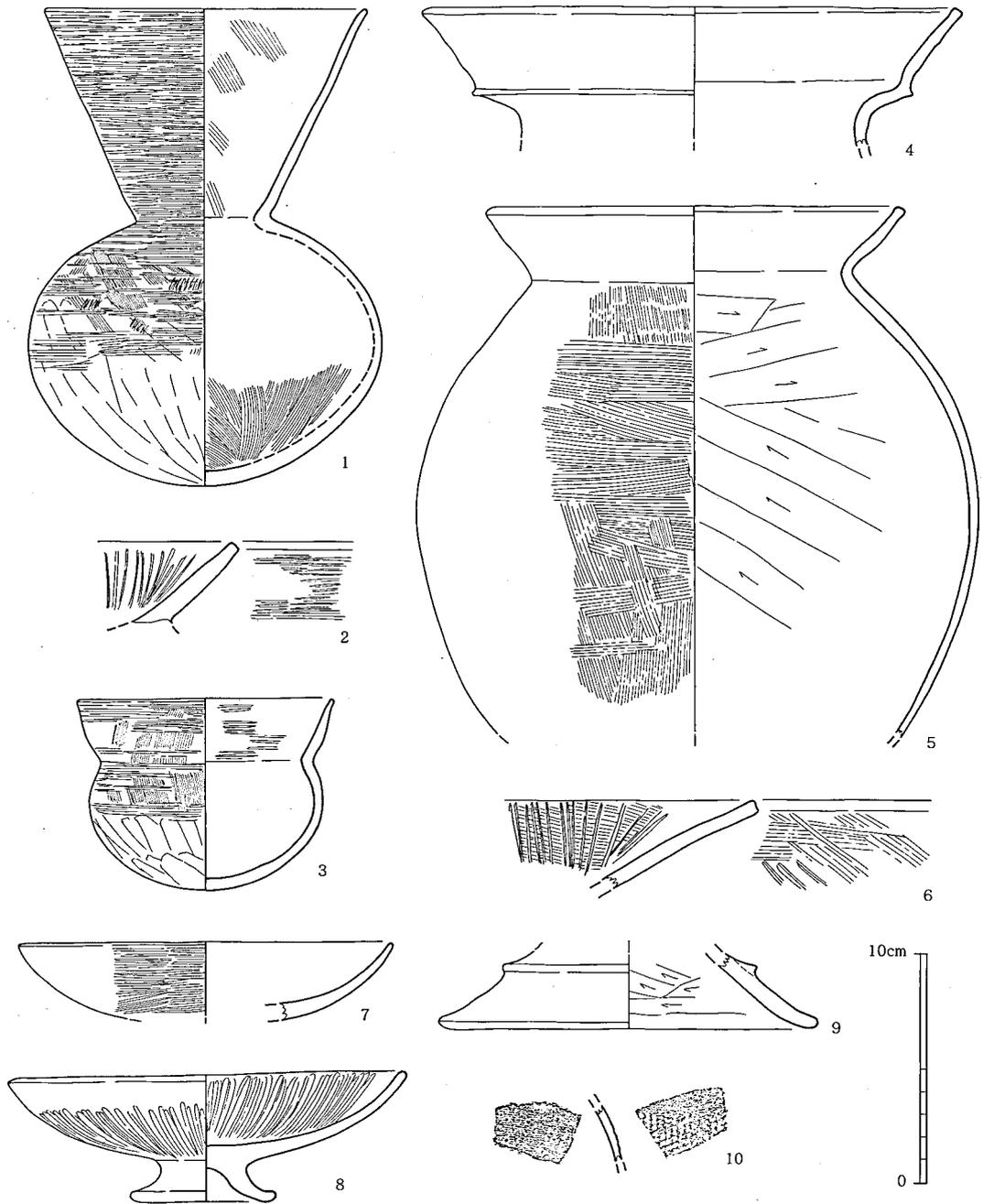
44・45は小型器台である。44は立ち上がりが大きく開く。屈曲部、端部ともにシャープさを欠く。内底部にはヘラミガキによる暗文が認められる。立ち上がりの内外面と、受部外面の上半は横ナデを行い、外面の下半はハケ目が残る。色調は肌色を呈し胎土は精良。45は直線的ではなく中位で微妙な内湾を有す裾部。端部は尖り、上方寄りに小さな穿孔を4ヶ所行う。内面はハケ目後ナデ、外面はハケ目後横ヘラミガキ。色調は黄灰色を呈し、胎土は砂粒を若干含みあまり良くない。

19号竪穴住居跡 (図版13、第42図)

I区南2・3で検出した竪穴住居跡で、18号竪穴住居跡から7m西側に位置する。校舎基礎によって攪乱を受け、さらに南側が調査区外へと伸びるため検出できたのは北東側の一部分にすぎない。床面は中央付近がやや深くなっており、遺構面からの深さは40cm、東壁際で深さ35cmを測る。ピット等は検出できなかった。

図示した土器のうち、1・3・5・7・8は床面直上からの出土、それ以外は覆土からの出土である。
出土土器 (図版45、第47図)

1~4は壺である。1は畿内系の精製中型直口壺。胴部は球形で最大径が中位にあり、頸部は強く縮まり口縁部は長く直線的に開く。口縁部外面は緻密な横ヘラミガキ、内面はハケ目後横ナデ、胴部外面はタタキをナデ消した後に細かいハケ目を行い、最終調整に疎らな横ヘラミガキを行ったようである。下半は縦ヘラナデを行う。胴部内面の下半にはハケ目が観察されるが、上半は不明。胎土は精良で色調は橙茶色を呈し、胴部下半には黒斑が残る。2は畿内系二重口縁壺の口縁部か。内面は横ナデ後に縦ヘラミガキによる暗文、外面は細かい横ヘラミガキ。胎土に砂粒を若干含み、色調は暗肌茶色を呈す。3は小型丸底壺。外面の胴部下半はヘラナデ、上半および口縁部は縦ハケ目の後



第47図 19号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

に疎らな横ヘラミガキ。胴部内面はナデ、口縁部内面はナデの後に疎らな横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。4は山陰系二重口縁壺の口縁部。直線的に大きく開き、端部は丸味を帯びる。全面ナデ調整を行い、色調は黄灰褐色を呈す。

5は布留系の甕である。肩は張らずやや長胴となる。口縁部は短く内湾も弱く、端部はやや面をなす。肩部の横ナデは幅が狭い。外面には煤が多く付着する。

6は在来系高坏の坏部。内外面粗いハケ目の後に細いヘラミガキを行う。胎土には砂粒をほとんど含まず精良で、色調は黄肌色を呈す。

7は浅い精製の鉢。内面はナデ、外面は細かい横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は茶色。8は脚付鉢。体部は浅く、内外面に縦ヘラミガキによる暗文を行う。裾部は短く外反し、端部は跳ね上げ気味に丸くおさめる。胎土は砂粒を若干含みあまり良くなく、色調は肌茶色を呈す。

9は山陰系鼓形器台の裾部。内面はヘラケズリ、外面は横ナデ。色調は黄灰褐色を呈す。

10は半島系の壺胴部片であろう。細片で傾きは不明。内面はナデ、外面は小さな斜格子タタキを行う。胎土に砂粒を若干含み、淡黄褐色を呈す。軟質焼成である。他に同一個体の小破片がもう1点出土している。

20号竪穴住居跡 (図版13、第48図)

I区南1で検出した竪穴住居跡である。19号竪穴住居跡から5m北東に位置する。校舎の基礎等によって大きく攪乱され、住居の壁は北側しか遺存していない。床面はほぼ水平で、遺構面からの深さは30cmを測る。北西端でカマドを検出した。ピット等は検出されなかった。

20号竪穴住居跡カマド (図版13、第48図) 住居跡の北西端に位置するカマドである。西壁が全く遺存していないので断定は出来ないが、恐らく北西コーナーに造り付けられ、カマド主軸がコーナーの中軸線上に沿うタイプであろう。遺存状態は非常に悪く、特に左袖は部分的に粘土塊が検出できたに過ぎない。復元で右袖長1.4m、左袖長1.5mを測る。右袖の幅は30cm、高さ15cm。火床には焼面が残り、この焼土面の規模は長軸50cm、短軸30cmを測る。カマド構築土には粘土と細砂を使用し、粘土のみで構築された他のカマドと比べるとやや弱い感を受ける。火床付近は被熱のため赤変が著しい。

図示した土器のうち、3・4はカマド南側の床面直上から出土、12・13はカマド内から出土、それ以外は住居跡覆土からの出土である。

出土土器 (図版45・46・84、第49・50図)

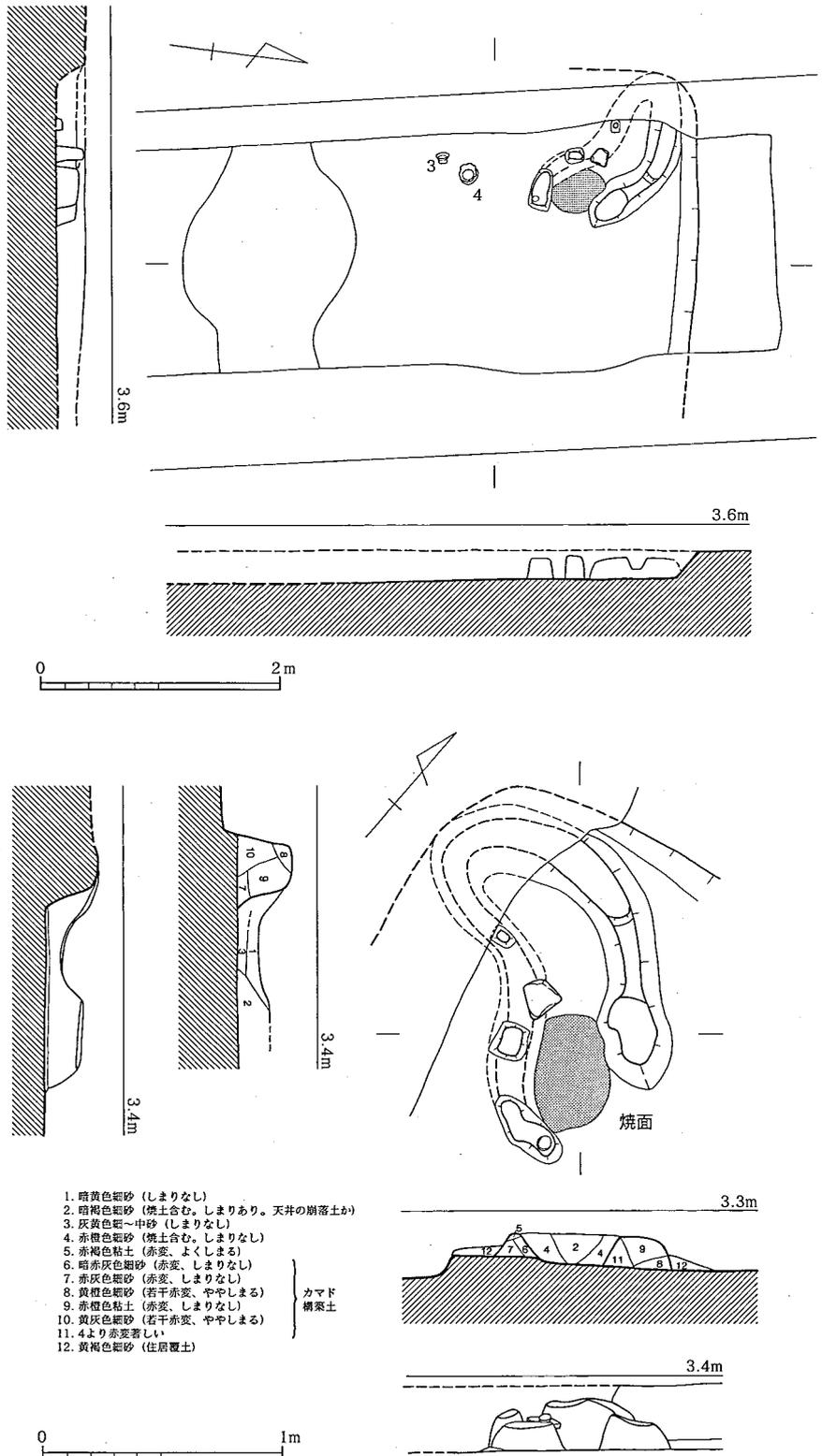
1～3は壺である。1・2はどちらも色調は黄灰褐色。1は一次口縁部の外反度が強く、屈曲部外面の突帯は下方に垂下する。頸部が長く筒状を呈す。2は山陰系二重口縁壺である。口縁部は外反し、口縁端部を外側に丸くつまみ出す。頸部はやはり長めで内傾している。3は精製の小型丸底壺である。胴部最大径は中位よりやや上に位置し、口縁部はやや長く、直線的に開く。口縁部内面は横ハケ後に下方のみ横ヘラミガキ、外面は縦ハケ目のみで横ヘラミガキは認められない。胴部内面はナデの後に雑なヘラミガキ、外面はヘラナデ、縦ハケ目の後に横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は黄灰色を呈し、口縁部の内面と外面の全面に橙肌色の化粧土を塗布する。

4～9は甕である。4～8は布留系の甕。6は橙褐色、8は灰褐色を呈し、他は黄灰褐色を呈す。4は口縁端部を丸くおさめ、屈曲部の稜は弱い。胴部内面のヘラケズリは屈曲部の近くまで行っている。

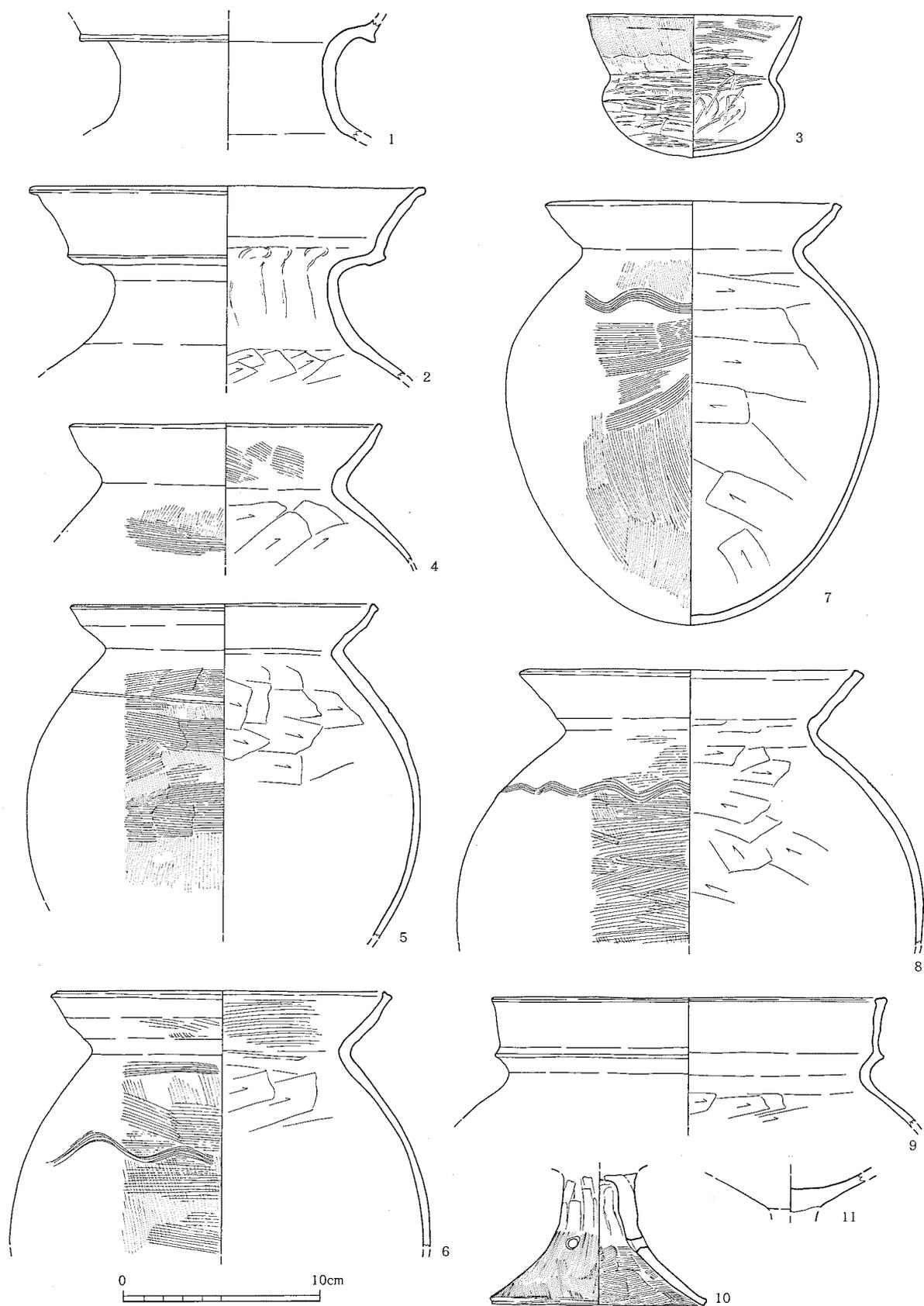
また口縁部内面には横ナデ前の横ハケ目が残る。5は胴部が長胴気味で肩部に一条の沈線を巡らす。口縁部は短く、口縁端部の内側をわずかにつまみ出す。胴部には煤が付着する。6もやはり長胴気味になるようである。口縁部は内湾して立ち気味に開き、端部は内側をつまみ出しており、端面は窪んでいる。肩部に櫛描波状文を巡らせ、口縁部の内外面に横ナデに先行するハケ目が観察される。外面には煤が付着する。7は長胴気味の倒卵形胴部となる。口縁部はわずかに内湾しながら開き、口縁端部の内側をわずかにつまみ出す。端部はやや面をなす。肩部には櫛描波状文を巡らす。8も同じく肩部に櫛描波状文を巡らせている。口縁部は直線的に開き、端部は面をなす。外面には二次被熱は認められない。9は山陰系の二重口縁甕。一次口縁部は短く外反

し、二次口縁部は直立する。端部は内側にわずかにつまみ出し、上面は水平面をなす。胎土は他の布留系甕と大差ないが、色調は赤茶色を呈し異質である。

10は低脚の高坏脚部。外面の柱部は縦ヘラナデ、裾部はハケ目調整を行う。柱部と裾部の境目に、穿孔を3ヶ所行う。柱部内面は縦ナデ、裾部内面は横ハケ目。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。



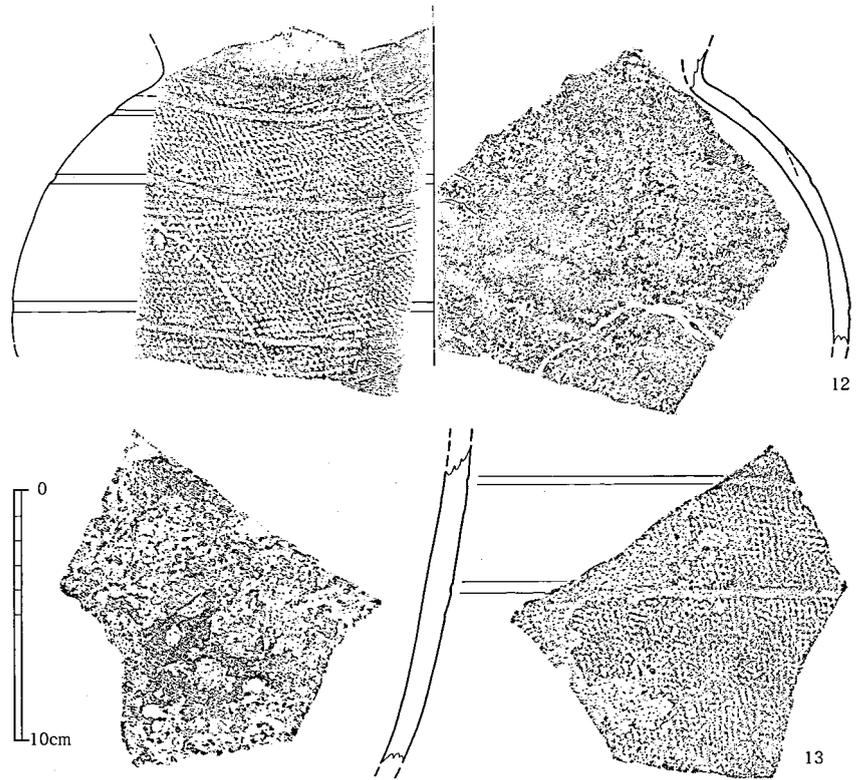
第48図 20号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60, 1/30)



第49图 20号竖穴住居迹出土土器实测图① (1/3)

12は小型器台の受部片である。立ち上がり部は接合面で剥離するため形状不明。胎土は精良で色調は赤茶色を呈す。

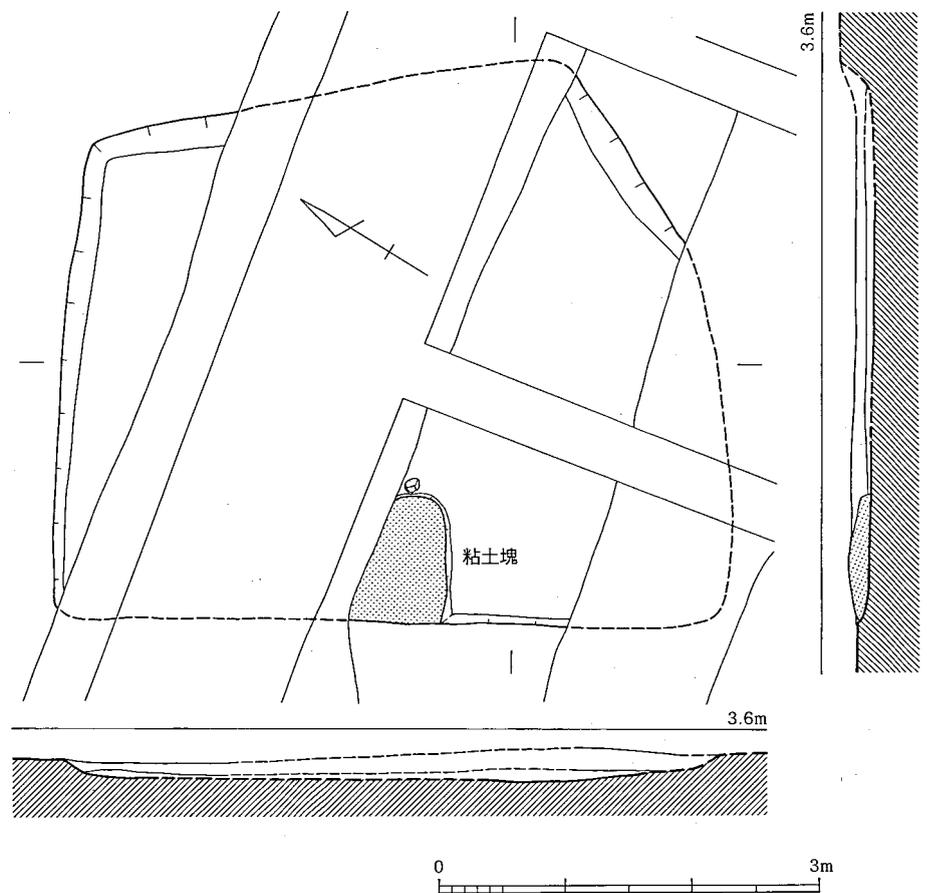
12・13は半島系の軟質土器である。12は肩部が丸く張った壺であろう。内面はナデており、肩部内面には指圧痕が幾つか認められる。外面は小さな斜格子タタキの後に幅広い凹線を巡らせる。凹線の間隔はかなり広い。胎土に石英・長石・雲母の細砂粒を若干含み、色調は淡黄褐色を呈し、在来系の土師器に似た質感である。13は12と同一個体。器表が若干赤変しているが、これはカマド覆土から出土したため焼土が付着したのであろう。



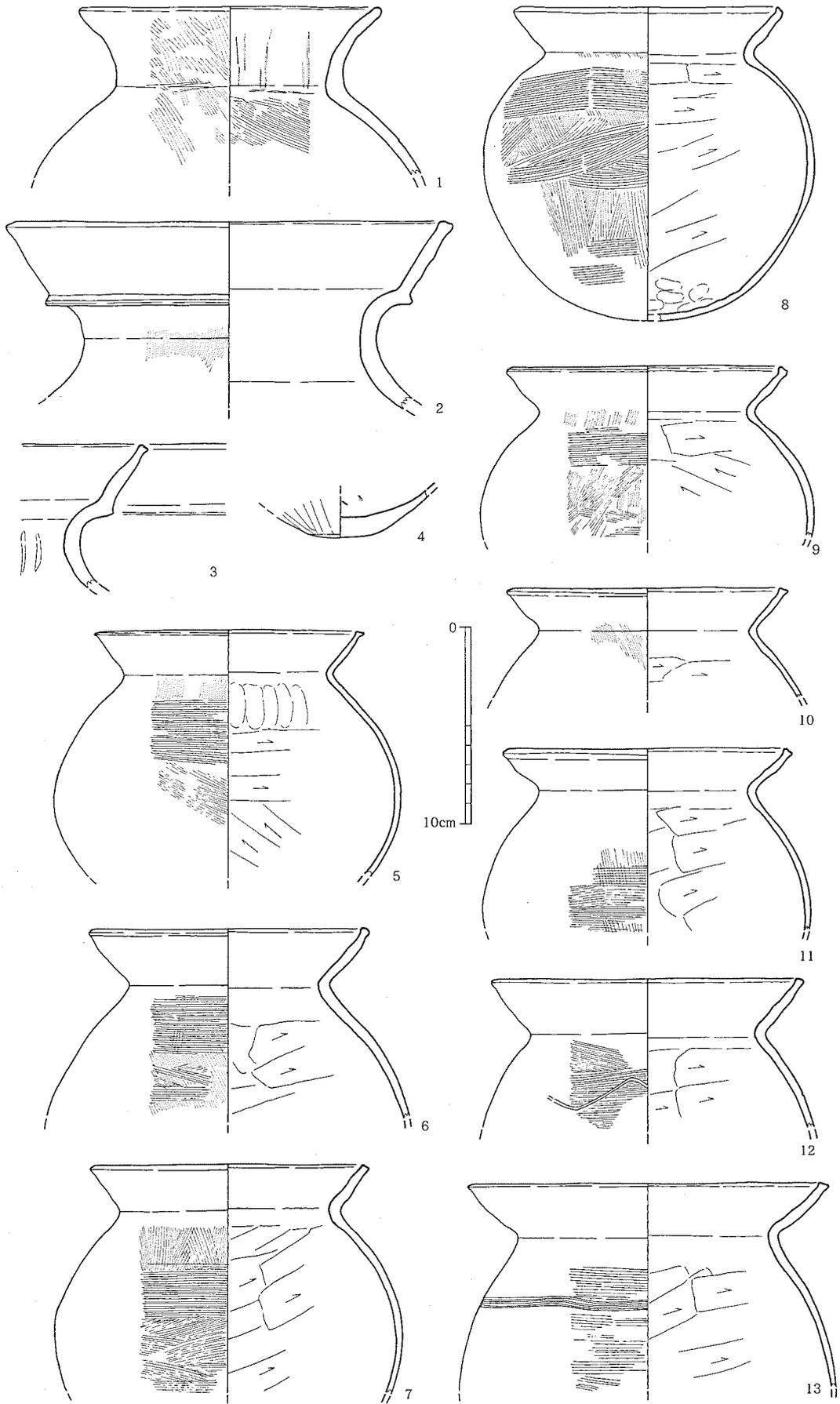
第50図 20号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)

21号竪穴住居跡 (図版14、第51図)

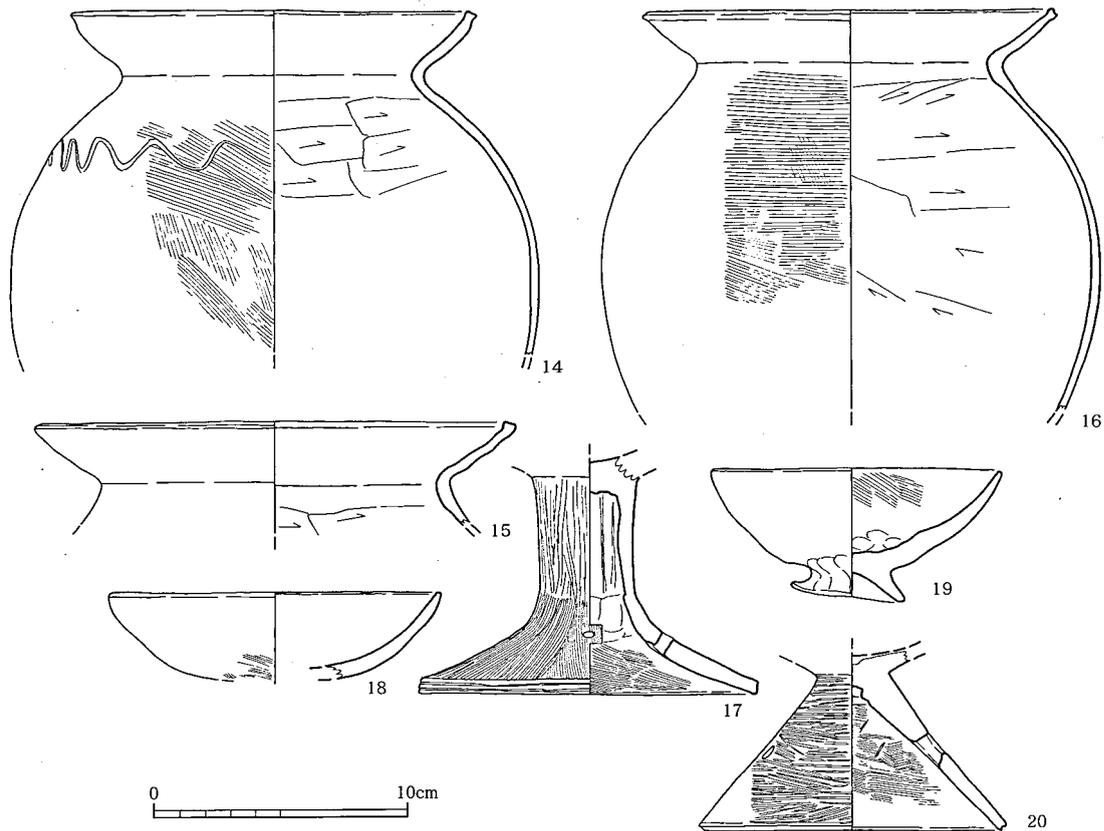
I区南4・5、I区中6で検出した竪穴住居跡である。18号竪穴住居跡から3m北側に位置する。22号竪穴住居跡と重複しており、当住居跡の方が新しい。平面形は方形に近いが、東側がかなりい



第51図 21号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第52图 21号竖穴住居迹出土土器实测图① (1/3)



第53図 21号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)

びつになる。これは埋没過程で壁が崩れたためであろう。北西壁は長さ3.8mを測る。総面積は20.7m²程度になると思われ、中型の部類に含まれる。床面はほぼ水平につくられ、遺構面から床面までの深さは25cmを測る。西壁際のほぼ中央で、長軸100cm、短軸80cm、高さ15cmの粘土塊を検出した。位置から考えて出入口施設として良いだろう。ピットは検出されなかった。遺物は比較的多く出土している。土器の他、21・22号竪穴住居跡上層として取り上げたものに刀子、鉄釘がある。

出土土器 (図版46、第52・53図)

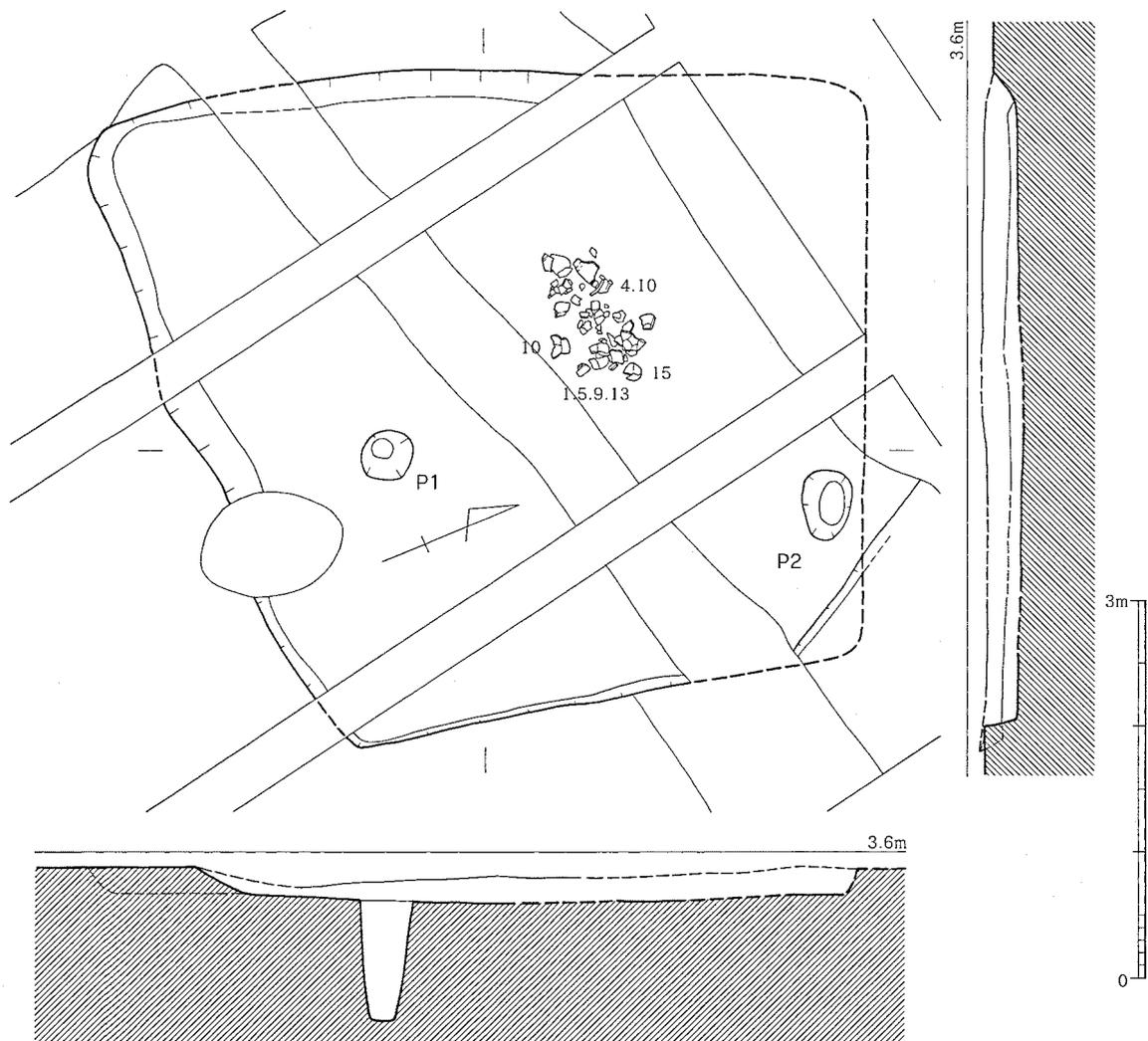
1~4は壺である。1は直口壺。口縁部は付け根から外反し、上半はさらに屈曲気味に外反する。端部は丸い。胴部内面はハケ目調整を行う。口縁部の内面は横ナデを行うが、先行する縦方向の工具痕が残る。胎土に砂粒をやや多く含み、色調は暗黄灰褐色を呈す。2・3は山陰系の二重口縁壺で色調はどちらも黄灰褐色。2は口縁部が直線的に開き、上面はわずかに窪む。3も口縁部が直線的に開き、端部は面をなす。4は内面ナデ、外面縦ヘラナデ。在来系甕の底部かもしれない。

5~16は甕である。7・15・16が肌灰色である以外は全て黄灰褐色を呈す。5は球形胴の小型甕で、口縁部は直線的にのび、端部は内外につまみ出す。総じて器壁は薄い。外面には煤が付着する。6は肩が張らず、口縁部は立ち気味に開く。口縁端部は丸く仕上げる。7は最大径が中位よりやや上に位置し、口縁部は直線的に短く伸びる。内面のヘラケズリは屈曲部近くにまで及ぶ。8は胴部が球形に近く、最大径が中位よりやや上にある。口縁部は短く直線的に伸び、端部の内側をつまみ出す。内面のヘラケズリは屈曲部近くにまで及ぶが屈曲部そのものの稜は鈍い。底部内面には押し出しの際の指圧痕が明瞭に残る。外面には煤が多く付着する。9は8に近い形状となる。10・11は口縁端部を内側につまみ出す。10は上端部が水平に近い面をなす。12は肩部の外面に一条のヘラ描き波状文を

巡らせる。口縁部は立ち気味に開き、端部は丸味を有す。13は肩部があまり張らず、胴部径に比べて口縁部の径が大きくなる。肩部には櫛描き直線文を巡らす。14は最大径がやや上位に位置し、口縁部は他と比べて立ち上がり気味である。内端部を丸くわずかにつまみ出し、上面はそのため弱く窪む。肩部外面には一条の波状沈線を巡らせる。煤はほぼ全面に及ぶ。15は口縁部が内湾して大きく開き、端部内側のつまみ出しが明瞭。16は肩部の張りが弱く、胴部はやや長胴気味になりそうである。口縁部はわずかに内湾し、端部は上方につまみ出す。外面には部分的に煤が付着する。

17は在来系高坏の脚部である。柱部は中膨らみのない円筒状で、裾部との境界は不明瞭である。裾部はやや器壁が厚い。直線的に開き、端部は面をなす。柱部外面は縦ヘラミガキ、裾部は内外面ハケ目調整を行う。穿孔は屈曲部に3ヶ所行っている。胎土は精良で色調は黄肌色を呈す。

18は直口縁の浅い鉢。底部外面にはハケ目が認められ、それ以外はナデ。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰色を呈す。19は脚付鉢。内面にはナデ前のハケ目が残り、脚部は整形時の指圧痕が明瞭である。胎土に砂粒を若干含み、色調は暗黄灰色を呈す。歪つて粗い作りである。20は精製小型器台の裾部。ほぼ直線的に開き、端部は面をなす。内頂部には軸受孔が残る。内面は細かいハケ目、外面は横ヘラミガキ。穿孔は3ヶ所。胎土は精良で、色調は橙茶色を呈す。



第54図 22号竖穴住居跡実測図 (1/60)

22号竪穴住居跡 (図版14、第54図)

I区南2~4で検出した竪穴住居跡である。21号竪穴住居跡と南西側で重複するが、当住居跡の方が古い。平面形は長方形に近いが、かなりいびつである。本来は長方形プランであったものが、埋没中に壁が大きく崩れたためいびつになったのであろう。床面はほぼ水平につくられ、遺構面から床面までの深さは20cmを測る。床面上ではP1・P2の二つのピットを検出した。P1は径40cm、深さ90cmを測り、深過ぎるため掘りすぎた可能性が高い。P2は長軸55cm、短軸40cm、深さ40cmを測る。炉跡等は検出されなかった。

遺物は中央付近からまとまって出土しているが、床面からやや浮いた状態であり、また破碎していることから一括廃棄された可能性が高いものと思われる。1・4・5・9・10・13・15がこの一括出土土器である。

出土土器 (図版46・47、第55・56図)

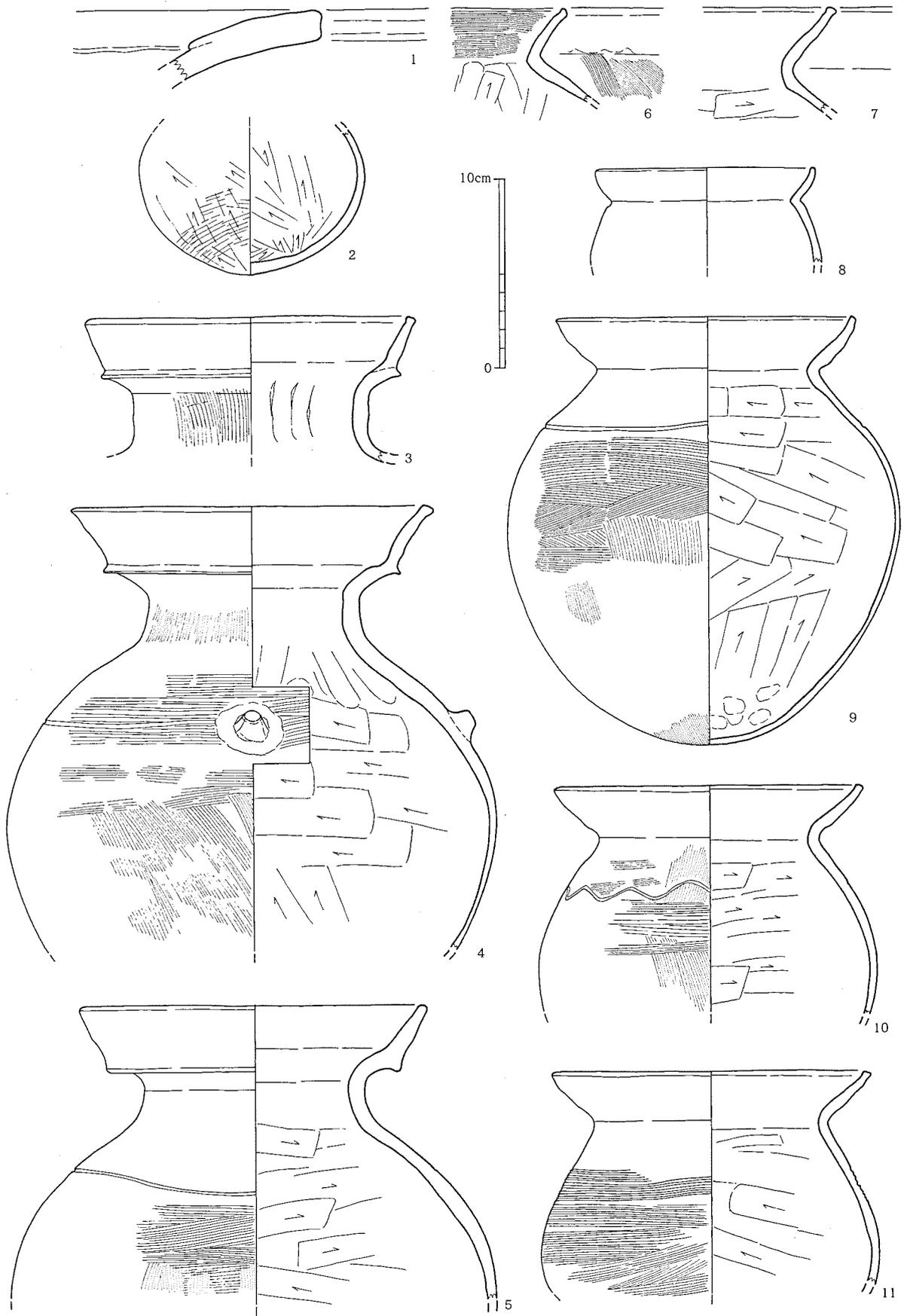
1は大型壺の口縁部。端部に粘土帯を貼付して肥厚させる。器表の風化が著しく調整不明。胎土に粗砂を含み、色調は肌色を呈す。2は球形胴の壺。底部は尖底気味となる。内面はヘラケズリ、外面はタタキ後ヘラナデ。胎土に砂粒を若干含み黄灰色を呈す。

3~5は山陰系二重口縁壺である。いずれも黄灰褐色を呈す。3は頸部が筒状で他と比べて若干長く、対して口縁部は短い。4は肩部に1ヶ所のみ突起を有す。対面には確実に存在しない。頸部は締め口縁部は外反気味に開き、端部は水平に近い面をなす。5は肩部に一条の沈線を巡らす。口縁部は短く器壁も厚い。口縁端部は丸くおさまられる。

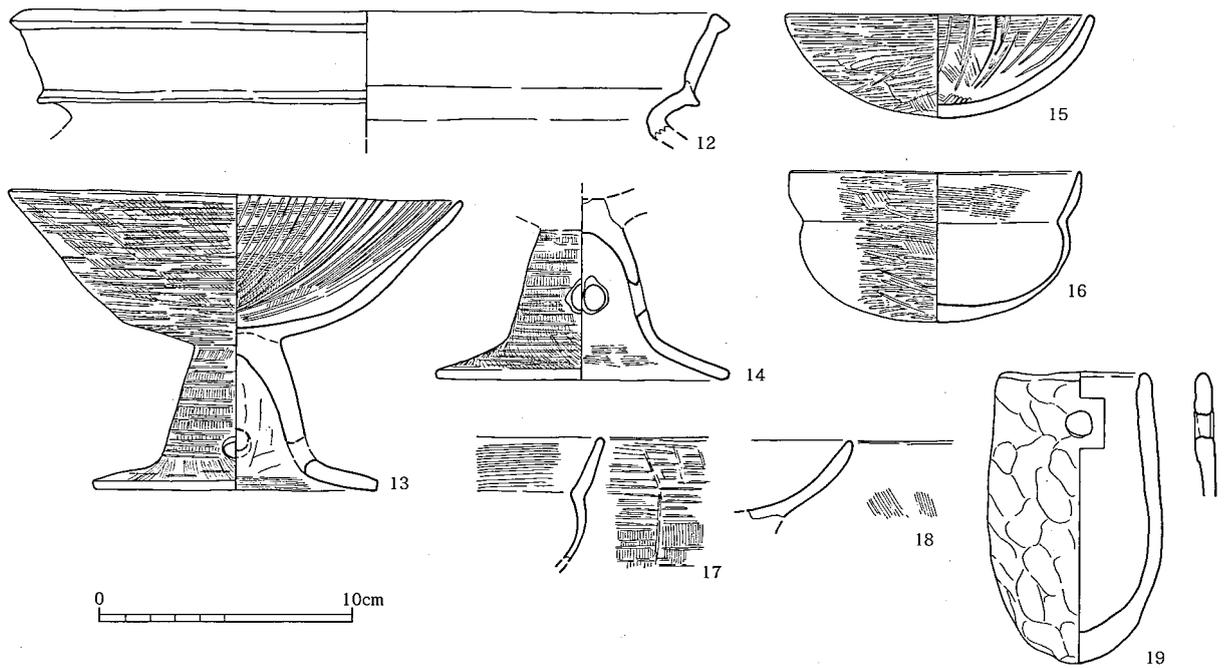
6~12は甕である。6以外は全て黄灰褐色を呈す。6は胴部内面を屈曲部直下まで縦ヘラケズリを行う。口縁部内面は横ハケ目を行う。口縁部は外反し、口縁端部は丸く、わずかに上方につまみ出す。色調は橙茶色を呈す。7は布留系甕で、口縁部が直線的に伸び内端部は不明瞭に肥厚する。8は鉢に近い形状をなす。口縁部は内湾し立ち気味に開き、端部は丸くおさめる。胴部は内外面ナデ。胎土に砂粒を若干含む。9は倒卵形で肩があまり張らない器形となる。口縁部は中央付近が肥厚し、緩く内湾する。肩部には一条の沈線を巡らせる。10・11は肩があまり張らず、胴部径に対して口縁部径が大きな器形となる。10は肩部に一条の波状沈線を巡らせる。11は櫛描直線文を巡らせる。12は山陰系の二重口縁甕。一次口縁部の外反は強く、二次口縁部との境の外側にはシャープな突帯を巡らせる。口縁部は直線的に開き、口縁端部は断面三角形となる。

13・14は畿内系の高坏。13は坏部の屈曲が不明瞭で上半は緩やかに外反して開く。脚部はエンタシス状に中膨らみとなり、裾部は短く大きく開く。端部はシャープな面をなす。坏部内面はハケ目後に縦ヘラミガキによる暗文を施す。外面はハケ目後横ヘラミガキ。柱部外面は縦ハケ目後疎らな横ヘラミガキ。穿孔は屈曲部近くに2ヶ所行う。胎土は精良で橙茶色を呈す。14もやはりエンタシス状の中中部となる。裾部は直線的に開き、端部は丸くおさめる。穿孔は柱部の中央に2ヶ所行う。胎土は精良で色調は肌色を呈す。

15~17は精製の小型鉢である。15は直口縁の鉢。内面にはヘラミガキによる暗文が見られ、初期整形時のタタキが残る。外面は横ヘラミガキ。他と比べて器壁が厚い。胎土は比較的精良で、色調は橙茶色を呈す。16・17は外反口縁の鉢。16は体部が浅く、口縁部は内湾しながら上方にのびる。屈曲部内面の稜は鋭い。口縁部内面は横ハケ目、体部内面はナデ、外面は横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。17も16とほぼ同様だが屈曲部内面の稜がやや丸味を有す。



第55图 22号竖穴住居跡出土土器実測図① (1/3)

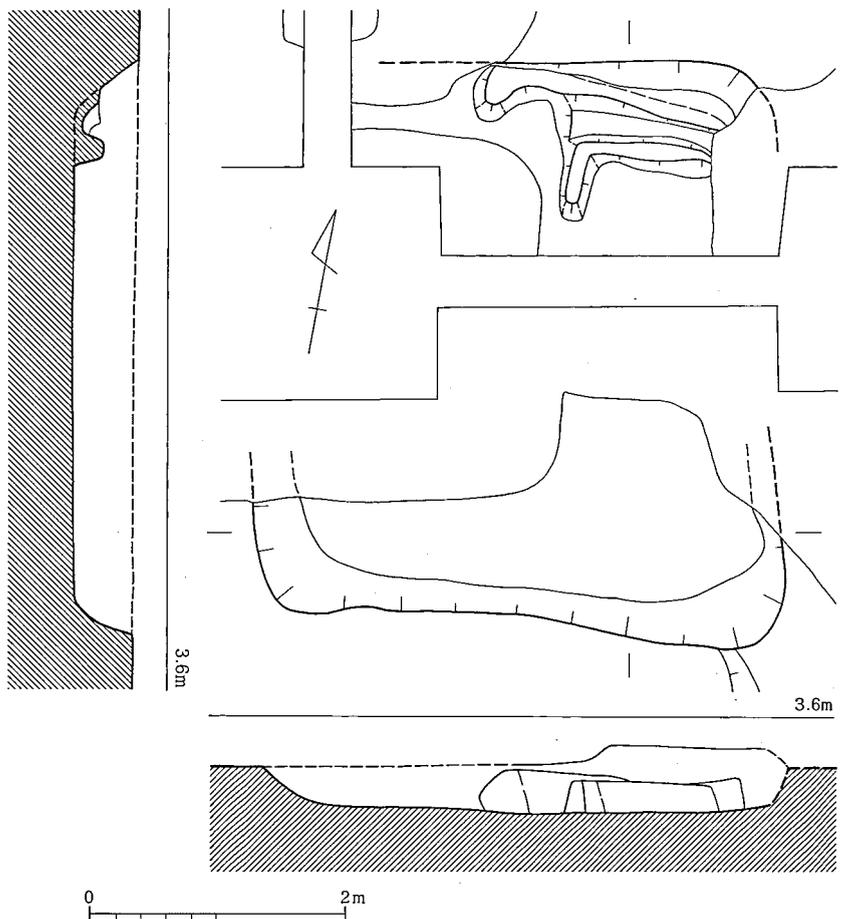


第56図 22号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)

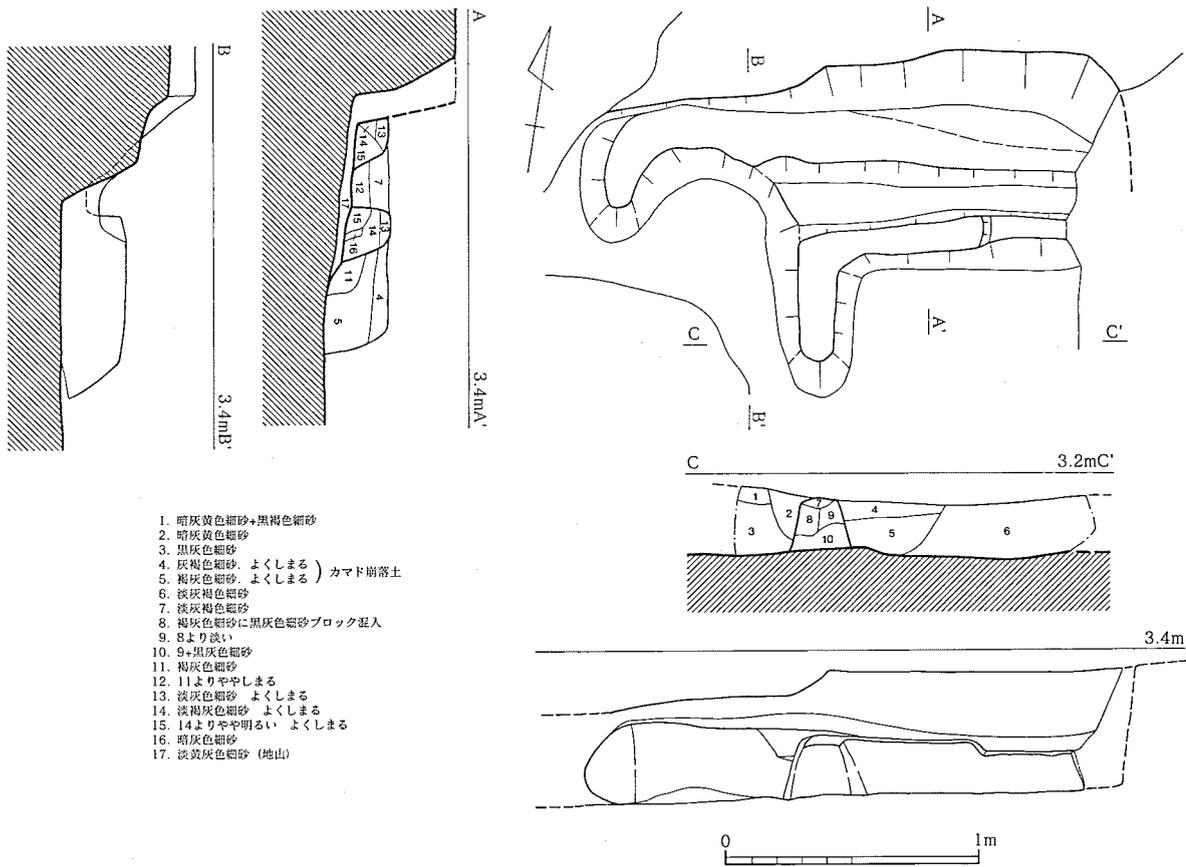
18は底部付近に剥離痕があることから小型器台の受部か、小型の脚付鉢であろう。内面はナデ、外面にはナデに先行するハケ目が観察される。胎土に砂粒を若干含み胎土・調整ともに粗製である。色調は黄灰色を呈す。19は蛸壺。内面は丁寧なナデ、外面には指圧痕が明瞭である。色調は茶色を呈し他と異なる。

23号竪穴住居跡 (図版14、第57図)

I区中2・6で検出し、22号竪穴住居跡の6m北西に位置する竪穴住居跡である。24号竪穴住居跡と重複しており、これよりも新しい。校舎基礎によって大きく攪乱を受けるが、全体の形状は推測可能である。東壁長4.0m、南壁長3.9mを測り、隅丸正方形プランになると思われる。長方形プランが多くを占める当遺跡の中ではやや異例である。総床面積は約18.2㎡になり、中型の部類に含まれる。床面はほぼ水平で、深さは最も残



第57図 23号竪穴住居跡実測図 (1/60)



1. 暗灰黄色細砂+黒褐色細砂
2. 暗灰黄色細砂
3. 黒灰色細砂
4. 灰褐色細砂、よくしまる
5. 褐灰色細砂、よくしまる
6. 淡灰褐色細砂
7. 淡灰褐色細砂
8. 褐灰色細砂に黒灰色細砂ブロック混入
9. 8より淡い
10. 9+黒灰色細砂
11. 褐灰色細砂
12. 11よりややしまる
13. 淡灰褐色細砂、よくしまる
14. 淡褐灰色細砂、よくしまる
15. 14よりやや明るい、よくしまる
16. 暗灰褐色細砂
17. 淡黄灰色細砂 (地山)

第58図 23号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

りの良い所で50cmを測る。北壁のほぼ中央で煙道が北壁に沿って東側に伸びるカマドを検出した。その他ピット等は検出していない。

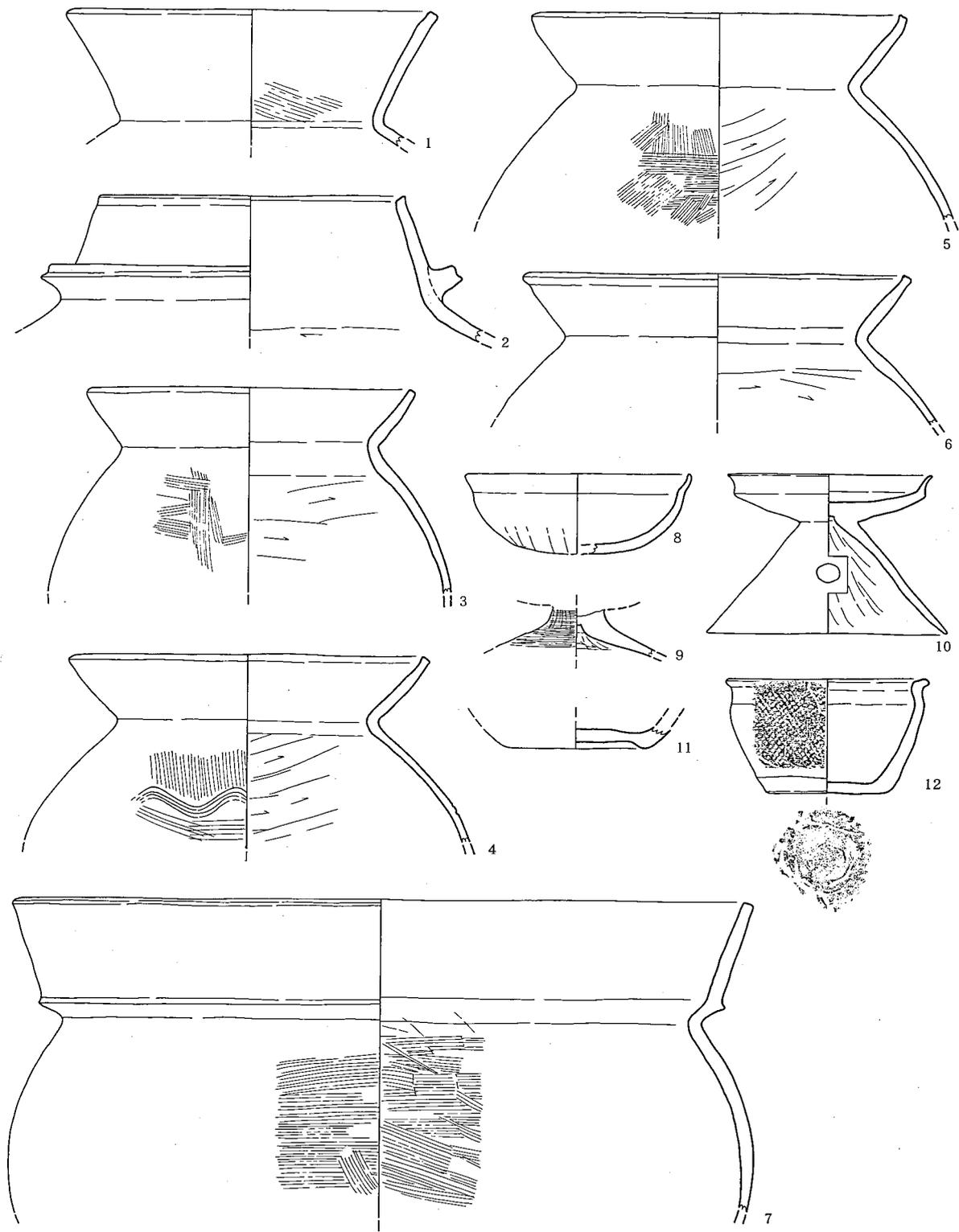
23号竪穴住居跡カマド (図版14、第58図) 北壁のほぼ中央に造られ、煙道が北壁に沿って長く伸び、北東コーナーで煙を排出する構造をとる、いわゆるL字状カマドである。カマドの左袖と火床部、および煙道の先端部を校舎基礎の攪乱によって破壊されている。従って支脚の位置は不明である。カマドの主軸は北壁にほぼ直交する。カマド内の覆土には焼土が多く含まれていたが、明確な焼面は検出していない。右袖は北壁から測って130cmを計測し、左袖もほぼ同様の長さを有したものと推察される。カマド本体の内法は約50cm、外法は約110cmに復元できる。

煙道は北壁と併行に伸びており、現存で125cmを測る。先端は攪乱を受けるものの、他の例から推察してもコーナーで煙を排出する構造とみて間違いないだろう。カマド内部から煙道へは約15cm高くなり、ここから東側にかけてはほぼ水平に伸びている。煙道の幅は西側が35cm、東側はやや狭くなっており20cmを測る。カマド及び煙道の構築には明確な粘土を使用せず褐灰色細砂を使用するが、住居跡覆土と異なり非常に堅く締まっている。

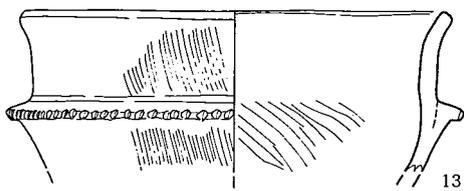
図示した土器のうち、1はカマド袖内から出土、3・5・7はカマド覆土から出土した。これら以外は全て住居跡覆土からの出土である。また土器以外に不明鉄器、鉄釘が出土している。

出土土器 (図版47・84、第59図)

1は直口壺である。口縁部は直線的に開き、端部は面をなす。内外面横ナデを行うが内面にはハケ目が残る。色調は黄灰褐色。2は大型短頸壺で当遺跡では類例が少なく一般的な器種ではない。肩は



住23



13

住24



第59图 23·24号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/3)

大きく張り、口縁部は直線的に内傾する。口縁部の付け根に一条の大きな突帯をめぐらせるが、端部は強い横ナデにより凹面を形成する。胴部内面は横ヘラケズリ、それ以外は横ナデによって仕上げられる。口縁部の形状のみ取り上げれば山陰系甌形土器にも似る。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。

3～6は布留系の甕で、どれも口縁部の内湾がほとんど見られず直線的である。3は頸部の屈曲度が弱く、口縁部が立ち気味に開く。色調は肌茶色を呈す。二次被熱が著しく器表がかなり剥離する。4は屈曲部に近い位置にまで胴部内面のヘラケズリが及んでいる。肩部には櫛描波状文を巡らせる。色調は暗黄灰褐色を呈す。5・6は口縁端部の内側をつまみ出す。5は暗肌灰色、6は肌灰色を呈し部分的に煤が付着する。

7～9は鉢である。7は大型二重口縁鉢。頸部はあまり締まらず、一次口縁は短く外反し、二次口縁部は直線的に開く。胴部内面はヘラケズリの後横ハケ目、外面は横ハケ目を行う。色調は黄灰褐色を呈す。8は屈曲口縁の鉢だが、屈曲度が弱く不明瞭である。口縁部は短く内湾し、端部は内側を向いている。底部にヘラナデが観察されるが、これ以外はナデによって仕上げられる。胎土は比較的精良で、色調は肌色を呈す。9は精製脚付鉢の脚部。裾部は大きく直線的に開くようである。内面はヘラ状工具による横方向のナデ、外面は縦ヘラナデの後細かい横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は橙肌色を呈す。

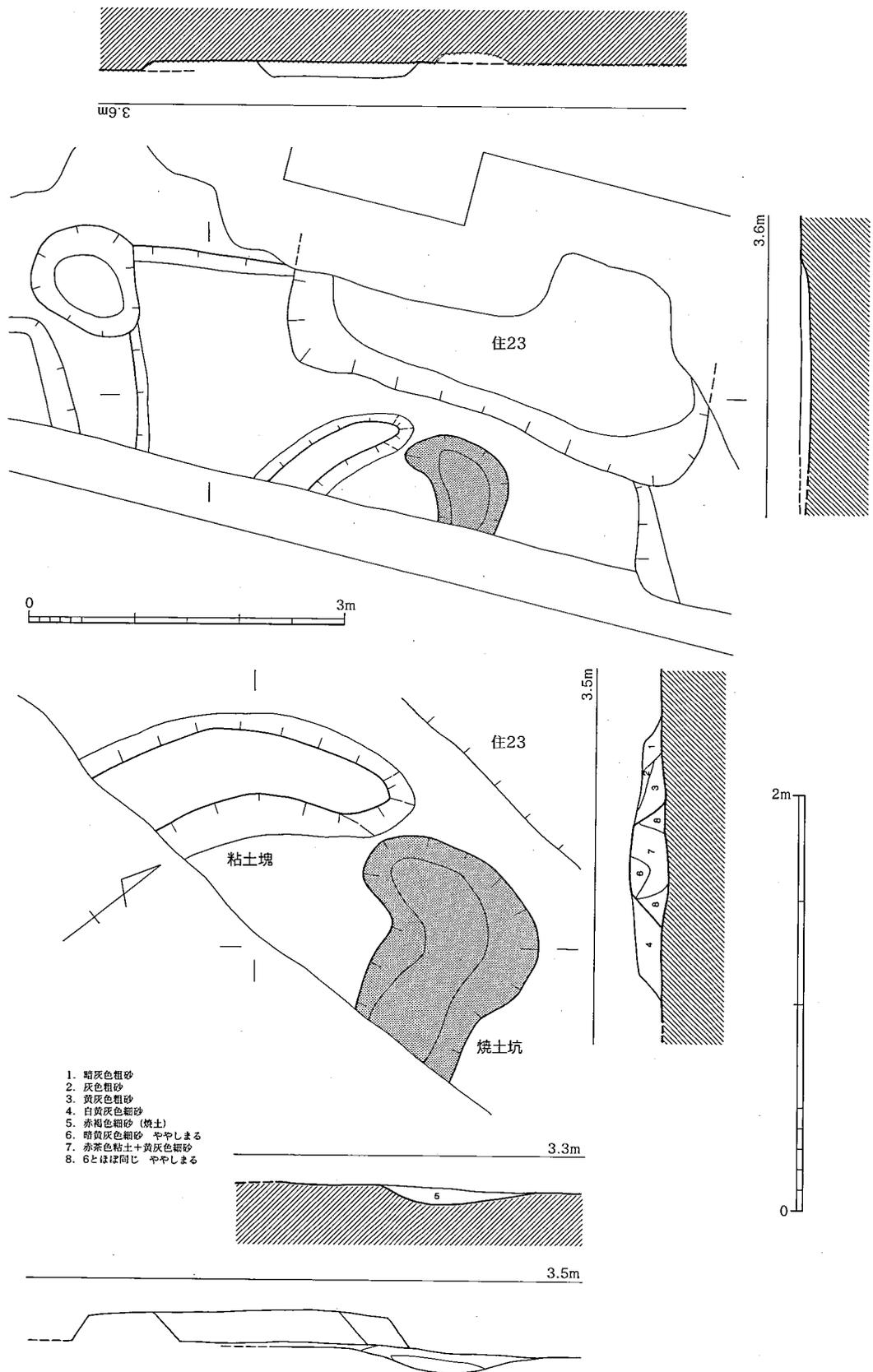
10は精製の小型器台。受部の屈曲は明瞭な稜を有し、立ち上がりは短く外反し、端部は薄くシャープに仕上げられる。裾部は直線的に開き、端部は薄く尖る。穿孔は2ヶ所。裾内頂部には軸受孔がある。全体的に風化が著しく調整は不鮮明。胎土は精良で色調は橙肌色を呈す。

11・12は半島南西部に分布の中心域をもつ軟質小型平底鉢である。11は底部が上げ底状になる。底面は弱い静止ヘラケズリを底辺に沿って行っている。内底面と体部はナデ。体部下端の横ヘラケズリは行っていないようである。胎土に石英・長石の粗・細砂粒を含み、土師器の甕等と同質の粗いものである。色調は黄灰褐色を呈し、土師器に近い焼成である。12は体部があまり内湾せずに関き口縁部近くのみ内傾し、口縁部は短く強く外反する。屈曲部、口縁端部ともに丸味を有し、シャープさに欠ける。底部と体部の境目は比較的明瞭な稜を有し、底面は弱いヘラナデ仕上げを行う。体部内面は横ナデ、外面は小さな格子タタキを行い、下端部には弱い静止ヘラケズリを一周させる。口縁部は横ナデ。色調は茶褐色を呈し黒斑を有す。胎土に石英、長石、雲母、赤褐色粒の粗砂粒を含み、特に雲母の多さが目立つ。胎土は粗く器形もシャープさを欠き、かなり粗雑な感を受ける。

24号竪穴住居跡 (図版15、第60図)

I区中6で検出した竪穴住居跡である。23号竪穴住居跡の南側に位置し、これと重複する。先述したとおり当切り合い関係では当住居跡の方が古い。また東側で1号溝と重複するが、これよりも古い。南側は校舎基礎により攪乱を受ける。残存した部分から推測すると、平面形はややいびつだが長方形プランになると思われる。東西長は5m前後に推測される。床面はほぼ水平であり、遺構面から床面までの深さは10cm程度に過ぎない。

床面上では粘土塊及び焼土坑を検出した。焼土坑は長軸60cm、短軸70cm、深さ10cmで不整楕円形を呈す。粘土塊は長軸165cm、短軸60cm、高さ15cmで楕円形に近い形状となる。遺構確認時からこれらを確認しており、当初はカマドの可能性も考えたが、粘土が全く焼けておらず、また粘土



第60图 24号竖穴住居跡・烧土坑実测图 (1/60・1/30)

と焼土坑の配置、住居跡のプランとこれらの位置関係なども考え合わせてカマドではないと判断するに至った。焼土坑は炉と考えてよいだろう。

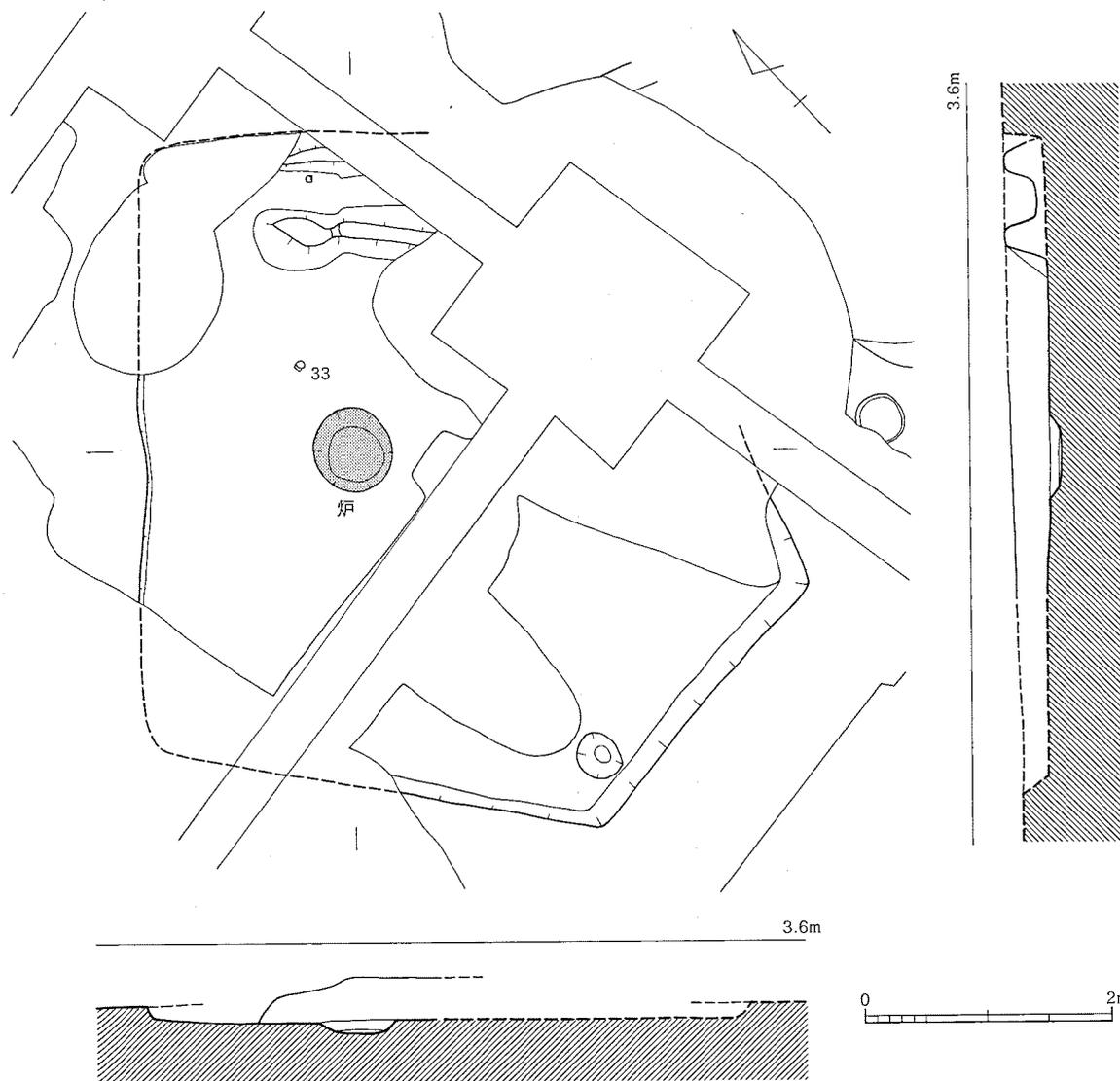
出土遺物は極めて少ない。図示したものは覆土中から出土したものである。土器以外に刀子が出土している。

出土土器 (第24図)

13は在来系二重口縁壺の退化したものであろう。屈曲部に当たる位置に刻目突帯を貼付する。口縁部はわずかに外反し、端部は丸くおさまられる。内面には粗いハケ目が観察される。外面は縦ハケ目。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。

25号竪穴住居跡 (図版15、第61図)

I区中1・2で検出した竪穴住居跡である。24号竪穴住居跡から7mほど北側に位置する。確認当初、平面形があまりに不整形なので複数棟の重複を想定したが、明確な線引きをなし得ず、完掘した後も結果として不明なままに終わった。従って納得がいかない点が幾つか残るものの、一棟の住

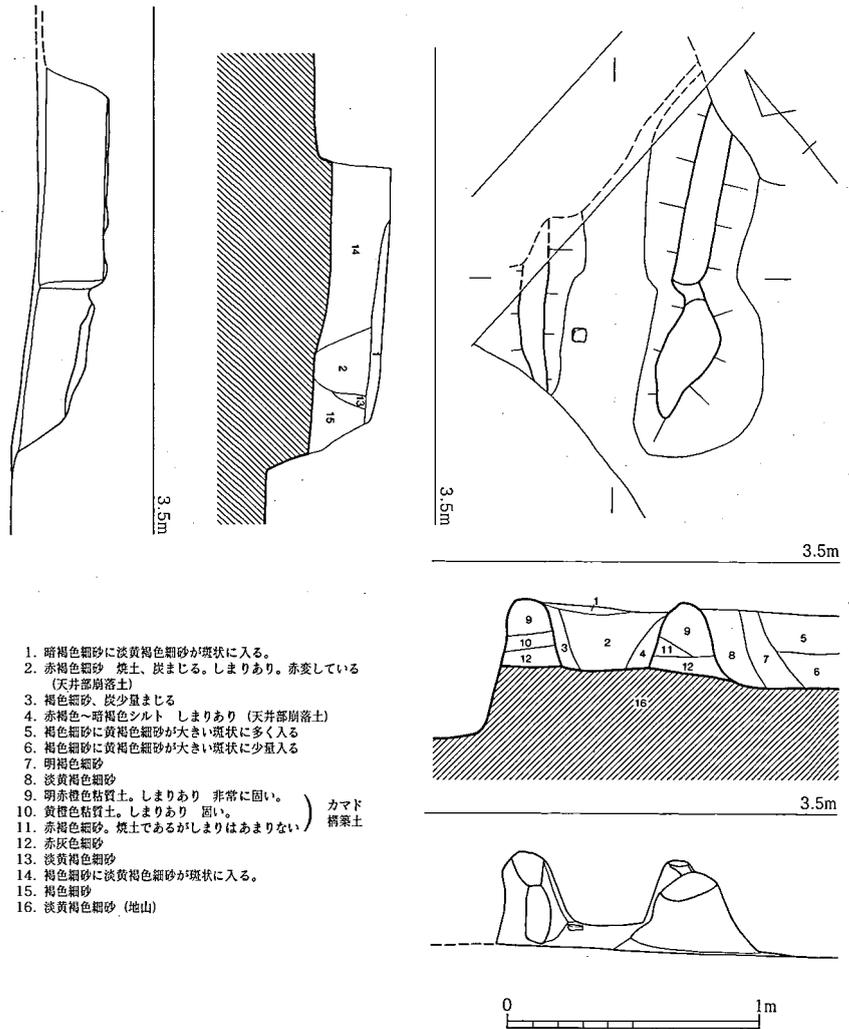


第61図 25号竪穴住居跡実測図 (1/60)

居跡として報告する。

当住居跡は現状では不整五角形を呈し、かなりの部分を校舎の基礎等によって破壊される。推定で南西壁長4.8m、南東壁長3.7m、東壁長2.7mを測る。床面は南西壁際がやや高くなっており、遺構面からの深さはこの部分で深さ10cm、他は15cm程度の深さとなる。

また住居跡北西壁際でカマドを検出し、さらに床面の中央からやや西寄りの位置で、径70cm、深さ10cmの炉跡と思われる焼土坑を検出した。この両者が一棟の住居内に併存する事は他の事例にもほとんどなく、このことから複数棟の住居跡であった可能性が高い。また韓



第62図 25号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

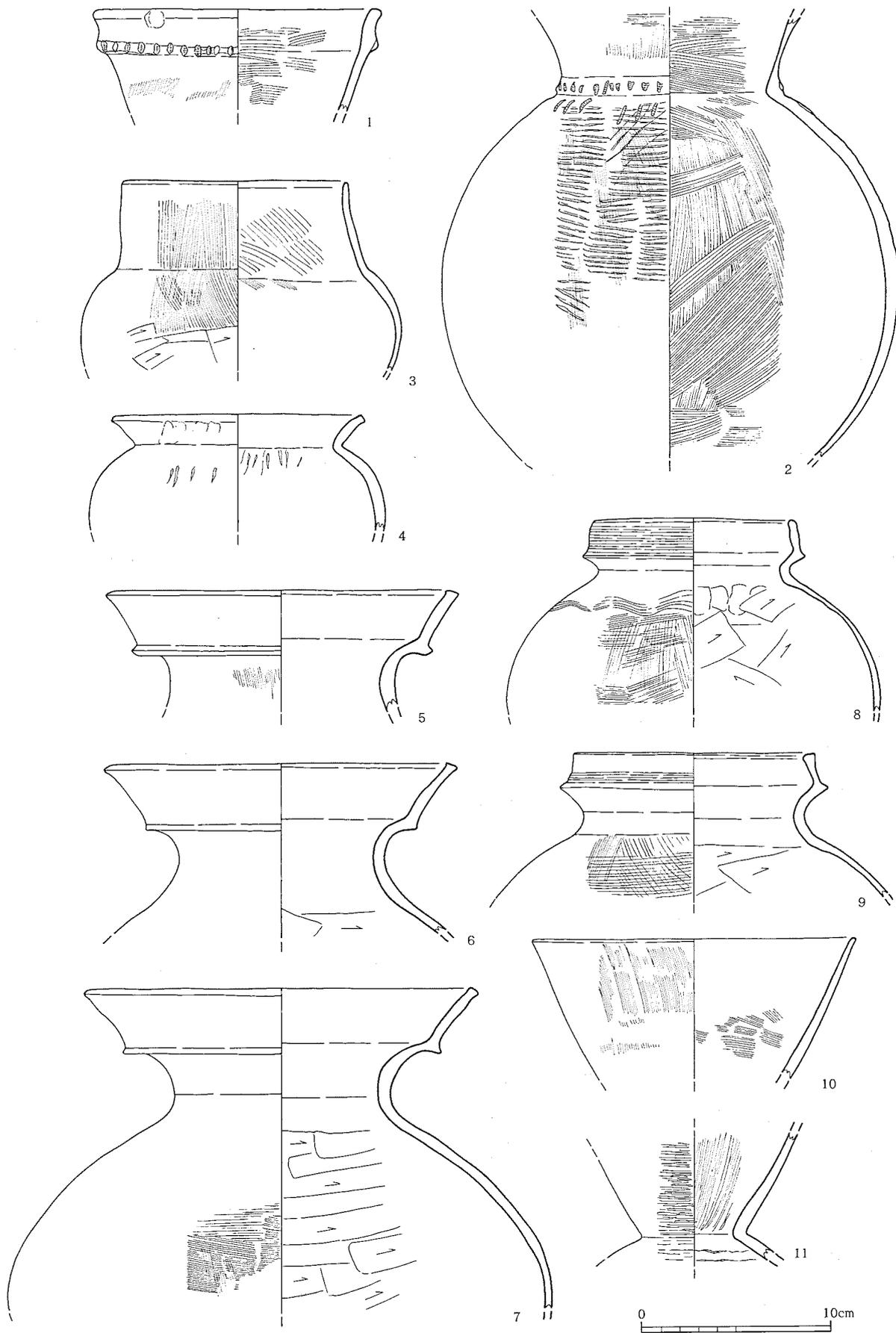
25号竪穴住居跡カマド

(図版15、第62図) 住居跡の北壁に接すると思われる位置で検出したカマドである。攪乱によってかなりの部分が失われており、煙道や支脚の位置、火床の範囲などは不明である。現状では主軸が北壁と平行しており他に類例を見ない。これからも住居跡の平面形を間違えた可能性が高い。残存部分に関して言えば、左袖は長さ70cm、幅30cm、高さ28cm、右袖は長さ140cm、幅50cm、高さ30cmを測る。両袖の間隔は、内法35cm、外法100cmを測る。推測に過ぎないが、カマドの平面形からすると、恐らく住居跡のコーナーに斜めに造られるタイプではないかと思う。カマドの構築土には明瞭な粘土を使用し、焼土を多く含むために赤橙色～赤褐色を呈す。カマド内の覆土中から焼けた小礫を一個検出したが、床面からかなり浮いた位置にある。

出土土器は比較的豊富である。33は床面直上から出土、それ以外は住居跡覆土から出土したものである。土器の他、石錘、軽石が出土している。

出土土器 (図版47・48・84、第63～65図)

1は在来系二重口縁の退化形態であろう。口縁部の屈曲はほとんどなく、ハケ目状工具を使用した刻目突帯を痕跡的に貼付している。内面は粗い横ハケ目、外面は縦ハケ目を行う。焼成は悪く、断



第63图 25号竖穴住居迹出土土器实测图① (1/3)

面は黒色となる。器表の色調は灰色～黄灰褐色。2も在来系の壺である。胴部は球形で頸部の付け根はよく締まり、頸部は開きながら立ち上がる。内面は全面ハケ目、外面はタタキの後部分的に縦ハケ目を行う。頸部付け根の外面は低い突帯状をなし、ハケ目状工具による雑な刻目を巡らせている。また肩部には縦方向に1本、斜方向に4本の、鋭いヘラ等を使用した意味不明の線刻がある。色調は黄灰褐色を呈すが、焼成はやや悪く断面は黒色となる。3は中型の直口壺。胴部最大径は上位にあり、頸部は締まらず、口縁部は直線的に内傾する。内面はナデを行うが、口縁部には先行する粗いハケ目が残る。外面は上半が縦ハケ目、下半がヘラナデ。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。4は肩が張り、口縁部は短く強く外反する小型直口壺。鉢と呼んだ方が適当かもしれない。内外面ナデを行うが、先行する工具痕が残る。胎土に砂粒を若干含み、色調は黒褐色を呈す。焼成も良くない。

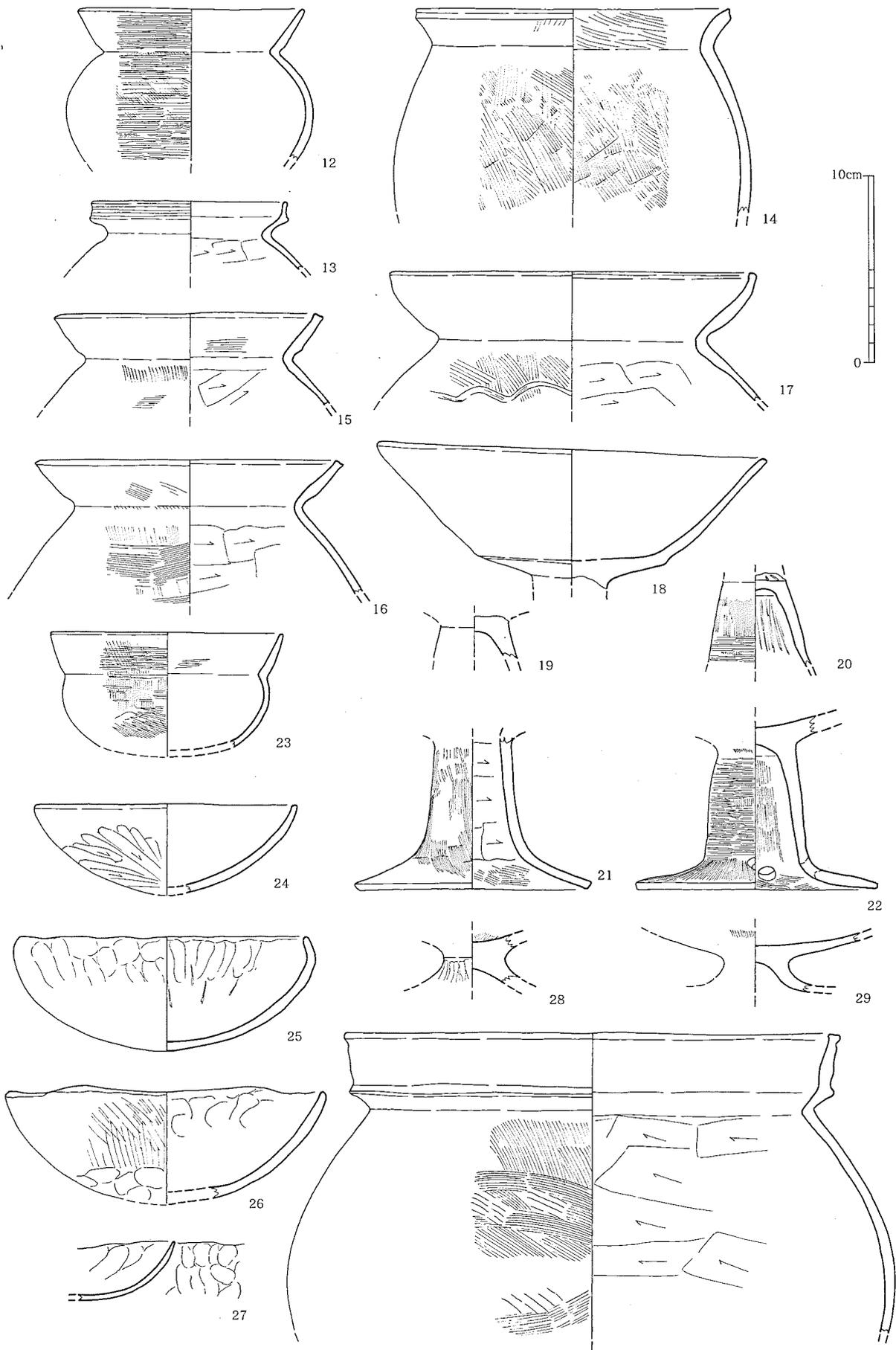
5～7は山陰系の二重口縁壺である。どれも黄灰褐色を呈す。7は肩部のハケ目に二種類の異なる原体を使用し、粗い横ハケ目、細かい横ハケ目、粗い縦ハケ目の順で行っている。8・9は吉備系の二重口縁壺である。8は口縁部の外面に横条線が顕著に残る。肩部は丸く張り、頸部は強く締まり一次口縁部は短く外反する。口縁部は内傾し端部は丸くおさめる。肩部には櫛描波状文を巡らせる。色調は橙茶色を呈し特徴的である。9は口縁端部が肥厚し上端が面をなす。色調は黄灰褐色を呈し他の山陰系壺や布留系甕と同様である。10・11は畿内系の中型直口壺である。10は内外面にハケ目が見られ、最終調整にヘラミガキを使用していない。胎土は精良で色調は黄灰色を呈す。11は内面に縦方向のヘラミガキ、外面に横ヘラミガキを行う。胴部には粘土紐の輪積み痕が残る。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。

12は精製の小型丸底壺。胴部は球状をなし、屈曲部は明瞭な稜を有す。口縁部は直線的に開く。内面はナデ、外面は横ヘラミガキを行う。胎土は精良、色調は内面が黄灰色、外面が橙茶色となる。

13～17は甕である。13は吉備系の小型甕。肩が張り頸部は強く締まる。一次口縁の外反は強く、二次口縁は短く直立し、器壁が薄い。外面には疑凹線を施している。砂粒は若干含むものの他の布留系甕などと比べて粒が小さい。色調は茶色の強い黄灰褐色を呈す。外面には煤が付着する。14は在来系の甕。口縁部は緩く外反し、端部は窪ませる。内外面ハケ目調整を行う。胎土は布留系甕と比べると砂粒が少ない。色調は肌茶色を呈す。外面には煤が付着する。15～17は布留系甕。15は胴部に対して口縁部の器壁が厚い。口縁内端はつまみ出す。口縁部内面には横ナデ前の横ハケ目が残る。色調は肌色を呈す。16は口縁部外面のみ煤が付着する。色調は肌色。15・16とも上端がわずかに窪む。17は口縁部の中位がやや肥厚し、端部付近は直立気味に立ち上がる。肩部に櫛描波状文を巡らせる。色調は黄灰褐色。

18～22は高坏である。18は屈曲部に弱い段が認められる。器表の風化が著しく調整不明。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。19は坏部との接合部にヘラ刻目を施す。胎土は精良で色調は橙肌色を呈す。20も接合部にヘラによる放射状の刻目を施す。柱部の内面は縦ヘラナデ、外面は縦ハケ目後横方向の疎らなヘラミガキ。21は中膨らみのない在来系高杯の柱部で裾部は直線的に開き、端部は面をなす。内面は横ヘラケズリ、外面は縦ハケ目。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。22は柱部が中膨らみになる。内面は縦ハケ目後に横ナデ、外面は縦ハケ目後横ヘラミガキ。裾部は大きく水平近くにまで開く。屈曲部に穿孔を2ヶ所行う。胎土はあまり良くなく色調は橙茶色を呈す。

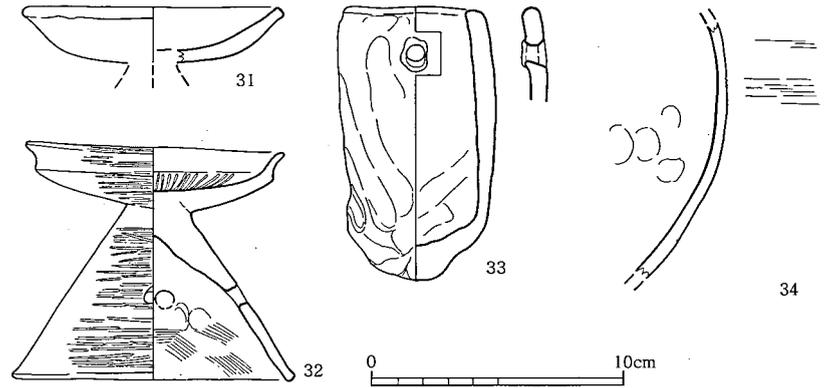
23～30は鉢である。23は外反口縁の小型精製鉢。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。24は体部が大きく開き、底部が不安定な尖底気味となる粗製の鉢。内面はナデ、外面はナデの後にヘラナデ



第64图 25号竖穴住居迹出土土器实测图② (1/3)

30

を行っている。胎土に砂粒を若干含み、色調は橙茶色を呈す。25～27は体部が大きく開き内外に指圧痕を多く残す粗製の鉢。25は口縁部が内湾する。内外面とも指整形の後にナデ消しを行い、内面には縦方向の工具痕が残る。胎土に砂粒を若干含み、橙茶色を呈す。26



第65図 25号竪穴住居跡出土土器実測図③ (1/3)

は外面に粗いハケ目を残す。胎土にやはり砂粒を若干含み、色調は茶色を呈す。27は器壁が薄い。胎土に砂粒を若干含み、色調は茶色を呈す。28・29は脚付鉢である。28は裾部外面に幅広の縦ヘラミガキを行う。坯部内面は放射状ヘラミガキ。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄肌色を呈す。29は裾部外面ナデ、坯部はハケ目調整を行う。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。30は山陰系の大型二重口縁鉢。一次口縁部は短く外折し、肩部との境には稜を有す。二次口縁部は直立し端部は内外につまみ出し、上面は窪んでいる。体部内面は屈曲部付近まで横ヘラケズリ、外面はタタキ後ハケ目。胎土に砂粒を若干含み色調は肌灰色～灰色を呈す。

31・32は小型器台である。31は受部の立ち上がりがなく、端部はやや面をなす。器表の風化が著しく調整は不明。胎土に砂粒を若干含む。色調は黄灰色を呈す。32は精製品。受部の立ち上がりは短く外反し、器壁は薄くシャープである。受部内面には放射状の暗文を施す。外面は横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は茶色を呈す。穿孔は3ヶ所。33は蛸壺である。体部は直立し、口縁端部は丸い。全面指ナデだが一部に工具痕が残る。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。

34は半島系の陶質壺胴部片である。焼成は良好で硬質な仕上がりとなる。外面の上半は回転ナデを行っており、横方向の条線が観察できる。下半はナデ。内面は静止ナデを行い指圧痕が残る。胎土は砂粒を含まず極めて精良で色調は灰色を呈す。

26号竪穴住居跡 (図版16、第66図)

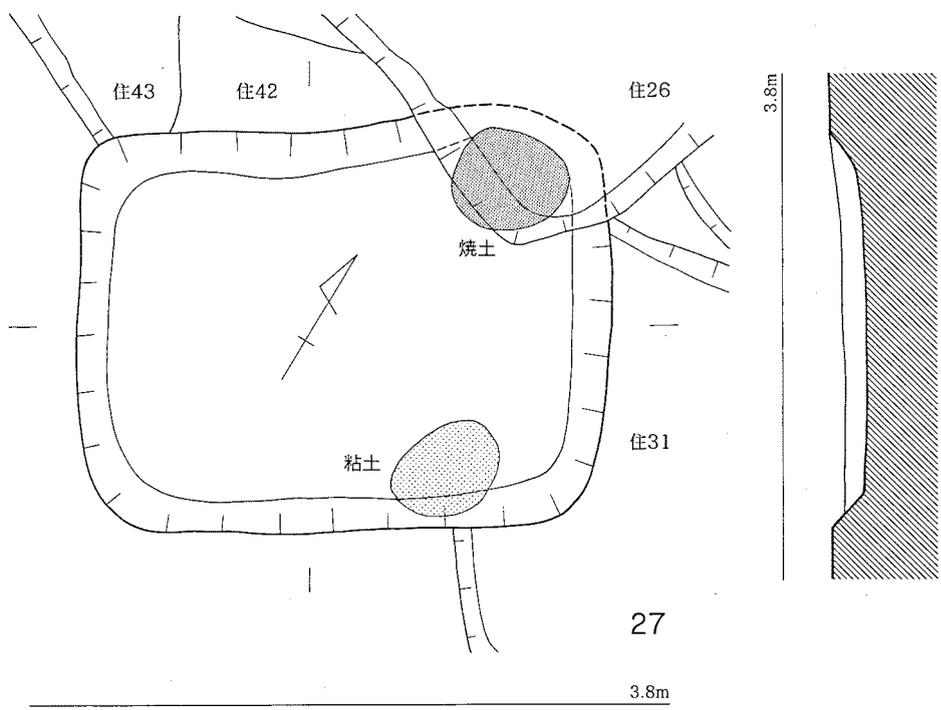
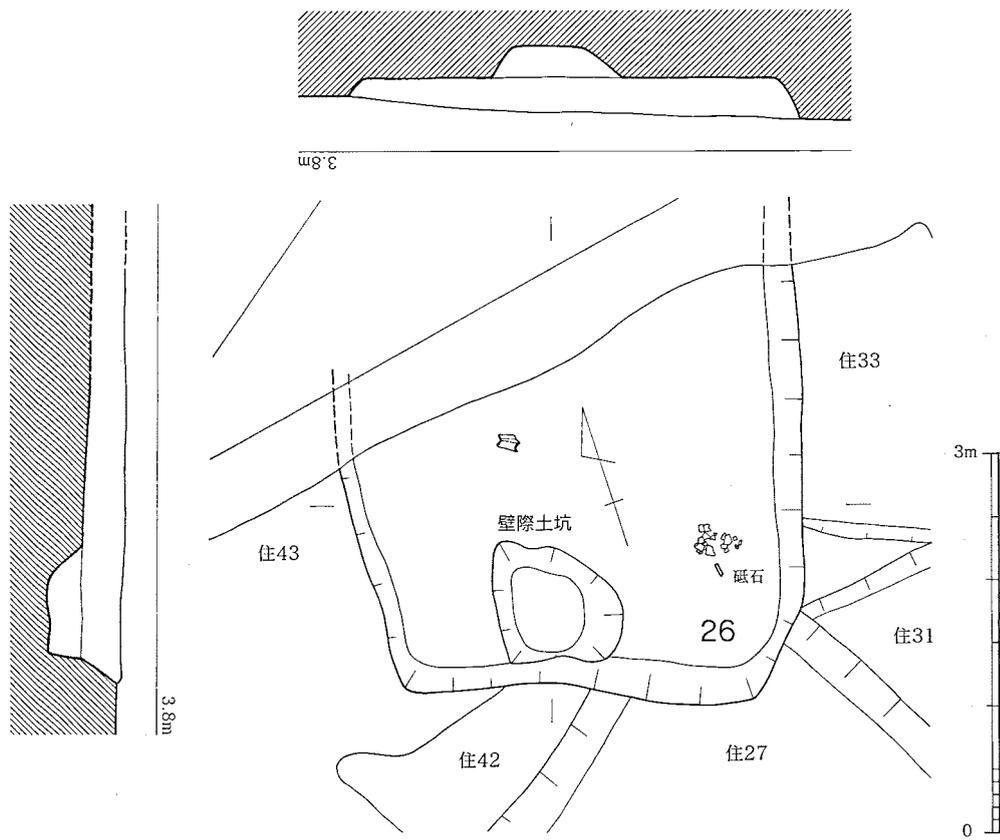
I区中5で検出した竪穴住居跡である。付近は今回の調査区の中では最も遺構密度の高い場所にあたる。25号竪穴住居跡からは5mほど東に位置する。北側は校舎の基礎によって失われる。また27・33・42・43号竪穴住居跡と重複関係にあるが、この中では最も新しい。平面形は南北に長い長方形プランか、または正方形に近いプランとなるであろう。南壁長は2.8mを測る。床面はほぼ水平につくられ、検出面からの高さは30cmを測る。支柱穴は検出されなかったが、南壁中央に接して長軸120cm、短軸95cm、深さ25cmの大きさの不整形壁際土坑を検出した。

図示した土器は全て覆土から出土したものである。土器の他に砥石が出土している。

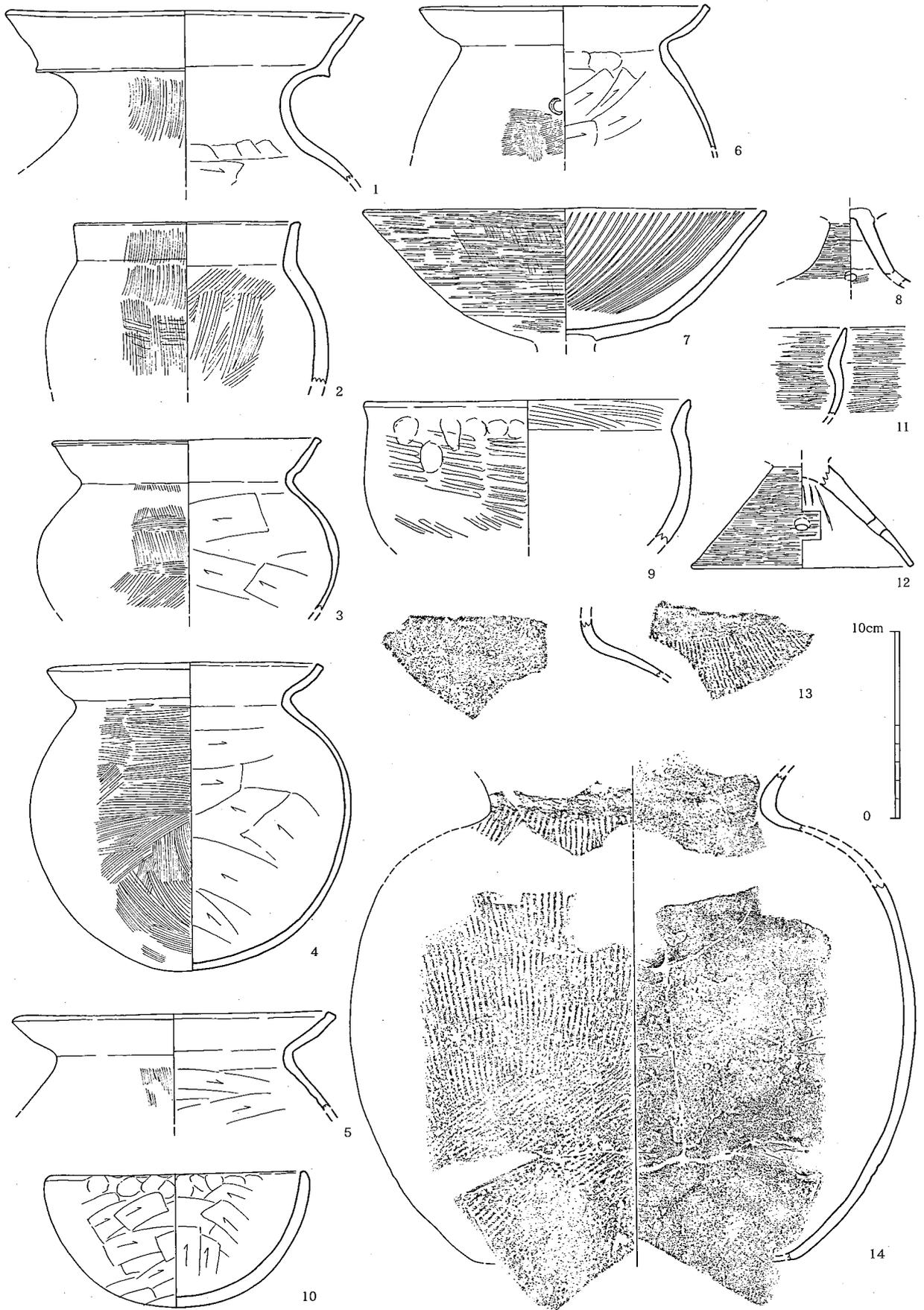
出土土器 (図版48・84、第67図)

1は山陰系の二重口縁壺。一次口縁部の外反度は強い。二次口縁部は直線的に開き、内端部をつまみ出す。頸部内面には指圧痕が残る。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰色を呈す。

2～6は甕である。2は在来系の小型甕。口縁部は短く直立する。内外面ハケ目調整を行うが、外



第66图 26·27号竖穴住居跡実測图 (1/60)



第67图 26号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

面にはハケ目に先行するタタキが観察される。胎土に粗砂を若干含み色調は暗黄灰褐色を呈す。外面には煤が付着する。3～6は布留系の甕。3・4はどちらも小型の部類に含まれ、肩が張った形状となる。口縁部のつまみ出しは認められない。3は胴部下半に強い二次加熱を受ける。色調は暗黄灰色。4も胴部に強い二次加熱が認められ、一部器表が剥落する。色調は灰褐色で他の布留系甕と若干異なる。5・6は肩部が直線的になるもので、どちらも色調は黄灰色を呈す。6は胴に比べて口縁部が大きく開き、肩部に竹管文を施す。外面には煤が付着する。

7・8は高坏である。7は屈曲部に弱い凹線状の段をもつ。内面に縦ヘラミガキによる暗文を施し、外面はハケ目後に横ヘラミガキを行う。胎土に砂粒を含まず精良で、色調は肌茶色を呈す。8は小型の高坏脚部。明確な柱状部をもたず、付け根から開く。内面はナデ、外面は横ヘラミガキ。胎土に砂粒を若干含みやや粗く、色調は黄肌色を呈す。穿孔は4ヶ所か。

9～11は鉢である。9は在来系の粗製鉢。体部上半は直立に近い立ち上がりをなし、口縁部は短く外反する。口縁部内面は横ハケ目を行う。胴部外面は粗い左上がりタタキ後にナデを行う。胴部内面はナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。10は半球形の粗製鉢。内外面ヘラナデを最終調整とし、口縁部は指圧痕が明瞭に残る。胎土に砂粒を若干含み、色調は肌褐色を呈す。11は外反口縁の小型精製鉢。内外面に緻密な横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。

12は小型精製器台の裾部。直線的に開き、端部は丸くおさめる。内面はナデ、外面は緻密な横ヘラミガキ。内面にはナデ前のヘラナデ痕が残る。胎土は精良で色調は茶色。

13・14は半島系の土器である。13は瓦質の壺肩部片。外面は平行タタキ、内面は横ナデ。胎土に砂粒を若干含むものの粘土自体の肌理は細かく、色調はくすんだ灰色～黄灰色を呈す。接合しないが同一個体と思われる破片が攪乱から1点出土している。14も瓦質の壺である。胴部は球形に近く、底部は平底になると思われる。頸部は強く締まり口縁部は大きく外反する。内面は横ナデで部分的に無文当て具痕が残る。外面は上半が縦方向の平行タタキ、下半はタタキの方向が一定しない。胎土は微砂粒を若干含むが比較的精良で、色調は黒褐色を呈し、軟質に近い焼成である。

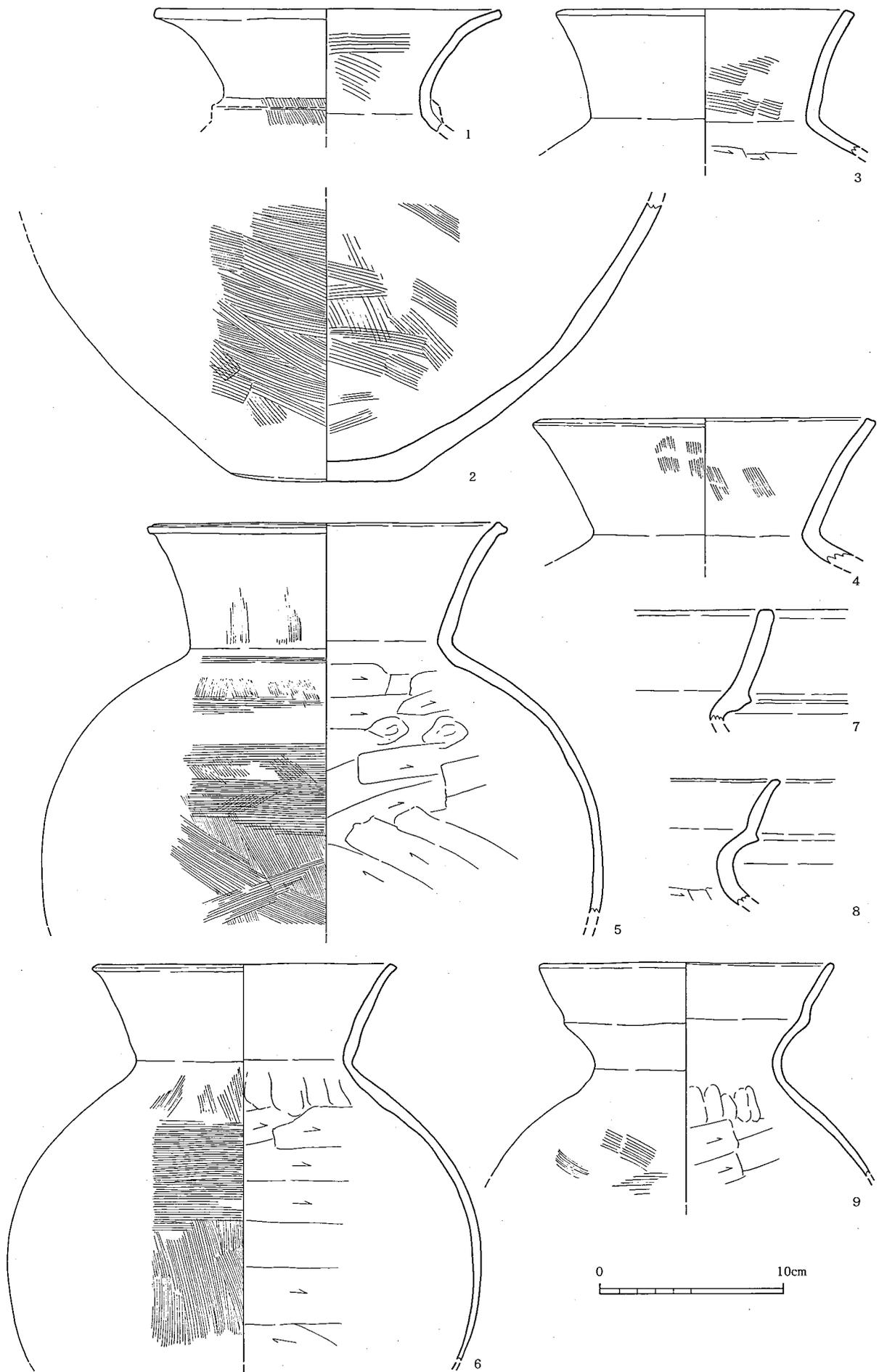
27号竪穴住居跡 (図版16、第67図)

I区中5で検出した竪穴住居跡である。26号竪穴住居跡の南側に位置する。26・31・42・43号竪穴住居跡と重複しており、重複関係では26号竪穴住居跡より古く、その他のものより新しい。比較的残りが良く、平面形が判る貴重な例である。南壁長3.9m、西壁長3.0mを測り小型の部類に属す。床面は西側及び北側がやや浅くなっており、深さは西側で10cm、東側で30cmを測る。床面上では、北側コーナー一部で焼土を検出、さらに南壁際で粘土塊を検出した。焼土は径90cmの範囲で拡がり、炉の可能性も考えられる。粘土塊は長軸90cm、短軸70cmの大きさを有し、出入口に関連する施設と想定される。これら以外、例えばピット等は検出されなかった。また後述するが、当初は42号竪穴住居跡としたカマドが当住居跡に伴うものとして考えていたが、精査の結果別個の遺構と判断した。

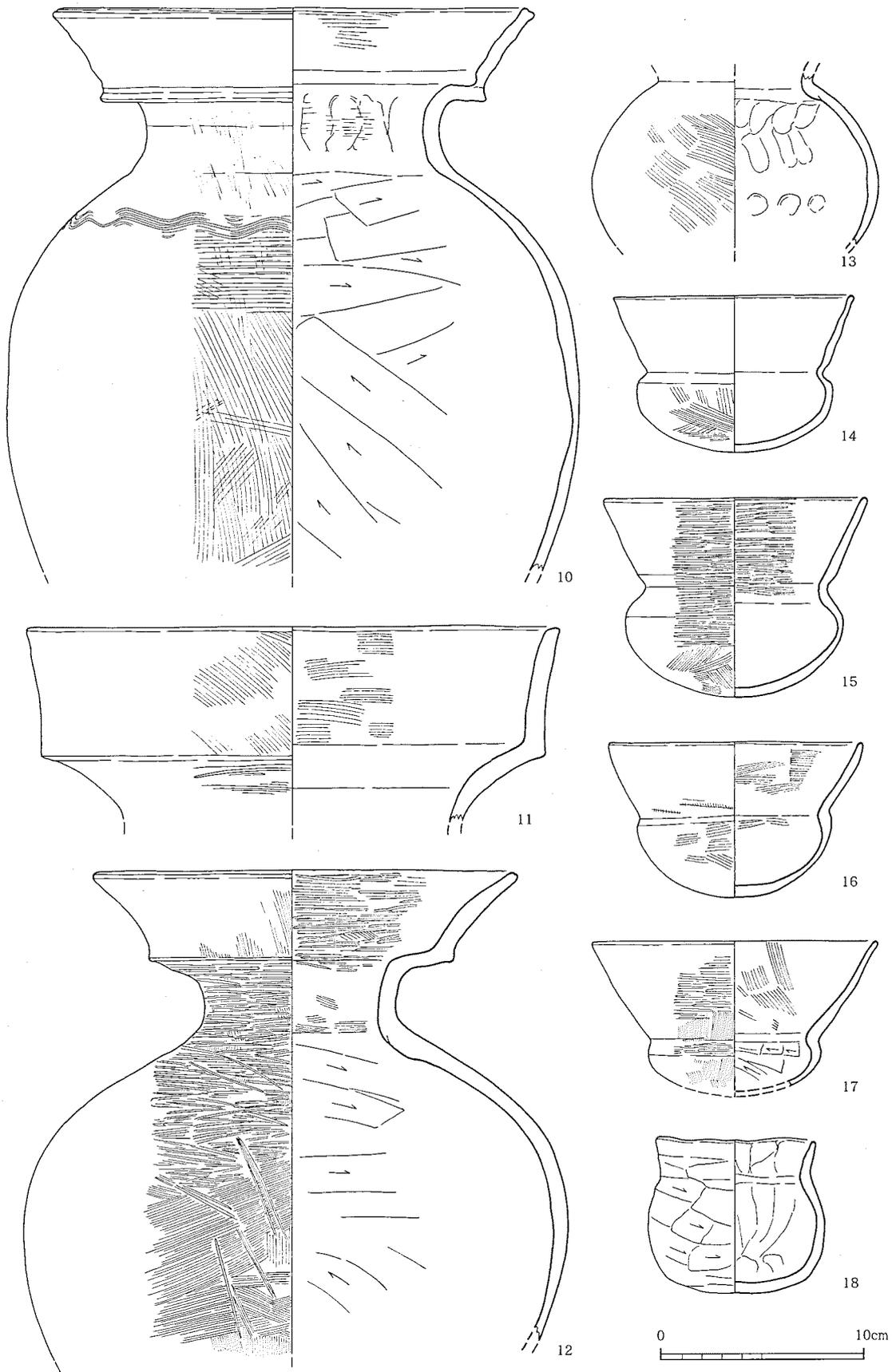
出土遺物は非常に多い。図示した土器のうち、4・5・8・9・14・17・18・20・27・32・36・37・38・39・53・54・56・57・67は下層出土、その他は上層出土である。他に刀子が出土している。

出土土器 (図版48～50・84・85、第68～72図)

1～18は壺である。1は口縁部が大きく外反する在来系の直口壺。口縁部は横ナデを行い、内面に



第68图 27号竖穴住居迹出土土器实测图① (1/3)



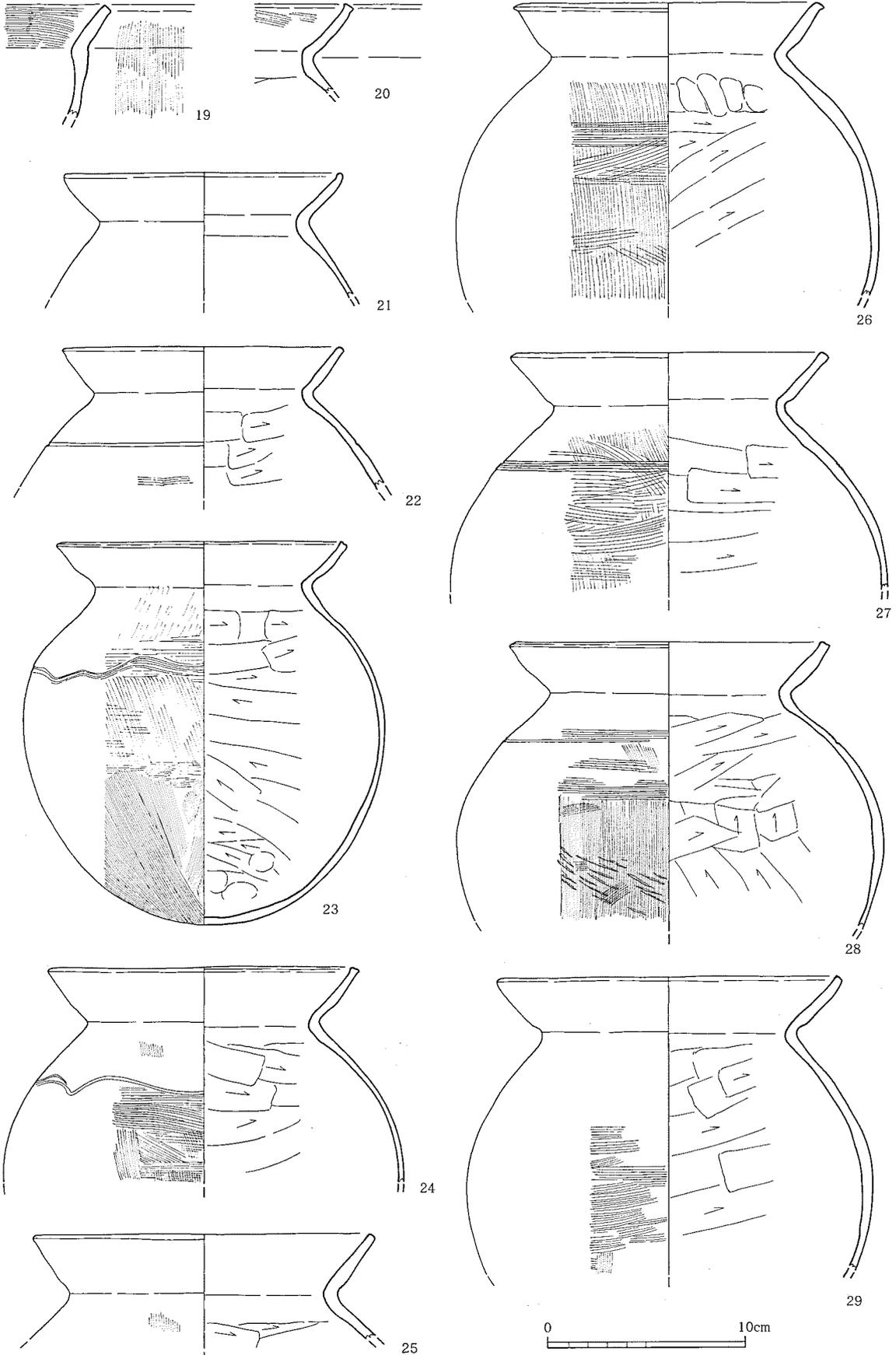
第69图 27号竖穴住居跡出土土器実測图② (1/3)

は先行する横ハケ目が観察できる。頸部の突帯は剥離し痕跡のみが残る。色調は黄灰褐色を呈す。2は在来系壺の胴下半部。底面はレンズ状に近い平底となる。内面には二種類のハケ目原体を使用する。色調は黄灰褐色。3～6は畿内系の直口縁壺。3は内面に横ナデ前の横ハケ目が残る。色調は黄灰色。4は内外面に横ナデ前の細かい縦ハケ目が残る。色調は肌灰色。5は球形胴で頸部は強く締まる。口縁端部は外側につまみ出し、上面が窪む。色調は茶色。6も球形胴だが5よりも肩の張りが弱い。色調は黄灰褐色～橙褐色を呈す。

7～11は山陰系の二重口縁壺。7は口縁部が内湾、8は逆に外反する。どちらも上端は水平面をなす。色調は黄灰褐色を呈す。9は口縁屈曲部が弱く不明瞭で、外面に突帯を持たない。色調は黄灰褐色。10は胴部の最大径が上方にある。一次口縁の外反が強く、外面の突帯はやや垂下する。二次口縁部はわずかに外反し、端部は窪む。肩部には櫛描波状文を巡らせる。外面のハケ目は他のものよりも粗めの原体を使用している。色調は橙茶色を呈する。11は二次口縁部が直立する大型品。上端は内傾する面をなす。内外面共横ナデを行うが、これに先行するハケ目が観察される。胎土には砂粒をあまり含まず比較的精良で、色調は肌色を呈す。外面には化粧土を塗布する。12は畿内系二重口縁壺である。胴部は最大径が上方にあり、頸部付け根は強く締まる。頸部は短い筒状をなし一次口縁部は水平に開く。二次口縁部は緩く外反しながら開く。胴部内面はヘラケズリ、頸部内面はハケ目、口縁部内面は横ハケ目後疎らな横ヘラミガキ、胴部下半はハケ目後わずかにヘラミガキ、胴部上半から頸部にかけては緻密な横ヘラミガキ、口縁部外面はハケ目後に横ナデを行っている。胎土に砂粒を若干含み色調は内面黄灰褐色、外面白黄灰色を呈す。

13は畿内系の直口壺胴部または小型甕の胴部と考えたが、調整が雑で煤が顕著に付着することから甕の方が適当であろう。内面の特に肩部付近は指圧痕が明瞭に残り、外面はハケ目後に肩部のみ横ナデを加える。胎土に砂粒を若干含みあまり精良ではなく、色調は茶色を呈す。外面下半に煤が付着し、煮炊きに使用している。14～17は体部が扁平で浅く口縁部が長く伸びた小型丸底壺である。14はヘラミガキを行わず、胎土もまた精良ではない粗製品。色調は肌灰色。15は胴部内面ナデ、口縁部は内外面共緻密な横ヘラミガキ、胴部外面はハケ目後に肩部のみ横ヘラミガキを行う。胎土も比較的精良な精製品。色調は黄灰色。16もヘラミガキを行わない。胎土に砂粒を多く含み、特に角閃石が目立つ。色調は肌茶色。外面が二次加熱を受けており、特に口縁部には煤が付着する。17は特に胴部の扁平化と口縁部の長大化が著しいもの。胴部内面は横ヘラナデ、口縁部内面はハケ目後横ナデ、外面はハケ目の後に口縁部と肩部にのみ横ヘラミガキを行う。胎土に砂粒を若干含み色調は橙肌色を呈す。18は手捏ねに近い粗製品。胴部外面はヘラナデで仕上げる。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色。

19～33は甕である。19は在来系の甕或いは鉢か。胴部は直立し、口縁部は短く緩く外傾する。胴部内面はナデ、口縁部と胴部外面はハケ目。胎土には特に粗砂が目立ち、色調は肌茶色を呈す。20～31は布留系の甕。色調は21が肌茶色、23が肌灰色、27が黄茶色、30が茶色を呈し、これ以外は全て黄灰褐色を呈す。20は口縁端部を内側にシャープにつまみ出し、内面には横ナデ前の横ハケ目が残る。21は肩部が張らず、口縁端部は丸くおさめる。22は口縁部が短く直線的に開き、端部はやはり丸い。肩部には一条の沈線を巡らせる。外面に煤が付着する。23は完形に復元される。胴部最大径は中位よりやや上にあり、口縁部付け根の稜は明瞭である。口縁部はわずかに内湾しながら開き、端部は上方につまみ出す。胴部の外面は粗い縦ハケ目、粗い横ハケ目、下半を細かい縦ハケ目



第70图 27号竖穴住居跡出土土器実測图③ (1/3)

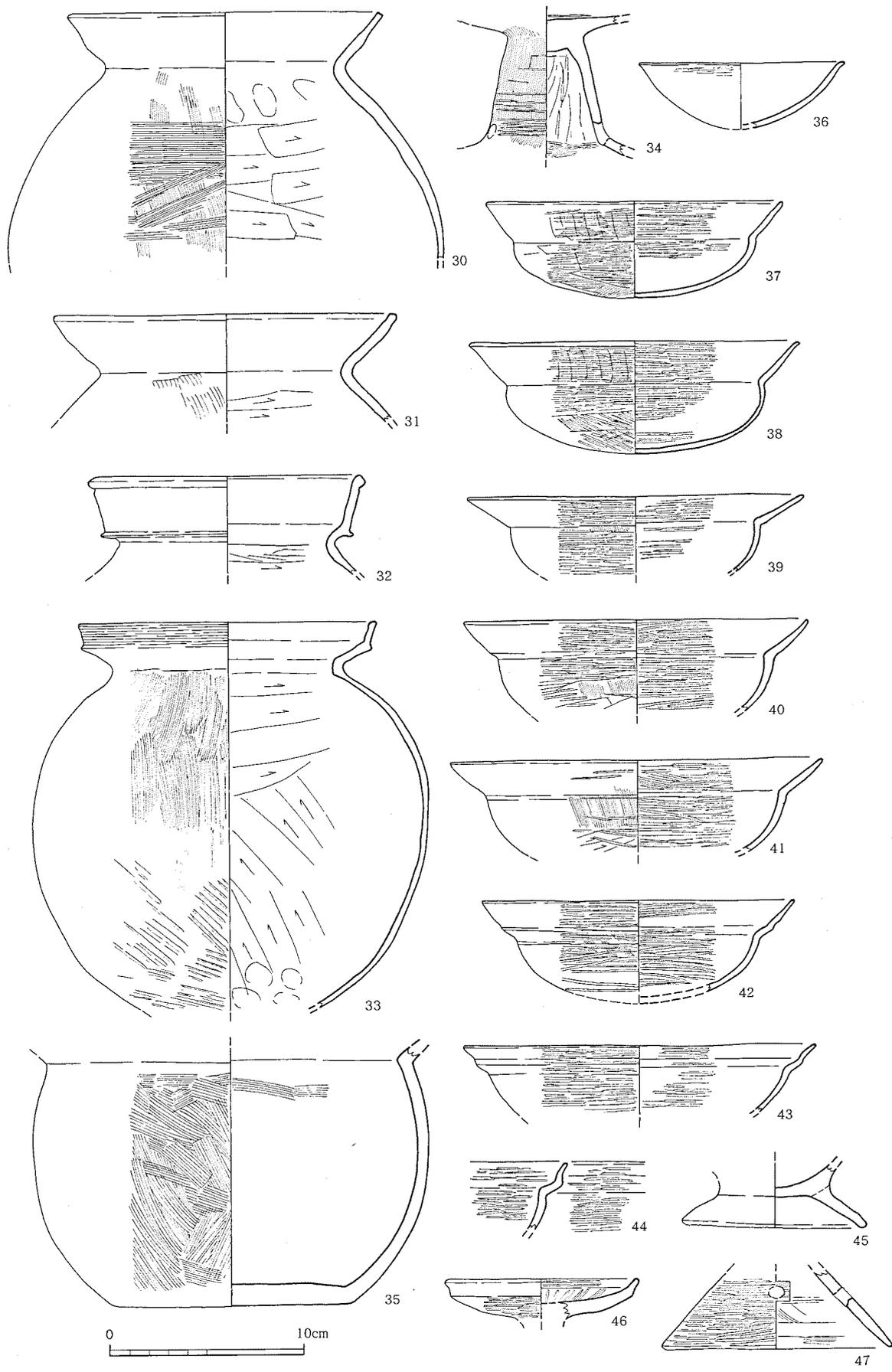
の順に行い、肩部には雑な櫛描波状文を巡らす。内面は上半の横ヘラケズリの後に下半のヘラケズリ上げを行い、底部付近には指圧痕が明瞭に残る。胎土には砂粒を若干含み、色調は肌灰色を呈す。外面は二次加熱のために黒変した箇所があり、また煤が付着する。24は肩部にやや丸味を帯びた器形となり、その肩部に一条のヘラ描波状文を巡らせる。25は口縁部がほとんど内湾せず、端部のつまみ出しもない。26は球形に近い胴部となる。口縁部は中膨らみとなり、外端部をつまみ出す。27は肩部に櫛描直線文を巡らせる。外面には煤が付着する。28は胴部が丸味を帯び口縁部付け根が締まった器形となる。肩部には一条の沈線を巡らせ、下半にはハケ目に先行する左上がりのタタキが残る。29は胴部に対して口縁部の径が大きい。胴部内面のヘラケズリは屈曲部近くにまで及ぶ。口縁端部のつまみ出しは無く、端部が丸味を帯びる。30も口縁端部のつまみ出しが無く、強い横ナデにより端部にシャープな面を形成する。肩部は丸味が少ない。31は口縁端部に水平面を形成する。胴部のハケ目は粗く、内面のヘラケズリは屈曲部付近にまで及ぶ。

32は山陰系の二重口縁甕である。一次口縁部は短く強く外反し、屈曲部外面は薄くシャープな突帯を巡らす。二次口縁部はやや外傾し、端部を丸く肥厚させる。口縁部はヨコナデ調整。色調は黄灰褐色を呈す。33は吉備系の二重口縁甕である。胴部は球形で頸部付け根は強く締まる。二次口縁部はわずかに外反し端部は丸くおさめる。外面の胴部下半は左上がりタタキをナデ消す。上半は細かい縦ハケ目を短く行う。口縁部外面には横ナデの条線が強く残る。全体的に器壁が薄い。胎土に石英・長石等の砂粒を若干含むが他の布留系甕と比べると粗砂が少なく、また砂粒の数も少ない。色調は黄灰褐色を呈す。外面は二次加熱を受け黒変する。

34は高坏の脚部である。接合は粘土充填式による。内面はヘラナデ、外面は縦ハケ目後に疎らな横ヘラミガキを行う。穿孔は屈曲部に2ヶ所行う。胎土は比較的精良で色調は橙茶色を呈す。

35～45は鉢である。35は平底の大型鉢。頸部の屈曲はシャープで内面に明瞭な稜を有す。底部の屈曲もシャープである。内面はナデ、外面は雑な斜ハケ目。色調は淡茶色を呈す。36は尖底気味の小型精製直口鉢。器表の風化が著しいが、外面にはわずかに横ヘラミガキが観察される。器壁は薄い。胎土は比較的精良で色調は肌茶色を呈す。37～41は外反口縁で体部の浅い小型精製鉢。いずれも調整に緻密な横ヘラミガキを用いる。胎土は精良な粘土を使用する。37は黄灰色を呈し、全面に橙色の化粧土を塗布する。38は体部下半にヘラナデが、口縁部には指圧痕が残る。色調は黄橙色。39は口縁部の開きが強い。色調は肌茶色。40は黄肌色。41は外面のヘラミガキが疎らである。色調は肌色。42～44は屈曲口縁の精製鉢である。42は屈曲部が不明瞭で、体部外面の横ヘラミガキが疎らである。胎土は精良で色調は黄肌色を呈す。43も屈曲部が不明瞭。胎土は精良で色調は茶色。44は上記2点と比較すると屈曲部の稜が明瞭で、口縁部も上方に立ち上がる。胎土は精良で色調は茶色を呈す。45は脚付鉢の脚部。全面ナデ調整。胎土に砂粒を若干含み、焼成がやや悪く色調は暗灰色を呈す。

46・47は小型精製器台で、接合しないが同一個体である。46は受部の立ち上がりが短く外反する。内面には細かいヘラミガキによる放射状の暗文を施す。47の内面はハケ目後横ナデ、外面は緻密な横ヘラミガキ。穿孔があるが破片なので個数は不明。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。48・49は山陰系鼓形器台である。48は内面太い横ヘラミガキ、外面横ナデ。色調は黄灰色を呈す。49は内面斜ヘラケズリ、外面横ナデ。50は製塩土器の脚部で全面指ナデ整形。器壁は薄い。全面に強い二次加熱を受け色調は赤茶色を呈す。



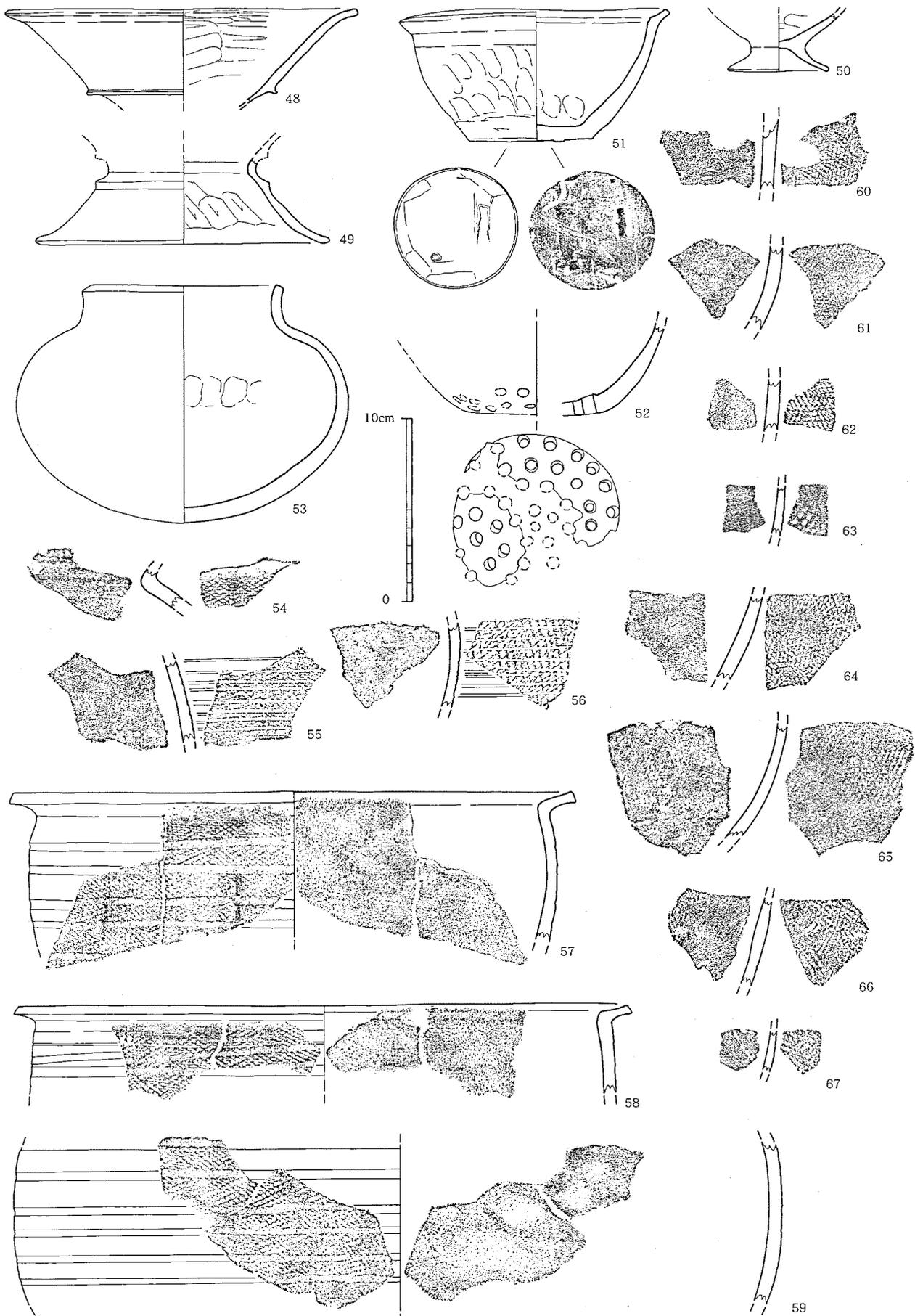
第71图 27号竖穴住居跡出土土器実測图④ (1/3)

51～67は半島系の土器である。51は半島南西部を中心に分布する小型の平底鉢である。陶質だが硬質ではなく、瓦質に近い焼き上がりとなる。底部は丁寧なヘラナデにより表面を整えるが、回転台の圧痕と思われる不整形の突起物が二ヶ所に残る。体部の最下端には横方向の弱い静止ヘラケズリを加える。体部外面は弱い静止横ナデを行い、ナデが弱いために整形時の指圧痕が残る。口縁部は短く外折し、端部には強い回転ナデを加えて面をなす。内面は底面に至るまで全面回転ナデを行う。内面全面と外面の口縁部下には回転ナデによる横方向の条線が認められる。胎土は砂粒をほとんど含まず精良な水漉粘土を使用する。色調は薄灰色～黄灰色を呈す。52は甌の底部である。底部は丸味をもった平底で、蒸気孔は外側から内側へと穿孔する。蒸気孔の配列には規則性が窺え、中央に一孔を穿ち五重に配置したものと推察される。胎土には砂粒を若干含み、色調は灰褐色、焼成は瓦質に近い軟質である。

53は小型の壺である。破片資料で把手の有無は不明。陶質だが焼きがあまり良くなく、瓦質に近い。色調は表面がくすんだ黄灰色、断面が明茶色を呈す。底部は丸底で胴部の最大径は中位よりやや上にあり、肩が丸く張った器形となる。肩部から口縁部へとは屈曲せず緩やかに移行し、口縁部は短く直立する。端部には強い横ナデを加えてシャープな面をなす。外底面は不整方向のナデ、上半は回転ナデを行う。内面の下半は静止ナデ、肩部からは回転ナデを行い、肩部内面には指圧痕が明瞭に残る。口縁部付近は回転ナデ。胎土に砂粒を含まず、水漉した精良な粘土を使用する。接合資料や同一個体破片が他に26・29号竪穴住居跡や周辺の包含層から数点出土している。54は器壁が厚く、比較的大型の壺肩部片と思われる。外面は斜格子タタキの後に沈線、内面はナデ。胎土に砂粒を若干含み、色調は内面がくすんだ黄灰色、外面が黒灰色を呈す。焼成は瓦質に近い軟質に仕上がる。55は壺の胴部片か。小片であるため径・傾きは不明。外面は小さな斜格子タタキの後に沈線を狭い間隔で巡らせる。内面は方向が一定しない静止ナデ。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質、色調は淡黄灰色を呈す。56は鉢であろうか。外面はやや大振りの斜格子タタキの後に沈線を狭い間隔で巡らせる。内面はナデ。胎土は砂粒を若干含み色調は内面肌色、外面は上から橙色の化粧土を塗布する。焼成は軟質。同一個体と思われる小破片が同住居跡の上層から1点出土している。

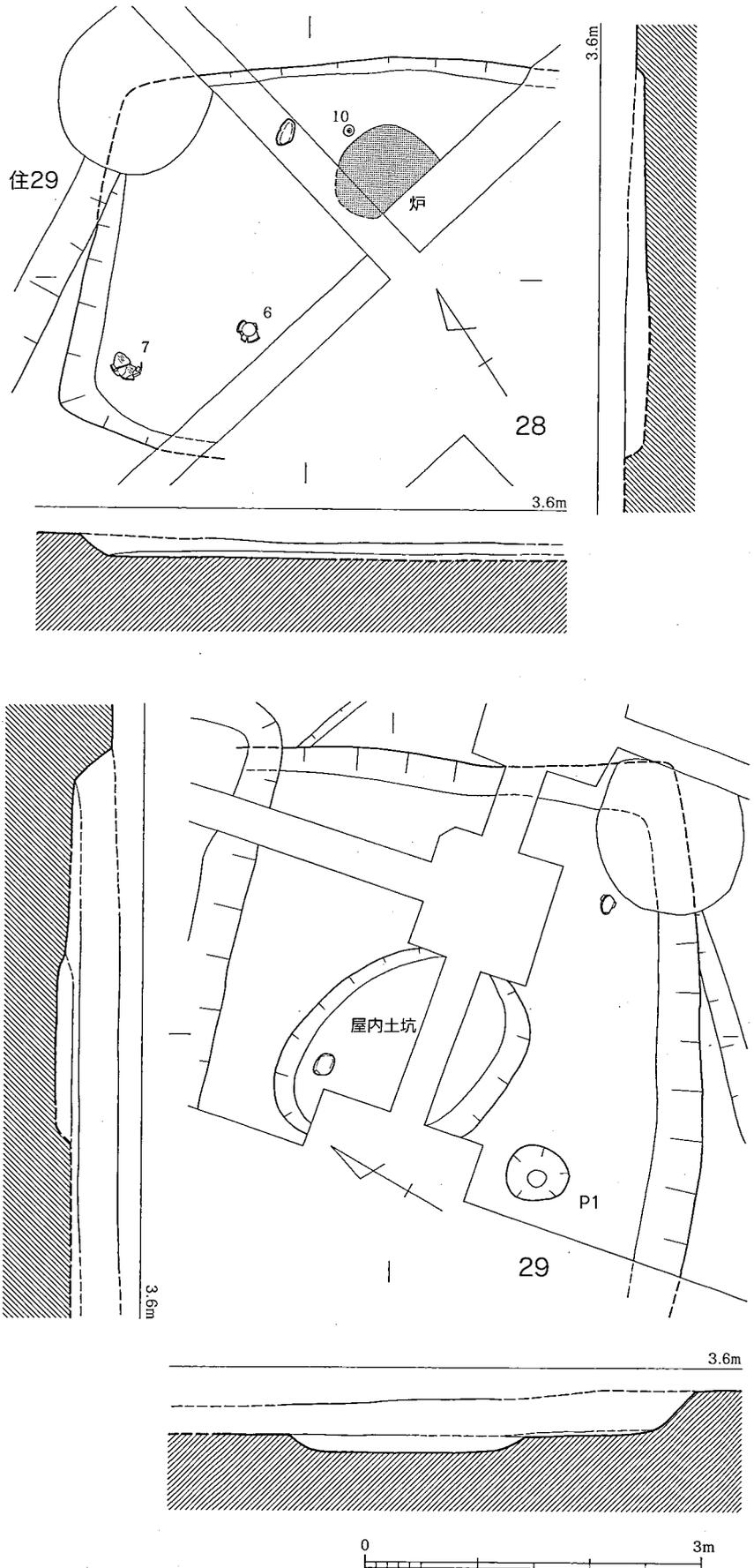
57～59は形状、調整ともよく似ており、同一個体の可能性もあるが、それぞれの破片から算出した径や、口縁部の微妙な形状、色調の違いなどから確実に同一個体と断定するまでには至らなかったため、それぞれ別のもので報告することとした。57は大型の鉢である。口縁部は短く強く外折し、端部には強い横ナデを加えてシャープな面を形成する。外面は小さな斜格子タタキの後にやや太めの凹線を巡らせ、内面は丁寧な横ナデを行い、無文の当て具痕が残る。胎土に砂粒を若干含み色調は内面灰白色、外面は暗黄灰色を呈し、焼成はやや硬い感じのする軟質焼成である。同一個体と思われる破片資料が他に2点出土している。58は57とよく似た形状だが口縁部が短く、また胴部も57と比較すると直線的である。外面はやはり小さな斜格子タタキの後太い凹線を巡らす。内面は横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は明黄灰色、焼成は軟質である。59は鉢の胴部片である。外面は小さな斜格子タタキの後に凹線を巡らす。内面は横ナデを行い部分的に無文当て具痕が認められる。胎土に石英・長石等の細砂粒を若干含み、色調は内面がくすんだ黄灰色外面が黒色を呈す。焼成は軟質である。

60～67は傾きも不明な細片資料ばかりである。前述の57～59と同一個体となりそうな資料が多い。60は外面小さな斜格子タタキ後、一部を軽くナデている。内面は横ナデ。色調は内面黄褐色、



第72图 27号竖穴住居迹出土土器实测图⑤ (1/3)

外面淡灰色を呈し、やや硬い感じの軟質に焼成される。61は外面小さな斜格子タタキ後弱いナデ、内面はナデ。胎土に砂粒を若干含み、色調は内面くすんだ黄灰色、外面黒灰色、軟質焼成である。62は外面に斜格子タタキ、内面にナデを行い、色調は暗灰色、焼成は軟質。63は外面がやや大きめの斜格子タタキ、内面ナデ。色調は明灰色を呈し、焼成は瓦質である。64は外面小さな斜格子タタキ、内面ナデで、色調は外面黄褐色、内面黄灰色を呈し、焼成は軟質で硬く良好な焼き上がりとなる。65は底部に近い破片であろう。外面小さな斜格子タタキの後に弱いナデ、内面は不整方向ナデ。色調は黄灰色を呈し焼成は軟質。58と同一個体の可能性が高い。66は外面小さな斜格子タタキの後弱いナデ、内面は方向の一定しないナデ、色調は内面明黄肌色、外面淡黒灰色を呈し、焼成は軟質。67は器壁が薄い。外面小さな斜格子タタキ、内面ナデで色調は黄灰色、焼成は軟質である。



28号竪穴住居跡 (図版16、第73図)

I区西4・I区中5で検

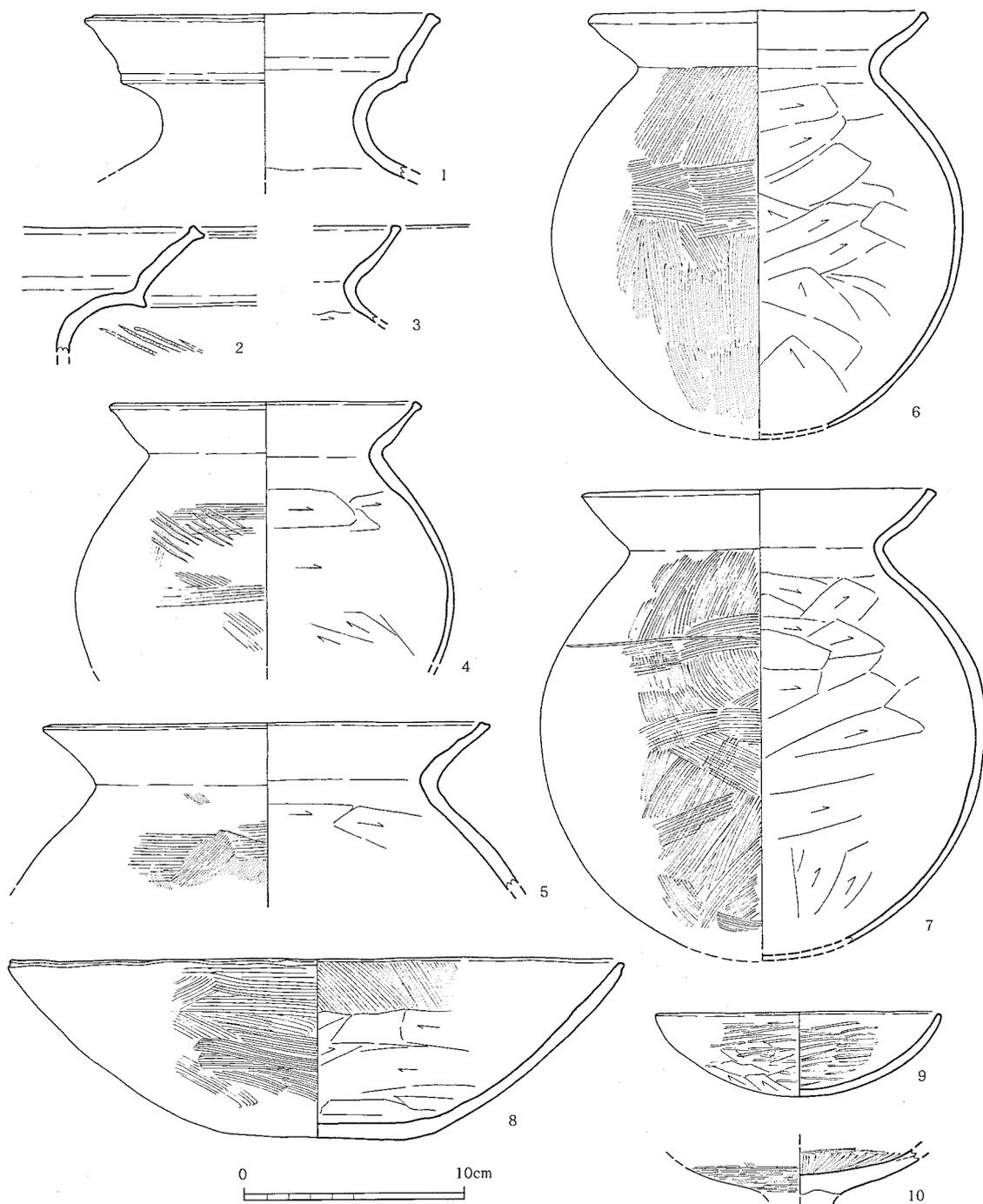
第73図 28・29号竪穴住居跡実測図 (1/60)

出した竪穴住居跡である。27号竪穴住居跡から約2mほど南西に位置する。29号竪穴住居跡と重複しており、新旧関係ではこれよりも古い。南側が校舎基礎で大きく攪乱を受けるため全体の形状は不明だが、残存する部分から平面形は長方形プランと推察される。北西壁の長さは約3.0m。床面は西側がやや深くなっており、東側は深さ10cm、西側は深さ25cmを測る。住居跡の中央からやや東よりの位置で、径90cm前後に復元できる焼土面を確認した。これは炉と判断して良いだろう。その他支柱穴等は検出できなかった。

図示した土器のうち、6・7・10は床面近くから出土した。それ以外は覆土からの出土である。

出土土器 (図版50・51、第74図)

1・2は山陰系二重口縁壺である。色調はどちらも黄灰褐色を呈す。1は口縁外端をつまみ出し、



第74図 28号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

上面が窪む。2は端部を内外につまみ出し、上端が広い面をなす。頸部外面にはハケ状工具の刺突による平行斜線が配される。

3～7は布留系の甕である。3は口縁部が直線的にのび、端部は水平面をなす。色調は肌色を呈す。4は肩が張らず胴部の最大径がやや下位に位置する。口縁部の内湾は弱く端部は小さな面をなす。外面にはハケ目に先行する左上がりタタキが観察される。色調は黄灰色。5は肩が張り、口縁部は直線的に開き、端部は内側をつまみ出し上面がほぼ水平となる。肩部のハケ目には二種類の原体を使用する。色調は白黄灰色で口縁部外面には煤が付着する。6はやや縦長の球形胴で、最大径は中位に位置する。口縁端部は丸味を帯び上方を向く。肩部の横ナデは弱く、そのため先行する縦ハケ目が明瞭に残る。内面のヘラケズリは屈曲部近くまで行われる。色調は茶褐色を呈す。口縁部外面の煤の付着が著しい。7は球形胴に近い。肩部には一条の沈線を巡らせる。口縁部は弱く内湾し、端部につまみ出しはない。色調は黄灰褐色を呈し外面全体に煤の付着が著しい。

8・9は鉢である。8は在来系の大型鉢。底部は平底に近い。体部は大きく開き、口縁部は強い横ナデにより端部が窪む。内面は口縁部付近にハケ目を行った後、下方に横ヘラケズリを行う。外面は横ハケ目で底部付近はナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。9は小型の精製鉢。内外面ヘラミガキを行うが、外面は上半のみ密に行っており下半にはあまり行われず、またヘラナデが観察される。胎土は精良で色調は黄褐色を呈す。10は小型精製器台であろう。内面には放射状の暗文が見られるが、これに先行する横ハケ目が残る。外面はハケ目後に横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は黄茶色を呈す。

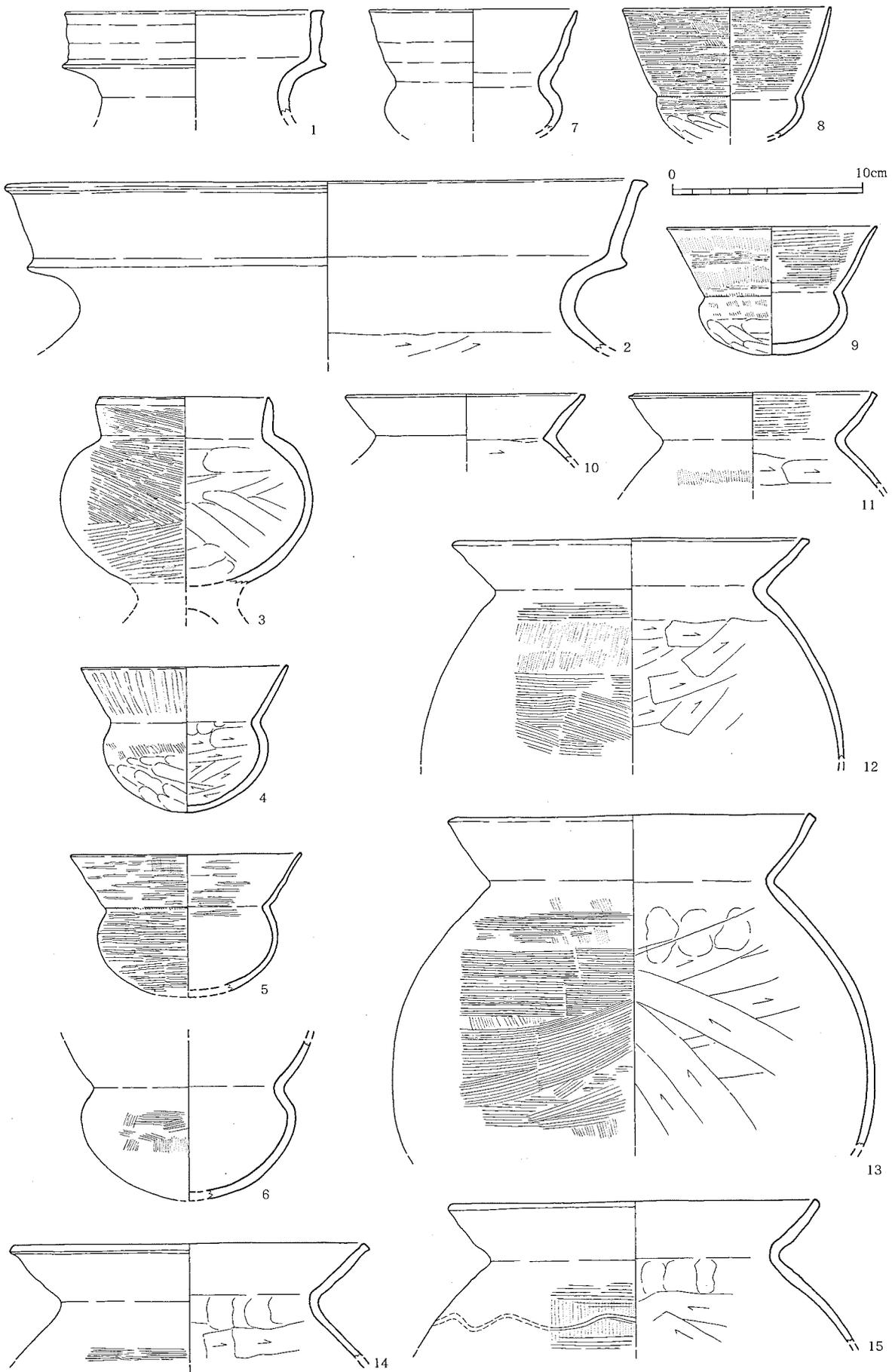
29号竪穴住居跡 (図版17、第73図)

I区西3・4で検出した竪穴住居跡である。28号竪穴住居跡の北側に位置する。28・30・55号竪穴住居跡と重複しており、新旧関係は28・55号竪穴住居跡より新しく、30号竪穴住居跡よりも古くなる。西側が調査区外へと続いており、重複もあって全体の形状に不明な点が多い。検出した部分で南壁長4.5m、東壁長3.6mを測り、大型の部類に含まれる。床面はほぼ水平で、遺構面からの深さは40cmを測る。床面のほぼ中央で長軸2.3m、短軸1.8m、深さ15cmの屋内土坑を検出した。覆土には焼土は含まれておらず、炉とは考えられない。P1は径50cm、深さ30cmを測る。

出土遺物は比較的多い。土器の他、砥石、鉢、不明土製品が出土している。

出土土器 (図版51・52・85、第75～77図)

1～9は壺である。1は口縁部が直立する山陰系二重口縁壺。上端は水平面をなす。胎土に含む砂粒は比較的少なく色調は黄灰褐色を呈す。2は同じく山陰系の大型二重口縁壺。頸部は締まらず口縁部もあまり開かない。端部は外側につまみ出し、上端は水平面をなす。色調は灰褐色を呈す。3は精製の小型脚付短頸壺である。胴部は球形で口縁部は短く直立し、端部は面を外側に形成して尖る。胴部内面は指ナデ、口縁部内面は横ナデ、外面の口縁部から胴部上半にかけては細かいヘラミガキ、下半はそれに比べてやや幅広のヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。4～9は小型丸底壺である。4は口縁部内面横ナデ、外面は暗文状に縦ヘラミガキを行う。体部内面はヘラナデ、外面はハケ目後に太いヘラミガキを行う。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄肌色を呈す。5は胎土が精良で、内外面に細かいヘラミガキを行う精製品。口縁部の器壁は非常に薄く、端部はシャープに尖る。色調は橙茶色を呈す。6は胎土に砂粒を若干含み、調整にヘラミガキを使用しない粗製品。色

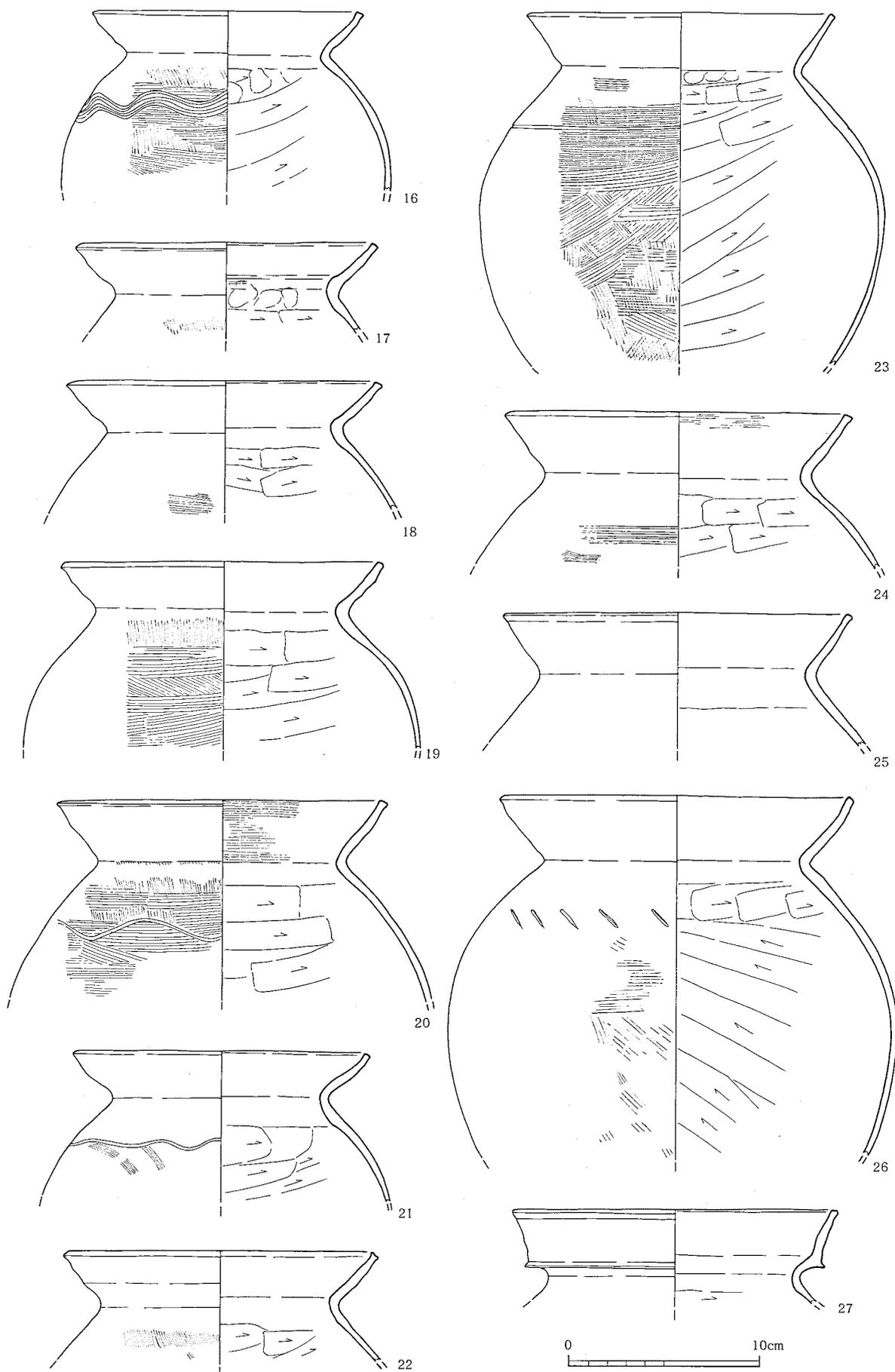


第75图 29号竖穴住居跡出土土器実測图① (1/3)

調は黄灰色を呈す。7は胴部が扁平で小さく、口縁部が長大化したものである。口縁部は横ナデ、胴部は風化が著しく調整不明。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。8は7よりも更に胴部が矮小化し、肩部の屈曲が不明瞭である。胴部内面はナデ、口縁部は内外面共細かい横ヘラミガキ、胴部はヘラナデを行う。胎土は精良、色調は橙肌色を呈す。9は口縁部内面に横ナデ前の横ハケ目が明瞭に残る。外面は縦ハケ目の後に疎らな横ヘラミガキを行う。底部はヘラナデ。胎土は精良で色調は黄肌色を呈す。

10~27は甕である。10は屈曲部までヘラケズリが及び明瞭な稜を有し、口縁部が直線的に開く庄内系の甕。端部は小さな水平面をなす。二次加熱が著しく全体的に黒変し、また外面には煤が付着する。11は口縁部が直線的に開き、内端部をつまみ出す小型の甕。口縁部内面には横ナデに先行する横ハケ目が残る。色調は肌灰色を呈す。12は肩が張らず、口縁端部はわずかにつまみ出す。色調は黄灰褐色を呈す。13は口縁部が立ち気味に開き、端部につまみ出しは見られない。色調は黄灰褐色。14は口縁端部の外側をわずかにつまみ出している。屈曲部内面には指圧痕が見られる。色調は黄灰色を呈し外面には煤が付着する。15は口縁端部が丸味を帯びる。肩部には一条の波状文を巡らす。色調は黄灰褐色を呈し、外面は二次被熱により下半が黒変する。16は球形胴で頸部がよく締まる。肩部には櫛描波状文を巡らす。色調は黄灰褐色。17は屈曲部内面に指圧痕を残し、端部にはつまみ出しが見られずシャープな面をなす。色調は黄灰褐色。18は口縁端部を内外にわずかにつまみ出している。色調は黄灰色を呈し器表の風化が著しい。19は肩がやや張った器形となり口縁部は短い。端部は丸くおさめられる。色調は黄灰色。20は口縁部が直線的に開き、他よりも立ち気味である。端部はシャープな面をなす。口縁部内面には横ハケ目が見られ、肩部には一条のヘラ描波状文を巡らせる。肩部の横ナデは幅が狭い。色調は赤黄色を呈し、器形や色調においても他の一般的な布留系甕と様相をやや異にする。21は口縁部が内湾し、端部にはつまみ出しが見られない。肩部には一条のヘラ描波状文を巡らせる。色調は黄灰褐色を呈す。22は口縁端部の内側をシャープにつまみ出す。色調は黄灰褐色。23は肩の張りが弱く、最大径が中位に位置する。口縁部は直線的に開き、他のものより立ち気味である。端部につまみ出しはない。肩部には一条の沈線を巡らす。内面のヘラケズリは下半まで横方向に行っており、また屈曲部近くにまでヘラケズリが及んでいる。色調は橙灰色を呈す。器壁は全体的に薄い。肩部以下に二次被熱による煤が付着する。整形・色調とも他の一般的な布留系甕と様相を異にする。24は頸部がやや締まった形状となり、口縁部は直線的に開く。端部はやや面をなす。肩部には櫛描直線文を巡らす。色調は黄灰色を呈す。25は器表の風化が著しく調整は不鮮明である。口縁部は立ち気味に開き端部は外側につまみ出す。肩部は直線的に傾斜する。色調は黄肌色を呈す。26は肩が丸く張って頸部がよく締まり、口縁部は立ち気味に開く。端部は面をなす。肩部にはヘラ工具の先端による刺突文を施すが、5ヶ所のみで全周はしない。色調は黄灰色を呈す。27は山陰系の二重口縁甕である。一次口縁は強く外反し、二次口縁との屈曲部外面の突帯は鋭く尖る。口縁端部は外側に丸くつまみ出し、上端は水平面をなす。色調は黄灰色。

28~36は鉢である。28・29は精製の浅い小型鉢で、内外面に細かいヘラミガキを行う。どちらも胎土は精良で、28は色調暗黄灰色、29は肌灰色を呈す。30は内面下半に横ヘラナデ、上半に横ハケ目、外面に横ハケ目を行う粗製の鉢。胎土に砂粒を若干含む。31はやや深い鉢。外面の下半はヘラナデを行い、内面は短い横ハケ目の後にナデによる暗文を行う。口縁端部は面をなす。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。32~34は外反口縁の精製鉢。32は両面とも丁寧な横ヘラミガキ。



第76图 29号竖穴住居迹出土土器实测图② (1/3)

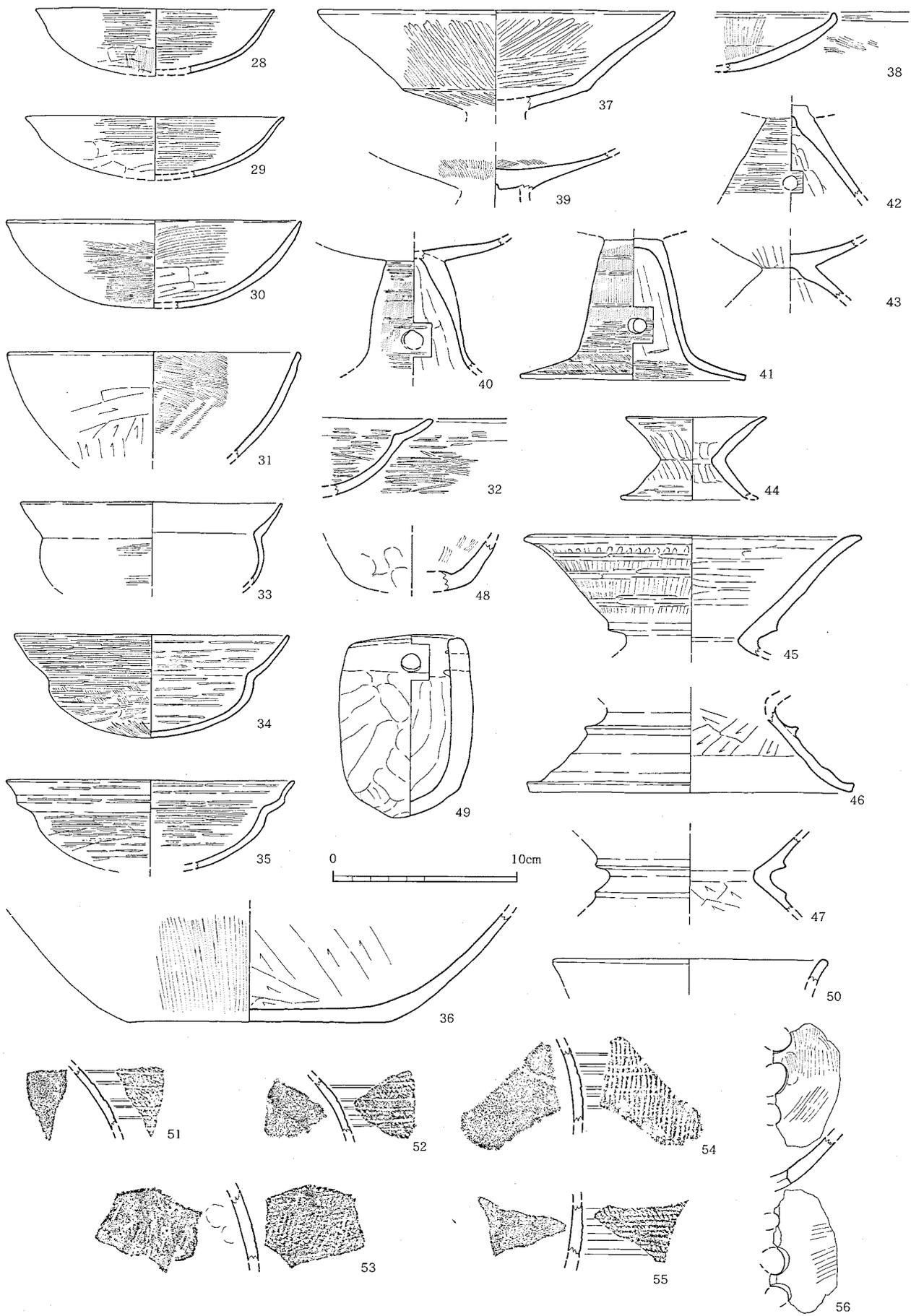
体部が浅く口縁部が短い。33は器表の風化が進むが、外面にはわずかに横ヘラミガキが認められる。34は33と比べて体部が浅く小さくなり、対照的に口縁部が長大化する。体部内面にも横ヘラミガキが行われる。32は赤褐色、33は色調橙肌色、34は肌茶色。35は有段口縁の精製鉢。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。36は大型の平底鉢。山陰系二重口縁の大型鉢かとも考えたが底部が平坦すぎる気もする。破片資料を図上で復元したため、器形に不安が残る。内面はヘラケズリ、外面は縦ハケ目、底部もハケ目。

37～41は高坏である。37は太めのヘラミガキを密に行う。屈曲部の稜は明瞭で、口縁部は外反する。胎土に砂粒を若干含み黄灰色を呈す。38は鉢の可能性もある。口縁部は上方へとつまみ上げる。内面は縦ハケ目後横ナデ、外面は粗いハケ目。胎土に砂粒を若干含み色調は肌色を呈す。39は脚との接合部に軸受孔をもつ山陰系の技法で作られた高坏。外面はハケ目後ナデ、内面はハケ目後放射状の暗文を施す。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰白色を呈す。40は中膨らみの柱部となる畿内系高坏。内面は縦方向の指ナデ、外面は細かい縦ハケ目の後疎らな横ヘラミガキを行う。穿孔は屈曲部よりやや上に位置する。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。41は柱部の中膨らみがなく直線的で、裾部は大きく広がる。器壁も薄い。内面は縦ナデ、外面は細かいハケ目の後疎らな横ヘラミガキ。胎土は肌理がやや粗いものの砂粒は少なく、色調は黄灰色を呈す。黒斑あり。

42は小型精製器台の裾部。内頂部には軸受孔が見られる。内面指ナデ、外面横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は茶褐色を呈す。43は小型器台としたが、器台にしては裾が開きすぎる気もする。脚付鉢の方が妥当かもしれない。器表の剥離が著しく調整が不鮮明である。受部外面、裾部内面は縦指ナデ。胎土は精良で色調は赤茶色を呈す。44～47は鼓形器台である。44は小型で突帯をもたない。屈曲部周辺は指ナデが明瞭に残り、端部外面は横ヘラミガキを行う。端部内面は横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は明赤褐色を呈す。45～47は山陰系の鼓形器台である。45は内面が太い横ヘラミガキ、外面は縦ヘラミガキの後に間隔をあけて帯状に横ヘラミガキを行っている。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。46は内面ヘラケズリ、内面の端部付近と外面は横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。47は受部内面にナデ、裾部内面にヘラケズリを行う。胎土に砂粒を若干含み色調は肌白色を呈す。

48・49は蛸壺である。48は内面に板状工具小口による擦痕が観察される。胎土に砂粒を若干含み色調は白黄色を呈す。49は器高が低く器壁も厚い。穿孔は通常よりも上に位置する。内外面指ナデ整形を行い底部には工具痕のような擦痕が見られる。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。

50～56は半島系の土器である。50は直口壺の口縁部と思われるが細片を図上復元したものであり径には不安が残る。端部は横ナデにより丸く仕上げられる。胎土は精良で色調は淡い灰色、瓦質焼成である。51～55は細片で、壺の胴部片か。51は外面に小さな斜格子タタキの後に平行沈線を巡らす。内面はナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄橙色、軟質焼成だが硬く締まっている。52も外面は小さな斜格子タタキの後に平行沈線を狭い間隔で巡らせる。内面はナデ。胎土に砂粒を若干含むが粘土自体は緻密で良質である。色調は淡灰褐色を呈す。硬く締まった軟質焼成である。53は外面に小さな斜格子タタキを行った後に一部ナデ消しを行っており、胴部でも下半に位置するものと考えられる。内面はヘラケズリ後ナデ消し。胎土は砂粒を若干含み、色調は淡黄灰色、硬く締まった軟質に焼成される。54は器表の風化が著しい。外面平行タタキの後平行沈線、内面はナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は淡黄灰色を呈し、軟質に近い瓦質焼成である。55は外面に小さな斜格子タタ

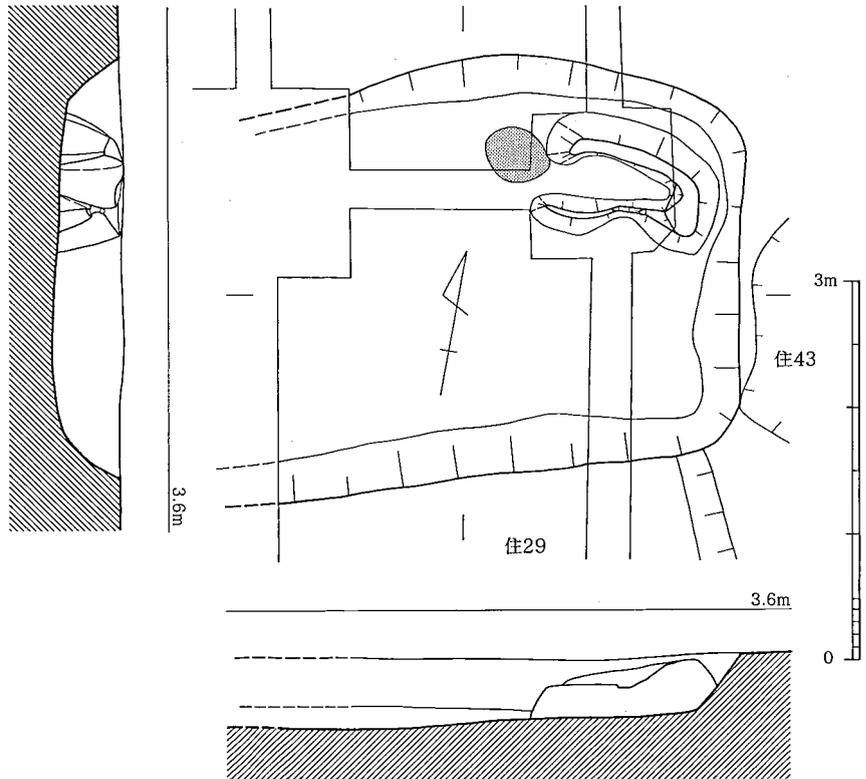


第77图 29号竖穴住居迹出土土器实测图③ (1/3)

キの後浅い平行沈線を狭い間隔で巡らす。内面はナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は内面暗黄灰色、外面灰褐色、軟質に焼成される。56は甑の底部である。内面はハケ目と指オサエ、外面は上部がハケ目、底面近くはナデを行い、蒸気孔は通常の例よりも大きい。胎土に砂粒を若干含み色調は内面暗灰褐色、外面黒褐色を呈す。黒変しているのは二次被熱のためであろう。焼成は軟質である。軟質土器というよりも胎土、色調、調整等も含めて土師器とした方が適当である。

30号竪穴住居跡 (図版17、第78図)

I区西2・3で検出した竪穴住居跡である。29号竪穴住居跡の北隣に位置する。29・35号竪穴住居跡と重複しており、この中では最も新しい。西側が調査区外へと続いたため長軸の長さは不明だが、東壁長は2.8mを測り、東西に長い長方形プランとなる。当遺跡の竪穴住居跡の中では比較的小型の部類に含まれる。床面は南西側がやや深くなっており、この部分で深さ55cm、東側で深さ40cmを測り、残りが良い方である。北東コーナーで、主軸が北壁に平行するカマドを検出した。それ以外に支柱穴等は検出していない。

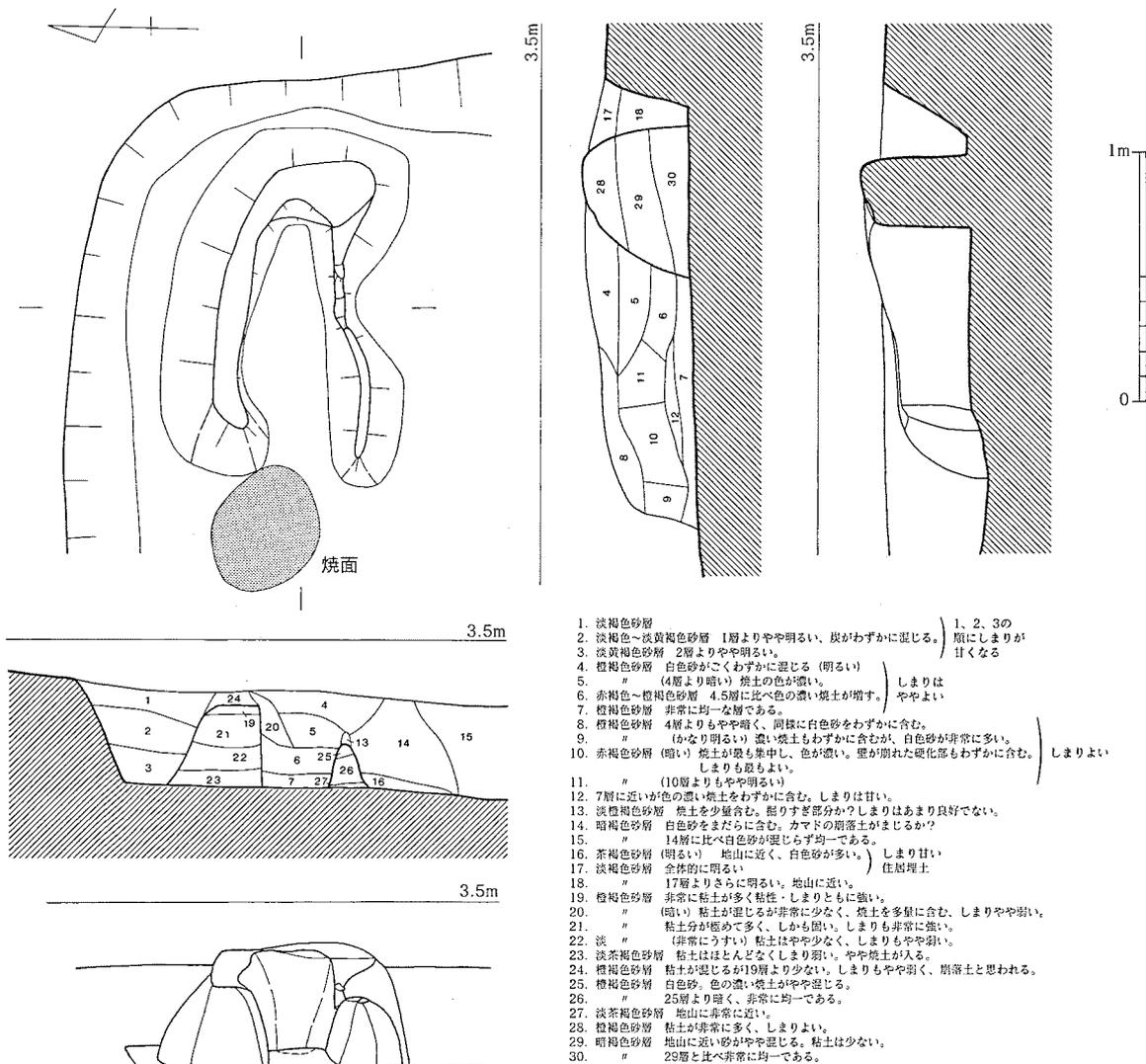


第78図 30号竪穴住居跡実測図 (1/60)

床面は南西側がやや深くなっており、この部分で深さ55cm、東側で深さ40cmを測り、残りが良い方である。北東コーナーで、主軸が北壁に平行するカマドを検出した。それ以外に支柱穴等は検出していない。

30号竪穴住居跡カマド (図版17、第79図) 住居跡の北東コーナーに位置し、主軸が北壁とほぼ平行するカマドである。煙道側から焚口までは長さ2.9mを測る。右袖は幅35cm、高さ30cm、左袖は幅30cm、高さ28cm、両袖の内側の幅は30cm、外側の幅は98cmを測る。カマドの煙道側が最も残りが良く、対して焚口側はそれほど残りは良くない。焚口の西側には径100cm程の焼土が認められ、これがカマドに伴う火床面だとするとカマドの袖はもっと長かったことになる。しかし焼土の付近にまで両袖は伸びていない。また、カマドの北側・東側は構造上或いは他例と照らし合わせても、本来住居跡の壁に接していたはずであり、埋没過程において周囲の壁が締まりのない砂だったために崩れてしまった可能性が高い。カマドの構築には橙褐色の粘土・細砂混合土を使用し、非常に堅牢に造られる。

図示した出土土器のうち、9・11・12・20はカマドとその周辺から出土した。これ以外は覆土からの出土である。

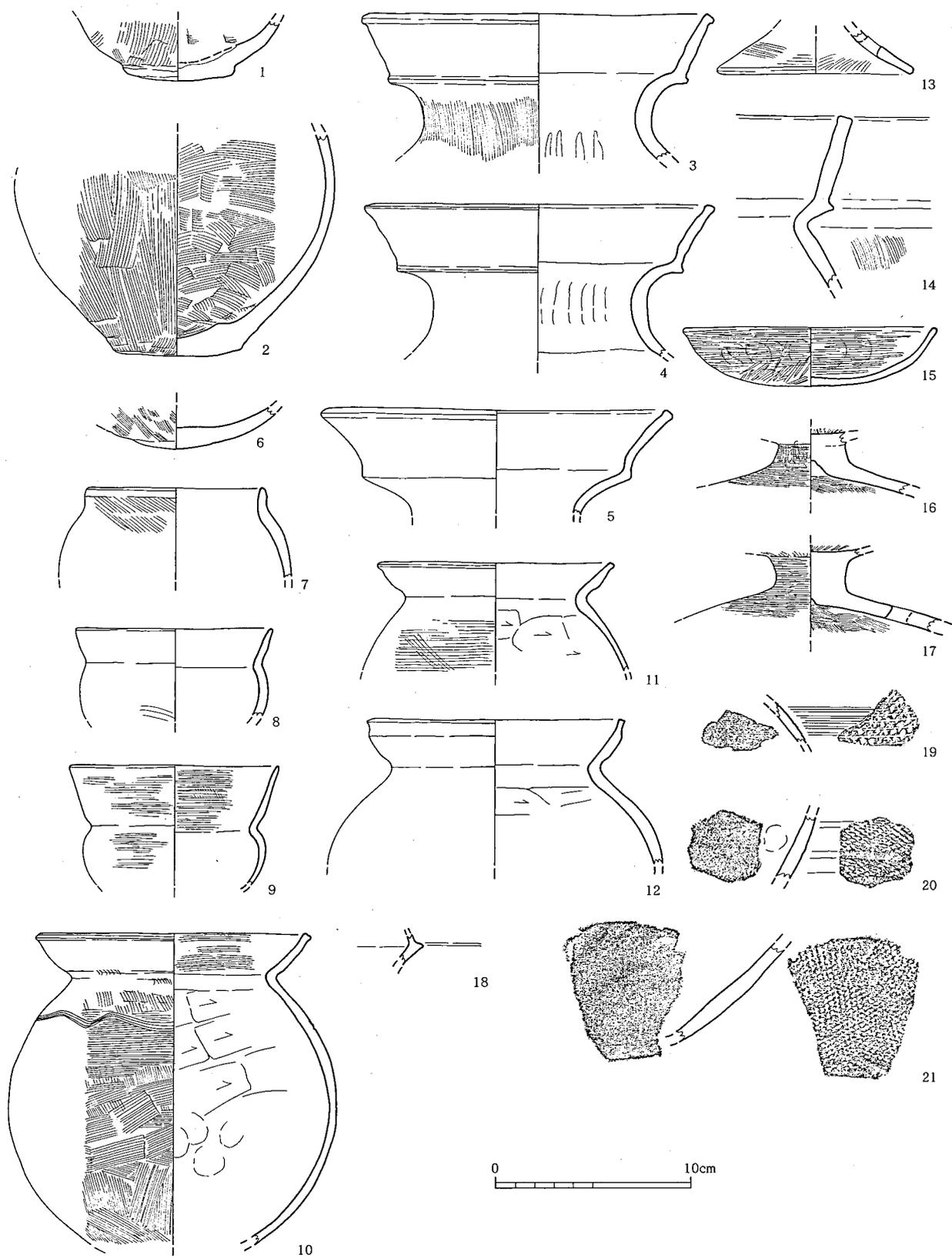


第79図 30号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

出土土器 (図版52・85、第80図)

1・2は弥生時代後期の土器。1は底部がレンズ状を呈し、底部と体部の境目は明瞭である。内面はハケ目の後ナデ調整を行い、外面はハケ目。胎土に砂粒を多く含み、色調は肌色を呈す。2もレンズ状の底部となるが、1に比べて底部と体部の境目は不明瞭である。内外面ハケ目調整。胎土に砂粒を若干含み、橙茶色を呈す。

3～9は壺である。3～5は山陰系二重口縁壺。3は頸部の外面に縦ハケ目を残し、内面には縦指ナデが残る。口縁部は直線的に開き、端部は外側をつまみ出す。色調は黄灰褐色。4・5は口縁部が若干外反しており、また端部の内側をつまみ出している。色調は4が黄灰褐色、5が灰色を呈す。6は丸底だが底部と胴部との境目を痕跡的に残す。内面はナデ、外面は細かい縦ハケ目。色調は肌色を呈す。7は直立する短い口縁部をもつ短頸壺。内面ナデ、外面は口縁部付近がハケ目、それ以下は横ナデ。8は鉢に近い形状の小型壺。内外面横ナデを行い外底部にはハケ目が残る。胎土に砂粒を含まず精良で、色調は黄灰色を呈す。焼成はあまり良くない。9は精製の小型壺。胴部最大径はかなり上位にあり、若干扁平となる。口縁部内外面と胴部外面は横ヘラミガキで内面にはハケ目が残る。胴部内面はナデ。胎土は精良で色調は肌灰色を呈す。



第80图 30号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/3)

10～12は布留系甕である。10は球形胴で口縁部はわずかに内湾し、端部は強い横ナデにより窪ませる。口縁部内面には横ハケ目が残る。肩部には櫛描波状文を巡らせる。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。11は小型の甕。口縁部の中央が肥厚し、端部の外側をわずかにつまみ出して端部が面をなす。外面のハケ目は粗い。二次加熱のため部分的に器表が剥離する。12は口縁部が立ち気味に開き、外端部に強い横ナデを加えるため下端に段を形成する。上端は面をなす。外面は肩部まで横ナデが行われる。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰色を呈す。

13は直線的に開く高坏の脚裾部である。端部は丸い。内面はハケ目、外面は横ヘラミガキ。穿孔は屈曲部よりやや下に位置し、5ヶ所に配置されたものと思われる。胎土は精良で色調は白黄灰色を呈す。

14～17は鉢である。14は山陰系の大型二重口縁鉢である。一次口縁部は短く外反し、二次口縁部は直線的に伸びる。上端は面をなす。色調は肌色。15は精製の小型鉢。内外面に密な横ヘラミガキを行い、また指圧痕が残る。胎土は精良で色調は橙肌色を呈す。16・17は裾が大きく広がる精製脚付鉢。どちらも内面はハケ目、外面はハケ目後横ヘラミガキ。内頂部には軸受孔を残す。胎土は精良。16は橙茶色、17は肌色を呈す。17には穿孔を行う。

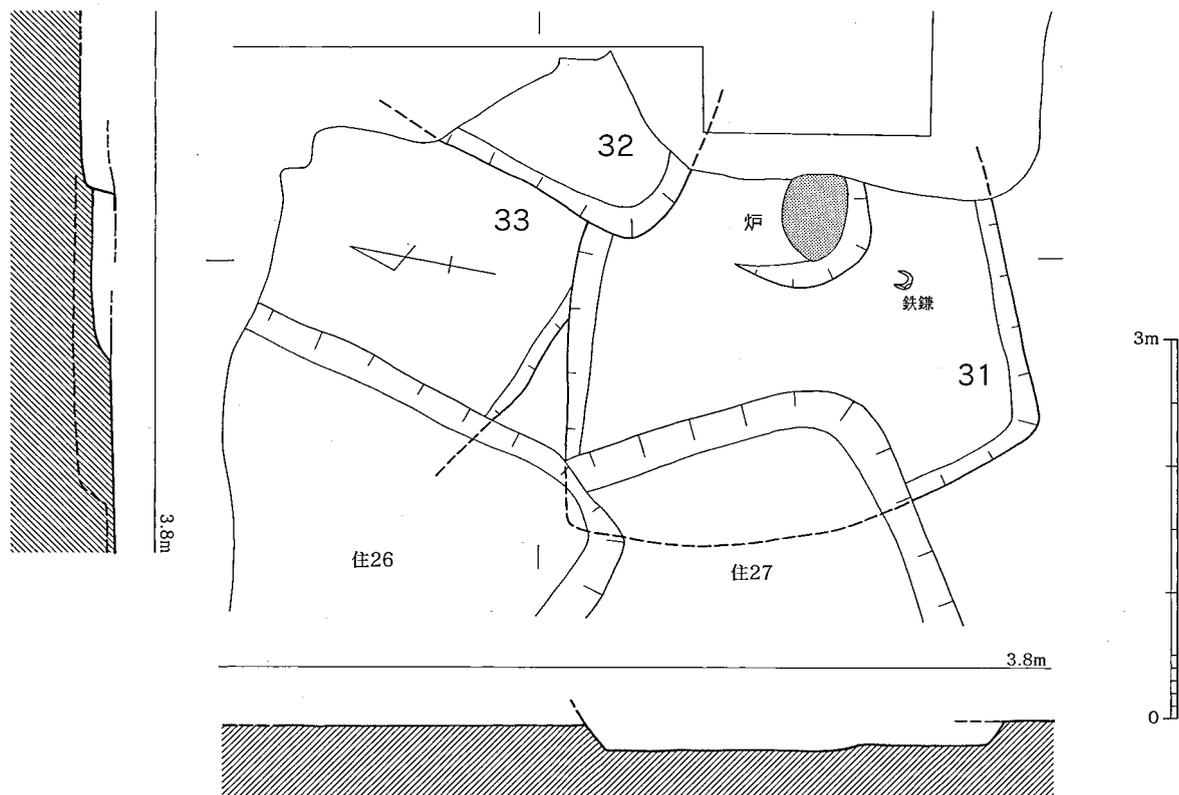
18～21は半島系の土器である。17は恐らく二重口縁壺であろう。全面横ナデ調整。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈し、軟質に近い瓦質に焼成される。19は壺の胴部片。外面は斜格子タタキの後平行沈線を狭い間隔で巡らす。内面はナデ。胎土に石英・長石・雲母の細砂粒を若干含み、色調は褐色、硬く締まった軟質に焼成される。20は鉢の胴部か。小さな斜格子タタキの後に凹線を巡らす。内面はナデで指圧痕が残る。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色、軟質焼成である。同一個体と思われる小片が32号竪穴住居跡から1点出土している。21は胴下半部。外面は方向が一定しない斜格子タタキ、内面は横方向のナデを行う。胎土に粗砂粒、細砂粒を若干含み色調は黄褐色、硬く締まった軟質焼成である。

31号竪穴住居跡 (図版18、第81図)

I区中5で検出した竪穴住居跡である。30号竪穴住居跡から6mほど南東に位置する。27・33・41・52号竪穴住居跡と重複しており、新旧関係では27・52号竪穴住居跡より古く、33・41号竪穴住居跡よりも新しくなる。重複が著しい上、東側が校舎の基礎によって攪乱されているので、全体の規模等は不明である。現状でかなりいびつになっているのは、埋没過程において壁が崩壊したためであろう。西壁長は3.8m前後に推定される。床面はほぼ水平で、遺構面からの深さは約20cmを測る。東端で浅い段落ちが認められ、その内側で焼土を検出した。炉としてよいだろう。ピットその他は検出されなかった。遺構面で鉄鎌が出土している。

出土土器 (図版52・85、第82図)

1～4は壺である。1は在地系壺の胴下半部。底部は尖底気味である。内面はハケ目、外面はハケ目の後に底部付近をヘラナデ上げ。胎土に粗砂を含む砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。2は山陰系の大型二重口縁壺。口縁部はやや内傾し、端部を外側につまみ出し、上面は水平面をなす。頸部にはヘラ描き沈線とハケ目工具の刺突による綾杉文を巡らせる。胎土に砂粒を若干含み色調は肌灰色を呈す。3は小型丸底壺。内外面ヘラミガキを行うが胎土はそれほど精良ではない。器壁は全体的に薄い。色調は暗黄灰色を呈す。4は直口壺。胴部最大径は中位よりやや上にあり、扁球形をなす。



第81図 31～33号竪穴住居跡実測図 (1/60)

口縁部は直線的に伸びてわずかに開き、端部は丸くおさめる。器壁は総じて厚い。胴部内面は横ヘラケズリ、外面は幅広の縦ヘラミガキを行い、先行するハケ目が観察される。口縁部は内外面ヘラミガキ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄肌色、口縁部～胴部にかけて一部黒斑が認められ、また底部には煤が附着する。

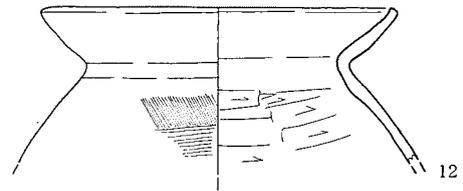
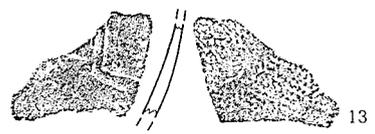
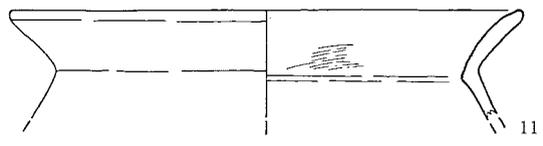
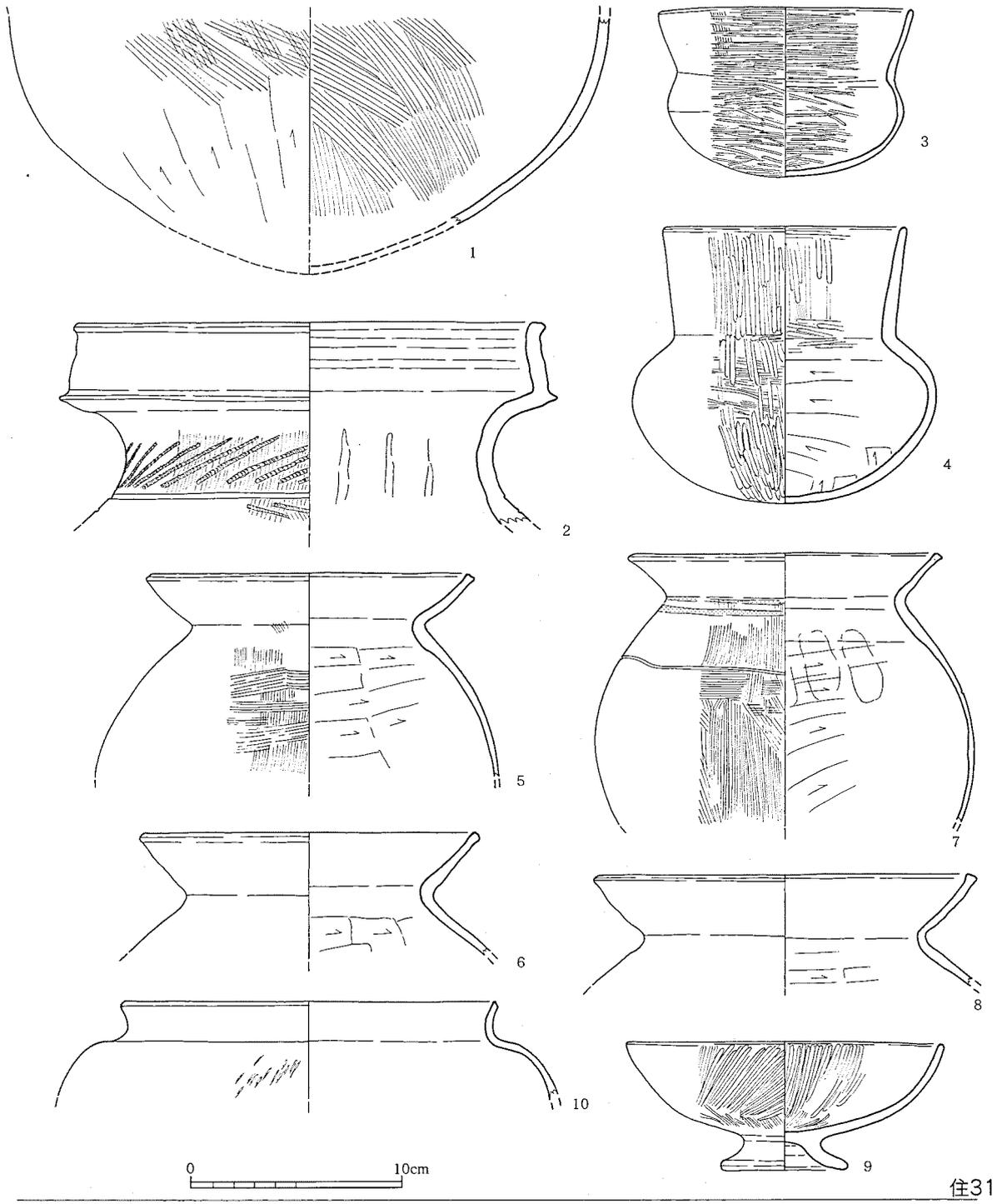
5～8は布留系甕である。6が肌色である以外は黄灰褐色を呈す。5は口縁部が内湾して開く。端部は上方にわずかにつまみ上げる。外面には全体的に煤が附着する。6は器壁の厚薄がなく均一な厚さで、口縁部の内湾がほとんどない。7は胴部最大径が中位にあり、口縁部は直線的に開き端部は外側につまみ出す。そのため上端は窪む。肩部には一条の雑な沈線を巡らせ、頸部には紐状の痕跡が白く残る。全体的に煤が附着する。8は端部を内側につまみ出す。

9は脚付鉢である。鉢部は内外面縦ヘラミガキ、脚部は全面横ナデ。胎土はあまり良くなく色調は暗黄灰色を呈す。

10は半島系の陶質短頸壺である。肩は強く丸く張り、頸部で強く外反し、口縁部は短く直立気味に立ち上がる。端部は強い横ナデによってシャープに尖り、外側に面をなす。器壁は薄い。口縁部から肩部にかけては回転ナデを使用し、それ以下は静止横ナデを行う。外面にはナデに先行する右上がりのタタキがかすかに観察される。内面はかすかに丸く窪んでいるようであり、無文当て具の可能性もある。胎土はわずかに微砂粒を含むが、水漉粘土を使用し精良である。色調は薄灰色を呈し、焼成は良好で堅緻である。

32号竪穴住居跡 (図版18、第81図)

I区中5で検出した竪穴住居跡である。31号竪穴住居跡の北東側に位置し、これと重複する。新



住31

住32

第82图 31·32号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/3)

旧関係では31・33・41号竪穴住居跡よりも新しい。大半が校舎基礎によって攪乱を受け破壊されるため、規模等は不明である。遺構面から床面までの深さは約20cmを測る。

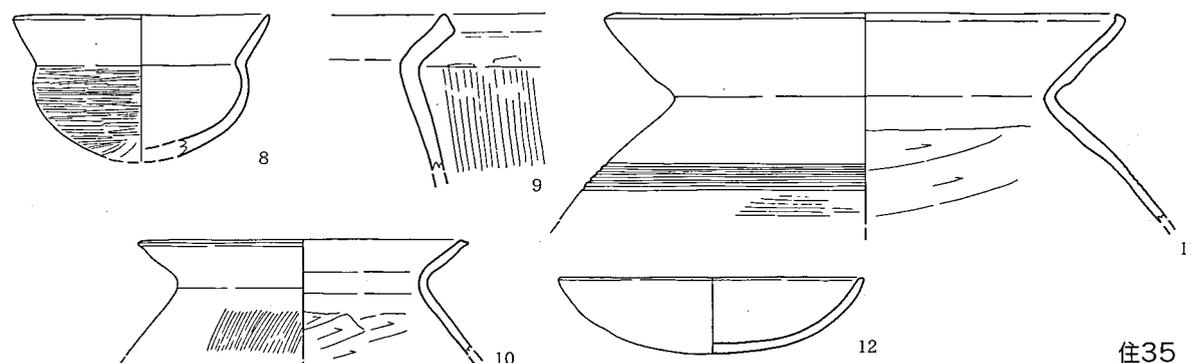
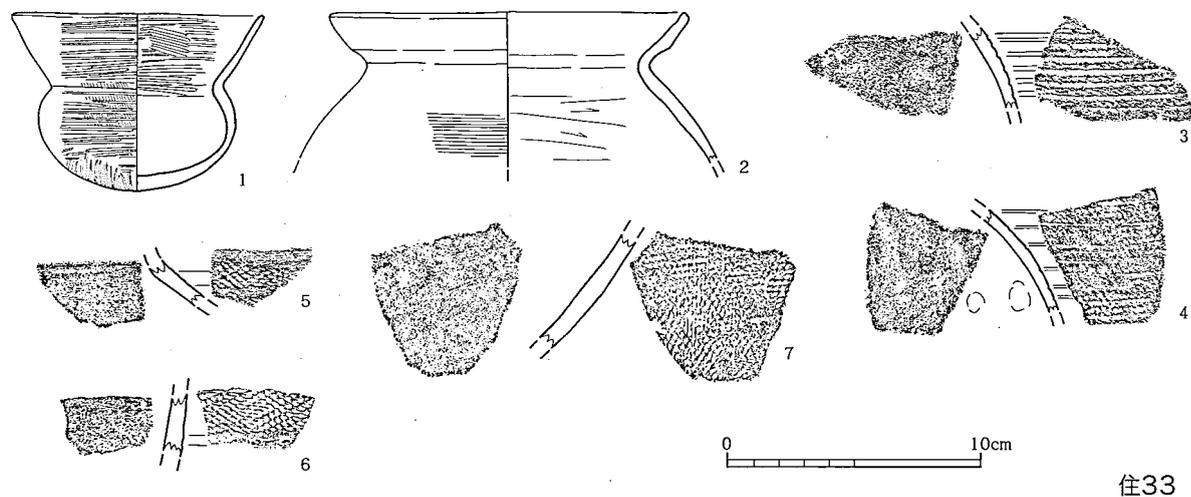
出土土器 (図版85・第82図)

11・12は甕である。11は口縁部が外反し、端部は丸くおさめる。屈曲部の内面には明瞭な稜を有す。全面横ナデだが口縁部内面には先行するハケ目が見られる。胎土に布留系甕には見られない粗砂を含み、色調は赤茶色を呈す。12は小型の布留系甕。口縁部はわずかに内湾する。胎土に砂粒を若干含み色調は肌灰色を呈す。

13～15は半島系の土器である。13の外面は方向の一定しない小さな斜格子タタキの後に弱いナデを行い、胴部下半であることが判る。内面はナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は薄茶褐色、軟質焼成である。同一個体がもう1点出土している。14の外面は小さな斜格子タタキの後に平行沈線を巡らす。内面は剥離する。胎土に砂粒を若干含み色調は黒色、軟質焼成である。15の外面は小さな斜格子タタキの後に凹線を巡らす。内面はナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は淡黄灰色、硬く締まった軟質焼成である。

33号竪穴住居跡 (図版18、第81図)

I区中5で検出した竪穴住居跡である。32号竪穴住居跡の西側に位置する。26・31・32・41号竪穴住居跡と重複しており、新旧関係では41号竪穴住居跡より新しく、それ以外のものよりも古い。大半を重複および攪乱によって失っており、確認できた壁は南壁の一部に過ぎない。従って平面形等は全く不明である。遺構面から床面までの深さは約20cmを測る。



第83図 33・35号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

出土土器 (図版53・85、第83図)

1は小型精製丸底壺である。胴部はやや扁平となり、最大径は中位よりやや上に位置する。口縁部はわずかに内湾して長く伸び、端部は丸くおさめる。胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目後に横ヘラミガキ、底部は一方向にヘラミガキ。口縁部は内外面共ハケ目後に横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は橙褐色を呈す。

2は布留系甕である。口縁部の下半は強い横ナデのために器壁が薄くなる。端部は丸くおさめる。胎土に砂粒を若干含み色調は暗黄灰色を呈す。

3～7は半島系の土器である。3は壺の肩部片。斜格子タタキ後にやや広めの平行沈線を狭い間隔で巡らせる。胎土に砂粒を若干含み色調は淡黄灰色、軟質に焼成される。風化が著しい。部分的に赤変しており、二次加熱を受けた可能性もある。4も壺の肩部片。外面は小さな斜格子タタキの後に平行沈線を狭い間隔で巡らす。内面はナデで指圧痕と思われる窪みが残る。胎土に砂粒を若干含み色調は淡黄灰色、軟質に焼成される。5は壺の肩部片。外面は小さな斜格子タタキの後凹線、内面ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は淡黄灰色、軟質の焼成である。6の外面は小さな斜格子タタキの後凹線を巡らす。内面はナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は淡黄灰色、軟質焼成である。7は外面が方向が一定しない小さな斜格子タタキ、内面がナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は淡黄灰色、軟質焼成である。

34号竪穴住居跡

調査中に竪穴住居跡ではないと判断したため、欠番とした。

35号竪穴住居跡 (図版19、第84図)

I区西1・2・5・6で検出した竪穴住居跡である。33号竪穴住居跡から約9m北西に位置する。30・36・38号竪穴住居跡と重複しており、36・38号竪穴住居跡より新しく、30号竪穴住居跡よりも古い。校舎基礎によって部分的に攪乱を受けている。北壁は長さ2.6m、東壁の長さは推定で3.4m前後になると思われ、南北に長い長方形プランとなる。規模の面では中型の部類に含まれる。大半が東西に長い当遺跡の竪穴住居跡群中であって、主軸を南北に採るのは異例である。床面は南側がやや浅く、遺構面からの深さは南側で10cm、北側で25cmを測る。炉跡やカマド、ピット等は検出していない。

出土土器 (図版53、第83図)

8は精製の小型丸底壺である。胴部内面と口縁部は横ナデ、胴部外面は横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は橙灰色を呈す。

9～11は甕である。9は在来系の甕。口縁部は短く外反し、端部は面を作る。口縁部と内面はナデ、外面は粗い縦ハケ目。胎土に粗砂を多く含み、布留系とは異なる。色調は暗茶灰色を呈す。10は小型の布留系甕。頸部の屈曲は緩くて内面に稜を持たず、口縁部はわずかに内傾する。端部は外側につまみ出し、上端が面をなす。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。11は口縁内端のつまみ出しが顕著な布留系甕。肩部には櫛描直線文を巡らす。胎土に砂粒を若干含み黄灰褐色を呈す。

12は精製の鉢である。底部にヘラナデを行い、その後全面に丁寧なナデを行う。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。

36号竪穴住居跡 (第84図)

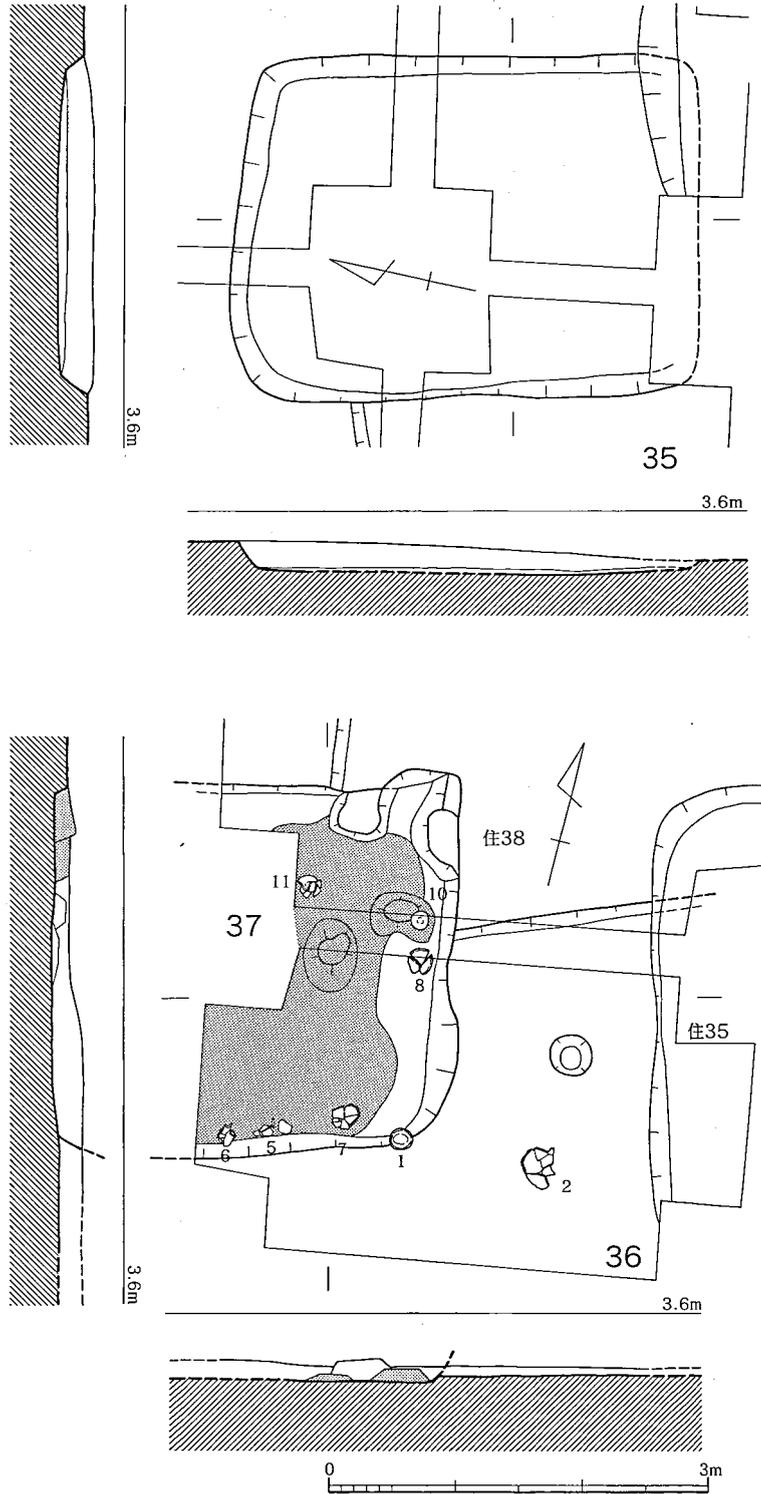
I区西6で検出した竪穴住居跡である。35号竪穴住居跡の西側に位置する。35・37・53号竪穴住居跡と重複しており、新旧関係では53号竪穴住居跡より新しく、35・37号竪穴住居跡よりも古い。この重複と、南側および西側が調査区外へと続いているため、検出できた壁は北壁の一部にすぎない。したがって規模等は全く不明である。床面はほぼ水平で、遺構面からの深さは10cmと浅い。また床面上で、径30cm、深さ10cmのピットを一つ検出したが、大きさからいっても支柱穴になるとは考えがたい。

図示した出土土器のうち、2は床面直上から出土、それ以外は覆土からの出土である。

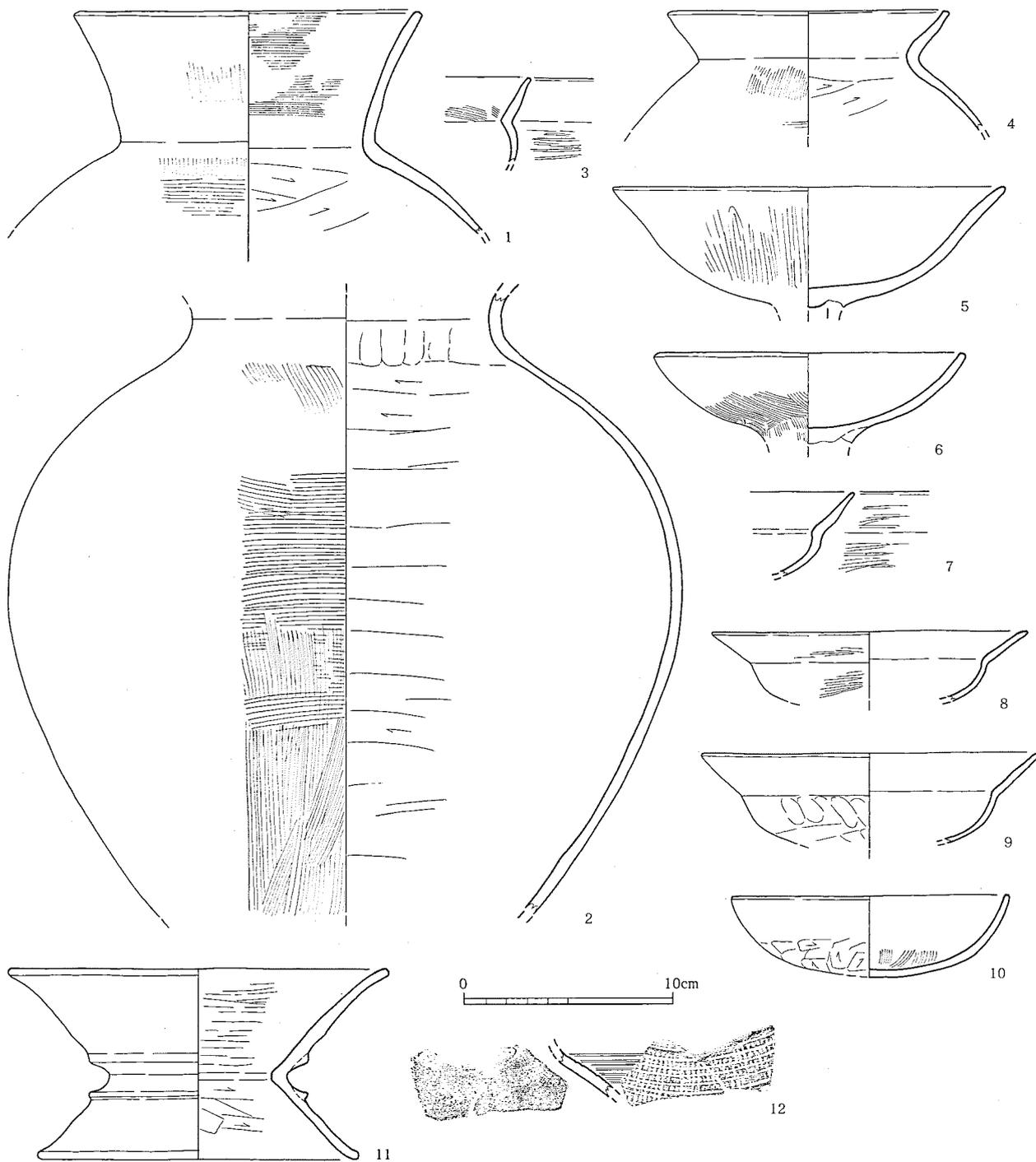
出土土器 (図版53・85、第83図)

1は直口壺である。口縁部は外反しながら開き端部は面をなす。内面には横ナデに先行する横ハケ目が観察され、外面には粗いハケ目が行われる。胴部内面は横ヘラケズリ、外面はハケ目、色調は黄灰褐色を呈す。2は山陰系二重口縁壺で、肩が張った倒卵形の胴部となる。内面はヘラケズリ、外面は粗いハケ目を行う。胎土に砂粒を若干含み色調は淡肌灰色を呈す。3は鉢に近い形状の小型丸底壺である。口縁部と体部内面は横ナデを行い口縁部内面には横ハケ目が残る。体部内面は横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は橙肌色を呈す。

4は布留系甕である。口縁内端のつまみ出しがわずかに認められ、上面は水平に近い面をなす。色調は黄灰褐色。



第84図 35～37号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第85図 36号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

5・6は高坏である。5は接合部は粘土充填式。外面にはやや幅広の縦ヘラミガキが観察できるが内面は風化が著しく調整不明。胎土は比較的良好で色調は淡黄灰色を呈す。6は屈曲部を持たない小型の高坏。接合部はやはり粘土充填式。内面及び外面の口縁部は横ナデ、外面の下半はナデ後にハケ目を行う。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。

7~10は鉢である。7~9は外反口縁の精製鉢。体部は浅く屈曲部内面には明瞭な稜を有し、口縁部は直線的に広がる。7・8はどちらも風化が進むものの一部にヘラミガキが観察できる。9はナデのみでヘラミガキは行っていない。胎土はいずれも精良で、色調は7が肌茶色、8が黄褐色、9が黄

肌色。10は直口縁の鉢。口縁部は内外面横ナデ、内底部にはハケ目、外底部にはヘラナデを行う。胎土に砂粒を若干含みあまり精良ではなく、色調は肌灰色を呈す。

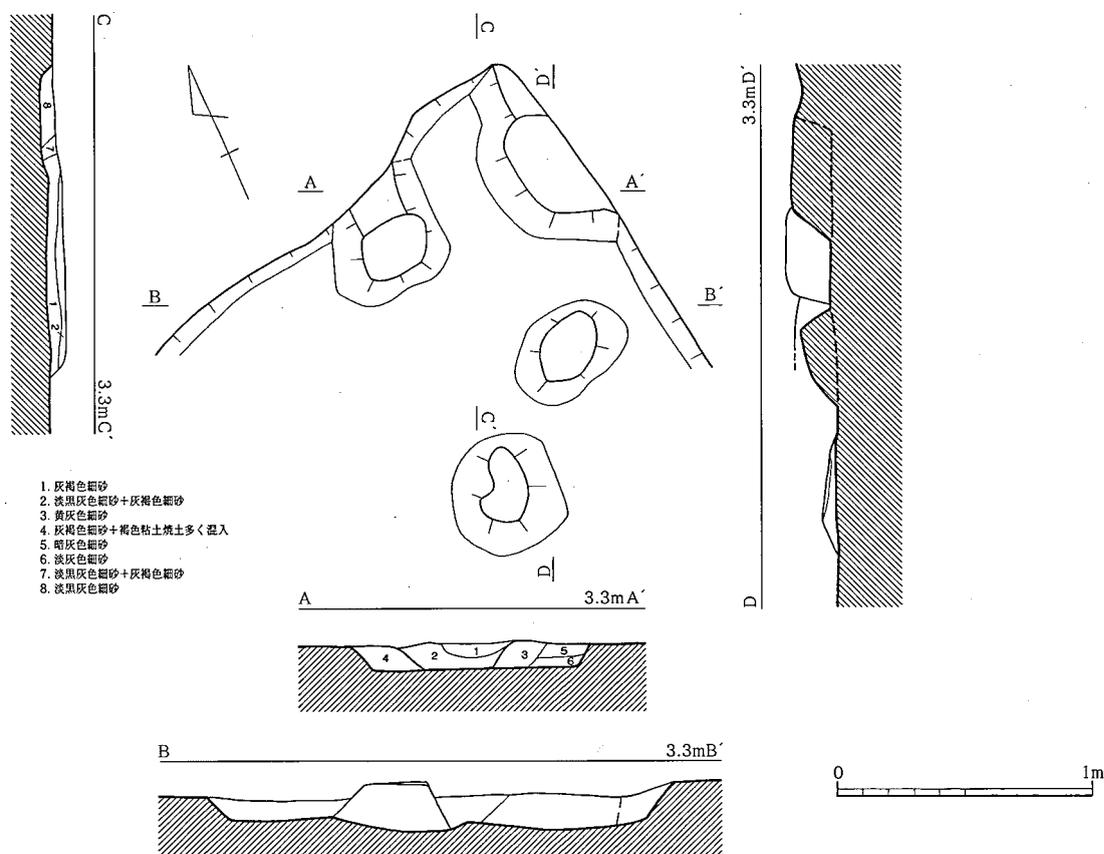
11は山陰系鼓形器台である。受部内面は幅広の横ヘラミガキ、裾部内面は横ヘラケズリ、外面と内面の端部付近は横ナデ。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰色を呈す。

12は半島系の壺肩部片である。外面は平行タタキの後平行沈線を狭い間隔で巡らせる。内面はナデ。胎土は砂粒をほとんど含まず精良な粘土を使用する。色調は黄灰色を呈し、瓦質焼成である。

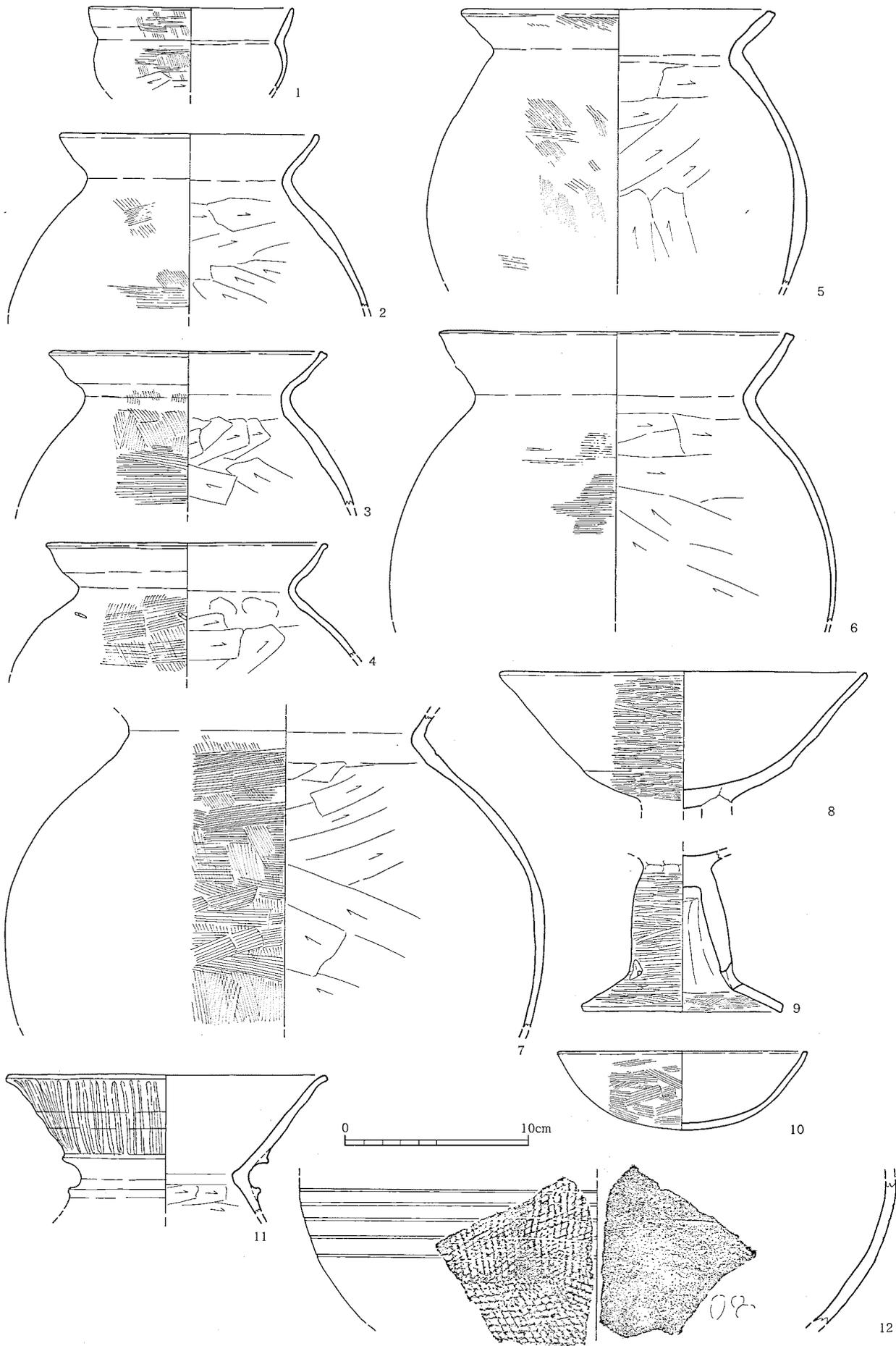
37号竪穴住居跡 (図版19、第84図)

I区西5・6で検出した竪穴住居跡である。36号竪穴住居跡の北西に位置する。この36号竪穴住居跡及び38・53号竪穴住居跡と重複しており、これらの中で最も新しい。東壁の長さは2.9mを測るが、西側は調査区外へと続くために東西長は不明。恐らく東西に長い平面形となるだろう。床面はほぼ水平につくられ、遺構面からの深さは15cmを測る。北東コーナーにはカマドが造り付けられる。また床面上の広い範囲にわたって焼土の広がりか認められた。主柱穴等は検出していない。

37号竪穴住居跡カマド (第86図) 北東コーナーに造り付けられるカマドで、主軸がコーナーの中軸線上に位置する。左袖長45cm、右袖長50cm、高さ10cmを測る。非常に残りが悪く旧来の形状をほとんど留めていない。支脚の位置、火床の位置等は不明である。煙道も形状を留めていないが、コーナーから外に煙を出す構造だった事は推察できる。住居廃棄時に大きく破壊されたものと推察される。床面上に見られる粘土塊はカマドに使用された粘土と思われる。カマドの構築には粘土を



第86図 37号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第87图 37号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

使用するが、破壊が著しいためもあって顕著な硬化は認められなかった。周囲の覆土中にもカマドに使用した粘土塊が多く含まれていた。

床面直上から土器がまとまって出土している。3・7・8・10・11が床面直上出土、2・5・6がカマド周辺の床面直上から出土である。

出土土器 (図版53・54・85、第85図)

1は鉢に近い形状の小型丸底壺。内面はナデ、外面は縦ハケ目後に疎らな横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。

2～7は甕である。2は頸部が締まり、壺に近い形状となる。口縁部は短く立ち気味に開く。端部は丸い。色調は肌茶色。外面に二次被熱による煤が付着する。3は口縁部の中央を強く横ナデするために器壁が薄くなる。色調は黄灰茶色。二次被熱のため赤橙色に変色した部分もある。4は肩部が丸味を帯びて張り、口縁端部外端を丸くつまみ出す。肩部には間隔の広い列点文を巡らす。色調は黄灰褐色。5は長胴気味で口縁部は直線的に開き端部は面をなすがシャープではない。全体的に器壁が厚い。胎土は他の布留系甕と比較して肌理が細かい。色調は黄灰褐色を呈す。6は肩があまり張らず、口縁部が立ち気味に開く。上端はわずかに窪む。色調は橙肌色。二次加熱を強く受け器表が一部剥離し、また煤が付着する。7は肩がやや張った器形となる甕の胴部。色調は黄灰色、外面には煤が付着する。

8・9は高坏である。8は屈曲部の外面に形骸化した段を有し、上半は直線的に伸びる。内面はナデ、外面は細かい横ヘラミガキを密に行う。脚部との接合は粘土充填式である。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄肌色を呈す。9は中膨らみの柱部となる。裾部は短く直線的に開き、端部は面をなす。柱部内面は縦ナデ、裾部内面は横ハケ目、外面はハケ目後に緻密な横ヘラミガキ。屈曲部に2ヶ所穿孔を行う。胎土は精良で色調は黄肌色を呈す。

10は鉢。内面はナデ、外面は雑なハケ目調整を行う。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄肌色。

11は山陰系の鼓形器台である。受部内面は横ナデ、外面は暗文状のヘラミガキを施す。胎土に砂粒を若干含み色調は淡黄灰色を呈す。

12は半島系土器の軟質壺胴部片である。外面は斜格子タタキの後に上半部のみ沈線を巡らす。内面は横ナデで下端付近に指圧痕が残る。胎土に砂粒を若干含み色調は明黄褐色を呈す。焼成は良好で堅緻な焼き上がりとなる。

38号竪穴住居跡 (図版19、第88図)

I区西5で検出した竪穴住居跡である。37号竪穴住居跡の北東に位置する。35～37号竪穴住居跡と重複しており、これらの中では最も古い。南側を重複によって失うので南北長は不明だが、北壁長は3.3mに復元できる。床面は中央付近がやや深くなっており、遺構面からの深さは30cm、東側では20cm、西側では20cmを測る。床面の中央からやや南寄りの位置で、径35cm、深さ5cmのピットを検出したが、深さを考慮すると支柱穴にはなり得ない。また、北東コーナー寄りで径50cm、深さ20cmの焼土ピットを検出したが、これは炉跡と考えて良いだろう。

出土遺物はあまり多くない。北隅の床面直上から10が出土している。

出土土器 (図版54・85、第89図)

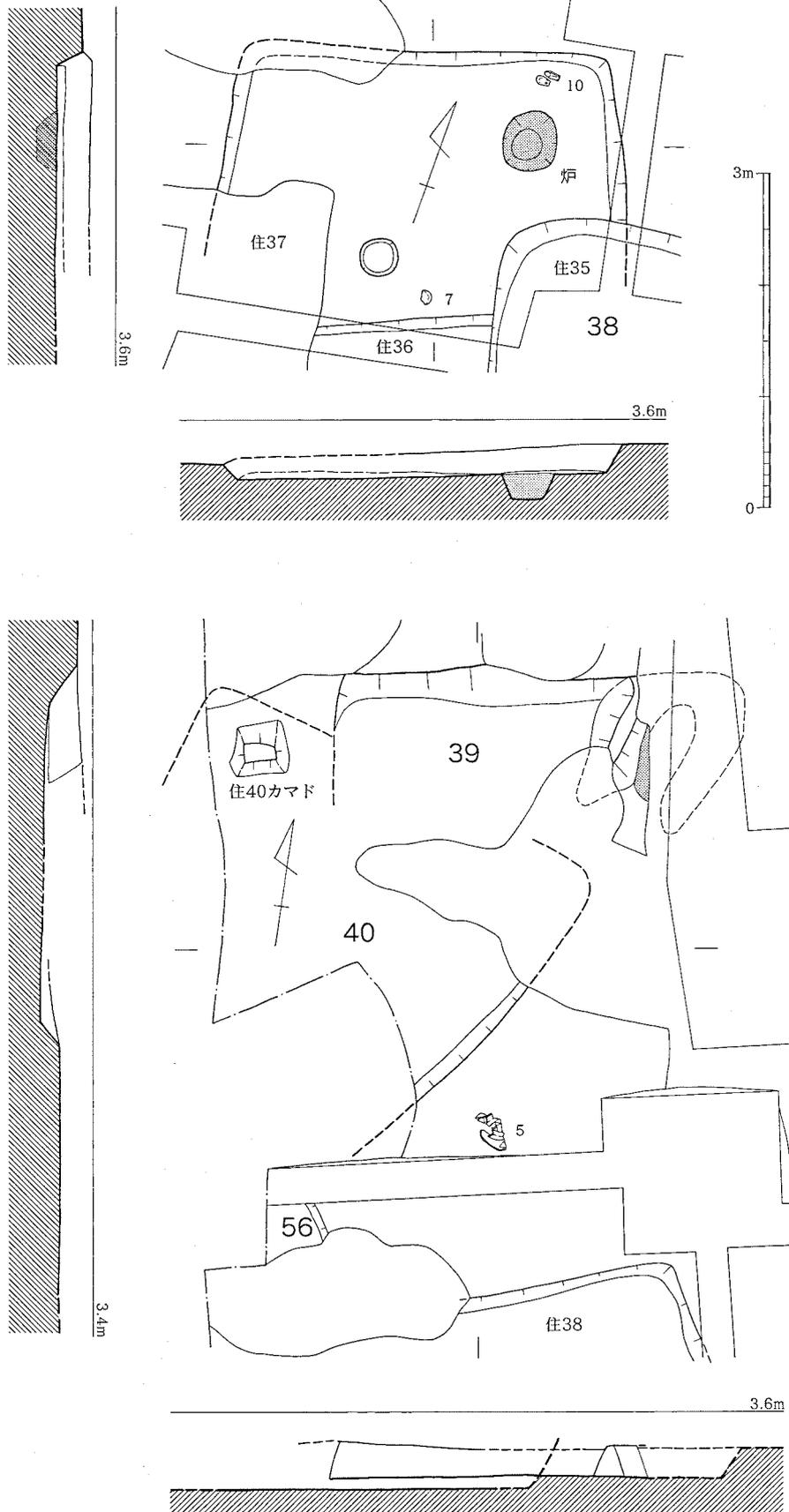
1・2は壺である。1は山陰系二重口縁壺。口縁部は直立に近い立ち上がりとなり、端部は外側に

肥厚する。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。2は不明瞭な平底となる。内面はナデ、外面は縦ハケ目、底部はナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。

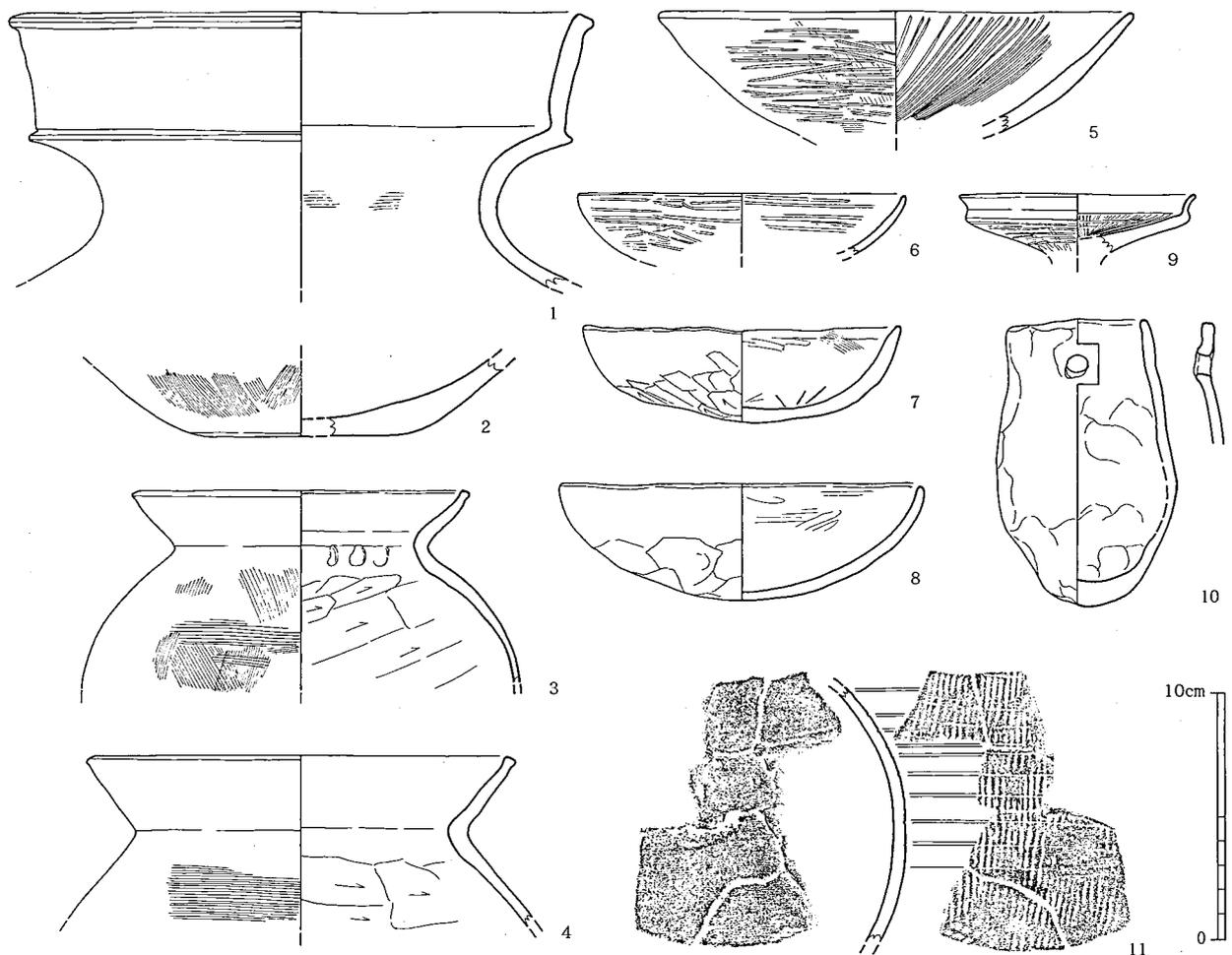
3・4は甕である。3は肩部が丸く張り、口縁部は短く開く布留系の甕。色調は黄灰褐色を呈し、外面は二次被熱のため部分的に赤変する。4は肩が張らず口縁部が立ち気味に伸びる布留系甕。端部は面をなす。色調は黄灰褐色を呈す。

5は高坏の坏部である。内面は横ナデの後に縦ヘラミガキによる暗文を加え、外面は縦ハケ目の後に横ヘラミガキを行う。胎土に細砂を少量含み畿内系高坏にしては粗さを感じる。色調は黄肌色を呈す。

6~8は直口縁の鉢である。6は内外面に細かい横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は赤茶色を呈す。7・8は6と比較すると粗雑な作りのもの。7の内面はナデだが先行する工具痕が残る。外面は



第88図 38~40・56号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第89図 38号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

口縁部付近が横ナデ、底部付近がヘラナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は淡黄灰色を呈す。8は底部が尖底気味となる。風化が著しいが、内面には太い横ヘラミガキがわずかに観察される。外底部はヘラナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は赤茶色を呈す。

9は小型精製器台の受部である。立ち上がりは強く外反し、屈曲部には明瞭な稜を有す。立ち上がりは内外面横ナデ、それ以外はヘラミガキを行う。胎土は極めて精良、色調は肌色を呈す。10は蛸壺である。底部に比べて口縁部の径が小さくなる。内外面指ナデ調整を行う。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。

11は半島系の瓦質壺胴部片である。外面の上方は平行タタキの後に平行沈線を巡らせ、下端は斜格子タタキを行う。内面は丁寧な横ナデを行い器表が平滑に仕上がる。胎土に砂粒をほとんど含まない精良な粘土を使用し、色調は灰色～黄灰色を呈す。良好な瓦質焼成である。他に同一個体と思われる細片が周辺の包含層から2点出土した。

39号竪穴住居跡 (図版20、第88図)

I区西7・8で検出した竪穴住居跡である。38号竪穴住居跡から約3m北側に位置する。付近は非常に攪乱が著しい所であり、当住居跡も北側の一部が残存しているのみに過ぎない。40号竪穴住居跡と重複する位置にあるが、攪乱が著しく先後関係を確認できなかった。遺構面から床面までの深

さは35cmを測る。また床面北東端で、カマドの一部と思われる粘土塊を検出している。ピット等は確認できなかった。

39号竪穴住居跡カマド (第90図) 大部分を攪乱によって失うが、遺存部分から判断するとカマドの中軸線がコーナーの対角線上に位置するタイプになるとと思われる。検出できたのはカマド左袖の一部と火床面の一部であり、左袖の幅は45cm、高さ35cm、カマド全体の長さは推定で180cm程度となるだろう。袖の構築には黄灰色細砂を使用しており、明確な粘土は使用していない。袖の内側は火を受け赤変する。

図示した出土土器のうち、9はカマド覆土から出土、5は床面直上から出土、それ以外は上層出土品で、40号竪穴住居跡と同時に掘削したため帰属を明らかにできなかった。

出土土器 (図版54、第91図)

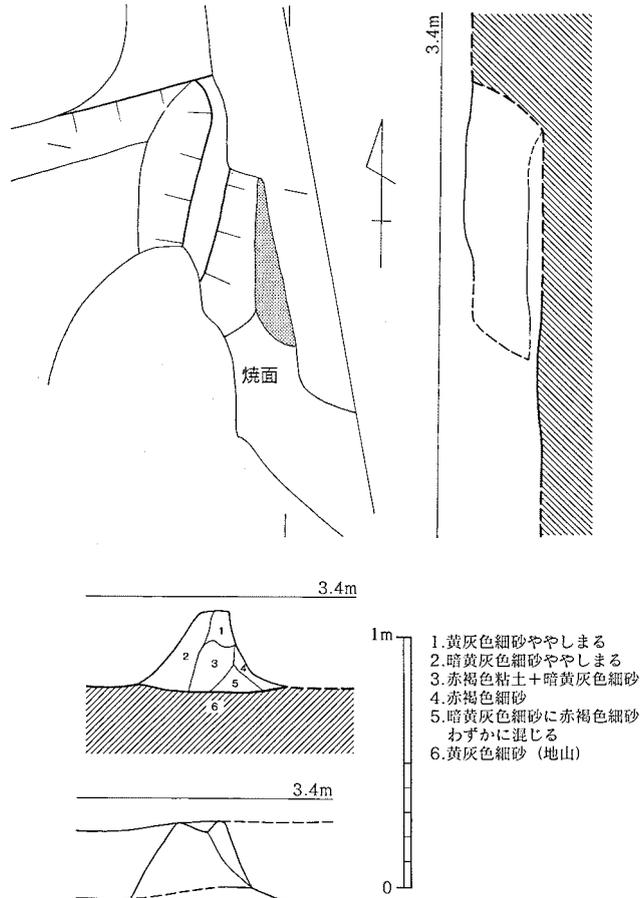
1~3は壺である。1は在来系の中型壺。胴部は丸味を帯び頸部はあまり締まらず、口縁部は外反して開く。端部は丸い。胴部内面は横ヘラケズリ、外面は粗いハケ目、口縁部内面は横ハケ目、外面は横ナデ。胎土に粗砂を若干含み色調は暗黄灰色を呈す。煮炊きに使用しており、外面は二次被熱のため一部赤変し、煤が付着する。2は中型の精製直口壺の口縁部。内面は縦ヘラミガキで口縁部には及んでいない。外面は横ヘラミガキだが不明瞭である。胎土に砂粒をほとんど含まず精良で色調は黄灰色を呈す。3は山陰系二重口縁壺の肩部であろう。内面ヘラケズリ、外面ハケ目。色調は黄灰褐色を呈す。

4~8は布留系甕である。4は黄肌色を呈し外面に煤が付着する。5は端部のつまみ出しが特徴的である。色調は淡黄灰色。6は全体的に器壁が薄く、口縁部の内湾が顕著で端部は拡張する。肩部には一条のヘラ描波状文を巡らす。色調は黄肌色を呈す。7は口縁部が直線的に開き、端部は内面を丸くつまみ出す。色調は黄白色を呈す。8は長胴気味の倒卵形で、胴部最大径が中位よりやや上に位置する。口縁部はやや内湾し、端部は内外につまみ出す。胴部の器壁は薄く作られる。色調は暗黄灰色を呈し、胴下半部に煤が付着する。

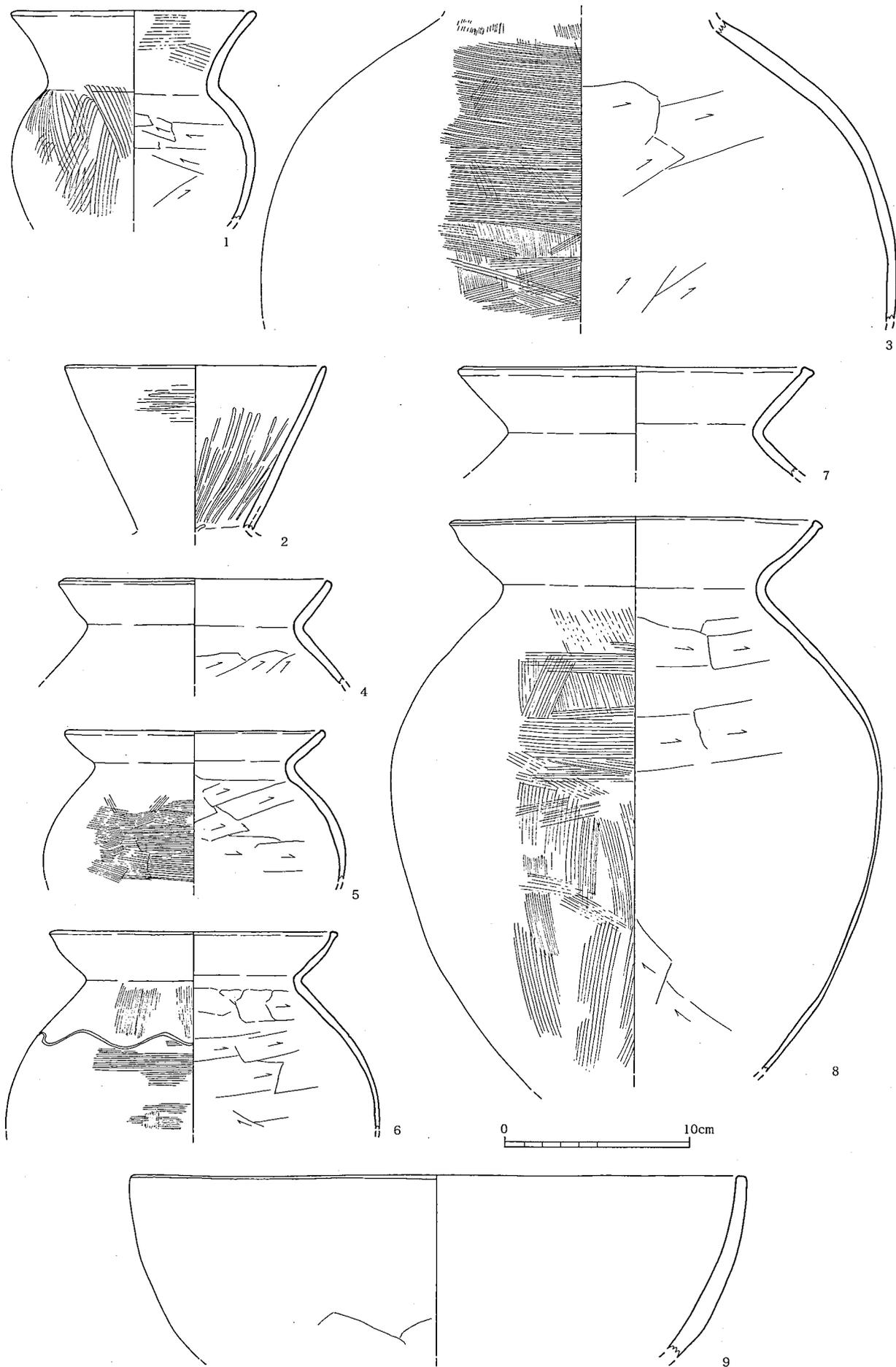
9は大型の直口鉢である。口縁端部は水平面をなす。風化が著しく外面のヘラナデがわずかに観察できる程度である。胎土に砂粒を若干含み、焼成が悪いため色調は灰色を呈す。

40号竪穴住居跡 (図版20、第88図)

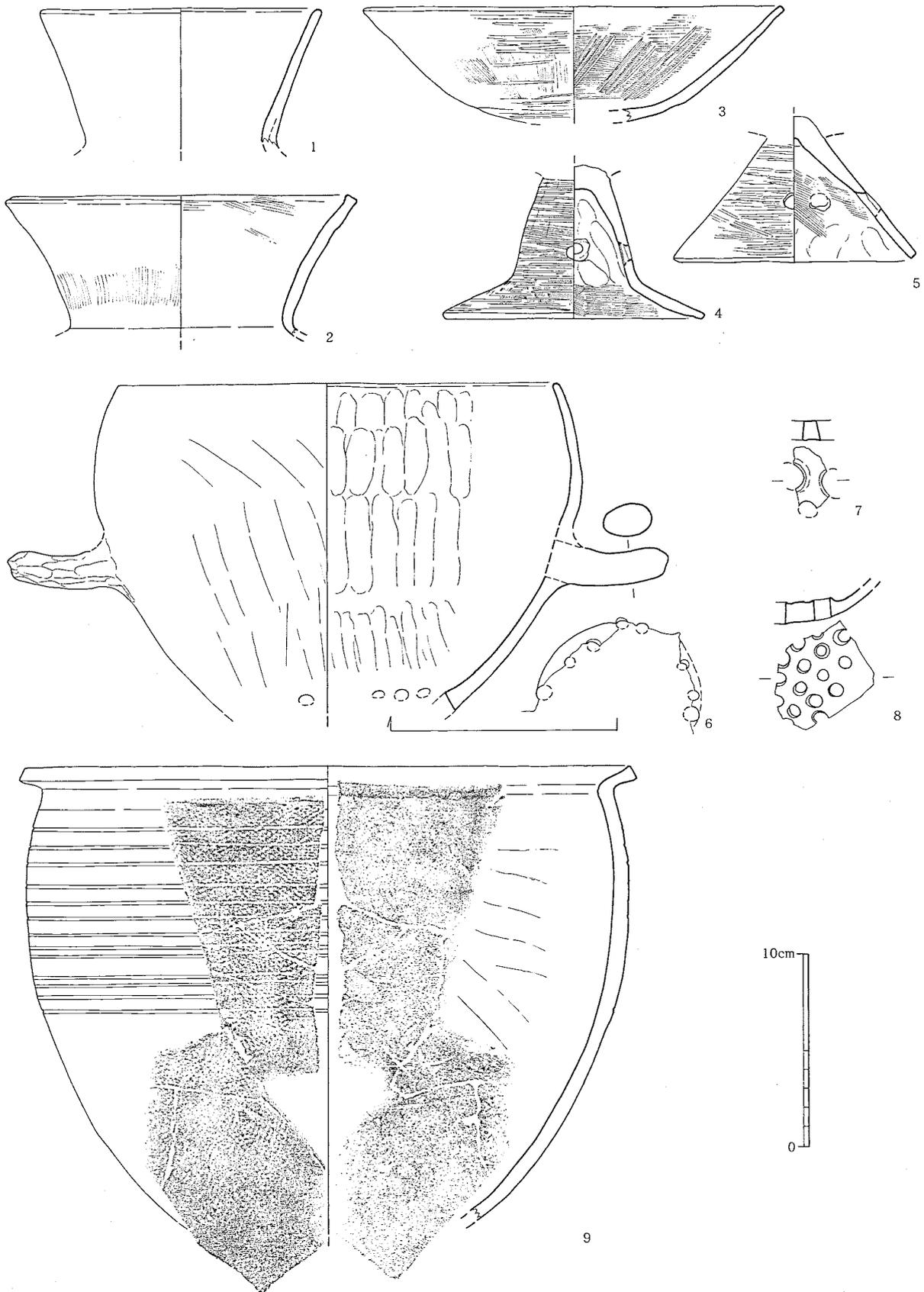
I区西8で検出した竪穴住居跡である。39号竪穴住居跡と重複する位置にあるが、前述したとおり先後関係は把握できなかった。当住居跡は先に調査された第12次調査での88号竪穴住居跡の東半



第90図 39号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第91图 39号竖穴住居迹出土土器实测图 (1/3)



第92图 40号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/3)

部にあたる。住居跡内の北西で検出した粘土塊は、この時調査されたカマドの一部である。第13次調査分は攪乱等も多く、残存する壁は南東側の一部に過ぎない。住居跡の平面形も不明確である。床面はほぼ水平につくられ、遺構面からの深さは10cmを測る。ピット等は検出していない。

図示した土器は、39号竪穴住居跡に帰属する可能性のあるものを含まず、純粹に当住居跡に伴うものである。

出土土器 (図版54・85、第92図)

1・2は直口壺である。1は直線的に伸び、端部は丸くおさめる。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。2は弱く外反しながら開き、内端部を丸くつまみ出す。全面横ナデを行うが、先行するハケ目が顕著に見られる。胎土は精良で色調は白黄灰色を呈す。

3・4は高坏である。3は屈曲部に痕跡的な段を有し、これより上は直線的に開く。内面は横ハケ目後に4本を一単位とする放射状暗文を施す。外面は縦ハケ目後に疎らな横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は肌色を呈す。4は中膨らみの柱部となる脚部。裾部は直線的に開き、端部は面をなす。柱部内面は縦ナデ、裾部内面は横ハケ目、外面はハケ目後横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は黄肌色を呈す。

5は精製小型器台の脚部である。内面はハケ目の後にナデを行い端部付近は指圧痕が残る。外面は横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。

6~9は半島系の土器である。6~8は軟質の甗。6は口径の割に器高が低く、鉢状を呈す。口縁部は内傾し、端部は丸くおさめる。把手は最大径の位置からやや下がった所に付けられる。図上では双方に把手を図示しているが、残存するのは一方だけである。把手は基部付近はやや下向きだが、湾曲して端部付近はほぼ水平となる。端部は丸くおさめる。断面は横に長い楕円形をなす。全面指ナデ整形。接合は予め穿孔された胴部へ把手の基部を差し込み、接合部の内外面をナデている。底部は欠失するものの、不明瞭な平底かレンズ状底となるのではないかと推察される。底部の蒸気孔は小円孔を多く配置する多孔式で、底部のみならず胴部下端にまで穿孔が及ぶ。内面は縦指ナデ、外面はヘラナデを行い、その後口縁部の横ナデを行う。胎土に石英・長石の細砂を若干含み、雲母もわずかに含む。色調は淡黄褐色、焼成は軟質で、当遺跡で一般的な布留系の甗とほとんど同質である。7は6と比べて孔の径がやや大きい。胎土に砂粒を若干含み色調は灰褐色、焼成は軟質である。8は小円孔の多孔式甗底部。底部と体部の境目が不明瞭なレンズ状底となる器形である。胎土に砂粒を若干含み色調は淡黄灰色、焼成は軟質である。9は鉢というよりも甗に近く、体部に深みのある器形となる。破片資料を図上で復元したものであり、或いは径が違っているかもしれない。底部はかなりすばまるようである。胴部上半は直立し、口縁部下はわずかに内湾する。口縁部は短く強く外反し、口縁端部は強いナデによりシャープな面を形成する。外面は小さな斜格子タタキの後に上半のみ平行沈線を巡らせる。底部に近い所はタタキが不鮮明となっているが、これはナデ消したものである。内面は丁寧なナデにより器表が平滑になるが、口縁部下のみ指圧痕と思われる微妙な窪みが残る。口縁部は横ナデ。胎土に石英・長石等の細砂粒を若干含み、色調は内面灰褐色、外面黒色~灰褐色を呈す。瓦質に近い軟質の焼成である。

41号竪穴住居跡 (図版20、第93図)

I区中5で検出した竪穴住居跡である。31~33号竪穴住居跡と重複し、これらの中では最も古い。

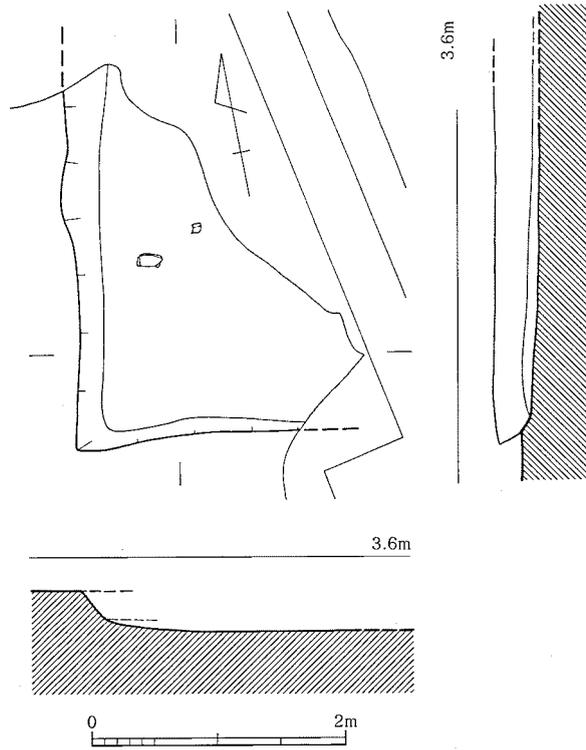
遺構検出面では全く確認出来ず、他の住居跡の床面精査時に新たに確認したものである。校舎の基礎によって大きく攪乱を受けるため残っているのは一部にすぎず、規模等は不明。床面はほぼ水平で、深さは30cmを測る。

土器は上層からはあまり出土せず、主に下層から出土した。図示した土器はすべて下層出土品である。その他砥石が2点出土している。

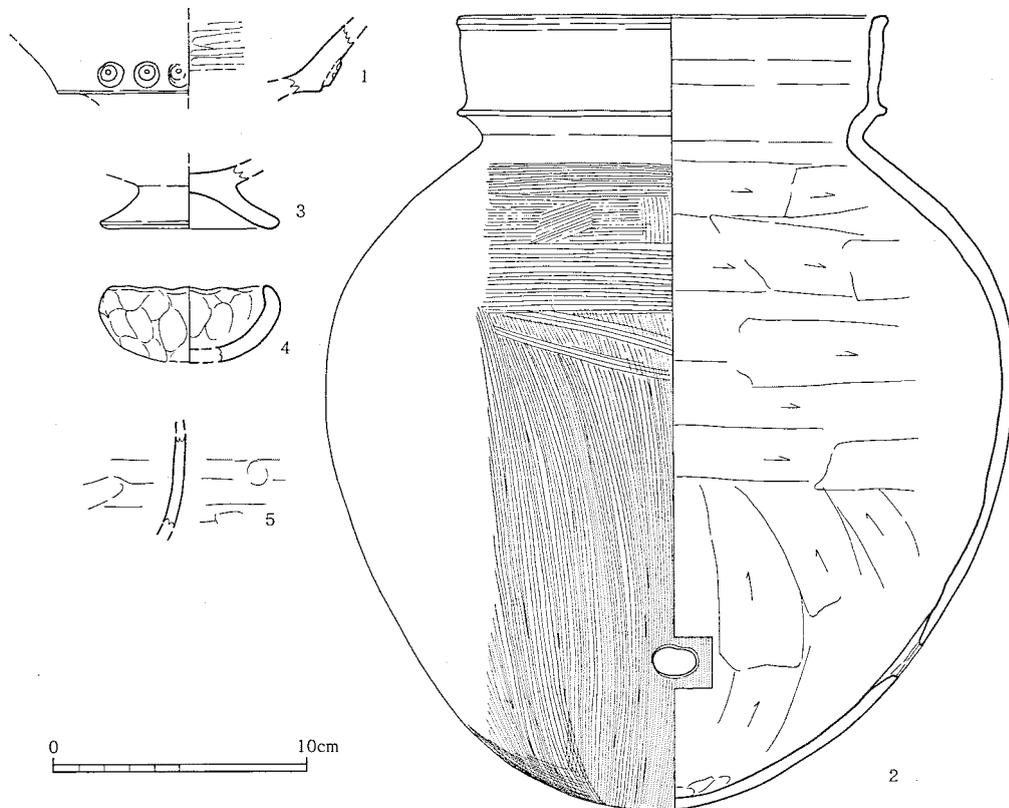
出土土器 (図版54・85、第94図)

1は円形浮文を貼付する畿内系二重口縁壺の口縁部片である。内面は横ヘラミガキ、外面はナデ。胎土は精良で色調は茶色を呈す。2は山陰系の二重口縁壺である。全体的な器形は甕に近い。胴部は倒卵形で最大径が中位よりやや上に位置する。頸部はあまり締まらず、一次口縁部は短く外反する。二次口縁部は直立し、口縁端部は外側に肥厚する。上端は水平面をなす。

屈曲部の外側は明瞭な突帯をなす。胴部内面はヘラケズリ、外面はハケ目、口縁部は横ナデ。胴下部には焼成後に外側からの穿孔を行う。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。



第93図 41号竪穴住居跡実測図 (1/60)



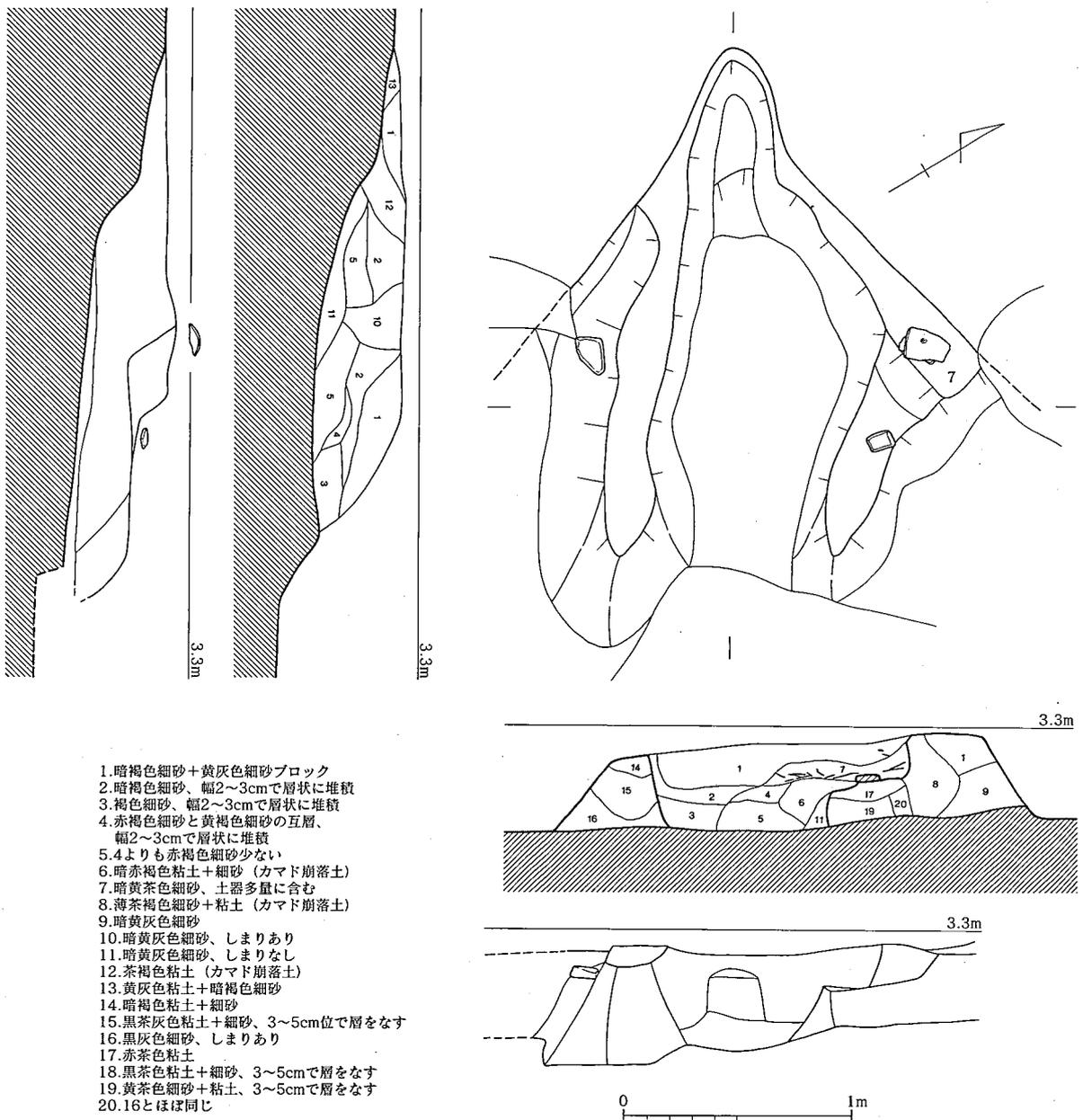
第94図 41号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

3は脚付鉢の脚部である。内外面とも横ナデ調整。胎土に砂粒を若干含み色調は肌色を呈す。4は手捏ねの鉢である。胎土に砂粒を若干含み色調は肌灰色を呈す。

5は半島系陶質壺である。傾きは不明だが、調整に乱れが見られるので底部近くの破片と思われる。内外面に横ナデを行い、外面には指圧痕が残る。胎土は砂粒をわずかに含むものの水漉した粘土を使用し精良である。色調は灰色を呈す。焼成は良好で堅緻である。

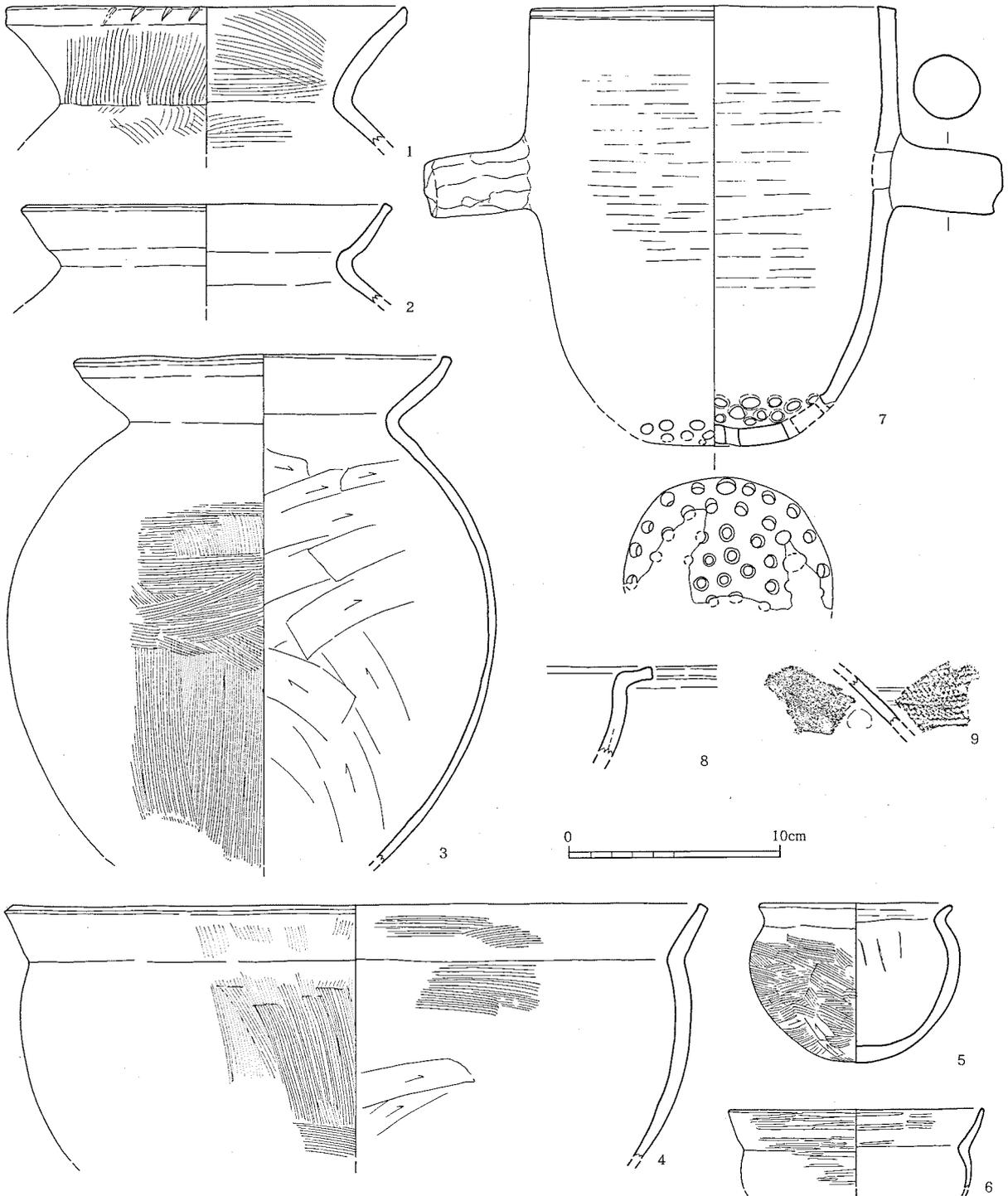
42号竪穴住居跡 (図版20、第95図)

I区中5で検出した。27号竪穴住居跡の北側に位置する。26・27・43号竪穴住居跡と重複しており、43号竪穴住居跡より新しく、26・27号竪穴住居跡より古い。遺構確認当初、27号竪穴住居跡に付随するカマドの可能性を考えたが、精査の結果別の遺構と判断するに至った。大半が他の遺構に切られて失っているため、わずかにカマド部分しか残っていない。住居跡の平面形等は不明。



第95図 42号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

42号竪穴住居跡カマド 住居跡の北西コーナーに斜めに造り付けられるカマドで、カマドの主軸方位がコーナーの中軸線上に位置する。他の例と比較して、非常に大きく堅牢に造られる。右袖はコーナーに近い位置に付けられほぼまっすぐに伸びるが、右袖はコーナーから100cm程東側に造られる。左袖は長さ205cm、幅68cm、高さ45cm、右袖は長さ130cm、幅60cm、高さ38cmを測る。右袖の先端は他の住居跡によって破壊されており、本来はもう少し長かったと推測される。カマド内部は焼土が多く堆積していたが、明確な火床は確認できなかった。支脚の位置も不明である。カマ



第96図 42号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

ド焚口と比較して、カマド奥が広く造られるが、このような例は他になく、掘り間違えの可能性も想定される。煙道は火床面から約20cm高く造られ、先端は住居跡コーナーから30cmほど外に伸びる。煙道の長さ80cm、幅40cm、深さ10cm。カマド本体には粘土が使用され、さらに右袖西側の壁際や煙道部分にも粘土が使用される。

図示した土器のうち、7はカマド袖上面出土、6はカマド袖内出土、それ以外はカマド内覆土や周辺から出土したものである。

出土土器 (図版55・85、第96図)

1は在来系直口壺である。口縁部はわずかに外反し、外端部は横ナデにより面を形成する。その面にヘラ状工具による刺突文を巡らせる。調整は内外面とも粗いハケ目を行う。胎土に粗砂を若干含み色調は黄褐色を呈す。

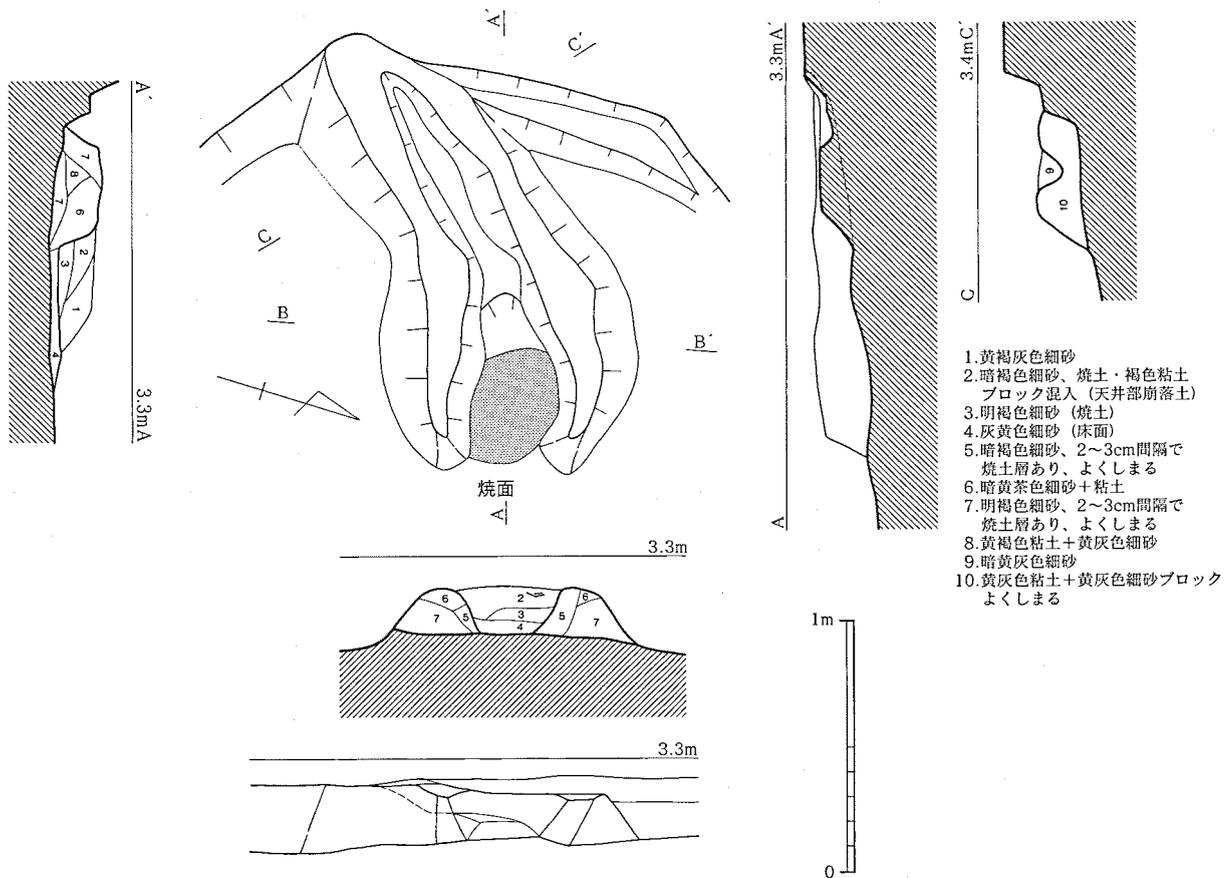
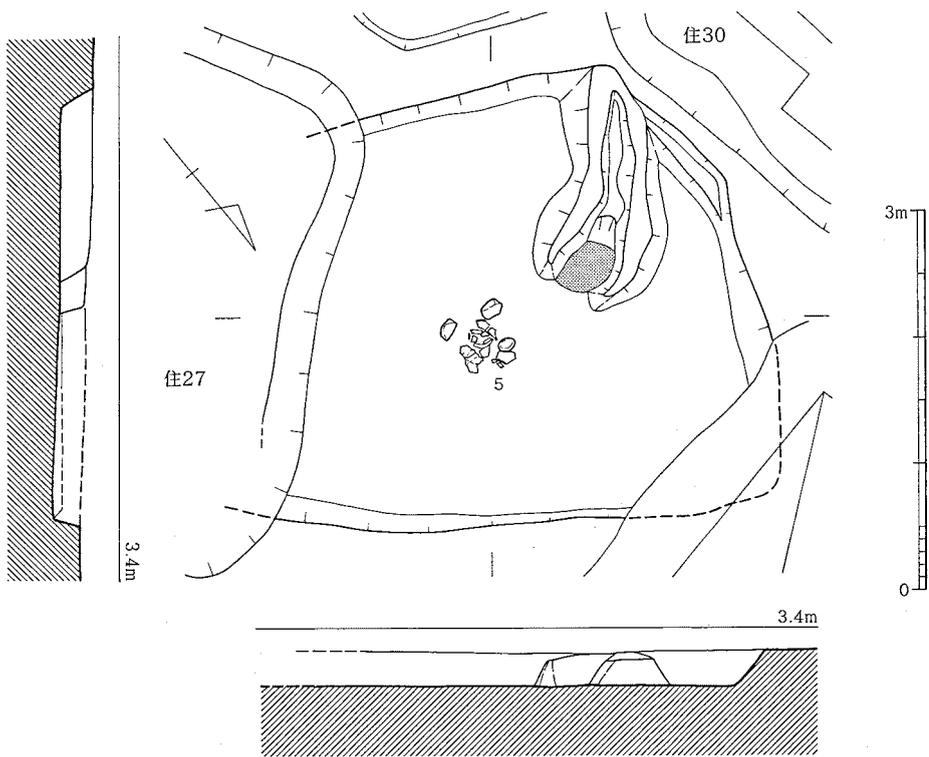
2・3は布留系甕である。2は口縁部が内湾し、端部はやや面をなす。色調は黄橙色を呈す。3は長胴気味の倒卵形となる。口縁部は直線的に伸び、端部付近のみ内湾する。色調は黄橙色。

4~6は鉢である。4は在来系の鉢。体部は丸味を帯び口縁部は短く直線的に開く。端部は面をなす。体部内面の下半はヘラケズリ、上半は横ハケ目、外面は縦ハケ目、口縁部はハケ目の後に横ナデを行う。胎土に砂粒を若干含み色調は茶褐色~黄褐色を呈す。5は半球形の体部で最大径が上方に位置する。口縁部は短く強く外半し、端部は丸くおさめる。内面はヘラナデ後ナデ、外面は短いハケ目、口縁部は横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は肌茶色を呈す。6は外反口縁の小型精製鉢である。体部内面はナデ、口縁部内面は横ハケ目後に疎らな横ヘラミガキ、外面は密な横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は橙褐色を呈す。

7~9は半島系の土器である。7は瓦質の把手付多孔式甕。体部は筒形で口縁部は直立し、端部に強い横ナデを加えてシャープな平坦面を形成する。底部は丸味を帯び体部との境目が不明瞭な平底をなす。底部には小円孔を外側から穿孔し、蒸気孔とする。その配置は規則的で5重の同心円状に配置されるが、円孔の一つ一つは径が不規則である。把手は断面円形の棒状把手で端部は水平よりもわずかに下方を向く。端部は面をなすが、双方の把手とも端部の下寄りに深さ5mm程の円形の窪みが見られる。把手は指ナデ整形で丁寧に仕上げられる。体部は内外面ともに横方向の条線が走るが、恐らく回転を利用したヘラナデに起因するものであろう。口縁部は内外面とも横ナデを行い、この条線をナデ消している。胎土に細砂を若干含むものの、生地には肌理の細かい精良な粘土を使用する。色調は暗黄灰色を呈す。今回の調査区で出土した半島系甕の大半が極めて土師器に近い特徴を有していたのとは対照的である。8は軟質の鉢口縁部である。口縁部は短く外折し、端部は強い横ナデを加えて面をなす。調整は内外面横ナデ。胎土に砂粒を若干含むが粘土自体の生地は肌理が細かく、他の軟質土器とは異なる。色調は器表が褐色、断面は明茶色を呈す。9は軟質の壺肩部片である。外面は斜格子タタキの後に浅い平行凹線を巡らす。内面はナデで指圧痕と思われる窪みも認められる。胎土に砂粒を若干含み色調は淡黄灰色を呈す。

43号竪穴住居跡 (図版21、第97図)

I区中5で検出した竪穴住居跡である。26・27・42号竪穴住居跡と重複しており、これらの中で最も古い。27号竪穴住居跡に大きく切られるため東西長は不明。西壁長は3.6m程度になるだろう。かなりいびつな方形プランである。南西側のコーナーにカマドを設置する。床面はほぼ水平をなし、



第97図 43号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

遺構面からの深さは25cmを測る。遺物はカマド焚口の前面から礫等と共にややまとまって出土しているが、床面からはかなり浮いた状態である。

43号竪穴住居跡カマド (図版21、第97図) 住居跡の南西側コーナーに造り付けられるカマドである。遺存状態は非常に良く、旧状が把握できる好例である。カマド本体はコーナーから約160cm内側に位置する。カマド本体の主軸はちょうど竪穴住居跡の対角線に一致する。すなわち住居跡のコーナーに対して斜め45°を向いている。煙道部を除くと、左袖長70cm、幅40cm、高さ20cm、右袖長70cm、幅30cm、高さ20cmを測る。火床は長軸45cm、短軸35cm。煙道はカマド本体の主軸から30°南側に振れ、住居跡コーナーへと伸びる。煙道の長さは140cm、内法は15cm、深さはカマド側で15cm、先端部で5cmを測る。煙道を含めた全体の長さは195cmを測る。

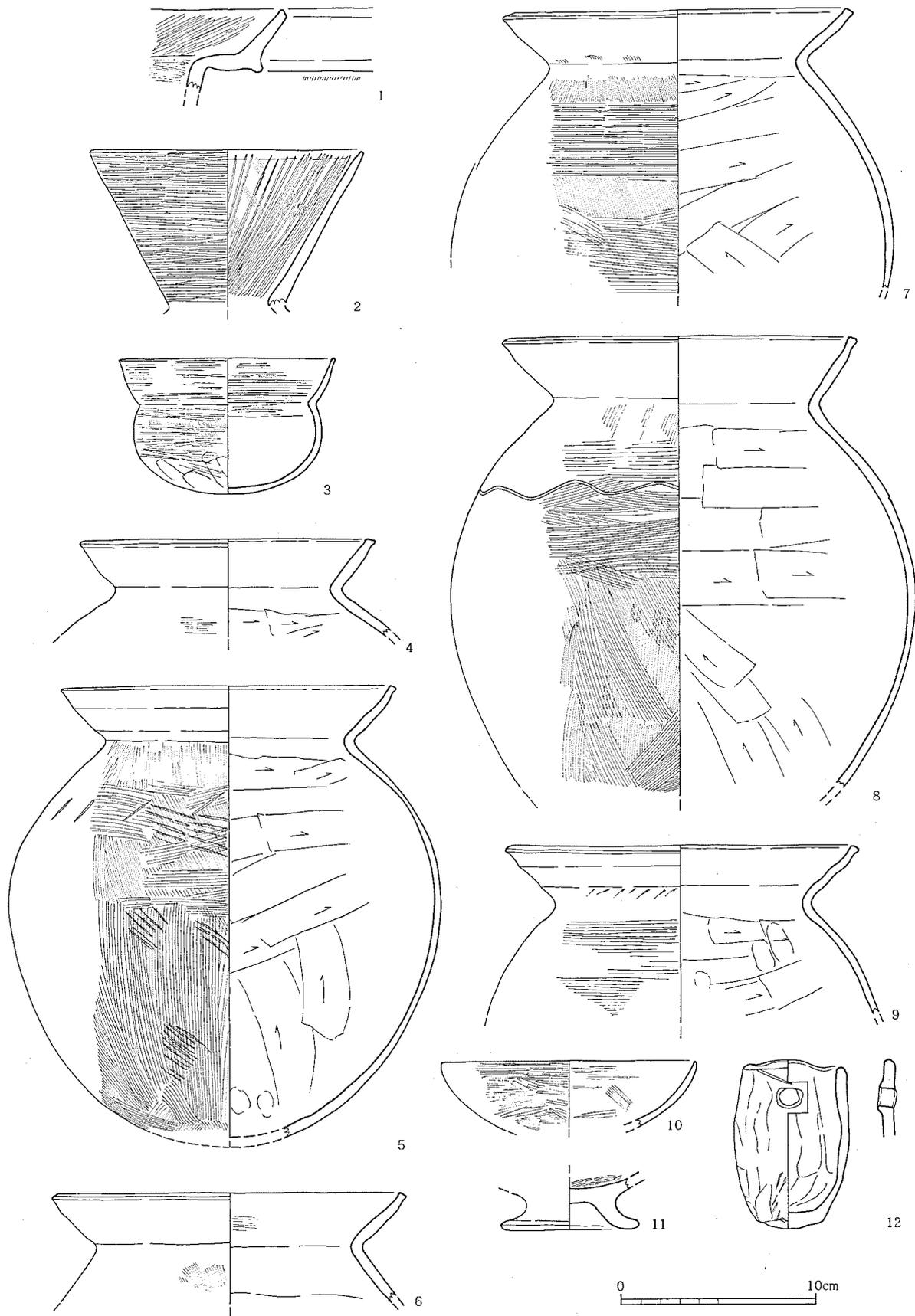
図示した土器のうち、5はカマド焚口全面の床面直上から出土、1・2・6・12が覆土からの出土である。2~4・7~11は42・43号竪穴住居跡の先後関係を把握する前に掘削した時に出土したもので、どちらに帰属するか明確ではない。

出土土器 (図版55・56、第98図)

1~3は壺である。1は二重口縁壺の口縁部である。一次口縁部は頸部から屈曲して水平に短く伸び、二次口縁部は直線的に開く。端部は外側に面を形成する。口縁部の内面はヘラミガキ、頸部内面は横ハケ目、外面は横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は肌色を呈す。2は畿内系直口壺の口縁部である。内面はハケ目の後に放射状の縦ヘラミガキによる暗文、外面は横ヘラミガキを密に行う。胎土は精良で色調は明茶色を呈す。3は精製の小型丸底壺。頸部は締まりが弱く口縁部は内湾しながら開く。体部内面はナデ、口縁部内面は横ハケ目後に疎らな横ヘラミガキ、外面は底部ヘラナデ、肩部から上にハケ目調整を行った後に横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。

4~9は布留系の甕である。4は口縁部がほとんど内湾せず直線的に開き、端部は水平に近い面をなす。色調は淡黄灰色を呈す。二次被熱のため部分的に変色し、更に煤が付着する。5は胴部が倒卵形で最大径が中位よりやや上に位置する。口縁部はわずかに内湾し、端部は面をなす。胴部内面はヘラケズリを行い、底部付近には指圧痕が残る。外面はハケ目を行うが、先行する左上がりの粗いタタキ目が残る。口縁部は横ナデ。全体的に器壁が薄い。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。6は口縁部の内湾が少なく直線的に開く。端部は面をなす。口縁部内面には横ナデに先行する横ハケ目がわずかに残る。色調は暗灰色。7は肩部にハケ目を行った後、横ナデを行っていない。口縁部は内側をわずかにつまみ出し、端部はわずかに窪んでいる。色調は黄灰褐色を呈す。8は肩の張りが弱く、長胴気味の倒卵形胴部となる。口縁部は内湾が弱く、端部直下を強く横ナデするために端部が肥厚する。肩部には一条の波状沈線を巡らせる。色調は黄灰褐色を呈す。9は肩の張りが弱く、口縁部が胴部に対して大きい。端部はわずかに外側につまみ出される。全体的に器表が薄い。胴部内面は横ヘラケズリで指圧痕が残る。外面は横ハケ目。屈曲部外面には工具痕が残る。色調は黄灰褐色を呈す。

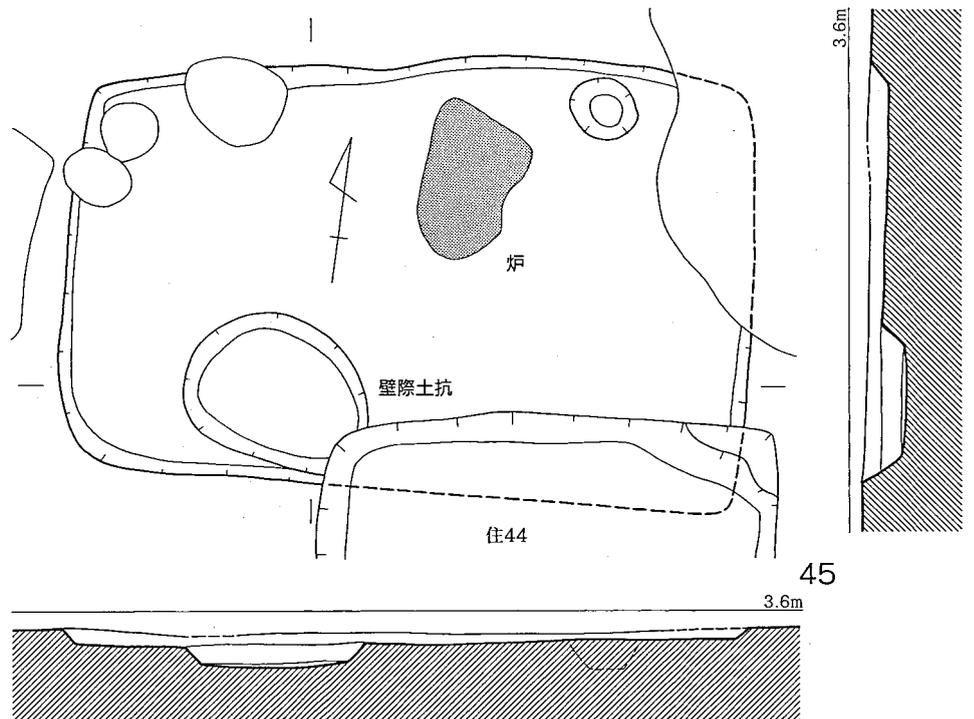
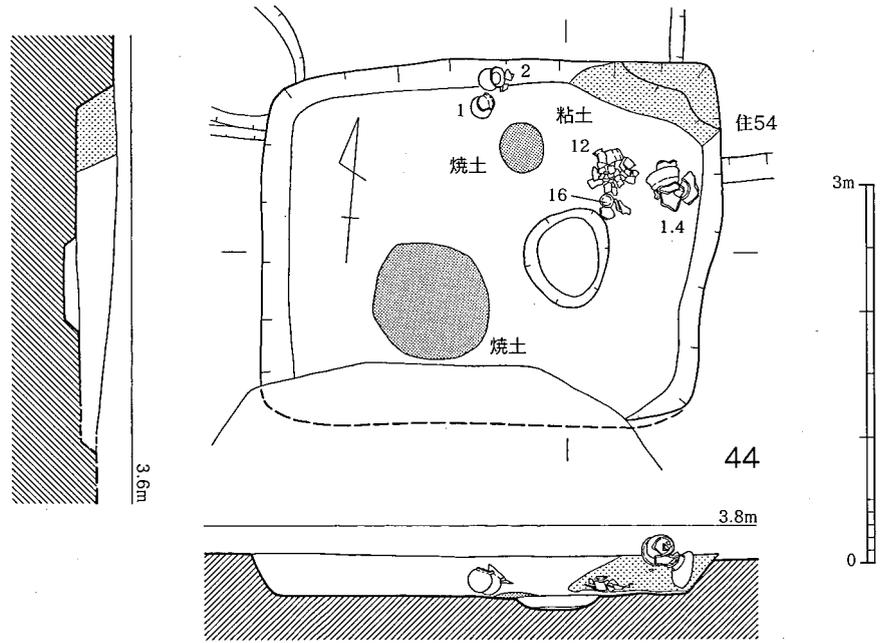
10・11は鉢である。10は内外面ともヘラミガキを行うが、これに先行するハケ目が残る。胎土は精良で色調は肌色を呈す。11は精製の脚付鉢。脚部は全面横ナデ、内底部はヘラミガキ。胎土は精良で色調は黄橙色を呈す。12は蛸壺。通常よりも器高が低く器壁も薄い。内外面指ナデ調整だが一部に擦痕が認められる。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰色を呈す。



第98图 43号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/3)

44号竪穴住居跡 (図版21、第99図)

I区北2で検出した竪穴住居跡である。43号竪穴住居跡から13m北東に位置する。45・54号竪穴住居跡と重複しており、これらよりも新しい。南側を校舎の基礎によって攪乱されるが、平面形はほぼ把握できる。東壁長2.8m、北壁長3.5mを測り、東西に長い長方形プランとなる。面積は9.9m²を測り、比較的小型の部類に含まれる。床面はほぼ水平で、深さは30cmを測る。床面上で、長軸80cm、短軸65cmのピットを検出した。また床面上の二ヶ所で焼土の広がりを確認した。このうち南側のものは径90cmを測り、規模、位置ともに炉跡として相応しいものである。他に北東コーナーで粘土塊を検

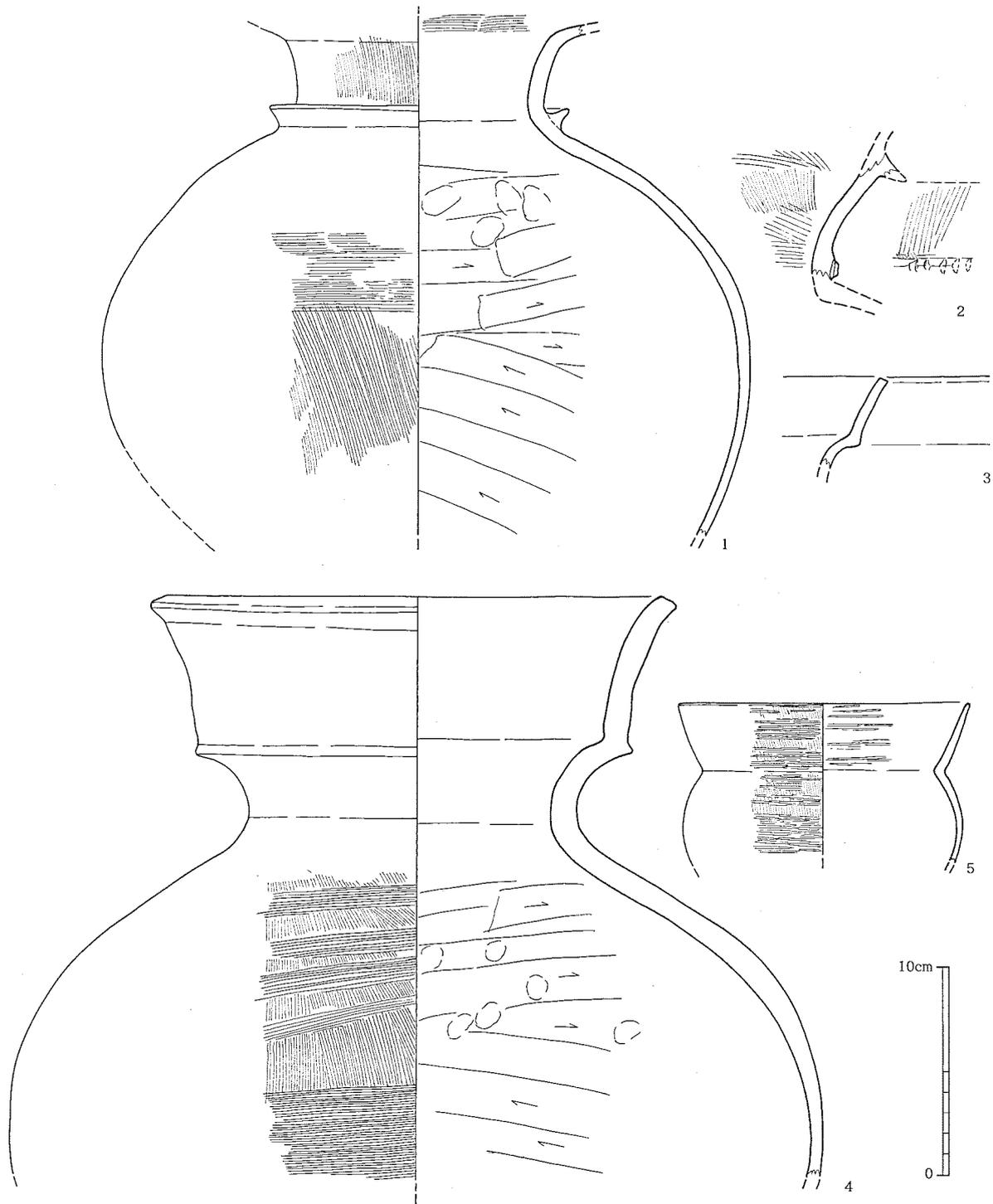


第99図 44・45号竪穴住居跡実測図 (1/60)

出した。当初これをカマドと考え精査を行ったが、カマド本体を全く検出できなかった。先の北側の焼土の位置も考慮すると、破壊されたカマドの残骸と考えて良いものと思われる。ただし炉とカマドとの新旧関係は不明である。遺物は北東コーナー付近からまとまって出土している。このうち東壁際のは破砕した状況であるが、北壁際のは床面直上からほぼ完形に近い形で出土している。その他、覆土からも比較的豊富に出土している。

出土土器 (図版56・57・85、第100~102図)

1~5は壺である。1は扁球形胴で最大径が中位にある。頸部はやや外反し、口縁部はさらに開く。外面の胴部と頸部の境には一条の高い三角突帯を貼付する。胴部内面はヘラケズリ、外面はハケ目、頸部内面は横ナデ、外面は縦ハケ目後に横ナデ、口縁部内面は横ハケ目。胎土に砂粒をやや多く含み、色調は黄灰褐色を呈す。2は在来系の二重口縁壺である。胴部と頸部の境には低い刻目突帯を巡らせ、一次口縁部と二次口縁部のにも三角突帯を巡らせる。二次口縁部は接合面で剥離する。内外



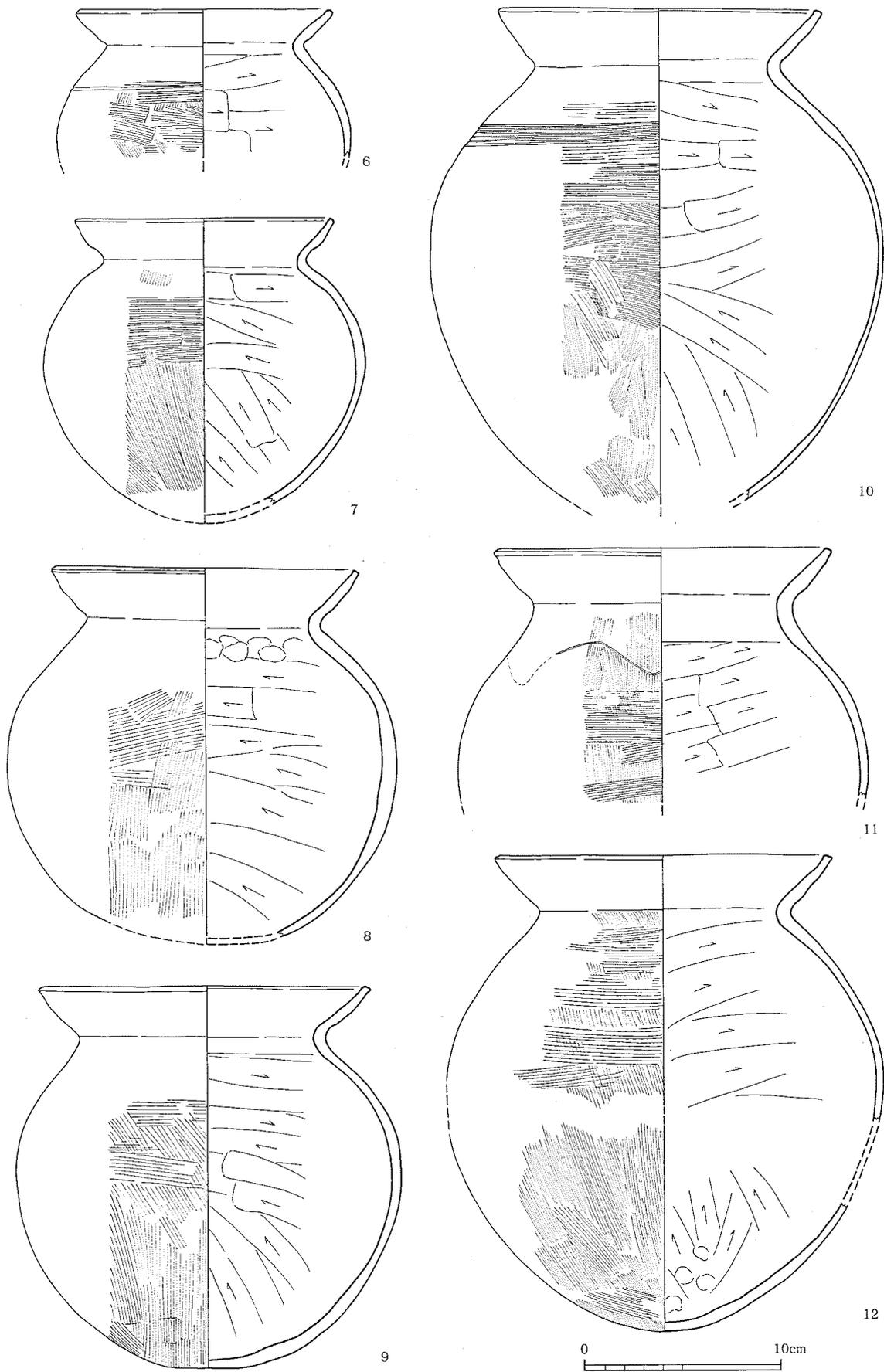
第100図 44号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/3)

面粗いハケ目調整。胎土に砂粒を若干含み色調は灰色～黒色、焼成が悪く生焼けである。3・4は山陰系二重口縁壺である。3は口縁部が直線的に開き、端部は横ナデにより面をなす。調整は内外面横ナデ。色調は黄灰褐色を呈す。4は肩部が張り最大径が上位に位置し、頸部は強く締まる。口縁部は外反するが、あまり開かない。端部は面をなす。胴部内面は横ヘラケズリで部分的に指圧痕が残る。外面は縦ハケ目の後に疎らな横ハケ目を行う。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。5は精製の小型丸底壺である。体部内面はナデ、口縁部内面は横ナデ後疎らな横ヘラミガキ、外面は縦ハケ目後横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。

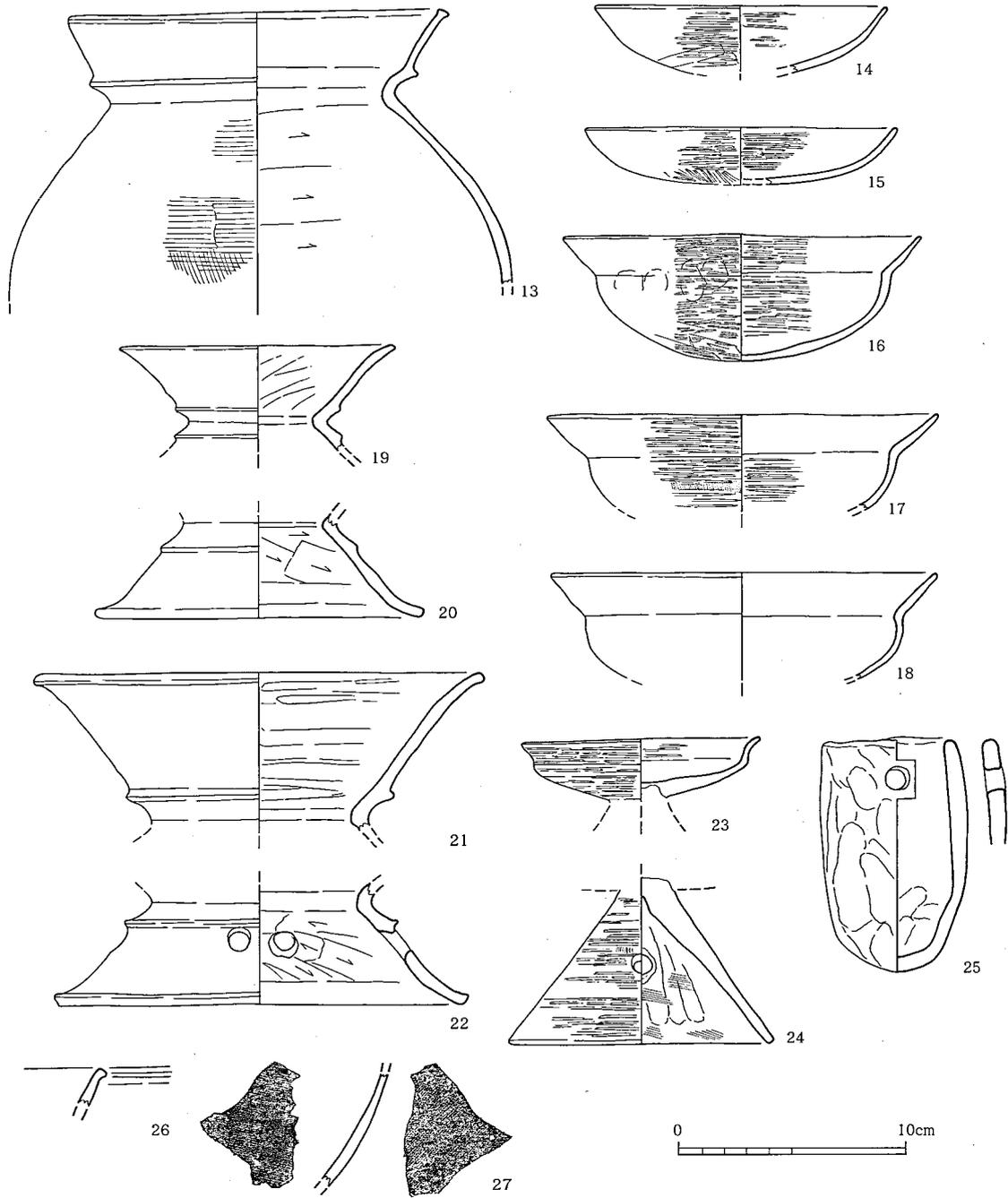
6～13は甕である。6・7は球形に近い胴部の小型布留系甕。6の口縁部は直線的に伸び、端部は丸くおさめる。肩部には一条の沈線を巡らす。内面のヘラケズリは屈曲部近くまで行われる。色調は肌灰色。7は胴部の最大径が中位よりやや上に位置し、口縁部は緩く内湾する。内面のヘラケズリは屈曲部に近い位置まで行われる。色調は黄灰色を呈し、強い二次被熱のため下半部が黒変する。8・9は球形に近い胴部で最大径が中位にある。8は屈曲部内面に指圧痕が残る。色調は黄灰褐色。二次被熱のため下半部が黒変する。9の色調は黄灰褐色。10は倒卵形胴部の布留系甕。頸部はやや締まり、口縁部は立ち気味に開き内端部をつまみ出す。肩部には櫛描直線文を巡らす。外面のハケ目は二種類の原体を使用し、細かい縦ハケ目、細かい横ハケ目、太いハケ目の順に調整が行われる。色調は黄灰褐色。11は屈曲部から口縁部にかけての器壁が厚く、口縁端部は強い横ナデの為に若干薄くなる。肩部には一条の雑なヘラ描波状文を巡らせる。色調は黄灰褐色を呈す。12は胴部の上半と下半が接合しないが確実に同一個体である。底部はやや尖底気味となる。頸部はやや締まり、口縁部は内湾して開く。端部はシャープな面をなす。胴部内面はヘラケズリで底部付近には指圧痕が残る。外面はハケ目だが二種類の異なるハケ目原体を使用する。粗い縦ハケ目、粗い横ハケ目、下半を中心に細かい縦ハケ目の順に調整を行っている。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。13は山陰系の二重口縁甕である。肩は直線的に傾斜し、一次口縁部は短く強く外反し、二次口縁部は外反気味に開き、端部は拡張され面をなす。屈曲部の外面は小さくシャープな三角突帯を巡らせる。色調は黄灰褐色を呈す。

14～18は精製の鉢である。14・15は体部の浅い直口縁の鉢。どちらも内外面に細かいヘラミガキを行い胎土は精良である。色調は14が橙色、15が黄灰色を呈す。16～18は外反口縁の鉢である。16は内外面に細かい横ヘラミガキを行い、屈曲部の外面には指圧痕が残る。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。17は口縁部内面にはヘラミガキを行わない。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。18は風化が著しく調整はほとんど不明。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。

19～22は山陰系の鼓形器台である。19・20はやや小型のもの。接合しないが同一個体か。19は内面に太い横ヘラミガキを行い、外面は横ナデを行う。色調は黄灰褐色を呈す。20は内面に横ヘラケズリを行い外面は横ナデを行う。色調は黄灰褐色。21・22は接合しないが同一個体であろう。21は内面に幅広の横ヘラミガキを行い、外面は横ナデ。22は内面ヘラケズリ、外面横ナデで、4ヶ所に穿孔を行う。胎土に砂粒を若干含み色調は黄肌色～黄灰色を呈す。23・24は精製小型器台である。23は受部の立ち上がり強く外反し、屈曲部には不明瞭な稜を有す。外面と立ち上がりの内面は横ヘラミガキ、内底面は風化が著しく調整不明。色調は黄灰色を呈し、全面に肌色の化粧土を塗布する。24は内面ハケ目後ナデ、外面ハケ目後横ヘラミガキを行う。裾部のほぼ中央に2ヶ所穿孔を行う。胎土は精良で色調は黄肌色を呈す。25は蛸壺である。底部は丸く、口縁部はほとんど直立する、



第101图 44号竖穴住居迹出土土器实测图② (1/3)



第102図 44号竖穴住居跡出土土器実測図③ (1/3)

内外面指ナデ調整で色調は黄灰色を呈す。

26・27は半島系の土器である。26は器壁が薄い軟質の土器。小型鉢の口縁部か壺の口縁部である。体部は若干開き、端部は小さく肥厚させる。上面は横ナデによりシャープな面をなす。調整は全面横ナデ。胎土に砂粒を若干含み精良ではない。色調は淡黄灰色。27は陶質壺の胴部片である。内外面丁寧な静止ナデを行う。胎土は砂粒をほとんど含まず、水漉した粘土を使用しており精良である。色調は灰色を呈す。焼成は良好で堅緻に仕上がる。同一個体と思われる小片が41号竖穴住居跡からも出土している。

45号竪穴住居跡 (図版22、第99図)

I区北2で検出した竪穴住居跡である。44号竪穴住居跡の北側に位置し、これと重複する。新旧関係では当住居跡の方が古い。一部攪乱等によって失われるが比較的残りが良く、平面形が分かる好例である。長軸5.4m、短軸3.3mを測り、短軸に対して長軸が特に長い。総面積は17.7m²を測り、中型の部類に含まれる。床面はほぼ水平で、遺構面からの深さは15cmを測る。床面の中央からやや北側寄りの位置で長軸130cm、短軸80cmの不整形の炉跡を検出した。また南壁の中央からやや西寄り、長軸150cm、短軸115cm、深さ20cmの壁際土坑を検出した。その他北東コーナーに近い所で、径45cm、深さ25cmのピットを検出した。

住居跡の遺存状況は良好であったものの、出土遺物はそれほど多くない。図示した土器はいずれも覆土中から出土したものである。

出土土器 (図版57、第103図)

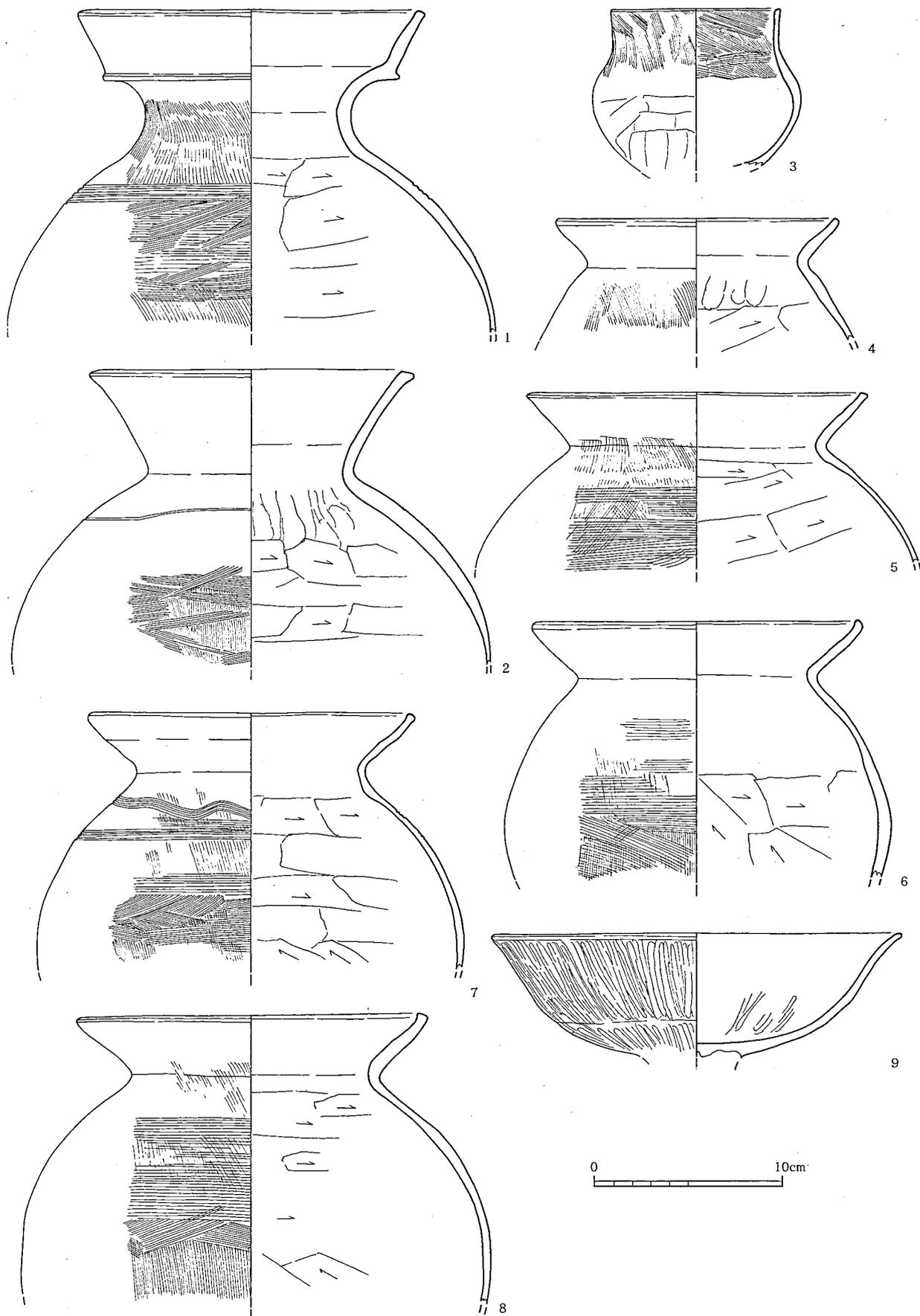
1~3は壺である。1は山陰系の二重口縁壺。肩は丸みを帯び頸部は強く締まる。口縁部は直線的に開き端部はやや面をなす。肩部には櫛描直線文を巡らす。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。外面に煤が付着しており煮炊きに使用された可能性がある。2は畿内系の直口壺。端部は外側に短く伸びており、上端は面をなす。肩部には一条の沈線を巡らす。胎土に砂粒を若干含み、色調は内面黄茶色、外面黄灰褐色を呈す。3は在来系の小型直口壺。頸部はあまり締まらず口縁部は直立する。口縁端部は丸い。体部内面はナデ、外面はヘラナデ。口縁部は内外面ハケ目。胎土に砂粒を含まないが生地の肌理は粗い。色調は黄茶色を呈す。

4~8は布留系の甕である。4は肩が直線的に傾斜し、口縁部も内湾せず直線的に開く。端部は丸味を帯びる。色調は黄灰褐色。外面に煤が付着する。5は口縁部が直線的に開き、端部は面をなす。内面のヘラケズリは屈曲部近くにまで及ぶ。色調は黄灰褐色。6は胴部最大径がやや下方に位置する。口縁部はわずかに内湾する。端部は丸味を帯びシャープさに欠ける。内面のヘラケズリは肩部の下までしか及ばず、ナデの範囲が広い。色調は黄灰褐色で外面には煤が多く付着する。7は肩部に櫛描波状文と櫛描直線文の両方を巡らせる希有な例である。口縁部は内湾しながら開き、口縁内端部を丸くつまみ出す。全体的に器壁が薄い。色調は黄灰褐色。外面の広い範囲に煤が付着する。8は倒卵形の胴部になると思われる。口縁部は直線的に開いて上方のみ内湾し、内端部をつまみ出す。色調は内面肌茶色、外面黄茶褐色。胴部下半に煤が付着する。

9は脚部との接合部に軸受孔を持つ高坏である。屈曲部の外面には浅い凹線状の段が見られる。口縁部は緩やかに外反し、端部を丸くおさめる。外面は幅広の縦ヘラミガキ、内面にも縦ヘラミガキがかすかに残る。胎土に砂粒を若干含み、あまり良くない。色調は黄肌色を呈す。

46号竪穴住居跡 (図版22、第104図)

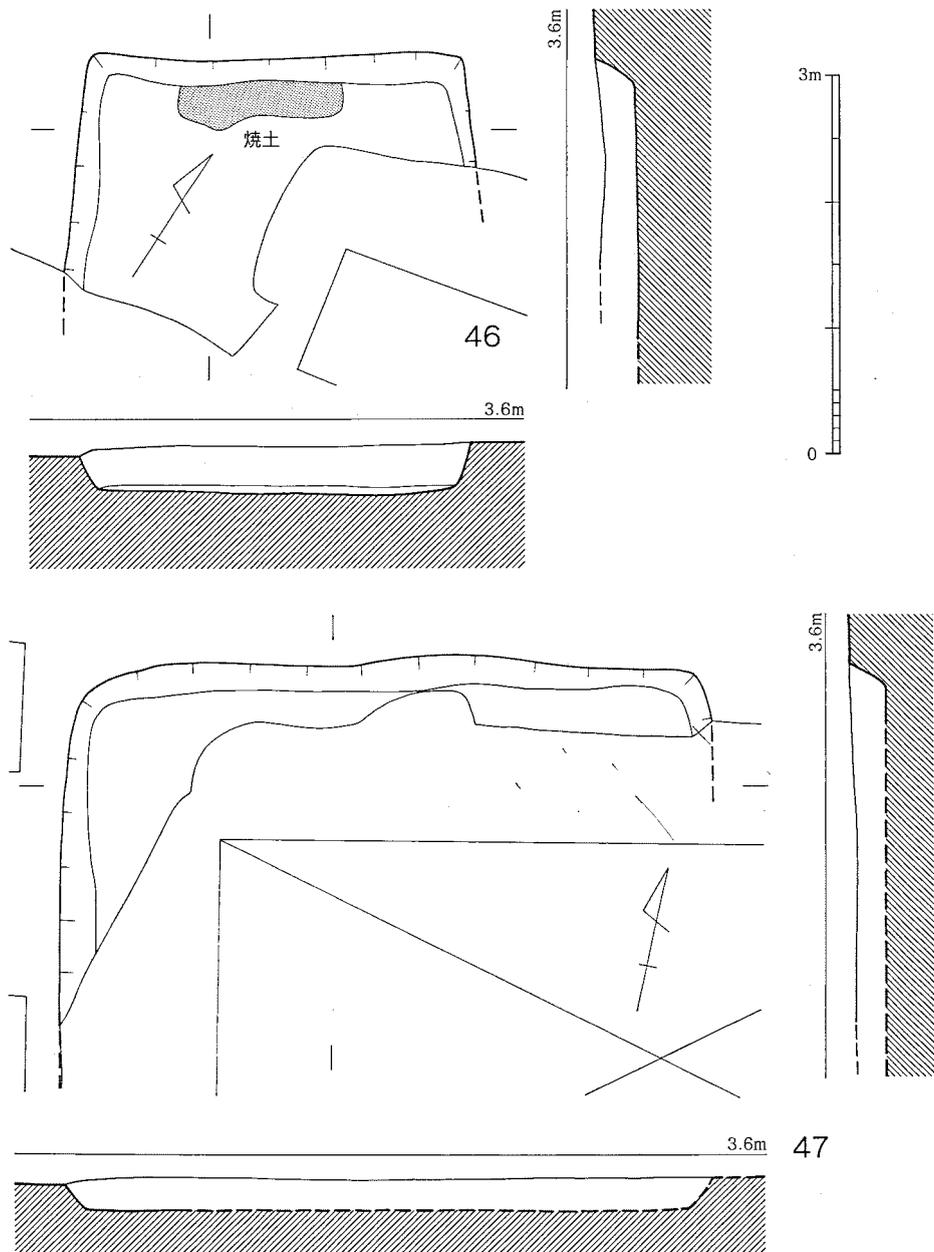
I区中1で検出した竪穴住居跡である。45号竪穴住居跡から3m南西に位置する。48号竪穴住居跡と重複しており、これよりも新しい。南側を大きく校舎の基礎によって壊されるため、残ったのは北側の一部分に過ぎない。北壁は長さ3.0mを測る。床面は北側がやや高く、この付近で深さ30cm、南側で深さ40cmを測る。北壁際で焼土の広がりを確認しカマドの可能性を考えたが、粘土等は全く検出されなかったのでカマドではないと判断した。また位置や形状から炉跡とも考えがたい。ピット等は検出されなかった。出土遺物は比較的少ない。



第103图 45号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/3)

出土土器 (図版58、
第105図)

1~4は甕である。1は口縁部があまり開かず、直線的に伸びている。端部は丸くおさめる。外面は口縁部下方までハケ目を行い、肩部には横ナデを行わない。胎土に砂粒を若干含み色調は橙褐色を呈す。外面には全面に煤が付着する。2は器壁が厚い。口縁部はわずかに内湾し、端部は丸い。内面のヘラケズリは屈曲部近くにまで及ぶ。色調は茶色を呈す。整形、色調ともに一般的な布留系甕と異なる。頸部と胴部には煤が付着する。3・4は布留系の甕。3は口縁部が立ち気味に開き、端部を外側につまみ出す。肩部には櫛描波状文を巡

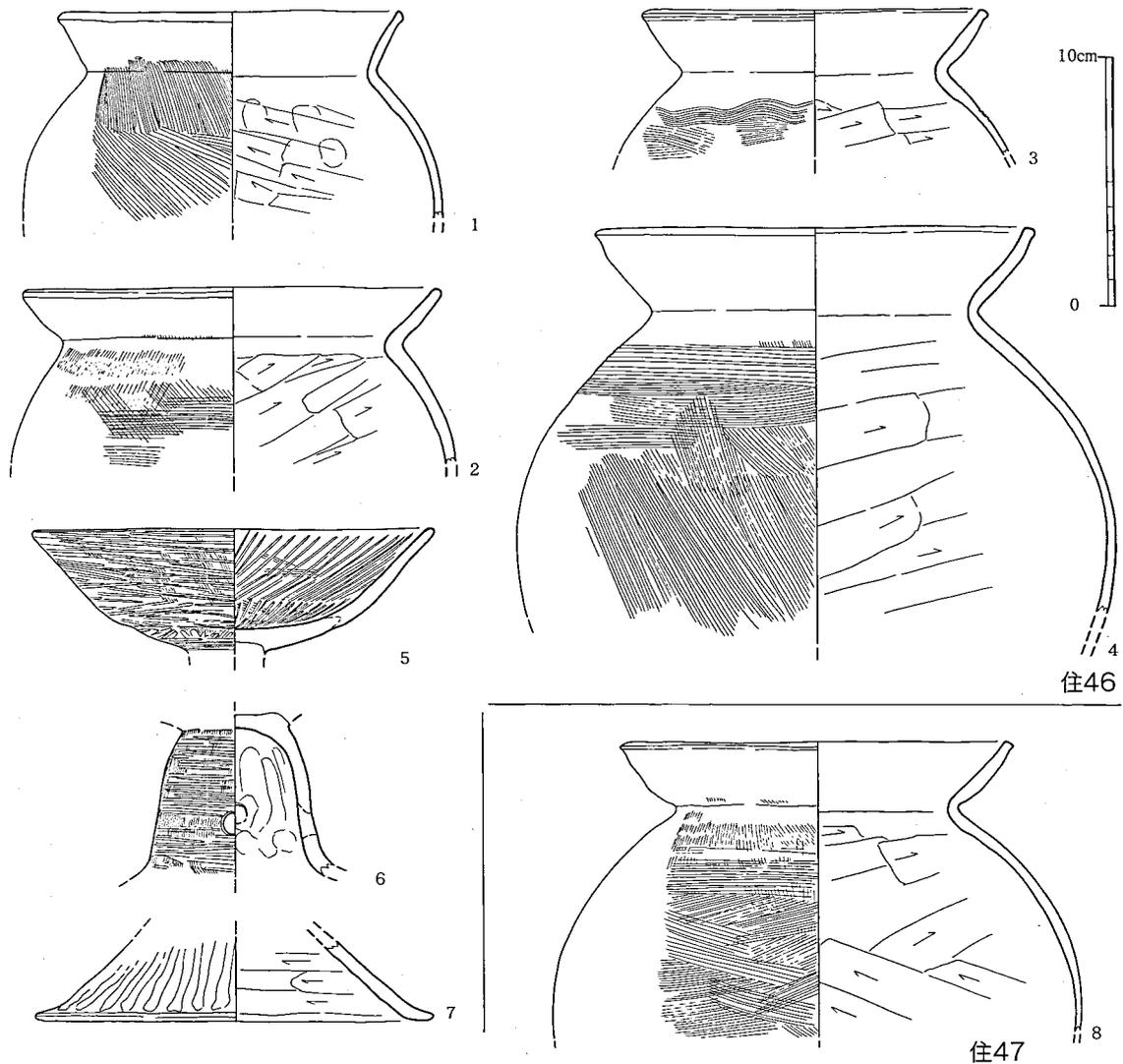


第104図 46・47号竪穴住居跡実測図 (1/60)

らせる。色調は黄灰褐色。4もまた口縁部が立ち気味に開き、上端は平坦面をなす。肩部には櫛描直線文を巡らす。色調は黄灰褐色を呈し、外面に煤の付着が著しい。

5・6は高坏である。5は屈曲部がかすかに凹線状に窪んでいる。体部上半は外反気味に開き、端部は丸くおさめる。内面に横ハケ目後縦ヘラミガキによる暗文を施し、外面は縦ハケ目後に横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。6はやや中膨らみとなる柱部である。内面は指ナデ、外面は縦ハケ目の後に疎らな横ヘラミガキを行う。屈曲部のやや上方に2ヶ所穿孔を行い、内面の孔周辺には器壁の剥離が見られる。胎土は精良で色調は橙灰色を呈す。

7は山陰系鼓形器台の裾部。内面のヘラケズリは端部近くにまで及ぶ。外面は横ナデの後縦方向の幅広いヘラミガキを暗文状に行う。胎土に砂粒を若干含み色調は茶褐色を呈す。



第105図 46・47号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

47号竪穴住居跡 (図版22、第104図)

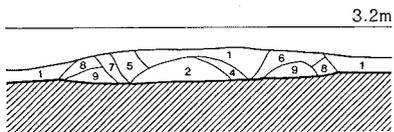
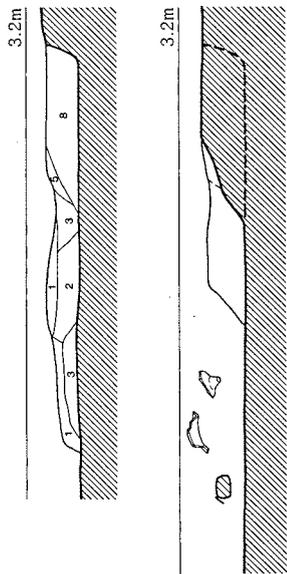
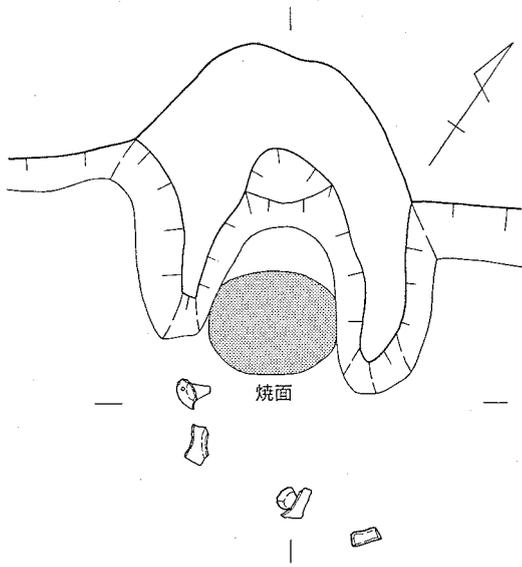
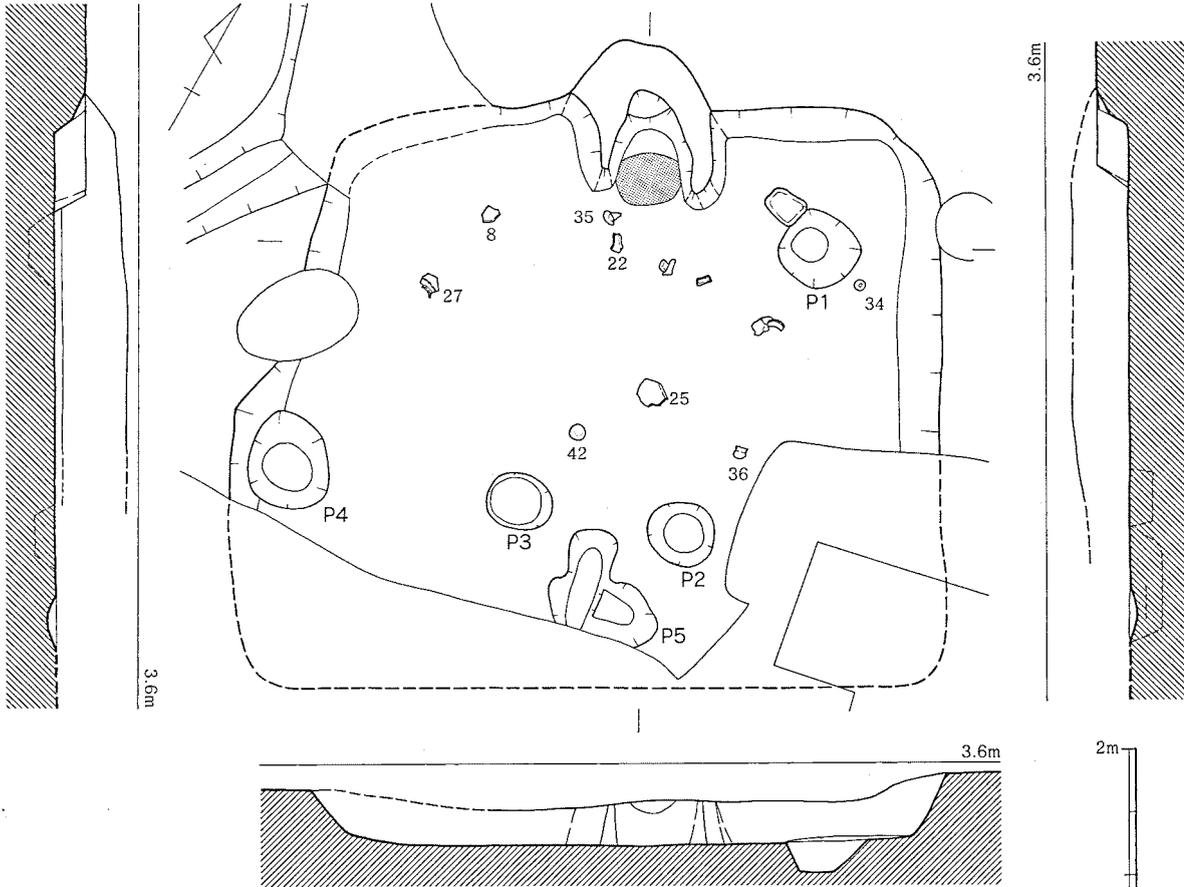
I区中1で検出した竪穴住居跡である。46号竪穴住居跡より2m西側に位置する。48号竪穴住居跡と重複し、これよりも新しい。校舎の基礎によって大きく攪乱を受け、遺存するのは北壁と西壁の一部に過ぎない。北壁長は5.0mを測る。床面までの深さは25cmを測る。出土遺物は非常に少ない。図示した土器の他、砥石が出土している。

出土土器 (図版58、第105図)

図示できるのは1点のみである。8は布留系甕である。肩部は丸味を帯び、頸部はよく締まる。口縁部は内湾しながら開き、外端部をわずかにつまみ出す。色調は内面肌灰色、外面黄灰褐色を呈す。外面には煤が付着する。

48号竪穴住居跡 (図版23、第106図)

I区北1で検出した竪穴住居跡である。46・47・50号竪穴住居跡と重複しており、これらの中で最も古い。後代に広く普及するカマド同様、北壁際の中央にカマドを造り付けており、今回の調査



1. 黒褐色細砂+暗黄褐色細砂
2. 赤褐色細砂 (焼土)
3. 黄灰色細砂+灰褐色細砂
4. 2+黄灰色細砂
5. 黄灰色細砂、ややしまる (カマド袖崩落土)
6. 黄灰色細砂+粘土ブロック、よくしまる
7. 黄褐色細砂、よくしまる
8. 暗黄灰色細砂、よくしまる
9. 黄灰色細砂、3~5cmの層で解状に堆積

第106図 48号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

区の中では異質である。東西長は5.5mを測る。床面はほぼ水平で、深さは50cmを測る。床面上ではP1～P5の計5つのピットを検出した。このうちP5は南北長80cm、東西長90cmを測り、その位置から壁際土坑としてよいものである。そうすると南北長は長さ4.5m前後になり、やや東西に長い方形プランに復元できる。他のピットのうち、P1は径70cm、深さ35cm、P3は径45cm、深さ20cmを測る。P3はやや不安が残るが、P1の位置からみて4本支柱構造の竪穴住居跡として良いと思われる。これ以外は配置から考えても支柱穴とは想定し難い。遺物は床面直上から比較的まとまって出土している。

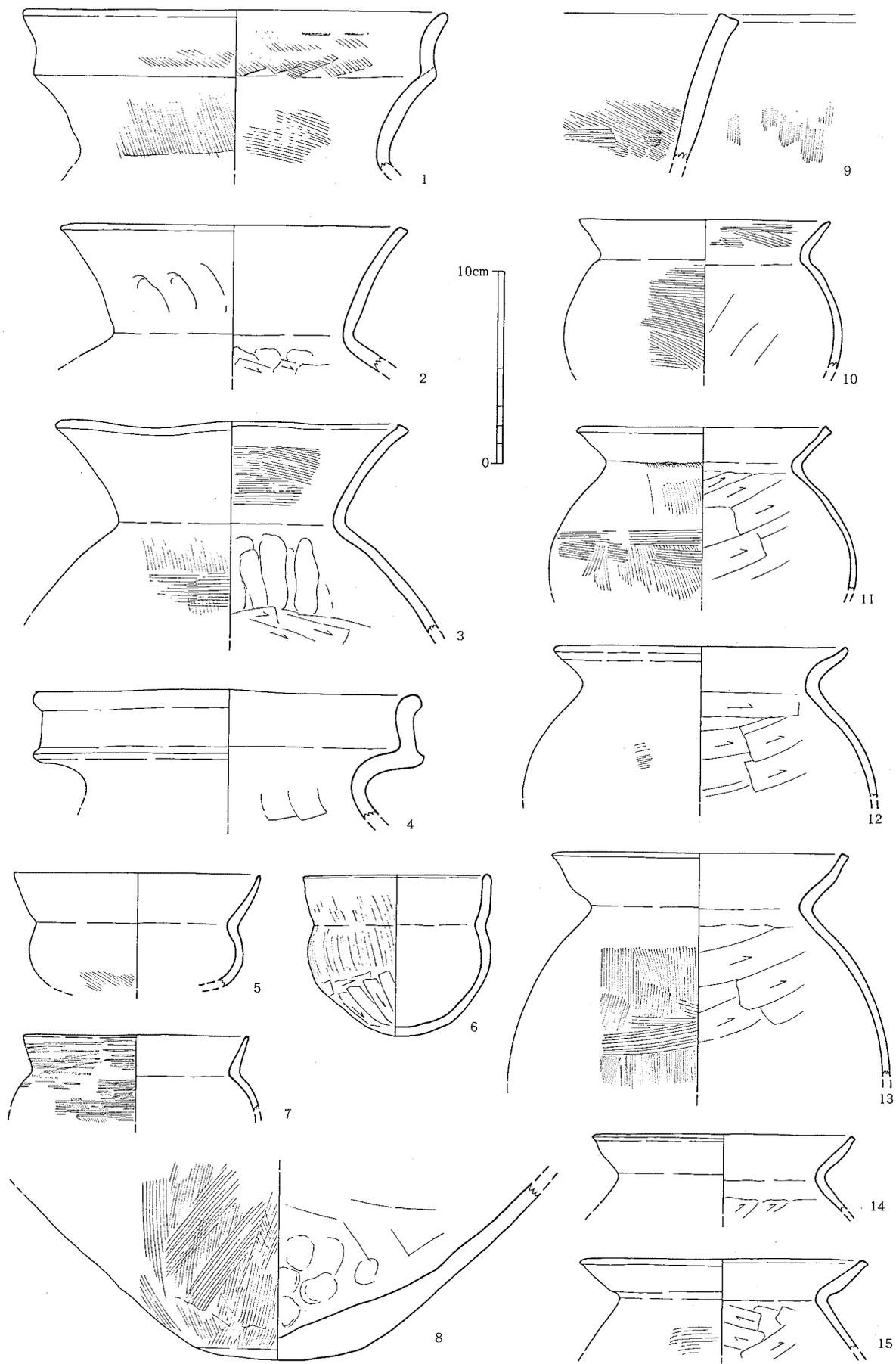
48号竪穴住居跡カマド (図版23、第106図) 北壁のほぼ中央に造り付けられるカマドである。カマドの構築には粘土と細砂の混合土を使用し、壁面の外側まで大きく張り出している。右袖長75cm、幅40cm、高さ10cm、左袖長80cm、幅40cm、高さ10cmを測る。カマド内部には長軸50cm、短軸40cmの範囲で火床が残っており、この位置から推察すると支脚の位置はカマドの奥壁から30cm前後になると思われる。煙道はカマドの奥壁から20cmの長さで緩やかなスロープを形成し、屋外へと続く構造となる。この煙道から屋外にかけても、約40cmの幅で粘土を厚く積み重ねており、この点では後代に広く普及するカマドの構築法と異なる。

出土遺物の量は多い。図示した土器のうち、8・22・23・25・27・33・34・36・42は床面直上から出土、それ以外は覆土から出土した。他に砥石、台石、鉄鏃、鉄鎌、鉄釘が出土している。

出土土器 (図版58～60・86、第107～110図)

1～8は壺である。1は口縁部が大きく開く在来系二重口縁壺。二次口縁部は下半が直立し、上半は外反する。端部は丸い。内外面ハケ目調整後に内面と二次口縁部のみヨコナデを行う。胎土に砂粒を若干含み、黄灰褐色を呈す。2・3は畿内系の直口壺である。2は口縁部内外面に横ナデを行い、端部は面をなす。外面には指圧痕が残る。胎土に砂粒を若干含み黄灰褐色を呈す。3は肩があまり張らず、口縁部は外反しながら開く。端部の内側をつまみ出し、上端は面をなす。口縁部は内外面横ナデを行うが、内面にはそれに先行する横ハケ目が観察される。肩部内面には長い指ナデ痕が明瞭に残る。胎土に砂粒を若干含み、色調は茶灰色を呈す。4は器壁が特に厚い二重口縁壺。一次口縁部はほぼ水平にまで開き、二次口縁部は内傾気味に立ち上がる。屈曲部外面は鈍い突帯を巡らせ、口縁部外端も丸く肥厚させる。胎土に差粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。5は体部が扁平で浅く、鉢に近い小型壺。内面全面と外面の口縁部から肩部にかけてはナデ、外底部付近にはハケ目が見られる。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄肌色を呈す。6は粗製の小型壺。体部の最大径はやや上に位置し、口縁部は直立する。端部は丸くおさめる。内面はナデ、外面は粗いハケ目の後に底部付近のみヘラケズリを行う。胎土に砂粒を若干含み、色調は肌灰色を呈す。7は精製の小型丸底壺。口縁部は短く開きも弱い。内面は横ナデ、外面は細かいハケ目の後横ヘラケズリを行う。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。8は大型壺の底部で、底部は尖底気味のレンズ状となる。内面はナデで指圧痕が残る。外面はハケ目、底面はナデ。胎土に砂粒を多く含み色調は黄灰褐色を呈す。

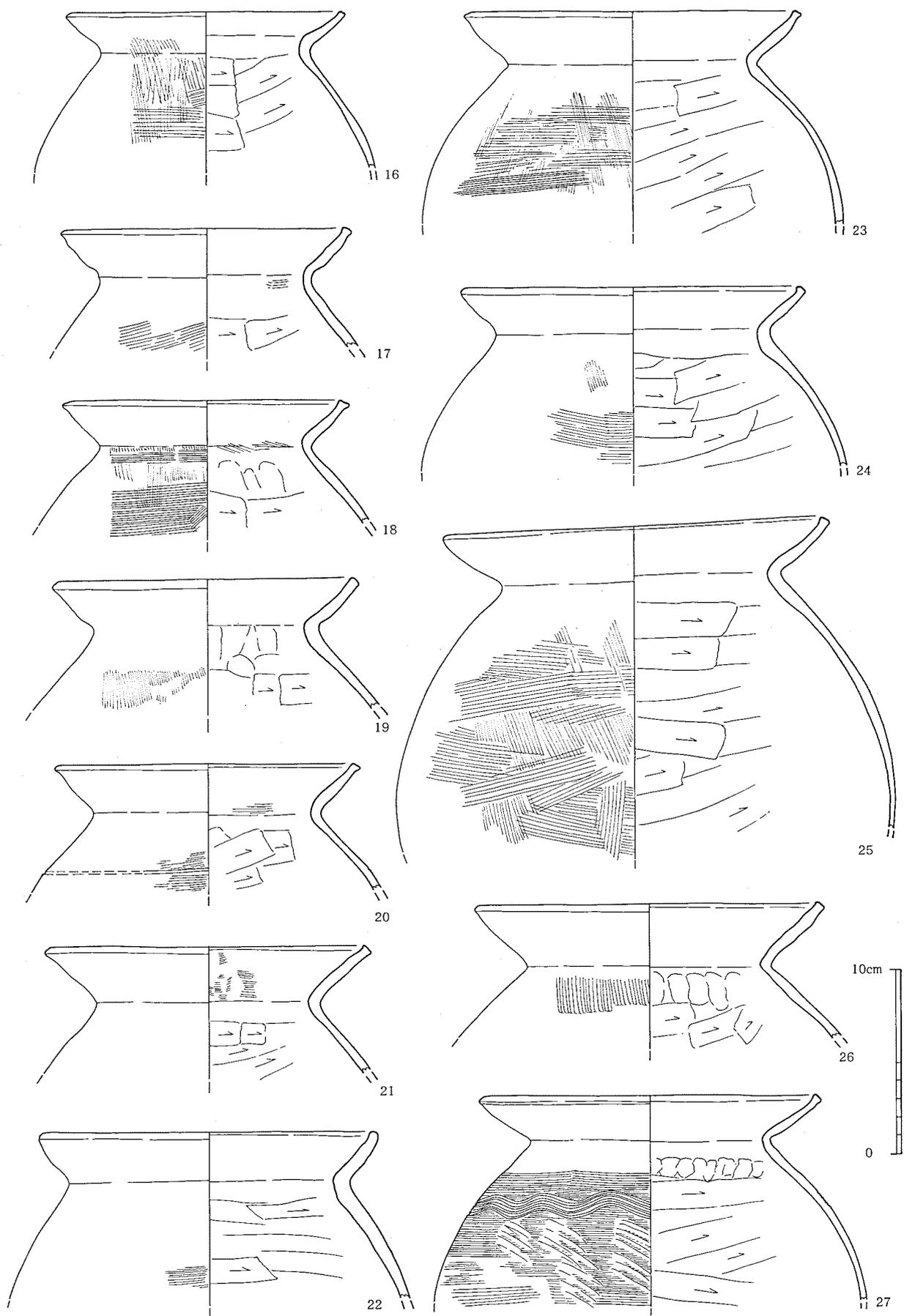
9～27は甕である。9は在来系の大型甕口縁部。あまり開かず直線的に伸び、端部はシャープな面をなす。口縁部付近は横ナデ、それ以下はハケ目を行う。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。10は球形胴の小型甕。口縁部は直線的に短く開き、端部は尖る。胴部内面はナデ、外面は横ハケ目。口縁部は横ナデを行うが、内面にはこれに先行する横ハケ目が見られる。色調は黄灰褐色を呈し、二次加熱を強く受け器表の一部が剥落する。11も球形に近く胴部が丸く張る。口縁部は



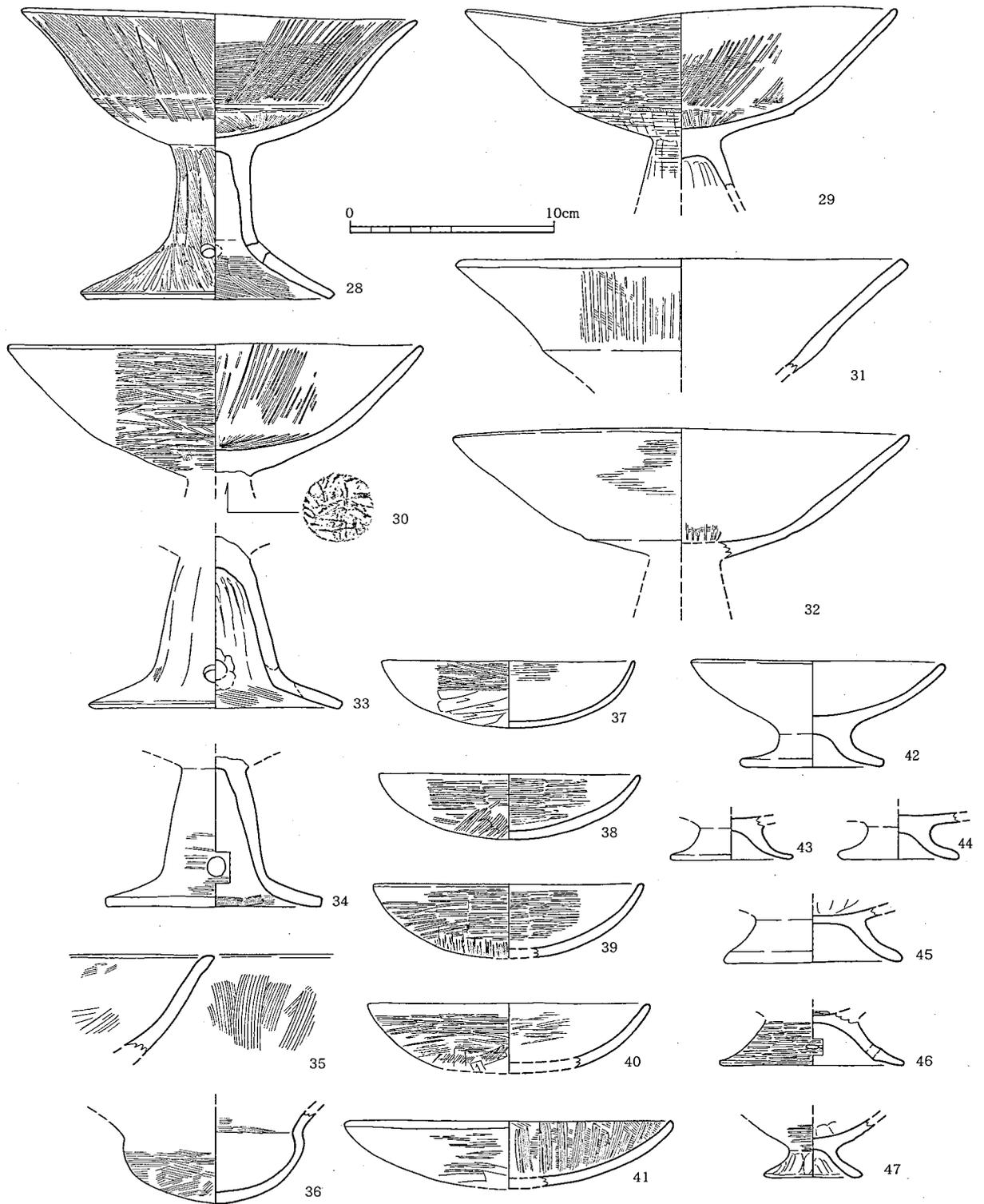
第107图 48号竖穴住居跡出土土器実測图① (1/3)

直線的に開き、外端を丸くつまみ出し、また上端が面をなす。内面のヘラケズリは屈曲部近くまで及ぶ。色調は黄灰色を呈し外面の肩部以外に煤が付着する。12は口縁部の上半のみが内湾し、端部は丸味を帯びる。内面のヘラケズリは屈曲部付近にまで及ぶ。色調は黄灰褐色を呈す。13は口縁部が立ち気味に開き、上半は内側に屈曲するように内湾する。端部はシャープな面をなす。胴部外面のハケ目は二種類の異なるハケ目原体が使用される。色調は暗茶灰色を呈す。14は器壁の薄い小型の甕。口縁部は立ち気味に開き、端部はシャープな面をなす。色調は黄肌色を呈す。15もやはり小型の甕。器壁がやや厚い。口縁部は中央が肥厚し、端部は丸味を有す。内面のヘラケズリは屈曲部近くにまで及ぶ。16は肩の丸味が少なく、口縁部は内湾して開き、上端部は水平に近い面をなす。内面のヘラケズリは屈曲部近くにまで及ぶ。色調は暗黄灰色を呈す。17は口縁部の横ナデによる凸凹が顕著である。端部は内外に広がりやや丸味を帯びた面をなす。色調は黄灰色を呈し、外面には煤が付着する。18は屈曲部の稜が明瞭で、口縁部の内湾は弱い。端部は内外につまみ出し、上端はシャープな面をなす。屈曲部内面には横ナデ前のハケ目が残る。色調は黄肌色を呈し外面には煤が付着する。19は全体的に器壁が厚い。頸部はよく締まり口縁部は内湾しながら開く。屈曲部の内面には指ナデが残る。色調は黄灰褐色を呈し外面には煤が付着する。20は口縁端部を外側につまみ出し、上端はシャープな面をなす。肩部には一条の沈線を巡らせる。口縁部は内外面とも横ナデを行うが、内面にはこれに先行する横ハケ目が観察される。胴部内面のヘラケズリは屈曲部近くにまで及ぶ。色調は黄灰色を呈し口縁部外面のみ煤が付着する。21は口縁部が外反気味に開き、内端部をつまみ出す。口縁部内面には横ナデに先行する横ハケ目が残る。肩部外面にハケ目は見られない。色調は黄灰褐色を呈す。22は器壁が厚い。口縁部は短く開き、端部を丸くおさめる。色調は橙茶色を呈し他の一般的な布留系甕と異なる。23は肩があまり張らず口縁部は内湾気味に開き端部をつまみ出す。色調は肌灰色を呈す。24は他と比べて口縁部が短めで、内端部を丸くつまみ出す。色調は黄灰色を呈し外面には煤が多く付着する。25はやや大型の甕。肩は張らず、最大径が下がった位置にくる。口縁部は内湾し、端部は面をなす。胎土に砂粒を若干含み、色調は暗灰褐色を呈す。26は屈曲部の稜が顕著である。口縁部は内湾が弱く、端部をわずかにつまみ出す。色調は黄灰色を呈す。27は全体的に器壁が薄い。口縁部はやや内湾しながら開き、内端部をつまみ出す。肩部には櫛描波状文を巡らせる。外面のハケ目に先行する左上がりタタキが顕著に残る。色調は黄灰褐色。

28~34は高坏である。28は坏部の屈曲部内面に沈線状の段を有し、上半は外反する。坏部は他と比べて若干深い。柱部は円筒形で裾は短く開き、端部は面をなす。坏部は内外面ともハケ目後にヘラミガキによる暗文を施す。柱部内面は横ナデ、外面はハケ目。裾部内面は横ハケ目。外面はハケ目後に縦ヘラミガキ。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。脚部の柱部と裾部の境に円孔を4ヶ所穿孔する。29は屈曲部外面に浅い凹線を巡らせ、上半はほぼ直線的に伸びる。内面は横ハケ目後縦ヘラミガキによる放射状暗文、外面は横ヘラミガキで、凹線の内面のみハケ目が残る。脚柱部内面は縦ナデ、外面は縦ヘラナデ後横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は赤橙色を呈す。30は屈曲部が不明瞭で、体部上半は直線的に伸びる。内面は縦ヘラミガキによる放射状暗文、外面は横ヘラミガキ。脚部との接合面にはヘラ状工具の先端部刺突による刻目を施す。胎土は精良で色調は赤茶色を呈す。31は在来系の高坏。屈曲部外面に不明瞭な段を有し、上半はやや外反気味に伸びる。端部はシャープな面を形成する。風化が著しく内面の調整は不明。外面はハケ目後に縦ヘラミガキによる暗文を施す。胎土は比較的精良で色調は黄肌色を呈す。32は屈曲部外面に不明瞭な段を有し上半は直線的

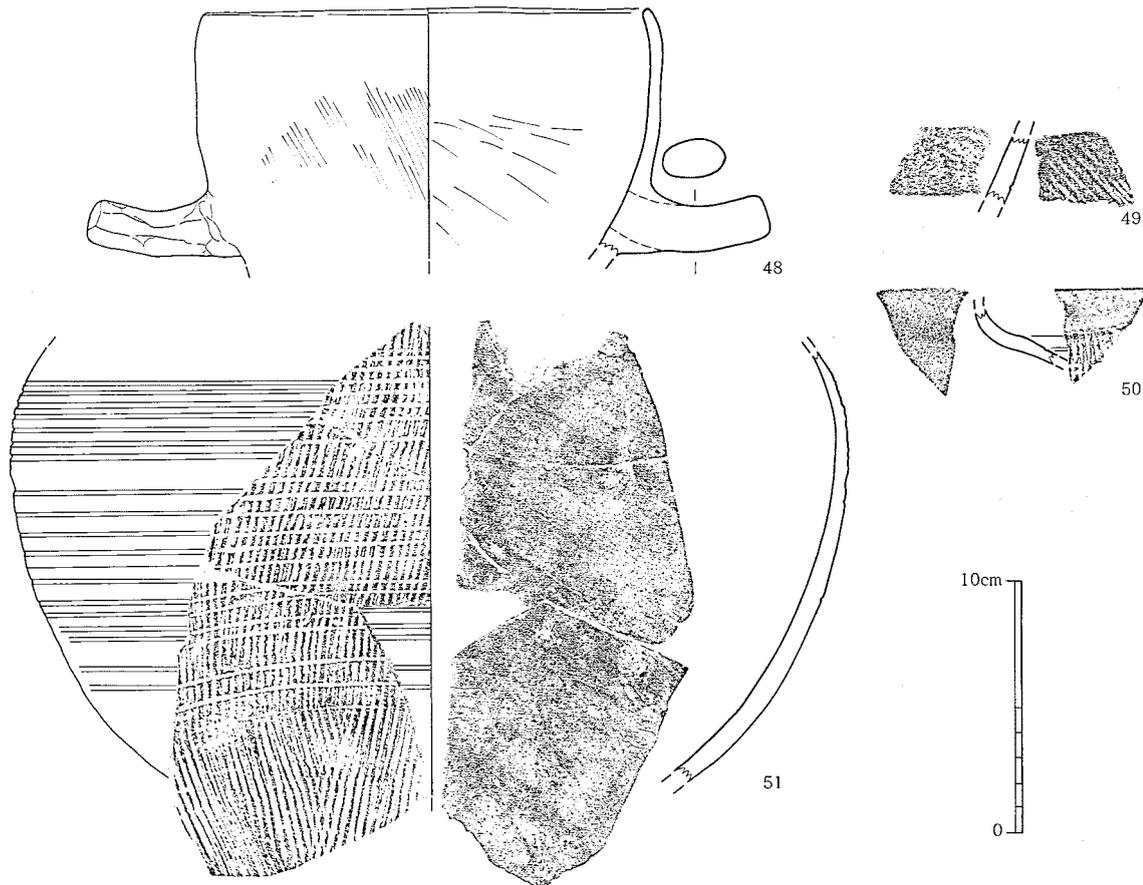


第108图 48号竖穴住居跡出土土器実測图② (1/3)



第109図 48号竪穴住居跡出土土器実測図③ (1/3)

に大きく開く。全体的に風化が著しいが、内底部には放射状のヘラミガキが、外面には横ヘラミガキがかすかに残る。胎土は精良で色調は内面肌茶色、外面黄橙色を呈す。33は脚柱部がエンタシス状に中膨らみになり、裾部は短く直線的に開く。端部は面をなす。屈曲部に円孔を2ヶ所穿孔するが、内面の孔周辺の剥離が広い範囲に及んでいる。柱部内面は縦方向ナデ、裾部内面は横ハケ目。外面は風化が著しく、縦方向のヘラナデによると思われる稜線とハケ目がかすかに観察されるに過ぎな



第110図 48号竪穴住居跡出土土器実測図④ (1/3)

い。胎土は精良で色調は黄灰色を呈す。34も柱部がエンタシス状に中膨らみとなる。裾部は短く大きく開き、端部は面をなす。屈曲部のやや上方に円孔を穿孔するが、孔の数は不明。柱部内面はナデ、裾部内面は横ハケ目、外面はかすかに横ヘラミガキが観察される。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。35は高坏の坏部か。高坏にしては胎土・調整が粗い。内面はヘラミガキ、外面は縦ハケ目を行う。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄茶色を呈す。

36~46は鉢である。36は体部が浅く口縁部が大きく開く粗製の鉢。体部内面はヘラナデ後ナデ消し、外面は短いハケ目、口縁部内面はハケ目、外面はナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。37~41は浅い体部の精製鉢である。37は底部のヘラナデが顕著に残る。口縁部は横ヘラミガキ。胎土に砂粒を若干含み、精製器種としては粗い。色調は赤茶色を呈す。38は内外面丁寧なヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は肌色を呈す。39も内外面丁寧なヘラミガキ。胎土は精良で色調は黄灰色を呈す。40も内外面ヘラミガキ。胎土は精良で色調は肌茶色。41の内面はハケ目の後に数本を一単位とする暗文状の縦ヘラミガキを行う。外面は横ヘラミガキ。外底面はヘラナデ。胎土に砂粒を若干含み、精製器種にして粗い。色調は暗黄灰色を呈す。42~46は脚付鉢である。42は内外面ナデ調整を行い、胎土に砂粒を若干含む。色調は黄灰色。43は内外面ナデ。体部の内面もナデ。胎土に砂粒を若干含み暗黄灰色を呈す。44は体部内面にヘラミガキを行う。脚部は横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。45は径がやや大きな脚部。体部内面にナデ前の工具痕を残す。胎土に砂粒を若干含み肌色を呈す。46は精製品である。裾端部は尖り気味に仕上げる。内面は横ナデ、外面は細かい横ヘラミガキ、体部内面もヘラミガキ。脚部の中央に1ヶ所のみ穿孔を行う。胎土

に砂粒を若干含み、黒褐色を呈す。

47は製塩土器の脚部である。脚部は全面指整形が行われる。体部内面はナデ、外面はタタキを行う。胎土は他の土器と比べて粗さが目立ち、色調は赤味がかかった黄灰色を呈す。

48～51は半島系の土器である。48は軟質の小型甑。体部は丸味を帯び口縁部はわずかに内側を向く。端部は丸くおさめられる。把手は体部が小さな割には長目である。現状で片方のみが遺存する。基部はやや下方を向くが、端部は上向きに湾曲し、端部は面をなす。断面は横長の扁平である。把手の整形は指ナデで行われ、接合は体部に孔をあけ、把手の基部を挿入して行われる。体部内面はナデ上げ、外面は粗いハケ目、口縁部は横ナデ。胎土は砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。胎土、色調、焼成とも土師器と似る。把手を中心に煤が付着する。49は軟質で、壺の胴部片か。外面は斜縄蓆文タタキ、内面はナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は淡褐色。50は瓦質に近い陶質壺の肩部片で付近の攪乱から出土したものだが、51と同一個体と判断したためここに掲載した。外面は縦方向の縄蓆文タタキの後に平行沈線を巡らせる。内面はナデ。51は壺の胴部片である。外面は縦方向の縄蓆文タタキの後、底部以外に間隔の狭い平行沈線を巡らせる。底部のタタキは同一方向とはならず、底部を中心に放射状に配されたものと思われる。内面は肩部以上が回転ナデ、下方は不整方向の静止ナデを行い、最大径部分には指圧痕と思われる小さな窪みも認められる。胎土には砂粒をほとんど含まず、水漉した精良な粘土を使用する。色調はやや黄色がかかった明灰色を呈し、陶質だが瓦質に近い焼き上がりとなる。接合資料や同一個体と思われる破片資料が、当住居跡の他に15・27・42・43・78・50号竪穴住居跡や周辺の包含層、攪乱から多数出土している。

49号竪穴住居跡 (図版23、第111図)

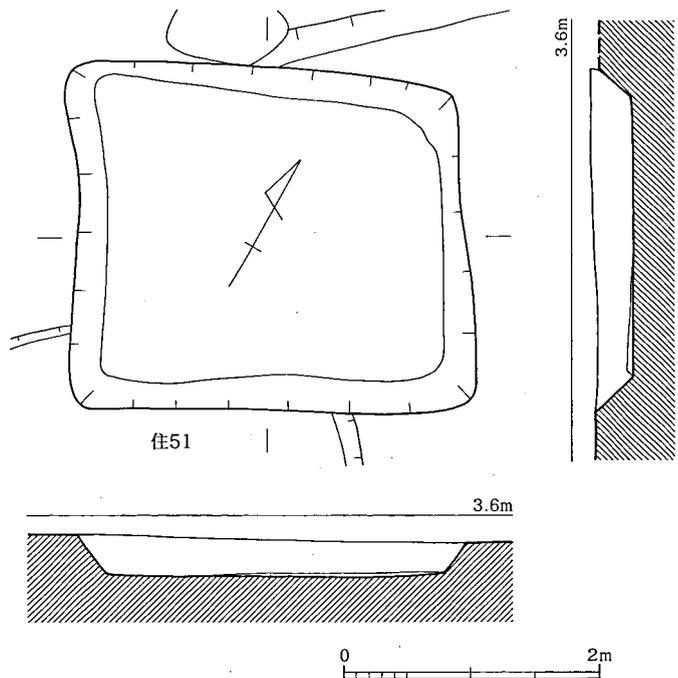
I区北1で検出した竪穴住居跡である。この一帯は特に住居跡が集中する場所である。50・51号竪穴住居跡と重複しており、この中では最も新しい。北壁長3.0m、東壁長2.6mを測り、東西にやや長い隅丸長方形プランとなる。総面積は8.3m²を測り、小型の部類に含まれる。床面はほぼ水平で、深さ30cmを測る。住居跡内ではピット、炉跡等は全く検出されず、また他の住居跡よりかなり小型になることから、住居跡ではなかった可能性もある。

遺構の状況が良好であったにもかかわらず、遺物の出土量は少ない。

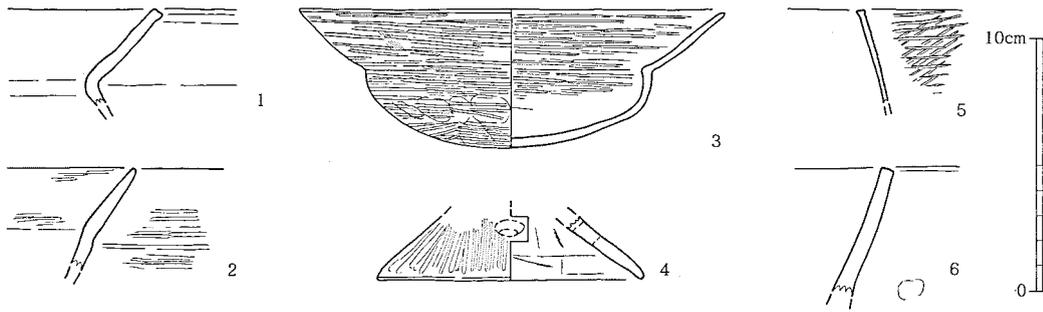
出土土器 (図版60、第112図)

1は布留系甑の口縁部で、わずかに内湾しながら開き、外端部を丸くつまみ出す。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。

2・3は鉢である。2は体部と口縁部の境目が不明瞭で口縁部は直線的に伸



第111図 49号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第112図 49号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

びる。内外面共横ヘラミガキ調整を行う。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。3は体部が浅く屈曲部の内面には鋭い稜を有し、口縁部はわずかに内湾して大きく開く。内底部に横ナデを行う以外は細かい横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は茶色を呈す。

4は小型器台の脚部か。内面はヘラナデの後ナデ、外面は縦ヘラミガキ。端部は小さな平坦面をなす。円孔を穿孔するが、破片資料なので個数は不明。胎土に砂粒を若干含み色調は茶灰色を呈す。

5は製塩土器の口縁部である。内面はナデ、外面はタタキ。器壁が非常に薄く、胎土は粗い。色調は橙灰色を呈す。

6は器形が判明しないが、胎土や色調などから半島系の土器と考えた。わずかに内湾し、かなり立ち上がる口縁部で、端部はシャープな面を形成する。下端は屈曲部のようで、外面には指圧痕が残る。全面丁寧なナデ調整を行う。胎土は砂粒をわずかに含むものの、水漉した精良な粘土を使用する。色調は黄褐色を呈す。瓦質に近い焼成だが堅緻で良好な焼き上がりとなる。同一個体と思われる小片が50号竪穴住居跡からも出土している。

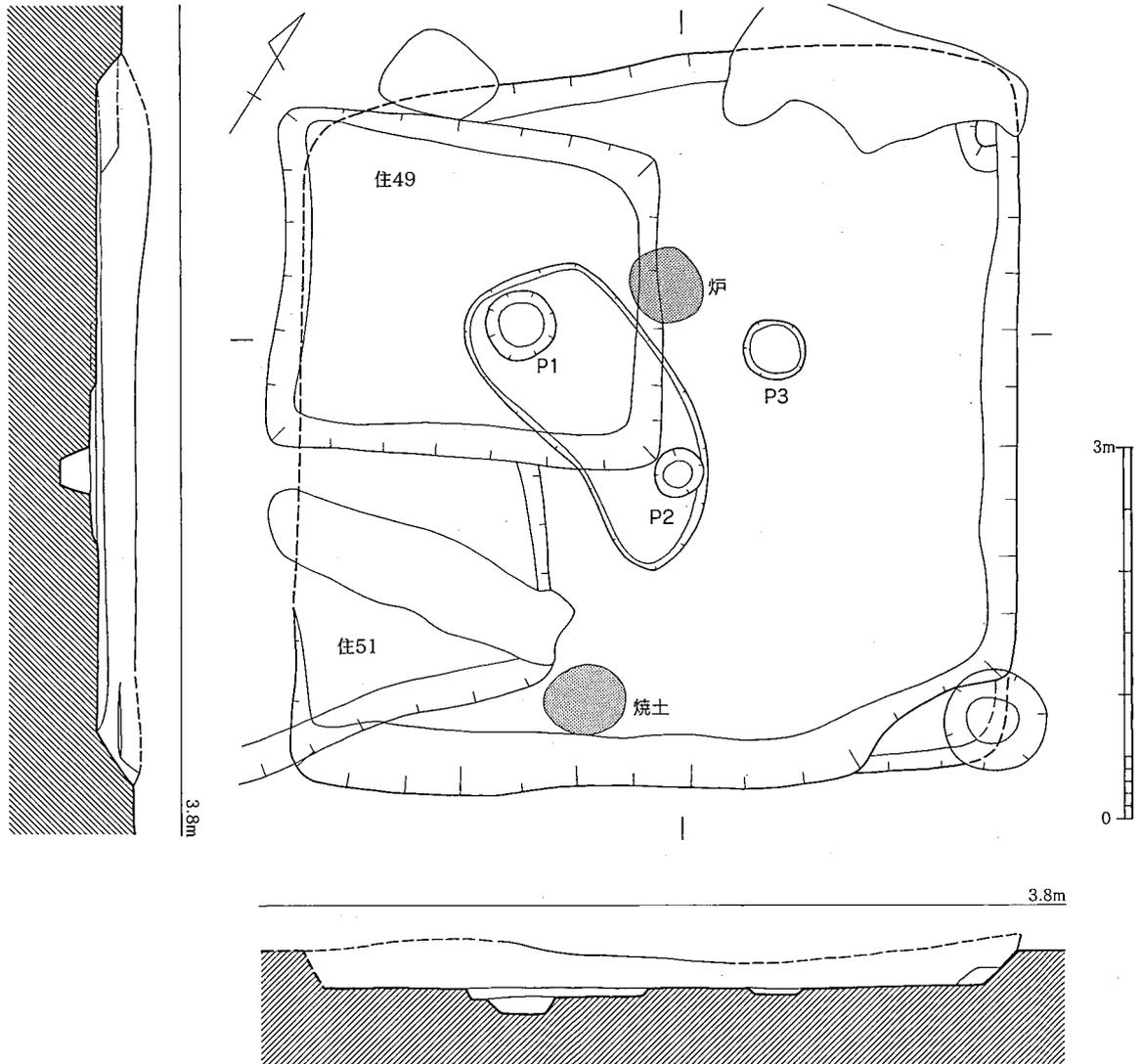
50号竪穴住居跡 (図版24、第113図)

I区北1で検出した竪穴住居跡である。49・51・80号竪穴住居跡と重複しており、新旧関係では80号竪穴住居跡より新しく、49・51号竪穴住居跡よりも古くなる。南壁長5.7m、東壁長5.8mを測り、ほぼ正方形プランをなす。床面はほぼ水平をなし、深さは最も残りの良い場所で40cmを測る。床面の中央からやや北に寄った所で、径55cmの焼面を検出したが、これは位置からしても炉跡として良いだろう。これとは別に南壁際で径60cmの規模の焼土を確認した。中央付近には長軸260cm、短軸120cmの大ききで浅く土坑状に窪んだ部分があり、さらにその中でP1・P2の二つのピットを検出した。P1は径60cm、深さ20cm、P2は径40cm、深さ30cmを測る。深さにやや不安が残るものの、支柱穴の可能性も考えられる。これ以外に径50cm、深さ5cmのP3も検出したが、浅過ぎるため柱穴とはなり得ない。

図示した土器のうち、17は北側の床面直上から出土した。これ以外は覆土からの出土である。他に石錘、砥石、刀子が出土している。

出土土器 (図版60・86、第114・115図)

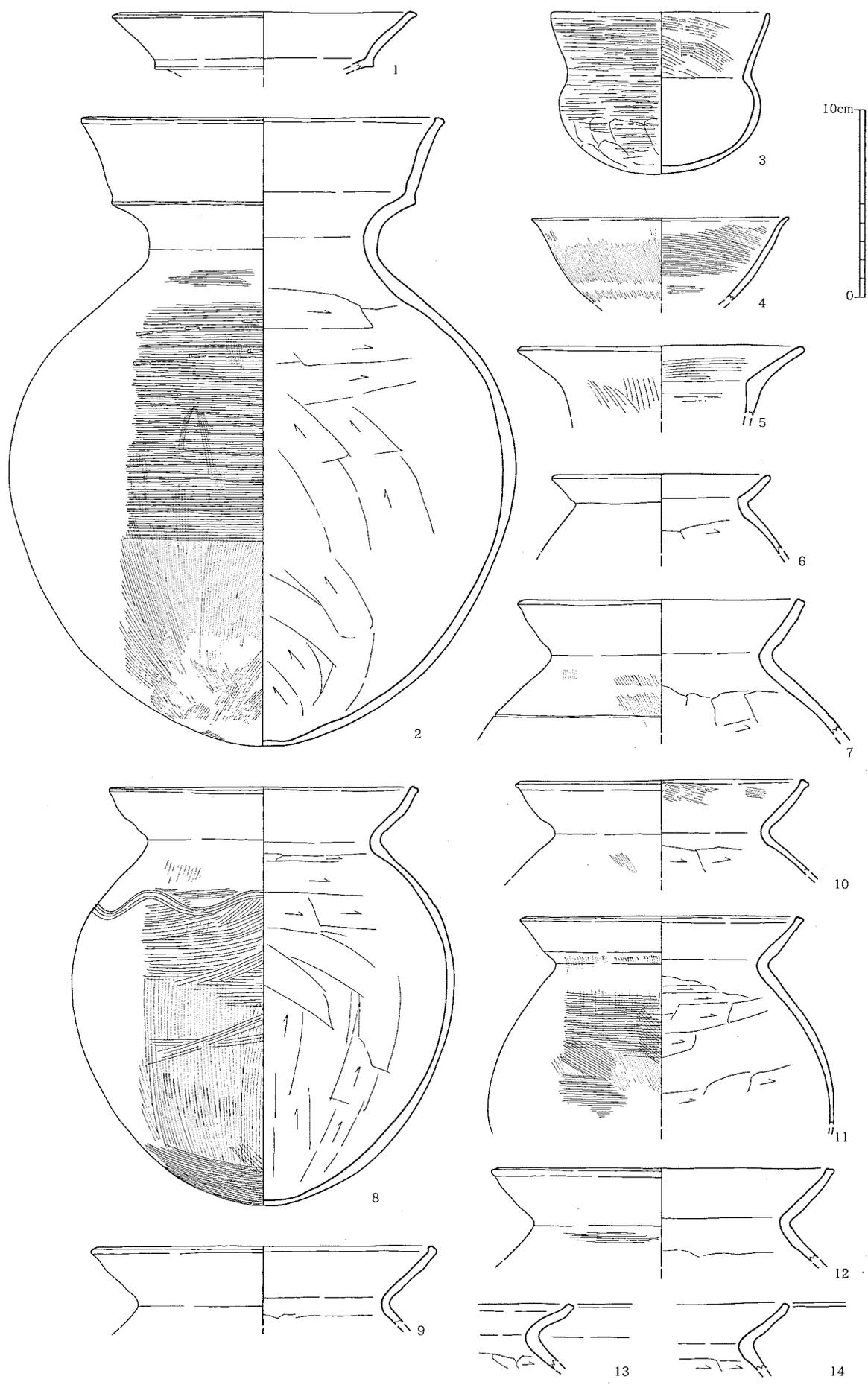
1はやや小ぶりな山陰系二重口縁壺の口縁部である。屈曲部外面はシャープな突帯を巡らせ、二次口縁部は外反気味に大きく開き、口縁端部の上面は面をなす。全面横ナデ調整。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。2も山陰系の二重口縁壺である。胴部は球形で最大径が中位に位置し、肩に張りがないため弛れて不安定な感を受ける。底部は尖底気味の丸底。口縁部は立ち気味に外反



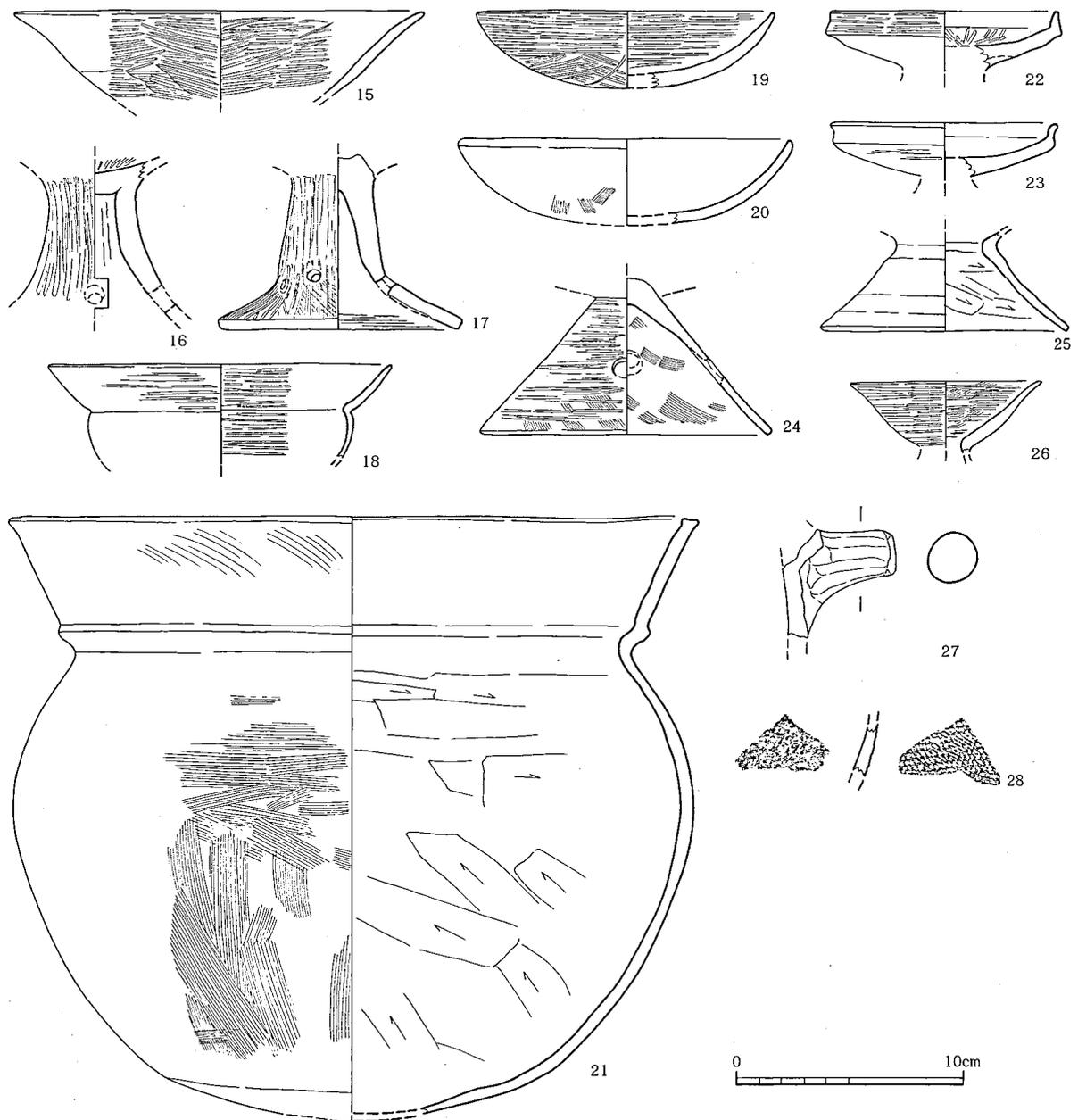
第113図 50号竪穴住居跡実測図 (1/60)

し、内端部をわずかにつまみ出す。胴部内面は幅広のヘラケズリ、口縁部から頸部にかけては内外面横ナデ。胴部下半を中心に縦ハケ目を行った後、上半の横ハケ目を行い、肩部はその上から横ナデを行う。肩部の列点文は図示した6個しか施さない。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。3は精製の小型丸底壺である。屈曲部内面に明瞭な稜を有し、口縁部は直線的に開く。体部内面はナデ、口縁部内面はハケ目後横ナデ。外面は丁寧な横ヘラミガキで底部付近にはこれに先行するヘラナデの稜が残る。胎土は精良で色調は黄灰色を呈す。4も小型丸底壺の口縁部であろう。内外面に丁寧なハケ目を行うが、ヘラミガキを行わない。しかし作りは丁寧で胎土も精良は精製品である。色調は黄灰色を呈す。

5~14は甕である。5は在来系の小型甕と考えたが自信がない。頸部は締まりがなく、口縁部は直線的に開き、端部は丸くおさめる。胴部内面は弱い横ヘラケズリ。口縁部は横ナデを行うが内面には先行する横ハケ目が残る。胴部外面は粗い縦ハケ目。胎土に粗砂を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。6は小型の布留系甕。口縁部は短く、端部は丸くおさめる。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。7は口縁部が立ち気味に開く。肩部には一条の沈線を巡らせる。色調は肌色。8は完形の



第114图 50号竖穴住居跡出土土器実測图① (1/3)



第115図 50号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)

布留系甕。底部は丸底で胴部の最大径は中位よりやや上に位置する。口縁部は内湾しながら開き、端部の外側をわずかにつまみ出す。肩部には櫛描波状文を巡らせる。胎土に砂粒を若干含み、特に長石が目立つ。色調は暗褐色を呈し、他の布留系甕とは異なる。煤が外面の頸部以外に付着する。9は内湾度が弱くほとんど直線的に伸び、端部の内側は丸く肥厚する。色調は肌灰色を呈す。10は端部を内外につまみ出し、口縁部内面には横ナデに先行する横ハケ目が観察できる。色調は黄灰褐色。11は肩部に張りがなく、口縁部は直線的で立ち気味に開く。端部は内側につまみ出し、上端は面をなす。胎土に砂粒をあまり含まず甕にしては精良で、色調は黄灰褐色を呈す。外面には部分的に煤が付着する。12は口縁部が内湾しながら開き、端部は内外に強い横ナデを加えてつまみ出すために上端が窪む。色調は黄灰褐色。13は器壁がやや厚く、口縁部は上半のみが内湾する。端部は面をなす。色調は黄灰褐色。14も口縁部のつまみ出しが見られない。色調は黄灰褐色。

15～17は高坏である。15は内外面に細かい静止横ヘラミガキを行う高坏の坏部。小型で深みがあり、上半は外反する。胎土はやや粗く、色調は明黄灰色を呈す。16は内面ナデ、外面縦ヘラミガキを行う高坏の柱部。坏部内面もヘラミガキ。屈曲部にあたる位置に穿孔を行う。胎土は精良で色調は肌色を呈す。17はわずかにエンタシス状の中膨らみをもつ脚部。裾部はあまり開かず、端部は面をもつ。柱部内面はナデ、外面は縦ヘラミガキ、裾部内面は横ハケ目、外面は斜ハケ目後に暗文状ヘラミガキを施す。胎土に砂粒を若干含み高坏にしては良くない。色調は茶灰色を呈す。

18～21は鉢である。18は外反口縁の小型精製鉢。肩部は丸味を有し口縁部は内湾しながら開く。屈曲部はシャープな稜を形成する。全面に丁寧な横ヘラミガキを行ったと思われるが、体部外面は風化が著しくヘラミガキが見えない。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。19・20は直口縁の浅い鉢。19は内外面に丁寧な横ヘラミガキを施す精製品。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。20は内外面ナデ調整で、外底部には先行するハケ目が残る。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。21は山陰系の二重口縁大型鉢である。底部は平底に近いレンズ状となる。胴部は丸味を帯び、最大径は中位よりやや上に位置する。頸部はあまり締まらない。一次口縁部は短く外反し、二次口縁部は直線的に開き、内端部をつまみ出し上端は水平面をなす。口縁部は内外面横ナデで、外面には先行するハケ目が見られる。胴部は内面ヘラケズリ、外面ハケ目。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色。

22～26は器台である。22～24は小型精製器台。22は立ち上がりが外反気味に直立し、端部は上方を向く。内底面は放射状のヘラミガキを行い、立ち上がり内面は横ナデ、外面は横ヘラミガキ、受部外面は風化が著しくヘラミガキが見えない。胎土は精良で色調は黄灰色を呈す。23は立ち上がりが外反し、端部は外側を向く。全体的に調整が不明瞭だが、受部外面には横ヘラミガキが見られる。胎土は精良で色調は肌色を呈す。24は直線的に開く裾部。内面はハケ目後ナデ。外面はハケ目後に疎らな横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は橙肌色を呈す。25は小型の山陰系鼓形器台である。突帯はない。内面は横ヘラケズリ、外面と端部内面は横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。26は小型器台の受部。内外面に細かい横ヘラミガキを行い、内面には先行するハケ目が残る。胎土は精良で色調は黄灰色を呈す。

27・28は半島系の土器である。27は短い円柱状の甑把手である。全面指ナデ整形を行う。胎土に砂粒を若干含み色調は淡黄褐色を呈す。焼成は軟質で土師器に近い。28は外面に小さな斜格子タタキを行う軟質土器。内面は風化が著しく器表が剥離するが、ナデか。胎土に砂粒を若干含み色調は淡黄褐色を呈す。

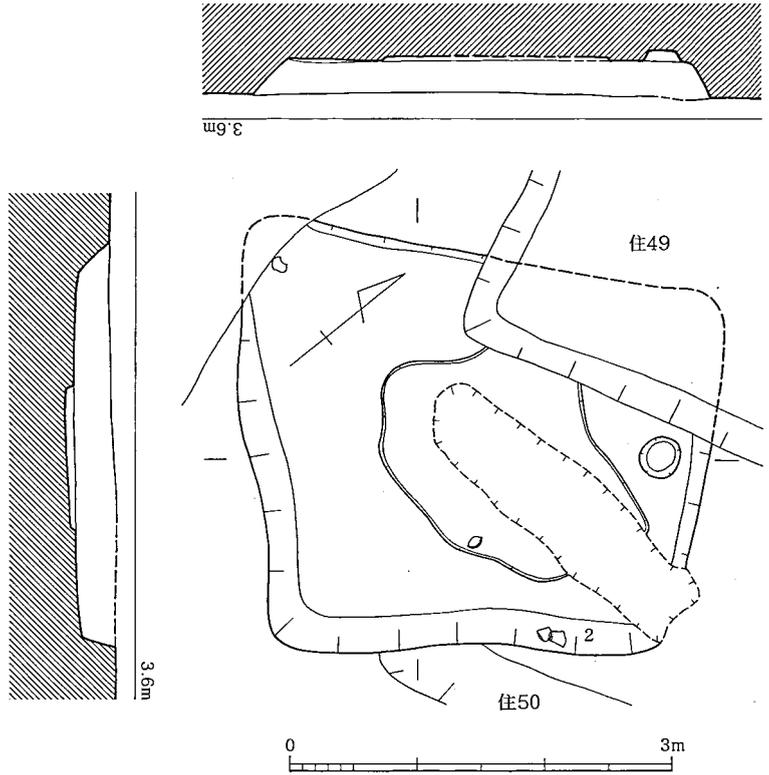
51号竪穴住居跡 (図版24、第116図)

I区北1で検出した竪穴住居跡である。49・50・52号竪穴住居跡と重複しており、新旧関係では49号竪穴住居跡より古く、50・52号竪穴住居跡よりも新しい。この重複や攪乱によって一部が失われるものの、ほぼ全体の形状は把握できる。南壁長3.4m、東壁長3.1mを測り、ややいびつな方形プランとなる。総面積は11.1m²を測り、住居跡としては小型のものである。床面はほぼ水平となり、遺構面からの深さは30cmを測る。床面中央で、長軸240cm、短軸190cm、深さ5cmを測る不整形の窪みを検出した。また北東壁際で、径30cm、深さ10cmのピットを検出した。

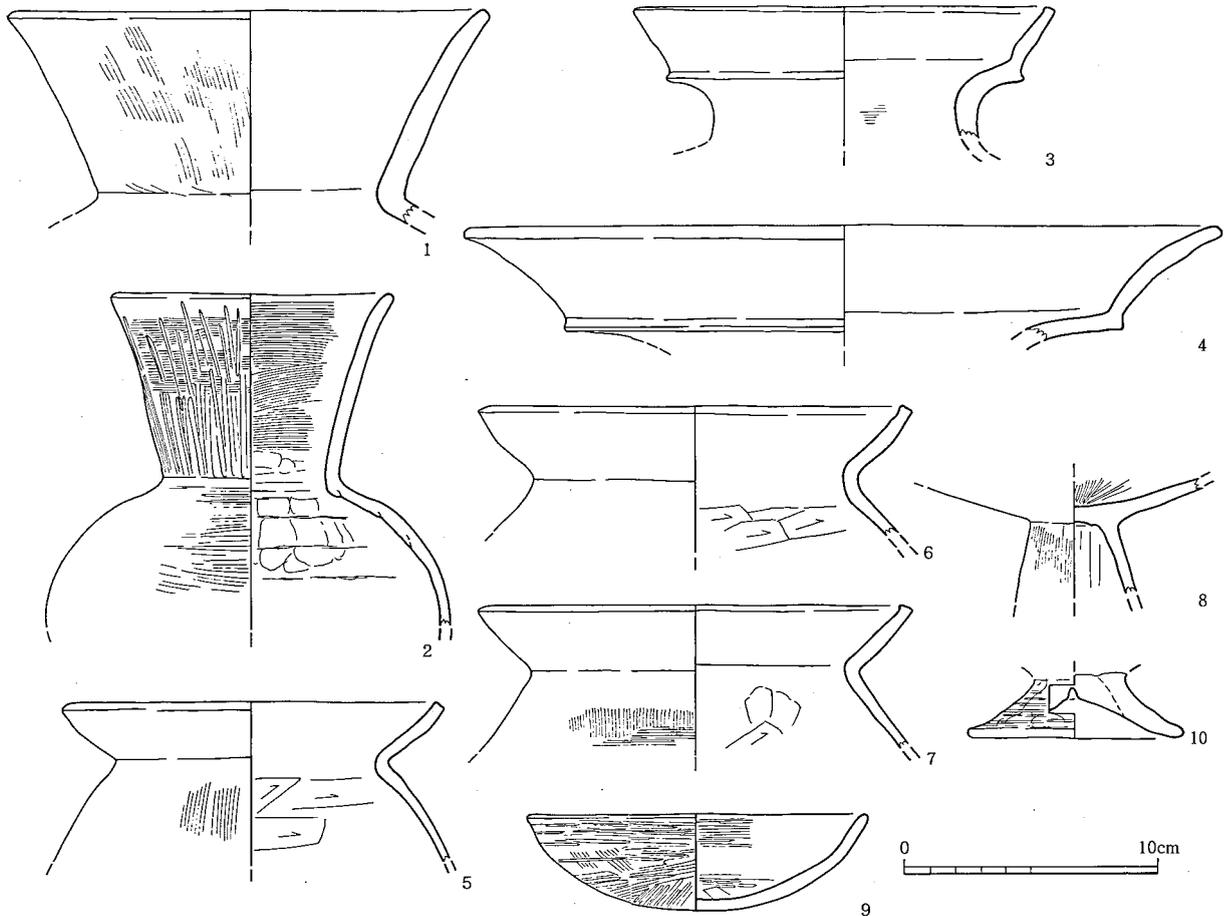
出土遺物はあまり多くない。図示した土器のうち、2は東壁際の床面から20cm程上層から出土、それ以外は覆土から出土した。

出土土器 (図版60、第117図)

1~4は壺である。1は畿内系直口壺。口縁部はわずかに外反しながら開き、上端は面をもつ。内外面横ナデ調整で、外面には先行する縦ハケ目が観察される。胎土に砂粒をやや多く含み色調は黄灰褐色を呈す。2は中型の直口壺。肩部は丸味を帯び、球形の体部をなすと思われる。頸部は強く締まり、口縁部はやや外反しながら長く伸びる。口縁部内面は横ハケ目、外面はハケ目後に縦ヘラミガキを行うが、上半は間隔をあけて暗文状にヘラミガキを行うため先行するハケ目が明瞭に観察される。肩部内



第116図 51号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第117図 51号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

面は指ナデを行い、粘土接合痕が明瞭に残る。外面は不明瞭な横ヘラミガキ。胎土に砂粒を若干含み色調は橙肌色を呈す。3は山陰系の二重口縁壺。頸部が締め、短い円筒状をなす。一次口縁部は強く外反し、二次口縁部は直線的に開く。端部はやや面をなす。全面横ナデ調整を行うが、頸部内面には先行する横ハケ目がわずかに残る。色調は黄灰褐色。4も二重口縁壺。一次口縁部は水平近くまで強く開き、二次口縁部も外反しながら大きく開く。端部は丸くおさめる。調整は全面横ナデを行う。胎土に砂粒を若干含み色調は薄黄灰色を呈す。

5~7は布留系の甕である。5は肩が張らず口縁部は内湾しながら開く。端部は上方につまみ上げる。色調は黄灰褐色。6・7も口縁部が内湾しながら開き、内端部をわずかにつまみ出す。どちらも色調は黄灰褐色。6の口縁部外面には煤が多く付着する。

8は高坏である。坏部内面には放射状ヘラミガキが行われる。柱部内面は縦ナデ、外面は若干風化しており縦ハケ目のみが見られる。胎土は精良で色調は明黄茶色を呈す。

9・10は鉢である。9は直口縁の浅い鉢。内外面ヘラミガキを行う精製品である。外面にはヘラミガキに先行するハケ目、ヘラナデが残る。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。10は精製脚付鉢の脚部。内面は横ナデ、外面は横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は明茶色を呈す。内頂部に軸受孔を有す。

52号竪穴住居跡 (図版25、第118図)

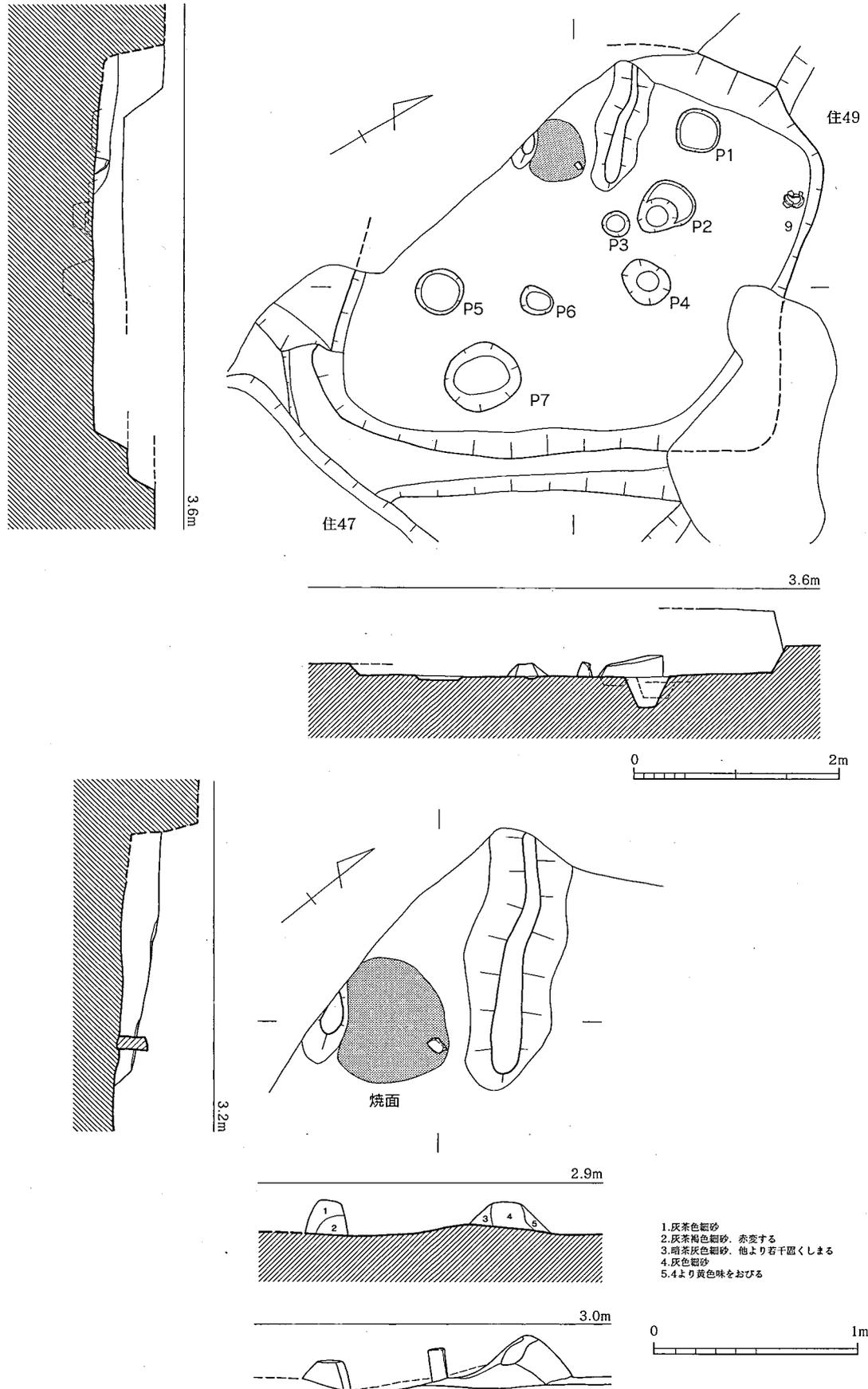
I区北1で検出した竪穴住居跡である。51・52号竪穴住居跡と重複しており、これらの中では最も古い。攪乱によって一部を失うものの、ほぼ全体の形状は把握できる。推定で南東壁長4.3m、北東壁長3.6mに復元され、北東-南西方向にやや長い長方形プランとなる。床面はほぼ水平をなし、遺構面からの深さは63cmを測る。北西壁際のほぼ中央で、カマドを検出した。床面上ではP1~P7のピットを検出したが、これらのうちP1・P3・P5・P6は非常に浅く、支柱穴とは考えがたい。P7はカマドの対面の壁際に位置し、カマド対面土坑と呼ばれるものが想定される。径70cm、深さ20cmを測る。残るピットは支柱穴の可能性のあるものの、配置が明確でなく確定には至らなかった。P2は径35cm、深さ20cm、P4は径40cm、深さ30cm。

52号竪穴住居跡カマド (図版25、第118図) 住居跡の北東壁際のほぼ中央に造り付けられるカマドである。右袖はほぼ全体の形状が分かるものの、左袖は攪乱で破壊され、一部が残存するに過ぎない。また煙道が壁の中央から外に出る構造だったのか、それとも西側のコーナーにまで伸びる構造であったかは不明である。右袖は長さ130cm、幅50cm、高さ25cmを測る。カマドの内部には、長軸60cm、短軸50cmの範囲で火床が認められる。また支脚が遺存しており、長さ20cm程の細長い角礫を使用する。支脚の位置に対して火床の範囲にやや疑問が残る。

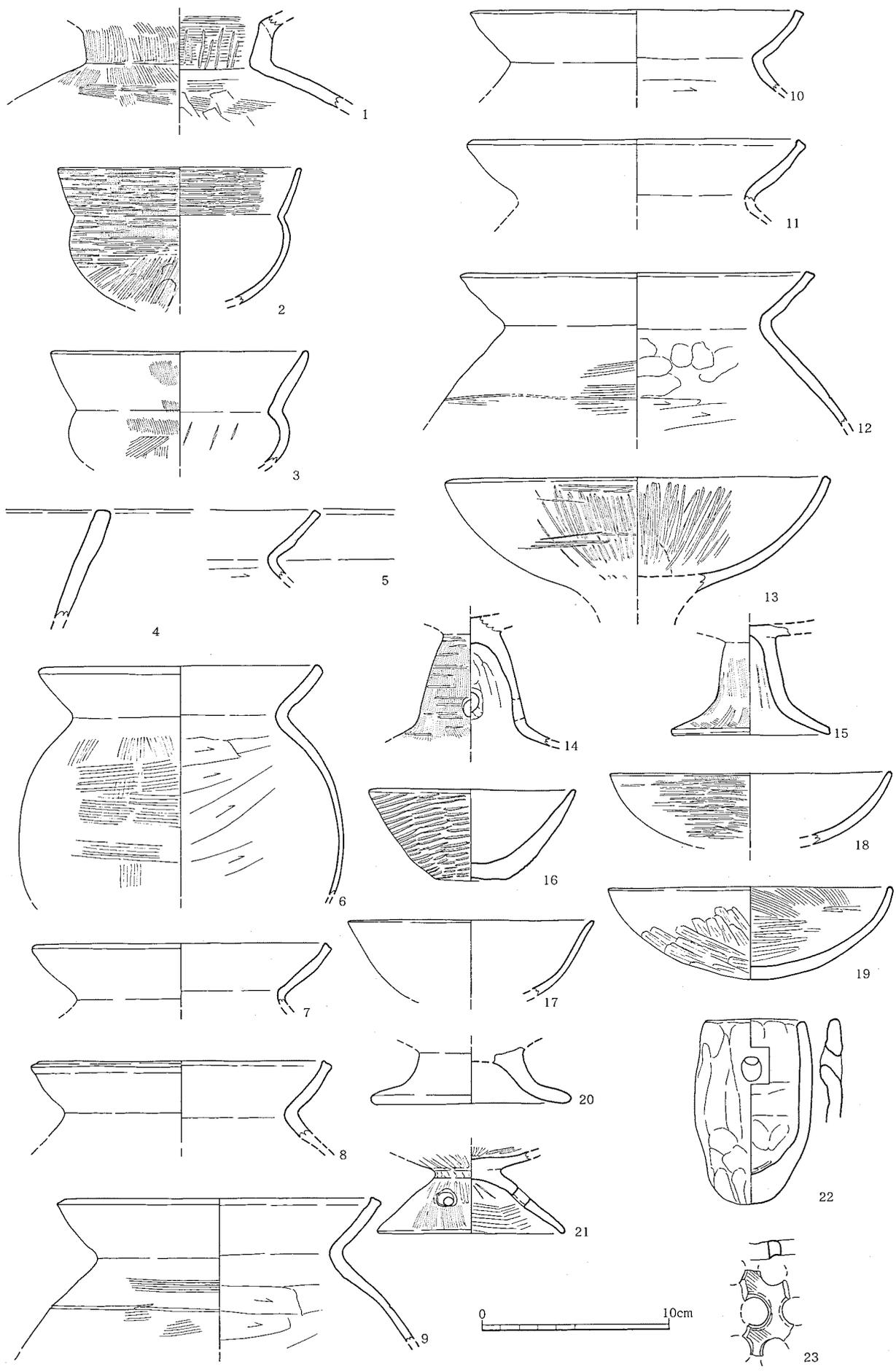
図示した出土土器のうち、13・20はカマド覆土から出土、7はカマド袖内から出土、9は北隅の床面直上から出土した。これら以外は覆土から出土した。

出土土器 (図版61・86、第119図)

1は二重口縁壺の頸部であろう。肩は大きく張り頸部は短い筒状を呈す。内外面共ハケ目を行うが、頸部内面は細くて疎らな縦ヘラミガキを行う。胎土の生地は肌理が細かく精良だが粗砂を若干含む。色調は赤茶色を呈す。接合がうまくいっておらず、断面で明瞭に観察できる。2・3は小型丸底壺である。2は体部内面は横ナデ、それ以外は細かいヘラミガキを行う精製品である。外面にはヘラミガキ前の縦ハケ目が観察される。胎土は精良で色調は黄橙色を呈す。3は内面にナデ、外面に縦ハケ目



第118図 52号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



第119图 52号竖穴住居迹出土土器实测图 (1/3)

を行う粗製品。肩部内面にはヘラ状の工具痕が残る。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。

4～12は甕である。4は在来系の甕口縁部。あまり開かず直線的に伸び、端部は平坦面をなす。内外面横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。5は布留系甕の口縁部片である。内湾気味に開き、端部はシャープな面をなす。色調は黄灰色。6は丸味を帯びた胴部の小型甕。口縁部は器壁が厚く、端部は丸い。胴部外面のハケ目は粗く雑なものである。胎土に粗砂を若干含み色調は赤茶色を呈す。外面には煤が付着する。7は口縁部が内湾し、端部はシャープな面をなす。色調は黄灰褐色を呈す。8は内端部をつまみ出す。色調は黄灰褐色。9は肩が張らず口縁部は内湾気味に開き内端部をわずかにつまみ出す。肩部には一条の沈線を巡らせる。色調は黄灰褐色。10は屈曲部内面に明瞭な稜を有し、口縁部は内湾して開き、端部はシャープで水平に近い面をなす。色調は黄灰褐色を呈し口縁部外面には煤が付着する。11は口縁部がわずかに内湾して大きく開き、内端部のつまみ出しは丸味を帯びる。色調は黄灰褐色。12は肩部が直線的で口縁部の内湾度が弱く、端部は水平に近い面をなす。肩部には一条の沈線を巡らす。肩部内面には指圧痕が明瞭に残る。色調は黄灰褐色。

13～15は高坏である。13は坏部が内湾しながら開き、端部は面をなす。内外面に粗雑な縦ヘラミガキを行い、外面にはさらに横方向の疎らなヘラミガキを行う。胎土は高坏にしては粗く、色調は黄灰褐色を呈す。14はエンタシス状に中膨らみとなる柱部。内面は縦ナデ、外面は細かい縦ハケ目後に疎らな横ヘラミガキを行う。屈曲部のやや上に2ヶ所穿孔を行い、半乾燥時に穿孔するため内面の孔周辺は器表が剥離する。胎土は精良で色調は黄肌色を呈す。表面には化粧土を塗布する。15は小型の脚部。内面縦ナデ、外面縦ハケ目。胎土は精良で色調は明橙肌色を呈す。

16～21は鉢である。16は小さな平底となる小型の鉢。内面はナデ、外面は螺旋状タタキ、底面はナデ。胎土に粗砂を若干含み色調は明黄灰色を呈し、焼成は良くなく断面が黒色となる。17は体部上半が丸味を持たず直線的に開く。器壁は薄い。内外面ナデ仕上げである。胎土に砂粒を若干含み色調は肌色を呈す。18は精製品。内面は横ナデ、外面は縦ハケ目後に細かい横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は赤茶色を呈す。19は粗製品。外面はナデの後に下半部をヘラナデする。内面はハケ目後に内底部のみ横ヘラミガキ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。20・21は脚付鉢の脚部である。20は裾部がさらに外反して大きく開き、端部は丸くおさめる。全面横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は赤褐色を呈す。強い二次被熱が認められる。21は直線的に開く脚部である。内面は横ハケ目、外面は縦ハケ目後に縦ヘラミガキを行う。鉢部内面もヘラミガキ。胎土は比較的精良で色調は茶灰色を呈す。

22は蛸壺である。底部は丸く体部から口縁部にかけては直立する。内外面指ナデ調整を行う。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。

23は半島系の多孔式甕底部片である。内面はナデ、外面はハケ目調整を行う。穿孔は内外両側から行っているようである。胎土に砂粒を若干含み色調は黒褐色を呈す。黒褐色なのは二次被熱のためか。焼成は軟質で土師器に近い。

53号竪穴住居跡 (図版25、第120図)

I区西5・6で検出した竪穴住居跡である。36～38号竪穴住居跡と重複しており、38号竪穴住居跡より新しく36・37号竪穴住居跡よりも古い。住居跡の西側、南側が調査区外へと続いており全体の形状は不明だが、焼土の位置等も考慮すると、南北に長い長方形プランになるものと思われる。

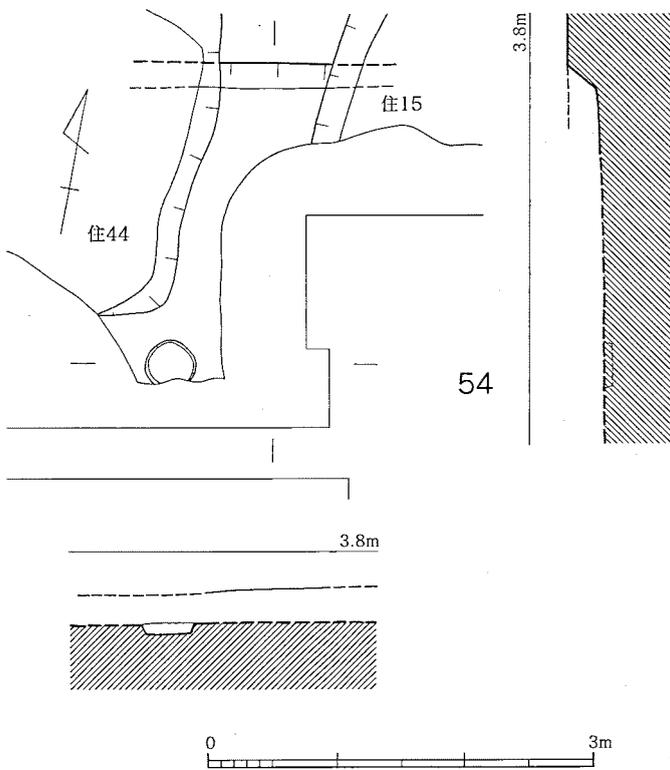
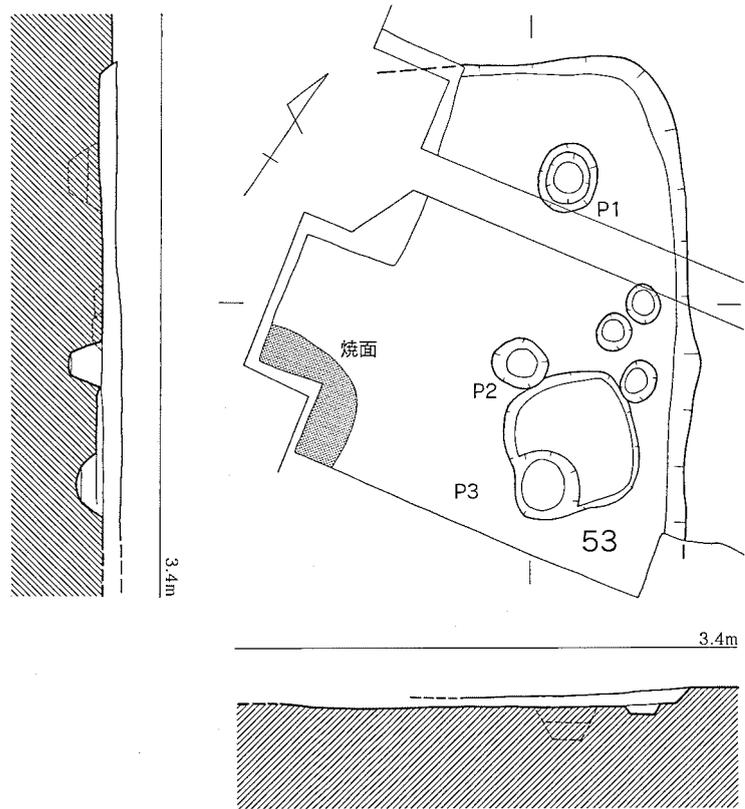
床面はほぼ水平をなし、遺構面からの深さは10cmを測る。住居跡南側で焼土を検出したが、付近には粘土塊も検出しており、カマドの一部であることには間違いない。校舎基礎の存在が悔やまれる。床面上ではいくつかのピットを検出したが、このうちP1～P3は支柱穴の可能性が高い。4本支柱の構造を考えると、P1とP3が支柱穴となる可能性が高い。P1は径55cm、深さ25cm、P2は径40cm、深さ30cm、P3は径50cm、深さ25cmを測る。

図示した土器のうち、1・4・5・7・9はカマドの周辺から出土した。それ以外は覆土からの出土である。他に鉄鏝が出土している。

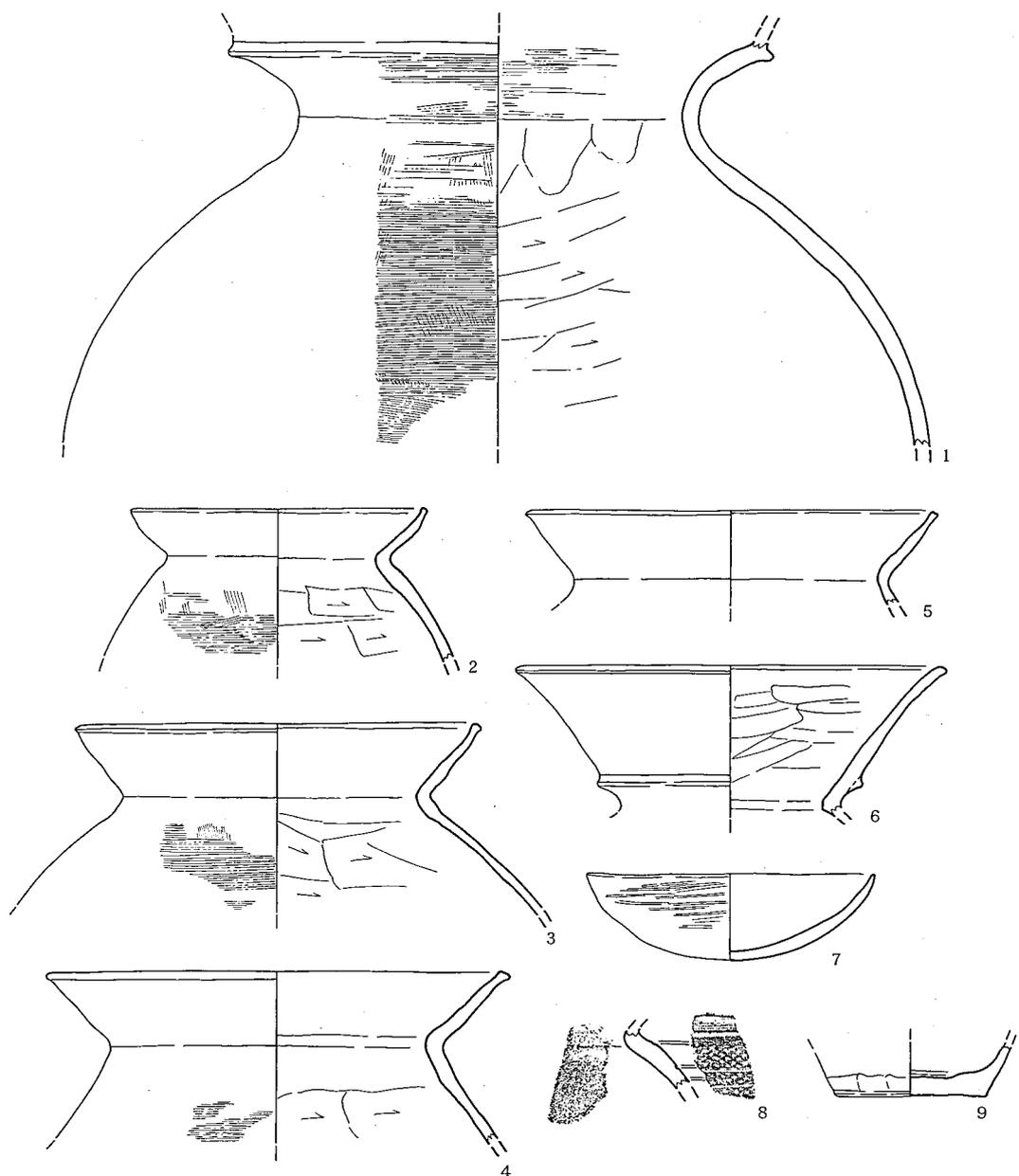
出土土器 (図版61・86、第121図)

1は山陰系二重口縁壺である。最大径がやや下であり、そのため肩は丸味が少ない形状となる。一次口縁部は強く外反するが水平になるまでには至らない。屈曲部外面の突帯はあまりシャープではない。胴部内面は横ヘラケズリ、外面は横ハケ目、頸部内面は横ハケ目後横ナデ、外面は横ハケ目後横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。

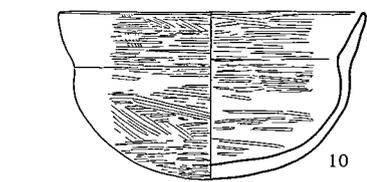
2～5は布留系甕である。2は肩が張らず、口縁部は内湾しながら開く。端部は器壁が薄く丸味を帯びる。色調は内面肌灰色、外面黄灰褐色を呈し胴部の外面には煤が付着する。3はやや肩が張り、口縁部は内湾しながら開く。器壁が薄い。色調は灰黄褐色を呈す。4は肩



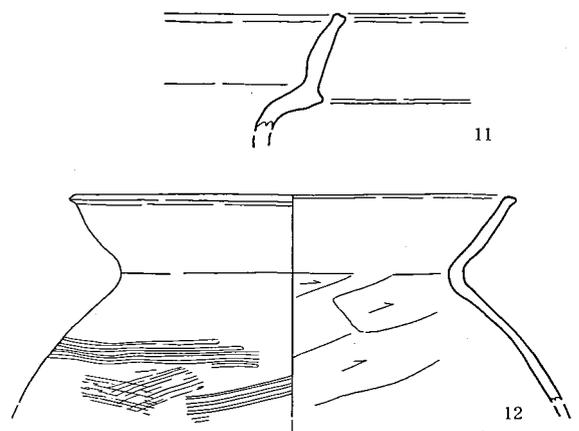
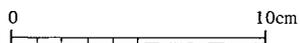
第120図 53・54号竪穴住居跡実測図 (1/60)



住53



住54



住55

第121图 53~55号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/3)

が張らず、胴部に比べて口縁部の径が大きい。口縁部は直線的に開き端部はやや器壁が薄く面をなす。胎土は他の布留系甕に比べて肌理が細かく、色調は肌灰色を呈す。外面には煤が付着する。5も口縁部の内湾度が弱く、口縁端部は器壁が薄く小さな面をなす。色調は肌茶色を呈し、外面には煤が付着する。

6は山陰系の鼓形器台である。内面は横方向の太いヘラミガキ、外面は横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。

7は浅い小型精製鉢。内面は風化が進み調整不明。外面は横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は黄肌色を呈す。

8・9は半島系の土器である。8は軟質の壺肩部片。外面は小さな斜格子タタキの後に平行沈線を巡らす。頸部は強い横ナデを加え、条線が残る。内面はナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は内面灰褐色、外面黒褐色を呈す。9は軟質の小型平底鉢である。内面は横ナデを行うが、回転ナデかどうかは良く判らない。外面も横ナデで、体部下端のみ横方向の弱い静止ヘラケズリ。底面も静止ヘラケズリを行う。胎土に石英、長石等の粗砂粒を若干含み、胎土の粗さが目立つ。色調は内面黄灰色、外面灰褐色を呈す。焼成は良好で堅く焼き締まる。内面にはわずかに赤色の付着物が見られ、赤色顔料の可能性はある。

54号竪穴住居跡 (第120図)

I区北2で検出した竪穴住居跡である。15・44号竪穴住居跡と重複しており、これらの中では最も古い。また校舎の基礎によって大きく攪乱を受けるため、検出できたのはわずかな部分に過ぎない。平面形や規模等は不明である。遺構面から床面までの深さは25cmを測る。また床面上の南側で、径40cm、深さ10cmのピットを検出した。大半が破壊されていることもあり、出土遺物は非常に少ない。

出土土器 (図版61、第121図)

図示できるものは1点しかない。10は精製の小型丸底鉢である。体部は丸く頸部は締まりがない。口縁部は短く開き、屈曲部の内面には稜を有す。調整は内外面横ヘラミガキを行い、体部内面の下半はヘラミガキが疎らになる。外面にはヘラミガキに先行するハケ目が残る。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。

55号竪穴住居跡 (第122図)

I区中5で検出した竪穴住居跡である。54号竪穴住居跡からは18m南西の位置にある。29号竪穴住居跡と重複しており、大半を切られているために検出できたのは一部分に過ぎない。従って平面形や規模等は不明である。床面は東側がやや高くなっており、この付近の深さは10cm、西側で20cmを測る。大半が破壊されているため、出土遺物は非常に少ない。

出土土器 (図版61、第121図)

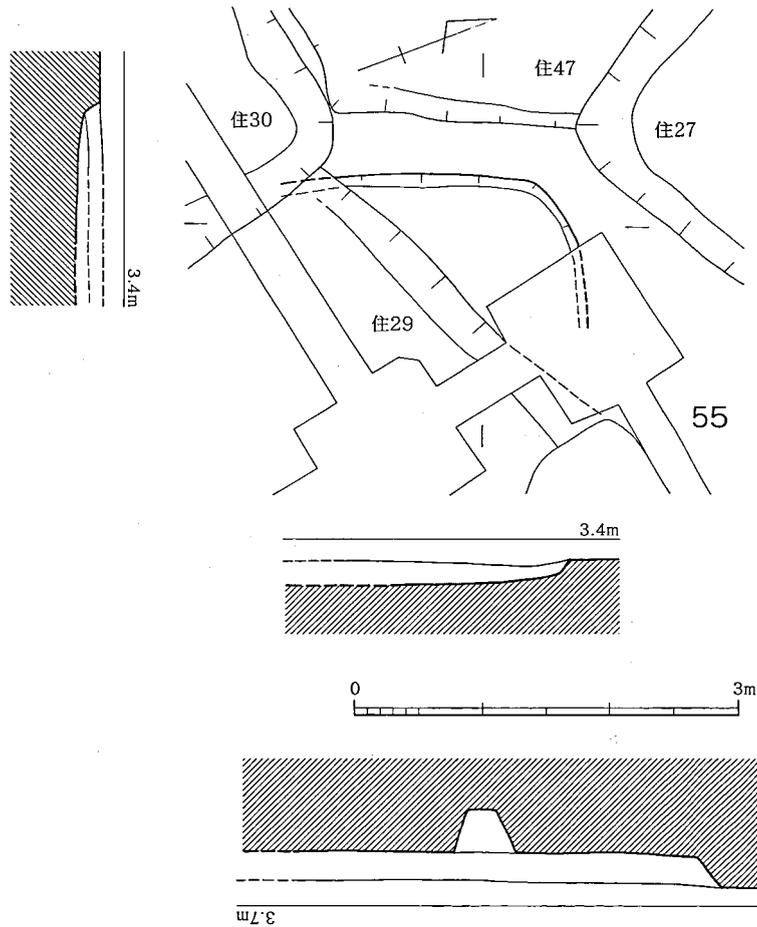
11は山陰系の二重口縁壺である。二次口縁部の端部は内外に肥厚し、上面はわずかに窪む。調整は全面横ナデ。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。

12は布留系の甕である。口縁部は内湾しながら開き、外端部をつまみ出す。肩部には櫛描直線文を雑に巡らせるが、端部が接しない。内面のヘラケズリは一部屈曲部にまで及ぶが、基本的には屈

曲部よりやや下がった位置までである。胎土は砂粒を若干含み色調は黄褐色を呈す。

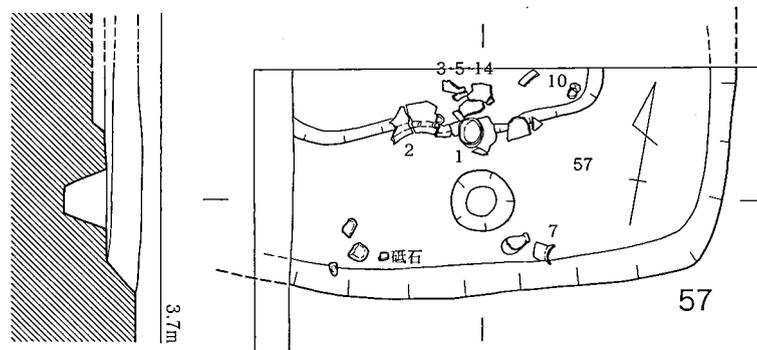
56号竪穴住居跡 (第88図)

I区西5で検出した竪穴住居跡である。他の住居跡と重複していないが大半が調査区外へと続いており、また攪乱を受けるため検出したのはわずか一部分に過ぎない。一応竪穴住居跡として報告するが、竪穴住居跡ではない可能性もある。遺構面から床面までの深さは15cmを測る。遺物は数点出土したが図示できるものはない。



57号竪穴住居跡 (図版26、第122図)

II区東1で検出した竪穴住居跡である。調査区外へと大きく続くため検出できたのは半分にも満たない。従って規模等は不明である。遺構面から床面までの深さは30cmを測る。床面の北側には不整形の段が検出され、床面とは約10cmの差がある。住居跡覆土は暗茶褐色細砂であるのに対し、この段の付近は黒褐色



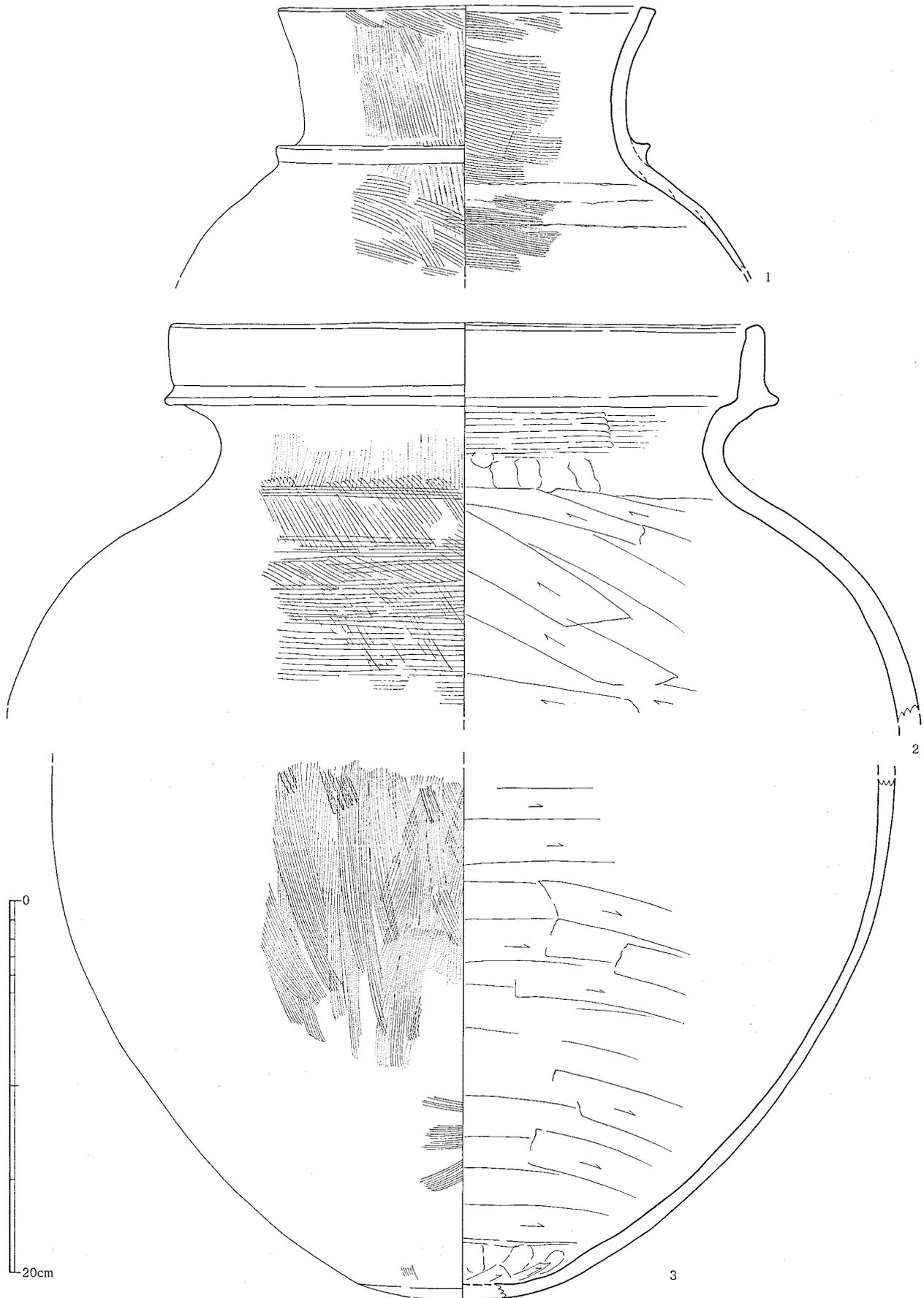
第122図 55・57号竪穴住居跡実測図 (1/60)

細砂が堆積する。これは近くに炉があり、これから排出された炭が覆土中に含まれるためであろう。この段の周辺から土器がまとまって出土した。これらは床面とほぼ同レベルである。この他南壁に近い位置で径45cm、深さ35cmのピットを検出している。

図示した土器のうち、1~3・5・10・14は北側の黒褐色細砂内から出土した。7は南壁際の床面直上から出土した。それ以外は覆土から出土した。他に碓石、刀子が出土している。

出土土器 (図版61・62、第123・124図)

1~6は壺である。1は在来系の直口壺。肩は丸味を帯び、屈曲部外面に高い三角突帯を巡らせる。口縁部は外反しながら伸び、あまり開かない。上端部は平坦面をなす。内外面とも粗いハケ目調整を行う。肩部内面には粘土接合痕が明瞭に観察される。胎土に粗砂を若干含み色調は茶灰色を呈す。



第123图 57号竖穴住居跡出土土器実測図① (1/3)

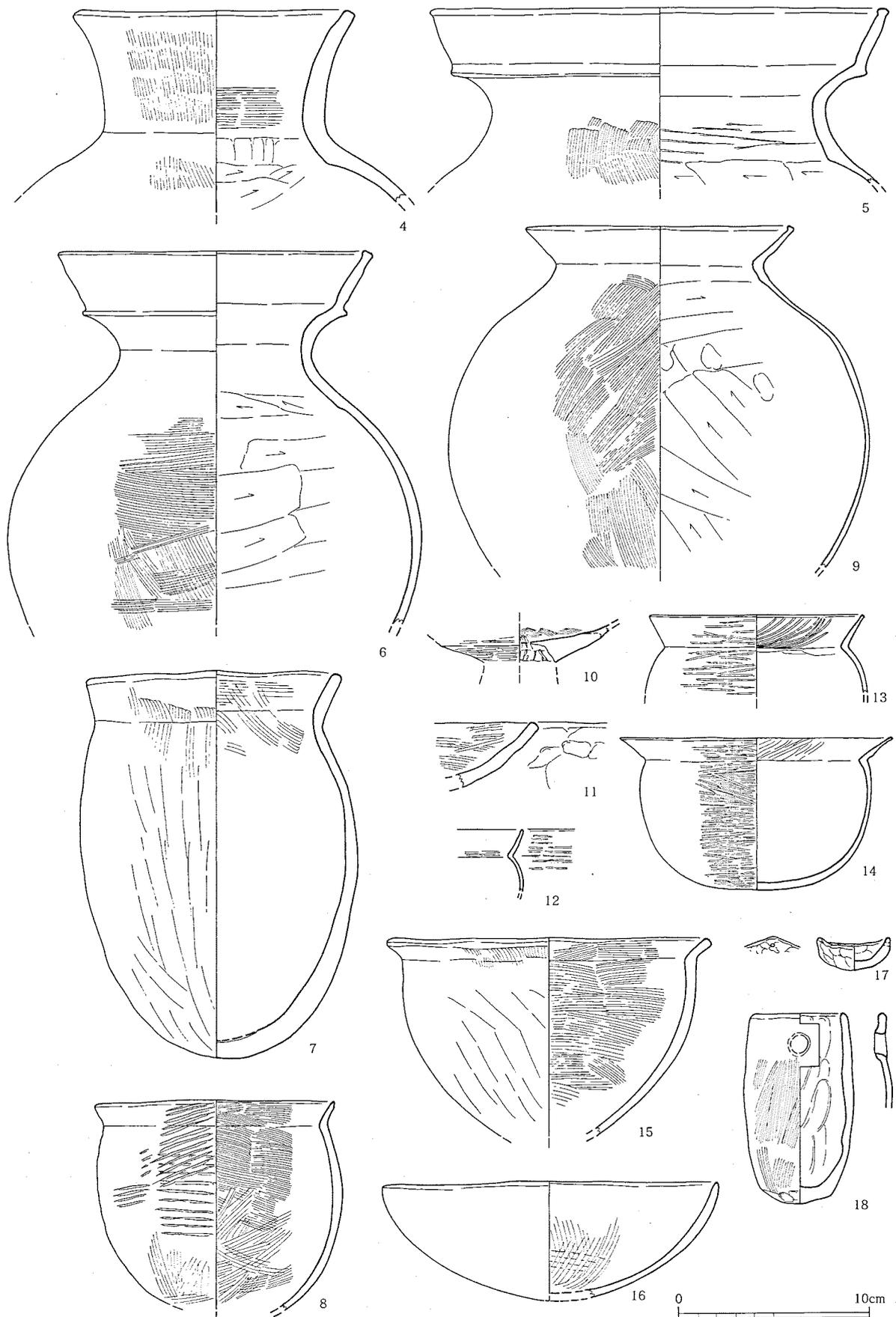
2・3は接合しないが同一個体。山陰系の大型二重口縁壺である。底部は小さな丸底で、胴部は倒卵形となり肩が張った器形となる。頸部は短く強く外反し、口縁部は短く直立する。端部は内傾する平坦面をなす。胴部内面は横ヘラケズリ、外面は上半が粗いハケ目、下半が細かいハケ目で一部に先行するタタキが残る。頸部内面は横ハケ目後に横ナデを行い、下方には指ナデが認められる。口縁部は横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。4は頸部が締まり、口縁部との境が不明瞭で口縁部は外反するがあまり開かずに伸びる。端部は面をなす。口縁部外面は縦ハケ目、内面の上半は横ナデ、下半は横ハケ目。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。5・6は山陰系の二重口縁壺である。5は頸部が短く締まりの弱いものである。口縁内端部を丸くつまみ出している。頸部内面には横方向の工具痕が残る。6は肩がやや下がった位置にある体部となる。二次口縁部は直線的に開き、内端部をつまみ出す。色調は暗黄灰褐色を呈す。

7～9は甕である。7は在来系の小型甕。底部は丸く胴部は長胴で口縁部は短く開きが弱い。端部は丸くおさめる。屈曲部は稜をなさない。胴部内面はナデ、外面は縦ヘラナデ、口縁部は内外面にハケ目が残る。胎土に粗砂を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。8は鉢に近い形状の小型甕。胴部はやや丸味を帯び長胴ではなく、口縁部は短く開く。端部は尖る。内面ハケ目、外面は粗いタタキ、底部付近は縦ハケ目を行う。胎土に砂粒を若干含み色調は暗茶灰色を呈す。9は頸が強く締まって壺に近い形状の甕。最大径は中位にあり、肩部が直線的でやや長くのびる。口縁部は直線的に開き、端部は内側に肥厚する。外面のハケ目は縦・斜ハケ目のみで布留系甕に特徴的な横ハケ目を使用していない。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。

10は高坏の坏部片である。脚との接合面には工具による刻目を配す。内面はハケ目後ヘラミガキ、外面は横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は黄灰色を呈す。

11～17は鉢である。11は内面横ハケ目、外面に指圧痕を残す粗製の鉢。器壁は厚い。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。12～14は外反口縁の鉢。12は頸部が内傾して鋭い稜をなし、口縁部は短く開く。器壁は極めて薄い。体部内面はナデ、口縁部内面は横ハケ目後横ナデ、外面は細かい縦ハケ目の後に横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。13も口縁部が短く直線的に開き、全体的に器壁が薄い。体部内面はナデ、口縁部内面はナデ後に斜めの細かい暗文を施す。外面は横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。14は完形品。底部は平底に近い丸底で体部は深い。頸部は内傾し、内面に鋭い稜をなす。口縁部は短く直線的に開き、端部は尖る。全体的に器壁が薄い。体部内面はナデ、口縁部内面は斜めの暗文、外面は細かいヘラミガキ。胎土は精良で色調は茶色を呈す。15は甕に似た形状で、小さな底部となるのではないかとと思われる。体部上半は垂直に立ち上がり、口縁部は短く開く。端部はやや面をなす。内面と口縁部外面はハケ目、体部外面は縦ヘラナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。16は浅い直口鉢。内底部には粗いハケ目が残るが、それ以外は比較的丁寧なナデ調整を行う。胎土に砂粒を若干含み色調は肌灰色を呈す。17は手握ねの小型鉢である。口縁端部の2ヶ所を把手状につまみ出し、その部分に小さな円孔を穿孔する。全面指ナデ調整を行う。胎土に砂粒を若干含み色調は暗灰色を呈す。

18は蛸壺である。器高の割には径が小さく、他と比べてスリムな形状となる。器壁も比較的薄い。内面は指ナデだが外面には縦ハケ目を行っている。胎土に砂粒をあまり含まず比較的良質で、色調は黄灰褐色を呈す。



第124图 57号竖穴住居跡出土土器实测图② (1/3)

58号竪穴住居跡 (図版26、第125図)

II区東2で検出した竪穴住居跡である。57号竪穴住居跡から3m南に位置する。他の住居跡と重複しないものの校舎の基礎によって大きく攪乱を受けるため、規模等は不明である。他の例から類推すると、東西に長い長方形プランとなる可能性が高い。床面は中央がわずかに低くなるものの、ほぼ水平につくられている。遺構面から床面までの深さは25cmを測る。床面上ではP1～P4のピットを検出したが、これらの中で支柱穴となる可能性のあるものはP2のみである。他のピットは非常に浅く、支柱穴とは認めがたい。P2は径40cm、深さ70cmを測る。他のものはいずれも深さ10cm程度である。住居跡の北東側ではカマドを検出した。

58号竪穴住居跡カマド (図版26、第125図) 住居跡の北東コーナーに付設されたカマドである。煙道が住居の周壁に沿ってのびる、いわゆるL字型タイプの構造を採る。カマド本体はコーナーから1.5mほど西側に位置し、主軸方向は住居の対角線上とほぼ平行する。すなわち住居の北壁にむかってカマド本体の主軸は斜めを向く。カマド本体のみで計測すると、右袖長80cm、幅27cm、高さ18cm、左袖長120cm、幅37cm、高さ18cmを測る。カマドの内部には土師器蛸壺を転用した支脚が底部を上にして遺存しており、ここから焚口にかけては焼面が広がっている。焼面の規模は長軸55cm、短軸30cmを測る。燃焼部の底面から支脚の底部までは約5cmの差があり、図上では支脚が浮いた様になっているが、これは焼面の焼土を完全に除去して当初の底面を検出した結果であり、検出した支脚はある程度焼土が堆積した段階で設置されていた事になる。

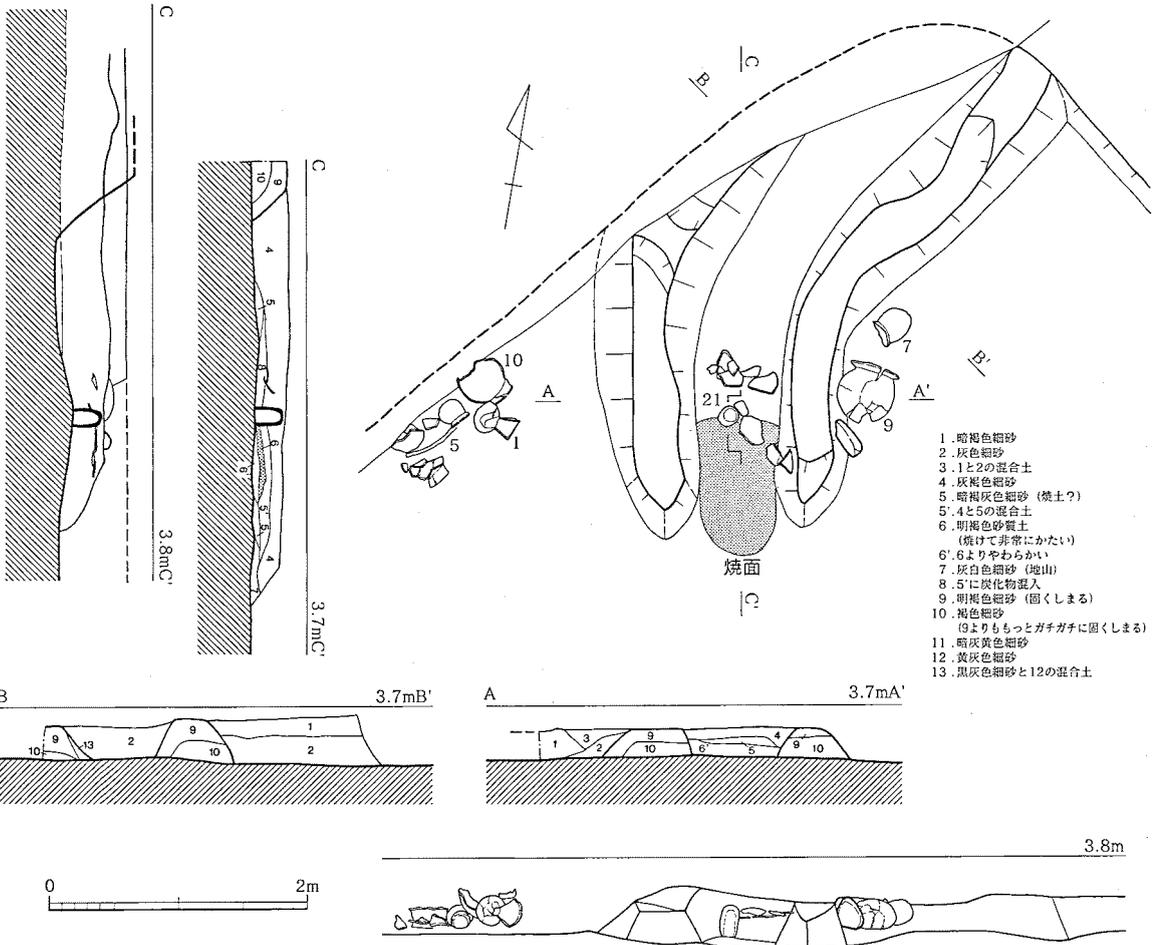
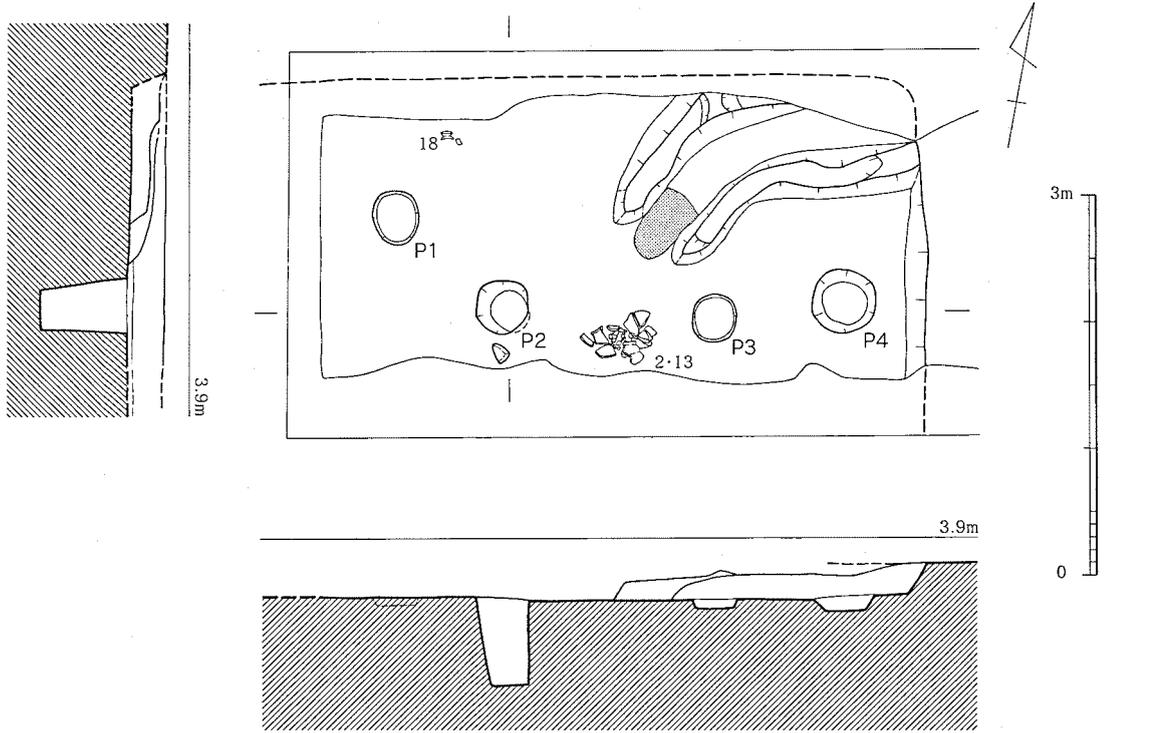
煙道は北壁沿いに160cm程東側に伸び、住居のコーナーへと続く。北側は攪乱を受けているが、ほぼ旧状は把握できる。煙道内部の幅は50cm、煙道と燃焼部の床面の高さはほとんど変わらない。カマドの構築には褐色細砂を使用し、非常に堅く締まる。

図示した土器のうち、7・9はカマド右袖南側の床面からわずかに浮いた状態で出土した。21はカマド支脚に使用されたものである。2・13はカマド焚口の前面で破砕した状況で出土した。15・22・23はカマド周辺から出土。1・5・10はカマド左袖の西側から一括して出土したものである。このうち5の小型甕は横転した状態で出土し、口縁部を中心に灰色の液体が固化したような不明物質が付着していた。これについては後述する。またこれら土器の他に軽石が出土している。

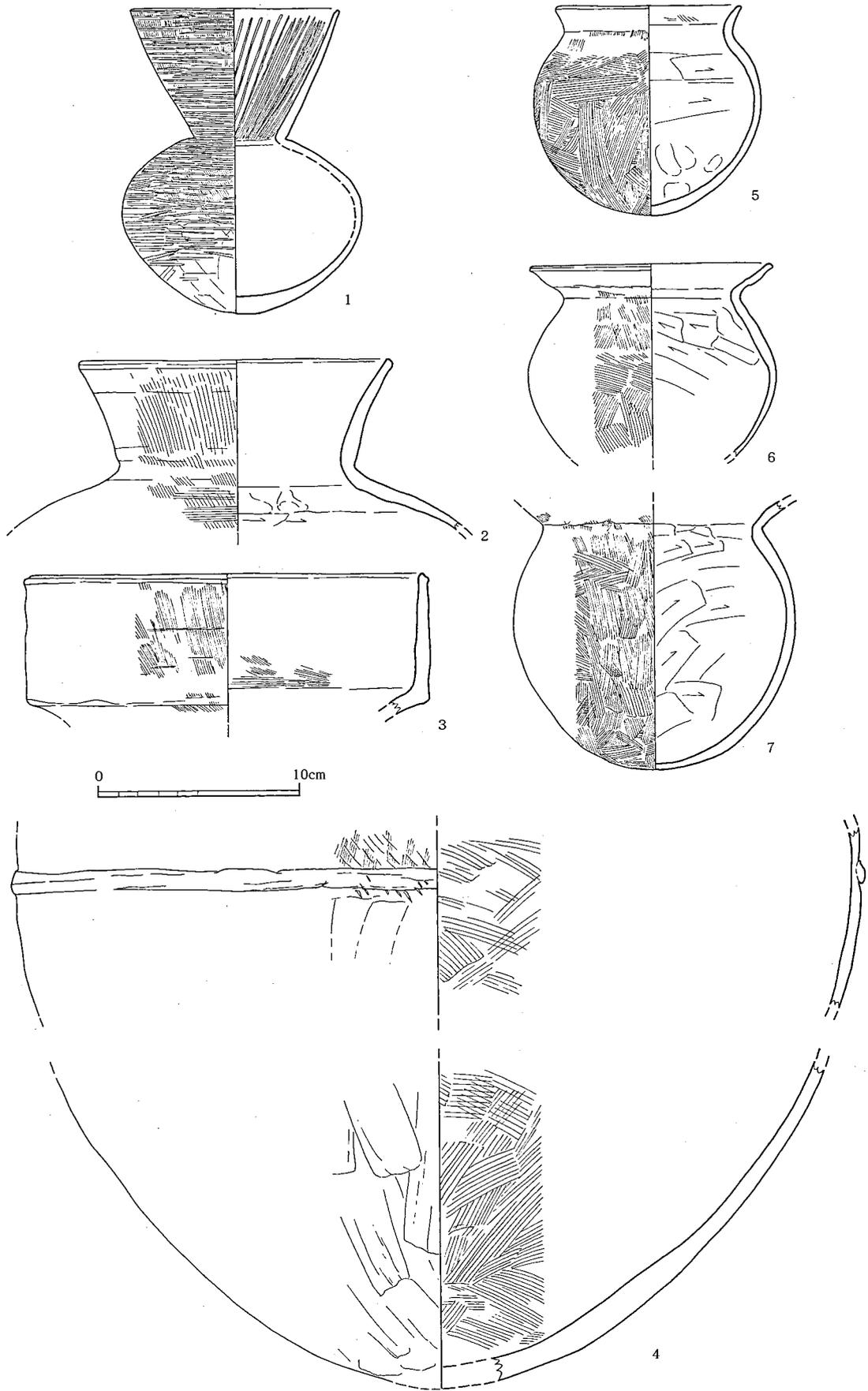
出土土器 (図版62～64・86・87、第126～128図)

1～4は壺である。1は畿内系の精製中型直口壺。胴部は球形で頸は強く締まり、口縁部は直線的に長く開く。口縁部内面は縦ヘラミガキによる暗文、外面は縦ハケ目後横ヘラミガキ、胴部外面は上半に縦ハケ目、下半にヘラナデを行った後に疎らな横ヘラミガキを行う。上半は密に行われるが、下半は疎らで底部付近は行われていない。胎土は精良で色調は茶色を呈す。2は畿内系の直口壺。肩は大きく張り口縁部は短く外反気味に開く。端部は丸くおさめる。口縁部内面は横ナデ、外面は粗いハケ目。胎土に砂粒を若干含み、色調は肌灰色を呈す。3は大型の二重口縁壺。口縁部は直立し、端部に強い横ナデを加えて窪ませる。屈曲部の外面には突帯を巡らさない。内面は横ハケ目後横ナデ、外面は縦ハケ目後横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。4は在来系の大型壺。底部は尖底気味の丸底。最大径に当たる位置に一条の低く雑な三角突帯を巡らせる。内面はハケ目、外面の下半はヘラナデ、上半はタタキ後ハケ目。胎土に砂粒を若干含み色調は肌灰色。

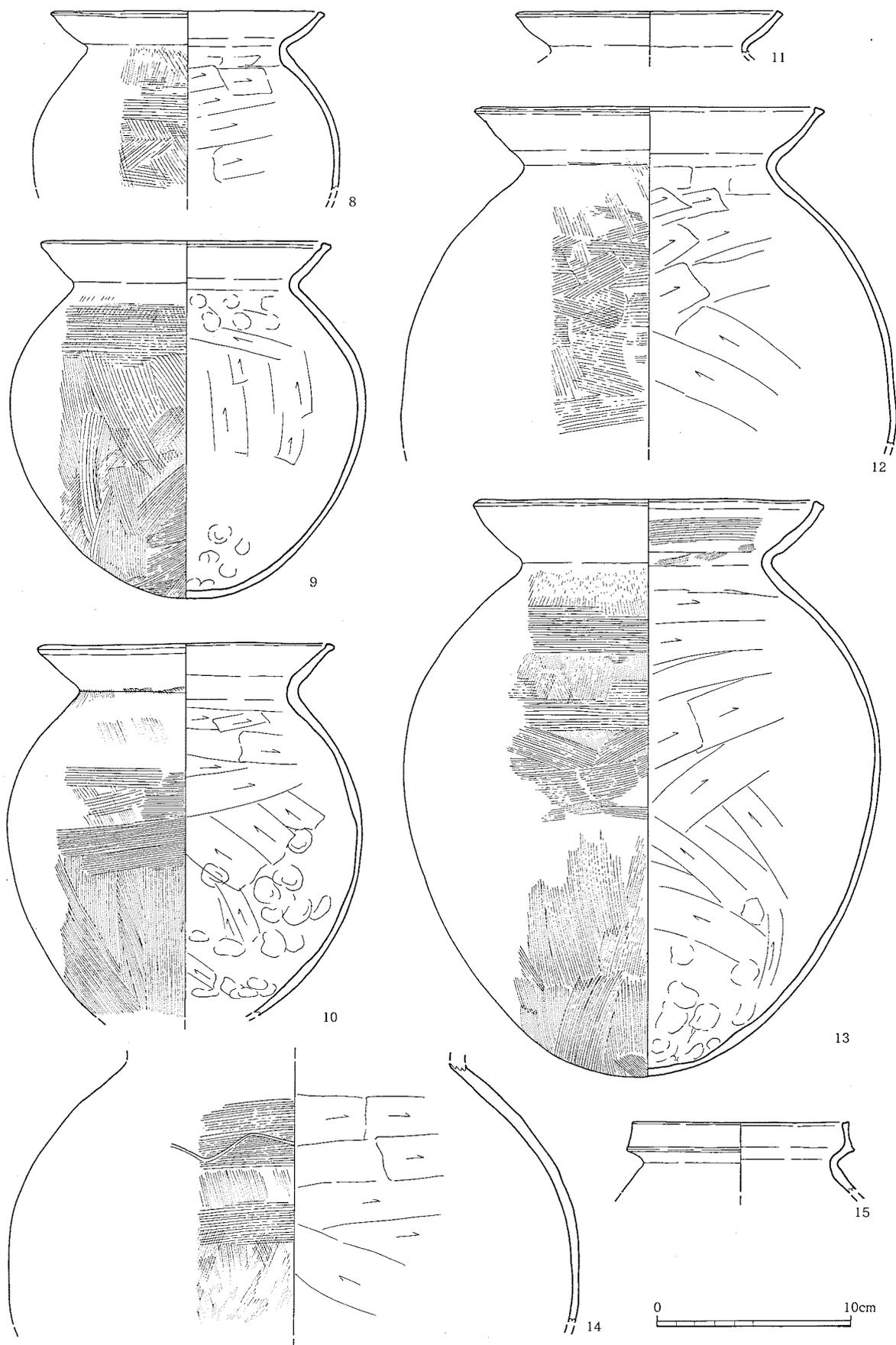
5は小型の甕で、短頸壺に近い形状となる。胴部は丸く、口縁部は短く外反し、端部は丸い。胴部内面は横ヘラケズリ、外面はハケ目。内底部には指圧痕が見られる。口縁部は横ナデ。胎土に砂粒



第125図 58号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



第126图 58号竖穴住居迹出土土器实测图① (1/3)



第127图 58号竖穴住居跡出土土器实测图② (1/3)

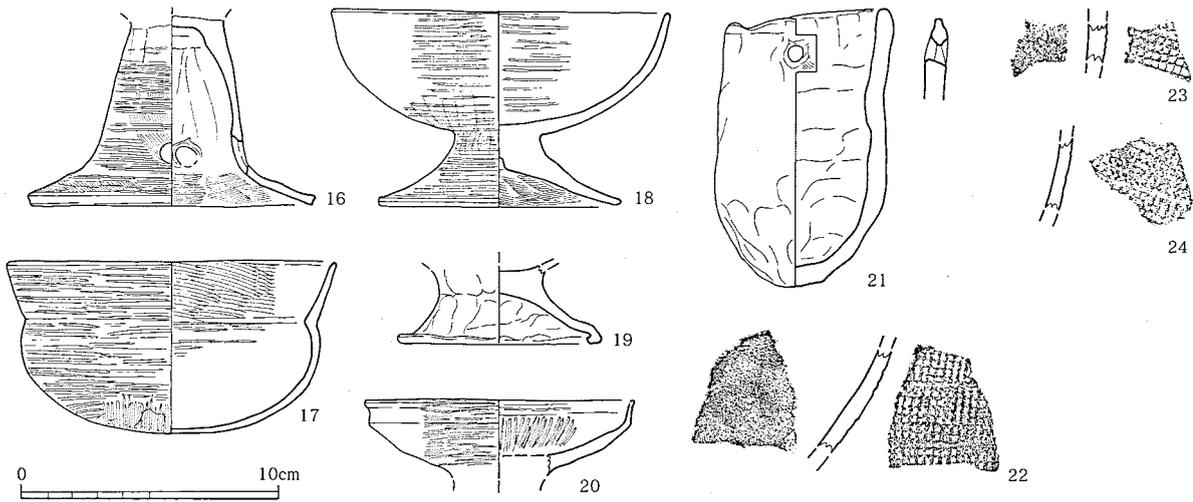
を若干含み、色調は黄褐色を呈す。先述したが、出土状況では口縁部に灰色の液体が固化したものが付着していた(図版87)。

この不明物質については、福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎氏に依頼し蛍光X線分析とX線回析分析を実施したところ、本物質は炭酸カルシウム(CaCO₃)である可能性が極めて高いという分析結果を得た。すなわち、修猷館高等学校の旧校舎基礎を建設中、何らかの理由でセメントが土中に流入し、土器の口縁部に付着した可能性が最も高いということになるだろうか。ただし調査時の見解では土器・不明物質ともに土中に完全にパックされた状態で、攪乱の可能性は無いと判断していた。他の可能性としては、考古資料において炭酸カルシウムを使用する場面、白色系の顔料や漆喰の材料などが考えられるとの指摘を頂いた。双方を念頭に入れておきたい。

6~14は布留系甕。6は小型の甕。肩は丸みを持たず直線的となり、最大径は中位に位置する。口縁部は中程から屈折したように内湾して開き、端部は丸味を帯びる。色調は黄灰褐色。二次加熱を強く受け、下半部は黒変する。7も小型の甕。内面へラケズリ、外面ハケ目。肩部の上半まで横ナデが及ぶが、先行するハケ目が明瞭に残る。色調は黄灰色。8は口縁部が内湾しながら開き、端部は面をなす。色調は黄茶色。9は最大径が中位よりやや上にある。肩は丸みを帯びず直線的である。口縁部はほとんど内湾せず開き、内端部を肥厚させる。内面はへラケズリで内底面には指圧痕が明瞭に認められる。外面はハケ目、口縁部は横ナデ。色調は黄灰褐色。胴部下半は二次加熱のため赤変する。10は若干長胴気味の倒卵形で最大径は中位よりやや上に位置する。口縁部は直線的に開き、屈曲部は緩い。端部は外側へとわずかに肥厚し、上端は面をなす。胴部内面はへラケズリで下半には指圧痕が多く認められる。外面はハケ目。色調は黄褐色を呈す。胴部下半は二次加熱のため赤変し、煤が付着する。11は内湾し内端部を丸くつまみ出す甕口縁部。色調は黄灰褐色。12は最大径がやや下に位置する。口縁部の径は胴部に対して小さい。口縁部はわずかに内湾し、内端部をシャープにつまみ出す。色調は黄灰褐色を呈す。外面の肩部以外に煤が付着する。13は長胴気味の倒卵形で最大径は中位よりやや上にある。頸部は締まり、口縁部は内湾しながら開き、内端部をつまみ出す。胴部内面はへラケズリを行い底部付近には指圧痕が見られる。口縁部内面は横ナデを行うが、先行する横ハケ目が残る。色調は黄褐色を呈し、外面の肩部以外に煤が付着する。14は布留系甕の肩部片。外面に一条のへラ描波状文を巡らす。色調は黄灰色を呈す。15は小型の吉備系甕。口縁部はやや内傾し、上端は水平面をなす。全面横ナデを行い、口縁部外面に横方向の明瞭な条線は見られない。胎土に細砂粒を若干含むものの比較的精良である。色調は黄灰褐色を呈す。

16は高坏の脚部である。柱部はエンタシス状に中膨らみとなり、裾部は直線的に開き端部はシャープな面をなす。柱部と裾部の境に明確な稜はもたない。屈曲部上に2ヶ所円孔を穿孔する。柱部内面は縦ナデ、裾部内面は横ハケ目、外面は縦ハケ目後に横へラミガキを行う。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。

17~19は鉢である。17は外反口縁の精製鉢。口縁部はほとんど内湾せず直線的に開き、屈曲部内面には稜を有す。体部内面はナデで屈曲部付近のみ数条の横へラミガキが見られる。口縁部内面は横ハケ目のみでへラミガキは観察されない。外面は横へラミガキを密に行う。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。18は精製の脚付鉢。鉢部は半球形で深みがある。脚部は外反気味に大きく開く。鉢部は内外面とも丁寧な横へラミガキ。脚部は内面横ハケ目、外面横へラミガキ。胎土は精良で色調は暗肌色を呈し、橙茶色の化粧土を塗布する。19は手捏ねの脚付鉢である。胎土は粗く、色調は黄



第128図 58号竪穴住居跡出土土器実測図③ (1/3)

灰褐色を呈す。

20は精製小型器台である。受部の立ち上がりは外反し、端部が外側を向く。内底面は放射状のヘラミガキを行い、その他は横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。

21は蛸壺である。底部は尖底気味で体部から口縁部にかけては直立する。全面指ナデ整形。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰色を呈す。

22～24は半島系の軟質土器である。22は外面正格子タタキ、内面ナデ。傾きは不明。胎土に砂粒を若干含み、色調は内面淡黄褐色、外面黒色を呈す。23・24も22と同一個体である。

59号竪穴住居跡 (図版27、第129図)

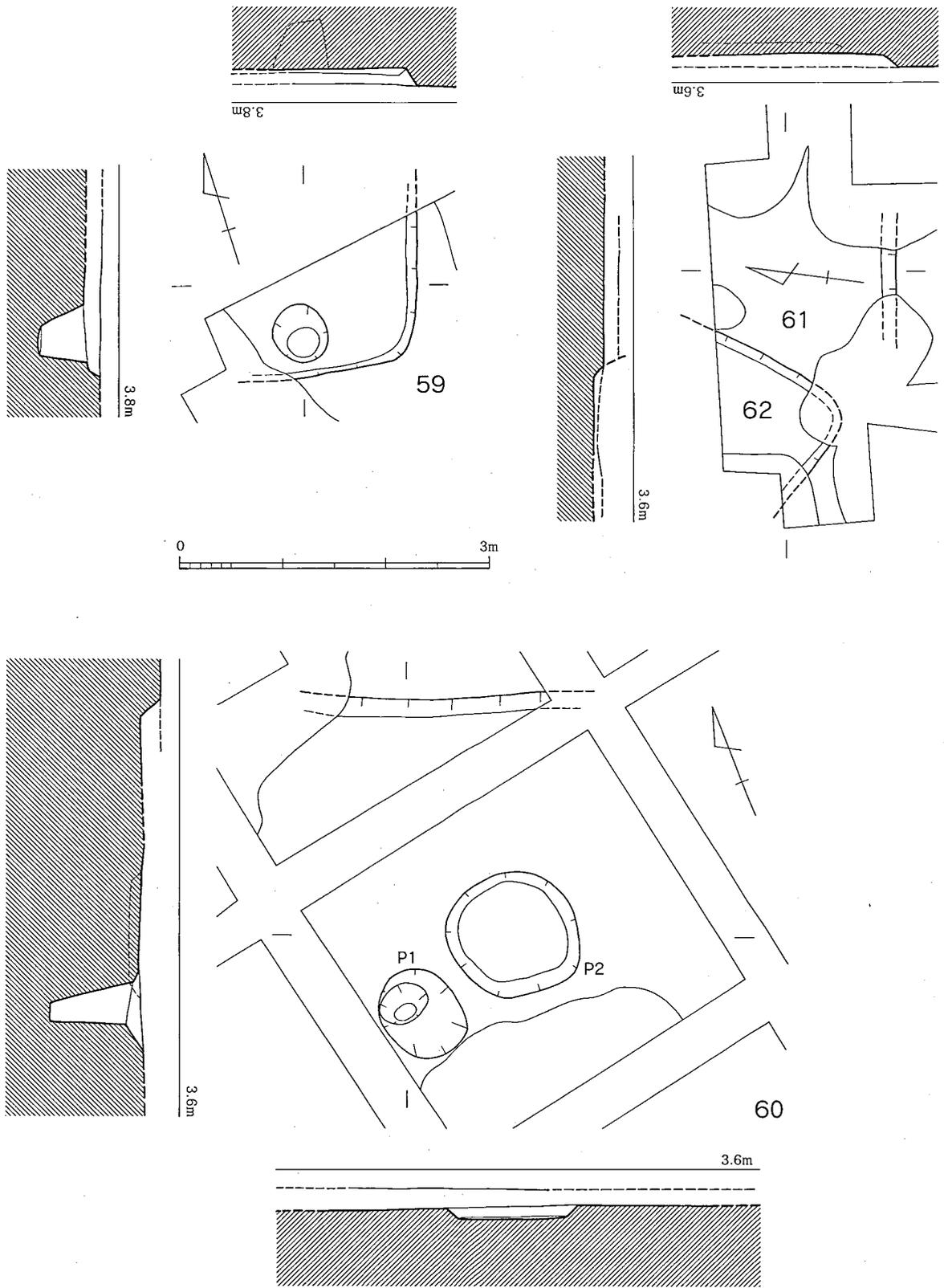
II区北4で検出した竪穴住居跡である。58号竪穴住居跡から8m北西に位置する。他の竪穴住居跡との重複はない。住居跡の大半が調査区外へと続いており検出できたのはコーナー部分のみに過ぎず、従って平面形や規模は不明である。床面はほぼ平坦で、遺構面からの深さは15cmを測る。床面上で径28cm、深さ25cmのピットを一つ検出した。出土遺物は非常に少ない。図示した土器の他に石錘が出土している。

出土土器 (図版64、第130図)

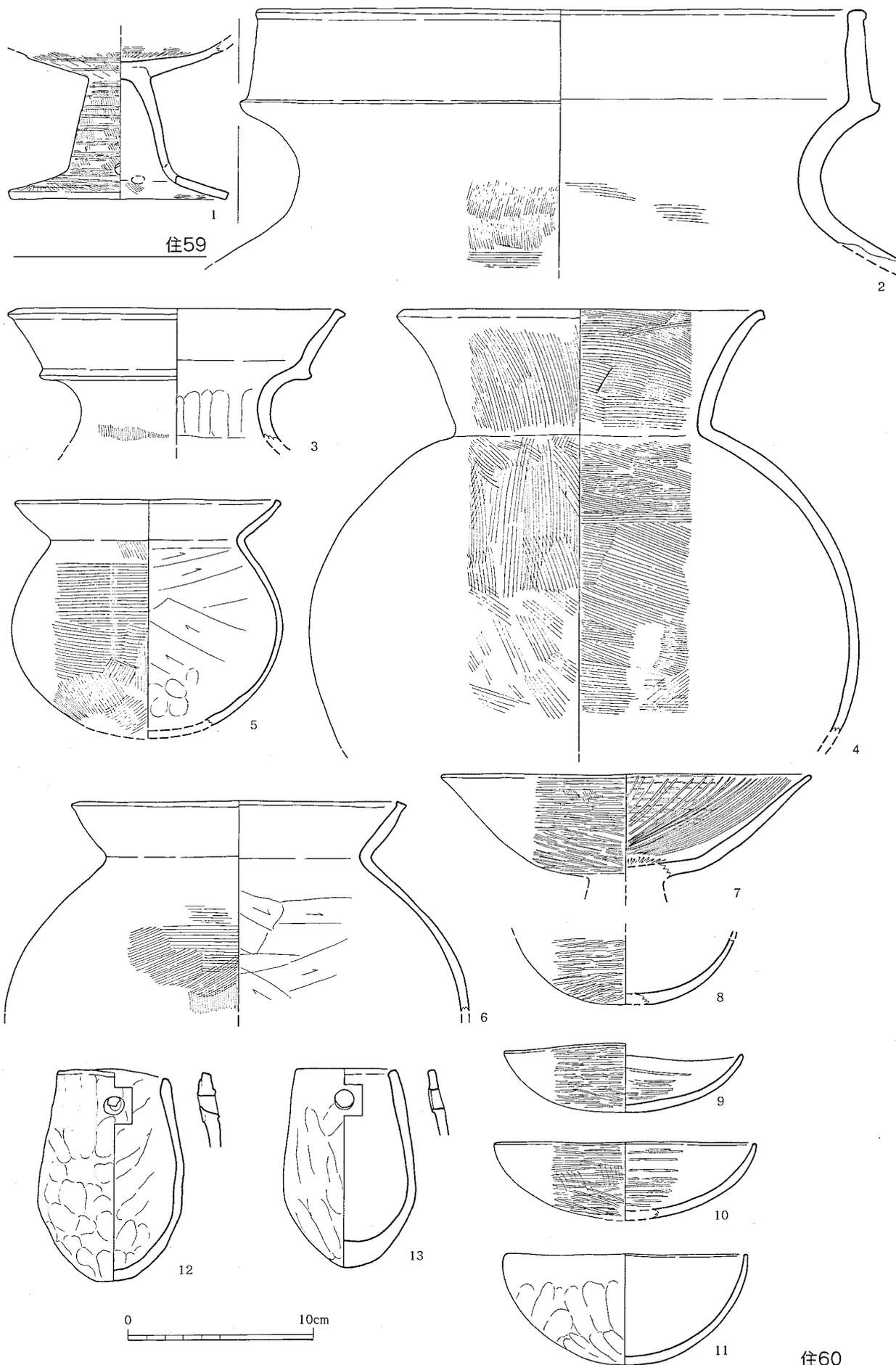
図示できたのは1点のみである。1は高坏である。柱部はエンタシス状に中膨らみとなり、裾は大きく開いて端部はシャープな面をなす。坏部下半は大きく開き、内面は水平となる。脚部の内面は横ナデ、外面は縦ハケ目後に疎らな横ヘラミガキを行う。坏部内面は放射状の暗文を施す。胎土は精良で色調は橙灰色を呈す。

60号竪穴住居跡 (図版27、第130図)

II区西4・5で検出した竪穴住居跡である。59号竪穴住居跡から約20m西に位置する。他の竪穴住居跡との重複はないものの、付近は校舎の基礎によって大きく攪乱を受けており、住居跡の旧状を知り得ない程である。床面はほぼ水平をなし、遺構面からの深さは20cmを測る。床面上ではP1・P2の二つのピットを検出した。P1は径60cm前後、深さ10cm、P2は径20cm、深さ50cmを測る。図示した土器は全て覆土からの出土である。他に軽石、鉄鏝が出土している。



第129図 59~62号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第130图 59·60号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/3)

出土土器 (図版64、第130図)

2~4は壺である。2は山陰系の大型二重口縁壺。口縁部はまっすぐに直立し、外端部を丸くつまみ出す。上端部は平坦面をなす。屈曲部外面の突帯は上方を向く。口縁部は横ナデ、頸部はハケ目後に横ナデ。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。3も山陰系の二重口縁壺。筒状の頸部を有し、一次口縁部は丸く外反する。二次口縁部は直線的に開き、外端部をつまみ出す。頸部内面には縦方向の指ナデが観察される。色調は黄灰褐色を呈す。4は在来系の直口壺である。胴部は球形で頸部は締まり、口縁部は外反して開く。端部はやや面をなす。内面は横ハケ目、外面は縦ハケ目。胎土は在来系にしては良質で、色調は橙灰色を呈す。

5・6は布留系の甕である。5は小型甕。胴部は扁球形で最大径が中位にある。口縁部は内湾しながら大きく開き、端部は丸味を帯びシャープさに欠ける。また内側をわずかにつまみ出す。内面のヘラケズリは屈曲部の近くにまで及び、底部近くには指圧痕が観察される。色調は黄灰褐色を呈す。6はやや肩が丸く張った器形となり、胴部の径に対して口縁部の径が小さい。口縁部は内湾が弱く、内端部をつまみ出す。色調は肌灰色を呈す。外面には煤が付着する。

7は高坏の坏部である。屈曲部は不明瞭で稜を持たず、上半はわずかに外反しながら開く。端部には小さな面を作る。内面は細かい斜ハケ目の後に疎らな横ヘラミガキを施し、その後に放射状の暗文を施文する。外面は縦ハケ目後に横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は茶色を呈す。

8~11は鉢である。8は内面ナデ、外面は緻密な横ヘラミガキを行う精製品。胎土は精良で色調は橙肌色を呈す。9・10は浅い鉢。9はかなり歪つである。どちらも内面は横ナデの後に疎らな横ヘラミガキ、外面は緻密な横ヘラミガキを行い、10の外面には横ヘラミガキに先行するタタキが観察される。胎土は精良で、色調は9が橙肌色、10が茶褐色を呈す。11は半球形の粗製鉢。内面はナデ、外面は底部付近がヘラナデ、それ以外は指ナデの後に口縁部を横ナデする。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈し、一般的な布留系甕などと同質である。

12・13は蛸壺である。どちらも底部は尖底気味で、最大径が中位よりやや下に位置し下膨れとなる。内外面指ナデ整形を行う。色調は灰黄褐色を呈す。

61号竪穴住居跡 (図版27、第129図)

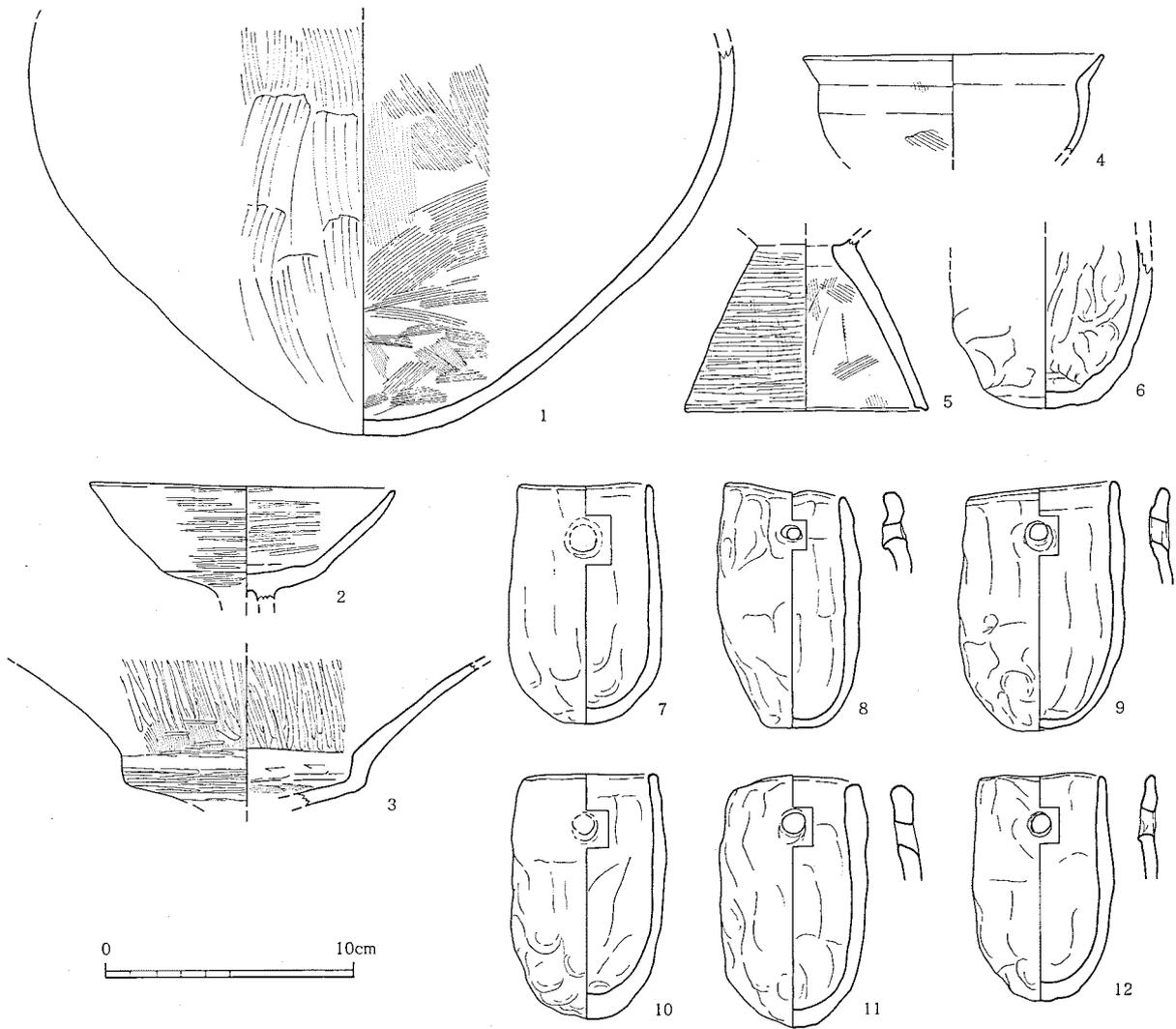
II区北1で検出した竪穴住居跡である。60号竪穴住居跡から10m東に位置する。62号竪穴住居跡と重複しており、新旧関係は当住居跡の方が新しい。攪乱が多く、また調査区外へと続くため平面形を確認するまでには至っていない。遺構面から床面までの深さは10cmを測る。

住居跡の遺存状態が悪いにも拘わらず遺物は比較的多く出土している。特に蛸壺がまとまって出土している点には注目される。

出土土器 (図版64・65、第131図)

1は在来系の壺である。底部は尖底気味の丸底で、胴部は丸味を帯びて大きく張るようである。内面ハケ目、外面の上半は縦ハケ目、下半は板ナデを行う。胎土に砂粒を多く含み色調は黄灰褐色を呈す。

2は小型の高坏である。屈曲部は不明瞭な稜を有し、口縁部にかけては直線的に開く。端部は丸い。内外面細かい横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は橙肌色を呈す。3は有段の高坏である。内底部は浅く、屈曲部にシャープさを欠く。上半は外反しながら大きく開くようである。坏部の内底面



第131図 61号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

はハケ目、立ち上がり内面は横ヘラナデ、上半の内面は縦ヘラミガキを行う。坏部外面は横ヘラミガキ、体部上半の外面は縦ハケ目後に縦ヘラミガキ。胎土に砂粒を若干含み、色調は橙茶色を呈す。

4は外反口縁の鉢である。体部は深みを有し、肩部はまっすぐに立ち上がる。口縁部は短く直線的に開き、口縁端部の器壁は薄くなる。全面ナデ調整で、外面には先行するハケ目も見られる。胎土は砂粒を若干含みやや粗い。色調は黄肌色を呈す。

5は受部と裾部の間が貫通する小型器台と考えたが、あまり自信がない。裾部は直線的に開き、端部は強い横ナデを行って凹面をなす。受部内面の屈曲部は強い横ナデにより突帯状に内側へと突出する。内面はハケ目後にナデ、外面はハケ目後に一般的な小型精製器種よりも広めの横ヘラミガキを密に行う。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰色を呈す。

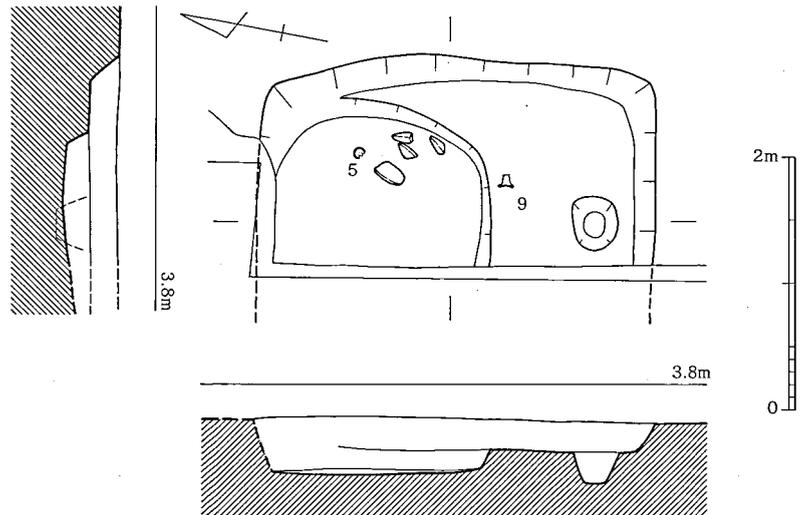
6～12は蛸壺である。色調は11が橙灰色で、それ以外は黄灰褐色を呈す。6は口縁部を欠失するが、下膨れの器形になると思われる。内外面指ナデ整形。7は筒状を呈し、内外面とも丁寧な指ナデを行うため稜線が目立たない。8は細身のもので下半の一部が極端に窪んでいる。9は比較的丁寧な作りである。10・11は口縁部がわずかに内湾する。12は口縁部が直立する。

62号竪穴住居跡 (図版27、第129図)

II区北1で検出した竪穴住居跡である。前述の61号竪穴住居跡と重複しており、当住居跡は61号竪穴住居跡の完掘後に確認したものである。従って当住居跡の方が古い。この住居跡もまた調査区外へと大きく続いており、全体の形状は不明である。遺構面から床面までの深さは25cmを測る。遺物はわずかししか出土しておらず、図示できるものはない。

63号竪穴住居跡 (図版28、第132図)

II区北5で検出した竪穴住居跡である。62号竪穴住居跡から3m南に位置する。71号竪穴住居跡と重複しており、当住居跡の方が新しい。東壁長は3.0m、西側が調査区外へと続くため東西長は不明である。住居跡の北側は幅1.8mの広さで深くなっており、遺構面からここまでの深さは45cmを測る。この付近の覆土の質・土色は地山と全く変わらず平面では確認できなかったため、土器の出土をたよりに検出を行ったものである。床面直上で土器や円礫が出土したが、円礫は特に使用痕跡等は認められなかった。住居南側の深さは20cmを測る。この南側で径40cm、深さ25cmのピットを検出した。



第132図 63号竪穴住居跡実測図 (1/60)

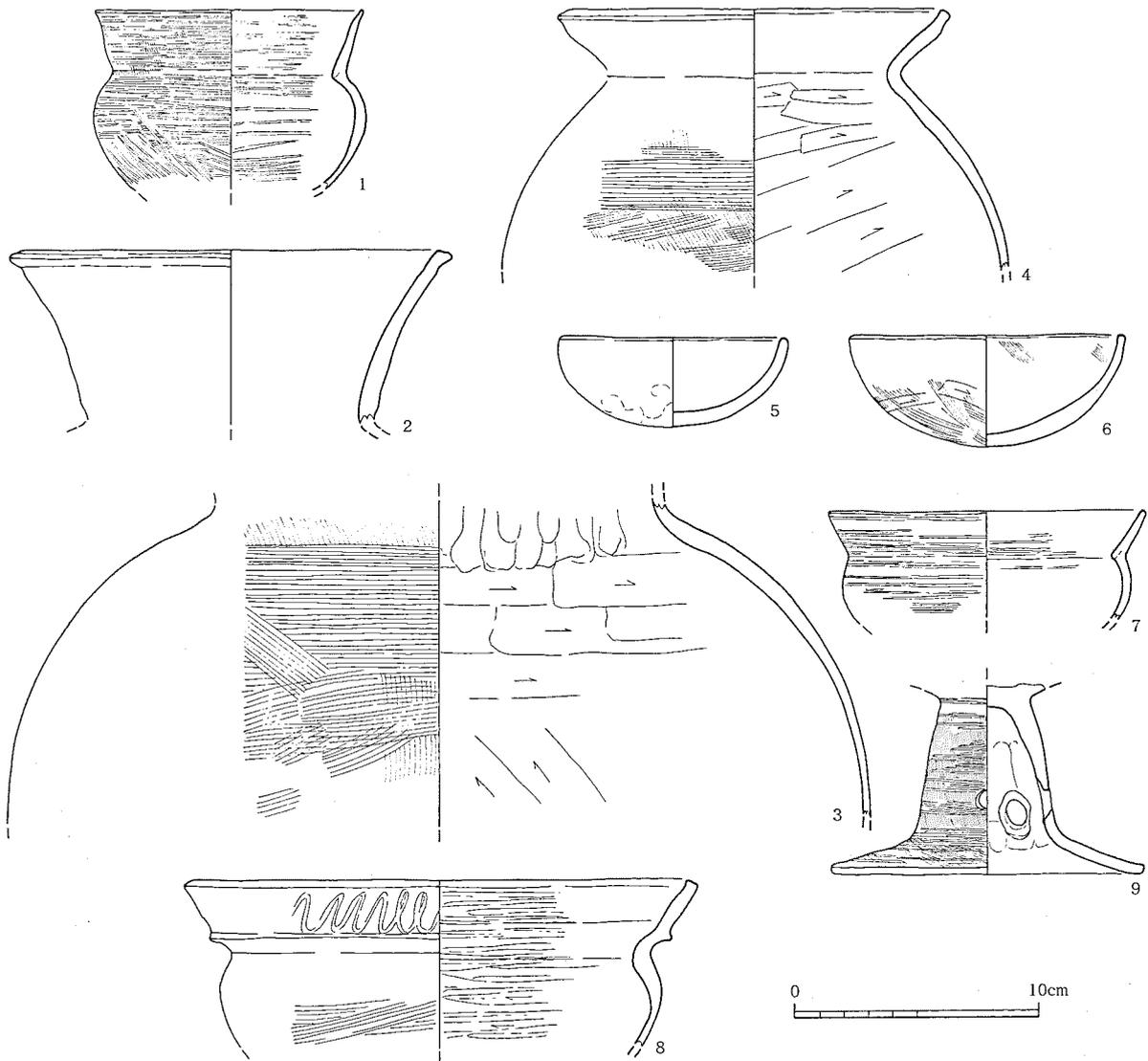
図示した土器のうち、9は中央付近の床面直上から出土、5は北側の深まり内から出土、それ以外は覆土からの出土である。

出土土器 (図版65、第133図)

1~3は壺である。1は精製の小型壺である。体部は中位よりやや上に最大径があり、屈曲部内面には明瞭な稜を有す。口縁部は直線的に開き、端部付近のみわずかに外反する。端部は鋭く尖る。内外面とも細かいヘラミガキを行い、体部内面のヘラミガキは疎らである。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。2は直口壺。口縁部が外反しながら開き、外端部を丸くつまみ出す。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。3は恐らく山陰系二重口縁壺であろう。肩は丸く張る。内面はヘラケズリを行い、頸部内面には指ナデが明瞭に残る。外面は縦ハケ目後横ハケ目を行い、その後に肩部の横ナデを行う。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。

4は布留系の甕である。肩は丸みを帯びず、口縁部は直線的に開いて端部付近のみわずかに内湾する。内端部をわずかにつまみ出し、外側は面をなす。内面のヘラケズリは屈曲部近くにまで行われる。色調は暗黄灰褐色を呈す。

5~8は鉢である。5・6は小型の直口鉢。5は内外面ナデ調整で、外底面に指圧痕が残る。胎土に砂粒を若干含み精良ではない。色調は肌色を呈す。外面には黒斑が大きく残る。6も内外面ナデ調整



第133図 63号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

を行い、外底面はナデに先行するハケ目、ヘラナデが残る。胎土に砂粒を若干含み精良ではなく、色調は暗黄灰褐色を呈す。7は精製の外反口縁鉢である。頸部はわずかに内湾し、口縁部は短く開く。端部の器壁は薄い。体部内面はナデ、口縁部内面は横ナデ後に疎らな横ヘラミガキ、外面も疎らな横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。8は二重口縁の中型鉢。肩部で短く内湾し、一次口縁部は短く強く外反する。二次口縁部は直線的に開き、端部は面を有し内端をつまみ出す。屈曲部の内面は不明瞭だが外面はシャープな稜を有した突帯を巡らす。内面は横ヘラミガキを行い、体部には先行する横ヘラケズリが観察される。体部外面は横ハケ目、口縁部の外面は横ナデを行った後にヘラミガキによる波状の暗文を施す。胎土に砂粒を若干含み色調は肌色を呈す。

9は高環の脚部である。柱部は中膨らみとなり、裾部は直線的に開く。端部は面をもつ。屈曲部のやや上に2ヶ所円孔を穿孔する。半乾燥時に外側から穿孔を行い内面の孔周辺は器表が剥離する。内面はナデ、外面は細かい縦ハケ目後に疎らな横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。

64号竪穴住居跡 (図版28、第134図)

II区東5~7で検出した竪穴住居跡である。58号竪穴住居跡から10m南に位置する。校舎の基礎や

近世の土坑によって攪乱を受けるものの、住居跡の全形がほぼ把握できる貴重な例である。南北長4.8m、東西長3.4m、総床面積は17.4m²を測り、中型の部類に含まれる。南北に長い長方形プランで、当調査区においては少ない例である。床面はほぼ水平となるが、その中央には大きな不整形の落ち込みがある。この中には径60cmの炉跡があり、また覆土は他と異なり黒褐色細砂であったことから、この落ち込みは炉から排出された炭に由来するものと推察される。床面からの深さは10cmを測る。ピットはP1～P5を検出した。このうちP1・P2はその位置から主柱穴として適当なものと考えて掘削を進めたが、どちらも主柱穴にしては浅すぎる。地山が締まりのない砂質なので掘り形が残らずに埋没したためであろうか。P1は径80cm、深さ25cm、P2は径40cm、深さ5cm。

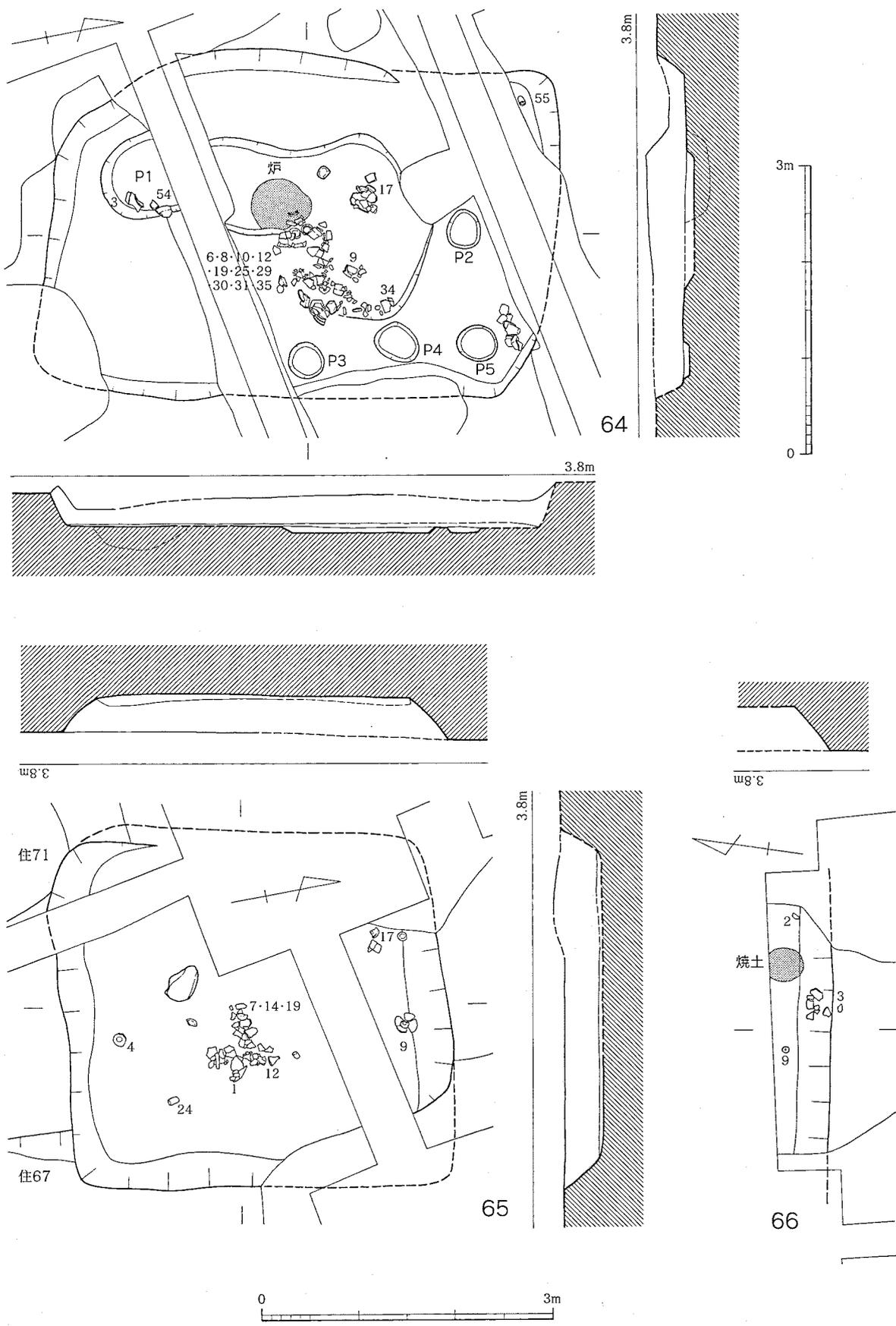
出土遺物は豊富である。特に中央の落ち込み周辺からまとまって出土しており、6・8・9・10・12・17・19・25・29・30・31・34・35がここから破碎された状況で出土している。床面からは約10cm程浮いており、埋没途中で廃棄されたものであろう。その他、北西隅から55が若干浮いた状態で出土、北東隅から20・42が若干浮いた状態で出土、P1内から3・54が出土している。これら以外は覆土からの出土である。他に砥石、鉄鏃、不明骨角器が出土している。

出土土器 (図版65～68・86、第135～139図)

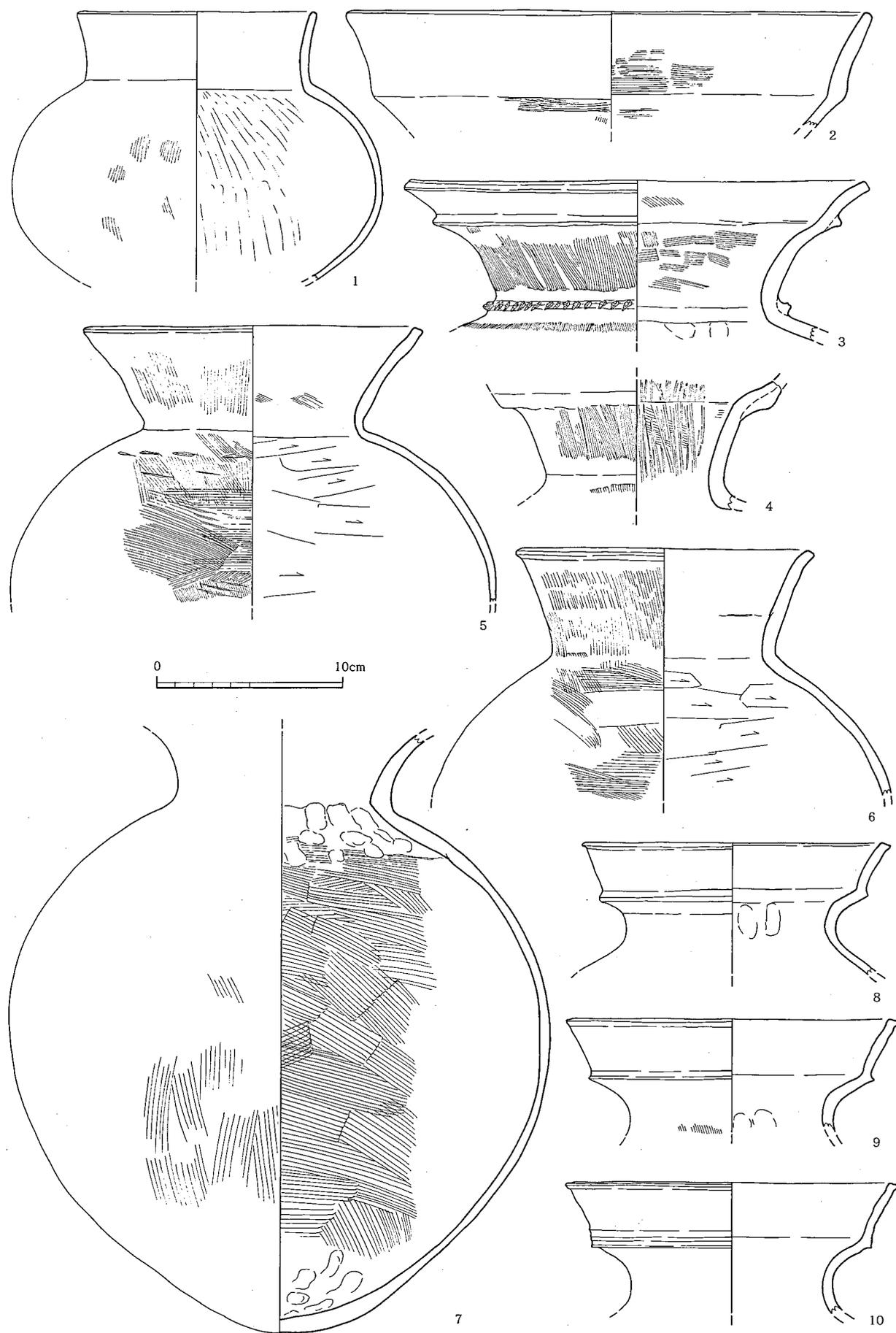
1～19は壺である。1は扁球形の胴部に直立する口縁部をもつ中型の直口壺。口縁部は横ナデ、胴部内面は丁寧な縦指ナデを行いナデの稜線が残る。外面は縦ハケ目後ナデ消し。胎土に砂粒を若干含み色調は黄褐色を呈す。2は在来系の二重口縁壺。口縁部は外反しながら開き、屈曲部の稜は不明瞭である。端部は丸くおさめる。口縁部は横ナデを行い、それ以下は横ハケ目を行う。胎土は砂粒をあまり含まず精良で、色調は黄茶色を呈す。3も在来系の二重口縁壺である。口縁部は大きく開き、屈曲部の外面には三角突帯を巡らすものの内面の稜は極めて曖昧である。口縁部は面をなす。肩部との境にはハケ目状工具の刺突による刻目突帯を貼付する。頸部内面は横ハケ目、外面は縦ハケ目、口縁部は横ナデで内面には先行するハケ目が残る。胎土に砂粒を多く含み色調は茶灰色を呈す。4は二重口縁壺の頸部である。頸部はあまり開かず直線的に伸び、一次口縁部との境界の外面に粘土帯を貼付して不明瞭な突帯状にする。肩部と頸部の境、一次口縁部と二次口縁部の境、突帯など、粘土帯の接合が不完全なため剥離が進んでおり、接合方法がわかり易い。内面はハケ目後暗文状の縦ヘラミガキ、外面は縦ハケ目。胎土に砂粒を若干含むが生地は肌理の細かな粘土を使用する。色調は赤褐色を呈す。

5・6は畿内系の直口壺である。5は肩が丸く張り、口縁部はやや外反して開く。端部は面をなす。胴部内面は屈曲部近くまでヘラケズリを行い、外面はハケ目を行うが先行するタタキも観察される。また肩部には水平方向のヘラ刺突文を巡らせる。口縁部は横ナデだが内外面に先行するハケ目が見られる。胎土に砂粒を若干含み色調は黄褐色を呈す。6は5と比べると肩の張りが弱い。口縁部は5と比べると立ち気味に開く。端部は面を作る。胴部内面はヘラケズリ、外面は横ハケ目、口縁部内面は横ナデ、外面は縦ハケ目後に横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。7は在来系の直口壺であろう。底部は尖底気味の丸底で、胴部の最大径は中位よりやや上に位置する。頸部はよく締まり口縁部は大きく外反し、屈曲部内面には明瞭な稜を有す。胴部内面は粗いハケ目を行い底部付近と肩部の内面には指圧痕がよく残る。外面は縦ハケ目だが風化が著しく進む。

8～19は山陰系の二重口縁壺である。8は口縁外端部をつまみ出す。色調は肌灰色を呈す。9もやはり口縁外端部をつまみ出し上端がシャープな面をなす。屈曲部外面も稜がシャープである。色調



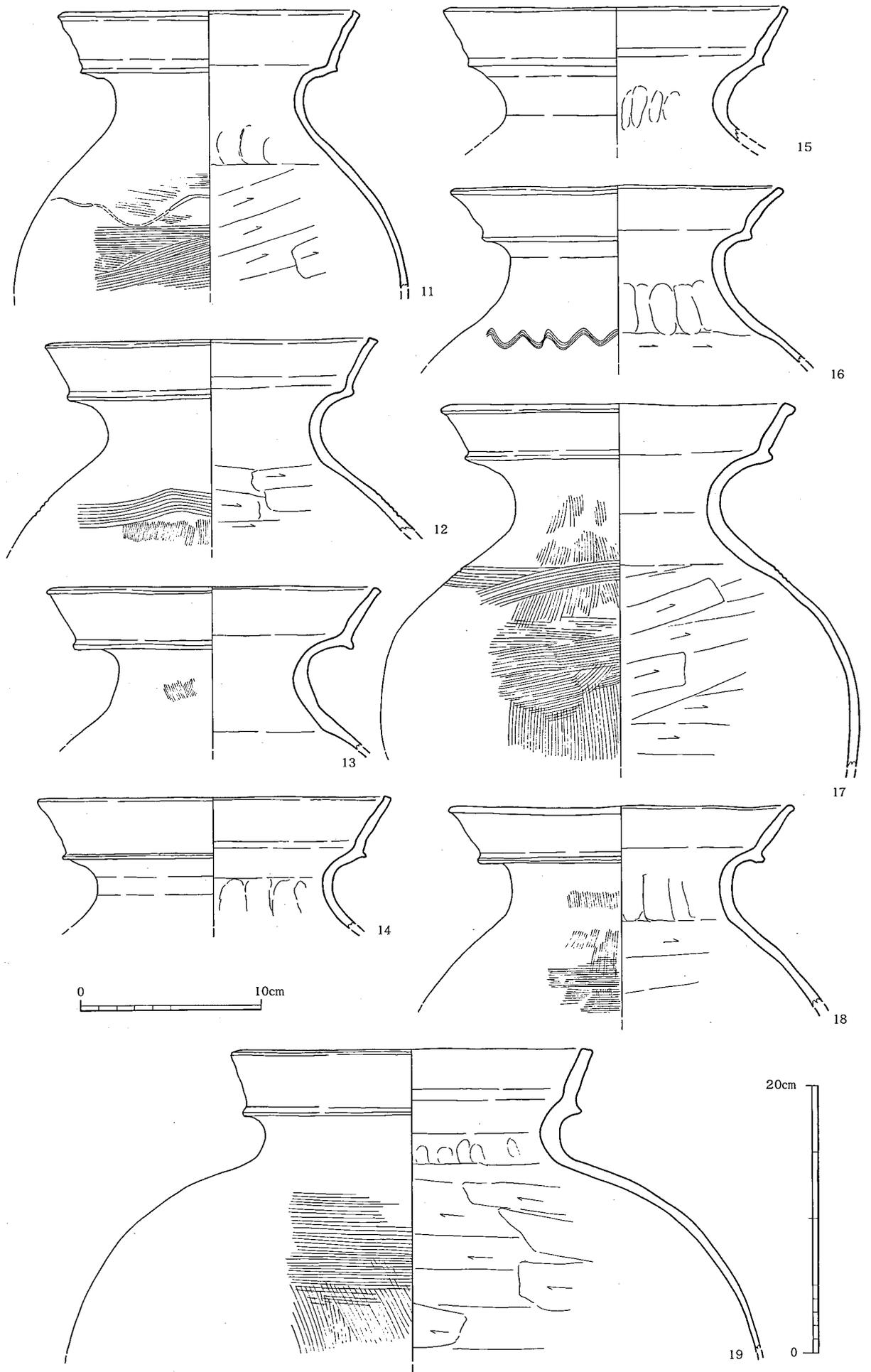
第134图 64~66号竖穴住居跡实测图 (1/60)



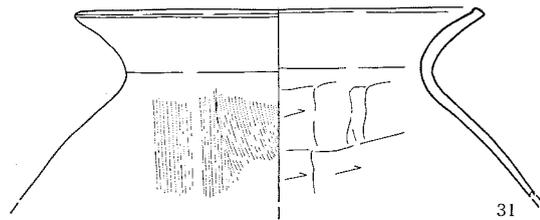
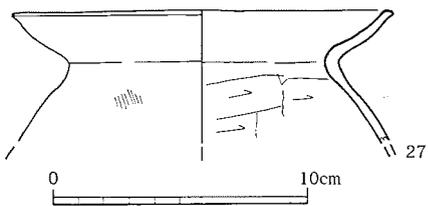
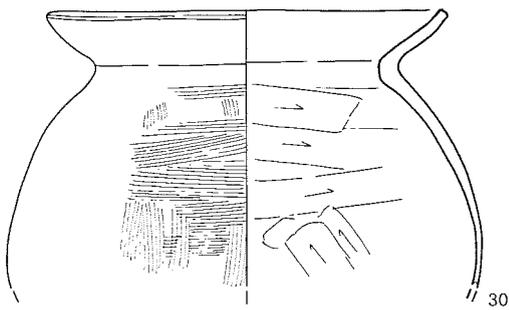
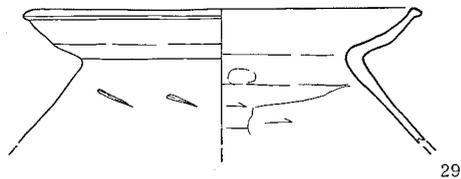
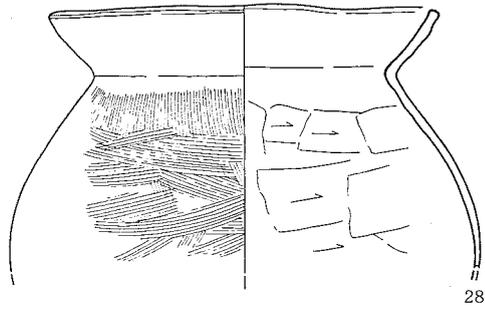
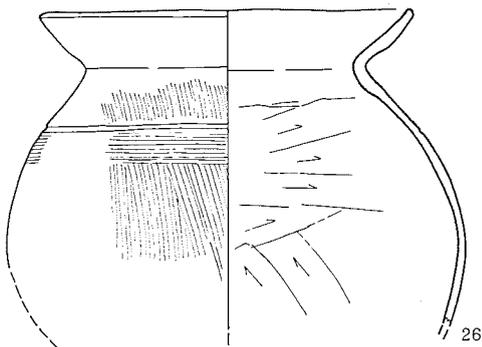
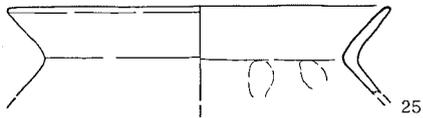
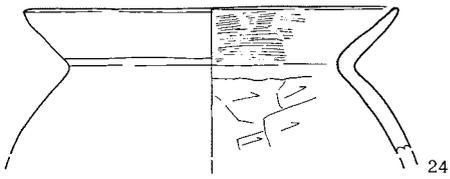
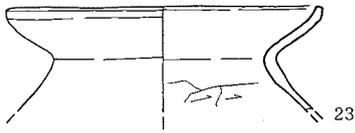
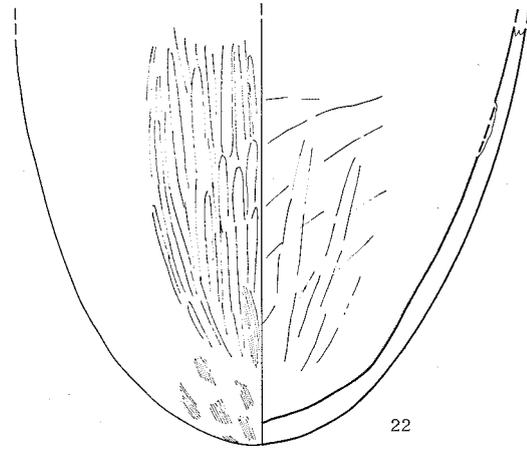
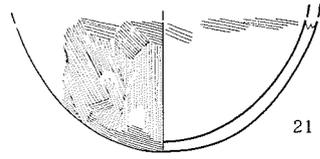
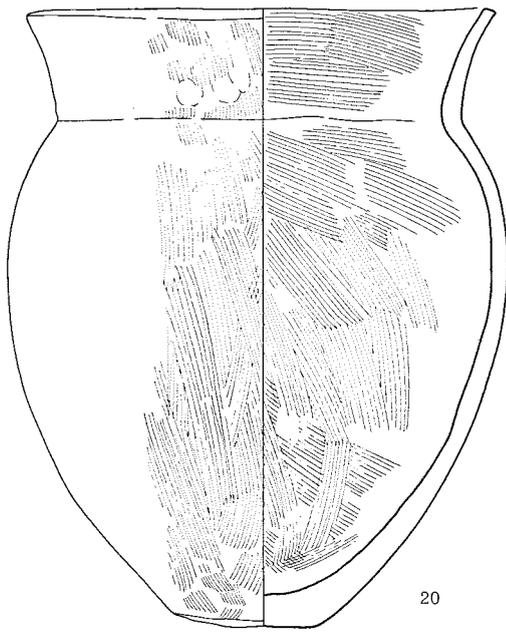
第135图 64号竖穴住居跡出土土器実測图① (1/3)

は黄灰褐色を呈す。10は屈曲部内面の稜が不明瞭である。口縁外端部をつまみ出し、そのために上端部が窪む。色調は黄灰褐色。11は肩部に張りがなく、胴部の径に対して口縁部の径が大きい。口縁内端部をつまみ出す。肩部外面に一条の雑なへら描波状文を巡らせる。色調は黄灰褐色を呈す。12は屈曲部外面の稜が丸味を有して不明瞭で、口縁端部は面をなす。肩部には雑な櫛描波状文を巡らせる。色調は暗黄灰褐色を呈す。13は頸部が他と比べてやや長く、一次口縁部は強く外反する。二次口縁部は直線的に開き端部は面をなす。屈曲部外面の突帯は大振りて丸味を帯び、下方を向く。色調は黄灰褐色を呈す。14は屈曲部外面の突帯が小さくシャープである。口縁内端をわずかにつまみ出す。色調は黄灰褐色を呈す。15は屈曲部周辺を強く横ナデするために相対的に頸部と口縁部の器壁が厚くなる。口縁部は直線的に開き、端部はシャープな面をなす。色調は黄灰褐色。16は頸部がよく締まり一次口縁部は強く外反する。二次口縁部は外反気味に開き、口縁端部は内側を不明瞭につまみ出す。肩部には2条の櫛描波状文を巡らせる。色調は黄灰褐色。17は胴部の最大径がやや上方に位置し、肩が張った器形となる。頸部はよく締まり、二次口縁部は短く直線的に開き外端部を丸く肥厚させる。肩部には櫛描直線文を巡らす。色調は肌灰色を呈す。18は一次口縁部の外反が強く、屈曲部外面の突帯が大きくて丸味を帯び、下方を向く。二次口縁部は直線的に開き、先端が外反する。端部は丸くおさめる。色調は黄灰色を呈す。19は大型品である。肩は丸く大きく張り、胴部に比べて口縁部の径が小さい。頸部は短く外反し、二次口縁部は直線的に開く。屈曲部外面は突帯状につまみ出し、口縁端部は面をなす。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。

20~38は甕である。20は在来系の甕。底部が小さなレンズ状で、長胴気味の胴部となる。最大径は中位よりやや上に位置し、頸部はあまり締まらない。口縁部はやや外反し、長めに伸びる。端部は面をなす。総じて器壁が厚い。内外面ハケ目調整を行う。胎土に砂粒を若干含み色調は暗黄灰色を呈す。肩部以下は二次加熱のため黒変・赤変する。21は小型品で、壺かもしれない。やや長胴気味の胴部となるようである。内底面はナデで上部には横ハケ目が観察される。外面はハケ目。色調は灰褐色を呈す。22は長胴の甕で底部は尖底気味の丸底となる。内面はナデ上げ、外面はハケ目後に細いへら状工具によるへらミガキ状のナデ上げを行う。胎土に砂粒を若干含み色調は茶褐色を呈す。外面は二次被熱のため黒変する。23は小型の布留系甕。口縁部は大きく開き、端部のみ立ち上がる。色調は肌茶色を呈す。24は器壁が厚く口縁端部が薄くなる。肩部は丸味を帯びる。口縁部は内湾気味に開き、端部を丸くおさめる。色調は肌灰色を呈す。25は口縁部がわずかに外反する。端部は丸い。器表の風化が著しく調整は不明瞭である。色調は黄肌色を呈す。26は球形の胴部で肩が張らない。口縁部は内湾して開き端部は丸い。肩部に一条のへら描沈線を巡らせる。色調は黄灰褐色を呈し、外面は二次被熱のため黒変、煤が付着する。27は口縁部が内湾して開き、端部は平坦面をなす。色調は黄灰褐色を呈す。28は肩が張らず口縁部は立ち気味に開く。端部は面をなす。色調は灰褐色を呈す。29は口縁部が明確に内湾して開きが大きく、外端部をつまみ出す。肩部にへら刺突文を施すが、全周せず一部分のみのようである。色調は黄灰褐色を呈し外面には煤が付着する。30は球形胴で口縁部は内湾して開く。端部は面をなす。胴部内面のへらケズリは屈曲部近くにてまで及ぶ。色調は肌灰色を呈す。31は屈曲部が不明瞭で、稜をもたず肩部から大きく外反して口縁部へと至る。口縁部は外反して開き、内端部をシャープにつまみ出す。色調は黄灰褐色。器壁が薄い。32は肩部がやや丸味を有し、口縁部の内湾度は弱い。口縁内端部をつまみ出す。肩部にはへら刺突文を間隔をおいて施文する。色調は黄灰色。33は器壁が薄い。口縁部は内湾し、内端部をつまみ出



第136図 64号竪穴住居跡出土土器実測図② (19 : 1/4 , 他は1/3)



第137图 64号竖穴住居跡出土土器实测图③ (1/3)

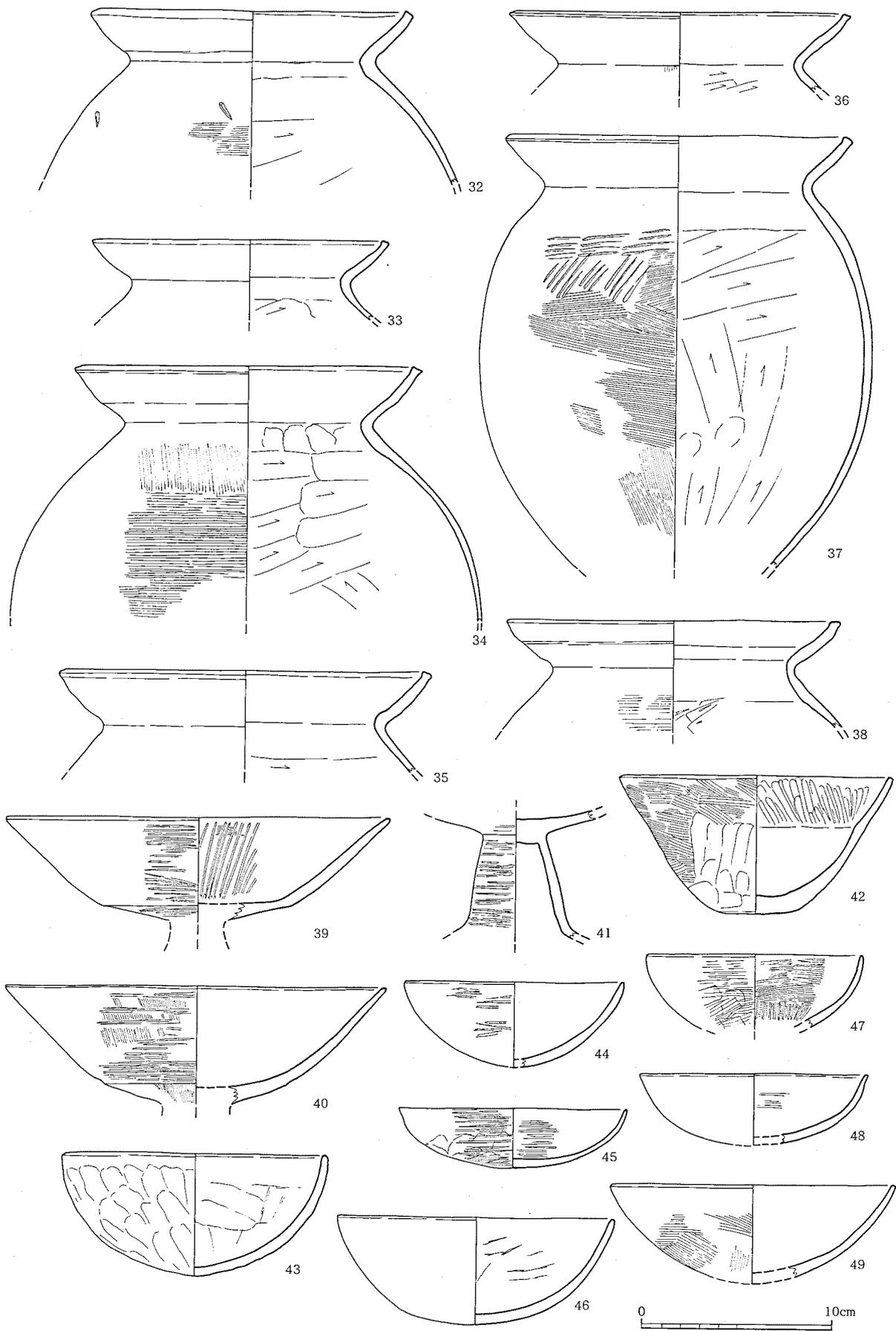
す。色調は黄灰褐色を呈す。34は肩部がやや丸味を帯び、口縁部は内湾して開く。端部は内外につまみ出し、上面はわずかに窪む。色調は黄灰褐色を呈す。35は胴部に比べて口縁部が厚い。口縁部は内湾して開き、端部は内外につまみ出され上端が窪む。色調は黄灰色を呈す。36は口縁部の内湾度が弱く、端部は内外に弱くつまみ出され、上端は水平に近い面をなす。色調は黄灰褐色。37は長胴で最大径が中位にある。口縁部はやや立ち気味に開き、内端部が肥厚する。外面にはハケ目に先行するタタキが残る。色調は茶色を呈す。38は口縁部がやや肥厚する。端部は平坦面をなす。色調は黄灰褐色を呈す。

39～41は高坏である。39は屈曲部の外面に痕跡的な段を有し、口縁部は直線的に開く。内面は横ハケ目、横ナデ、ヘラミガキによる暗文、の順に行う。外面は横ナデ後に緻密な横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。40は屈曲部外面に浅い凹線を有す。口縁部は内湾気味に開く。内面は風化が著しく調整不明。外面は縦ハケ目後に疎らな横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。41は柱部がほとんど中膨らみにならない。裾部との間の屈曲部内面には明瞭な稜をなす。内面はナデ、外面は疎らな横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。

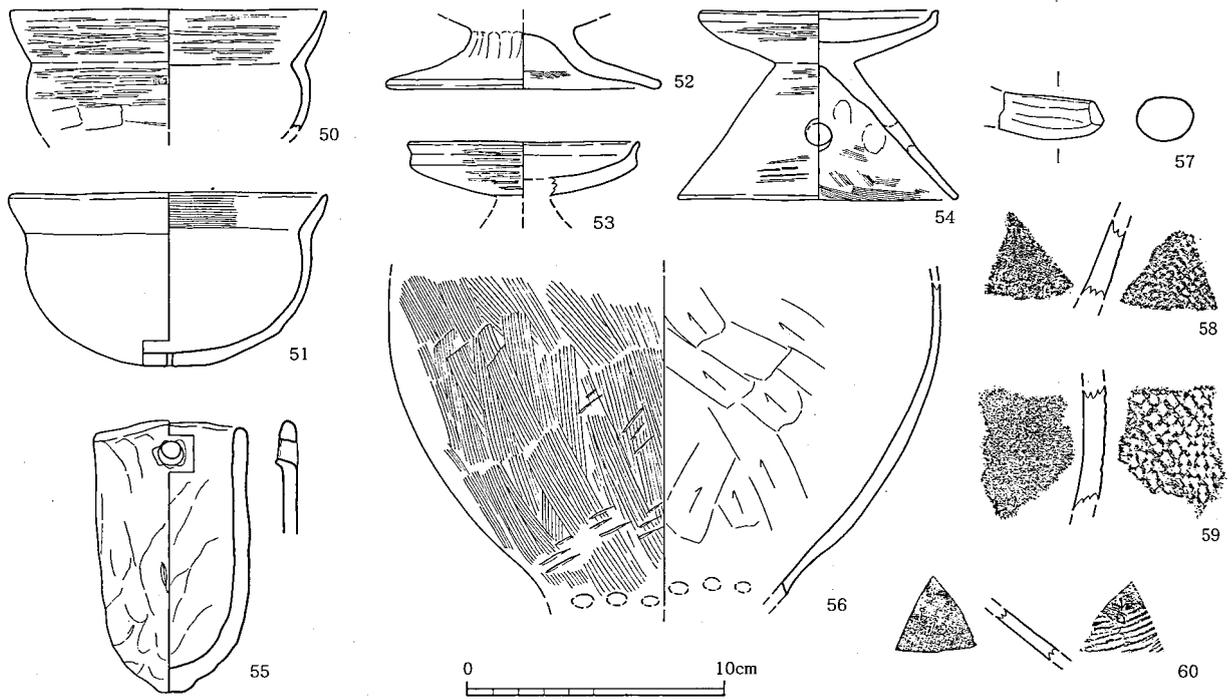
42～52は鉢である。42は平底の鉢。体部は直線的に開く。内面の下半は雑なナデ、口縁部は縦ヘラミガキ、外面は雑な横ハケ目を行い、底面と体部下半の一部にのみヘラナデを行う。体部の一部にしか行わないのは恐らく指圧痕をナデ消したためであろう。胎土は砂粒をほとんど含まず精良で、色調は黄灰褐色を呈す。43は粗製の鉢。内面はヘラナデ、外面は指ナデ。胎土に砂粒を若干含み粗く、色調は黄灰褐色を呈す。44は小型で深みのある鉢に図示しているが、破片資料の図上復元であるため不安が残る。風化が著しく調整に不明な点が多いが、外面には横ヘラミガキが観察される。胎土は精良で色調は茶色を呈す。45は内外面に横ヘラミガキを行う精製品。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。46は深みがある。内外面ナデを行い、内面には先行するヘラナデの痕跡が残る。胎土は精良で色調は黄灰色を呈す。47は深みのある小型品で、脚付となるかもしれない。内面は横ハケ目後に内底部のみヘラミガキによる放射状暗文を施す。外面は横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は暗茶灰色を呈す。48は口縁部のみわずかに外反する。風化が著しく調整に不明な点が多いが、内面にはかすかに横ヘラミガキが観察される。胎土は精良で下地の色調は肌色を呈すが、部分的に器表が肌茶色を呈すところがあり、化粧土を塗布している可能性もある。49は尖底気味の鉢。内面はナデ、外面はハケ目後部分的にナデ。胎土に砂粒を若干含み粗く、色調は暗黄灰色を呈す。

50・51は外反口縁の鉢である。50は屈曲部内面に明瞭な稜を有し、口縁部は内湾気味に開く。体部内面はナデ、それ以外は疎らな横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。51は頸部が締まらず直立し、口縁部は短く直線的に開く。底部には小円孔を穿孔する。体部内面はナデ、口縁部内面は横ハケ目、外面は風化が著しく調整不明。胎土に砂粒を若干含みあまり良くなく、色調は暗黄灰色を呈す。52は脚付鉢の脚部である。裾部は緩く屈曲して直線的に大きく開き、端部は丸くおさめる。内面はハケ目の後に横ナデを行い、外面は幅広の縦ヘラミガキが観察できる。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。

53・54は小型精製器台である。53は立ち上がりが短く外反し、端部は器壁が薄く、外側を向く。内面は風化が著しく調整不明、外面は細かい横ヘラミガキ。胎土は極めて精良で色調は黄灰色を呈す。54は受部の立ち上がりが短く直立し、端部は尖る。裾部は直線的に開き、端部は面をなす。裾部のほぼ中央に円孔を2ヶ所穿孔する。受部内面は風化が進み調整不明、外面は横ヘラミガキ。裾部



第138图 64号竖穴住居迹出土土器实测图④ (1/3)



第139図 64号竪穴住居跡出土土器実測図⑤ (1/3)

内面は細かいハケ目後ナデ、外面は横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。

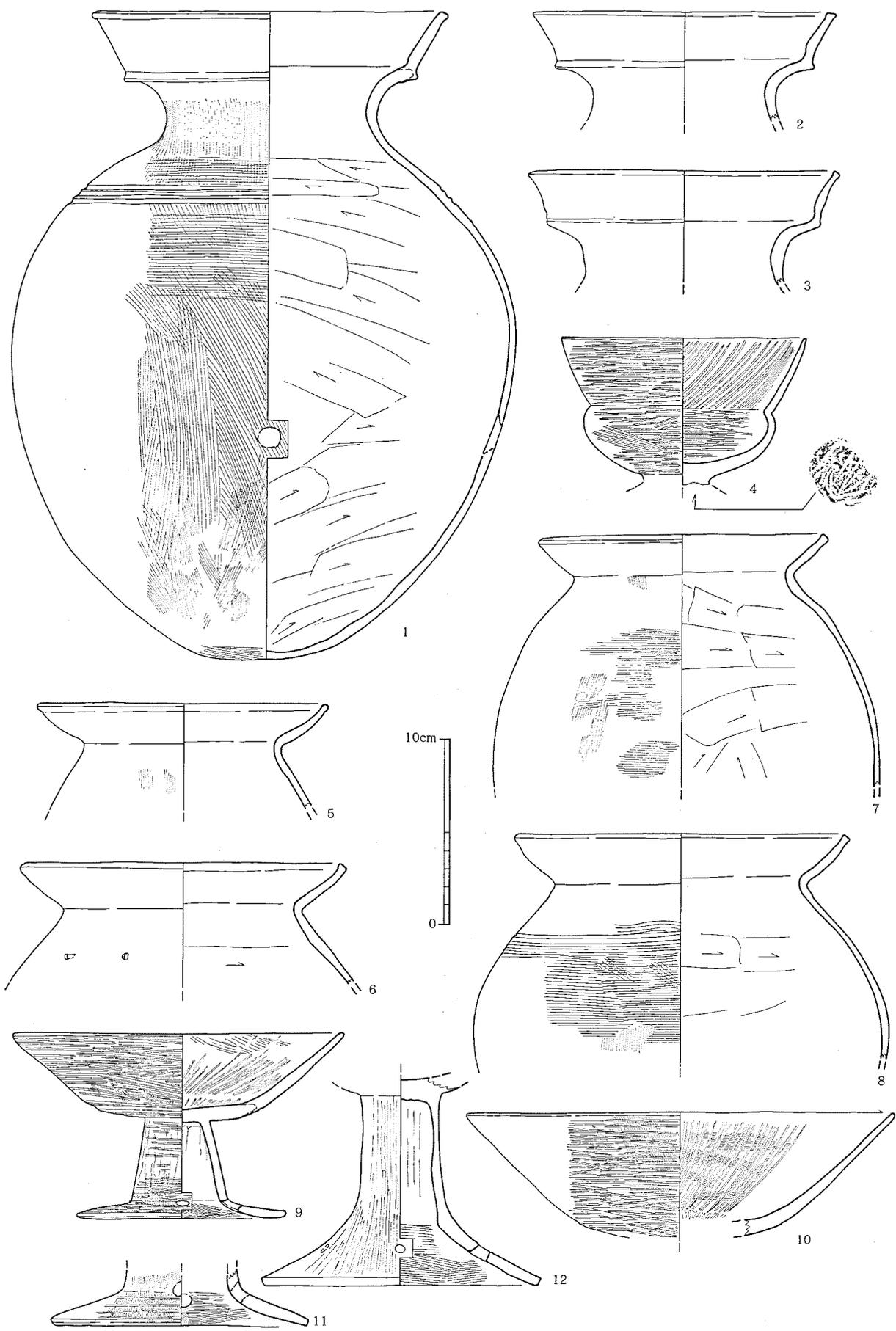
55は蛸壺である。他のものと比べて径が小さくスリムな器形となる。口縁部は直立する。内外面指ナデ整形。色調は茶色を呈す。

56~60は半島系の土器である。56は軟質の多孔式甑である。底部付近は強くすぼまり鉢形に近い。蒸気孔は底部のみならず体部下端にまで及ぶ。内面はヘラケズリ、外面はハケ目を行い、外面にはハケ目に先行するタタキが残る。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。胎土、色調、焼成とも土師器に近く、穿孔がなければ土師器そのものである。57は軟質の甑把手である。形状は円筒形に近く、やや楕円形となる。調整は全面指ナデで整形を行う。胎土に砂粒を若干含み色調は白黄褐色を呈す。58は小片で傾き等は不明。軟質土器である。外面は小さな斜格子タタキ後弱いナデ、内面はナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は淡黄褐色を呈す。59も軟質土器である。器壁が厚く、大型品であろう。外面に大きめの斜格子タタキ、内面にナデを行う。胎土に砂粒を多く含み色調は淡黄褐色を呈す。60は陶質土器である。外面の下方が縄蓆文タタキ、上方はナデ消し、内面はナデを行い、上方には指圧痕が残る。胎土はわずかに微砂粒を含まが、水漉した精良な粘土を使用する。色調は表面灰色、断面暗赤茶色を呈す。焼成は良好で堅緻に焼き上がる。

65号竪穴住居跡 (図版28、第134図)

II区北2・5・6で検出した竪穴住居跡である。校舎の基礎によって攪乱を受けるものの、平面形はほぼ確認できる。南北長4.0m、東西長3.7mを測り、ほぼ正方形プランとなる。総面積は14.4m²を測る。床面は南東隅がやや高くなるもののほぼ水平をなし、遺構面からの深さは40cmを測る。ピット、炉跡等は検出できなかった。中央からやや南西寄りでは扁平な大礫を一つ検出したが、これは台石として使用されたものであろう。

出土遺物は比較的多い。特に中央の床面から若干浮いた位置で、1・7・12・14・19がまとまっ



第140图 65号竖穴住居跡出土土器実測図① (1/3)

て出土している。破碎した状況であり、投棄されたものであろう。これ以外にも、北側の床面直上で9・17、南東側の床面から若干浮いた位置で4・24が出土した。これら以外は覆土からの出土である。

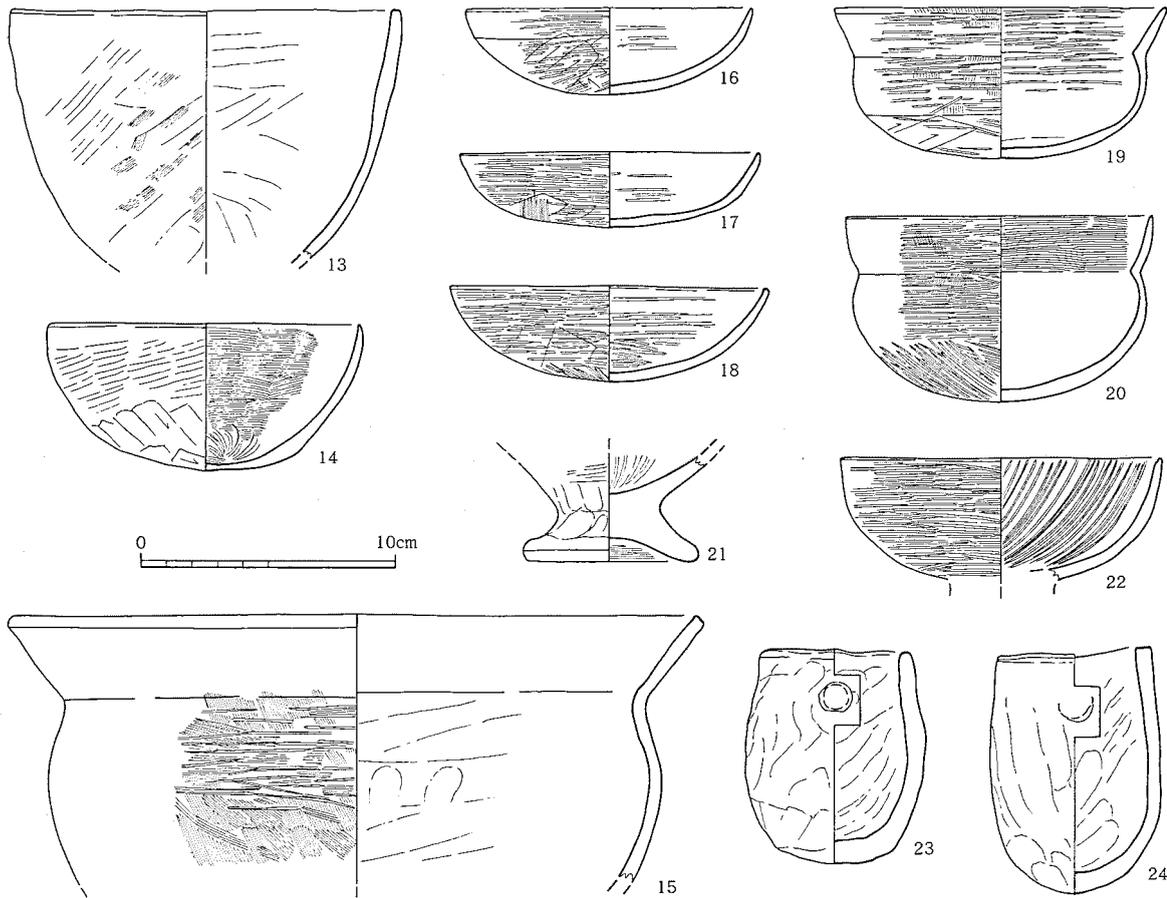
出土土器 (図版68～70、第140・141図)

1～3は山陰系の二重口縁壺である。1は胴部が倒卵形で最大径が中位よりやや上に位置する。頸部はよく締まり、口縁部は直線的に開く。端部は外側を丸く肥厚させ、上端は面をなす。肩部には櫛描直線文を巡らせ、最大径よりやや下がった位置に焼成後の穿孔を1ヶ所行う。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。2は一次口縁部が強く外反し、二次口縁部の端部は肥厚して平坦面を形成する。色調は黄灰褐色を呈す。3は一次口縁部と二次口縁部間の屈曲が弱く、外面の突帯が無いのが特徴的である。色調は黄灰色を呈し焼成がやや甘い。4は精製の小型脚付壺である。体部上端は内傾し、屈曲部内面には稜をなす。口縁部は直線的に開き端部は尖る。口縁部内面は斜ヘラミガキによる暗文を施し、それ以外は緻密な横ヘラミガキを行う。脚部との接合部にはヘラによる刻目を入れて接合を強化する。胎土は極めて精良で色調は橙色を呈す。

5～8は布留系の甕である。5は口縁部が強く内湾し、端部はやや肥厚する。肩部は張りが無く直線的で、胴部に比べて口径が大きい。色調は黄灰褐色を呈す。6は口縁内端部を丸くつまみ出す。肩部には列点文を巡らす。色調は肌灰色を呈す。7は最大径がやや下に位置し、肩はあまり張らない。口縁部は短く直線的に開き、端部が面をなす。色調は内面茶褐色、外面肌灰色を呈す。外面には煤が付着する。8は肩部が直線的に傾斜する。口縁部は内湾しながら開き、端部は上方に尖る。肩部には櫛描直線文を巡らす。色調は黄灰褐色を呈す。

9～12は高坏である。9は坏部の屈曲部外面に凹線を有し、体部から口縁部にかけて直線的に開く。柱部は直線的に開き中膨らみにならない。裾部は屈曲して水平近くまで大きく開き、端部は面をなす。屈曲部に2ヶ所円孔を穿孔する。坏部内面は放射状のヘラミガキによる暗文を施し、口縁部付近には先行するハケ目が見られる。外面は横ヘラミガキ。柱部内面は縦ナデ、裾部内面はハケ目。柱部外面は縦ナデ後に疎らな横ヘラミガキを行う。裾部外面は縦ハケ目後横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。10も屈曲部外面に浅い凹線を有し、体部は直線的に開く。内面は細かいハケ目後に放射状のヘラミガキによる暗文、外面は横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。11は裾部片。直線的に開き、端部は面をなす。内面は細かいハケ目、外面は細かい縦ハケ目後に疎らな横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。12は在来系の高坏である。柱部は長く筒状となる。裾部は緩やかに開き、柱部に比べて器壁が厚くなる。端部は面をなす。柱部内面は縦ナデ、裾部内面は横ハケ目、外面はやや幅広の丁寧な縦ヘラミガキ。胎土に砂粒を若干含み色調は暗黄橙色を呈す。

13～22は鉢である。13は体部の深い鉢。口縁部は直立し、端部は丸味を帯びる。内面はナデの稜線が残る。外面はタタキ後に部分的にハケ目を行い、さらにこれをナデ消している。胎土に砂粒を多く含み色調は橙褐色を呈す。部分的に黒斑が見られる。14は半球形の在来系鉢である。内面はハケ目調整で内底面は螺旋状にハケ目を行っている。外面は上半が右上がりタタキ、下半がヘラナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。15は外反口縁の中型鉢。口縁部は直線的に開き、端部を上方にわずかにつまみ上げる。口縁部は内外面横ナデ、体部内面はナデで指圧痕が残る。外面は細かい斜ハケ目後に疎らな横ヘラミガキ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。16～18は体



第141図 65号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)

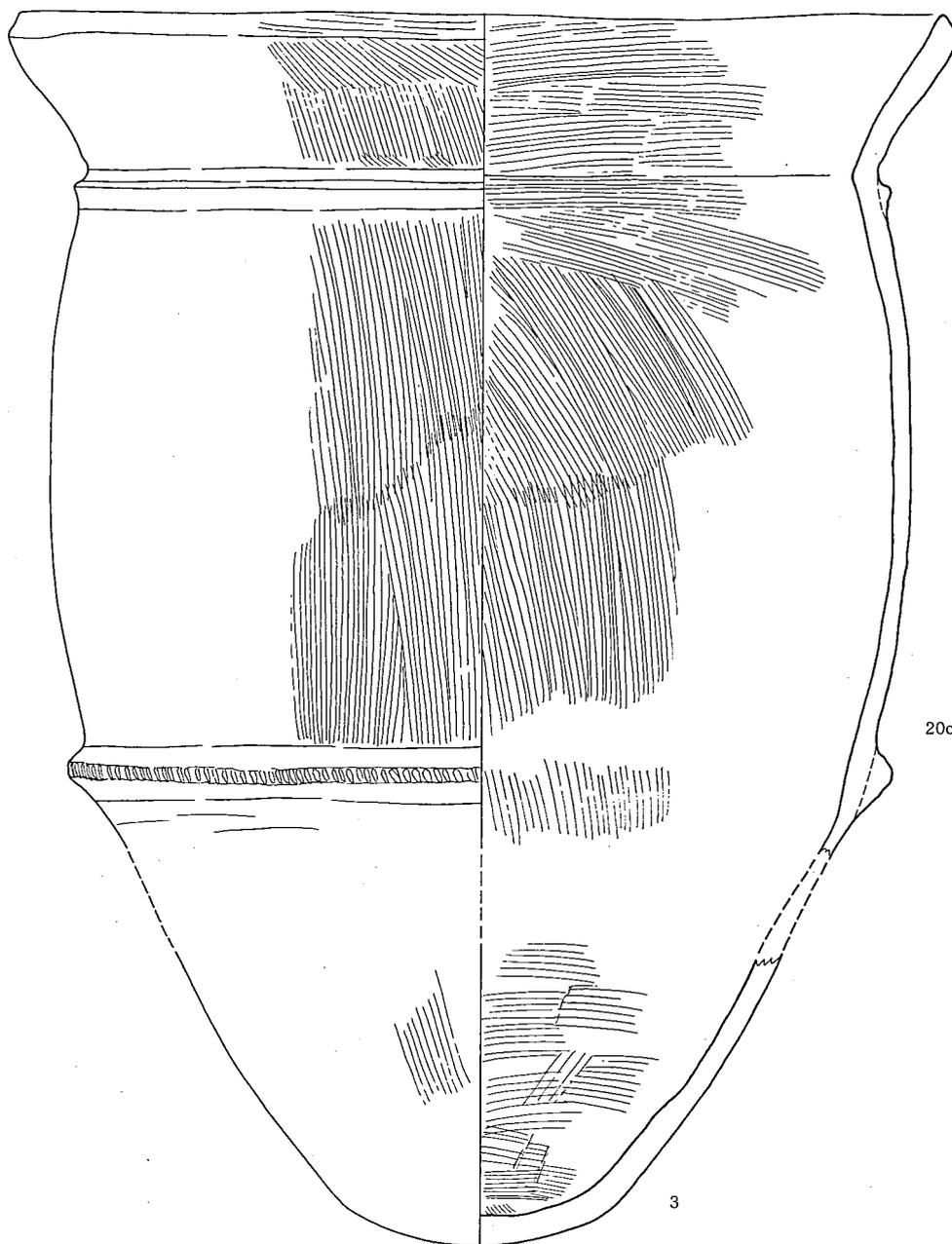
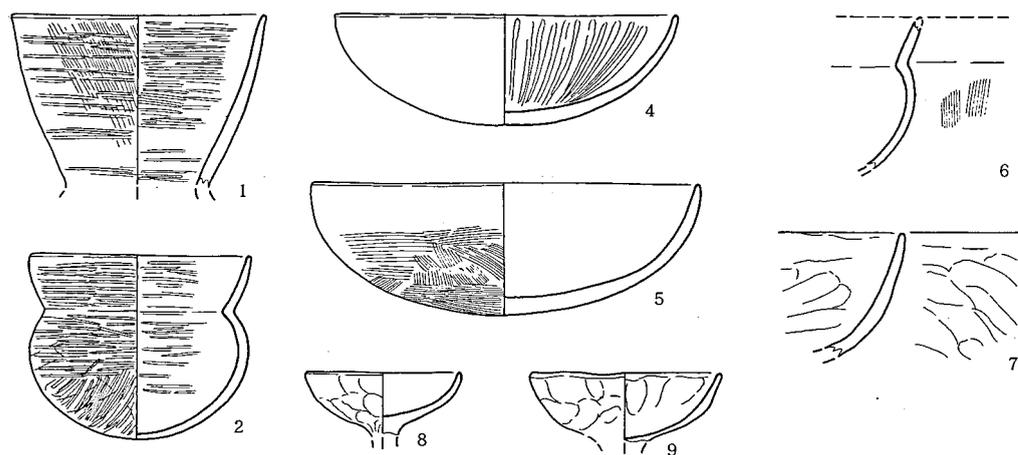
部の浅い直口縁の精製鉢である。いずれも内面はまばらな横へらミガキ、外面は緻密な横へらミガキを行う。胎土は精良。色調は16が橙褐色、17が橙茶色、18が橙茶色を呈す。19・20は外反口縁の精製鉢。どちらも屈曲部内面には鋭い稜を有す。19は口縁部が直線的に開く。内面はナデの後に上半を疎らな横へらミガキ、外面はハケ目後に疎らな横へらミガキを行う。色調は橙茶色。20は19よりも体部が深く、屈曲部の締まりも強い。口縁部はわずかに内湾し、あまり開かない。体部内面はナデ、口縁部内面は細かい横ハケ目、外面は縦ハケ目後に緻密な横へらミガキ。色調は橙茶色を呈す。21・22は脚付鉢である。21は器壁が厚く、外面には整形時の指圧痕を残す。裾部内面にもへらミガキを行うことから脚部ではない可能性もある。体部はあまり開かない。体部は内外面へらミガキを行う。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。22は精製品で半球状の鉢部となる。内面は縦へらミガキによる暗文、外面は緻密な横へらミガキを行う。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。

23・24は蛸壺である。23は器高が低い。内画面指ナデ調整。色調は黄灰褐色を呈す。24は口縁端部に平坦面を形成する。内外面指ナデ整形で色調は黄灰褐色を呈す。

66号竪穴住居跡 (第134図)

II区北2で検出した竪穴住居跡である。大半が調査区外へと続き、検出できたのは住居跡の南壁の一部に過ぎない。遺構面から床面までの深さは45cmを測る。

狭い範囲にも拘わらず遺物は比較的多い。2・9は床面直上、3は床面から30cm程浮いた状態で出



第142图 66号竖穴住居出土土器实测图 (1/3)

土した。

出土土器 (図版70、第142図)

1・2は壺である。1は口縁部が長く伸びる精製の直口壺。あまり開かず、やや内湾している。内面は細かい横ヘラミガキ、外面はハケ目後に疎らな横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は橙肌色を呈す。2は小型丸底壺である。体部は球形に近く、口縁部はわずかに内湾し短く伸びる。内面は疎らな横ヘラミガキ、外面は緻密なヘラミガキを行い、先行するハケ目が観察される。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。

3は大型の在来系甕である。胴部は長胴で底部は尖底気味の丸底となる。胴部最大径は上位に位置し、頸部は締まらず、口縁部は直線的に伸びてあまり開かない。端部は上方に尖り外側に面をなす。頸部の屈曲部に低い三角突帯を巡らせ、また胴部下半にヘラ刺突による刻目突帯を巡らせる。調整は内外面とも粗いハケ目調整を行う。胎土に粗砂を多く含み色調は黄灰色を呈す。

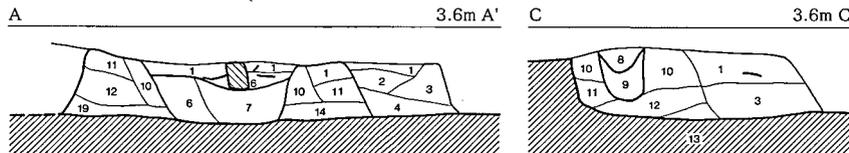
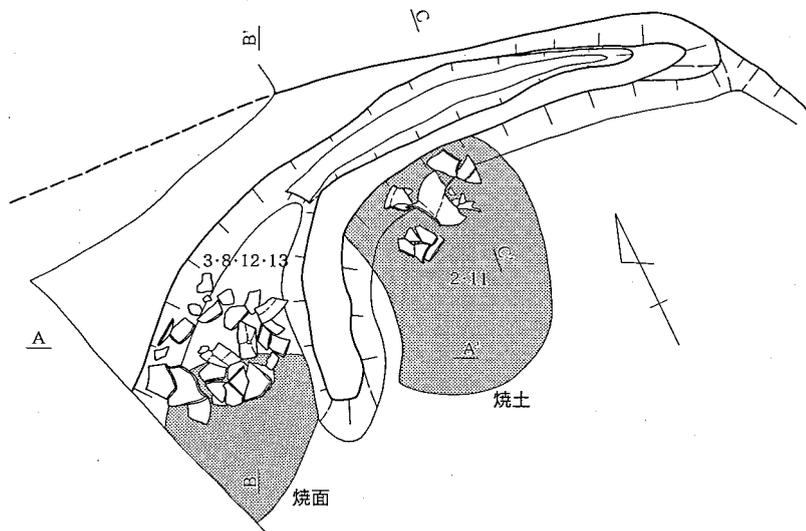
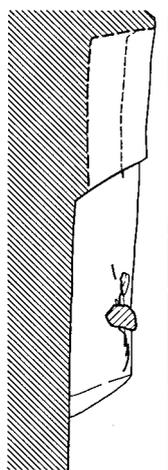
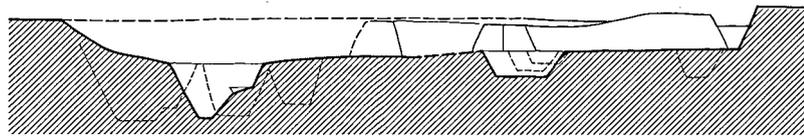
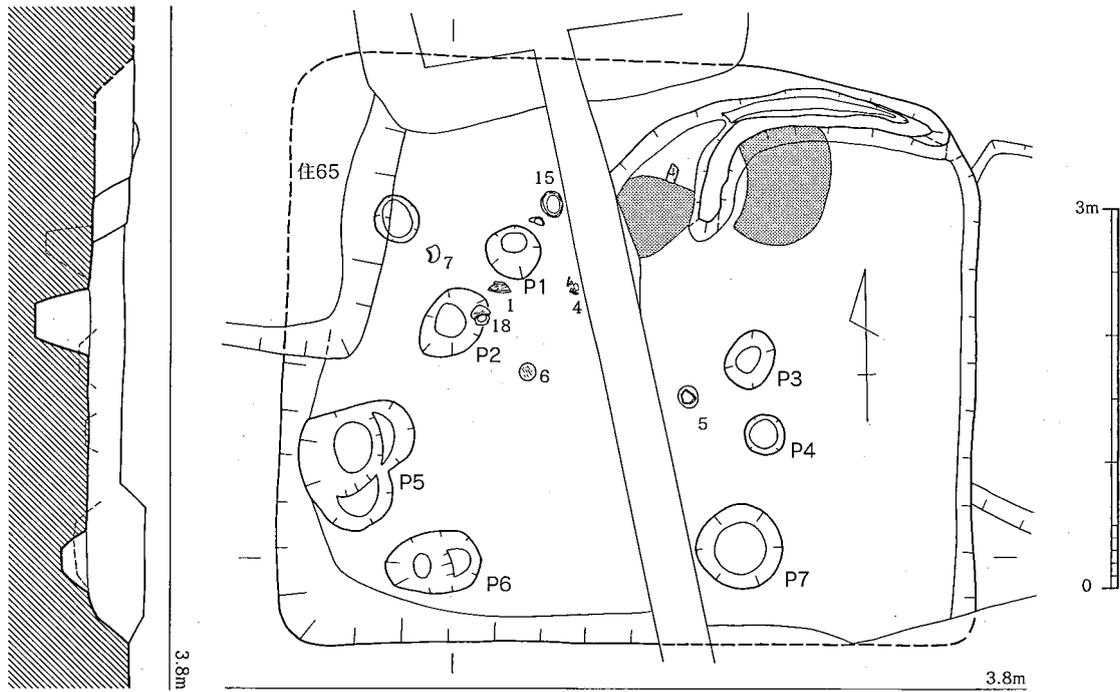
4～7は鉢である。4・5は直口縁の鉢。4は内面にやや幅広の縦ヘラミガキによる暗文を施す。外面は風化が著しく調整不明。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。5は内面と口縁部外面がナデ、外面の下半はハケ目。胎土に砂粒を若干含み色調は橙茶色を呈す。6は外反口縁の鉢。口縁部は短く伸び、あまり開かない。屈曲部内面には弱い稜を有す。風化が著しく調整は不鮮明だが、外面にはわずかに縦ハケ目が見られる。胎土は砂粒を若干含み粗い。色調は肌茶色を呈す。7は体部の深い直口縁の手握ね鉢。胎土は精良だが焼成がかなり悪く、色調は灰白色を呈す。

8・9は小型の手握ね土器である。どちらも脚部を持つようだが折損するため脚部の形状は不明。坏部は浅い鉢形である。8は胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。9は脚部との接合部にヘラによる刻目を施し接合の強化を図る。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。

67号竪穴住居跡 (図版29、第143図)

II区北6・7で検出した竪穴住居跡である。65・68号竪穴住居跡と重複しており、これらよりも古い。この重複や校舎基礎の攪乱によって一部を失うが、ほぼ全体が把握できる貴重な例である。南北長4.6m、東西長5.4mを測り、平面形は南北にやや長い長方形プランとなる。総床面積は24.4m²を測り比較的大型の部類に含まれる。床面は南西隅が若干深くなるが、他の部分ほぼ水平となる。ピットはP1～P7を検出することができた。このうちP2・3・6・7は深さにやや疑問が残るものの、位置関係から支柱穴と考えられるものである。P2は径45～65cm、深さ45cm、P3は径35～45cm、深さ10cm、P6は長軸75cm、短軸45cm、深さ45cmで、東側に深さ20cmのテラスを有す、P7は径65cm、深さ20cm。深さの相違に関しては、地山が砂層のため埋没中に柱穴の周囲が崩れ、掘削時に柱穴覆土と地山との区別がつかなかったためであろう。P5は、規模、深さともに大きくしっかりしたものである。長軸110cm、短軸75cm、深さ50cm、東と南にそれぞれテラス状の段を有す。北壁側にカマドを配置する。

67号竪穴住居跡カマド (図版29、第143図) 住居北壁の中央からやや東寄りに位置するカマドで、煙道が北壁に沿って北東コーナーまで伸びる、いわゆるL字形カマドである。カマドの本体は北壁の中央から約50cm東寄りに位置する。主軸は住居の南北主軸からやや東にずれる。右袖は長さ180cm、幅80cm、高さ50cm。左袖は推定で長さ230cm、高さ55cm。カマド内部には柱状の石製支脚が遺存する。カマドの奥から支脚までは120cmを測る。支脚の位置での燃焼部の幅は90cm、



- 1. 灰褐色細砂
- 2, 1, 3
- 3. 茶褐色細砂 (廃棄焼土)
- 4. 3よりやや薄い
- 5. 赤灰褐色細砂 (焼土)
- 6. 赤褐色細砂 (焼土)
- 7. 6+茶褐色細砂
- 8. 1に黒褐色粘土粒混入
- 9. 黒灰色細砂+粘土
- 10. 茶褐色粘土に細砂若干混じる
- 11. 黄灰色細砂+黒灰色細砂
- 12. 黄灰色細砂+灰色細砂
- 13. 黄灰色細砂 (地山)
- 14. 13と大差なし

第143図 67号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

焚き口での幅は120cm。支脚の手前から焚き口の前面にかけて広く焼土が拵がる。図上では支脚は火床面から15cm程浮いた状態にある。これは掘削段階で初期火床面まで掘り下げたため、支脚の底部の位置は最終段階の火床面ということになる。これは断面土層図からも検証できる。住居廃棄時にはカマド内に土器を廃棄しており、支脚周辺に土器が破碎した状況で出土した。カマド右袖の東側には焼土が厚く堆積しており、恐らくカマド内から掻き出された焼土をここに置いていたのであろう。この上にも土器が廃棄された状況で出土している。

煙道はカマド奥から北壁に沿って北東コーナーまで伸び、コーナーで煙を排出する構造となる。長さ3.5m、内部の幅は西側で35cm、中央で45cm、先端は15cmを測る。深さは西側で10cm、先端はやや浅く8cm。この煙道部でも初期段階と最終段階で深さが異なる事が判った。火床面と煙道との比高差は初期段階、最終段階とも約5cmを測る。カマド構築には内面に茶褐色の粘土を使用し、外側に肌理の細かな細砂を使用する。袖、煙道とも非常によく締まり堅牢に構築される。

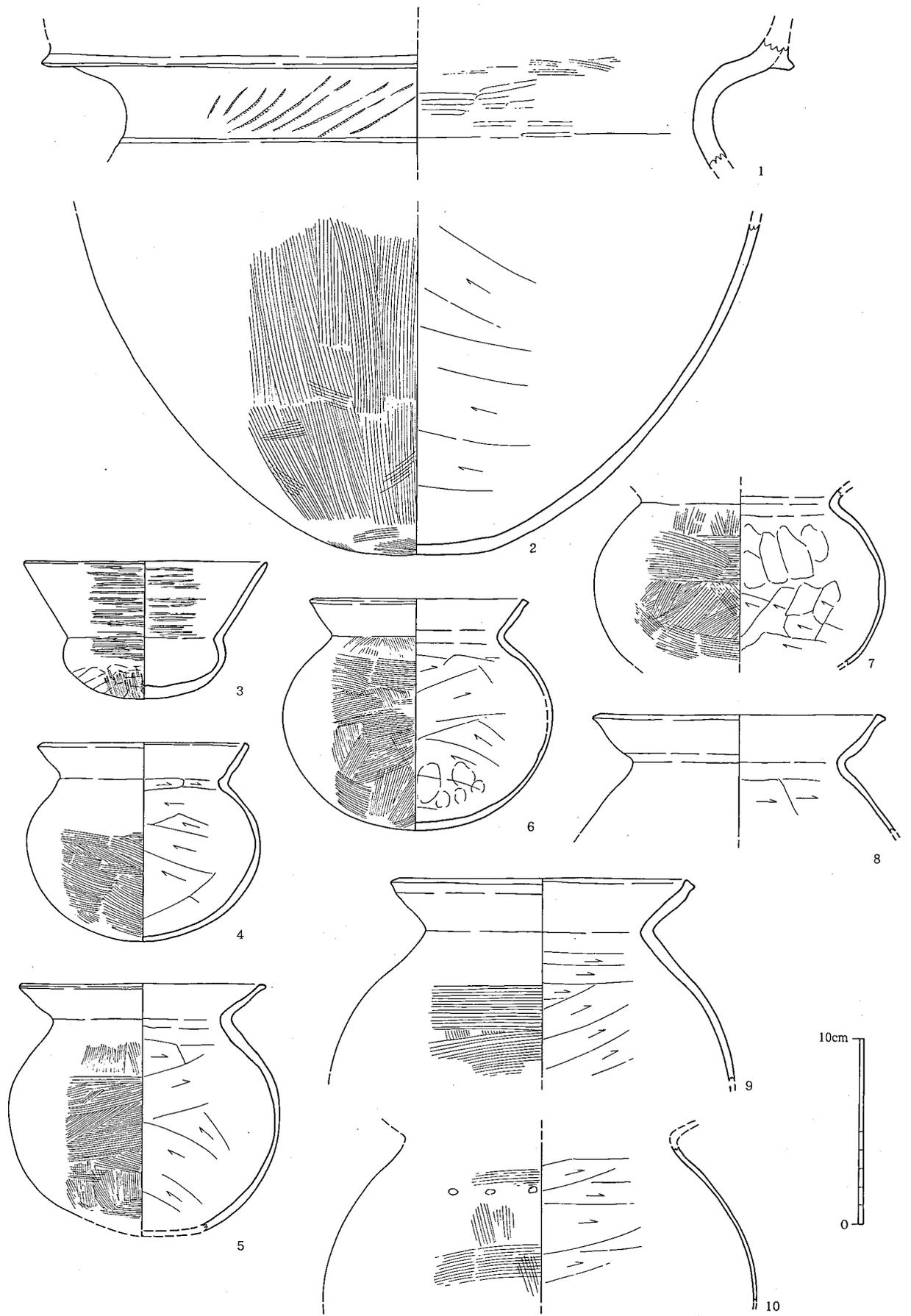
出土土器は比較的多い。図示した土器の内、2・11はカマド東側から若干浮いた状態で出土、3・8・12・13はカマド内から出土、カマド前面から西側にかけては1・3・4・6・7・15・18かいずれも床面から10cm程浮いた状態で出土、5も床面から10cm程浮いた状態で出土した。これら以外は覆土中から出土した。土器の他、砥石、磨石、黒曜石剥片が出土している。

出土土器 (図版70・71・86、第144・145図)

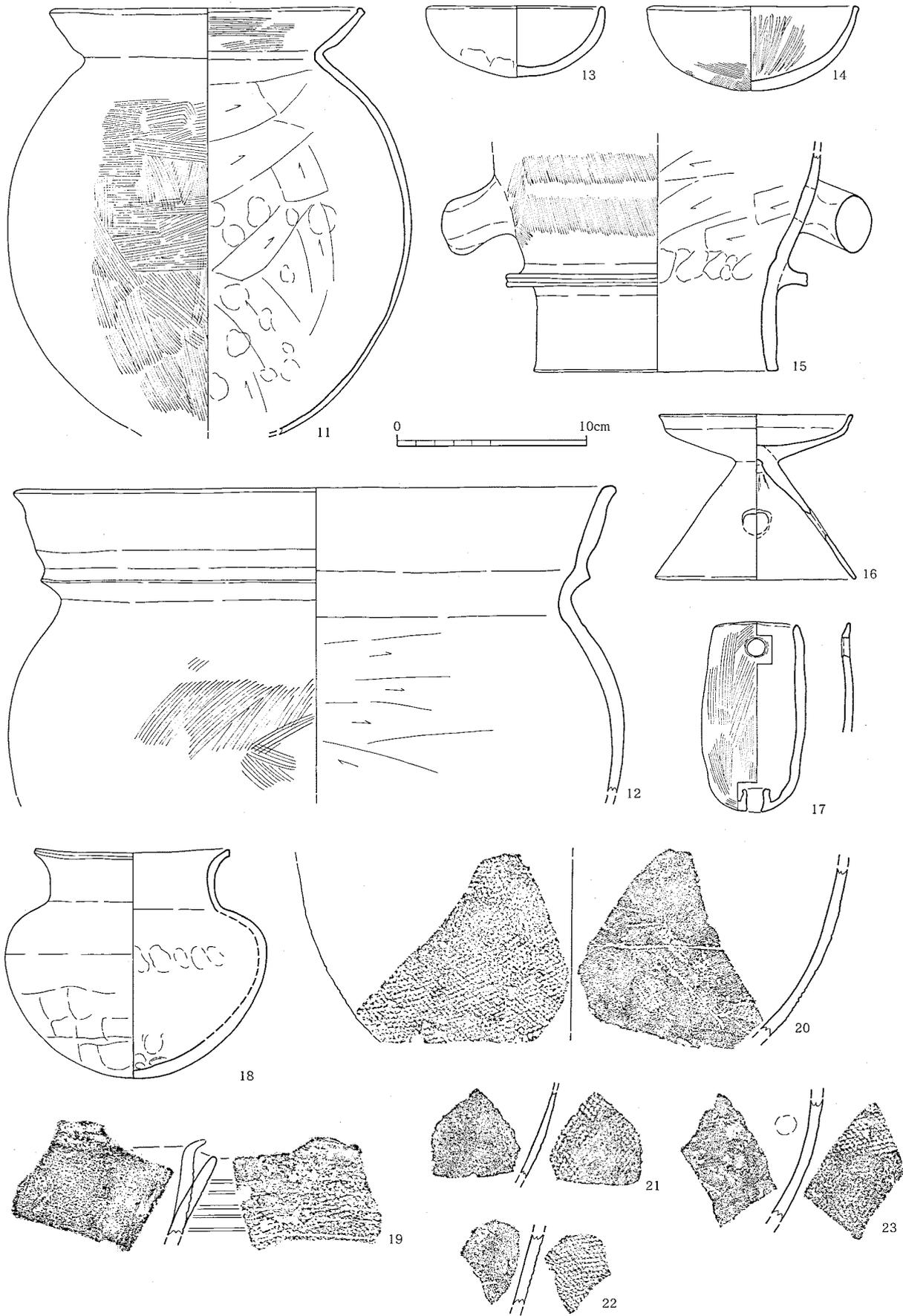
1は大型の二重口縁壺である。一次口縁部は丸く外反し、二次口縁部との境の外面に三角突帯を貼付する。頸部には一条の沈線を巡らせ、その上にはハケ目状工具の刺突による平行斜線文を施文する。頸部内面の調整は、上半が横ハケ目の後に横ナデ、下半が横ヘラミガキを行う。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄褐色を呈す。2は山陰系二重口縁壺の底部である。底部は平底気味の丸底で、胴部は倒卵形になると思われる。内面は横ヘラケズリ、外面は縦ハケ目、底面もハケ目調整を行う。色調は黄灰褐色。3は精製の小型丸底壺である。体部は扁平で浅く、口縁部は直線的に開く。体部内面はナデ、外面の上半は横ヘラミガキ、下半はヘラナデの後に一定方向のヘラミガキ、口縁部は内外面とも横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は肌色を呈す。

4~11は甕である。4~7は小型の布留系甕。4は胴部が扁球形で最大径が上方にある。口縁部は立ち気味に開き、端部のつまみ出しはほとんどない。胴部外面のハケ目は全て横方向で縦方向には施されない。内面のヘラケズリは屈曲部近くにまで及ぶ。色調は黄灰褐色を呈す。5は扁球形の胴部に大きめの口縁部を持つ。口縁部の先端近くは器壁が薄くなり、端部のつまみ出しはみられない。色調は黄灰褐色。6も扁球形の胴部で頸部がよく締まる。口縁部は立ち気味に開き、ほとんど内湾していない。端部は面をなすが、つまみ出しは行わない。内底部には指圧痕が残る。色調は黄灰褐色を呈す。7は最大径が中位にある扁球形胴の小型甕。色調は黄灰褐色。8は口縁部が内湾しながら立ち気味に開き、口縁端部の外側をつまみ出す。色調は黄灰褐色。9は胴部に対して口縁部の径が小さい。口縁部は立ち気味に開き、端部付近で内湾する。端部は面をなす。色調は黄灰褐色。10は肩部が丸みを帯びるが張りが無い。器壁は薄い。肩部外面に棒状工具の刺突による列点文を巡らせる。色調は黄褐色。11は長胴気味の胴部で、最大径が中位にある。口縁部は内湾気味に大きく開き、内端部を丸くつまみ出す。口縁部内面には横ナデに先行する横ハケ目が残る。また胴部下半には指圧痕が広い範囲で認められる。色調は黄灰褐色。

12は山陰系の大型二重口縁鉢である。肩部は緩く内湾し、一次口縁部は外反度が弱い。二次口縁



第144图 67号竖穴住居迹出土土器实测图① (1/3)



第145图 67号竖穴住居跡出土土器実測图② (1/3)

部は直線的に開き、端部を外側に丸くつまみ出す。全体的にシャープさに欠ける。色調は黄灰褐色を呈す。13は小型の半球形鉢である。内外面ナデ仕上げで外底部には指圧痕が残る。胎土に砂粒を若干含み色調は淡黄灰色を呈す。14も半球形の鉢。内面は縦方向の放射状ヘラミガキ、外面の上半は横ナデ、下半は細かいハケ目。胎土に砂粒を若干含み色調は肌灰色を呈す。

15は山陰系の甑形土器である。どちらを口縁部と考えるかについては未だ確固たる定説が無いようなので、とりあえず径の小さい方を下に図示している。裾部はほぼ直立し、端部は平坦面をなす。鐳部は強い横ナデを加えて端部がシャープな面をなし、また上下両側から強くナデを行うために中央の器壁が薄くなる。この鐳部から体部にかけてはわずかに丸味を帯び、なだらかに開いていくようである。鐳部の上には半環状の把手を両側に取り付ける。断面は縦長の楕円形を呈し、整形は指ナデによる。体部との接合は、体部に穿孔した後に把手の端部を挿入する手法を採る。そのため内面には丸い接合痕が明瞭に残る。裾部は内外面横ナデ、鐳部内面は鐳部の接合時に行った指オサエ、これより上部はヘラケズリ。体部外面は細かいハケ目を行い、把手が取り付く位置に細い横ナデをあたかも計画線のように一条巡らせている。胎土は石英・長石の細砂粒、粗砂粒を若干含み、胎土の面では西新町遺跡で最も多く出土する山陰系二重口縁壺や布留系甕と変わらないように見える。色調は黄灰褐色を呈し、やはり山陰系二重口縁壺等と同様である。

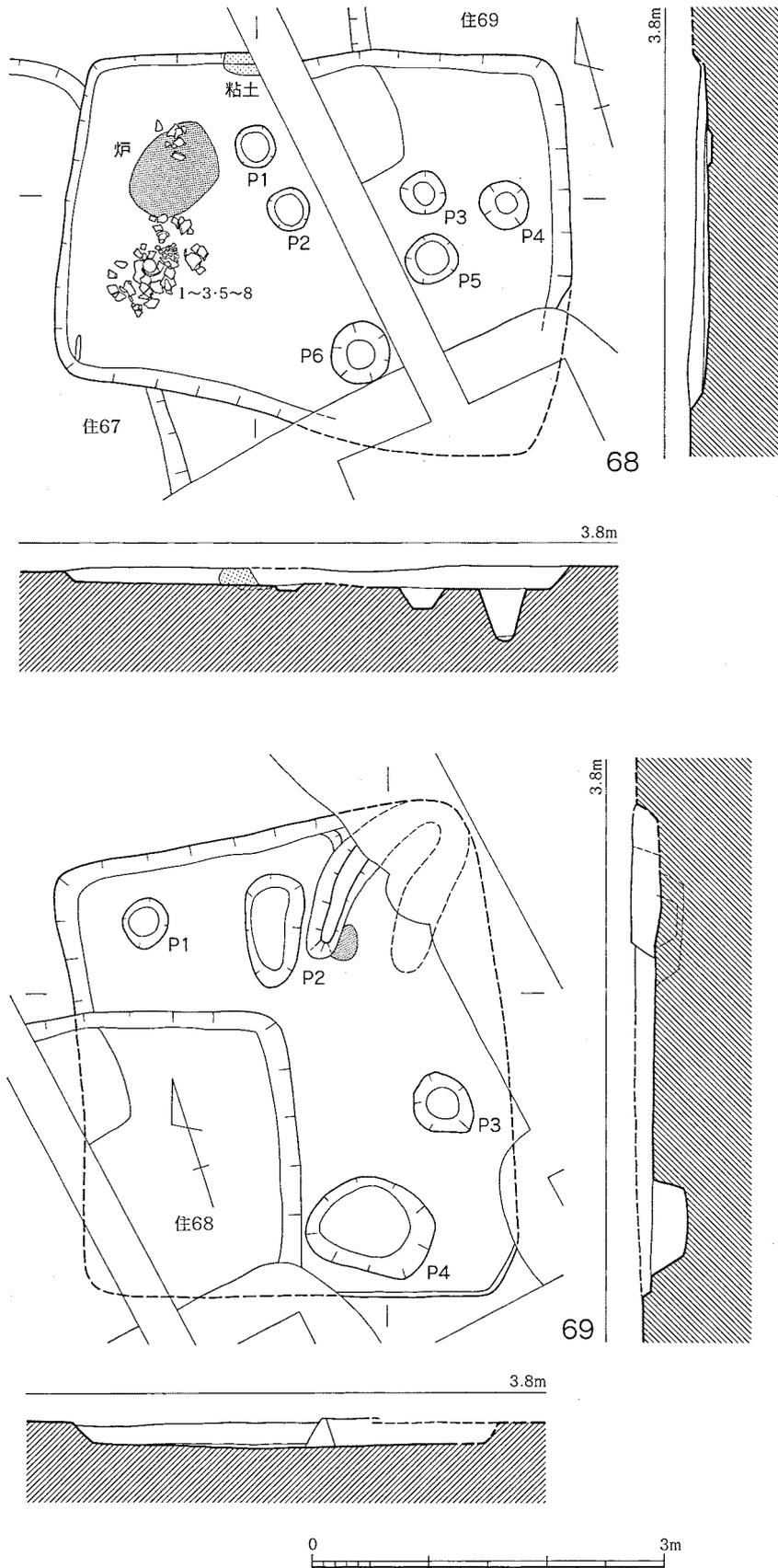
16は小型器台である。受部の立ち上がりは外反が顕著ではない。屈曲部は不明瞭である。裾部は直線的に開き、2ヶ所に穿孔を行う。全体的に風化が著しく調整不明。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。17は蛸壺である。器高の割に径が小さく細身の器形となる。内面はナデ、外面は縦ハケ目を行う。底部には水抜孔を穿孔する。胎土に砂粒を若干含み色調は黄褐色を呈す。

18~23は半島系の土器である。18は完形の陶質壺。底部は尖底気味の丸底で、最大径がかなり上位に位置し、肩が大きく張る器形となる。口縁部は大きく外反し、端部は外側にシャープな面を形成する。口縁部の内面と、外面の口縁部肩部のやや下には回転ナデを行う。内面の肩部から内底部にかけては静止横ナデ。外面の下半は静止ナデ。内面の肩部付近と底部付近には指圧痕が残る、外面には指オサエやヘラナデに起因すると思われる整形時の稜線がかすかに残る。また底部と肩部の中間にあたる位置には粘土紐の接合痕が明瞭に残る。胎土には微砂をわずかに含むものの、ほとんど砂粒を含まず、水澆した精良な粘土を使用する。色調は暗赤紫色を呈す。焼成は良好で堅緻に焼き上がる。19は軟質片口鉢の口縁部である。外面は小さな斜格子タタキ後に平行沈線を巡らす。内面はナデ。胎土に石英、長石、雲母の粗砂粒を若干含み、やや粗さが目立つ。色調は黄灰褐色を呈す。20は19と同一個体である。傾きにやや不安が残る。外面は小さな斜格子タタキ、内面はナデだが砂粒の移動が認められるため、先にヘラケズリを行ったようである。21は瓦質土器である。外面は小さな斜格子タタキ、内面はナデ。胎土は比較的精良で色調は内面淡黄灰色、外面黒褐色を呈す。器壁も薄く焼成も良好である。同一個体と思われる小片がもう1点出土している。22は軟質土器である。外面小さな斜格子タタキ、内面ナデ、胎土に砂粒を若干含み色調は黄褐色。焼成は良好で堅緻に焼き上がる。23は22と同一個体である。外面は小さな斜格子タタキの後に下半をナデ消す。内面はヘラケズリ後ナデ消しており、部分的に指圧痕が残る。

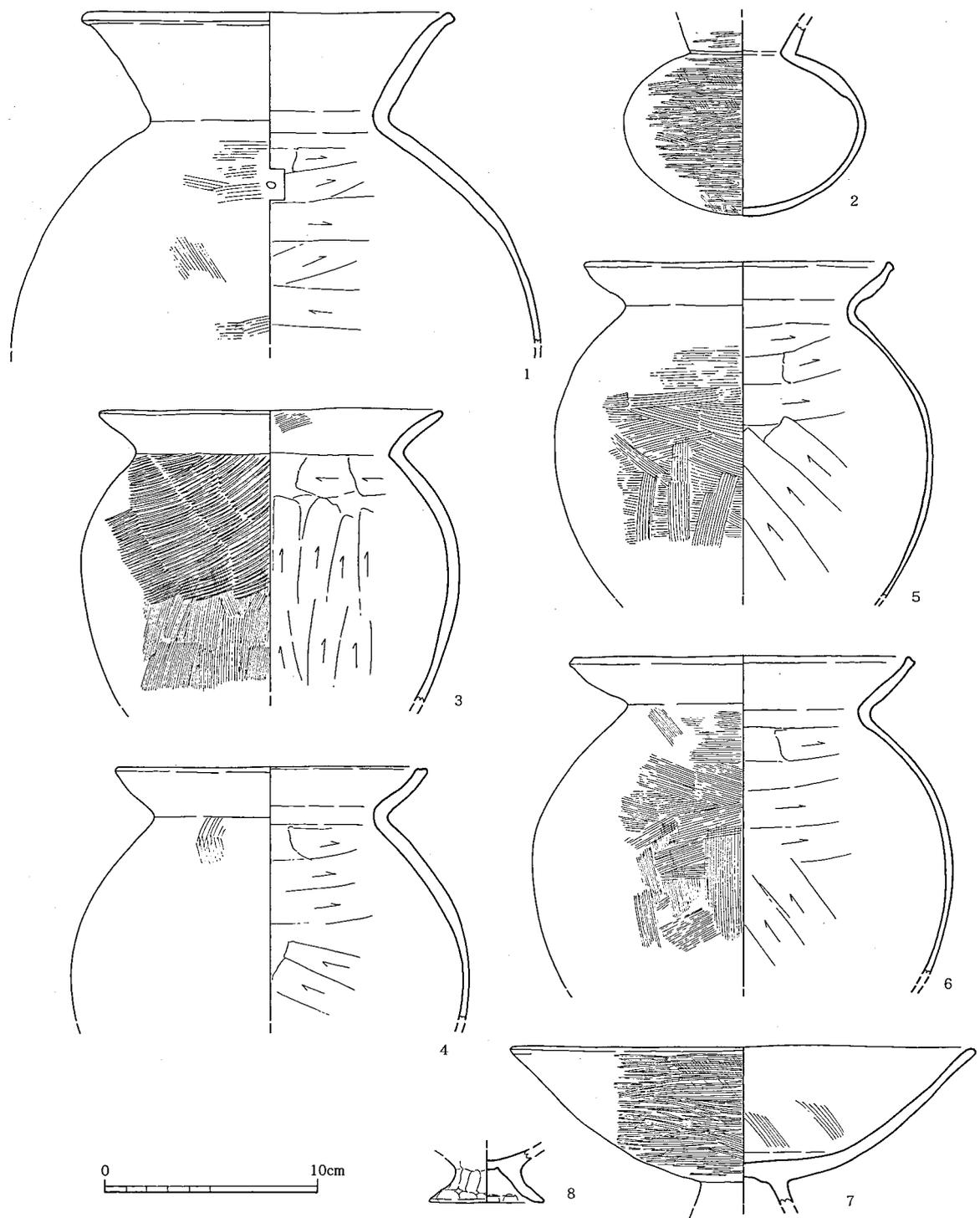
68号竪穴住居跡 (図版29、
第146図)

II区北7・8で検出した竪穴住居跡である。67・69号竪穴住居跡と重複しており、これらよりも新しい。一部校舎の基礎によって攪乱を受けるもののほぼ全形が把握できる。東西長4.3m、短軸3.0mを測り、東西に長い長方形プランとなる。総面積は13.4m²を測り、中型の部類に含まれる。床面は東側がやや深くなっており、西側は深さ15cm、東側は20cmを測る。床面のかなり西側に寄った位置で長軸90cm、短軸60cmの広さの焼面を検出した。炉跡と考えてよいだろう。また北壁際で粘土塊を検出した。大半が校舎の基礎に壊されるので推測だが、恐らく出入口に関する施設と思われる。ピットはP1～P6を検出した。住居の平面形から二本柱が想定されP2とP3またはP4が相応しいと考えたが深さに不安が残る。P1は径35cm、深さ5cm、P2は径35cm、深さ5cm、P3は径40cm、深さ18cm、P4は径40cm、深さ45cm、P5は径45cm、深さ15cm、P6は径50cm、深さ20cm。

遺物は西側で比較的まとまって出土した。床面からはやや浮いているので廃棄



第146図 68・69号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第147図 68号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

されたものであろう。図示したものの内、1~3・5~8がここから出土している。これら以外は覆土中から出土したものである。土器の他、砥石が出土している。またP4からはアサリを主体とし、わずかにカキを含む貝殻が出土している (図版94)。

出土土器 (図版71・72、第147図)

1は畿内系の直口壺である。肩部が丸味を帯び頸部は強く締まり、口縁部は外反して大きく開く。端部は面をなし、外端部をわずかにつまみ出す。肩部にはかなり間隔を空けて計6ヶ所に小さな列点

文を巡らせる。口縁部は内外面横ナデ、胴部は内面横へラケズリ、外面ハケ目後横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。2は畿内系の精製直口壺である。胴部は扁球形で最大径が中位に位置する。頸部は強く締まる。内面はナデ、外面は斜ハケ目後細かい横へラミガキ。胎土は精良。下地の色調は肌色を呈し、器表全面に橙肌色の化粧土を塗布する。

3～6は甕である。3は庄内系の甕。胴部は長胴気味で肩があまり張らず、本来の庄内甕と大きく異なる。口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。全体的に器壁が厚い。胴部内面は屈曲部直下のみ横へラケズリを行い、これより以下は縦へラケズリを行う。へラケズリは屈曲部にまで及び、屈曲部内面の稜はシャープである。口縁部は横ナデを行うが、これに先行する横ハケ目が内面に見られる。胴部外面は上半に細かい右上がりタタキを行い、その後下半に細かい縦ハケ目を行う。胎土にかなり大きめの粗砂を含み、異質である。色調は黄肌灰色を呈す。焼成は良好。強い二次加熱を受け、肩部以下は黒変し、また煤が付着する。4～6は布留系甕である。4は口縁上端部が強い横ナデによって窪み、またほぼ水平になる。内面のへラケズリは屈曲部近くにまで及ぶ。外面は強い二次加熱を受け器表が剥離しており、調整に不明な点が多い。色調は黄灰褐色を呈す。外面には全体的に煤が付着する。5は長胴気味の胴部で最大径が中位近くに位置する。口縁部は内湾して開き、中央付近が肥厚する。端部は内外にわずかにつまみだし、外端部が面をなす。内面のへラケズリは屈曲部近くにまで及ぶ。色調は肌灰色を呈し、外面の肩部以下と口縁部下半には二次被熱による煤が付着する。6は5よりも肩が若干張った器形となる。口縁部は内湾しながら立ち気味に開き、内端部をつまみ出す。内面のへラケズリは屈曲部近くにまで及ぶ。色調は黄灰褐色を呈す。

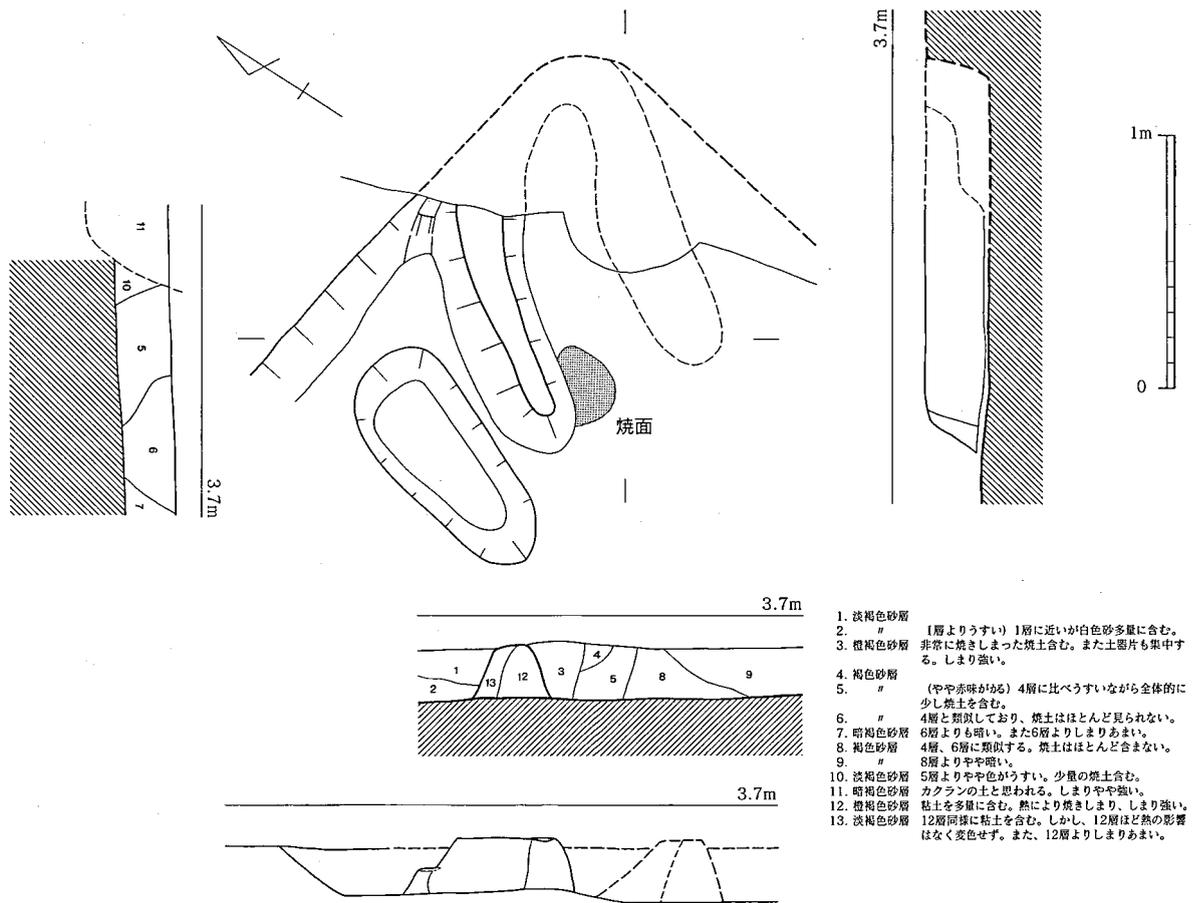
7は高坏である。屈曲部外面には不明瞭な稜を有し、体部は外反気味に開く。端部は丸い。内面は風化が進みハケ目がかすかに確認されるのみである。外面はハケ目後に細かい横へラミガキを密に行う。胎土は精良で色調は内面肌灰色、外面橙茶色を呈す。

8は製塩土器の脚部である。全面指整形を行う。胎土に砂粒を多く含み粗く、色調は二次加熱のため赤褐色を呈す。

69号竪穴住居跡 (図版30、第146図)

II区北8で検出した竪穴住居跡である。68号竪穴住居跡と重複しており、これよりも古い。一部校舎の基礎によって攪乱を受けるが全体の形状はほぼ把握できる。南北長4.0m、東西長3.7mを測り、南北にやや長い方形プランの住居跡に復元できる。総面積は14.6m²を測る。北東コーナーにはカマドが造り付けられる。床面はほぼ水平をなし、遺構面からの深さは20cmを測る。床面上ではP1～P4のピットを検出したが、位置から推察して支柱穴となりうるものはP1・P3である。P1は径40cm、深さ20cm、P3は径50cm、深さ20cmを測る。P4は住居の中軸線からやや東に寄るものの、壁際土坑としてよいだろう。長軸110cm、短軸80cm、深さ30cmを測る。

69号竪穴住居跡カマド (第148図) 住居の北東コーナーに設置されるカマドであるが、校舎の基礎によって大きく攪乱されており、遺存する部分は左袖の一部のみである。コーナーの対角線とカマド主軸とが一致するタイプと推定される。遺存する左袖は、長さ100cm、幅35cm、高さ20cm。右袖は全く検出することが出来なかった。火床はあまり残りが良くないものの、左袖に近い部分で一部検出することができた。構築には橙褐色・淡褐色細砂と粘土を混ぜたものを使用し、比較的よく締まる。



第148図 69号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

図示した出土土器の内、9・10・12はカマド周辺から出土、これら以外は覆土からの出土である。土器の他、軽石が出土している。

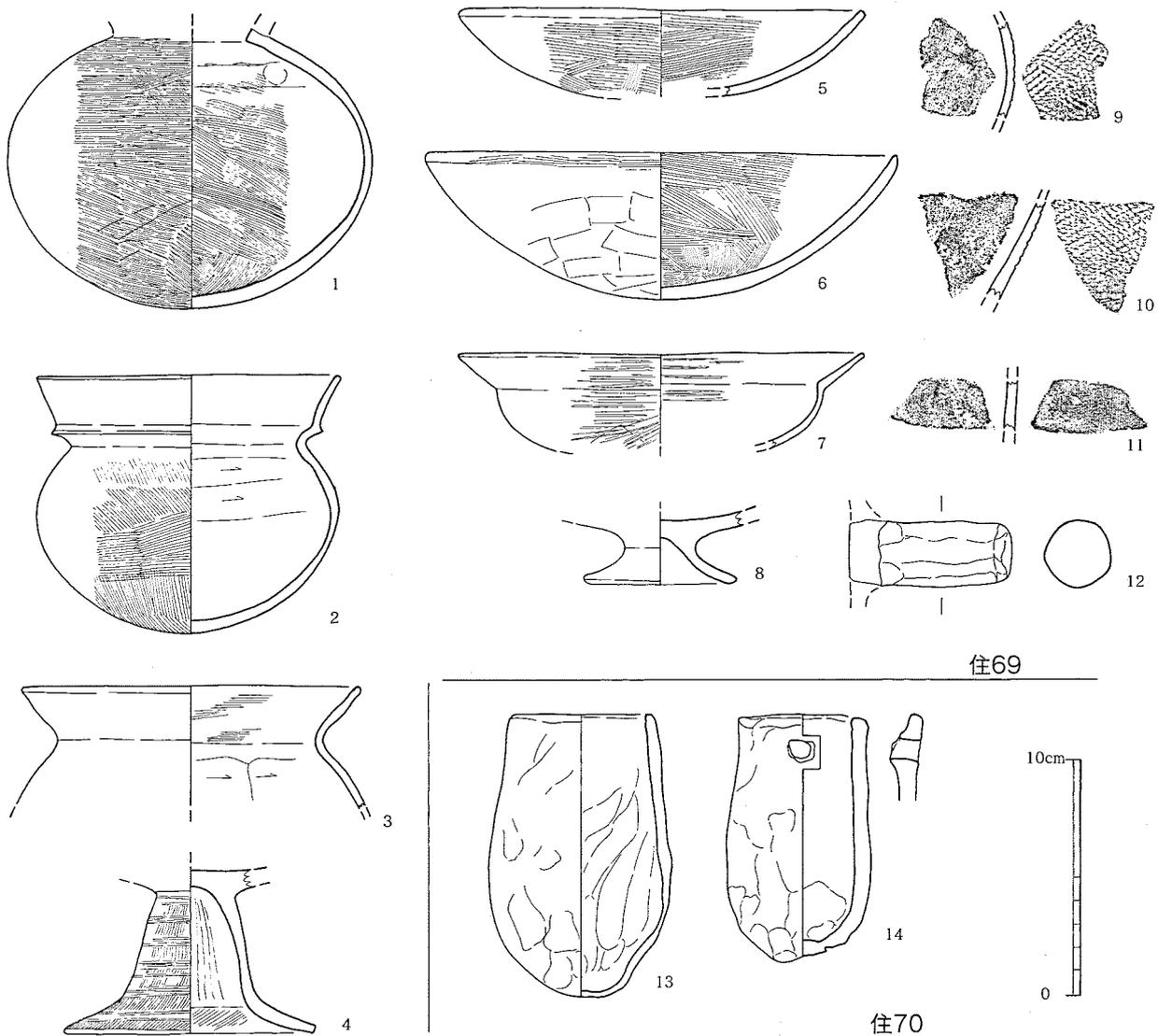
出土土器 (図版72・86、第149図)

1・2は壺である。1は畿内系の精製直口壺。扁球形で最大径が中位に位置する胴部である。頸部は強く締まる。内面は細かいハケ目調整で肩部には粘土接合痕が残る。外面は緻密な横ヘラミガキで、先行するハケ目がかすかに残る。2は山陰系の小型二重口縁壺。胴部の最大径は中位よりやや上に位置する。一次口縁部は短く外反し、二次口縁部は直線的に開く。端部は面をなす。屈曲部の外面はシャープな突帯を巡らす。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色で一般的な山陰系二重口縁壺と同質である。

3は布留系甕である。口縁部は立ち気味に開き、屈曲部はシャープさを欠く。口縁端部も丸味を帯びる。器壁は薄い。色調は黄灰褐色を呈す。

4は高坏の脚部である。柱部はエンタシス状に中膨らみとなり、裾部は緩やかに開く。端部は面をなす。柱部内面は縦ナデ、裾部内面は横ハケ目、外面は細かい縦ハケ目の後に疎らな横ヘラミガキを施す。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。

5~8は鉢である。5・6は浅めの直口鉢。5は端部に面を持ち、内外面ハケ目調整で仕上げる。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。6は口縁端部を丸くおさめる。内面はハケ目、外面は口縁部下のみハケ目、それ以下はヘラケズリをナデ消す。胎土は精良で色調は茶灰色を呈す。7は外反口

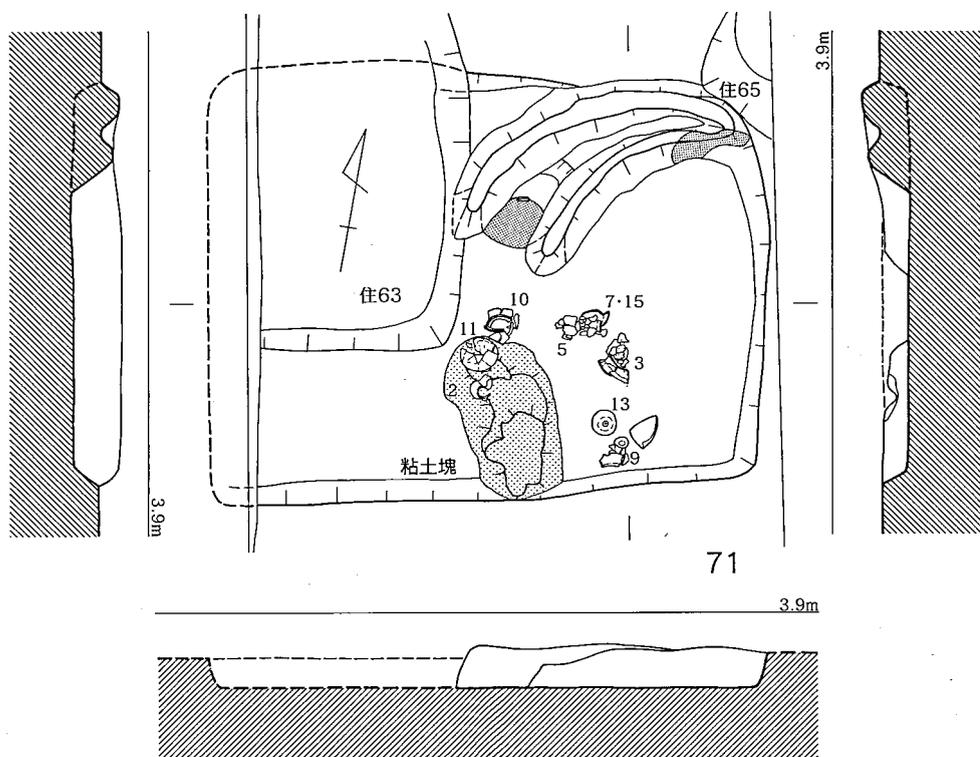
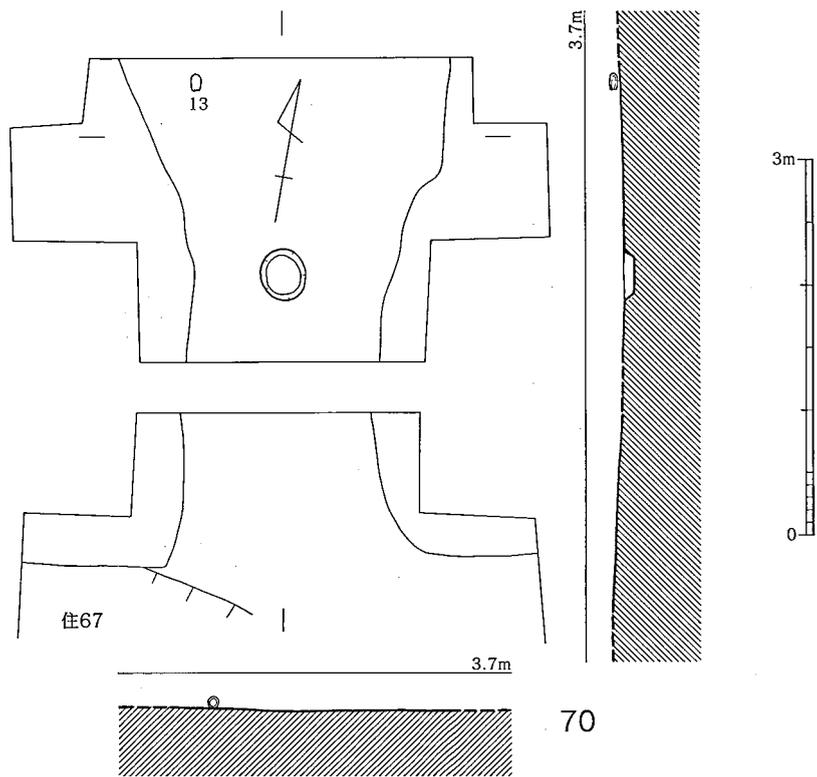


第149図 69・70号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

縁の鉢。体部は浅く、口縁部は直線的に開き端部は面をもつ。内面は口縁部から屈曲部のすぐ下まで疎らな横ヘラミガキを行う。外面は緻密な横ヘラミガキ。内面の下半はナデ。胎土は精良で色調は肌色を呈す。

8は脚付鉢の脚部である。短く緩やかに開き、端部は丸い。全面横ナデで仕上げる。胎土は精良で色調は黄肌色を呈す。

9~12は半島系の土器である。9・10は瓦質土器で恐らく同一個体であろう。9は壺の肩部片であろうが、傾きにやや不安が残る。外面は小さな斜格子タタキ、内面はナデ。胎土は細砂粒を若干含み、色調は黒灰色を呈す。焼成は良好で堅い。10の外面は小さな斜格子タタキを行い、下端にのみナデが見られる。内面はナデ。11も瓦質土器である。内外面ナデ。胎土に微砂粒をわずかに含むものの比較的精良である。色調は薄灰色を呈し、焼成は良好である。12は軟質土器の甌把手である。円柱状を呈し、水平に取り付けられたものと思われる。端部は面をなす。胴部との接合は差し込み式である。全面指ナデ整形を行う。胎土に砂粒をあまり含まず比較的精良である。色調は橙褐色。



第150图 70·71号竖穴住居跡实测图 (1/60)

70号竪穴住居跡 (第150図)

II区北3で検出した竪穴住居跡である。北側が調査区外へと続き、さらに攪乱をうけている事もあって非常に残りが悪い。壁は全く検出しておらず、遺物の出土状況と床面の状況から住居跡と判断した次第である。床面上ではピットを一つ検出しており、径40cm、深さ10cmを測る。

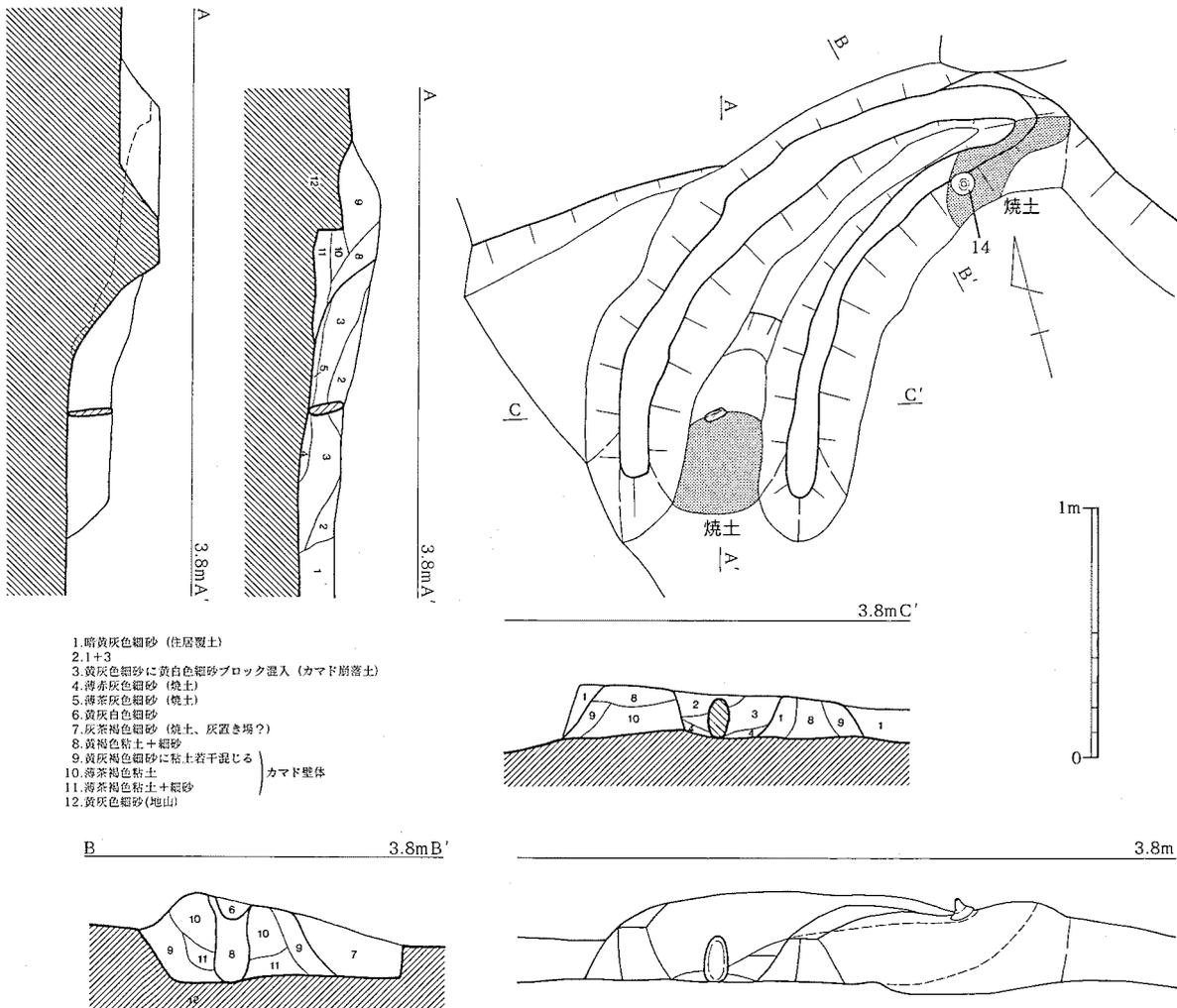
図示した2点の土器の内、13は北西隅の床面直上から出土した。14は覆土中からの出土である。

出土土器 (図版72、第149図)

13・14は蛸壺である。13は重心が下方に位置し、体部の上半は直線的に内傾する。内外面指ナデ調整。色調は橙褐色を呈す。14は13よりもやや小型になる。やはり重心が下方に位置し、口縁部へと内傾する。内外面指ナデ整形を行う。色調は内面褐色、外面黒色を呈す。器表が強い二次加熱を受け変色することから、カマドの支脚として使用された可能性が高い。

71号竪穴住居跡 (図版30、第150図)

II区北5で検出した竪穴住居跡である。60・65号竪穴住居跡と重複しており、これらよりも古い。この重複と、さらに西側が調査区外へと続いていることから西側壁は全く検出できていないが、カマドや粘土塊の位置からほぼ全体の形状は推測できる。南北長3.4m、東西長は4.3m前後になると



第151図 71号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

思われ、東西に長い長方形プランとなる。床面はほぼ水平をなし、遺構面からの深さは20cmを測る。北壁側にはL字状のカマドを付設する。また、ちょうどカマドの対面にあたる位置で粘土塊を検出した。この粘土塊は南北にやや長く、長軸125cm、短軸65cmを測る。南側が高く北側がこれよりもやや低くなり、階段状を呈す。中央部分は東西に溝状に窪み、10号竪穴住居跡の例に類似する。南側は高さ20cm、北側は高さ15cm。南側は本来はもっと高かったのであろう。位置からみても出入口施設と考えられる。

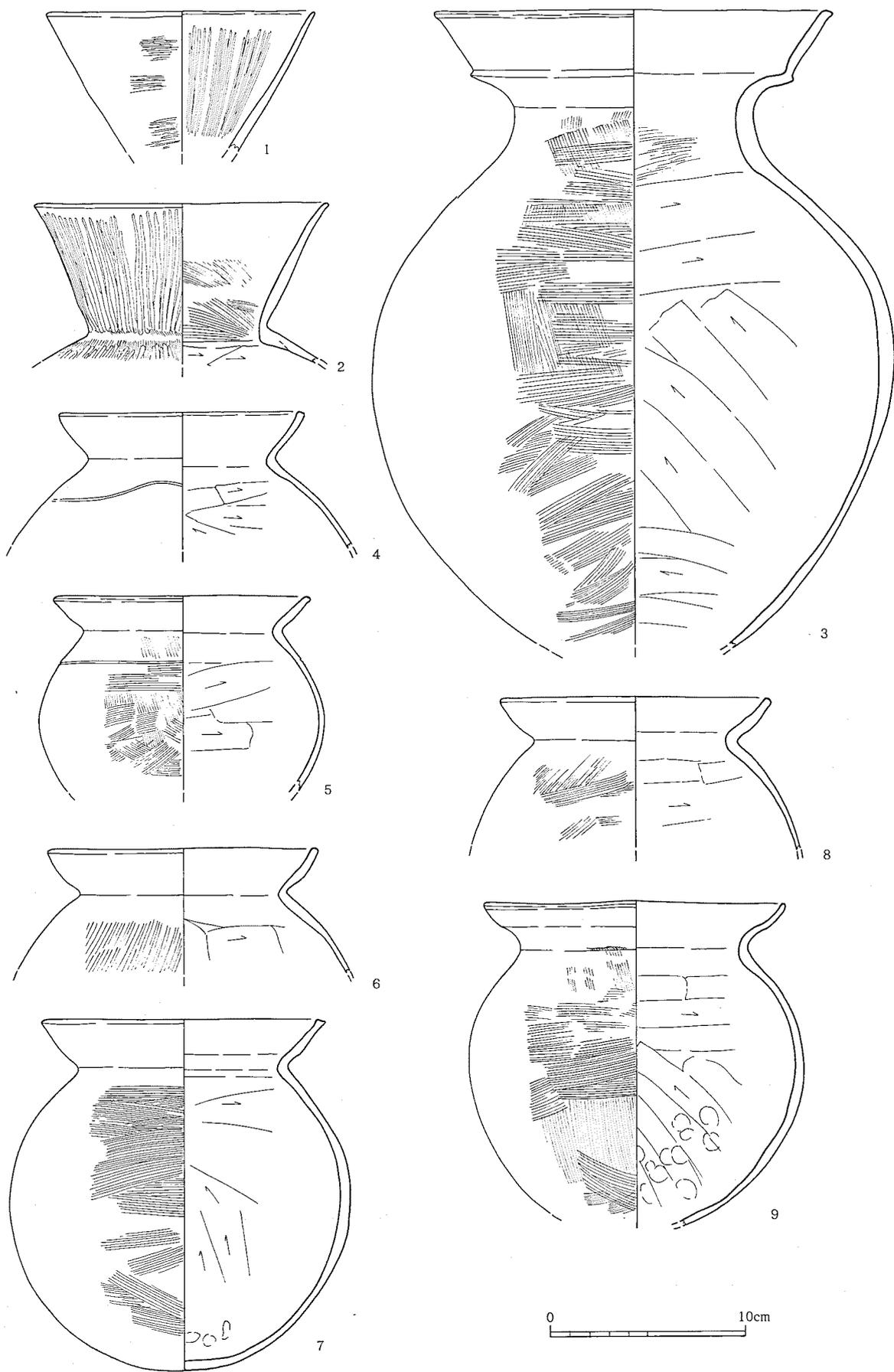
71号竪穴住居跡カマド (図版30、第151図) 住居跡の北壁に付設されるカマドである。67号竪穴住居跡カマドとともに状態の非常に良好な例である。カマド本体は北壁のほぼ中央、壁から約50cm内側に位置し、煙道は緩やかな弧を描きながら北壁に接した後、東側へと伸びている。煙道の先端は北東コーナーへと続いており、ここから煙を排出させる構造となる。いわゆるL字状カマドの構造を採る。カマド本体の主軸はコーナーの対角線から25°西に振れる。カマド本体のみの規模は、右袖長100cm、幅40cm、高さ20cm、左袖長120cm、幅55cm、高さ20cm。カマド内部では扁平な煙磔を使用した支脚を検出した。支脚はカマドの奥から40cm手前に位置する。高さは18cm。さらにこの支脚の手前から焚口にかけては火床が明瞭に残る。火床は長軸40cm、短軸30cmを測る。煙道は長さ150cmを測る。西側は幅40cmと広く、先端に行くに従って徐々に狭くなる。先端の幅は15cm。煙道西側の深さは25cm、先端部は5cm。カマド内部と煙道西側とは8cmの比高差がある。煙道の断面土層を観察すると、初期段階ではずっと深く、カマド内部とほとんど変わらない高さであったことを確認することが出来た。使用を続けていくうちに煙道内部に灰や壁面の剥落土等が堆積した結果であろう。煙道先端の南側では焼土の広がりを検出したが、これはカマド内部から掻き出された焼土をここに置いていたものと思われる。カマドの構築には細砂と粘土を混ぜたものを使用する。特に内面側は粘土の比率が高く、堅牢に構築する意図が認められる。

遺物は比較的多く出土している。特にカマド前面から粘土塊の周辺で、床面からわずかに浮いた状態でまとまって出土した。2・3・5・7・13・9・10・11・15がここから出土している。14は煙道先端の上面から出土、6・8・はカマド内覆土から出土。その他に砥石が出土している。

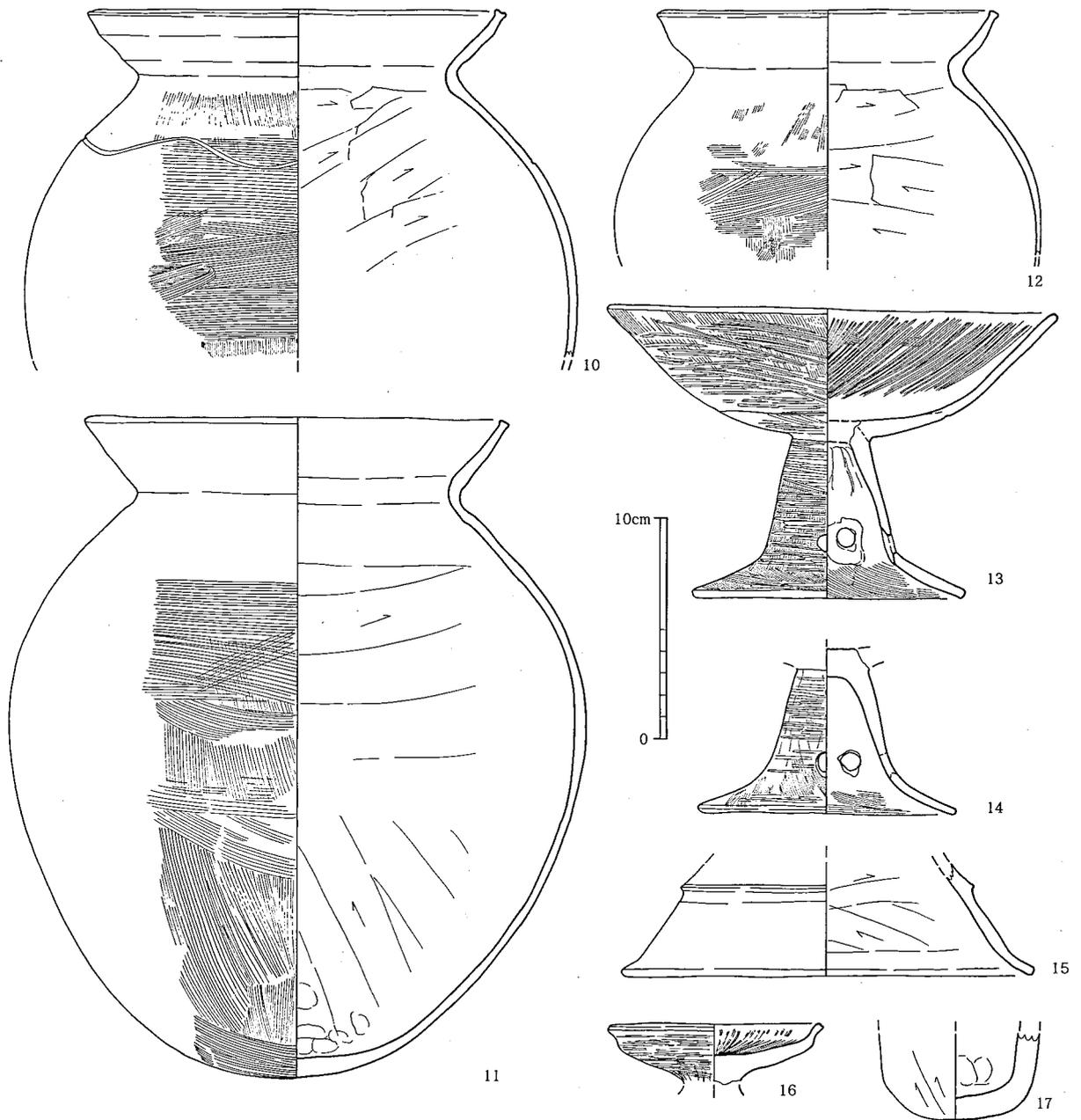
出土土器 (図版72・73、第152・153図)

1～3は壺である。1は畿内系の中型精製直口壺である。頸部から口縁部へと直線的に伸びており、端部は尖る。内面は縦ヘラミガキによる暗文を施し、外面は横ヘラミガキがかすかに観察される。胎土は精良で色調は橙黄色を呈す。2も直口壺である。頸部がやや締まり、強く外側に屈曲して口縁部へと向かって直線的に開き、端部付近のみ緩やかに外反する。端部は丸味を帯びる。内面はハケ目後に上半のみ横ナデ、外面は縦方向の暗文状ヘラミガキを行う。肩部の調整は、縦ハケ目後にやはり縦方向のヘラミガキを行っている。胎土に砂粒を若干含み、色調は茶色を呈しやや異質である。3は山陰系の二重口縁壺である。胴部は最大径の位置が中央近くにあり、やや弛れた感じを受ける。二次口縁部は直線的に開き、外端部を丸くつまみ出し上端が面をなす。頸部内面は横ナデに先行する横ハケ目が見られる。色調は茶褐色を呈す。

4～12は布留系の甕である。4は口縁部が内湾して立ち気味に開き、端部が窪む。肩部には一条の雑なヘラ描波状文を巡らす。色調は黄灰褐色を呈す。強い二次加熱を受け器表が剥離する。5は小型品。胴部最大径が中位に位置する。口縁部はほとんど内湾せず直線的に開き、端部はやや面をなす。肩部には一条の沈線を巡らす。色調は暗黄灰褐色を呈す。肩部以下が二次加熱を強く受ける。



第152图 71号竖穴住居跡出土土器実測図① (1/3)



第153図 71号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)

6は口縁部がかなり立ち気味に開き、端部は丸味を帯びるが水平面をなす。外面に横ハケ目が見られない。色調は暗黄褐色を呈す。外面の口縁部と肩部以下に煤が付着する。7は球形胴で最大径が中位よりやや上に位置する。口縁部はわずかに内湾して立ち気味に開き、端部は弱く窪み水平面をなす。肩部の横ナデは極めて狭く、屈曲部近くにしか行われぬ。色調は黄灰褐色を呈す。外面には煤が著しく付着する。8は口縁部が内湾し、立ち気味に開く。端部は丸い。色調は黄灰色を呈し外面の屈曲部以外に煤が付着する。9は胴部最大径がやや上位に位置する。口縁部は上半のみ内湾して立ち気味に開き、端部は丸くおさめる。胴部内面の下半には指圧痕が多く認められる。色調は黄灰褐色を呈し、肩部以下に煤が付着する。10は肩部が丸味を帯び、口縁部は内湾して立ち気味に開き、内端部をつまみ出すために上面が窪む。肩部には一条のヘラ描波状文を巡らす。色調は黄灰色を呈し肩部以下には煤が付着する。11は完形復元できたもの。胴部は倒卵形で最大径が中位より

やや上に位置する。口縁部は直線的に立ち気味に開き、内端部をわずかにつまみ出す。色調は黄褐色を呈し肩部以下に煤が付着する。12は口縁部が内湾し、立ち気味に開く。端部は内外にわずかにつまみ出す。色調は黄灰褐色を呈す。

13・14は高坏である。13は坏部の屈曲部外面に弱い凹線を有し、体部は直線的に開く。端部は丸くおさめる。内面は放射状ヘラミガキによる暗文を施し、外面はハケ目後に疎らな横ヘラミガキを行う。脚柱部はエンタシス状に中膨らみとなり、裾部は直線的に開く。柱部と裾部の境はなだらかで稜をなさない。屈曲部のやや上に2ヶ所の円孔を穿孔するが、半乾燥時に外側から穿孔するために内側の孔周辺の器表が剥離する。柱部内面は縦ナデ、裾部内面はハケ目、外面はハケ目後に疎らな横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は橙肌色を呈す。14もエンタシス状に中膨らみとなる柱部である。13と比べて裾部の開き方が外反気味である。調整は13と同様。穿孔は2ヶ所。胎土は精良で色調は橙褐色を呈す。

15は山陰系の鼓形器台である。突帯はかなり低い。内面はヘラケズリ、内端部と外面は横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。16は精製の小型器台である。受部の立ち上がりは外反し、端部が外側を向く。屈曲部の稜は弱い。内面は放射状ヘラミガキによる暗文、外面は緻密な横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。

17は蛸壺の底部である。底面は平底に近い丸底で、外面はヘラナデ上げを行う。胎土は蛸壺にしては比較的精良で色調は黄灰褐色を呈す。

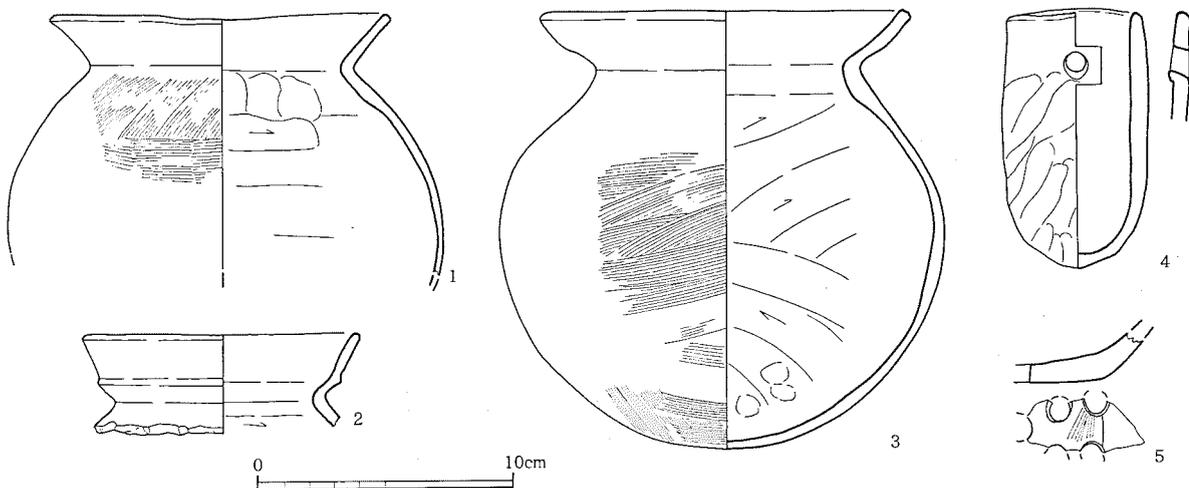
72号竪穴住居跡 (図版31、第155図)

II区南3で検出した竪穴住居跡である。64号竪穴住居跡から3m北西に位置する。他の住居跡とは重複していないが、付近は以前校舎の中庭だったためにゴミ穴等多く掘られ、当住居跡も大きく攪乱を受ける。西壁長は4.0mを測る。東西長は不明。東西に長い長方形プランとなる。床面は北東側がやや高くなるもののほぼ水平になる。遺構面からの高さは25cm。覆土は壁際付近は黄褐色細砂、中心付近は黒褐色細砂となる。

出土遺物は少ないが北側の床面上で1~3がまとまって出土した。4・5は覆土中からの出土である。他に台石が出土している。

出土土器 (図版73・74・86、第154図)

1~3は甕である。1は胴部が丸味を帯び、胴部に対して口縁部の径が小さい。口縁部は外反気味

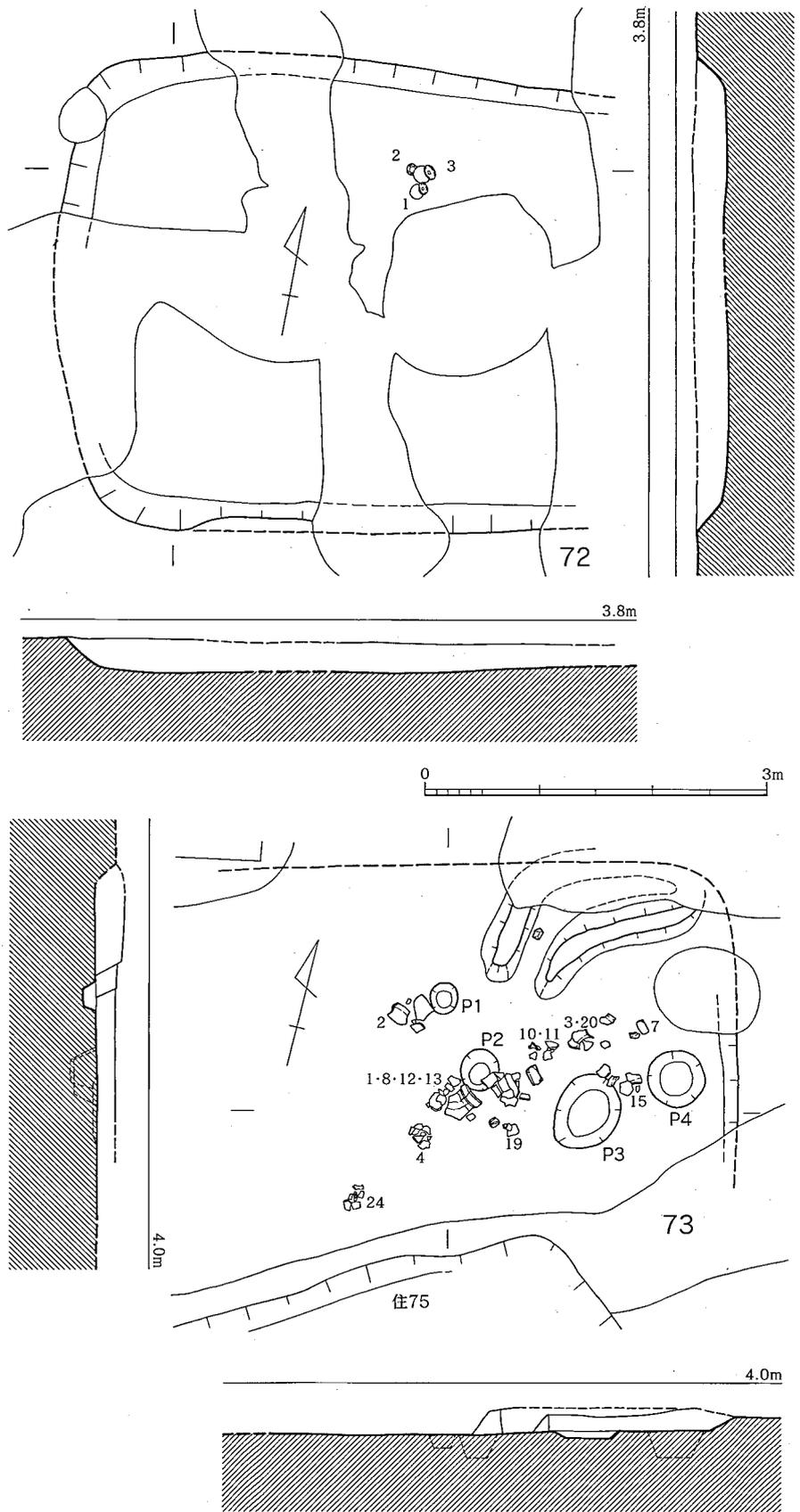


第154図 72号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

に開き、端部は丸くおさめる。色調は黄灰褐色を呈す。2は山陰系の小型二重口縁甕である。一次口縁部と二次口縁部の屈曲部の外側には三角突帯を巡らせるが、内側の屈曲は不明瞭である。二次口縁部は直線的に開き、端部は丸くおさめる。肩部の割れ口を観察すると、外側から故意に打ち欠いたように見受けられる。色調は黄灰褐色を呈す。3は球形胴で肩部が直線的である。口縁部は内湾しながら開き、端部は面をなすもののシャープさに欠ける。全体的に器壁が厚い。色調は黄灰褐色を呈す。外底部には煤が付着する。

4は蛸壺である。底部は尖底気味で体部は垂直に立ち上がり、スリムな器形である。内外面指ナデ調整を行う。色調は黄灰褐色を呈す。

5は半島系軟質土器の甑底部片である。底部と体部の境目にある外面の稜は弱い。内面には稜をなさず、スムーズに移行する。蒸気孔は小さな円孔である。内面はヘラケズリ、外



第155図 72・73号竪穴住居跡実測図 (1/60)

面の体部はナデ、底面はかすかにハケ目が見られる。胎土に砂粒を若干含み色調は黄褐色を呈す。焼成は良好である。

73号竪穴住居跡 (図版31、第155図)

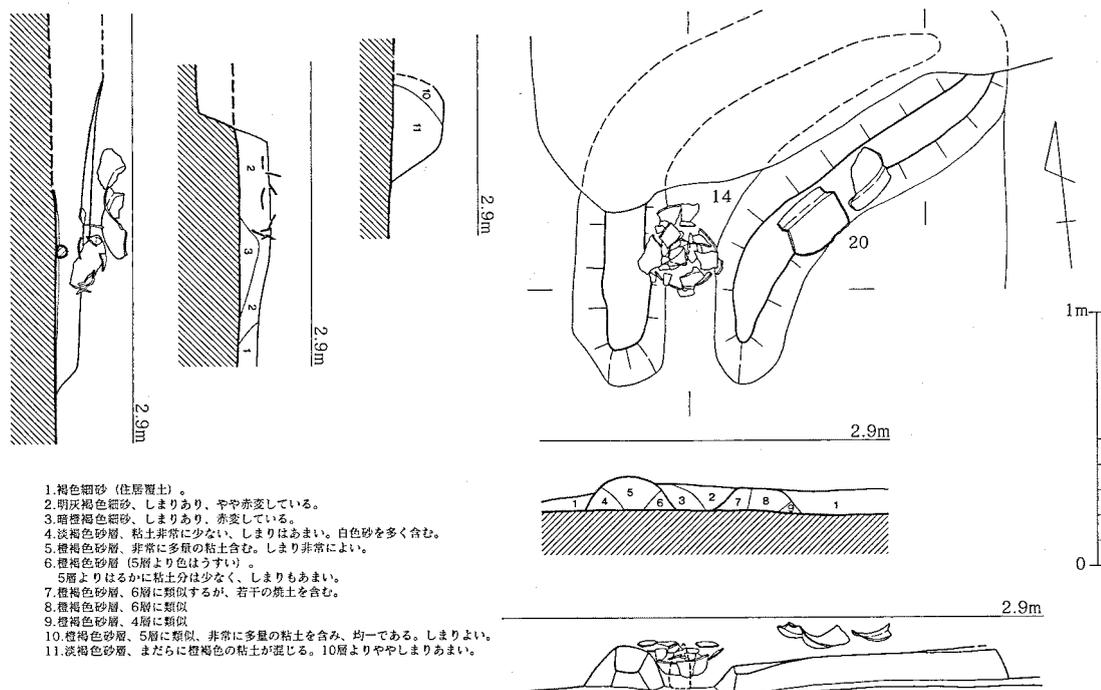
II区南3で検出した竪穴住居跡である。68号竪穴住居跡から3m南側に位置する。攪乱や削平などのため遺存状態はあまり良くなく、特に西側は壁を検出することが出来なかった。床面はほぼ水平をなし、遺構面からの深さは最も残りの良い場所で15cmを測る。住居跡の北東にはL字状のカマドが付設される。床面上ではP1~P4を検出したが、支柱穴となるかどうかは不明である。

73号竪穴住居跡カマド (図版31、第156図) 住居跡の北壁に付設されるカマドである。煙道が北壁に沿って東に伸びる。煙道の先端はコーナーに位置し、ここから煙を排出する構造となる。いわゆるL字状カマドの構造を採る。煙道の大部分を攪乱されており、全体の長さは不明。カマド本体の規模は、右袖長70cm、幅35cm、高さ10cm、左袖長は推定で100cm、幅35cm、高さ15cmを測る。主軸は住居コーナーの対角線とほぼ平行する。内部には円柱状の石製支脚が遺存する。覆土には焼土が含まれるものの、火床は明確には検出できなかった。支脚付近からは土器がまとまって出土したが、床面からはやや浮いた状態である。また右袖の東側からもややまとまって土器が出土したが、これも床面からはやや浮いている。煙道は推定で100cmの長さに復元される。カマド本体・煙道も含め、先述の67・71号竪穴住居跡よりも規模が若干小さいものである。カマドの構築には粘土と細砂を混ぜて使用し、堅く締まる。

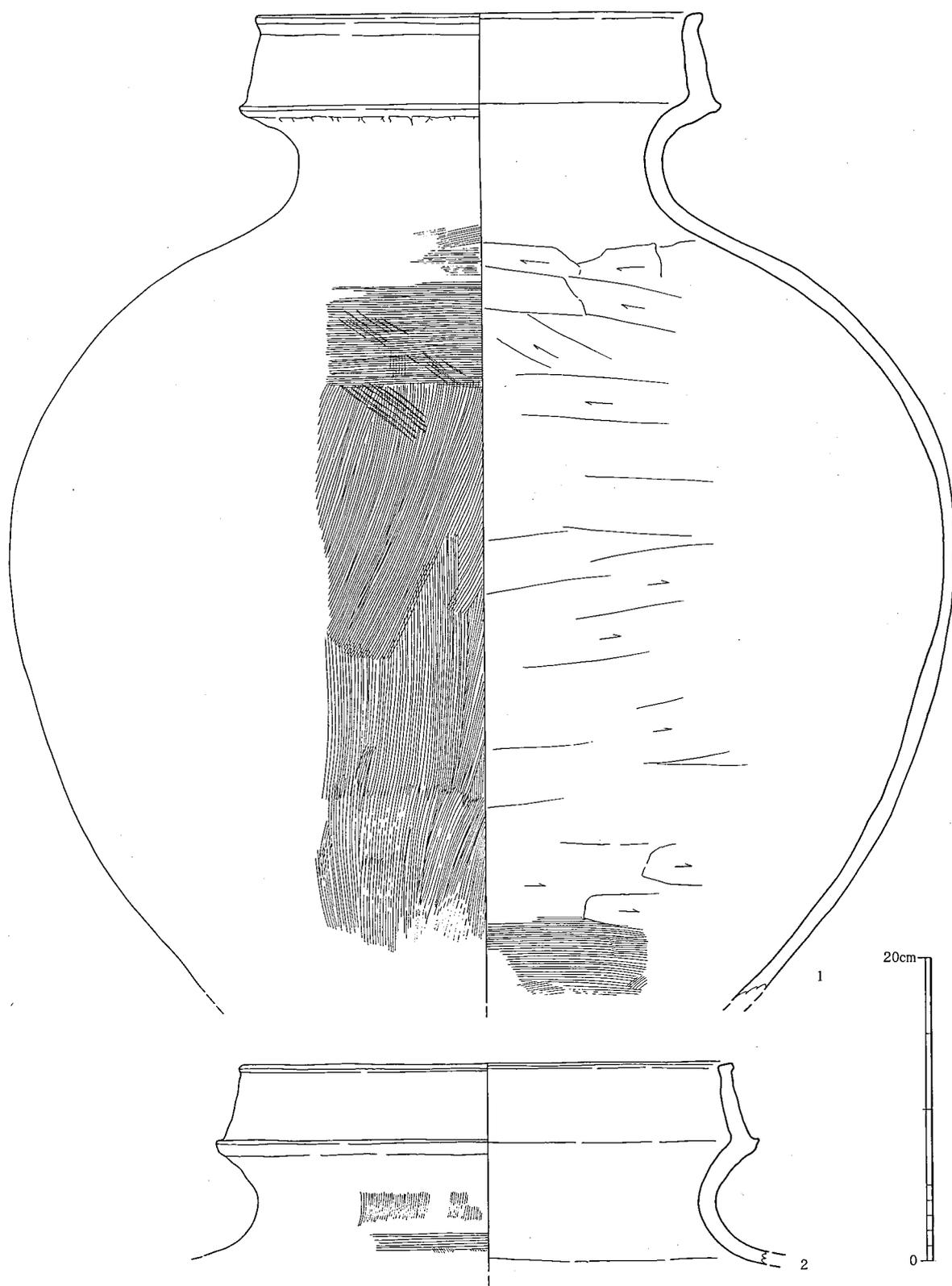
遺物は比較的多い。特に床面から若干浮いた状態で1・2・4・7・9~15・17・19・20・24がまとまって出土した。16はカマド袖内から出土、その他は覆土中から出土した。

出土土器 (図版74・75、第157~159図)

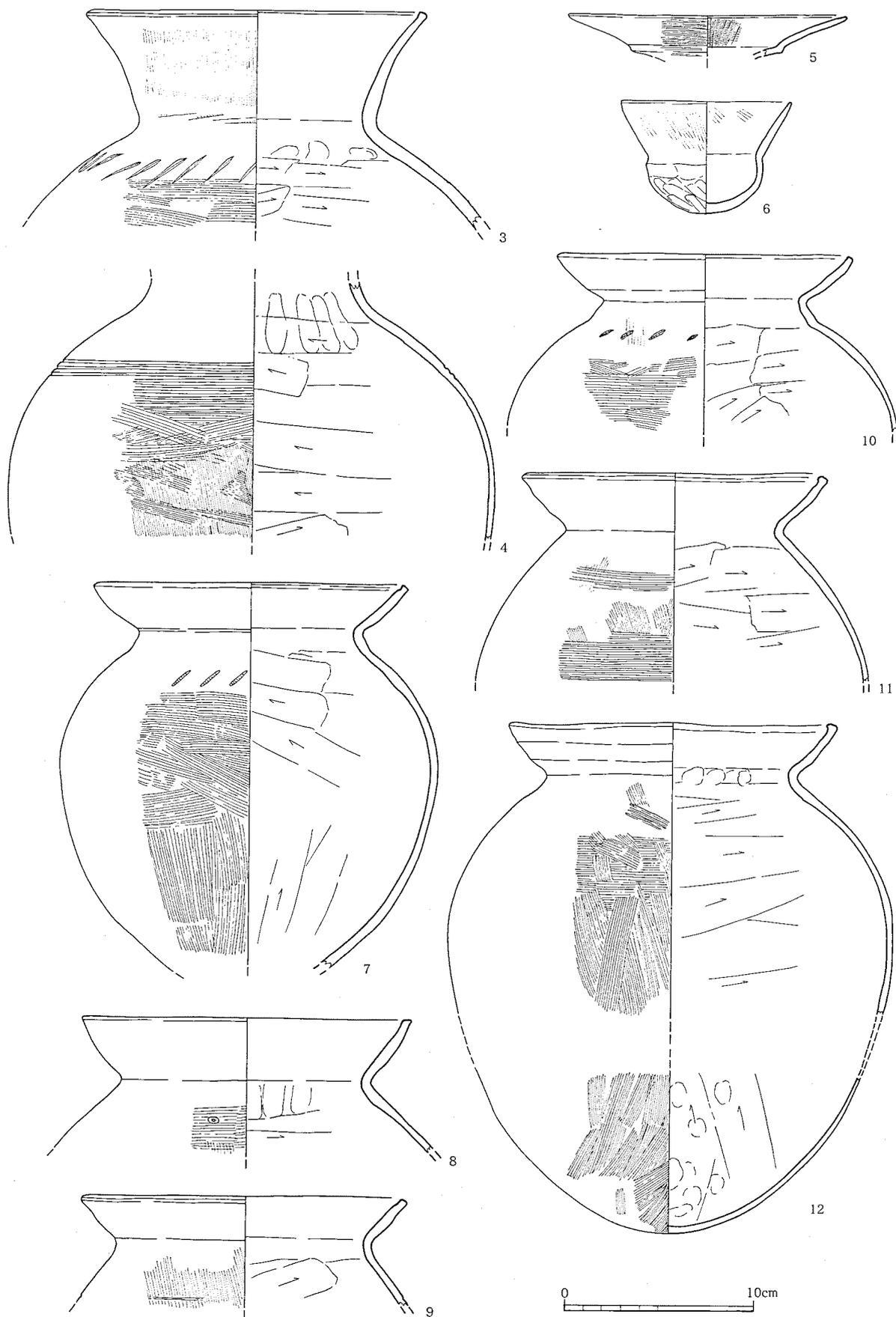
1~6は壺である。1・2は山陰系の大型二重口縁壺。1は胴部が倒卵形で肩が張った器形となる。



第156図 73号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第157图 73号竖穴住居迹出土土器实测图① (1/4)

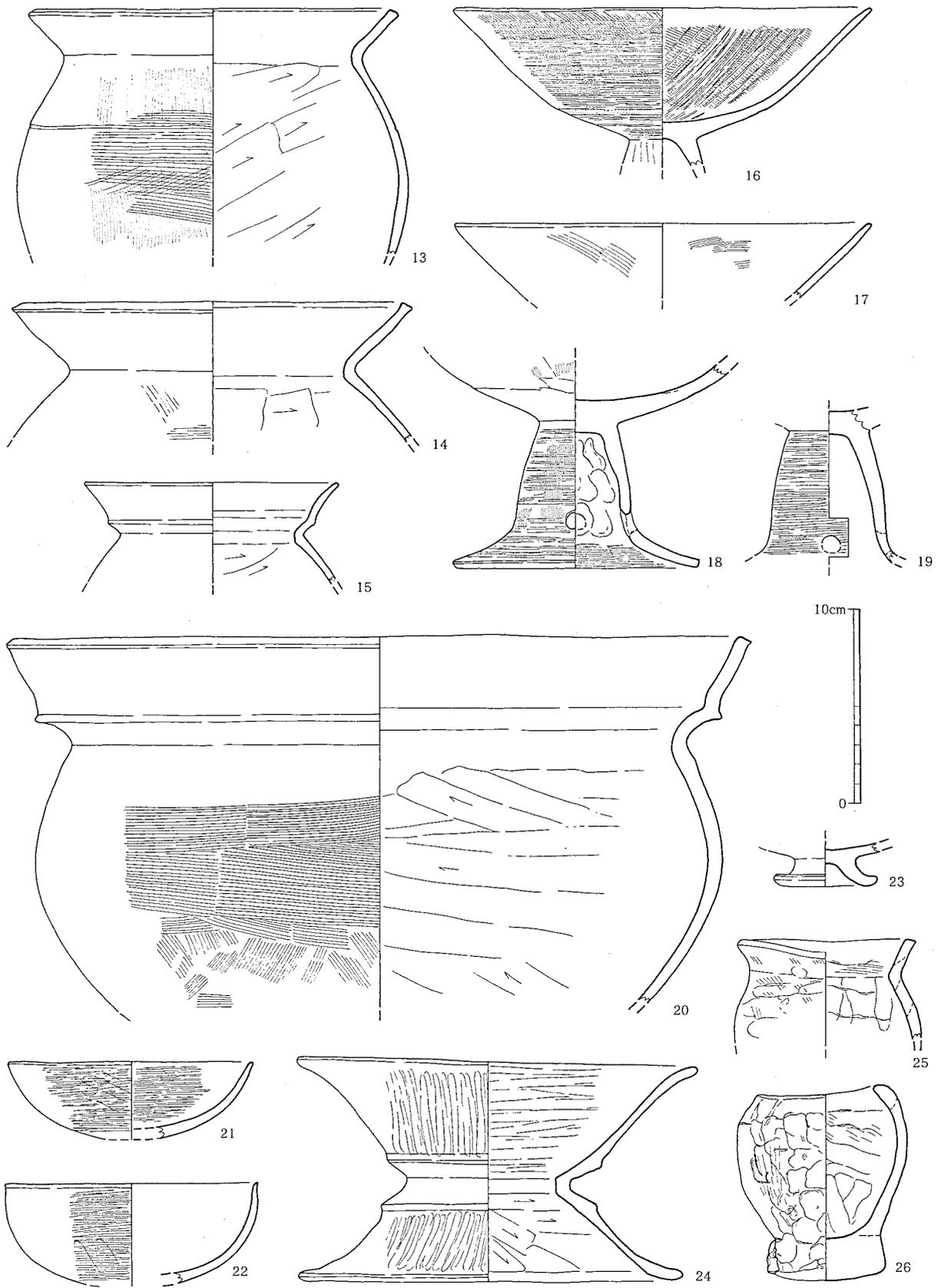


第158图 73号竖穴住居跡出土土器実測図② (1/3)

頸部はよく締まり、丸く外反して一次口縁部へと至る。二次口縁部は直線的に内傾し、外端部をつまみ出す。端部の上面はわずかに内傾する。屈曲部外面の突帯は上方を向く。調整は、胴部内面が横方向のヘラケズリ、外面は細かいハケ目を丁寧に施し、肩部には先行する左上がりのタタキが残る。胎土に砂粒を若干含み、色調は橙褐色を呈す。2の口縁部形態は1とほぼ同形であるが、2の口縁端部はつまみ出しが弱い。色調は黄灰褐色を呈す。3は直口壺である。肩は丸く張り、口縁部は外反して開く。端部は内側を丸くつまみ出す。肩部にはヘラ状工具によるシャープな平行斜線文を巡らせる。口縁部外面には横ナデに先行する縦ハケ目が残る。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。4は山陰系二重口縁壺であろう。胴部は倒卵形をなすと思われる。頸部は比較的締まっている。肩部外面には櫛描直線文を巡らせる。頸部内面には縦指ナデが明瞭に観察される。色調は黄灰褐色を呈す。5は畿内系の小型二重口縁壺である。一次口縁部は水平近くまで開き、二次口縁部もまた大きく開く。口縁端部は尖り気味に仕上げる。内面は横ヘラミガキの後に縦ヘラミガキによる暗文、外面は緻密な横ヘラミガキを行う。胎土に砂粒を含まず精良で、色調は明赤褐色を呈す。器壁も薄く、総じて精製である。6は小型丸底壺である。体部は半球形で頸部は締まらず、口縁部は直線的に開き端部は尖る。体部内面はナデ、口縁部は粗いハケ目後に横ナデ、体部下半はヘラナデ。ヘラミガキは行っていない。胎土に砂粒を若干含み器壁も厚い。色調は明黄灰色を呈す。

7～15は甕である。7は胴部が倒卵形で最大径が上方に位置する。胴部に対して口縁部の径が大きく、口縁部は内湾気味に開く。内端部をつまみ出し、内面に凹線が巡る。肩部にはハケ目先端の刺突による平行斜線文が巡る。器壁は全体的に厚い。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。8は口縁部が立ち気味に開き、端部は水平面をなす。肩部には竹管文を施すが、小破片であるため全周するかどうか判らない。胎土は砂粒が少なめで比較的精良である。色調は黄灰褐色を呈す。9は器壁が薄く、全体的に均一な厚さである。口縁部はほとんど内湾が見られず、立ち気味に開く。端部は面をなすもののシャープさを欠く。肩部には一条の沈線を巡らす。色調は橙褐色を呈す。10は肩が丸く張りを有し、肩部上方が屈折気味に立ち上がるのが特徴的である。口縁部は内湾して大きく開き、内端部はわずかに肥厚する。肩部外面にはハケ目先端の刺突による平行斜線文を施すが、全周するのではなく4個だけである。色調は黄灰色を呈す。11は肩があまり張らない器形となる。口縁部は立ち気味に開き、内端部が肥厚する。色調は黄灰褐色を呈す。12は胴部の上半と下半が接合しないが同一個体である。底部は尖底気味の丸底で、胴部は倒卵形になると思われる。頸部は比較的締まっており口縁部は内湾して立ち気味に開く。端部は内側を肥厚させる。外面にはハケ目に先行する左上がりタタキが残る。色調は黄灰褐色を呈す。13は頸部があまり締まらず、また胴部の径に対して口縁部の径が大きい。口縁部は直線的に開き、端部はやや面をなす。肩部には一条の沈線を巡らす。内面のヘラケズリは屈曲部近くにまで施される。胎土に砂粒を若干含み色調は橙褐色を呈す。外面の頸部以下には煤が付着する。14は口縁部の内湾が非常に弱く直線的に広がる。端部はシャープな面をなす。胴部内面のヘラケズリは屈曲部近くにまで及ぶ。色調は黄灰褐色を呈す。15は小型の山陰系二重口縁甕である。肩には張りが無い。一次口縁部は短く外反し、二次口縁部はさらに外反して開く。端部は丸い。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。

16～19は高坏である。16は屈曲部外面が浅い凹線状となり、体部は直線的に開く。口縁端部は丸い。内面はハケ目後に縦ヘラミガキによる暗文を施す。外面はハケ目後疎らな横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は橙色を呈す。17は直線的に広がる体部となる。器表の風化が進み、内外面にはハケ



第159图 73号竖穴住居跡出土土器実測図③ (1/3)

目しか観察されない。胎土は比較的精良で色調は茶褐色を呈す。18は坏部の屈曲部外面に浅く形骸化した段を有す。脚柱部はエンタシス状に中膨らみとなり、裾部との境はスムーズで稜をなさない。端部は面をなす。屈曲部のやや上に2ヶ所円孔を穿孔する。柱部内面は指ナデ、裾部内面は横ハケ目、外面は細かいハケ目の後に疎らな横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。19もエンタシス状に中膨らみとなる。屈曲部付近に円孔を穿孔するが、孔数は不明。内面はナデ、外面は細かい横ヘラミガキを密に行う。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。

20～23は鉢である。20は山陰系の大型二重口縁鉢である。肩は丸く張り、一次口縁部は短く外反する。二次口縁部は上半のみが内湾し、端部はシャープな面をなす。内面のヘラケズリは磨滅が著しく不明瞭である。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。21は浅めの直口鉢である。内外面とも横ヘラミガキを密に行い、胎土は精良で色調は淡黄橙色を呈す。22はやや深めの鉢で口縁部は直立し、端部は外反気味に尖る。内面は横ナデ、外面は細かい横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は黄橙色を呈す。23は脚付鉢の脚部。裾が強く外反して端部が上向きに丸く跳ね上がる。全面横ナデ。胎土は精良で色調は黄茶色を呈す。

24は山陰系の鼓形器台である。受部内面は幅広の横ヘラミガキ、裾部内面は横ヘラケズリ、外面は縦ヘラミガキを行う。胎土に砂粒を若干含み色調は白黄灰色を呈す。

25・26は粗製の土器で、形状は甕に近い。25は口縁部が直線的に開き、上端は平坦面をなす。調整は内外面とも粗いハケ目の後に指ナデを行う。胎土に砂粒を多く含み色調は黄褐色を呈す。26は底面がレンズ状に膨らみを帯び、底部は低い柱状となる。体部は最大径が中位よりやや上に位置し、口縁部は内傾して屈曲部をもたない。端部は丸くおさめる。内外面とも指ナデ整形を行い、外面には先行するハケ目が残し、また粘土接合痕も残る。胎土に砂粒を若干含み色調は黄褐色を呈す。

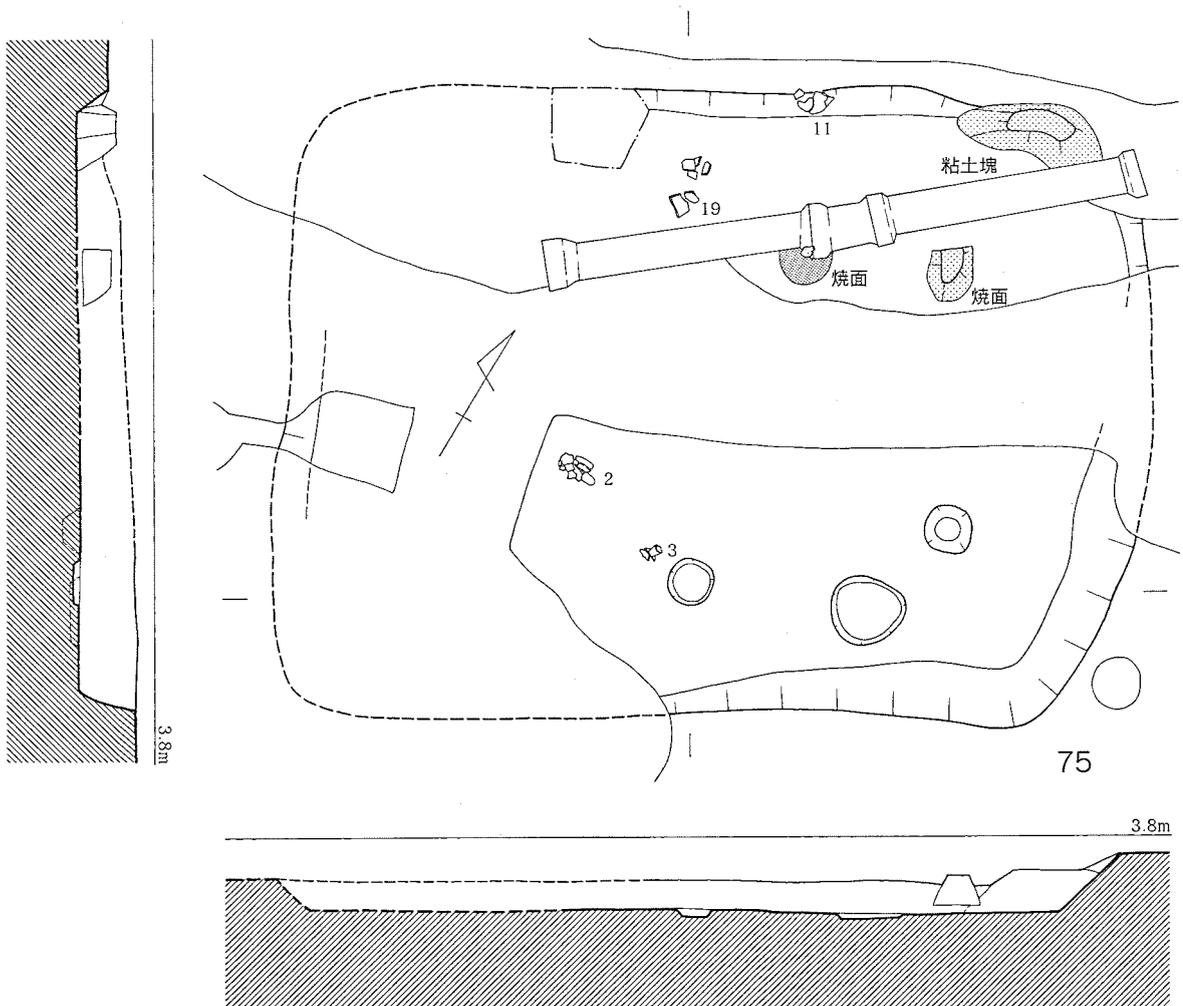
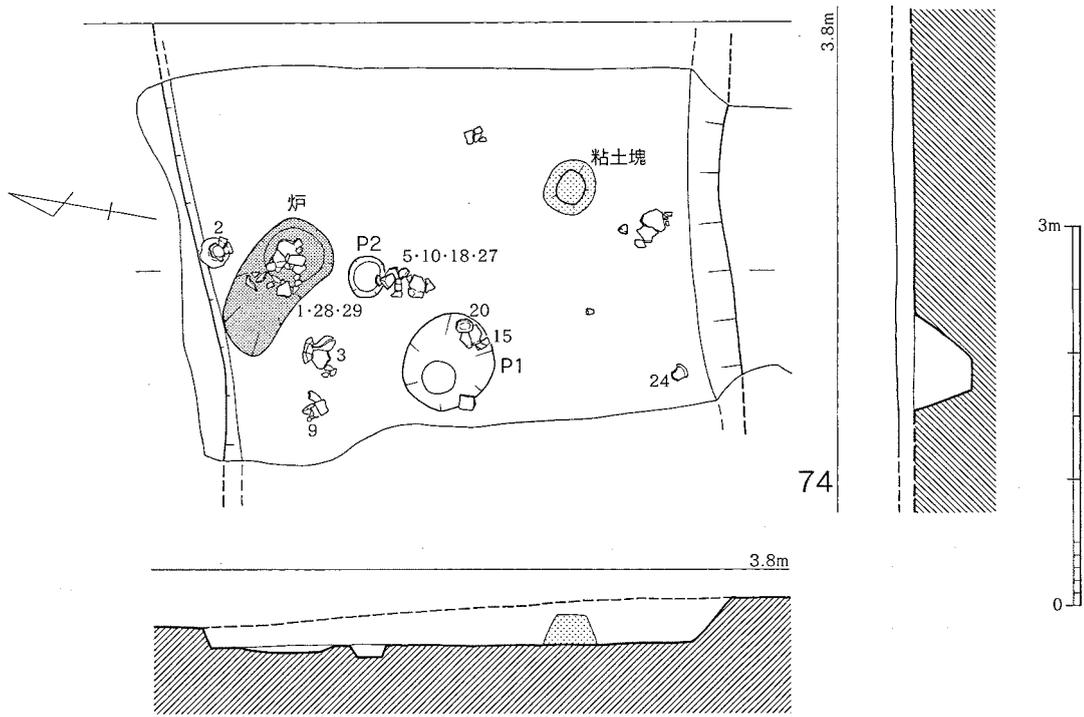
74号竪穴住居跡 (図版32、第160図)

II区南3で検出した竪穴住居跡である。72号竪穴住居跡から1m北側に位置する。校舎の基礎等によって大きく攪乱を受けており、東西両壁を完全に失う。南北の壁は一部遺存しており、南北長4.2mを測る。床面はほぼ水平をなし、遺構面からの深さは15cmを測る。遺構確認時、北側は既に地山と同様の黄褐色細砂が検出されたものの、遺物を含んでいたため壁の崩落土と判断して掘り下げを行った。他の覆土は灰褐色細砂からなる。床面の北壁に近い位置で楕円形の炉跡を検出した。長軸115cm、短軸50cm、深さ5cmを測る。また南側では粘土塊を検出した。径40cm、高さ22cmを測る。用途は不明。ピットはP1・P2を検出した。このうちP1は径70cm、深さ45cmを測る。

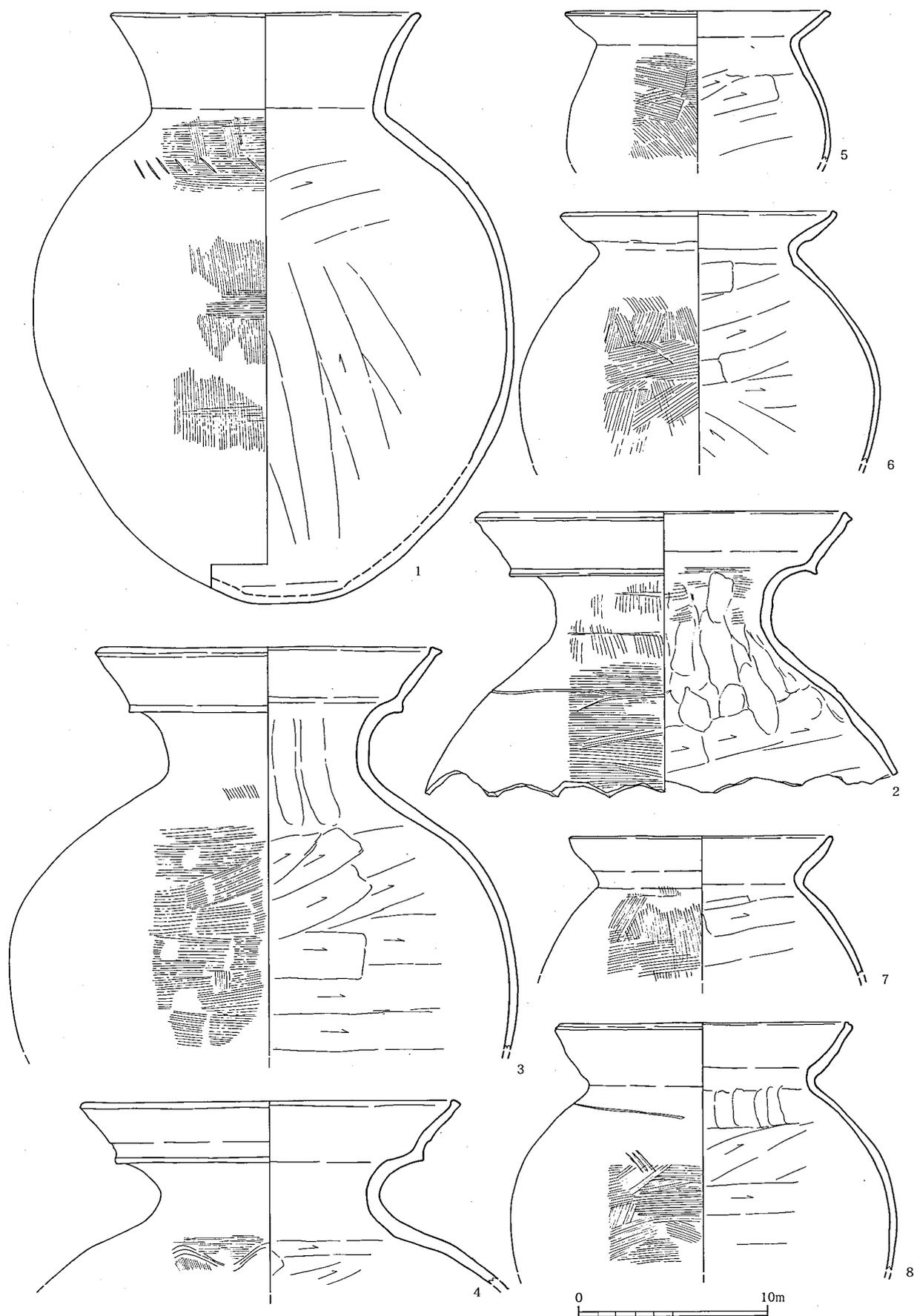
遺物は床面直上から比較的まとまって出土している。図示した土器の内、24が南側から、5・10・15・18・20・27が中央付近から、1～3・9・28・29が北側の床面直上から出土した。また22は粘土塊から出土した。これら以外は覆土からの出土である。他に軽石、砥石が出土している。

出土土器 (図版75・76、第161～163図)

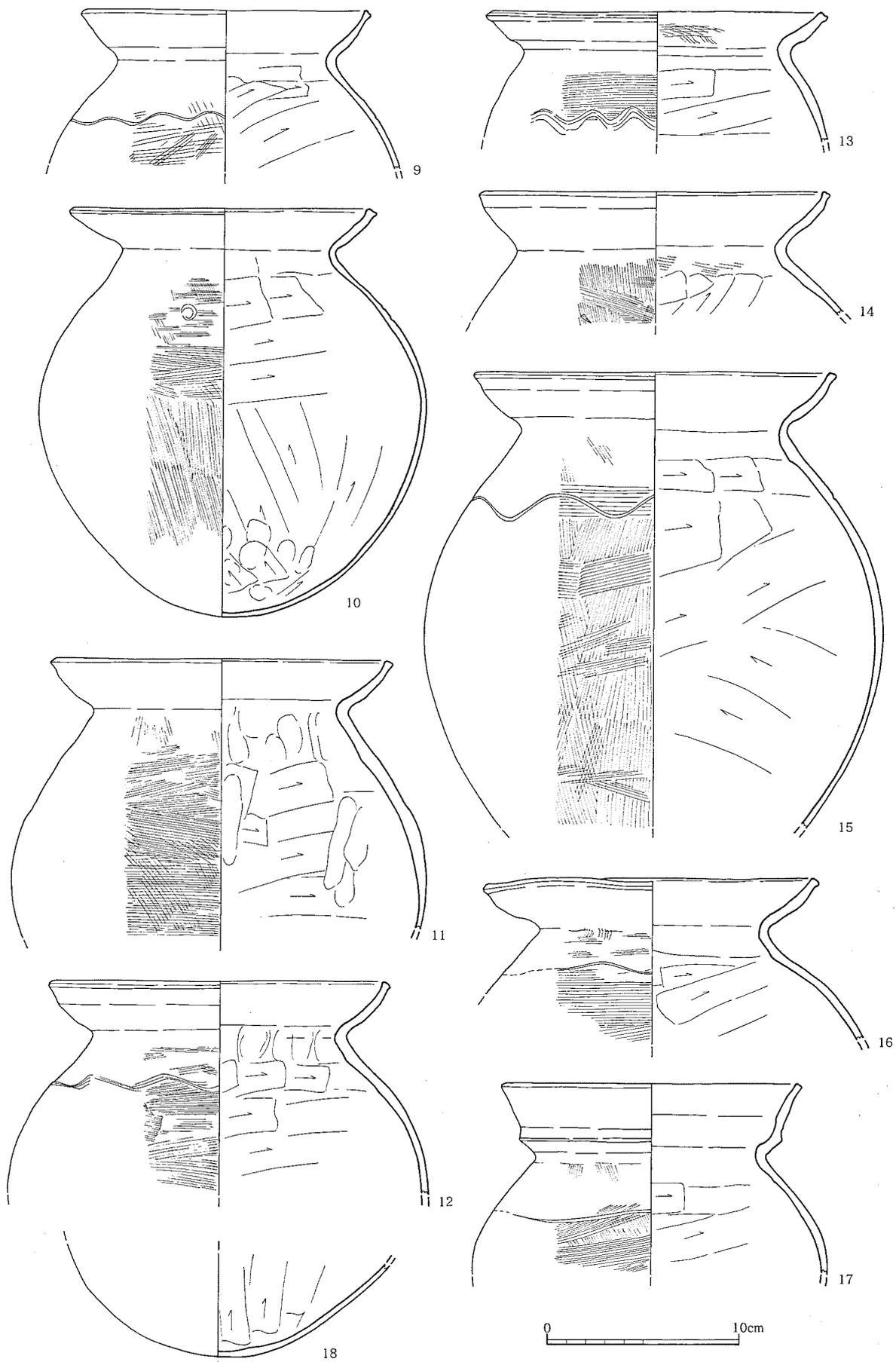
1～4は壺である。1は直口壺。胴部は倒卵形で底部はレンズ状に近い。肩部は直線的で頸部は割と締まり、口縁部は緩やかに外反し、端部は尖る。肩部外面にはハケ目先端の刺突による平行斜線文が施されるが、全周するのではなく全体の1/5程度である。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。この壺は煮炊きに使用しており、二次加熱を受けて器表が一部剥離し、また肩部以下は煤が付着する。2～4は山陰系の二重口縁壺である。2は頸部が比較的締まっており長めである。



第160图 74·75号竖穴住居跡実測图 (1/60)



第161图 74号竖穴住居迹出土土器实测图① (1/3)



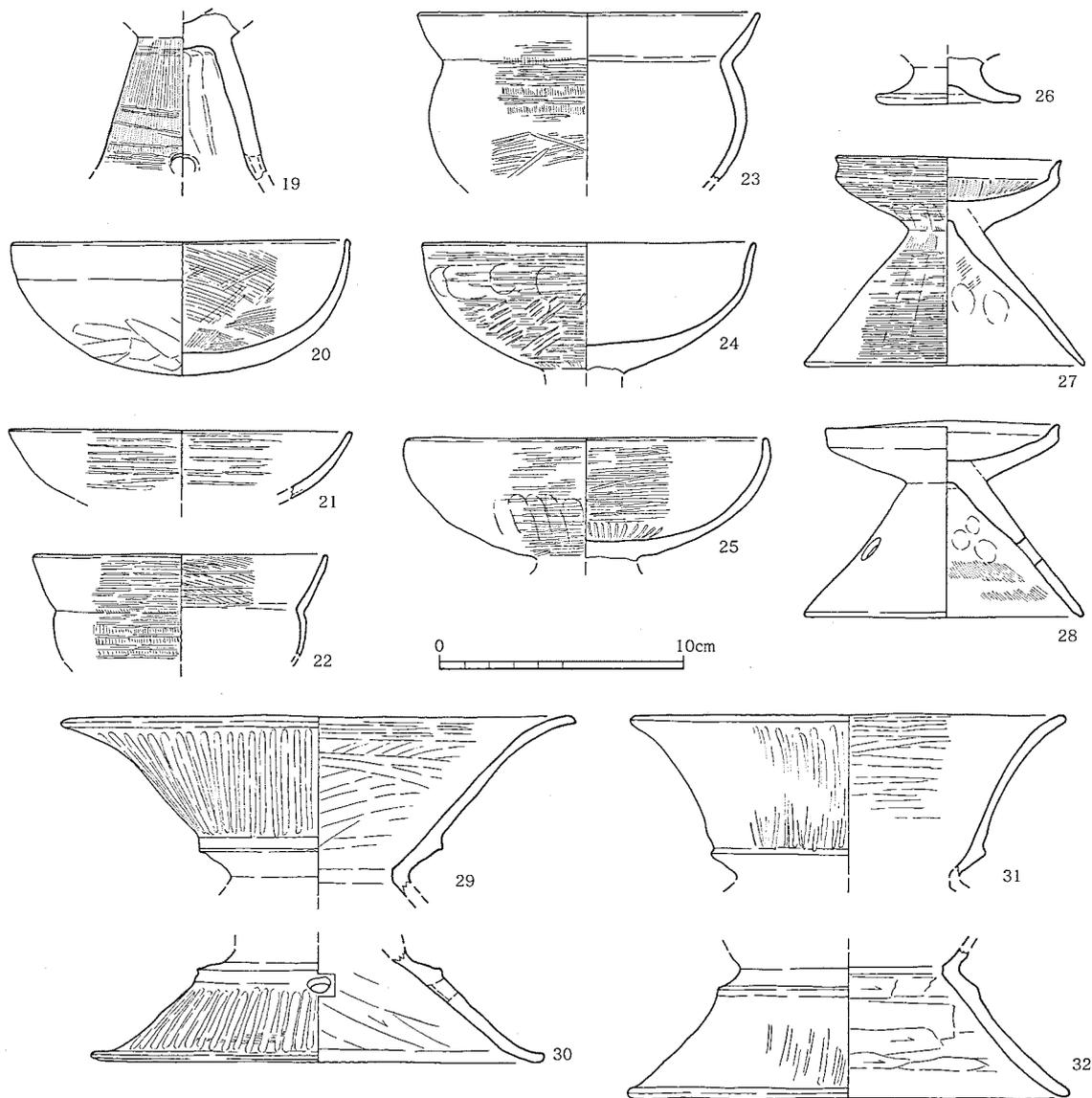
第162图 74号竖穴住居跡出土土器実測图② (1/3)

一次口縁部は強く外反し、屈曲部外面の突帯は鋭く下方を向く。二次口縁部は直線的に開き、端部は外側をつまみ出す。頸部内面は横ハケ目の後に縦指ナデを行う。頸部外面には横ナデ前の粗い縦ハケ目が残る。肩部には一条の沈線を巡らせる。胴部の破損は外側から故意に打ち欠いたように見える。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。3も頸部が締まり長く伸びる。口縁部の屈曲は弱く、二次口縁部は直線的に開く。端部はシャープな面をなす。色調は黄灰褐色を呈す。4は頸部がよく締まり一次口縁部の外反が大きく、二次口縁部は下方から折れたように開いている。内端部は弱くつまみ出し外端は面をなす。肩部には櫛描波状文を巡らせる。色調は黄灰色を呈す。

5~18は甕である。5は小型の甕。重心が下にあり頸部が締まらない。口縁部はわずかに内湾し、端部を外側につまみ出す。色調は暗茶灰色を呈す。外面には煤が付着する。6は最大径が中位に位置する。頸部は比較的締まっており、口縁部は直線的に開き内端部をつまみ出す。色調は黄灰色を呈す。7は口縁部が立ち気味に開き、端部は丸くおさめる。色調は黄灰色を呈し外側には煤が付着する。8も口縁部が立ち気味に開いており、上端部をつまみ出す。肩部外面にはハケ目に先行するタタキが残る。色調は黄灰褐色を呈す。口縁部外面に煤が付着する。9は口縁部がシャープな面をなす。肩部には一条の波状文を巡らせる。色調は黄灰褐色を呈す。10は最大径が中位よりやや上に位置し、肩は直線的に傾斜する。口縁部はわずかに内湾しながら開き、内端部を肥厚させる。外面の肩部には竹管文を施すが、わずかに3個のみを等間隔に配置する。内底面には指圧痕が認められる。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。外面の下半部に煤が付着する。11は胴部の径の割に口径が大きい。胴部最大径はやや下に位置し、肩が張らない器形となる。口縁部は明確に内湾して立ち気味に開き、端部は面をなす。胴部内面のヘラケズリに先行する縦指ナデが顕著である。色調は黄灰褐色を呈す。全体的に器壁が厚い。12も口縁部の内湾が顕著で立ち気味に開く。端部は丸味を有し、外側をつまみ出す。肩部に櫛描波状文を巡らせる。色調は黄灰褐色。13は頸部が締まらず口縁部は内湾して大きく開き、口縁外端部を小さくつまみ出す。外面肩部からやや下がった位置に櫛描波状文を巡らせる。口縁部内面には横ナデに先行する横ハケ目が残る。全体的に器壁が厚い。色調は黄茶色を呈す。14は口縁部が立ち気味に開き、端部付近のみがさらに立ち上がる。端部は内外に小さくつまみ出す。内面の屈曲部下にはナデに先行する横ハケ目が観察される。肩部にはヘラ状工具の刺突による列点文を施文するが、確認出来るのは1個のみであるので全周するのかどうかは不明。色調は肌灰色を呈す。15は長胴気味で最大径が中位近くにある。口縁部は内湾して開き、外端部をわずかにつまみ出す。肩部には波状沈線を巡らす。色調は黄灰色。16は口縁部の歪みが著しい。口縁部は内湾し、外端部をつまみ出す。肩部には雑な沈線を巡らせる。色調は黄灰褐色を呈す。17は山陰系の二重口縁甕である。肩部は丸味がなく直線的に傾斜する。一次口縁部は外反度が弱く、二次口縁部もわずかに外反する程度で立ち気味に開く。端部は面をなすがあまりシャープではない。屈曲部の外面は低い三角突帯状をなし、内面は強い横ナデのために広く凹面をなす。外面の肩部には一条の雑な沈線を巡らす。色調は茶灰色を呈し、異質である。18は甕の底部。丸底で器壁が薄い。内面は縦ヘラケズリ、外面はナデ。色調は黄灰褐色。外面には煤が広く付着する。

19はエンタシス状に中膨らみとなる高坏の脚柱部である。穿孔は2ヶ所。内面は縦指ナデ、外面は縦ハケ目後に細い横ヘラミガキを部分的に行う。胎土は精良で色調は肌色を呈す。

20~26は鉢である。20は口縁部が直立し、端部を丸くおさめる直口鉢。内面はハケ目、外面はナデを行い、下半部にはヘラナデの稜線が認められる。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。



第163図 74号竪穴住居跡出土土器実測図③ (1/3)

す。21は浅い体部の精製鉢。内外面横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。22・23は外反口縁の鉢。22は体部内面ナデ、外面縦ハケ目後に疎らな横ヘラミガキ、口縁部内面は横ハケ目後に疎らな横ヘラミガキ、外面は緻密な横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は橙色を呈す。23は体部が深く、肩部が内傾する。口縁部は短く、内湾しながら開く。端部は丸い。体部内面はナデ、口縁部は風化が著しいが、外面にかすかに横ヘラミガキが観察される。体部外面は縦ハケ目後に横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は黄肌色を呈す。24～26は脚付鉢である。24は口縁部のみわずかに外反する。内面はナデ、外面は横ヘラミガキを行うが、これに先行するタタキ、ハケ目、指圧痕が残る。脚部との接合面はヘラ刻目を施す。胎土は精良で色調は明橙色を呈す。25は24とは逆に口縁部のみわずかに内湾する。内底面はヘラミガキによる放射状の暗文を施し、これ以外は全面横ヘラミガキを行う。外面の下半には整形時の指ナデ痕が残る。脚部との接合部にはヘラによる螺旋状の刻目を入れる。胎土は精良で色調は茶色を呈す。26は脚部である。裾部はなだらかに開き端部は跳ね上げ気味にする。全面横ナデ調整。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。

27・28は精製小型器台である。27は受部の立ち上がりが外反し、端部は外側を向いてシャープに尖る。裾部は直線的に開き端部は小さな面をなす。受部の内底面は暗文状のヘラミガキ、立ち上がりの内面は横ナデ、裾部内面はナデだが先行するハケ目や指圧痕が残る。外面は受部、裾部とも縦ハケ目後に横ヘラミガキを行う。裾内頂部には軸受孔がある。胎土は精良で色調は橙褐色を呈す。28は立ち上がりの器壁が厚い。立ち上がりは外反し、端部は外側を向いて尖る。裾部は直線的に開き、2ヶ所に穿孔を行う。風化が著しく外面の調整は不明。裾部内面のみ指オサエ、ハケ目後の横ナデが確認される。胎土は精良で色調は淡橙色を呈す。

29～32は山陰系の鼓形器台である。29は接合しないが30と同一個体。裾部の突帯直下に円孔を穿孔するが、孔数は不明。受部内面はやや幅広の横ヘラミガキ、裾部内面は横ヘラケズリ、外面は暗文状の縦ヘラミガキ。胎土に砂粒を若干含み色調は橙褐色を呈す。31は器高がやや高い。突帯は低く形骸化している。内面は幅広の横ヘラミガキ、外面は縦ヘラミガキ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。32は内面横ヘラケズリ、外面縦ヘラミガキ。胎土に砂粒を若干含み色調は肌灰色。

75号竪穴住居跡 (図版32、第160図)

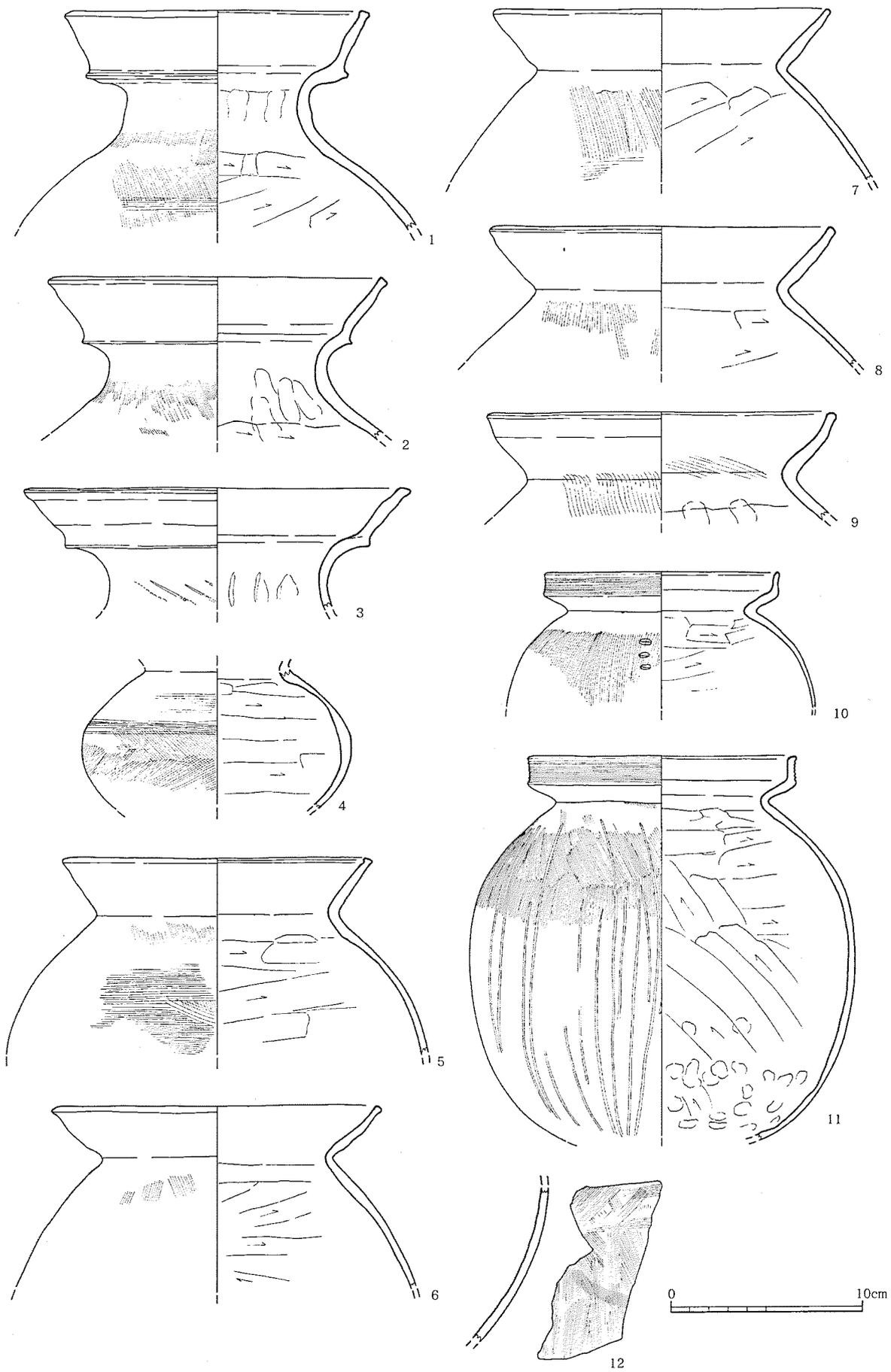
II区南3で検出した竪穴住居跡である。配水管やゴミ穴によって攪乱をうけるものの、全体の形状は把握できる。南北長5.0cm、東西長6.7mに復元される。床面はほぼ水平をなし、遺構面からの深さは45cmを測る。北東コーナーにはカマドが設置されていたようだが、中央を配水管によって大きく破壊されており、さらに北壁には粘土が全く遺存していなかったことから恐らく住居廃棄時にカマドを破壊して粘土を持ち去ったものと推察される。位置から考えて、煙道が北壁に沿って北東コーナーまで伸びる、いわゆるL字形タイプのカマドとなるだろう。ピットはP1～P3を検出したが、支柱穴となるかどうかは不明。

図示した土器の内、南側の床面上から2・3、北壁際から11、その南側の床面上から19、焼土内から15、粘土塊周辺から1・6～8・22が出土した。それ以外は覆土からの出土である。土器の他に砥石が出土している。

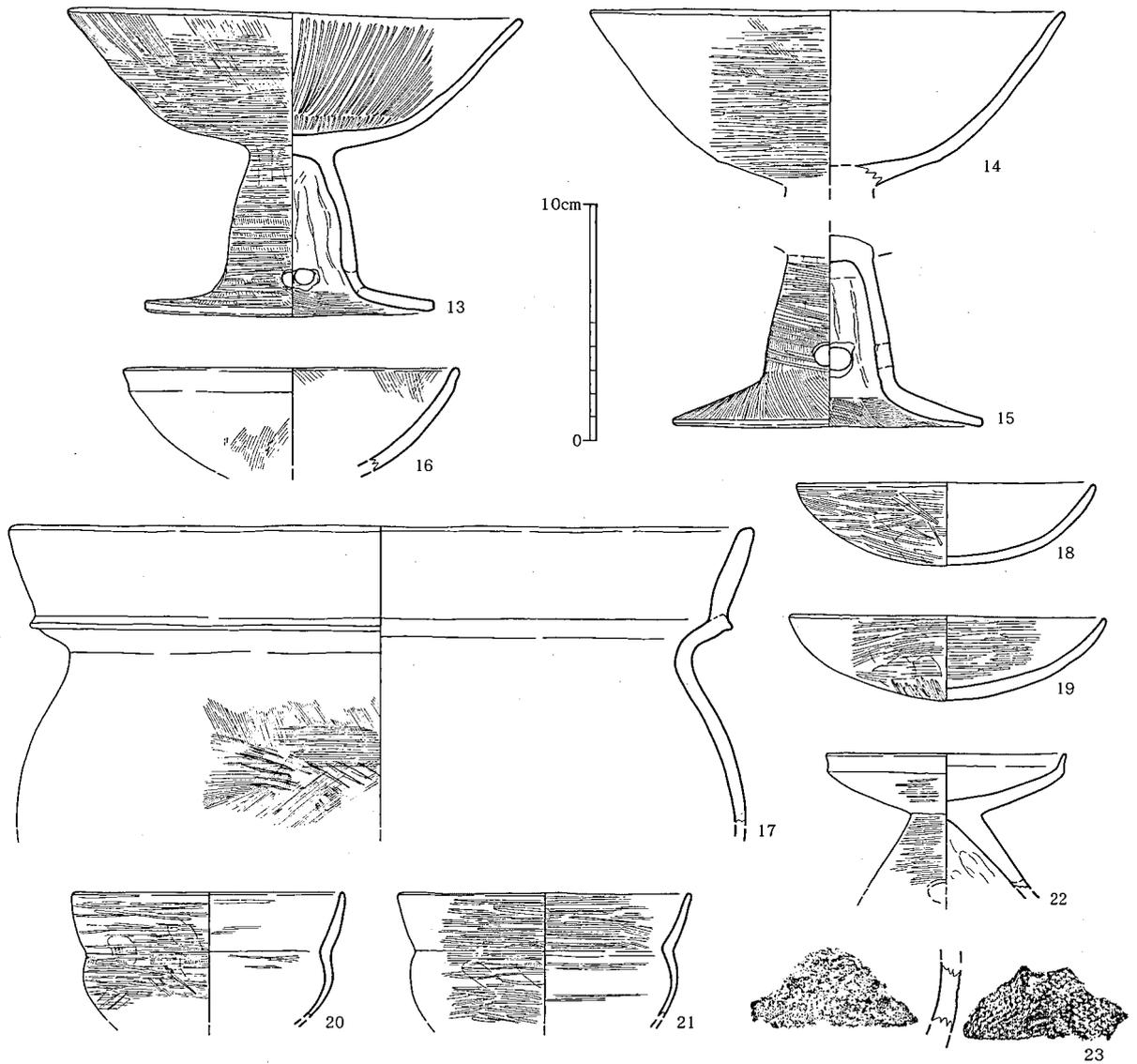
出土土器 (図版76・86・88、第164・165図)

1～3は山陰系の二重口縁壺である。1は頸部が比較的長く伸び、二次口縁部は立ち気味に開く。端部はやや肥厚する。焼成があまり良くなく色調は灰褐色～黒灰色を呈す。2は端部が面をなし、つまみ出しがほとんど見られないものである。色調は黄灰褐色。3は頸部が比較的長く一次口縁部が強く外反する。二次口縁部は器壁の中央が膨らみ、端部は外側へと肥厚する。頸部外面にはハケ目工具先端の刺突による平行斜線が見られる。色調は黄灰色を呈す。4は直口壺か。胴部は扁球形で最大径は中位にある。内面は横ヘラケズリ、外面はハケ目を行い、体部の上と下とでハケ目の方向を違えているため綾杉状になる。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈し、精製ではない。

5～12は甕である。5は肩が丸味を帯び口縁部は外反し立ち気味に開く。端部の内側を丸く肥厚させる。色調は黄灰褐色を呈し外面には煤が付着する。6は口縁部がわずかに内湾し、端部は面をなす。胎土に砂粒をあまり含まず他と比べて幾分精良である。色調は灰褐色を呈す。7は屈曲部内面の稜が明瞭で、口縁部は直線的に開く。肩部は丸味がない。口縁端部は丸味を帯びる。色調は肌灰色を呈す。8もやはり肩部に丸味がなく、口縁部は直線的に伸びる。色調は肌灰色を呈す。9は屈曲部が丸味を有し、器壁が厚い。口縁部は上半のみが内傾し、端部は丸味を帯びる。内面には横ナデ前のハ



第164图 75号竖穴住居跡出土土器实测图① (1/3)



第165図 75号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)

ケ目が残る。外面の縦ハケ目は口縁部下方にまで及んでいる。色調は黄褐色を呈す。

10・11は吉備系の甕である。10は肩が丸味を帯び、口縁部は強く外折して直線的に短く伸びる。口縁部の上半は直立し、端部は丸くおさめる。この直立部の外面には明瞭な櫛描直線文を巡らす。また肩部には米粒状の楕円形刺突文を施す。外面には縦ハケ目を行い、布留系甕に比べて横ナデの範囲が極端に狭い。胴部の器壁は薄い。胎土に砂粒を若干含むが、布留系甕と比較すると砂粒の粒が小さく良質である。色調は暗い黄灰褐色を呈す。口縁部の下半と肩部以下に煤が付着する。11の胴部は球形に近いが最大径付近の張りが無い。頸部は強く屈曲し、口縁部は直立する。端部は丸味を帯び、上端が内傾する。口縁部上半の外面には櫛描直線文を巡らす。胴部内面は屈曲部近くまでヘラケズリを行い、下半の指圧痕が顕著である。外面はナデの後、肩部にのみ細かく短い縦ハケ目を行い、肩部より上の狭い範囲に横ナデを行った後に長い縦ヘラミガキを散漫に施す。胎土は砂粒を若干含むものの粗砂を含まず、布留系甕と比べて良質である。色調は暗黄灰褐色を呈す。外面の口縁部下半から肩部上半以外には煤が付着する。

12は甕の胴部片である。傾きにやや不安が残るが、ハケ目の方向からすると胴部中位付近である

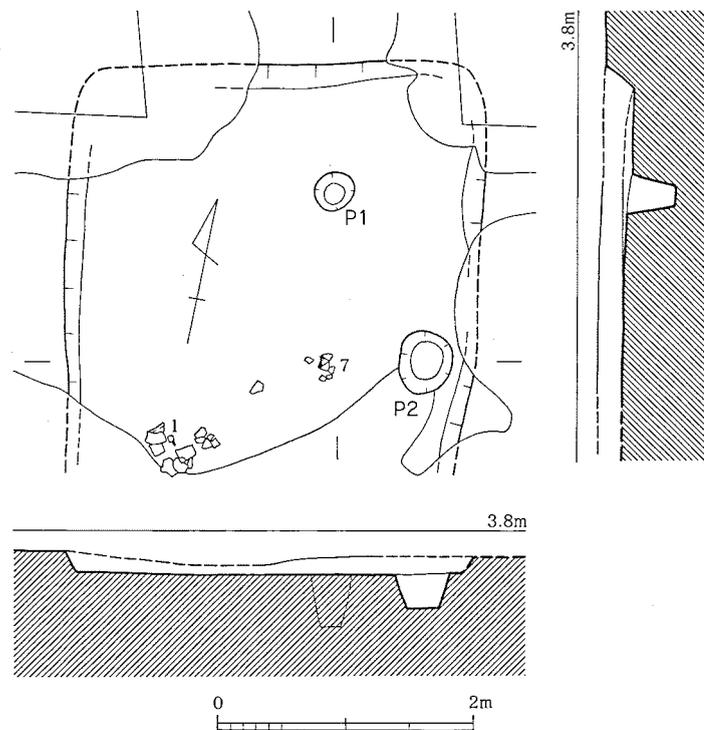
う。かすかではあるが、黒色の塗料による文様が見られる。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色。

13~15は高坏である。13は坏部外面の屈曲部がスムーズで段や凹線が見られない。体部は直線的に開き、端部は丸くおさめる。内面は放射状の暗文、外面はハケ目後に細かい横ヘラミガキを行う。脚柱部はエンタシス状に中膨らみとなり、裾は水平近くまで大きく開く。端部は面をなす。屈曲部に2ヶ所円孔を穿孔し、半乾燥時に外側から穿孔するために内面の孔周辺の器壁が剥離している。柱部内面は縦ナデ、裾部内面は横ハケ目、外面はハケ目後に疎らな横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は黄肌色。器表の一部に赤色の化粧土を塗布する。14は内底部が狭く体部が深い。屈曲部の外面には形骸化した不明瞭な段が見られる。体部はわずかに内湾して開き、端部は尖り気味に仕上げる。内面は器表の風化が著しく調整不明、外面はハケ目後緻密な横ヘラミガキ。胎土は比較的精良で色調は黄橙色を呈す。15は脚柱部が中膨らみとなり裾部は直線的に開いて端部は面をなす。裾部中位は器壁がやや膨らむ。屈曲部のやや上に2ヶ所円孔を穿孔する。柱部内面は縦ナデ、裾部内面はハケ目、外面は丁寧なハケ目の後に柱部のみ疎らな横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は黄橙色。

16~21は鉢である。16は粗製の直口鉢。内外面ハケ目の後にナデを行う。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。17は山陰系の大型二重口縁鉢。口縁部は直線的に開き、端部は丸くおさめる。内面は器表の剥離が著しい。外面は細かいハケ目を行い、先行するタタキもかすかに見られる。胎土に砂粒を若干含み色調は肌灰色を呈す。18・19は浅い体部の直口鉢。18は内面の風化が著しく調整不明、外面は細かい横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は茶橙色を呈す。19は内外面細かい横ヘラミガキ、底部は一定方向のヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。20・21は外反口縁の鉢。どちらも口縁部はわずかに内湾し、あまり開かない。20は内面の口縁部と肩部のみ疎らな横ヘラミガキを行う。外面は細かいハケ目後に横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は黄橙色を呈す。21は内面に疎らな横ヘラミガキを行うが、口縁部には先行する横ハケ目が顕著に残る。外面は緻密な横ヘラミガキを行い、体部下半にはヘラナデの稜線が残る。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。

22は小型器台である。受部の立ち上がりは外反し、端部は外側を向いて尖る。裾部は直線的に開くようである。受部内面は器表の風化が著しく調整不明。裾部内面はナデで指圧痕が残る。外面は細かい横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は赤褐色を呈す。

23は半島系の軟質土器である。外面は小さな斜格子タタキ、内面はナデを行う。胎土に粗砂粒を若干含み、色調は内面が淡黄灰色、外面が淡黄褐色を呈す。器壁は厚い。器表の風化が著しい。



第166図 76号竪穴住居跡実測図 (1/60)

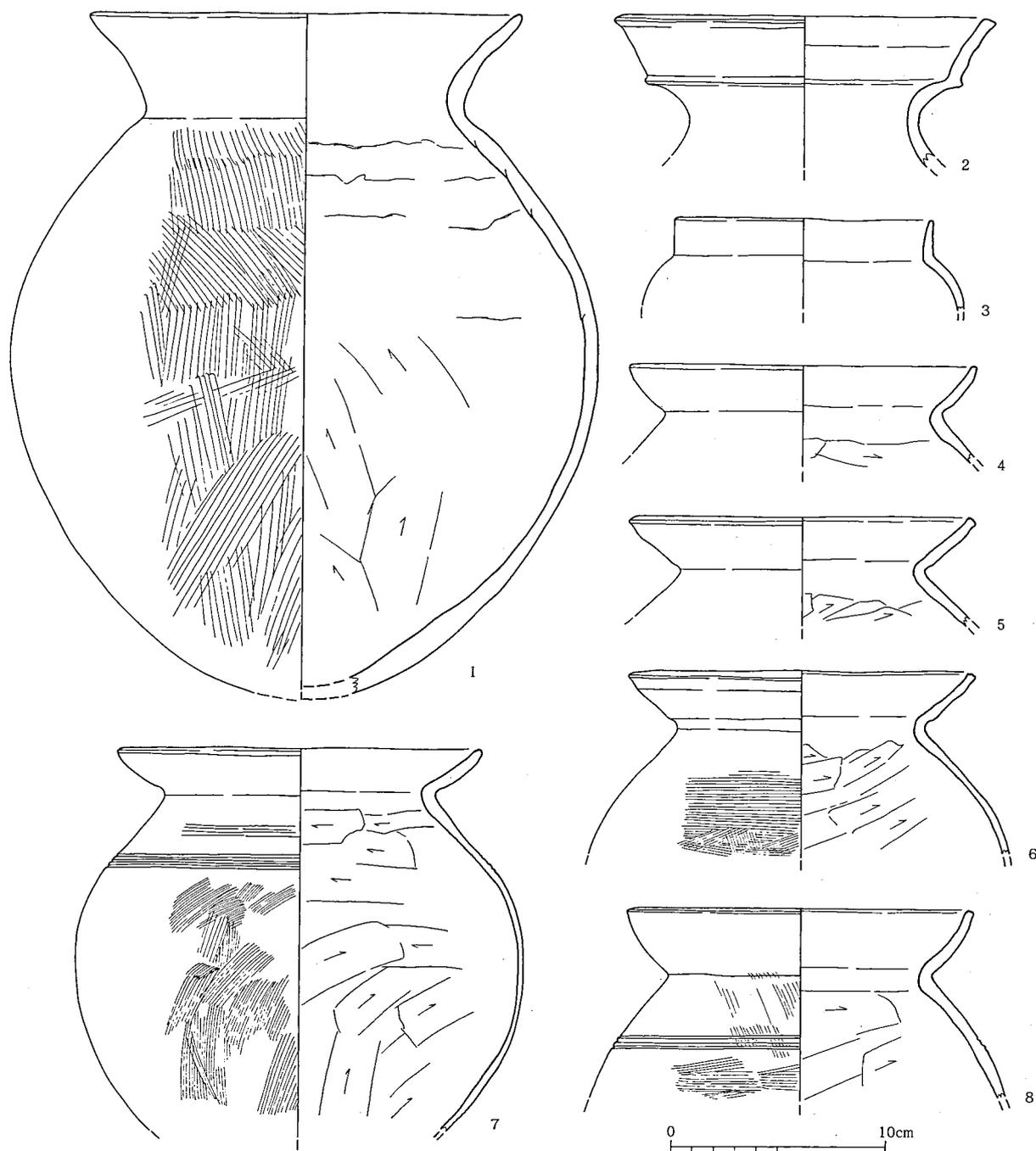
76号竪穴住居跡 (図版32、第166図)

II区南2で検出した竪穴住居跡である。71号竪穴住居跡から3m南に位置する。81号竪穴住居跡と重複しており、これより新しい。床面は南側がやや高くなり、この付近で深さ20cm、北側で深さ25cmを測る。床面上ではP1・P2のピットを検出した。P1は径30cm、深さ45cm、P2は径50cm、深さ30cmを測る。

図示した土器の内、1・7は床面直上から出土、その他は覆土から出土した。

出土土器 (図版76・77、第167図)

1は直口縁の壺である。胴部は倒卵形で、底部は尖底気味の丸底、胴部の最大径は中位よりやや上



第167図 76号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

にある。頸部は稜をなさない。口縁部は外反しながら開き、端部は丸くおさめる。胴部外面には粗い縦ハケ目を行い、横ハケ目は行っていない。肩部内面には粘土接合痕が明瞭に残る。胎土に砂粒を多く含み粗く、色調は黄褐色を呈す。2は山陰系二重口縁壺である。一次口縁部は大きく外反し、二次口縁部は直線的に開き外端部は面をなす。色調は黄灰褐色を呈す。3は短頸壺である。肩は丸く張り、口縁部は短く直立し端部が尖る。体部内面はナデ、それ以外は風化が著しくて調整不明。胎土に粗砂を若干含み色調は褐色を呈す。

4～8は布留系の甕である。4は口縁部が内湾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。色調は黄灰褐色を呈す。外面には煤が付着する。5は口縁部がわずかに内湾し、端部は内外にわずかにつまみ出す。色調は黄灰褐色を呈す。6は口縁部がほとんど内湾せず直線的である。端部は内側をわずかにつまみ出す。全体的に器壁は薄い。色調は黄肌色を呈す。7は胴部最大径が中位よりやや上に位置し、口縁部は内湾して開く。端部は丸い。肩部には櫛描直線文を巡らす。色調は内面黄灰色、外面肌灰色を呈し、外面には煤が広く付着する。8は肩があまり張らず、口縁部は内湾して立ち気味に開く。端部はやや面をなすがシャープさに欠ける。肩部には櫛描波状文を巡らせる。色調は橙肌色を呈す。

77号竪穴住居跡 (図版33、第168図)

II区南2で検出した竪穴住居跡である。76号竪穴住居跡から1m南側に位置する。ゴミ穴等の攪乱によってかなりの部分が失われる。また南側を配水管の設置による攪乱によって大きく失う。この攪乱の更に南にも当該住居跡の続きと考えられる遺構があり、一応当該住居跡の一部として報告するが、そうすると一棟の住居跡にしては大きすぎるといった疑問も残る。異なる二棟の住居跡が重複したものだっただかもしれない。南側は78号竪穴住居跡と重複し、これに切られる。住居跡の壁は西壁と東壁が部分的に残るに過ぎない。床面はほぼ水平をなし遺構面からの深さは20cmを測る。床面の中央からやや北寄り、径70cmの広さで焼面を検出した。位置からすれば炉跡としてよいだろう。また、この焼面の北東約30cmの所にも焼面があり、さらにこの北東ではカマドの一部と思われる焼土を含んだ粘土塊を検出した。大半を攪乱によって失うが、位置からみて粘土塊はカマド煙道、焼面は火床と見てよいものである。ピットはP1～P3を検出した。P1は径70cm、深さ30cm、P2は一部攪乱を受けるが径100cmに復元される。深さは20cm。P3は長軸75cm、短軸50cm、深さ20cm。

遺物は炉付近の床面直上で、5・7・9・14・21・22～24・25がまとまって出土、P2からは19が出土した。その他は覆土からの出土である。土器の他、鉄釘、鉄滓も出土している。

出土土器 (図版77・78・86、第169～172図)

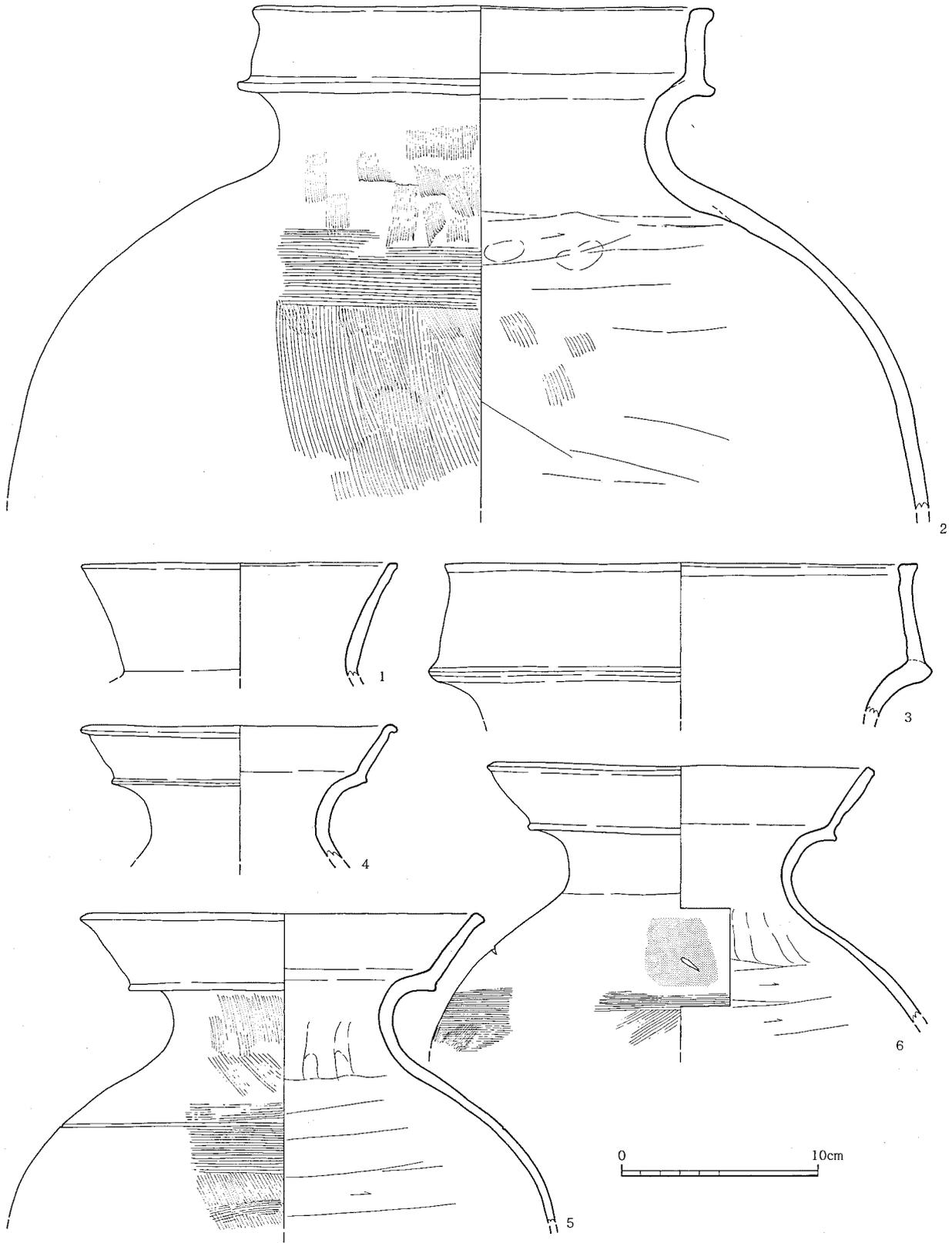
1～8は壺である。1は直口縁の壺。口縁部は外反し、端部は水平面をなす。内外面横ナデで色調は黄灰褐色を呈す。2～8は山陰系の二重口縁壺である。2は大型品。肩は丸く大きく張り、頸部は強く締まる。口縁部は直立し、端部を外側に肥厚させ上端が水平面をなす。屈曲部の外面には水平に薄く伸びる三角突帯を巡らす。胴部内面は横ヘラケズリを行うが、先行するハケ目も観察される。外面はハケ目。胎土に砂粒を若干含み色調は内面橙褐色、外面黄褐色を呈す。胴部外面には広範囲に黒斑が広がる。3も大型の二重口縁壺だが口縁部は直線的に内傾し、端部を外側につまみ出して上面が水平面をなす。屈曲部の突帯はシャープさに欠ける。全面横ナデ調整を行い色調は淡黄灰色を呈す。4は一次口縁部の外反があまり強くなく、二次口縁部は直線的に開き端部を外側に肥厚させる。屈曲部の突帯は小さくシャープである。色調は黄灰褐色を呈す。5は肩が丸みを帯び頸部は良く締ま



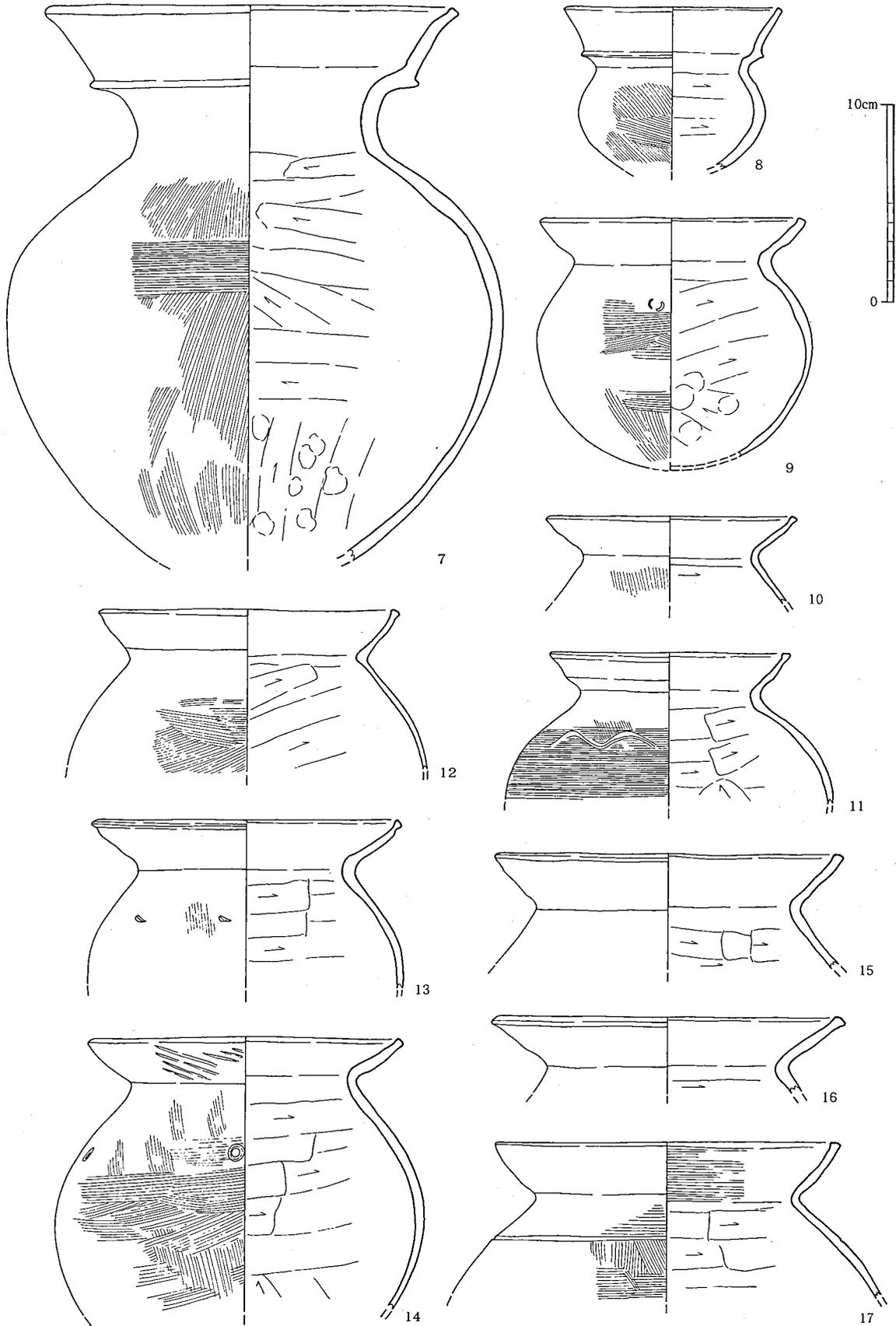
第168図 77号竪穴住居跡実測図 (1/60)

り長めである。一次口縁部はほぼ水平をなし、二次口縁部は直線的に開き外端部を丸くつまみ出す。肩部外面に一条の沈線を巡らす。色調は黄灰褐色を呈す。6も頸部が長めで比較的長く、口縁部は直線的に開き外端部をわずかにつまみ出す。屈曲部外面の三角突帯が小さくシャープである。肩部にヘラ先端の刺突による列点文を4ヶ所に均等に配し、その内の1ヶ所の周辺に赤い彩色を方形に施す。土器の色調は黄灰褐色を呈す。7は胴部の最大径が中位近くに位置し、胴部の径に対して口縁部の径が大きい。二次口縁部は外反気味に開き、端部を上方につまみ出す。内面はヘラケズリを行い、底部付近には指圧痕が認められる。外面は縦ハケ目後に肩部に横ハケ目を行う。色調は黄灰褐色を呈す。8は小型の山陰系二重口縁壺である。胴部は扁球形で一次口縁部は短く外反し、二次口縁部は外反気味に開く。胴部内面は横ヘラケズリ、外面はハケ目、口縁部は横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。

9～21は甕である。9は小型の甕。球形に近い胴部で口縁部は内湾しながら開き、内端部をつまみ出す。肩部に不明瞭な竹管文を施文するが、全周するかどうかは不明。色調は黄灰褐色を呈す。肩



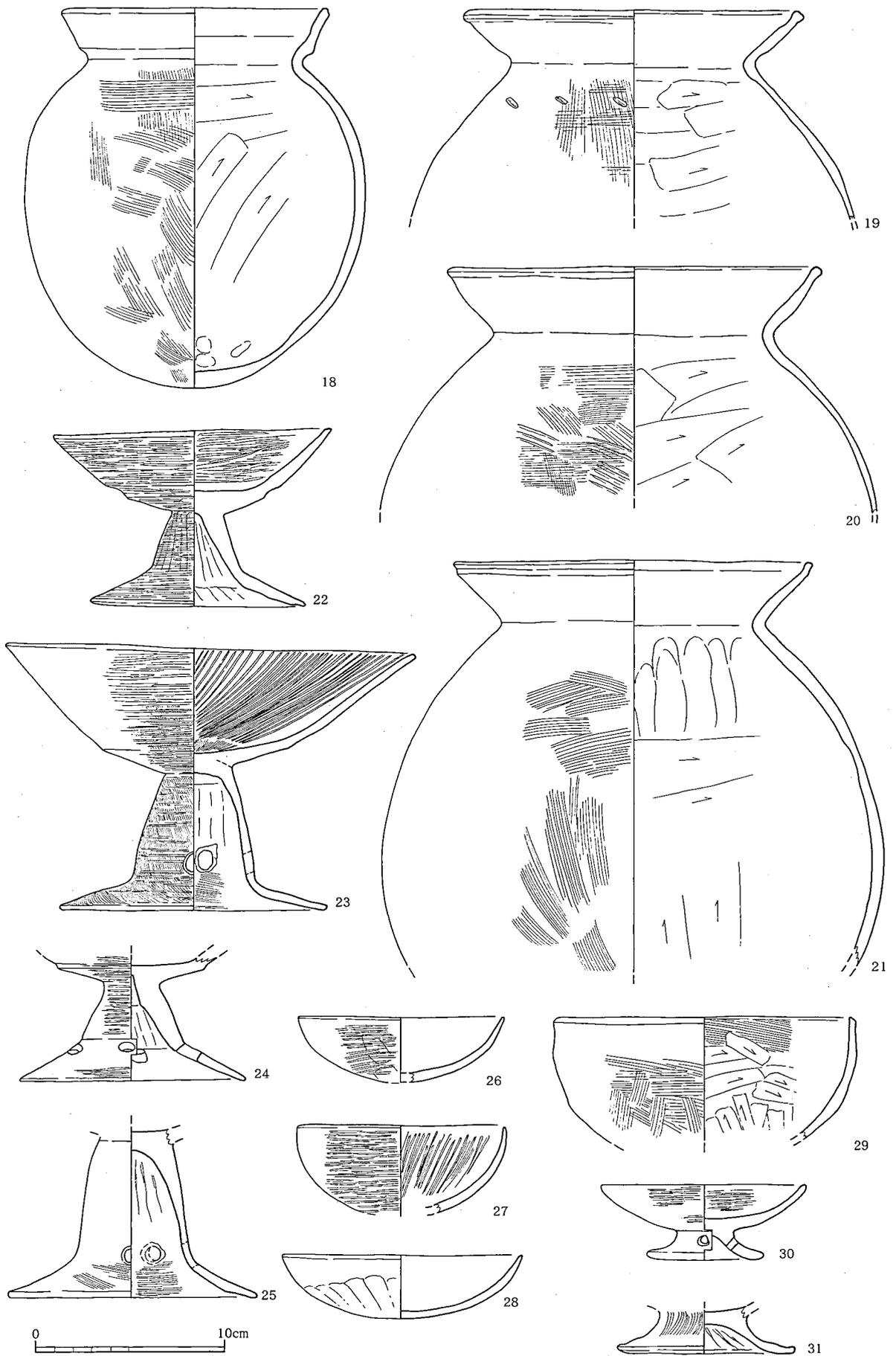
第169图 77号竖穴住居跡出土土器实测图① (1/3)



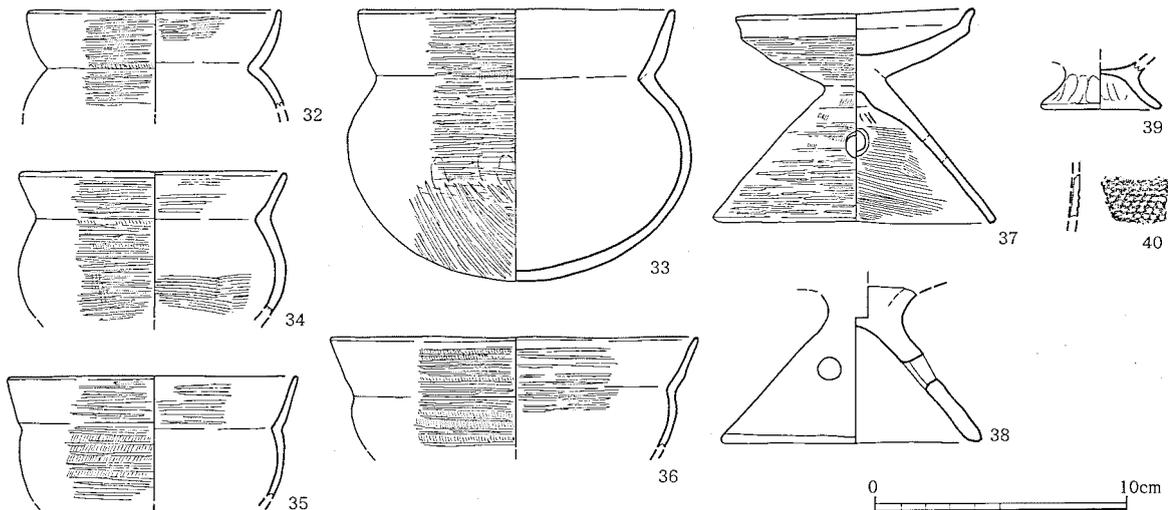
第170图 77号竖穴住居跡出土土器实测图② (1/3)

部以下は煤が付着する。10も小型の甕である。肩は丸みを帯びず直線的に傾斜し、口縁部はわずかに内湾して開き、上端部をわずかにつまみ出す。器壁が極めて薄い。色調は黄灰褐色を呈す。11は肩が丸く張り、胴部の径に対して口縁部の径が小さい。口縁部はほとんど内湾せず立ち気味に開き、端部が水平面をなす。口縁部の器壁は胴部よりも薄くなる。肩部には雑な櫛描波状文を巡らす。色調は黄灰褐色を呈し、外面には煤が多く付着する。12は口縁部が内湾し、立ち気味に開く。端部は面をなす。内面のヘラケズリは屈曲部近くにまで及ぶ。色調は黄灰褐色を呈す。13は肩が丸みを帯び、口縁部の径が大きい。口縁部は内湾して開き、端部を外側にわずかにつまみ出す。内面のヘラケズリは屈曲部近くにまで及び、肩部外面には列点文を巡らす。色調は黄灰色を呈し、外面は二次加熱を強く受け器表が剥離する。14は肩部が直線的に傾斜し、口縁部は短く開き内端部を丸くつまみ出す。肩部には竹管文を施し、2個確認できる。口縁部外面には横ナデに先行するタタキが残る。色調は黄灰褐色を呈す。15は口縁部がほとんど内湾せず直線的に開き、端部はつまみ出さず上端が水平に近い面をなす。色調は黄灰褐色を呈し外面に煤が付着する。16も口縁部が直線的に開き外端部を丸く肥厚させる。内面のヘラケズリは屈曲部付近にまで及ぶ。色調は黄灰褐色を呈す。17は口縁部が内湾し、立ち気味に開く。端部は水平に近い面をなし、内側をわずかにつまみ出す。胴部内面のヘラケズリは屈曲部付近にまで及ぶ。口縁部内面には横ナデに先行する横ハケ目が残る。肩部には一条の沈線を巡らす。色調は黄灰褐色を呈す。18は胴部が縦長の球形で、最大径が中位にある。口縁部は立ち気味に開き、下方で一度緩く屈曲する特徴を持つ。総じて器壁が厚い。胎土に砂粒をあまり含まず比較的精良で色調は茶褐色を呈す。外面には全体的に煤が付着する。19は肩部が直線的に傾斜し、口縁部はほとんど内湾せず開く。端部は丸く肥厚する。胴部内面のヘラケズリは屈曲部近くにまで及び、外面のハケ目も屈曲部近くにまで及んでいる。肩部には列点文を施すが、3点だけで全周しない。色調は黄灰褐色を呈す。二次加熱が著しく器表の風化が進む。20は肩部が丸みを帯び、口縁部はわずかに内湾して立ち気味に開く。端部は外側に肥厚する。外面にはハケ目に先行する左上がりタタキが残る。色調は薄茶褐色を呈し他と異なる。21は胴部の重心が中位に位置する。口縁部は直線的に開き、上端のみ立ち上がる。内面のヘラケズリは通常よりも下の方で終わっており、肩部には縦指ナデが広く行観察される。色調は黄灰褐色を呈す。

22～25は高杯である。22は小型の高杯である。杯部の屈曲部外面には幅の広い凹線を有し、体部は直線的に伸びる。内外面に緻密な横ヘラミガキを行うが、回転的ではなく短い単位のものである。脚柱部は中膨らみとならず、柱部と裾部の境には明瞭な稜を有す。裾部は直線的に開き、端部は尖る。脚部内面は縦ナデ、外面は横ヘラミガキ。胎土は比較的精良で色調は茶色を呈す。23は屈曲部外面に不明瞭な段を有す。体部は直線的に開き、口縁端部は小さな面をなす。内面は暗文状の縦ヘラミガキ、外面は縦ハケ目後疎らな横ヘラミガキを行う。脚柱部はエンタシス状に中膨らみをなす。裾部は大きく開き、端部は面をなす。脚部の屈曲部には稜をなさない。屈曲部のやや上に2ヶ所円孔を穿孔するが、半乾燥時に外側から穿孔しており内面の孔周辺の器表が剥離する。柱部内面は縦ナデ、裾部内面は横ハケ目、外面はハケ目の後に疎らな横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は黄橙色を呈す。24は低脚の高杯脚部である。柱部はわずかに中膨らみとなり、裾部はあまり開かず直線的に伸び、端部は丸くおさめる。屈曲部は不明瞭な稜を有す。屈曲部のやや下に円孔を4ヶ所穿孔する。柱部内面は縦ナデ、裾部内面は横ナデ、外面は横ヘラミガキ。胎土は比較的精良で色調は赤褐色を呈す。25は脚柱部が中膨らみとなり裾部は緩やかに開く。端部は丸い。屈曲部のやや上に円



第171图 77号竖穴住居跡出土土器实测图③ (1/3)



第172図 77号竪穴住居跡出土土器実測図④ (1/3)

孔を穿孔する。現存は2ヶ所、推定で3ヶ所に配置される。柱部内面は縦ナデ、裾部内面は横ハケ目、外面は風化が著しく、裾部のハケ目しか確認できない。胎土は精良で色調は肌色を呈す。

26～36は鉢である。26～29は直口縁の鉢。26は内面の風化が著しく調整不明。外面は緻密な横ヘラミガキを行い、これに先行するヘラナデの稜線が残る。胎土は精良で色調は黄橙色を呈す。27は半球形の深い鉢。内面は縦ヘラミガキによる暗文を施し、外面は緻密な横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は茶色を呈す。28は浅い鉢である。風化が著しく、外底面のヘラナデの稜線のみが確認できる。胎土に砂粒を若干含み色調は橙色を呈す。29はやや大型で深い体部の鉢である。口縁部は直立し、端部は外傾する面をなす。内面の口縁部は横ハケ目、それより下位はヘラケズリを行う。外面の口縁部は横ナデ、下半はハケ目を行う。胎土に砂粒を多く含み色調は黄灰褐色を呈す。

30・31は脚付鉢である。30は鉢部が浅く、口縁端部は丸くおさめる。内外面ヘラミガキ調整を行う。脚部は緩やかに外反して開き、端部を丸くおさめる。また脚部に1ヶ所小さな穿孔を行う。脚部の調整は全面横ナデ。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰色を呈す。31は裾部が大きく開き、端部がわずかに跳ね上がる。内面には縦ナデの工具痕が残り、外面は縦ハケ目の後に端部付近を横ナデする。胎土に砂粒を多く含み、色調は黄灰色を呈す。

32～36は外反口縁の鉢または壺である。32は頸部が強く締まり、口縁部は内湾してあまり開かない形状となる。体部内面はナデ、口縁部内面は横ハケ目後横ナデ。外面は縦ハケ目後に緻密な横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。33はやや大型の小型精製壺である。体部が扁球形で頸部がやや締まった形状になる。口縁部は内湾してあまり開かず立ち上がり、端部は丸くおさめる。内面はナデ、外面は緻密な横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は茶褐色を呈す。34も体部が深みを有し壺に近い。口縁部は直線的に短く開く。体部内面の下半は横ハケ目、口縁部内面は疎らな横ヘラミガキ、外面は細かい縦ハケ目後に横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は橙肌色を呈す。35は頸部の締まりが弱く、口縁部はわずかに内湾し、あまり開かずに立ち上がる。屈曲部内面の稜はシャープである。口縁端部は薄く尖る。体部内面はナデ、口縁部内面は横ヘラミガキ、外面は縦ハケ目後に横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は黄橙色を呈す。36は頸部の屈曲が弱い。口縁部は直線的に開き端部は薄く尖る。内面の口縁部から屈曲部下まで横ヘラミガキを行い、外面

は縦ハケ目の後に疎らな横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は橙色を呈す。

37・38は小型器台である。37は精製品。受部の立ち上がりは丸味を帯びて短く外反し、端部が外側を向く。内面と立ち上がりの外面は横ナデ、外面の立ち上がり以下は横ヘラミガキ。裾部は直線的に開き、端部は面をなす。裾部の中位に円孔を2ヶ所穿孔する。内面はハケ目、外面は横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。38は粗製の小型器台。受部と脚部の中心線がずれている。裾部は直線的に開き、端部は丸い。器壁が厚く凹凸が残る。裾部の穿孔は3ヶ所に行われる。脚部の接合は上からの粘土充填による。調整は全面ナデ仕上げである。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。

39は製塩土器の脚部である。指ナデで整形を行い、胎土に砂粒を若干含み色調は茶褐色を呈す。

40は半島系の軟質土器である。外面は小さな斜格子タタキを行い、内面は器表が剥離する。胎土に砂粒を若干含み、色調は灰褐色を呈す。

78号竪穴住居跡 (図版33、第173図)

II区南2で検出した竪穴住居跡である。79号竪穴住居跡と重複しており、これよりも新しい。南北長5.0m、東西長4.2mを測り南北にやや長い長方形プランとなる。総面積は20.7m²を測り、中型の部類に含まれる。床面はほぼ水平をなし、遺構面からの深さは45cmを測る。西壁のほぼ中央にカマドが付設され、煙道が西壁に沿って南側へと伸びる。このカマドの対面、東壁際では粘土塊を検出した。長軸115cm、短軸70cm、高さ25cmの規模である。位置から推察して出入口施設の可能性が高い。さらに煙道先端の東側と中央付近でも粘土塊を検出したが、これらの用途は不明である。床面のほぼ中央では、径60cm、深さ20cmのピットを検出した。

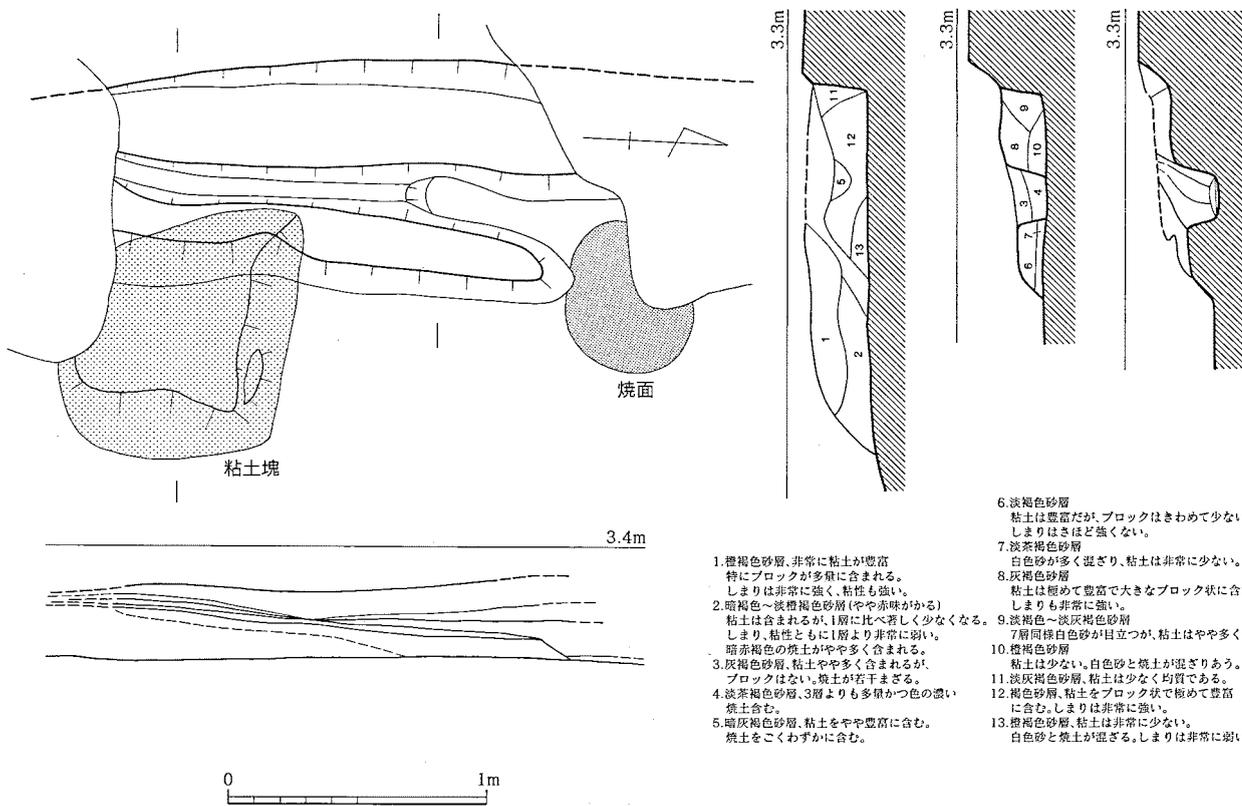
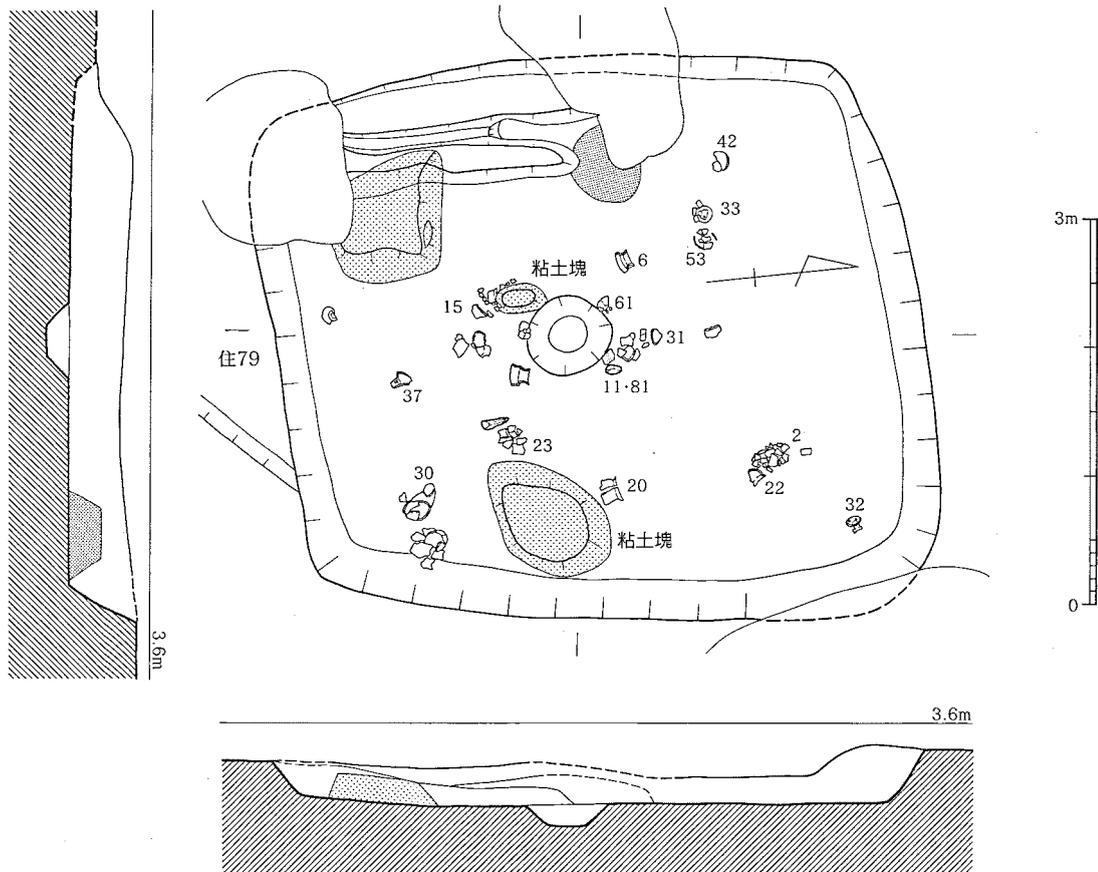
78号竪穴住居跡カマド (第173図) 住居西壁のほぼ中央にカマド本体が位置し、煙道がその壁に沿って南側に伸び、先端がコーナーへと続く、いわゆるL字形カマドである。カマド袖部と煙道の先端が攪乱を受ける。カマドの焚口には焼面が広がり、この範囲からすると本来は両袖とも更に長く伸びていたものと思われる。煙道内部は40cmの幅で現状で350cmの長さを測る。北側は火床面とほとんど変わらない高さだが、南側に行くにつれて次第に高くなり、両者の比高差は40cmを測る。カマドの構築には粘土と細砂を混ぜたものを使用し、良く締まる。煙道東側の粘土塊はこのカマド構築土とは異質のものであり、直接関連はないものと判断した。

出土遺物は豊富である。特に床面からやや浮いた状態で多くの土器が出土している。その他、7・36・77~79は覆土上層、46は粘土内、83はカマド煙道内覆土から出土した。土器の他に砥石、不明鉄器、石製支脚が出土している。また78・79号竪穴住居跡上層から石錘未製品が出土している。

出土土器 (図版78~80・86・88、第174~178図)

1~13は壺である。1・2は直口壺。1は外反気味に開き、端部付近の器壁が薄くなる。内面横ハケ目、外面縦ハケ目の後に全面横ナデを行う。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。2は直線的に開き端部は水平面をなす。全面横ナデ調整を行う。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色。

3・4は山陰系の二重口縁壺で、二次口縁部が直立するものである。どちらもわずかに外傾し、端部を肥厚させ上端が水平面をなす。3は黄灰色を呈す。4は淡茶色を呈す。5~7は口縁部が開く山陰系二重口縁壺である。5は屈曲部内面が極めて不明瞭である。端部は外側に丸くつまみ出す。色調は黄灰色を呈す。6は直線的に立ち上がり筒状になる頸部を有す。一次口縁部は直線的に開き、二次口



- 6. 淡褐色砂層
粘土は豊富だが、ブロックはきわめて少ない。
しまりはきわめて弱い。
- 7. 淡茶褐色砂層
白色砂が多く混ざり、粘土は非常に少ない。
- 8. 灰褐色砂層
粘土は極めて豊富で大きなブロック状に含む。
しまりも非常に強い。
- 9. 淡褐色～淡灰褐色砂層
7層同様白色砂が目立つが、粘土はやや多く含む
- 10. 橙褐色砂層
粘土は少ない。白色砂と焼土が混ざりあう。
- 11. 淡灰褐色砂層、粘土は少なく均質である。
- 12. 褐色砂層、粘土をブロック状で極めて豊富
に含む。しまりは非常に強い。
- 13. 橙褐色砂層、粘土は非常に少ない。
白色砂と焼土が混ざり、しまりは非常に弱い。

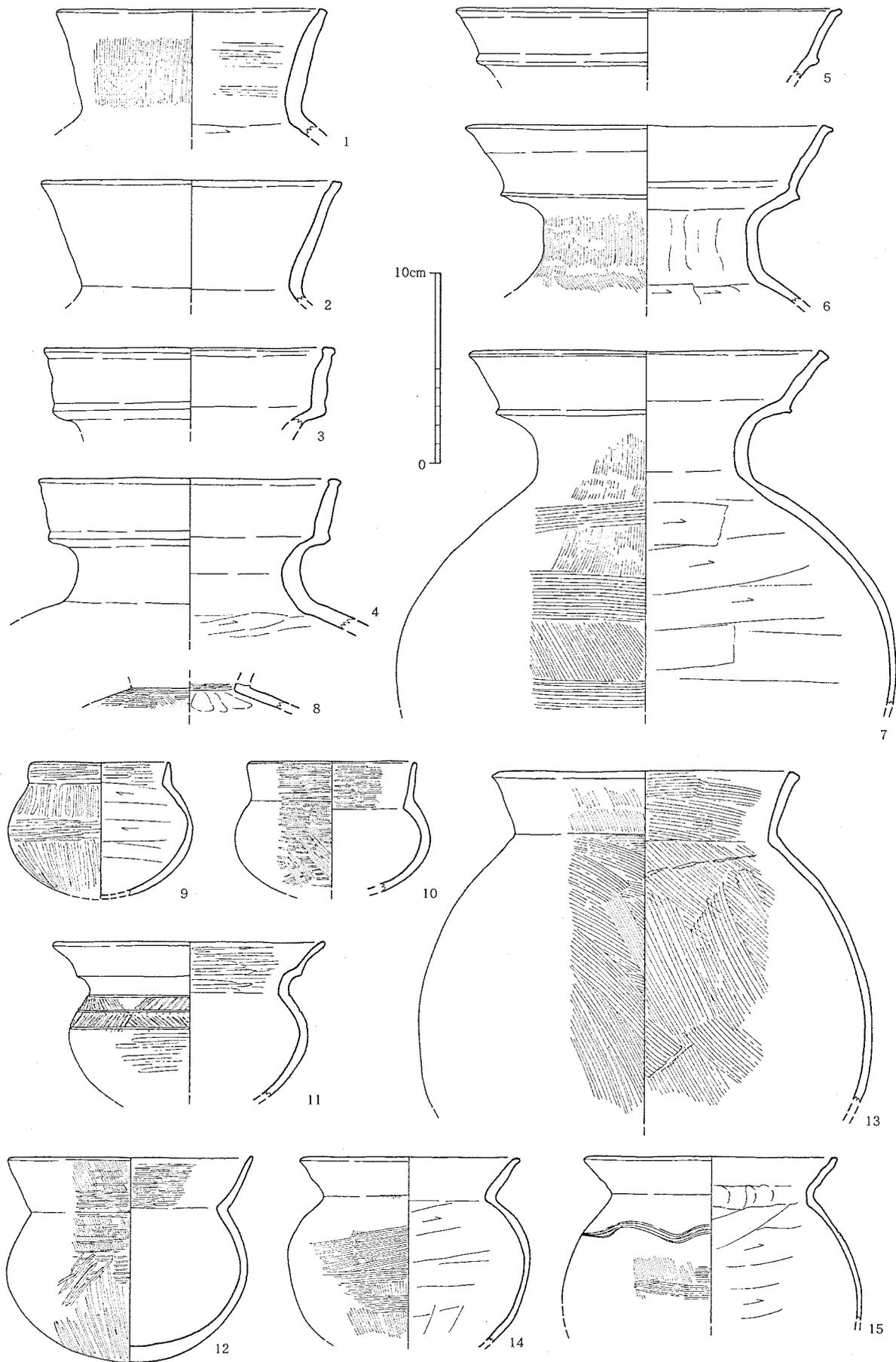
第173図 78号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

縁部も直線的に開いて端部を外側につまみ出し、上端が水平に近い面をなす。屈曲部外面の突帯、口縁端部のつまみ出しはともにシャープなものである。頸部内面は縦指ナデの稜線が残り、外面には縦ハケ目を行う。色調は黄灰褐色を呈す。7は最大径がやや下に位置し、頸部は比較的良く締まっている。一次口縁部は緩く外反し、二次口縁部は直線的に開く。屈曲部外面には小さな三角突帯を巡らせ、口縁端部は内外にわずかにつまみ出す。色調は黄灰色を呈す。

8は畿内系精製直口壺の肩部片である。内面は指ナデを行い、外面は細かいハケ目の後に横ヘラミガキを行う。頸部内面も横ヘラミガキ。胎土は精良である。内面の色調は茶灰色を呈し、頸部内面と外面は黒色顔料を塗布するため黒褐色を呈す。

9は小型の短頸壺である。体部は球形で口縁部は短く直立する。端部は丸く、屈曲部内面には明瞭な稜を有す。体部内面は横ヘラケズリ、口縁部は内外面横ヘラミガキ、体部外面は最大径付近のみ横ヘラミガキを行い、それ以外は縦ヘラミガキを行う。胎土に砂粒を若干含みあまり良質ではない。色調は黄灰色を呈す。10も短頸壺だが9よりも口縁部が長い。体部は扁球形で口縁部はやや開いて立ち上がる。屈曲部内面は明瞭な稜を有し、口縁部は丸くおさめる。体部内面はナデ、口縁部は内外面横ヘラミガキ、体部外面はハケ目後にヘラミガキ。胎土は精良で色調は橙色を呈す。11は山陰系の小型二重口縁壺で、器高が低く鉢に近い形状となる。体部の最大径は中位よりやや上に位置し、頸部はあまり締まらない。二次口縁部は外反して開き、端部は丸くおさめる。体部内面はヘラケズリの後にナデ、口縁部内面は横ヘラミガキ、口縁部外面は横ナデ、体部外面は横ヘラミガキを行う。肩部にはヘラ描綾杉文を巡らせる。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。12は精製の小型丸底壺である。体部は扁球形で頸部がやや締まり、口縁部は内湾して短く開き、鉢に近い形状となる。体部内面はナデ、口縁部内面は緻密な横ヘラミガキ、外面は細かいハケ目後に疎らな横ヘラミガキを行い、底部付近は一方向のヘラミガキを密に行う。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。

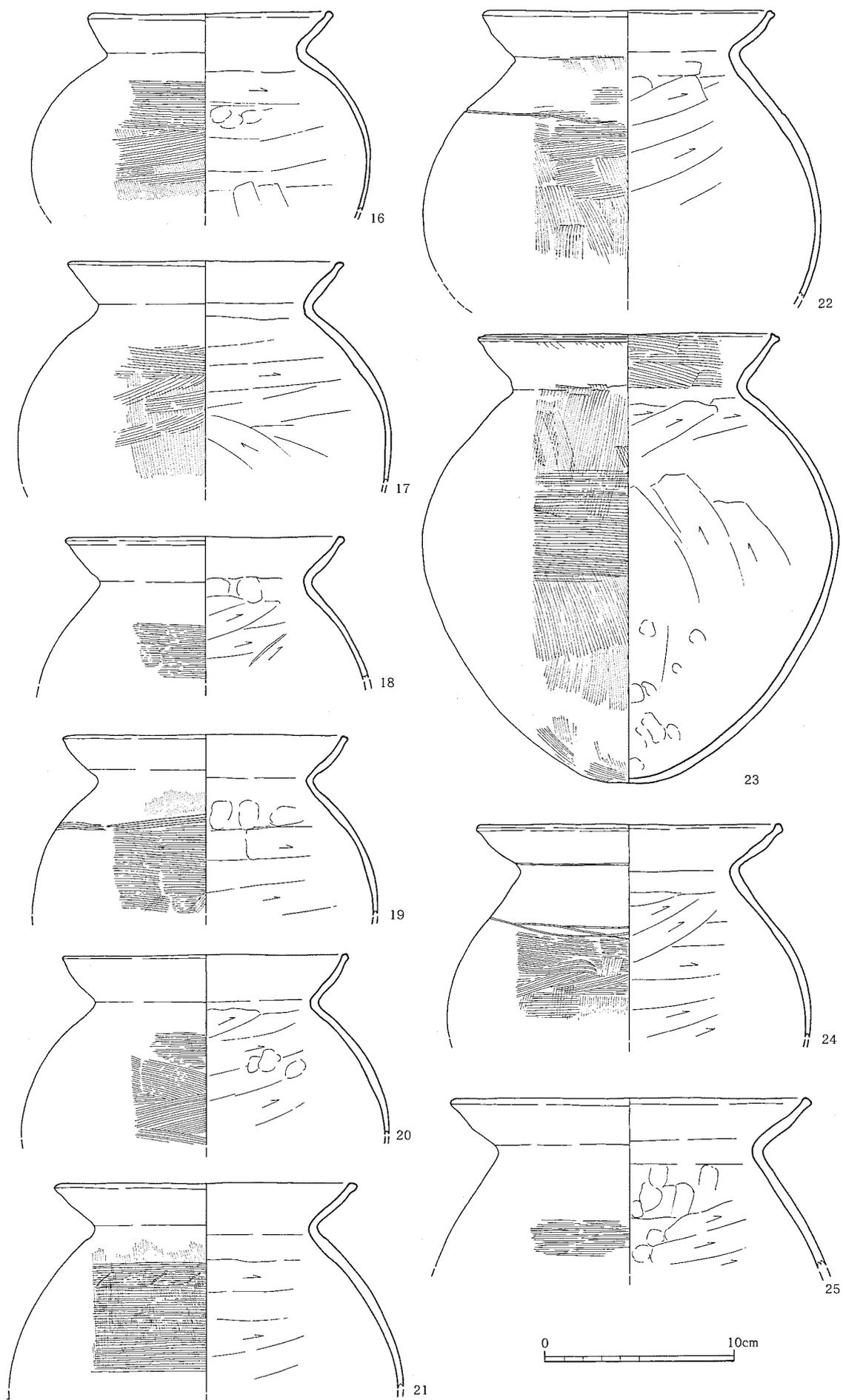
13～31は甕である。13は在来系の甕。胴部は丸味を帯び、頸部は比較的締まる。口縁部はあまり開かず直線的に伸びる。端部は面をなす。内外面ともハケ目調整で、口縁部はハケ目後に横ナデを行う。胎土は粗砂をやや多く含み色調は暗黄灰色を呈す。14は小型の甕で小型丸底壺に近い形状をなす。胴部は球形で最大径が中位よりやや上に位置する。口縁部は直線的に開き、端部は丸くおさめる。胴部内面は屈曲部直下まで横ヘラケズリを行う。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。15は小型の布留系甕。肩は丸みを帯び、口縁部は直線的に開き端部は丸くおさめる。肩部には櫛描波状文を巡らせる。器壁は薄く色調は黄灰褐色を呈す。16は胴部が丸味を帯び頸部が締まり、肩の張った器形となる。口縁部は短く、内湾して立ち気味に開き、端部は面をなす。色調は薄い茶色を呈す。17も肩が丸く張った器形となる。口縁部は直線的に開く。色調は黄灰褐色。外面に煤が付着する。18は口縁部が内湾して立ち気味に開き、端部は丸味を有す。屈曲部内面には指圧痕が明瞭に残る。色調は黄灰褐色。19は屈曲部内面の稜が比較的明瞭で、口縁部は内湾して立ち気味に開き、端部はやや面をなす。肩部には2条の雑な沈線を巡らす。色調は暗黄灰色を呈す。20は肩が丸みを帯び口縁部は内湾して立ち気味に開く。端部は丸くおさめる。二次被熱が著しく内外面変色する部分がある。色調は黄灰褐色を呈す。21は胴部がやや丸味を帯びるが張りが少ない。口縁部は短く、わずかに内湾して開き、端部は丸く肥厚する。肩部にはハケ目先端の刺突による平行斜線文を巡らせる。色調は黄灰褐色を呈す。22は胴部最大径が中位に位置し、口縁部は内湾して立ち気味に開く。端部は面をなすがシャープさに欠ける。肩部には一条の沈線を巡らす。色調は黄灰褐色を呈す。



第174图 78号竖穴住居迹出土土器实测图① (1/3)

し、二次被熱が著しく部分的に変色し、また煤が付着する。23は完形に復元できた甕である。底部は尖底気味の丸底で胴部最大径が中位よりやや上に位置し、頸部は比較的締まっている。口縁部はほとんど内湾せず、端部は内側につまみ出される。胴部内面は屈曲部の近くまでヘラケズリを行い、底部近くには指圧痕が明瞭に残る。口縁部内面は横ナデに先行する横ハケ目が明瞭に残る。胴部外面はハケ目調整で、肩部に横ナデを全く行っていないために肩部のハケ目が明瞭である。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。外面の肩部以下に煤が付着する。24は胴部最大径がやや下に位置し、肩部は直線的に傾斜する。口縁部はやや内湾して端部が上方に若干肥厚する。肩部には基本的に1条、部分的に2条となる沈線を巡らす。色調は黄灰褐色を呈す。25は肩部が直線的に傾斜する。口縁部はわずかに内湾し、端部が面をなす。色調は黄灰褐色。26はやや肩が張った器形となる。口縁部はほとんど内湾せず、端部はわずかに上方につまみ出す。色調は灰褐色を呈し、二次被熱のため部分的に黒変する。27は口縁部が内湾し、立ち気味に開く。端部は外側につまみ出す。色調は黄灰褐色を呈し外面には煤が付着する。28は口縁部が内湾し、端部が肥厚して上端が水平面をなす。内面のヘラケズリは屈曲部からかなり下がった位置までしか行わず、屈曲部下には指圧痕が明瞭に残る。肩部には櫛描波状文を巡らす。色調は黄灰褐色を呈す。29は肩が丸みを帯び口縁部はあまり内湾せず立ち気味に開く。端部は内外に丸くつまみ出す。内面の屈曲部下には指圧痕が明瞭に残る。色調は暗黄灰色を呈す。30は胴部が倒卵形をなすと思われる。口縁部はほとんど内湾せず、口縁部はつまみ出しを行わずシャープな面をなす。内面のヘラケズリは屈曲部近くまで行い、外面の肩部には一条のヘラ描波状文を巡らせる。色調は黄灰褐色を呈す。31は肩部が直線的で丸味を帯びず、口縁部はわずかに内湾して立ち気味に開く。端部は内外にわずかにつまみ出しており、上端は水平に近い面をなす。内面には横ナデに先行する横ハケ目が明瞭に残る。胎土に砂粒をあまり含まず比較的良質で、色調は暗灰褐色を呈す。外面には煤が付着する。

32～40は高坏である。32は小型の高坏。坏部は浅く、屈曲部を持たない。口縁端部は丸くおさめる。内外面ともやや幅広のヘラミガキを行う。脚柱部は筒状で中膨らみをなさず、裾部はあまり開かず直線的である。裾端部はシャープな面をなす。屈曲部の内面には明瞭な稜を有す。屈曲部からやや下がった位置に円孔を4ヶ所穿孔する。柱部内面は縦ナデ、裾部内面はハケ目後横ナデ、外面は縦ヘラミガキ。器壁は全体的に厚めである。胎土は比較的精良で色調は下地の色が肌色を呈し裾内面を除く全面に橙肌色の化粧土を塗布する。33は坏部の屈曲部外面に不明瞭な段を有し、体部は外反気味に伸びる。端部はシャープにおさめる。内面は細かく丁寧なハケ目の後に放射状の暗文を带状に施文する。外面はやや粗いハケ目の後に横ヘラミガキを行う。脚柱部は中膨らみとなり、裾部は水平近くまで大きく開く。端部は丸味を帯びる。柱部下半には2ヶ所の穿孔が見られる。柱部内面は縦ナデでヘラ状の工具痕が残る。裾部内面はハケ目。外面はハケ目の後に疎らな横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は黄肌色を呈す。34は浅い坏部となる。屈曲部外面には不明瞭な稜を有し、体部は外反して開く。端部は丸くおさめる。風化が著しく調整は不明。脚部との接合は粘土充填を行う。胎土に砂粒を若干含み粗めで、色調は黄灰褐色を呈す。35は屈曲部に稜を持たず、体部は外反して開き、端部は丸味を帯びるものの面をなすように仕上がる。内面は風化が著しく調整不明、外面は横ヘラミガキを行い先行するハケ目も残る。脚部との接合は粘土充填を行う。胎土は比較的精良で色調は黄灰色を呈す。36は有段の高坏である。屈曲部はシャープで、明瞭な稜を有す。脚部との接合は粘土充填を行う。内外面に横ナデ後縦ヘラミガキを行う。胎土に砂粒を若干含み粗い。



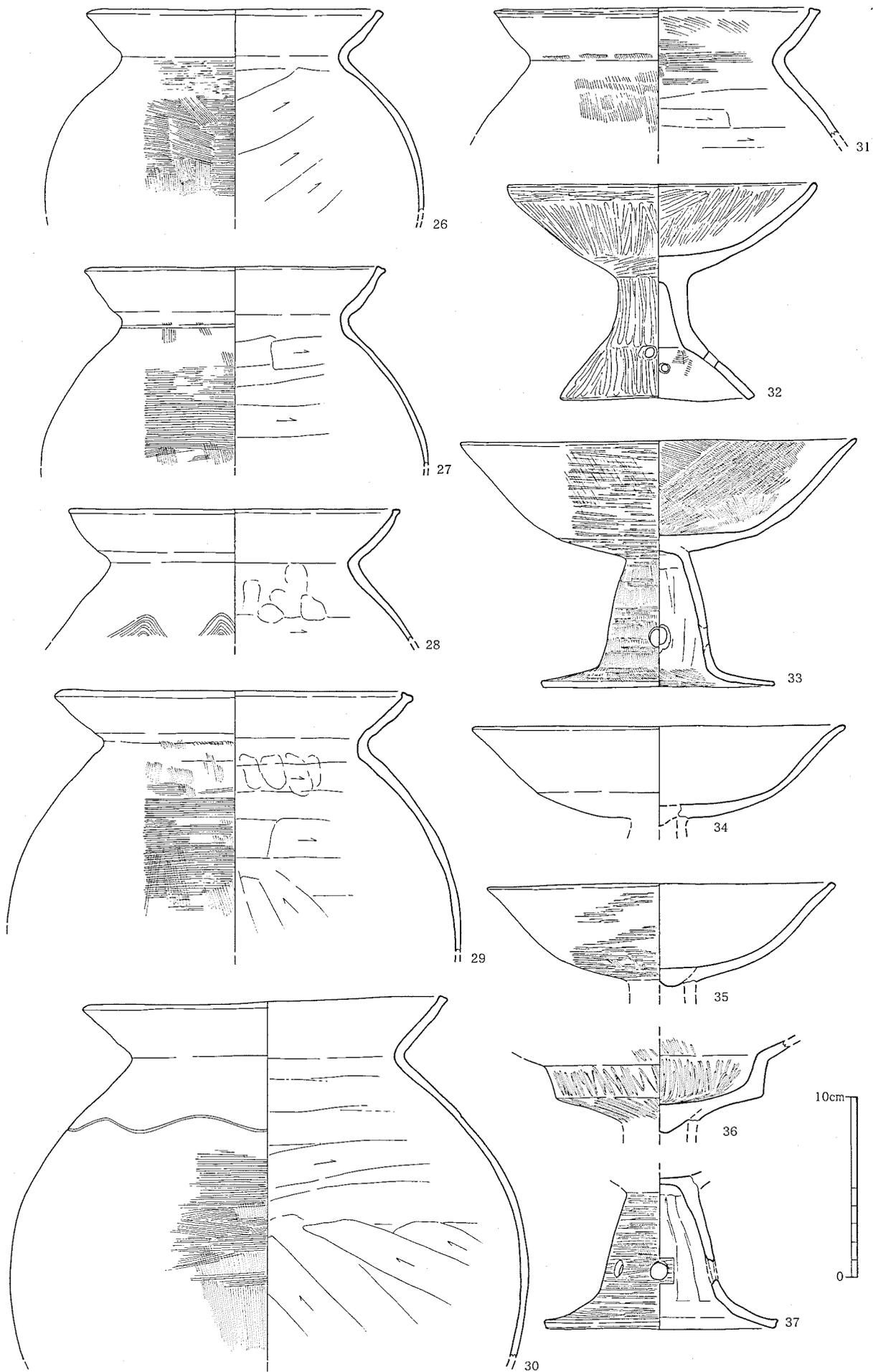
第175图 78号竖穴住居跡出土土器実測図② (1/3)

色調は肌茶色を呈す。37は柱部がエンタシス状に中膨らみとなり、裾部は緩やかに外反する。端部は強く横ナデして凹線状をなす。柱部下半に円孔を穿孔する。柱部内面は縦ナデ、裾部内面は横ナデ、外面は縦ハケ目後に細かい横ヘラミガキを比較的密に行う。胎土は精良で色調は黄橙色を呈す。38は低脚の脚部。柱部は細く、中膨らみとならない。裾部は大きく開く。裾には4ヶ所に穿孔を行う。内面は横ヘラケズリ、外面は縦ハケ目の後裾部のみ縦ヘラミガキを行う。胎土に砂粒を若干含み色調は黄褐色を呈す。39は明確な柱部をもたず、接合面から大きく外反して裾部へと至る。内面は横ヘラケズリ、外面は縦ハケ目後に縦ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は肌色を呈す。40は裾部中央の器壁が肥厚する。端部は強い横ナデで凹線状をなす。屈曲部のやや上方に円孔を穿孔するが、細片なので孔数は不明。柱部内面は横ヘラケズリ、裾部内面は横ハケ目、外面は風化が著しく調整不明。胎土に砂粒を若干含み粗く、色調は肌色を呈す。

41～46は直口縁の小型鉢である。41は底部が尖底気味となる。口縁部は尖る。内面はナデ、外面はハケ目を行う。胎土に砂粒を若干含み色調は茶褐色を呈す。42も尖底気味で体部が直線的に開く。口縁部は小さな玉縁状に肥厚する。内面は粗いハケ目、外面はナデの稜線が残り、底部はヘラケズリを行う。胎土に砂粒を若干含み色調は茶灰色を呈す。43も体部の内湾が少ない。口縁部は丸くおさめる。内面は風化が著しく調整不明、外面は幅広のヘラミガキを行い、先行するタタキも残る。胎土に砂粒を若干含み粗く、色調は肌色を呈す。44・45は浅い体部の精製鉢。44は内面の横ヘラミガキが疎らで、外底部にはヘラミガキを行わない。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。45は内外面とも横ヘラミガキを密に行う。胎土は精良で色調は橙褐色を呈す。46は口縁部が直立する深めの鉢。風化が著しく調整は不明。胎土に砂粒を若干含み粗く、色調は黄橙色を呈す。

47～54は外反口縁の精製小型鉢または壺である。47は体部が浅く、頸部の屈曲が弱い。口縁部は弱く内湾し、口縁端部は丸くおさめる。内面は疎らな横ヘラミガキを行い、外面は口縁部から屈曲部にかけては密に横ヘラミガキを行う。肩部は疎らな横ヘラミガキで先行するハケ目がよく残る。底部はヘラナデの後に一定方向のヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。48は口縁部が直線的に開き、端部が尖る。屈曲部内面の稜はシャープである。内面の口縁部から屈曲部付近まではハケ目の後に疎らな横ヘラミガキを行い、体部下半はナデを行う。外面は密な横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は橙色を呈す。49は48とほぼ同形。口縁部はわずかに内湾する。屈曲部内面の稜はシャープである。内面は疎らな横ヘラミガキを行い、外面は密に横ヘラミガキを行う。一部先行するハケ目も認められる。胎土は精良で色調は黄肌色を呈す。50は体部上半が内傾せず直立し、口縁部は直線的に開く。内面はナデ、外面は横ヘラミガキを密に行い、底部付近は一定方向のヘラミガキを行う。一部ヘラミガキに先行するハケ目も残る。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。51は屈曲部が明瞭で内面に鋭い稜を有し、口縁部は短く内湾気味に開き、端部が尖る。体部内面はナデ、口縁部内面はハケ目後横ナデ、外面は風化が著しく調整不明。胎土は精良で色調は黄肌色を呈す。

52～54は小型丸底壺である。52は内面に疎らな横ヘラミガキを行い、外面は密に横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。53は屈曲が強く、肩が張った器形となる。底部は尖底気味の丸底となる。口縁部はわずかに内湾し、端部は尖る。体部内面はナデ、口縁部は内外面疎らな横ヘラミガキ、体部外面は上半に縦ハケ目、下半にヘラナデを行った後、上半にのみ疎らなヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は黄橙色を呈す。54は体部内面ナデ、口縁部内面は横ナデ後に疎らな横ヘラミガキ、外面は縦ハケ目の後に疎らな横ヘラミガキを行う。全体的に風化が著しく調整は



第176图 78号竖穴住居迹出土土器实测图③ (1/3)

不明瞭である。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。

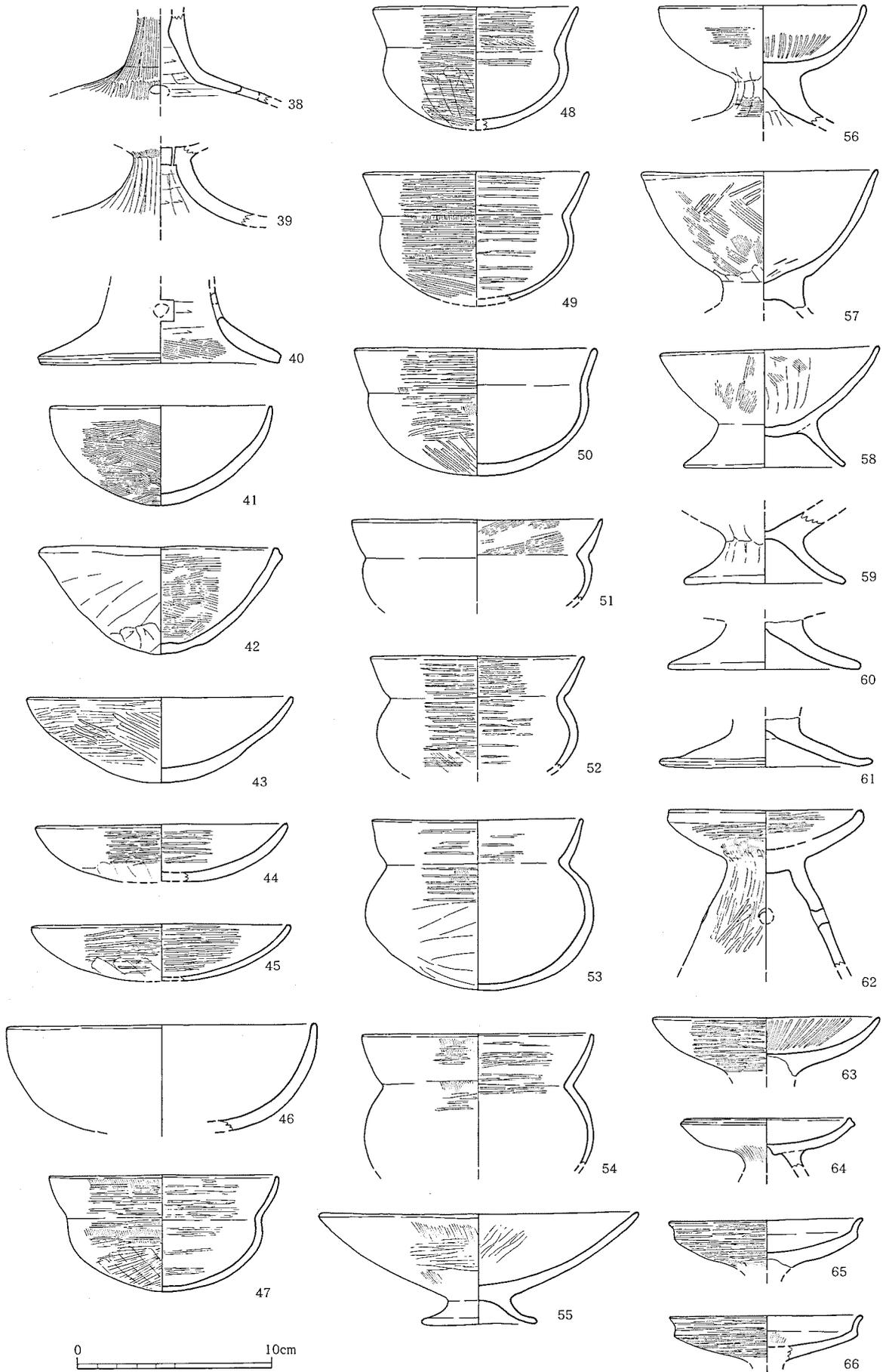
55~61は脚付鉢である。55は大きく開く浅い鉢部となる。脚部は小さく緩やかに外反し、端部は丸い。鉢部は内外面ヘラミガキを行い、外面にはヘラミガキに先行するハケ目も残る。脚部は全面横ナデ。胎土に砂粒を若干含みあまり良質ではない。色調は黄灰褐色を呈す。56は脚付鉢というよりも低脚の小型高坏と称した方が適当かもしれない。鉢部は丸味を帯び、口縁部は直立して端部は丸くおさめる。内底面には放射状のヘラミガキによる暗文を施し、外面はかすかに横ヘラミガキが残る。脚部は短い柱状部をもち、裾は大きく開くようである。内外面をナデによって整形した後、外面に横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。57は深みのある鉢部となる。口縁端部はわずかに外反し、丸くおさめられる。内面はナデ、外面はタタキの後にハケ目を行い、部分的にナデ消している。脚部は短い柱状部をもち、胎土に砂粒を若干含み粗く、色調は赤茶色を呈す。58は鉢部が直線的に開くもので、脚部は高台状に大きく広がる。鉢部内面はハケ目後ナデ、外面も同じ。脚部は横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。59は外反する脚部で端部は丸い。全面に横ナデを行うが、屈曲部付近には指ナデも残る。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。60は外反しながら大きく広がる脚部で内頂部に軸受孔がある。全面横ナデ。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。61は短い柱部をもち、裾は大きく開き端部が跳ね上げ気味になる。全面横ナデ調整。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。

62~66は小型器台である。62は立ち上がりがなく、端部が丸くおさめられるのみで終わる。裾部の付け根は太く、裾部は直線的に開く。裾部には4ヶ所の穿孔を行う。受部の内外面と裾部の外面はヘラミガキを行うが、精製の器台と異なり回転を利用しておらず、雑な感を受ける。一部に先行するハケ目が見られる。裾部内面はナデ。胎土は粗砂を若干含み粗く、色調は肌茶色を呈す。63も受部の立ち上がりがなく、端部は尖り気味におさめている。内面は放射状のヘラミガキによる暗文、外面は緻密な横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は橙色を呈す。64は端部を上方につまみ出し、外端に深い窪みを形成している。内外面横ナデ調整で外面の屈曲部にはナデに先行するハケ目が見られる。胎土に砂粒を若干含み色調は肌色を呈す。65は受部の立ち上がり外反する。内面は風化が著しく調整不明。外面は細かい横ヘラミガキで脚部との接合部付近にはヘラミガキに先行するハケ目が残る。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。66も立ち上がり外反し器壁が薄い。屈曲部はシャープな稜をなす。内底面には放射状のヘラミガキがかすかに残る。外面は細かい横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は橙肌色を呈す。

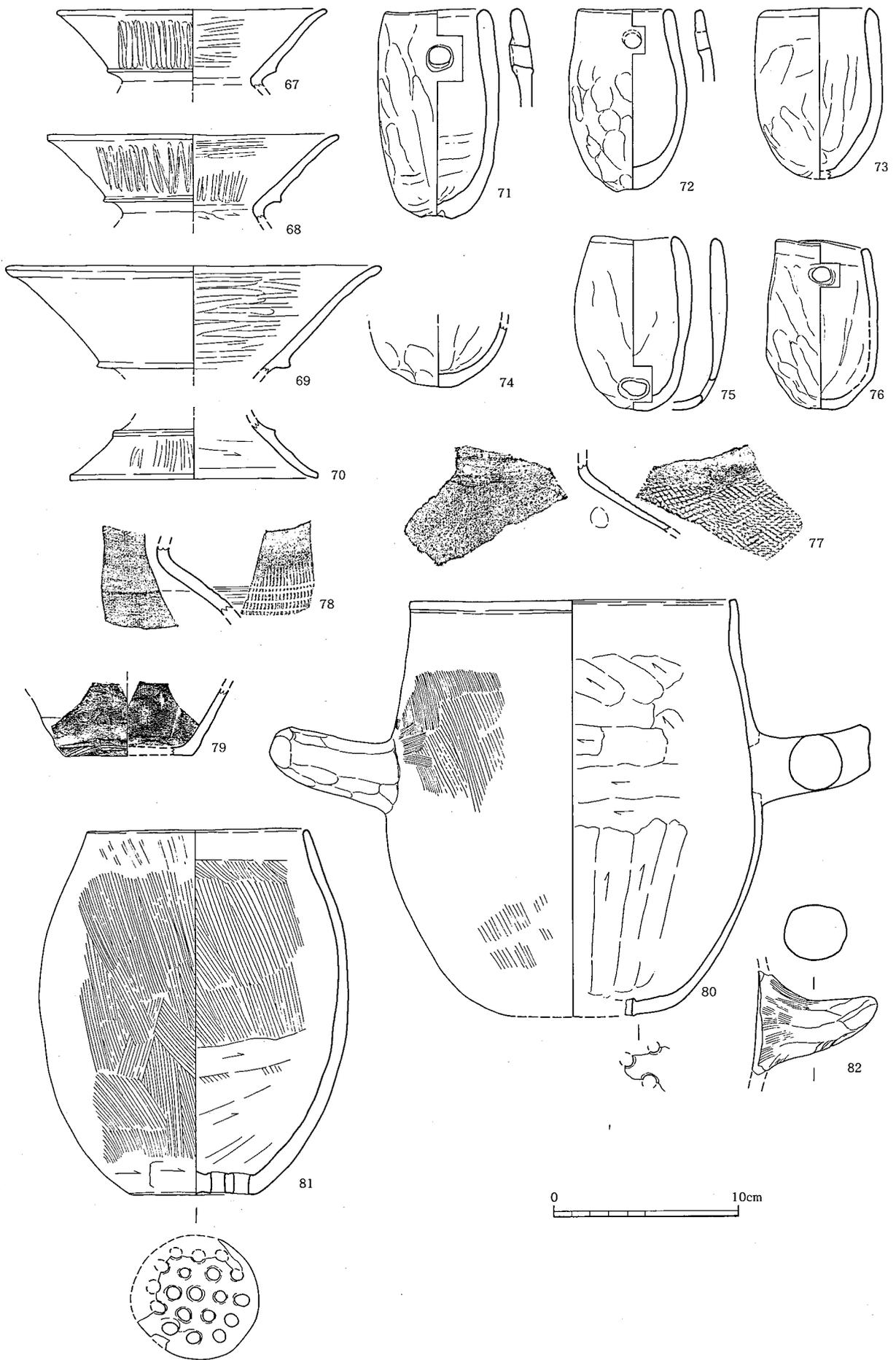
67~70は山陰系の鼓形器台である。色調は全て黄灰褐色を呈す。67は内面に幅広の横ヘラミガキ、外面に縦ヘラミガキを行う。68は内面の上半が横ヘラミガキ、下半が縦ヘラミガキ、外面はヘラミガキを鋸歯文状に施す。端部はシャープな面をなす。69は内面に幅広の横ヘラミガキ、外面に横ナデを行う。70は内面ヘラケズリ、外面縦ヘラミガキ。端部がシャープな面をなす。

71~76は蛸壺である。内外面とも指ナデ調整を行い、色調はいずれも黄灰褐色を呈す。71は縦長の筒状をなす。72は口縁部がやや内傾し、下膨らみの器形となる。73は筒状となるが器高が低い。口縁端部は横ナデでシャープに仕上げる。口縁部付近の紐通し孔の位置は不明。74は底部片。75は底部に近い位置に焼成後の穿孔を行い水抜孔としている。口縁部の紐通し孔の位置は不明。76は口縁部がややすぼまり重心が下位にある。

77~83は半島系の土器である。77は軟質土器で壺の肩部片。外面の肩部は小さな斜格子タタキ、



第177图 78号竖穴住居跡出土土器実測图④ (1/3)



第178图 78号竖穴住居跡出土土器実測図⑤ (1/3)

頸部は横ナデ、内面は横ナデを行い指圧痕が残る。胎土に細砂粒を少量含むが概ね精良で、色調は黄灰褐色を呈す。軟質焼成だが硬く焼きしまる。78は陶質土器の壺肩部片である。外面は縄葎文タタキの後に平行沈線を狭い間隔で巡らせる。頸部は回転ナデ。内面も回転ナデ。胎土に砂粒を含まず水漉した極めて精良な粘土を使用し、色調は内面がくすんだ灰色、外面が黒褐を呈す。焼成は良好で堅緻に焼き上がる。79もやはり陶質土器で、平底鉢の底部である。底面は不明瞭だが弱い静止ヘラケズリを行っているようである。体部外面は最下端のみ横方向の静止ヘラケズリを行い、これより上は雑な横ナデを行うために指圧痕、粘土輪積み痕が残る。内面は回転ナデで、先行する縦方向の工具痕が残る。胎土に砂粒を含まず、水漉した精良な粘土を使用する。色調は淡黄灰色を呈す。焼成は良好で、堅緻である。

80～82は軟質の甌である。底部は丸底に近い平底で体部との境には稜をもたない。体部中位よりやや下に最大径が位置し、体部上半はわずかに内傾して口縁部付近は直立する。端部は水平面をなす。体部の内面は、内底面がナデ、体部の下半部は縦ヘラケズリ、中位は横ヘラケズリ、上位は斜ヘラケズリ。外面は二種類のハケ目が観察される。上半に細かいハケ目を行った後に下半に太いハケ目を行い、把手取付部周辺は細かいハケ目を使用する。底面はナデ。底部は遺存状況が悪く孔の配置等は不明である。蒸気孔は小円孔からなる多孔式である。体部のほぼ中位に2ヶ所把手を取り付ける。上から見ると把手の位置は対照的ではなく、少しずれている。従って図化する際には若干移動して把手が対照的な位置になるようにした。把手は円柱状で若干上を向く。全面指ナデ整形である。把手の取り付けは、体部穿孔後に把手基部を挿入し、内外面をナデで接合する。内面はその後横ヘラケズリを行い、外面は基部を中心に放射状にハケ目を施す。内面には接合痕が明瞭に観察される。胎土に石英、長石、雲母等の粗砂粒、細砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。胎土・色調・焼成とも一般的な布留系甕などと同質で、やはり土師器に近い。

81は底部が平底で、体部と底部の境には明瞭な稜線を有す。底面には小円孔を多配した多孔式で、中心から1・6・12と三重に小円孔を配置する。体部は長胴で最大径が中位にあり、口縁部は内傾し端部を丸くおさめる。底部は内外面ともナデで穿孔は外側から行う。体部の上半は全体の3/4程度しか残っておらず、残存する部位には確実に把手は無い。従って把手は全く持たなかったか、或いは1本のみ取り付けいていたのであろう。内面はハケ目後に下半に弱いヘラケズリを行い、口縁部を横ナデする。外面もハケ目の後に口縁部を横ナデする。下端にはヘラナデに近い横ヘラケズリが見られるが、これはハケ目に先行するものである。胎土に砂粒はあまり含まないが、生地の肌理はやや粗い。色調は肌茶色～茶褐色を呈す。焼成は良好である。調整技法、胎土、色調とも土師器、しかも在来系の土師器に近い。

82は甌の牛角形把手である。形状は古墳時代中期以降に在地で一般的に生産される甌の把手と似ている。全面指ナデ整形の後、体部との接合後に行ったと思われるハケ目が基部近くに施される。接合は体部穿孔後に把手基部を挿入する手法を採る。体部内面はナデで接合痕が明瞭に残る。胎土に砂粒を多く含み色調は灰白色を呈し、器表がやや風化する。

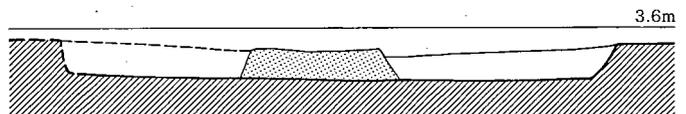
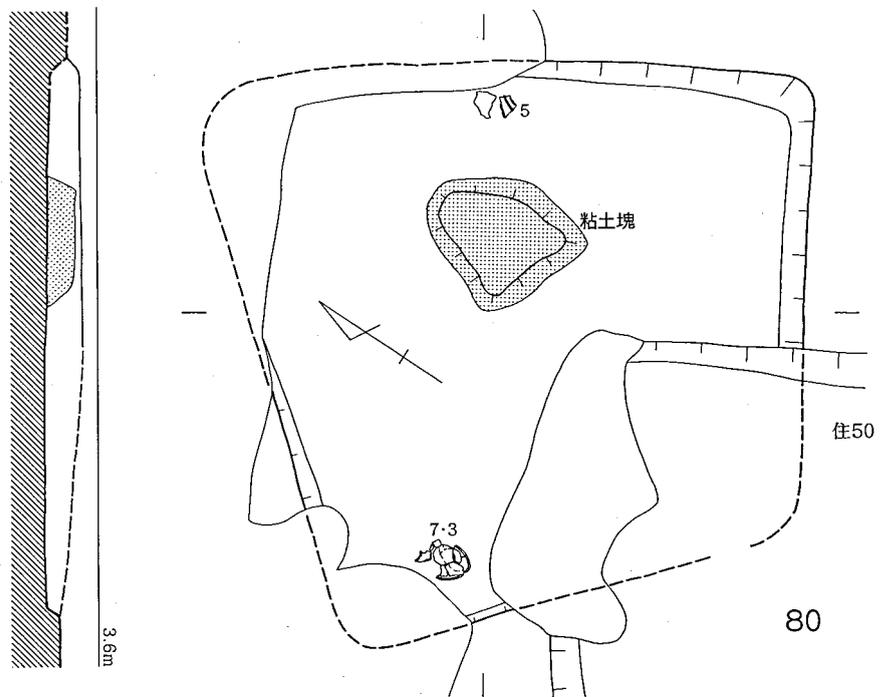
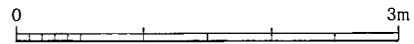
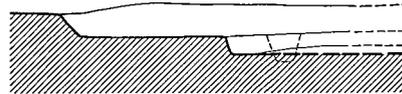
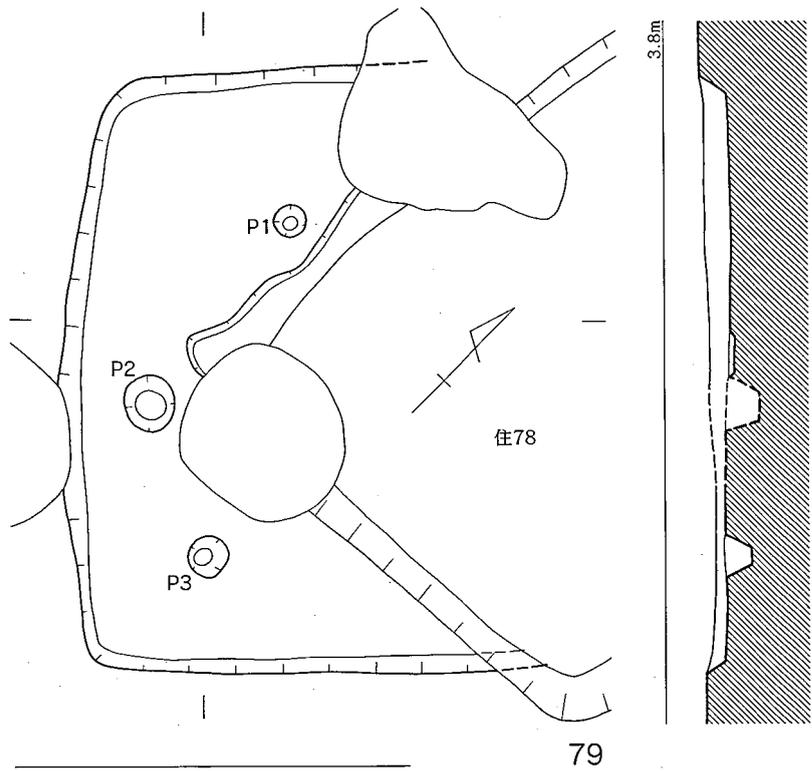
79号竪穴住居跡 (図版33、第179図)

Ⅱ区南2で検出した竪穴住居跡である。78号竪穴住居跡と重複しており、これより古い。この78号竪穴住居跡に東側を大きく切られる。ほぼ完存する西壁は長さ4.6mを測る。床面はほぼ水平をな

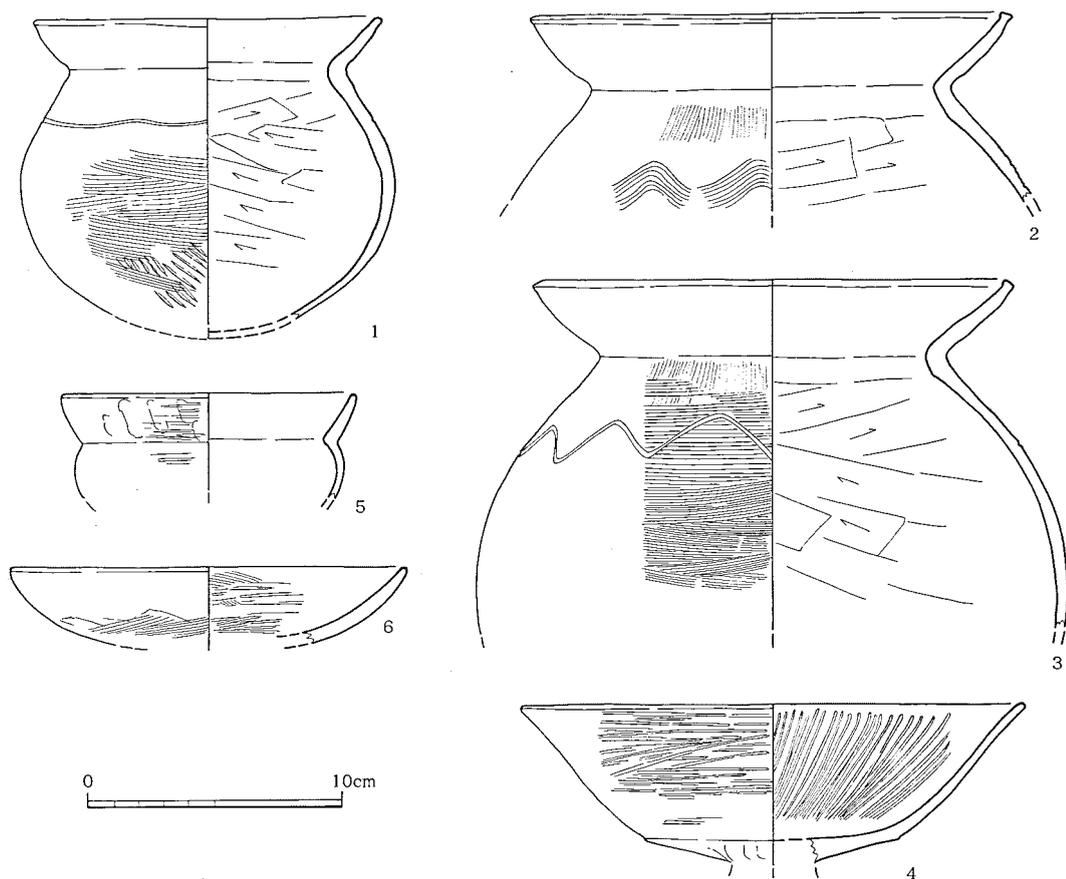
し遺構面からの深さは25cmを測る。床面の中央から北側にかけて不整形の落ち込みが認められるが、大半は攪乱を受け規模等は不明。深さは5cm程度である。ピットはP1～P3を検出した。P1は径25cm、深さ20cm、P2は径40cm、深さ25cm、P3は径30cm、深さ25cm。出土遺物は多くない。図示した土器の他、鉄釘が出土している。

出土土器 (第180図)

1～3は布留系の甕である。1は小型品。底部は丸底で胴部の重心が中位にある。口縁部はわずかに内湾し、端部は丸い。肩部には一条の沈線を巡らす。外面には横ハケ目を行うが、これに先行するタタキが残る。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。2は口縁部が内湾して立ち気味に開き、端部は水平に近い面をなす。肩部には櫛描波状文を巡らせる。色調は黄灰褐色を呈し、外面には煤が付着する。3は肩部の丸味が弱い。口縁部は直線的に開き、端部付近のみがわずかに内湾し、端部は面をなす。肩部には一条のへら描波状



第179図 79・80号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第180図 79号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

文を巡らす。外面のハケ目は2種類の工具を使用している。内面のヘラケズリは屈曲部近くにまで及ぶ。色調は橙茶色を呈す。

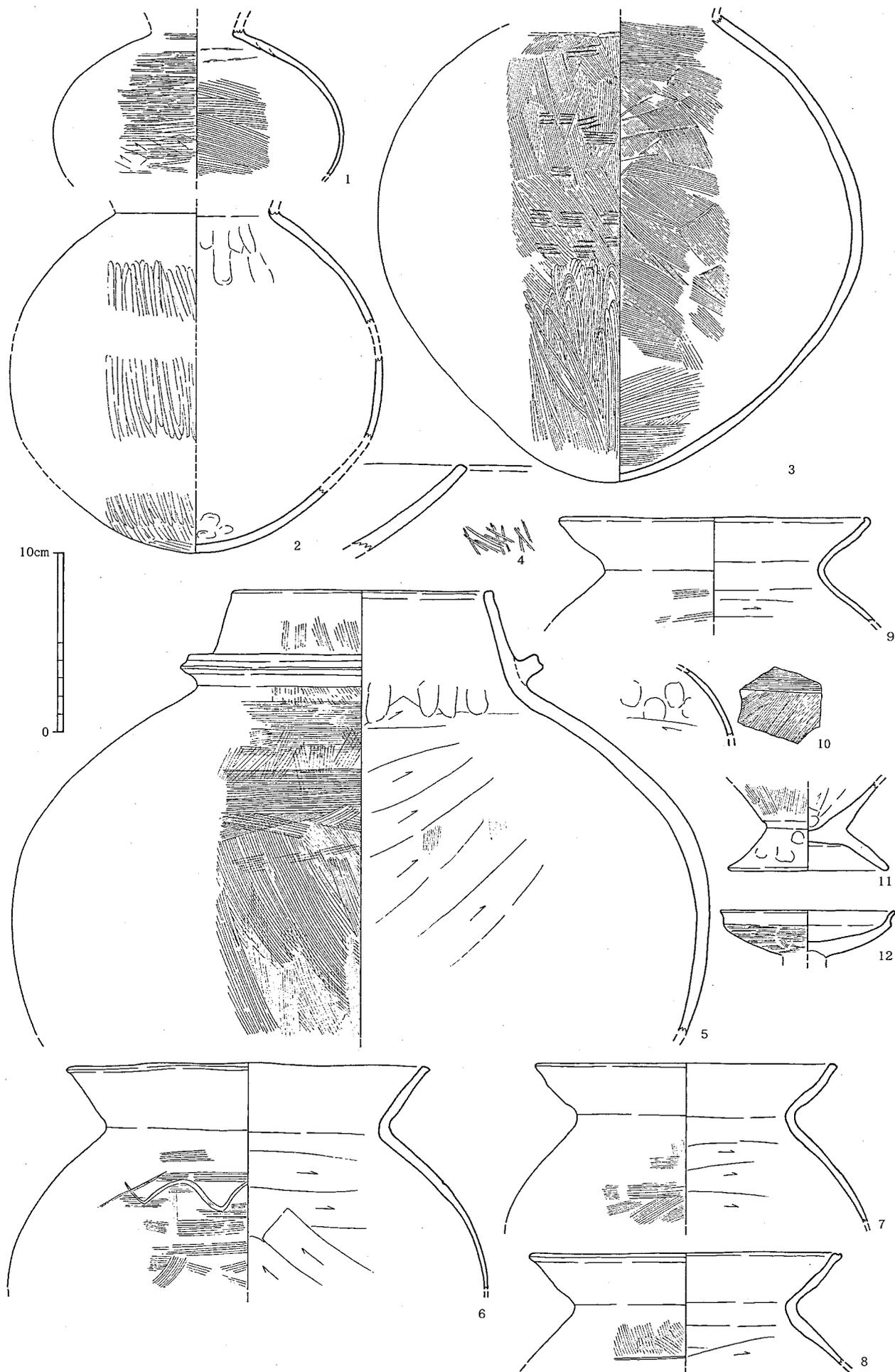
4は高坏である。屈曲部の外面には凹線を有し、体部は外反気味に開く。端部は小さな面をなす。内面は縦ヘラミガキによる暗文を施し、外面は細かい横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。

5は外反口縁の鉢である。体部上半の内湾は強く、屈曲部内面には明瞭な稜を有す。口縁部は内湾気味に開き、端部はやや尖る。全体的に器表の風化が著しく、外面にかすかに横ヘラミガキが確認できるに過ぎない。口縁部外面には整形時の指圧痕が残る。胎土は精良で色調は肌色を呈す。6は浅い鉢。口縁端部は丸くおさめる。内面はハケ目の後に粗い横ヘラミガキを行う。外面の上半は横ナデ、下半はヘラケズリの後ハケ目。胎土に砂粒を若干含み粗く、色調は肌灰色を呈す。

80号竪穴住居跡 (図版34、第179図)

II区南1で検出した竪穴住居跡である。50号竪穴住居跡と重複しており、これよりも古い。周壁を攪乱や50号竪穴住居跡によって大きく壊される。遺存した箇所から復元すると図のようになり、ややいびつな方形プランとなる。総面積は17.9m²。床面はほぼ水平をなし、遺構面からの深さは25cmを測る。床面の中央からやや東寄りの位置では粘土塊を検出した。長軸130cm、短軸105cm、高さ25cmを測る。

図示した土器の内、北東壁際の床面直上から5が、北西壁際の床面直上から3・7が出土した。そ



第181图 80号竖穴住居迹出土土器实测图 (1/3)

の他は覆土中からの出土である。他に黒曜石剥片も出土している。

出土土器 (図版81・88、第181図)

1~5は壺である。1は畿内系の精製中型直口壺である。胴部は扁球形で頸部が強く締まる。内面はハケ目調整を行い、肩部内面には粘土接合痕が明瞭に残る。外面は緻密な横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は橙褐色を呈す。2は球形胴の直口壺になると思われる。底部はわずかに尖底気味になる。内面はナデで底部には指圧痕が残る。外面は幅広で短い単位の縦ヘラミガキを密に行う。胎土に砂粒を若干含み良質ではない。色調は暗黄灰色を呈す。3は壺の胴部である。底部は尖底気味の丸底で、胴部最大径は中位にある。頸部は比較的良好に締まる。内面は細かいハケ目を行うが、底部付近のみ粗いハケ目を行う。外面の上半は細かいハケ目を行い、先行するタタキが観察される。下半部は半乾燥時にあたかもヘラミガキのように板ナデを行う。胎土は肌理の細かい粘土を使用し砂粒も少なく精良で、色調は黄橙色を呈す。4は細片であり器種が確定出来ないが、外面にヘラミガキが見られることから二重口縁壺の口縁部と考えた。直線的に開き、端部は面をなす。内面は風化が著しく調整不明。外面は上半が横ナデ、下半が雑なヘラミガキ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。5は大型壺である。胴部は丸味を帯び肩がはる。頸部は屈曲せずスムーズに立ち上がり、口縁部は直線的に内傾する。端部は平坦面をなす。口縁部付け根のやや上に、幅が広くしっかりした突帯を斜め上向きに貼付する。端部は強い横ナデを加えて窪ませる。胴部内面はヘラケズリを行い先行するハケ目が一部に残る。頸部内面には突帯を貼付した際の指圧痕が残る。胴部外面はハケ目。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。口縁部外面のみ煤が付着する。

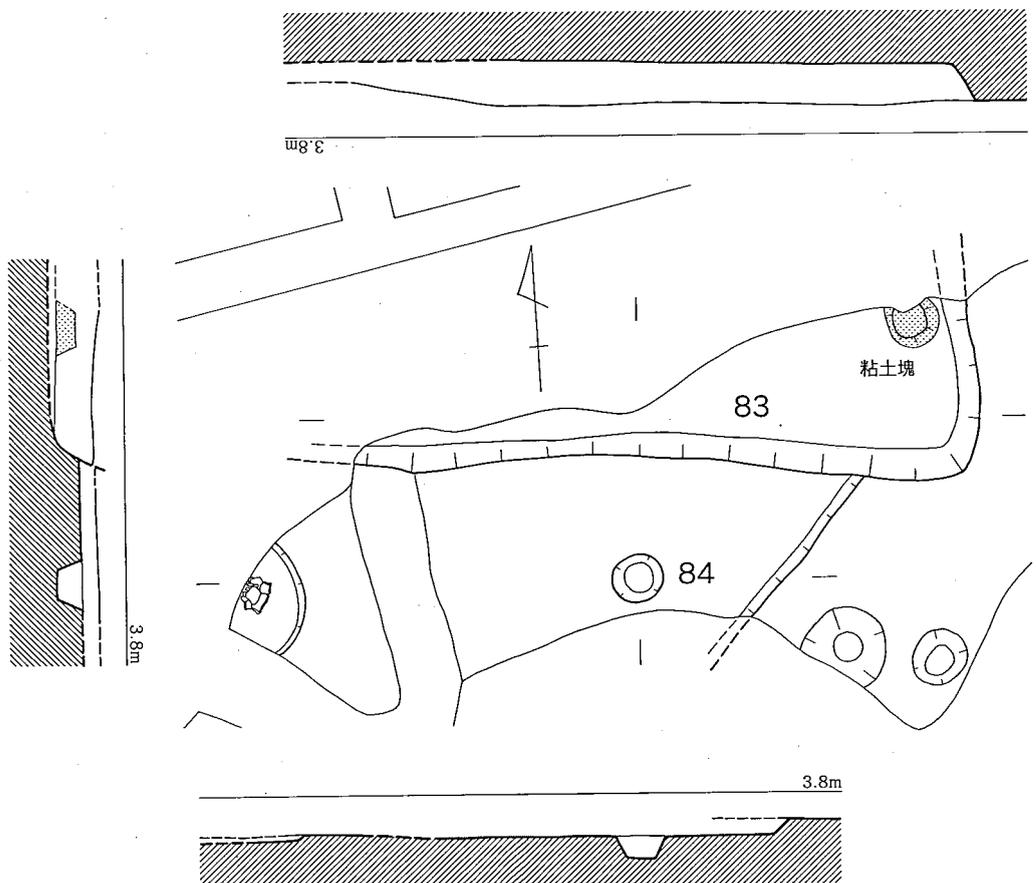
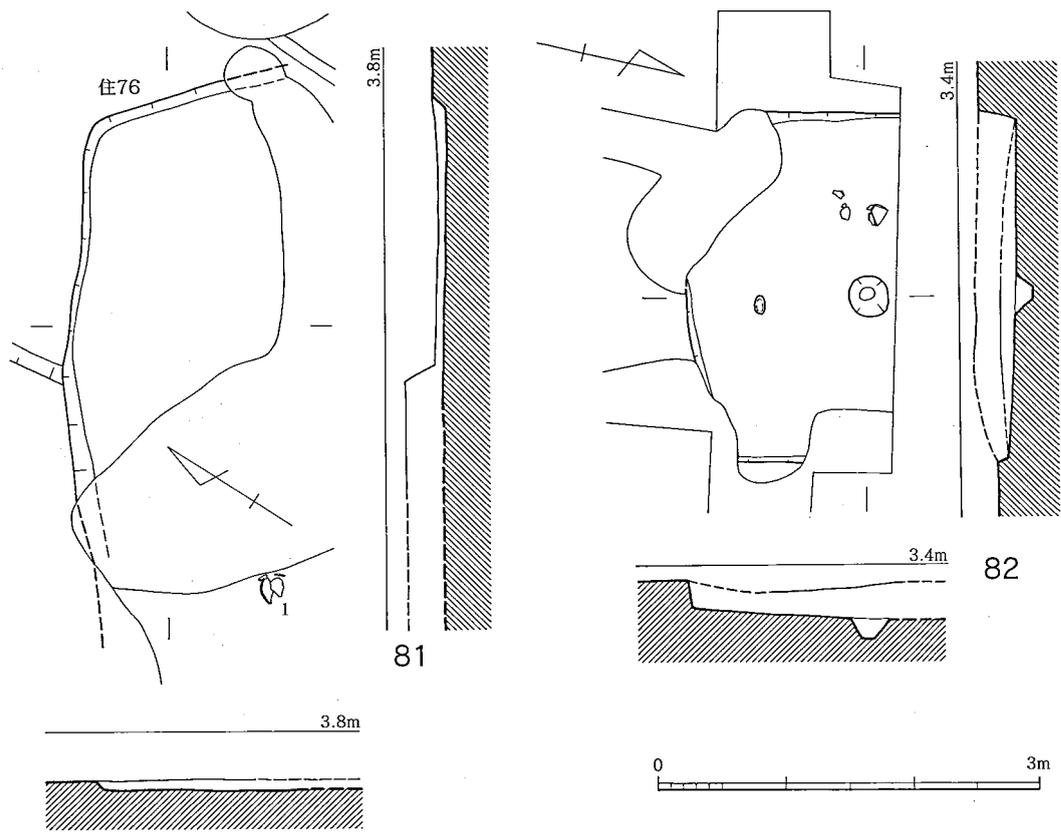
6~10は甕である。6は肩部が丸味を帯び、口縁部は直線的に開き、外端部を丸くつまみ出して上端が水平に近い面をなす。肩部には一条のヘラ描波状文を巡らせる。胴部内面のヘラケズリは屈曲部近くにまで及ぶ。外面のハケ目は原体の幅が狭い。色調は肌灰色を呈し他と異なる。7は口縁部が内湾し、立ち気味に開く。端部はやや面をなす。色調は黄灰褐色。8は口縁部が直線的に開き、外端部を肥厚させ上端がやや窪む。肩部には一条の沈線を巡らす。色調は黄灰褐色を呈す。9は口縁部上半がやや内湾し、内端部を丸く肥厚させる。屈曲部は丸く、明瞭な稜をなさない。器壁はほぼ均一な厚さでかなり薄い。色調は肌灰色を呈す。10は甕の肩部片だが、外面に白色塗料による文様を描く。周辺は全体的に黒色がかっているのも、もしかしたら黒色塗料を全面に塗布しているのかもしれない。

11は体部がかなり立ち上がっており、深みのある鉢か、或いは脚付甕になるかもしれない。体部内面は縦ナデ、外面は縦ハケ目。脚部は直線的に開き、端部を丸くおさめる。全面横ナデ調整で指圧痕が残る。胎土に砂粒をあまり含まず比較的精良で、色調は黄茶色を呈す。

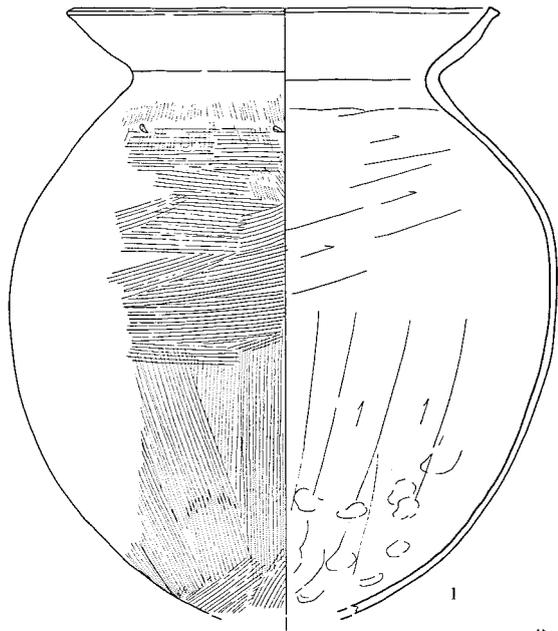
12は精製の小型器台である。受部の下半は丸味を有し、立ち上がりは器壁が薄く、シャープに外反する。端部は尖る。内面は器表の風化が著しく調整不明。立ち上がりの外面はナデ、下半は横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は橙褐色を呈す。

81号竪穴住居跡 (図版34、第182図)

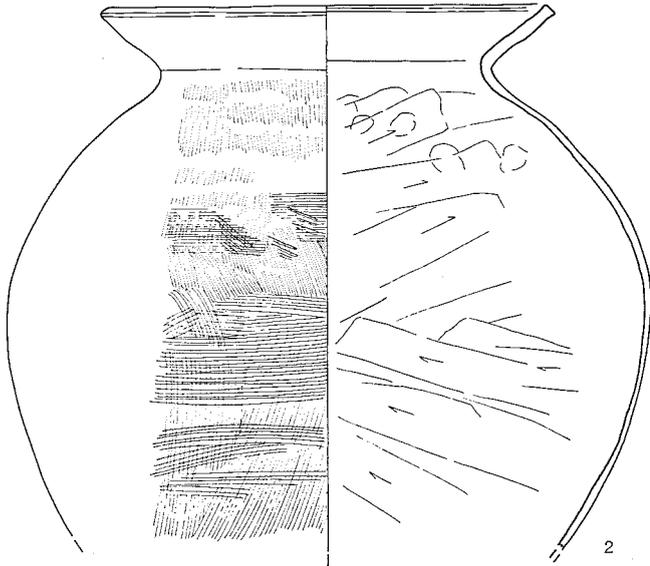
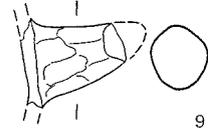
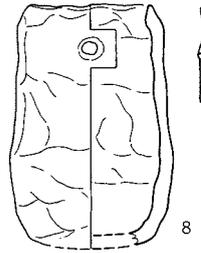
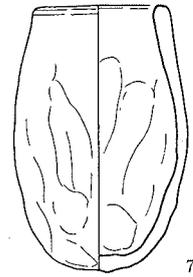
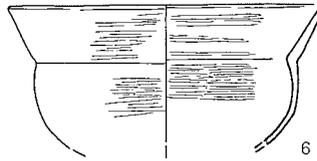
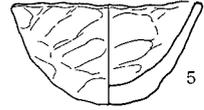
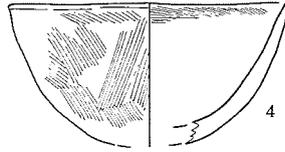
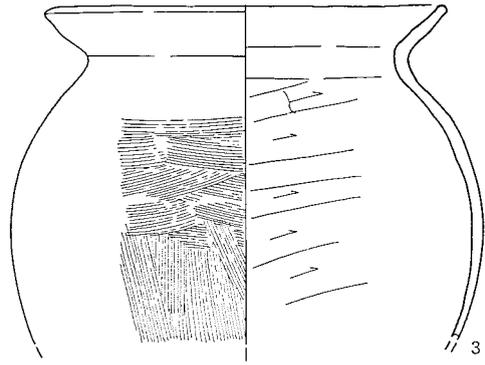
II区南1で検出した竪穴住居跡である。76号竪穴住居跡と重複しており、これよりも古い。南側は攪乱によって大きく削られており、全体の形状は不明。床面はほぼ水平をなし、遺構面からの深さは30cmを測る。ピット等は検出していない。



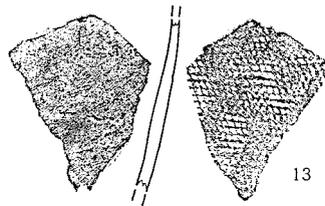
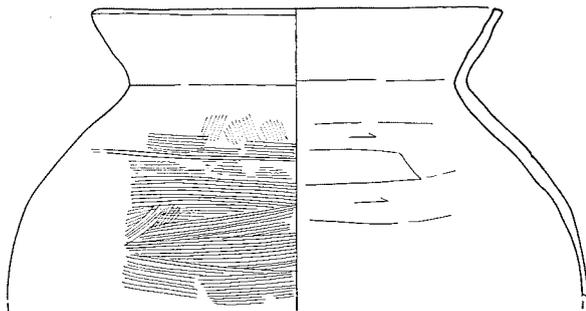
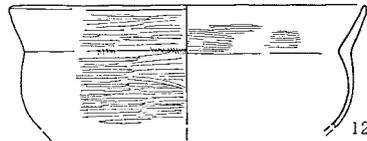
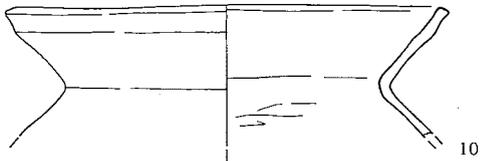
第182图 81~84号竖穴住居跡实测图 (1/60)



住81



住82



住83

第183图 81~83号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/3)

出土土器 (図版83、第183図)

図示できるものは1点しかない。1は布留系の甕である。胴部は最大径が中位よりやや上に位置し、倒卵形をなす。口縁部は内湾して開き、端部はシャープな面をなす。肩部には6個の列点文を等間隔に配す。内面の上半は横ヘラケズリ、下半は縦ヘラケズリを行い、底部付近には指圧痕が多く残る。外面は肩部の縦ハケ目、上半の横ハケ目、下半の縦ハケ目の順にハケ目を行う。胎土に砂粒を若干含み色調は黄褐色を呈す。口縁部外面と肩部以下に煤が付着する。

82号竪穴住居跡 (図版34、第182図)

II区北1で検出した竪穴住居跡である。61・62号竪穴住居跡を完掘後、床下から新たに検出したものである。北側の壁は完全に調査区外だが、それ以外の壁は一部分ではあるが検出することができた。これによると、東西の長さは2.8m程度の長さになる。最も残りの良い所での遺構面からの深さは30cmを測る。床面の北端で、径45cm、深さ15cmのピットを検出した。

図示した土器の他に、覆土上層から砥石が出土している。

出土土器 (図版83・86、第183図)

2・3は甕である。2は最大径が上方にあつて肩が張り、頸部は比較的良好に締まる。口縁部はほとんど内湾せず開き、端部は面をなす。内面は屈曲部近くまでヘラケズリを行い、肩部内面には指圧痕が認められる。外面はハケ目を行い、肩部にはこれに先行するタタキが残る。器壁は全体的に薄い。色調は内面橙褐色、外面黄灰褐色を呈す。3は肩部が丸味を帯び、最大径は中位に位置する。口縁部はほとんど内湾せず直線的に開き、端部は不明瞭だが水平面をなす。色調は黄灰褐色を呈す。

4～6は鉢である。4は体部があまり内湾せず開き、端部は尖り気味に仕上げる粗製品。内面はナデで口縁部付近のみハケ目を行う。外面はハケ目。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。5は器形が4に近い。内外面指ナデ整形を行う手捏ねの鉢である。胎土に砂粒を若干含み色調は橙褐色を呈す。6は外反口縁の精製鉢である。屈曲部内面には明瞭な稜を有し、口縁部は直線的に開き、端部は尖る。内面は口縁部から屈曲部下まで疎らな横ヘラミガキを行い、その下はナデである。外面は緻密な横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は橙肌色を呈す。

7・8は蛸壺である。7は最大径が下方にあり、体部はやや内傾して口縁部へと至る。口縁端部は丸くおさめる。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色～橙褐色を呈す。8は反転復元図なので本来このような形であったのか判らない。底部は平底に近く、体部は直立する。口縁部は尖り気味に仕上げる。体土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。

9は半島系の甕把手である。牛角形だが、截頭形となるかもしれない。整形は指ナデ整形である。胎土に砂粒を若干含み色調は淡黄灰色を呈す。焼成は軟質で、特に布留系の甕と同質である。

83号竪穴住居跡 (図版35、第182図)

II区南1で検出した竪穴住居跡である。84号竪穴住居跡と重複しており、これよりも新しい。北側を校舎の基礎によって大きく破壊され、遺存するのは南側の一部分に過ぎない。遺構面から床面までの深さは35cmを測る。東端で粘土塊を検出した

出土土器 (図版83・86、第183図)

10・11は甕である。10は口縁部が直線的に開き、端部付近のみ内湾する。端部は面をなす。色調

は黄灰褐色。器壁は全体的に薄い。11は口縁部がほとんど内湾せず、立ち気味に開く。端部はシャープな面をなし、水平に近い。内面のヘラケズリは屈曲部近くにまで及ぶ。肩部には一条の沈線を巡らす。色調は黄灰褐色を呈す。

12は精製の小型鉢である。頸部はあまり内傾せず、口縁部は短く直線的で、あまり開かない。端部は薄く尖る。体部内面はナデ、口縁部内面はハケ目後ナデ、外面は緻密な横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は黄橙色を呈す。

13・14は半島系の土器である。13は軟質土器である。外面小さな斜格子タタキ後一部ナデ、内面ナデ。胎土に砂粒をあまり含まない。色調は内面黒色、外面黄灰色を呈す。同一個体が周辺の包含層等から他に2点出土している。14は軟質に近い瓦質土器である。外面小さな斜格子タタキ、内面ナデ。胎土にあまり砂粒を含まず、色調は内面黄灰色、外面黒色を呈す。

84号竪穴住居跡 (図版35、第182図)

II区南1で検出した竪穴住居跡である。83号竪穴住居跡と重複しており、これよりも古い。更に大きく攪乱を受けており、平面形も不明となる。床面は西側がやや高くなっており、遺構面からの深さはこの西側で10cm、東側で15cmを測る。床面の東側で径30cm、深さ15cmのピットを検出した。また西端では攪乱を受けて形状は不明となるものの、深さ5cmの窪みを検出した。

出土土器 (図版83、第184図)

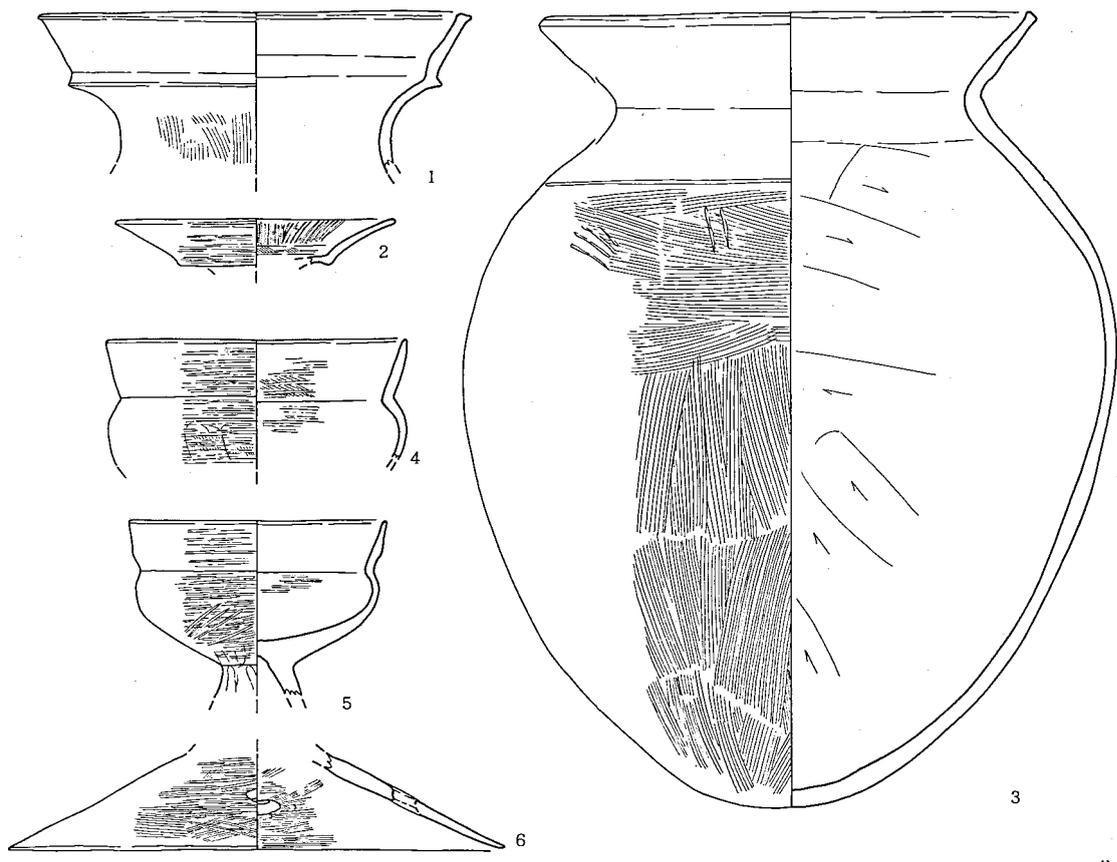
1は山陰系の二重口縁壺である。頸部は長めに立ち上がり、口縁部は直線的に開き、上端部は水平に近い面をなす。頸部外面には横ナデに先行する縦ハケ目が残る。色調は黄灰褐色を呈す。12は畿内系の小型精製二重口縁壺である。一次口縁部はほぼ水平に開き、屈曲部はわずかに垂下する。二次口縁部は外反し、大きく開く。口縁端部は尖る。内面は横ヘラミガキの後に縦ヘラミガキによる暗文を施し、外面は緻密な横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。

3は布留系の甕である。胴部は倒卵形で底部は尖底気味の丸底となる。口縁部はほとんど内湾せず直線的に開き、内端をわずかにつまみ出す。肩部には一条のヘラ描き沈線を巡らせる。外面にはハケ目に先行するタタキが観察される。色調は黄灰褐色を呈す。

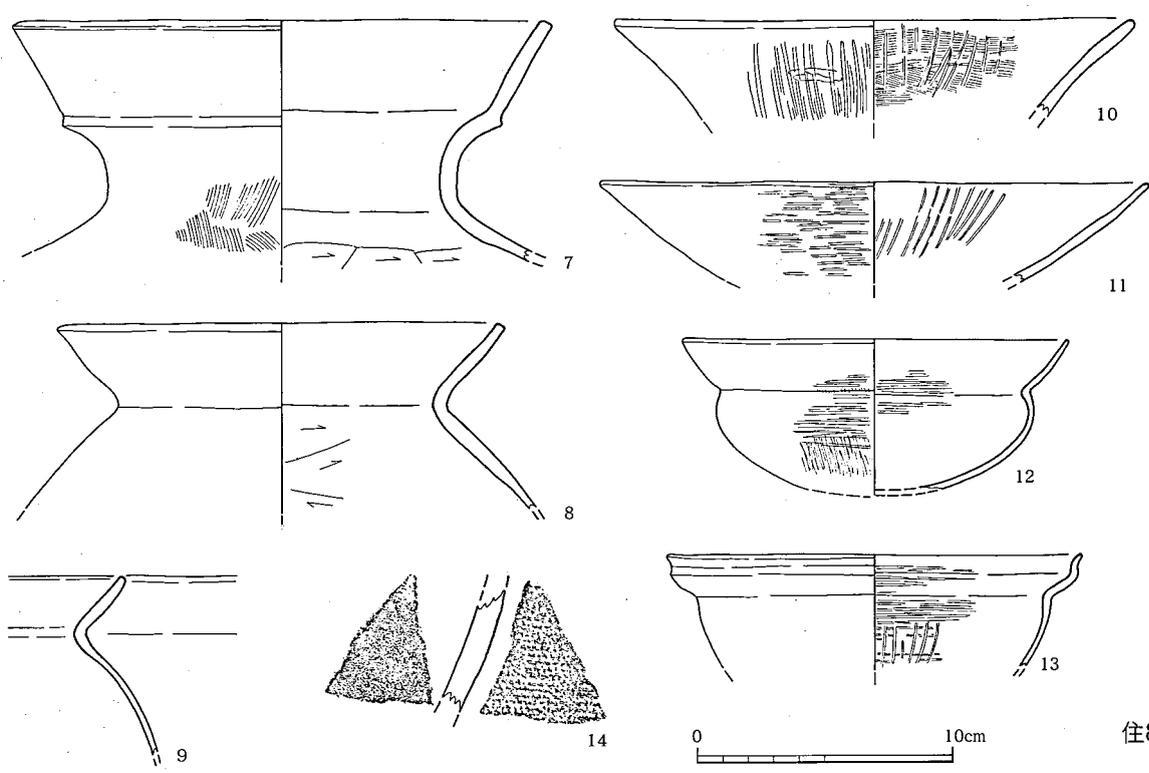
4~6は鉢である。4は外反口縁の小型精製鉢。肩部は丸味を有し、屈曲部内面の稜は明瞭で、口縁部はほとんど内湾せずに立ち上がる。内面の屈曲部下から口縁部にかけては疎らな横ヘラミガキを行い、口縁部内面にはこれに先行するハケ目が見られる。外面の上半は緻密な横ヘラミガキを行い、下半はやや疎らな横ヘラミガキを行うために先行するハケ目が見られる。胎土は精良で色調は黄肌色を呈す。5は脚付の外反口縁鉢である。体部は扁平で肩部は丸味を帯び、口縁部はあまり内湾せずに開く。口縁端部は尖る。内面はナデだが屈曲部下にはナデ後のハケ目が見られる。外面は横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は黄肌色を呈す。脚部内面はナデ、外面も縦方向のナデで稜線が残る。6は裾が大きく直線的に開く脚部。端部は尖る。裾部の穿孔は4ヶ所に行う。内面はハケ目後ナデ。外面はハケ目後横ヘラミガキを行う。端部付近のヘラミガキは疎らである。胎土は精良で色調は黄橙色を呈す。

85号竪穴住居跡 (図版35、第185図)

II区南1で検出した竪穴住居跡である。西側が大きく攪乱を受け、遺存するのは東側のコーナー付



住84



住85

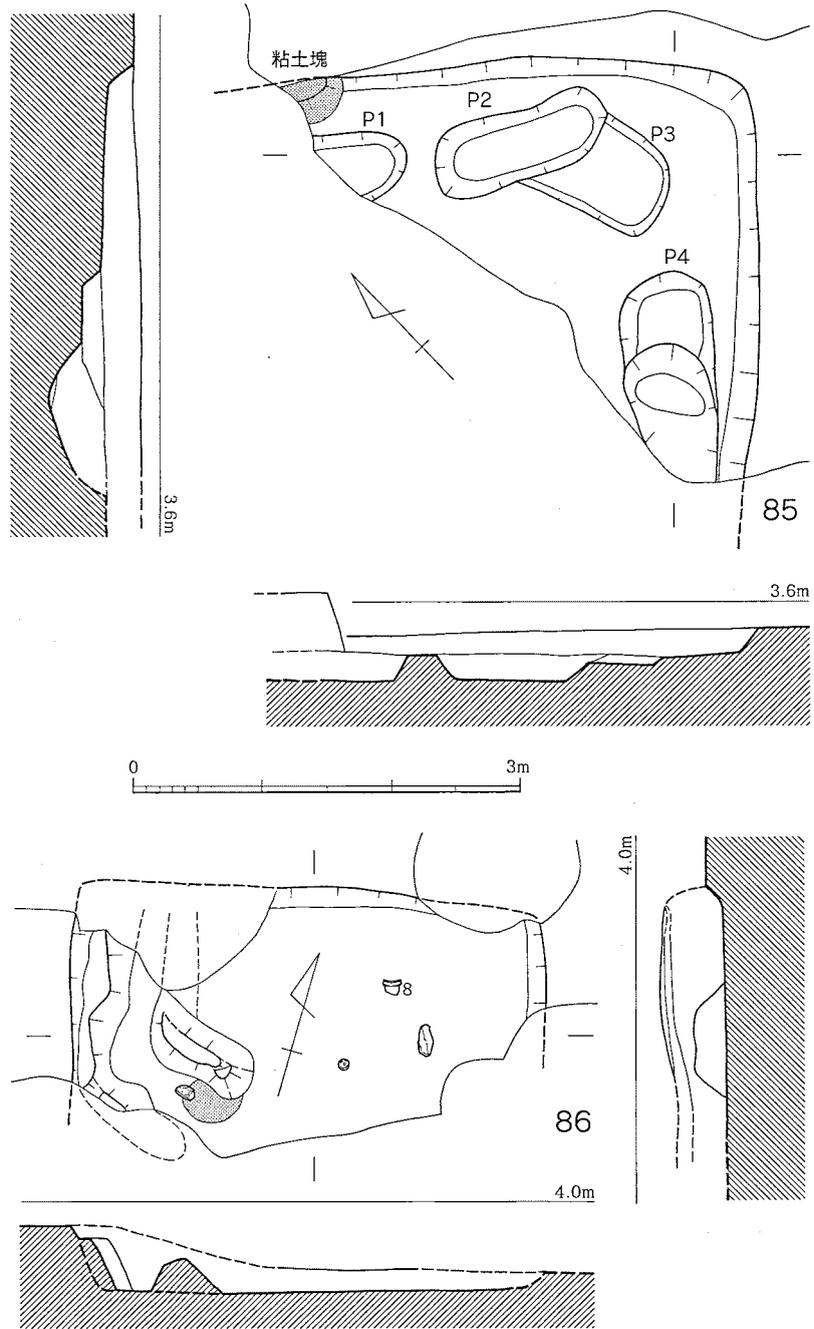
第184图 84·85号竖穴住居迹出土土器实测图 (1/3)

近のみである。床面はほぼ水平をなし、遺構面からの深さは30cmを測る。北側隅では焼土塊を検出した。大半が攪乱を受け旧状を知り得ないが、位置からしてカマドであろう。床面上ではP1~P4のピットを検出した。どれも楕円形状を呈し、主軸が壁に沿う。出土遺物は図示した土器の他、砥石が出土している。

出土土器 (図版83・85、第184図)

7は山陰系の二重口縁壺である。一次口縁部は開きが弱く、屈曲部の稜もあまり強くない。二次口縁部は直線的に開き、端部は面をなす。色調は黄灰褐色を呈す。

8・9は甕である。8は肩部が丸味を帯びず、口縁部はわずかに内湾し端部は面をなす。内面のヘラケズリは屈曲部近くまで行われる。色調は肌灰色を呈す。9は肩が丸みを帯び口縁部は立ち気味に開く。端部は丸味を帯びる。全体的に器壁が薄い。風化が著しく調整は不明。色調は黄褐色。



第185図 85・86号竪穴住居跡実測図 (1/60)

10・11は高坏である。10は外反しながら開く。内面は横ハケ目の後に放射状のヘラミガキによる暗文を施し、外面も暗文を施す。粘土接合痕が一部明瞭に残る。胎土は精良で色調は茶色を呈す。11は器壁が薄い。体部は内湾気味に大きく開く。内面は放射状ヘラミガキによる暗文を施し、外面は横ヘラミガキを密に行う。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。12は外反口縁の鉢である。体部は浅く肩は丸みを有し、屈曲部は明瞭である。口縁部は内湾して開き、端部は尖る。全体的に器壁は薄い。内面の屈曲部付近から上は横ヘラミガキ、内底部はナデ、外面の上半は横ヘラミガキ、下半は一定方向のヘラミガキ。胎土に砂粒を若干含み精製器種にしてはやや粗い。色調は肌茶色を呈す。13は屈曲口縁の精製鉢。口縁部は短く外反する。内面は横ヘラミガキの後に縦ヘラミガキによ

る暗文を施す。外面は風化が著しく調整不明。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。

14は半島系の軟質土器。外面は小さな斜格子タタキ、内面はナデを行う。器壁がかなり厚いので大型品であろう。胎土に砂粒を若干含み色調は淡黄橙色を呈す。焼成は良好で堅緻である。

86号竪穴住居跡 (図版35、第185図)

II区南1で検出した竪穴住居跡である。他の竪穴住居跡とは重複しないものの、南側が大きく攪乱を受けるため平面形や規模等は不明となる。東西長は3.7mを測る。床面はほぼ水平をなし、遺構面からの深さは50cmを測る。西壁にはカマドが付設される。ピット等は検出されなかった。

86号竪穴住居跡カマド (第186図)

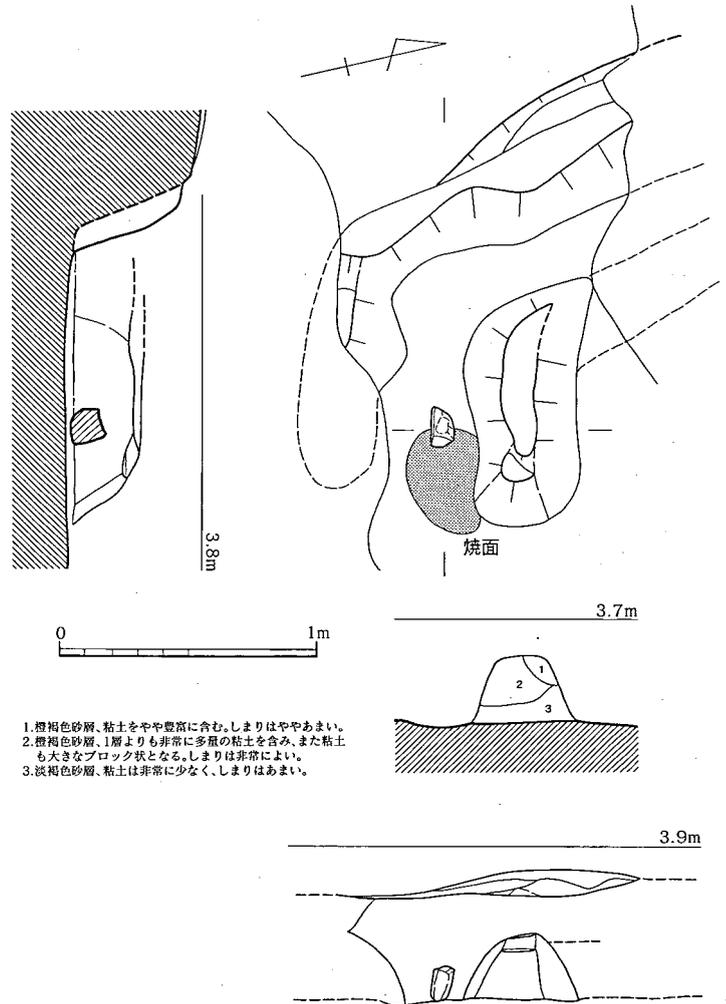
住居の西壁に付設されるカマドで、煙道が西壁に沿って北側に伸びるL字形カマドの構造を採る。煙道の先端は攪乱によって失われるものの、コーナーまで伸びていたものと考えられる。カマド本体は主軸がコーナー対角線とほぼ平行する。左袖は攪乱により失われる。右袖は長さ100cm、幅45cm、高さ25cmを測る。カマド内部には円礫を使用した支脚が遺存する。奥壁からの距離は60cmを測る。支脚の高さは12cm。支脚の手前には焼土が拡がる。煙道は南側約50cmのみ遺存する。内側の幅は40cm、深さ50cm。火床面と煙道の比高差はなく、火床面からほぼ水平に伸びて煙道基部につながっていく。カマドの構築には粘土と細砂を混ぜたものを使用する。

図示した土器の内、8は床面直上から出土した。また13はカマド煙道内覆土から出土した。その他は覆土中からの出土である。また玉原石、黒曜石剥片も出土している。

出土土器 (図版83、第187図)

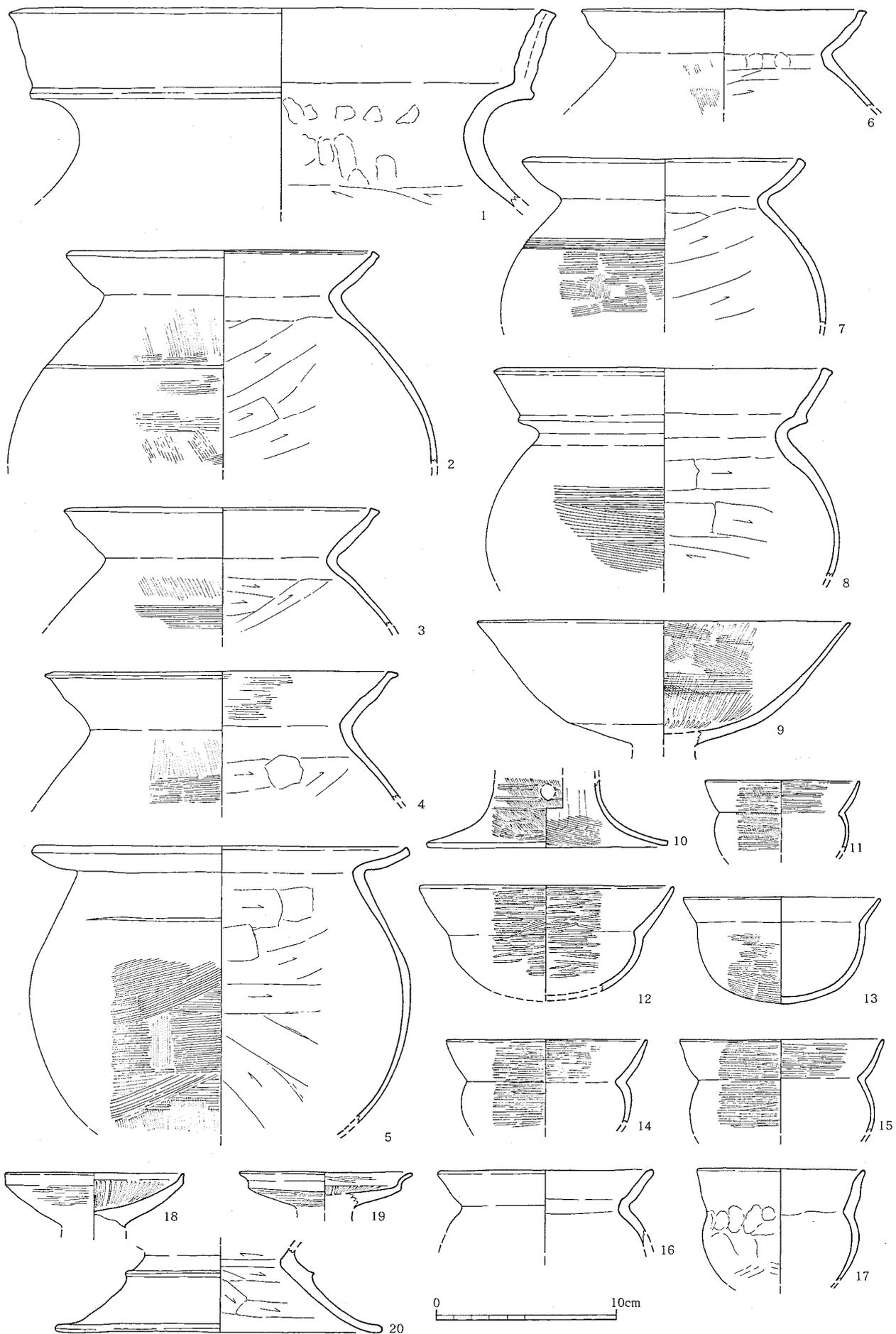
1は山陰系の大型二重口縁壺である。口縁部はあまり開かず直線的に伸び、端部はシャープな面をなす。内外面横ナデを行い頸部内面には指ナデ痕が残る。胎土に砂粒を若干含み黄灰褐色を呈す。

2~8は甕である。2の口縁部はわずかに内湾し、内端部をつまみ出す。肩部外面には一条の沈線を巡らせる。色調は黄灰褐色を呈す。3は口縁部がほとんど内湾せず、端部はシャープな面をなす。色調は黄灰褐色を呈す。4は肩部に丸味を持たず、口縁部は直線的に開き、端部付近がわずかに内湾する。端部は明瞭に外側につまみ出す。器壁の厚さが全体的に均一である。色調は茶灰色を呈し他



1. 橙褐色砂質、粘土をやや豊富に含む。しまりはややあまい。
2. 橙褐色砂質、1層よりも非常に多量の粘土を含み、また粘土も大きなブロック状となる。しまりは非常によい。
3. 淡褐色砂質、粘土は非常に少なく、しまりはあまい。

第186図 86号竪穴住居跡カマド実測図 (1/3)



第187图 86号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/3)

と異なる。5は肩部が丸味を帯びた器形となり、頸部は締まらず、口縁部は内湾して大きく開く。端部は面をなす。胎土に砂粒をやや多く含み色調は肌茶色を呈し他と異なる。6は肩部が丸味を帯びず直線的で、口縁部は内湾して立ち気味に開き、端部は水平面をなす。色調は黄灰褐色を呈し外面には煤が付着する。7は口縁部が内湾して開き、端部はシャープな面をなす。肩部には櫛描直線文を巡らす。色調は暗茶灰色を呈す。8は山陰系の甕である。口縁部の屈曲はシャープさを欠き、二次口縁部は直線的に開き端部は面をなす。色調は黄灰褐色を呈す。

9・10は高坏である。9は屈曲部外面に不明瞭な稜を有し、体部は直線的に開く。端部は薄く尖る。内面はハケ目後に縦ヘラミガキによる放射状の暗文を施す。外面は風化が著しく調整不明。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。10は器壁が薄い。柱部から裾部へとなだらかに移行し、裾部は緩やかに開き端部はシャープな面をなす。屈曲部のやや上に円孔を穿孔するが、破片のため孔の数は不明。柱部内面縦ナデ、裾部内面ハケ目、外面は細かいハケ目後に疎らな横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は黄肌色を呈す。

11～17は外反口縁の鉢または壺である。11は精製の小型品で壺に近い形状となる。肩部が丸味を帯び、口縁部が内湾して開き端部は尖る。体部内面はナデ、それ以外は横ヘラミガキを行い、外面には横ヘラミガキに先行するハケ目が観察される。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。12は体部が浅く、屈曲部の内面には明瞭な稜を有すが外面は不明瞭である。口縁部は直線的に開き端部は尖る。内外面とも緻密な横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は橙肌色を呈す。13は体部の上半が直立し、口縁部は短く開き端部を尖らせる。口縁部は内外面横ナデ、体部内面はナデ、外面は板ナデを行い擦痕が顕著に残る。胎土に砂粒を含み粗く、色調は灰褐色を呈す。14は体部上半が内湾し、屈曲部内面に稜を有す。口縁部はわずかに内湾して開き、端部は尖る。体部内面はナデ、口縁部内面は横ハケ目後疎らな横ヘラミガキ、外面は緻密な横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は黄肌色を呈す。

15は屈曲部が明瞭で口縁部が内湾して立ち気味に開く精製の小型壺である。体部内面はナデ、口縁部内面は横ヘラミガキ、外面は全面緻密な横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は茶灰色を呈す。16は胴部内面にヘラケズリを行い、胎土に砂粒を若干含み、外面に二次加熱の痕跡が見られることから鉢でなく甕であろう。口縁部は付け根でわずかに内湾し、端部は丸くおさめる。色調は黄灰色を呈す。17は粗製の鉢である。体部は深みがあり肩があまり張らない。屈曲部内面には明瞭な稜を有すが外面は不明瞭である。口縁部は直線的に開き、端部は尖る。口縁部の器壁が特に厚くなる。体部内面はヘラケズリ後ナデ、口縁部は内外面横ナデで屈曲部外面には指圧痕が残る。体部外面はナデ仕上げだが先行するタタキが残る。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色。

18・19は小型器台である。18は受部にやや深みがあり、立ち上がりはシャープさを欠く。ほぼ直立し、端部は尖る。内面は放射状ヘラミガキによる暗文を施し、立ち上がりは内外面とも横ナデ仕上げ。外面の下半は横ヘラミガキ。胎土は比較的精良で色調は橙茶色を呈す。19は立ち上がりが大きく外反し、端部が外側を向く。内面は放射状ヘラミガキによる暗文を施し、立ち上がりの内面は横ヘラミガキ、外面はナデ。外面の下半は横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は茶色を呈す。20は山陰系の鼓形器台である。突帯は低く不明瞭で、裾部は外反してなだらかに開き、端部は丸くおさめる。内面は横ヘラケズリ、内面の裾端部近くと外面は全面横ナデを行う。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。

2. 竪穴住居跡出土石器

石錘 (図版89、第188図)

1は2号竪穴住居跡出土の有溝石錘である。表面は膨らみをもつものの裏面は平らで、断面は扁平である。横方向に紐かけ用の溝が一周する。溝は鋭い工具により何度も加工を施す。欠損しており、現存長6.8cm、厚さ2.0cm、重さ67.9gで滑石製。2・3は25号竪穴住居跡出土の有溝石錘である。2は縦方向にのみ紐かけ用の溝をつける。全長9.7cm、幅6.0cm、厚さ3.1cm、重さ254.1gで滑石製。3も縦方向に紐かけ用の溝が見られる。表面が浅く鋭い溝なのに対し、裏面は断面U字状で深く施す。横方向にも鋭い工具によるキズが見えるが溝にはならない。表面に径3mm程の孔を穿つが浅く止まる。全長9.4cm、幅5.1cm、厚さ3.6cm、重さ291.4gで滑石製。4は50号竪穴住居跡出土の小型の有溝・孔石錘である。下端部は断面円形だが上端部に寄るほど扁平になる。上下両端に縦方向の紐かけ用の溝を持ち、上下に孔を穿つ。下端部は平坦に仕上げる。両孔間に横方向のキズが数条見える。全長4.9cm、径1.4cm、重さ13.2gで滑石製。5は59号竪穴住居跡出土の有孔石錘で上下に孔を穿つ。断面は扁平で下端部は平坦に仕上げる。両側面には工具により細く鋭いスジが見られる。欠損しており、現存長5.3cm、幅2.5cm、厚さ1.6cm、重さ21.6gで砂石製。

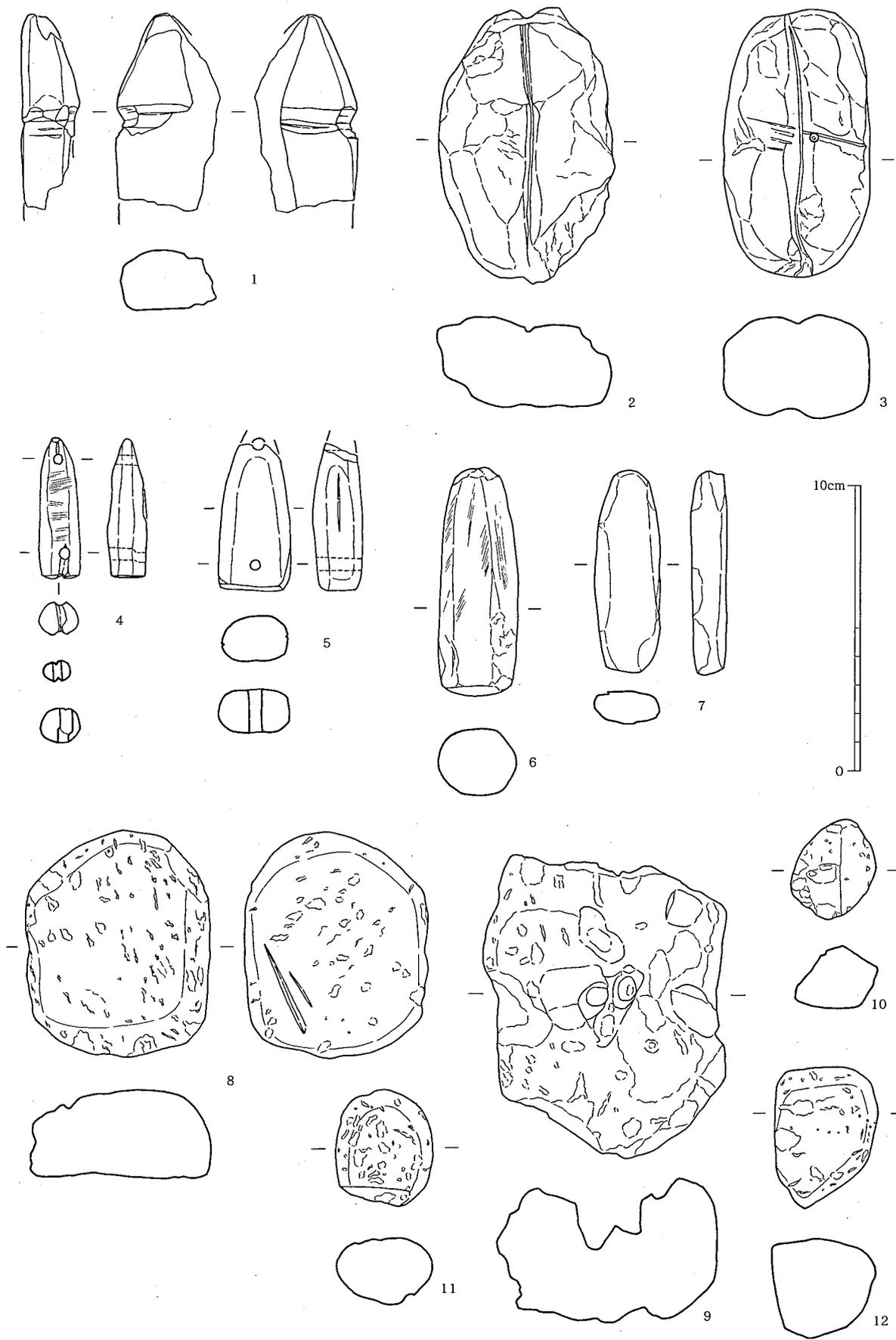
6は2号竪穴住居跡出土で、石錘未製品と思われる。擦痕が顕著見られるが、孔は穿っていない。下端部はやや丸みを帯びる。全長8.0cm、径2.5cm、重さ90.9gで滑石製。7は78・79号竪穴住居跡上層出土で、表面は加工していないが、紡錘形を呈していることから石錘未製品と思われる。断面は扁平でやや薄い。全長7.1cm、幅2.3cm、厚さ1.2cm、重さ34.2gで滑石製。

軽石 (図版89、第188図)

8は25号竪穴住居跡出土で、紐かけ用の溝などはないが、比較的平らな裏面に鋭い工具による当たりの痕跡が見られる。全長7.9cm、幅6.3cm、厚さ3.0cm、重さ49.3gである。9は58号竪穴住居跡出土で、中央に円形の凹みがいくつか確認できる。凹み内は平滑なため、人為的に穿った可能性がある。また表面に工具による鋭い圧痕が見られる。全長10.4cm、幅8.3cm、厚さ5.0cm、重さ81.9gである。10は60号竪穴住居跡出土で、一部平らな面が形成されており、人為的に加工した可能性がある。全長3.5cm、幅2.9cm、厚さ2.2cm、重さ4.3gである。11は69号竪穴住居跡出土で、端部が平らになっており、工具で加工した可能性がある。全長4.1cm、幅3.4cm、厚さ2.2cm、重さ6.4gである。12は74号竪穴住居跡出土で、不定形ながら一部にきれいな平坦面を持つ。人為的な加工の可能性がある。全長4.9cm、幅3.6cm、厚さ3.5cm、重さ11.8gである。

砥石 (図版90・91、第189・190・192図)

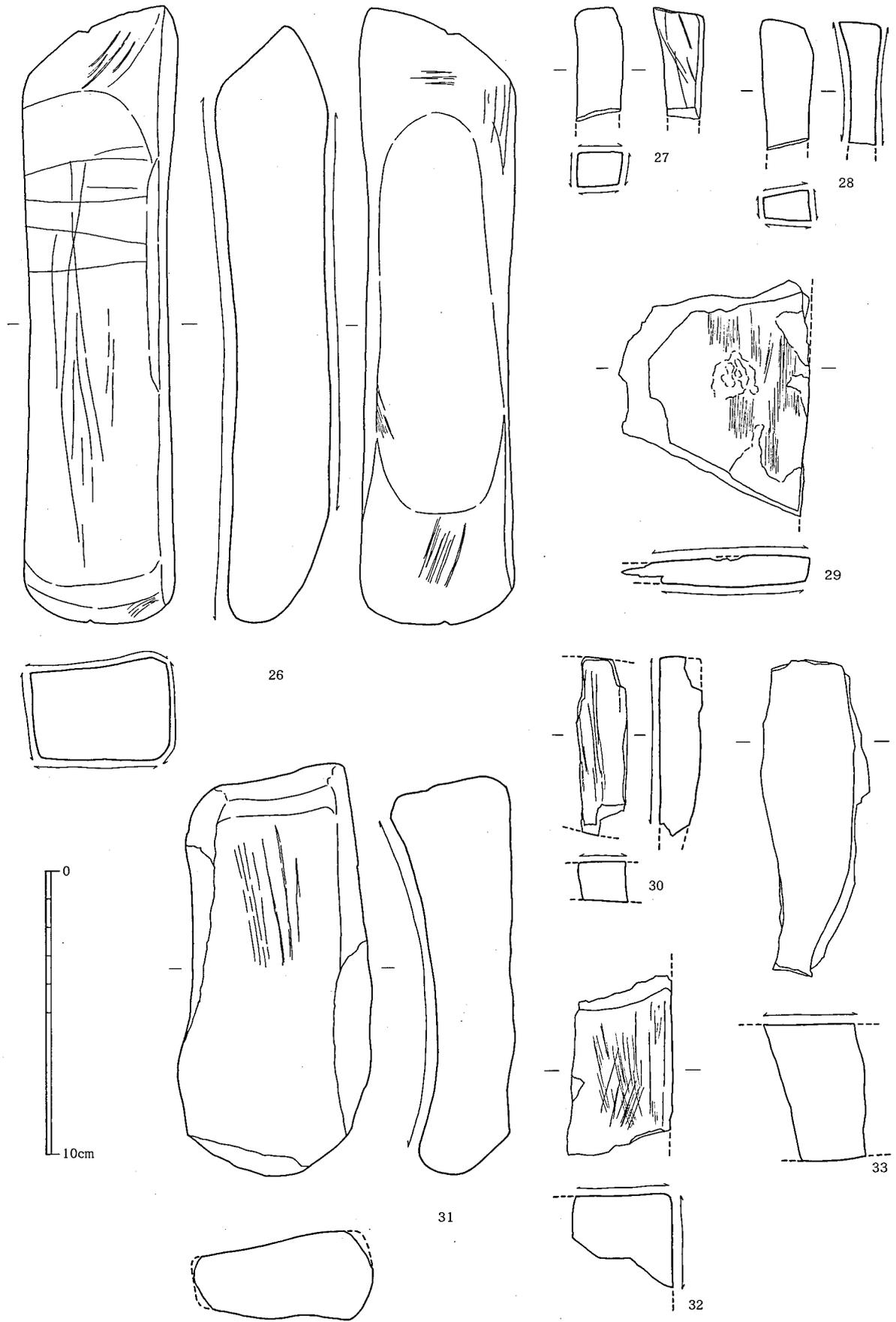
13は2号竪穴住居跡出土で、欠損しているが、砥面は2面確認できる。表面はわずかに凹み、側面も使用により平滑になる。現存長4.3cm、厚さ1.2cm、重さ18.6gで砂岩製。14は11号竪穴住居跡出土で、砥面は3面である。安定性が悪いいため手持ちで使ったと思われる。砥面の長軸方向でわずかに凹みが確認できる。全長7.4cm、幅3.4cm、厚さ4.0cm、重さ178.4gでヒン岩製。15は26号竪穴住居跡出土で、扁平な角柱状で、先端は鋭い三角形を呈する。砥面は短辺の面に見られる。全長10.4cm、幅2.5cm、厚さ1.7cm、重さ89.9gで砂岩製。16は29号竪穴住居跡出土で、四周全



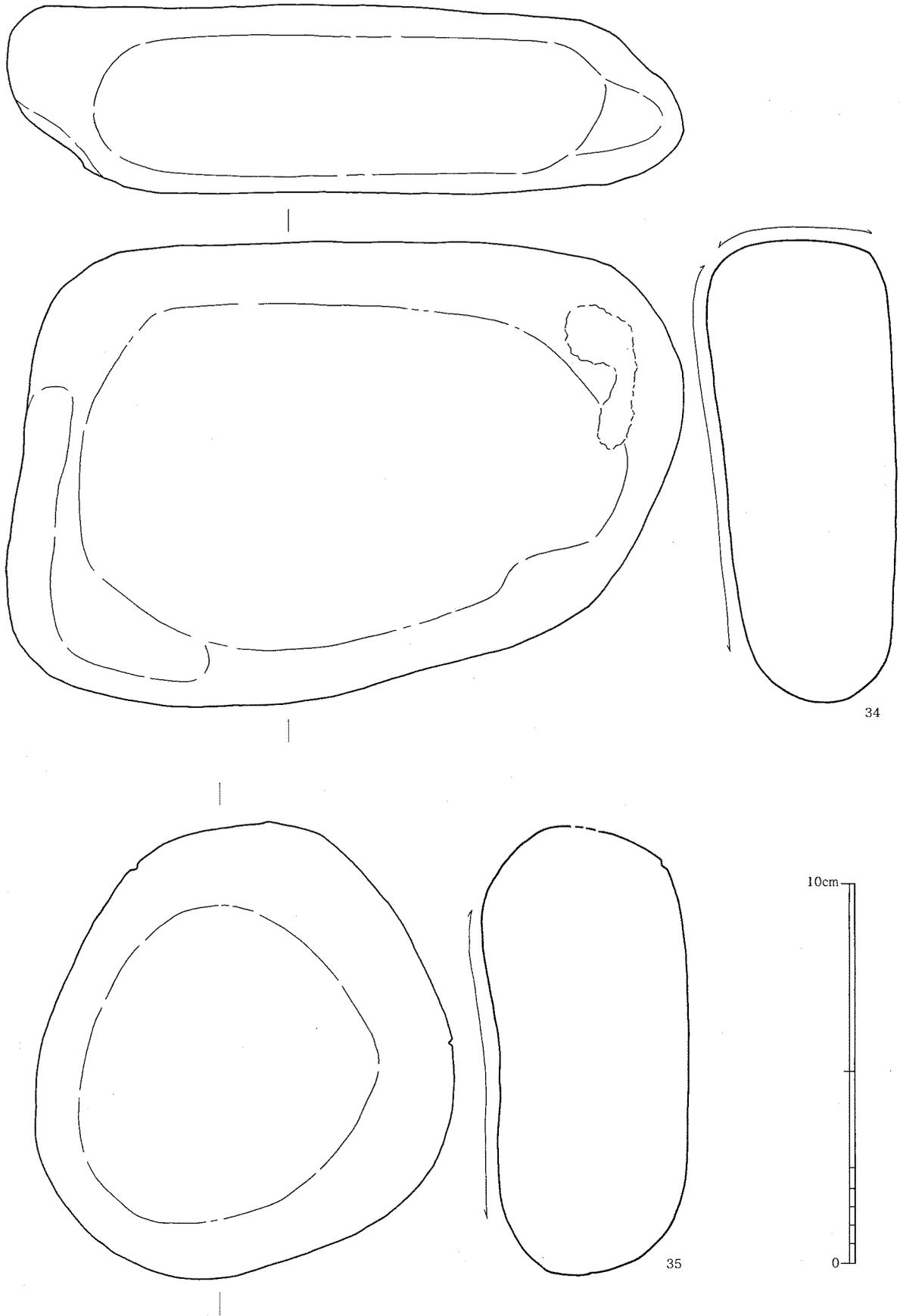
第188图 竖穴住居跡出土石器実測図① (1/2)



第189图 竖穴住居迹出土石器实测图② (1/2)



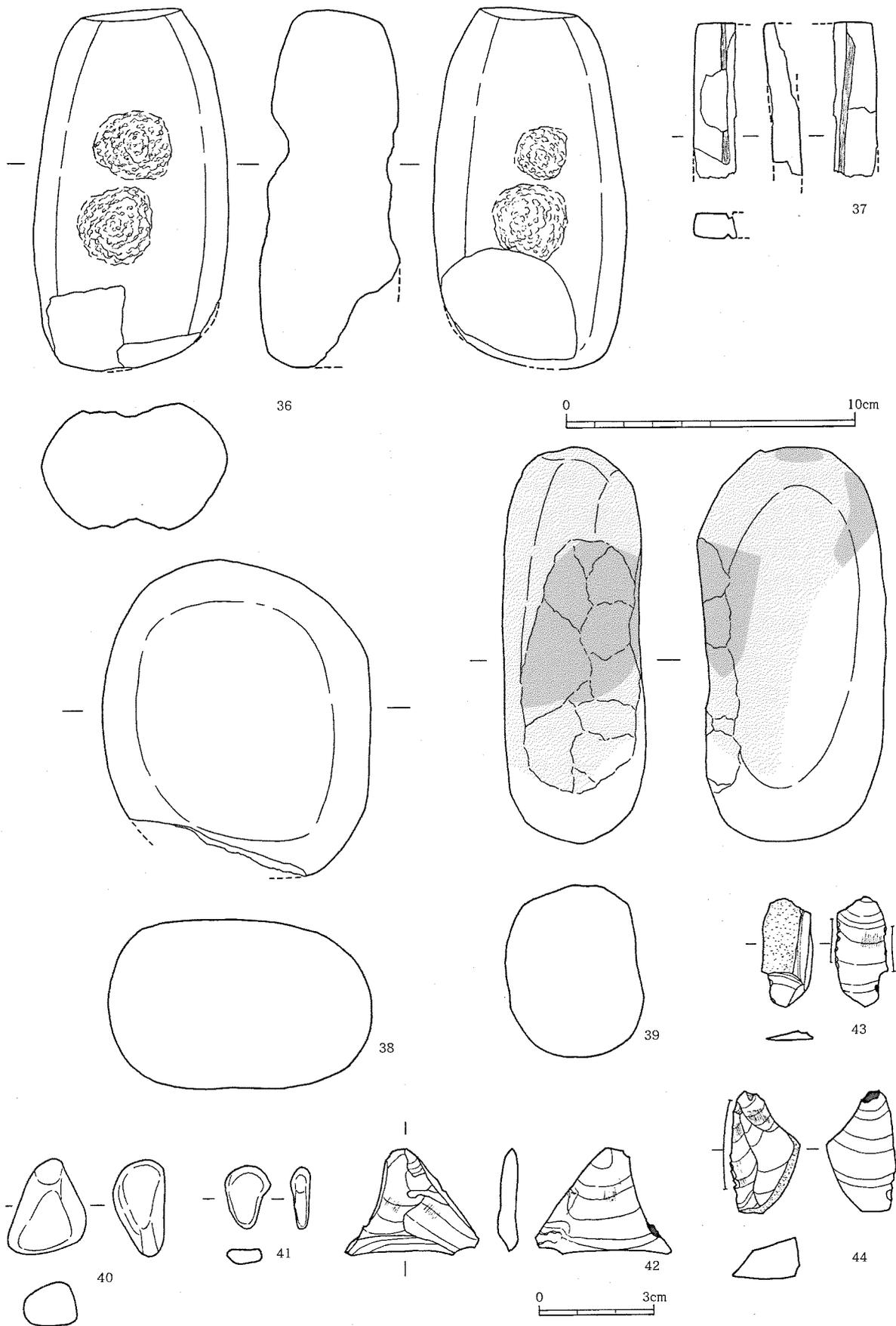
第190图 竖穴住居迹出土石器实测图③ (1/2)



第191图 竖穴住居迹出土石器实测图④ (1/3)

て欠損している。厚さがありかなりの大型と思われる。表裏両面とも砥面として使用している。厚さ3.5cm、重さ131.9gで砂岩製。17は29号竪穴住居跡出土で、砥面は3面である。右側側面は凹凸があるが、凹む箇所を使用しており、特に一番谷の部分の幅約5mm程が平滑である。上下と左側は欠損しており、現存長12.4cm、幅2.9cm、重さ268.1gで層灰岩製。18は41号竪穴住居跡上層出土で、砥石の破片と思われる。側面の使用面は大きく反るように弧を描き、断面は丸みを帯びる。火を受けたせいか、赤変している。厚さ1.4cm、重さ18.5gで砂岩製。19は41号竪穴住居跡下層出土で、欠損しているが砥面が3面確認できる。表面に幅約1cmの溝があり、玉製品を整形するためのものと思われる。現存長3.9cm、厚さ1.8cm、重さ39.6gで砂岩製。20は47号竪穴住居跡出土で、大きく欠損している。全面が砥面である。現存長9.7cm、厚さ2.0cm、重さ21.3gでシルト岩製。

21は48号竪穴住居跡出土で、欠損が著しいが現存面は研磨により非常に平滑である。現存長8.6cm、厚さ2.0cm、重さ143.8gで粘板岩製。22は50号竪穴住居跡出土で、欠損しているが残り全面は研磨により平滑になる。現存長5.6cm、厚さ2.1cm、重さ61.2gで硬質砂岩製。23は57号竪穴住居跡出土で、砥面は3面である。両側面には幅約1.5cm程の凹みがあり、その部分も使用している。凹み部分は右側に2ヶ所、左側には1ヶ所あり、一部対になる配置である。全長7.9cm、幅6.4cm、厚さ2.6~3.6cm、重さ308.2gで砂岩製。24は64号竪穴住居跡出土で、確実に使用しているとは言えないが、一応砥石と考えておく。水平方向に剥がれており本来の厚さは不明である。表面は赤褐色を呈し、中は黄灰褐色である。重さ73.4gで泥岩製。25は67号竪穴住居跡出土で、砥面は表面と側面の2面で確認できる。欠損しているが、平面形態は復原すると角が鋭角になるようである。現存長6.2cm、厚さ1.1cm、重さ47.3gで粘板岩製。26は68号竪穴住居跡出土で砥面は4面である。鉄器を砥いだ際にキズがついたのか、細く鋭いスジが縦方向及び横方向に数条見られる。砥面以外の部分には太いスジが数条見られる。全長21.7cm、幅5.2cm、厚さ3.4cm、重さ626.8gで泥岩製。27は68号竪穴住居跡出土で、砥面は4面。側面には工具が当たったのか、非常に細かいがしっかりした鋭いスジがつく。欠損しており、現存長3.8cm、幅1.6cm、厚さ1.2cm、重さ14.6gで細粒砂岩製。28は71号竪穴住居跡出土で砥面は4面である。小型だが各面の凹み具合は著しい。欠損しており、現存長4.5cm、幅1.6cm、厚さ1.0cm、重さ15.1gで細粒砂岩製。29は75号竪穴住居跡出土で、砥面は2面確認できる。縦方向のスジが顕著に見られ、使用痕と思われる。欠損しており、現存長7.5cm、厚さ1.1cm、重さ93.0gで片岩製。30は75号竪穴住居跡出土で、大きく欠損している。砥面には細いスジが何本も確認できる。現存長5.9cm、厚さ1.4cm、重さ24.7gでシルト岩製。31は78号竪穴住居跡出土で砥面は1面のみである。長軸方向に砥面が大きく湾曲する。一部縦方向に使用した際の荒いスジが確認できる。一部欠損しており、全長14.4cm、幅6.7cm、厚さ2.8cm、重さ458.2gで砂岩製。32は82・83号竪穴住居跡上層出土で、大きく欠損しているが砥面は2面確認できる。うち1面では使用痕が顕著に見られる。現存長5.8cm、重さ91.3gでシルト岩製。33は85号竪穴住居跡出土で、大きく欠損しており、砥面は1面のみ確認できる。砥面は非常に平滑で平らである。現存長11.1cm、厚さ4.8cm、重さ270.4gでシルト岩製か。37は74号竪穴住居跡出土で、表裏両面に擦り切り溝を持つが、側面を含め平滑であるため一応砥石と考えておきたい。裏面の擦り切り溝は途中で2条に分かれる。大きく欠損しており、現存長5.4cm、厚さ1.0cm、重さ10.1gでシルト岩製。



第192図 竪穴住居跡出土石器実測図⑤ (36~39は1/2 , 40~44は1/3)

台石 (図版91、第191図)

34は48号竪穴住居跡出土で、片側側面が平滑になっており、砥面である可能性がある。表面は側面ほど平滑にはなっていない。全長34.9cm、幅24.1cm、厚さ8.0~9.4cm、重さ14.2kgで砂岩製。35は72号竪穴住居跡出土で、上面が平滑になっており、なおかつ僅かに凹む。全長23.4cm、幅21.5cm、厚さ9.8~10.4cm、重さ8.6kgで凝灰岩製。

凹み石 (図版92、第192図)

36は10号竪穴住居跡出土で、磨製石斧を転用したものである。凹み部は表裏が対応するように二組存在し、頂部側の方が刃部側よりも凹みが著しい。刃部の一部が欠けているが、全長12.7cm、幅6.7cm、厚さ4.4cm、重さ615.0gで凝灰岩製。

磨石 (図版92、第192図)

38は67号竪穴住居跡出土の磨石。円礫が平滑になっているが、全面を使用しているわけではない。一部欠損しており、現存長11.1cm、幅9.2cm、厚さ6.0cm、重さ979.7gで花崗岩製。

石製支脚 (図版92、第192図)

78号竪穴住居跡の粘土高まり内から出土したもので、カマドの支脚と思われる。扁平柱状で、特に強い火を受けた面は暗褐色状に赤変している。下の方は変色しておらず、この部分は埋められていたと考えられる。また背面と考えられる面は上の方のみ赤変している。全長13.8cm、幅6.4cm、厚さ4.7cm、重さ579.1gで砂岩製。

玉原石 (図版92、第192図)

40・41とも86号竪穴住居跡出土。40は黄色~黄緑色の蛇紋岩で全長2.5cm、幅1.2cm、厚さ0.4cm、重さ5.7g。41は黄緑色の蛇紋岩で全長1.2cm、幅2.0cm、重さ1.0gである。

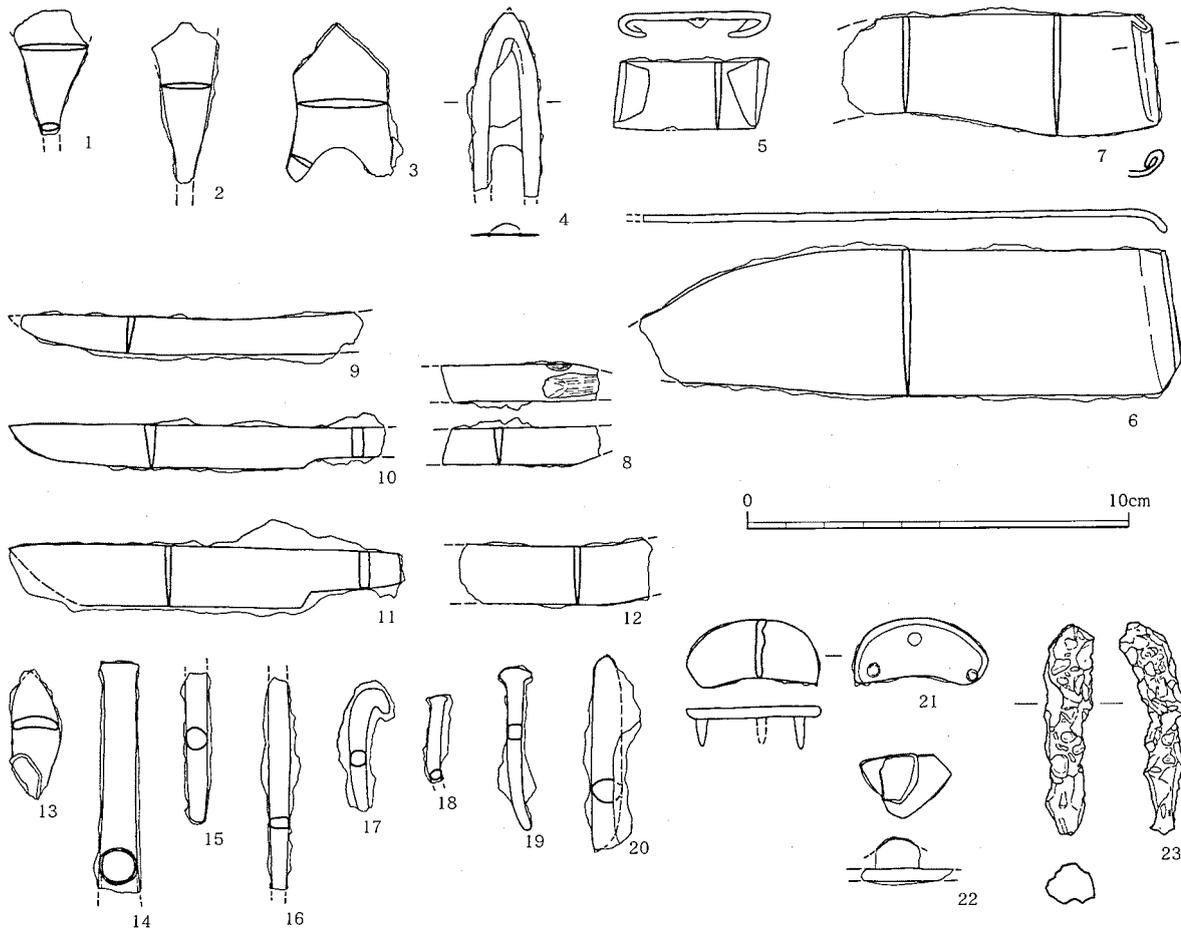
黒曜石剥片 (図版92、第192図)

42は67号竪穴住居跡上面出土。石鏃の未製品の可能性もあり、全長2.8cm、幅3.5cm、厚さ5mm、重さ3.3gである。43は住居80出土で、側面に微細剥離が認められる。全長2.9cm、幅1.3cm、厚さ2mm、重さ1.3g。44は住居86出土で、縦長片の一側面に微細剥離が認められる。全長3.2cm、幅1.8cm、厚さ9mmで重さ4.5g。

3. 竪穴住居跡出土鉄器

鉄鏃 (図版93、第193図)

1は2号竪穴住居跡出土、2は48号竪穴住居跡床面直上出土の短頸の鉄鏃で、両者とも先端部が欠損しているため、圭頭か方頭かは不明。3は53号竪穴住居跡出土の無茎の鉄鏃である。形態は五角形を呈する。全長4.2cm、幅2.4cm、厚さ2mmである。4は60号竪穴住居跡出土の無茎式の鉄鏃である。矢柄を挟みこんだ木質の痕跡が鉄分の付着によって分かる。全長4.9cm、幅1.8cm、厚さ1mm。



第193図 竪穴住居跡出土鉄器実測図 (1/2)

鉄鎌 (図版93、第193図)

5は31号竪穴住居跡出土の手鎌で、両端を折り返す。全長4.1cm、幅1.9cm、背の厚さ2mmである。6は48号竪穴住居跡出土で、先端部欠損。刃部先端付近は下方方向に曲がり基部は軽く折り返す。現存長14.2cm、刃部幅3.8cm、背の厚さ2mm。7は64号竪穴住居跡出土で、先端部が欠損している。刃部は曲線を描き、基部は折り返す。現存長8.2cm、刃部最大幅3.3cm、背の厚さ2mmである。

刀子 (図版93、第193図)

8は21・22号竪穴住居跡出土。刃部、茎部が欠損している。関付近に木質が残る。現存長4.1cm、幅1.0cm背の厚さ2mm。9は24号竪穴住居跡出土で、切先と茎部は欠損。現存長8.6cm、幅1.0cm、背の厚さ2mm。10は50号竪穴住居跡出土で、茎部先端が欠損。現存長9.7cm、刃部長7.5cm、幅1.1cm、背の厚さ4mm。11は57号竪穴住居跡出土で、全長10.1cm、幅1.6cm、刃部の背の厚さ2mm、茎部の厚さ3mmである。12は27号竪穴住居跡出土で、大きく欠損している。刃部が茎部よりやや曲線を描くことから、刀子でない可能性もある。現存長5.0cm、幅1.6cm、背の厚さ2mmである。

その他 (図版93、第193図)

13は29号竪穴住居跡出土で、刃部断面形態がわずかに弧を描くことから鉞の可能性が高い。現存長3.4cm、幅1.2cm、厚さ3mmである。14は23号竪穴住居跡出土で、中空で円柱状を呈する。上端

部は少し潰れた格好となる。現存長6.1cm、径1.0cm、厚さ1mm弱である。15～20は鉄釘と考えられるものだが、近世以降のものが混入した可能性も高い。15は21・22号竪穴住居跡出土で、断面形態はおそらく円形と思われる。現存長4.0cm、径6mmである。16は23号竪穴住居跡カマド出土で、断面形態は長方形である。現存長5.6cm、幅5.5mm、厚さ3mmである。17は77号竪穴住居跡出土で、錆が著しいが、蕨手状に曲がるようである。断面形態は円形で、現存長3.2cm、径は約5mmである。18は77号竪穴住居跡出土で、わずかに湾曲し頭部はやや膨れる。断面形態は円形で、現存長2.3cm、径3mmである。19は77号竪穴住居跡出土で、先端部が湾曲し、頭部は膨れる。断面形態は方形で、現存長4.3cm、幅4mmである。20は79号竪穴住居跡出土で、錆膨れが著しいため原形が把握しにくい。断面形態はやや扁平な円形と思われる。現存長5.2cm、厚さ6mmである。21は48号竪穴住居跡床面出土で、半円形の鉄板に3本の鋌のようなものが取り付くものである。近世以降のものである可能性は否定できない。鉄板は半円形を呈し、弧を描く部分の端部はわずかに肥厚する。鉄板の最大長は3.5cm、幅1.6cm、厚さ2mmである。鋌は1本が折れているが、残りの2本は径が3mmで8～9mmの長さを有する。22は78号竪穴住居跡出土で、板状の鉄板に突起のついたものである。四周が欠損しており原形は不明。厚さは3mm。23は77号竪穴住居跡出土の鉄滓。表面には大小の気泡が入ったようである。色調は暗灰色を呈するが、大きい気泡のくぼみは部分的に暗赤褐色を呈する。

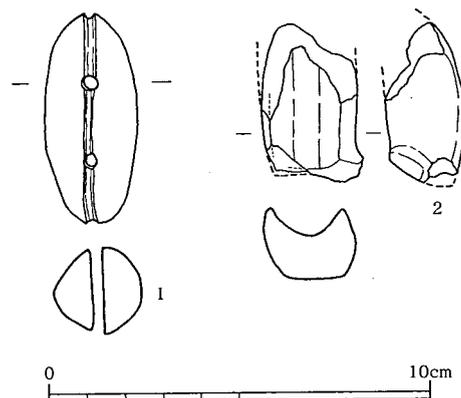
4. 竪穴住居跡出土土製品

土錘 (図版94、第194図)

1は17号竪穴住居跡出土の有溝・孔土錘である。平面長楕円形、断面はややいびつな円形で、長軸方向に紐かけ用溝が一周し、2ヶ所に径4mm程の孔を穿つ。全長5.5cm、径2.4cm、重さ31.7gで色調は明黄褐色～明灰褐色。

不明土製品 (図版94、第194図)

2は29号竪穴住居跡出土の用途不明土製品である。断面形態は割竹形で、やや弧を描きながら延びる。先端部は潰れ、粘土が横にはみ出る。現存長4.2cm、幅2.9cmで、色調は橙色～黄橙色、先端部のみ黒斑のように黒褐色を呈する。



5. 竪穴住居跡出土骨角器

不明骨角器 (図版94)

64号竪穴住居跡より骨角器が1点出土している。長楕円形を呈し、表面には4列にわたって径1.5mm程の小さな孔を連続して穿つが、貫通せず途中で止まる。特に外側の列は、外形に合わせて弧を描く。また両端部にも4つずつ同様の孔を穿つ。これらの孔は一つ一つが極めてきれいな規格であること、またあまりにも規則正しく並んでいることから、人工によるものではない可能性がある。全長3.9cm、幅1.1cm、厚さ4mmで、骨は獣類のものと思われる。

第194図 竪穴住居跡出土土製品実測図 (1/2)

